

北埋調報128

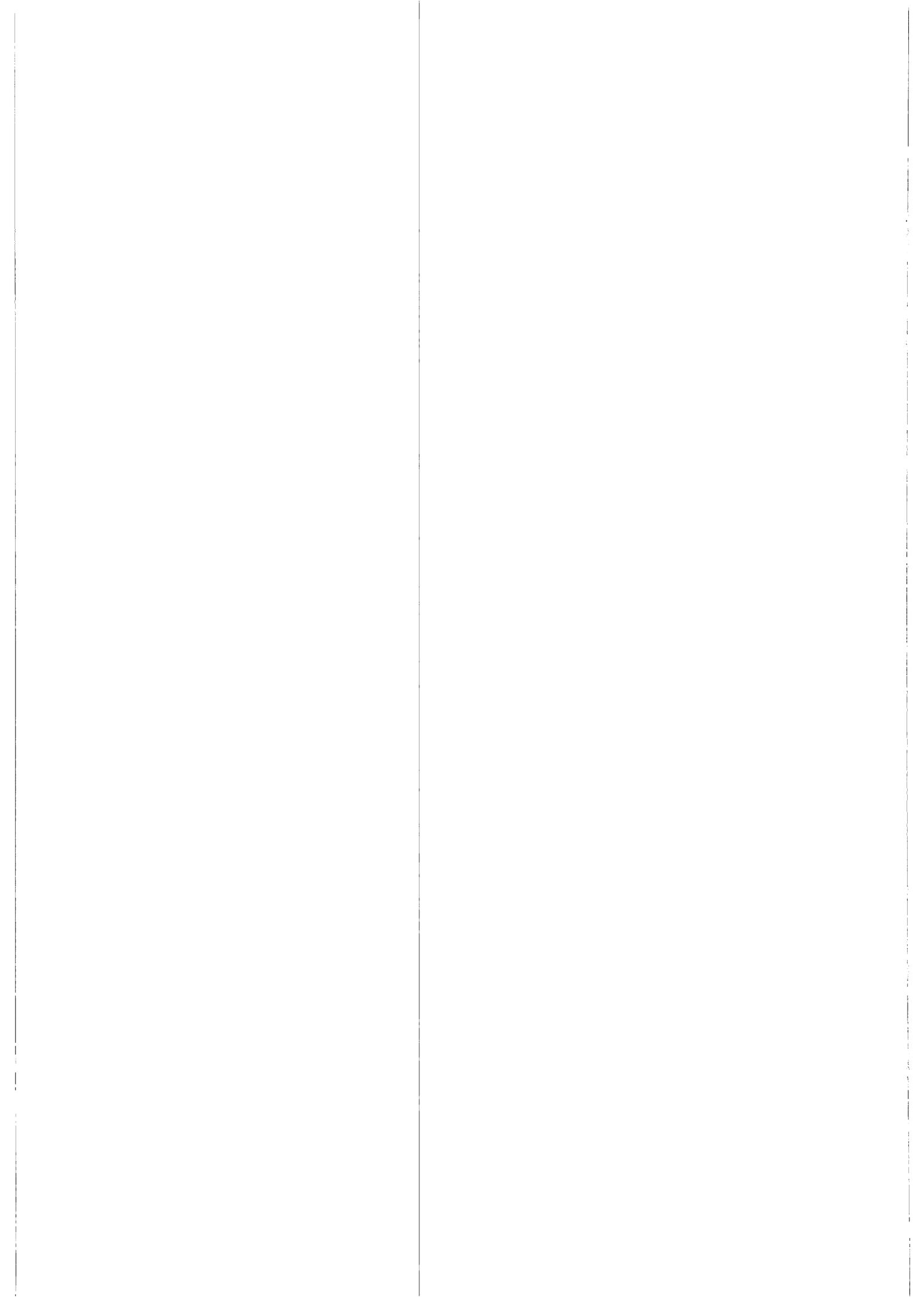
千歳市

ユカンボシ C 15 遺跡(1)

— 北海道横断自動車道（千歳一夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成8・9年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



千歳市

ユカンボシ C 15 遺跡(1)

—北海道横断自動車道（千歳一夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成8・9年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



遺跡全景 W→E



「胆振国千歳郡千歳原野区画図」部分（元図1：25,000）



東低湿部基本土層 W→E



台地部深掘土層断面 S→N



P-12遺物出土状況 N→S



調査風景 E→W

例 言

1. 本書は、北海道横断自動車道（千歳～夕張）建設工事に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが実施している、千歳市ユカンボシC15遺跡の発掘調査の報告書である。本書では、平成8・9年度調査のうち、東側の調査分を報告する。ユカンボシC15遺跡の調査報告書としての1冊目となる。
2. 本書の執筆は、西田茂・三浦正人・鈴木信・中田裕香・倉橋直孝・吉田裕吏洋・大泰司統が分担し、文責は各項目の文末に括弧で示した。編集は、三浦正人・鈴木信が行った。
3. 遺物整理のうち土器・石器の一次整理は、土器を中田、石器を倉橋が行った。二次整理では、遺構の遺物は各遺構担当者が、包含層の土器・土製品は続縄文時代以降を鈴木、縄文時代晩期を中田、縄文時代後期以前を大泰司が担当した。包含層の石器・石製品は倉橋が担当し、分類は鈴木が補佐した。
木製品・金属製品は三浦が、動植物遺存体は鈴木・倉橋が担当した。
4. 調査写真は主に菊池慈人・吉田が撮影し、遺物写真も菊池・吉田が担当、編集した。
5. 現場の遺構図・木製品出土状況図などの作図、整理は、三浦・鈴木・倉橋・吉田・大泰司・藤内まゆみ・三浦千晴・原靖寿・井口隆子・増田潔威・大崎孝徳・梅木友子が担当、従事し、三浦・鈴木・大泰司が統括した。
6. 遺物の実測・トレース図は、土器を藤内・久末真紀子が、石器を高橋幸恵が、木製品・金属製品を小林由里子・小畑麻弓・釜菴みどりが行い、各担当者が統括した。
7. 樹種同定は農林水産省森林総合研究所 平川泰彦氏の指導のもとに、岡本育子が行い執筆した。
8. 各種分析・同定は下記に依頼および依頼予定である。
放射性炭素年代測定（加速器質量分析法）は、株式会社地球化学研究所に依頼した。
恵庭 a 降下軽石層下の化石林に関する花粉分析は、北海道開拓記念館の山田悟郎氏に依頼し、報文を掲載した。
第Ⅰ・第Ⅱ黒色土層の花粉分析、珪藻分析は、株式会社バリノ・サーヴェイに依頼し、当報告地区の報文を掲載した。
灰像分析、プラント・オパール分析は、株式会社バリノ・サーヴェイに依頼した。
脂肪酸分析は、株式会社ズコーシャに依頼した。
金属製品の材質分析は、岩手県立博物館の赤沼英男氏に依頼予定である。
須恵器の胎土分析については、依頼先を検討中である。
9. 木製品・金属製品の保存処理は、美々8遺跡での方法を用い、田口 尚が統括した。
10. 調査にあたっては下記の諸機関、各氏から御指導御協力をいただいた。
千歳市教育委員会埋蔵文化財センター、恵庭市教育委員会、北広島市教育委員会、北海道開拓記念館、青森県埋蔵文化財調査センター、八戸市教育委員会、大林東洋共同企業体、大場工業株式会社
大谷敏三、田村俊之、高橋 理、豊田宏良、松田淳子、遠藤昭浩、上屋真一、松谷純一、森 秀之、長町章弘、佐藤幾子、大林千春、遠藤龍畝、山田昌久、平川泰彦、吉崎昌一、椿坂恭代、鈴木正章、野村 崇、山田悟郎、平川善祥、小林幸雄、右代啓視、舟山直治、高橋正勝、野中一宏、渡辺俊一、赤石慎三、三浦孝一、森岡健治、羽賀憲二、仙庭伸久、北澤 実、山原敏朗、宮 宏明、澤田 健、小林 貢、大島直行、角田隆志、豊原照司、森田知忠、菊池徹夫、木村英明、鈴木靖民、酒寄雅志、天野哲也、小野裕子、南 博史、山崎雅恵、辻誠一郎、阿部明彦、伊藤武士、井上雅孝、宇部則保、大野 亨、利部 修、木村 高、児玉 準、高橋与右衛門、小松正夫、日野 久、船木義勝、藤沢 敦、村田晃一、加藤道男、斉野裕彦、仲田茂司、佐々木浩一、工藤竹久、清水恵一、千葉 茂、大沼忠春、稲市幸生、千葉英一、田才雅彦、西脇対名夫、藤原秀樹

記号等の説明

1. 遺構の表記は以下に示す記号を用い、原則として調査順に番号を付した。

H : 住居跡 P : 土壇 X : 周溝のある墓
 HP : 住居跡に伴うピット F : 焼土 M : 室状遺構
 HF : 住居跡に伴う焼土 TP : Tピット

2. 遺構図の縮尺は、スケール等が入っているもの以外は、原則として40分の1である。

遺構平面図に方位記号がない場合は、上がN-22°-Eである。

遺構平面図の+はグリッドラインの交点で、交点傍らの名称記号は右下の区画を示す。

遺構平面図の・小数字は、その地点の標高(単位m)である。

3. 遺構平面図の出土遺物は記載のない限り、以下の記号を用いている。

● : 土器 ■ : 礫石器 ▲ : 剥片石器 × : フレイク・チップ
 □ : 礫など ★ : 金属製品 * : 炭化物・骨片などの自然遺物
 † : 当該期の土器

遺物記号に付されている数字は、土器・土製品・金属製品の掲載No.を示し、丸囲み数字は、石器・石製品の掲載No.を示す。

4. 遺構の規模は、「長軸の上端/下端×短軸の上端/下端×確認面からの最大深・最大厚」で示してある。

一部破壊されているものは現存長を()で示し、不明のものは-で示した。

5. 土層名は、下記の略号を用いた場合がある。

第0黒色土層 : 0 B 0黒	樽前 a 降下軽石層 : Ta - a
第I黒色土層 : I B I黒	樽前 b 降下軽石層 : Ta - b
第II黒色土層 : II B II黒	樽前 c 降下軽石層 : Ta - c (c ₁ ・c ₂)
漸移層 : II B 下	樽前 d 降下軽石層 : Ta - d
恵庭 a 降下軽石層 : En - a	白頭山-苫小牧火山灰層 : B - Tm
En - a 起源のローム層 : En - L	支笏軽石流堆積物 : Spfl
En - a 未風化軽石礫層 : En - P	

火山灰の略号は、曾屋龍典・佐藤博之(1980)『千歳地域の地質』

北海道火山灰命名委員会(1982)『北海道の火山灰』による。

6. 土層の混在状態は、基本土層や上記の略号などを用いておもに下記のように表わしてある。

A + B : AとBがほぼ同量混じる

A > B : AにBが少量混じる

A ≧ B : AにBが微量混じる

一部の土層説明には、『新版標準土色帖(1994年版)』を使用した。

7. 遺物実測図と土器拓影図の縮尺は、原則として以下のとおりである。一枚の図面に違う縮尺の図が配置されたものには、スケールを付したのものもある。

復元土器 : 3分の1	土器拓影 : 3分の1	剥片石器 : 2分の1
礫石器 : 3分の1	土製品・石製品 : 2分の1	金属製品 : 3分の1

なお、木製品は各図ごとにスケールを付した。

8. 石器・石製品・木製品の大きさは、「最大長×最大幅×最大厚」で記してある。

目 次

口 絵

例 言

記号等の説明

調査要項

I	遺跡の位置と環境	1
1	位置と環境	1
2	周辺の遺跡	14
II	調査の方法、遺物の分類	19
1	調査の方法	19
2	土層の区分	24
3	遺物の分類	32
III	調査の概要	35
1	調査にいたる経緯	35
2	調査の概要	35
IV	表土層の遺構とその遺物	43
1	概要	43
2	杭列	44
3	室状遺構	52
V	0黒層・I黒層の遺構とその遺物	53
1	概要	53
2	住居跡	54
3	周溝のある墓	61
4	土壌	71
5	焼土	82
6	送り場	91
7	灰集中	91
8	鍛冶遺構	93
9	集石	95
10	溝	95
11	道跡	95
12	土器観察表・土器接合図・土器分布図の見方について	96
13	復元個体の接合関係について	96
	一覧表	99

VI	II 黒層の遺構とその遺物	107
1	概要	107
2	住居跡	107
3	土壌	130
4	焼土	145
5	Tピット	149
	一覧表	169
VII	低湿部包含層の遺物	175
1	概要	175
2	I 黒層の土器・石器等	175
3	II 黒層の土器・石器等	190
4	木製品	200
	一覧表	222
VIII	台地部包含層の遺物	237
1	概要	237
2	I 黒層の遺物	238
3	II 黒層の遺物	262
	一覧表	282
IX	自然科学的分析	291
1	化石林形成ころの古植生について	
	北海道開拓記念館 山田 悟郎	291
2	ユカンボシ C 15遺跡の珪藻化石・植物珪酸体よりみた環境変遷(1)	
	パリノ・サーヴェイ株式会社	296
X	成果と問題点	325
1	「ユカンボシ」の呼称について	325
2	II 黒層の遺物とその遺構について	327
3	I 黒層の土器について	329
4	擦文文化期の墓	339
5	包含層出土の石器について	345

写真図版

報告書抄録

目 次

I 遺跡の位置と環境

図 I-1 遺跡の位置(1)	3
図 I-2 遺跡の位置(2)	4
図 I-3 遺跡の位置(3)	5
図 I-4 周辺の地形(1)	8
図 I-5 周辺の地形(2)	9
図 I-6 周辺の地形(3)	10
図 I-7 調査前状況図	11
図 I-8 周辺の土層柱状略図	12
図 I-9 台地部深掘り土層略図	13
図 I-10 周辺の遺跡	16

II 調査の方法、遺物の分類

図 II-1 年度別調査区図・グリッド設定図	20
図 II-2 東地区低湿度調査機材配置図	23
図 II-3 土層模式図	24
図 II-4 土層図(1)	25
図 II-5 土層図(2)	26
図 II-6 土層図(3)	27
図 II-7 土層図(4)	28
図 II-8 土層図(5)	29

III 調査の概要

図 III-1 最終面コンター全図	36
図 III-2 遺構位置図	37

IV 表土層の遺構とその遺物

図 IV-1 表土層遺構位置図	43
図 IV-2 杭列	45
図 IV-3 杭列-7 杭	46
図 IV-4 杭列-7・8 木製品	47
図 IV-5 杭列-8・9 杭	48
図 IV-6 室状遺構	52

V 0黒層・I黒層の遺構とその遺物

図 V-1 0黒・I黒層遺構位置図	53
図 V-2 H-1	55
図 V-3 H-2(1)	56
図 V-4 H-2(2)	57
図 V-5 H-10(1)	59
図 V-6 H-10(2)	60
図 V-7 X-1(1)	62
図 V-8 X-1(2)	64
図 V-9 X-1(3)	65
図 V-10 X-2(1)	66
図 V-11 X-2(2)	67
図 V-12 X-3(1)	69
図 V-13 X-3(2)	70
図 V-14 土壌(1)	72
図 V-15 土壌(2)	75
図 V-16 土壌とその遺物	79
図 V-17 土壌の遺物(1)	80
図 V-18 土壌の遺物(2)	81

図 V-19 焼土(1)	83
図 V-20 焼土(2)	84
図 V-21 焼土(3)	85
図 V-22 焼土(4)	86
図 V-23 焼土(5)	87
図 V-24 焼土の土器(1)	88
図 V-25 焼土の土器(2)・石器(1)	89
図 V-26 焼土の土器(3)・石器(2)	90
図 V-27 送り場・灰集中・鍛冶遺構	92
図 V-28 フイゴの羽口	93
図 V-29 集石・溝	94
図 V-30 道跡	95
図 V-31 遺構の土器接合図(1)	97
図 V-32 遺構の土器接合図(2)	98

VI II黒層の遺構とその遺物

図 VI-1 II黒層遺構位置図	108
図 VI-2 H-3	109
図 VI-3 H-4	111
図 VI-4 H-5	112
図 VI-5 H-6	114
図 VI-6 H-7	116
図 VI-7 H-8(1)	117
図 VI-8 H-8(2)	118
図 VI-9 H-9	120
図 VI-10 H-11	122
図 VI-11 H-12	123
図 VI-12 住居跡の土器(1)	124
図 VI-13 住居跡の土器(2)	125
図 VI-14 住居跡の土器(3)	126
図 VI-15 住居跡の土器(4)	127
図 VI-16 住居跡の石器(1)	128
図 VI-17 住居跡の石器(2)	129
図 VI-18 土壌(1)	139
図 VI-19 土壌(2)	140
図 VI-20 土壌(3)	141
図 VI-21 土壌(4)	142
図 VI-22 土壌(5)	143
図 VI-23 土壌(6)	144
図 VI-24 焼土(1)	147
図 VI-25 焼土(2)	148
図 VI-26 Tピット(1)	157
図 VI-27 Tピット(2)	158
図 VI-28 Tピット(3)	159
図 VI-29 Tピット(4)	160
図 VI-30 Tピット(5)	161
図 VI-31 Tピット(6)	162
図 VI-32 Tピット(7)	163
図 VI-33 土壌の土器(1)	164
図 VI-34 土壌の土器(2)	165
図 VI-35 土壌の土器(3)	166
図 VI-36 土壌の土器(4)・Tピットの土器	167
図 VI-37 焼土の土器、土壌の石器・土製品	168

Ⅶ 低湿部包含層の遺物

図Ⅶ-1	低湿部範囲図	176
図Ⅶ-2	I黒層の土器(1)	178
図Ⅶ-3	I黒層の土器(2)	179
図Ⅶ-4	I黒層の土器接合図(1)	180
図Ⅶ-5	I黒層の土器接合図(2)	181
図Ⅶ-6	土器分布図(1)	182
図Ⅶ-7	土器分布図(2)	183
図Ⅶ-8	土器分布図(3)	184
図Ⅶ-9	土器分布図(4)	185
図Ⅶ-10	土器分布図(5)	186
図Ⅶ-11	I黒層の石器	188
図Ⅶ-12	石器分布図(1)	189
図Ⅶ-13	II黒層の土器(1)	191
図Ⅶ-14	II黒層の土器(2)	192
図Ⅶ-15	土器分布図(6)	193
図Ⅶ-16	土器分布図(7)	194
図Ⅶ-17	土器分布図(8)	195
図Ⅶ-18	II黒層の石器	197
図Ⅶ-19	石器分布図(2)	198
図Ⅶ-20	石器分布図(3)	199
図Ⅶ-21	木製品出土位置図(I黒層以下全層)	201
図Ⅶ-22	木製品出土位置図(0B・IB1層)	202
図Ⅶ-23	木製品出土位置図(ⅠB2層)	203
図Ⅶ-24	木製品(1の1)	206
図Ⅶ-25	木製品(1の2)	207
図Ⅶ-26	木製品(2)	208
図Ⅶ-27	木製品(3)	209
図Ⅶ-28	木製品(4)	210
図Ⅶ-29	木製品(5)	211
図Ⅶ-30	木製品(6)	212
図Ⅶ-31	木製品(7)	213
図Ⅶ-32	木製品(8)	214
図Ⅶ-33	木製品(9)	215
図Ⅶ-34	木製品(10)	216
図Ⅶ-35	木製品(11)	217
図Ⅶ-36	木製品(12)	218
図Ⅶ-37	木製品(13)	219
図Ⅶ-38	木製品(14)	220
図Ⅶ-39	樹皮	221

Ⅷ 台地部包含層の遺物

図Ⅷ-1	台地部範囲図	237
図Ⅷ-2	I黒層の土器(1)	239
図Ⅷ-3	I黒層の土器(2)	241
図Ⅷ-4	I黒層の土器(3)	242
図Ⅷ-5	I黒層の土器接合図(1)	243
図Ⅷ-6	I黒層の土器接合図(2)	244
図Ⅷ-7	土器分布図(1)	245
図Ⅷ-8	土器分布図(2)	246
図Ⅷ-9	土器分布図(3)	247
図Ⅷ-10	土器分布図(4)	248
図Ⅷ-11	土器分布図(5)	249
図Ⅷ-12	土器分布図(6)	250
図Ⅷ-13	土器分布図(7)	251
図Ⅷ-14	土器分布図(8)	252
図Ⅷ-15	I黒層の石器、分布図(1)	256
図Ⅷ-16	石器分布図(2)	257
図Ⅷ-17	石器分布図(3)	258

図Ⅷ-18	石器分布図(4)	259
図Ⅷ-19	I黒層等の金属製品	261
図Ⅷ-20	II黒層の土器(1)	268
図Ⅷ-21	II黒層の土器(2)	269
図Ⅷ-22	II黒層の土器(3)	270
図Ⅷ-23	II黒層の土器(4)	271
図Ⅷ-24	II黒層の土器(5)	272
図Ⅷ-25	II黒層の土器(6)	273
図Ⅷ-26	II黒層の土器(7)	274
図Ⅷ-27	II黒層の土器(8)	275
図Ⅷ-28	II黒層の土製品	276
図Ⅷ-29	土器分布図(9)	277
図Ⅷ-30	土器分布図(10)	278
図Ⅷ-31	土器分布図(11)	279
図Ⅷ-32	土器分布図(12)	280
図Ⅷ-33	土器分布図(13)	281
図Ⅷ-34	II黒層の石器(1)	285
図Ⅷ-35	II黒層の石器(2)	286
図Ⅷ-36	石器分布図(4)	288
図Ⅷ-37	石器分布図(5)	289
図Ⅷ-38	石器分布図(6)	290

Ⅸ 自然科学的分析

図Ⅸ-1	検出された花粉・胞子の顕微鏡写真	292
図Ⅸ-2	検出された花粉・胞子	293
図Ⅸ-3	G56区北の主要珪藻化石群集の層位的分布	305
図Ⅸ-4	低湿部・東 Loc. 1の主要珪藻化石群集の層位的分布	306
図Ⅸ-5	G56区北の主要花粉化石群集の層位的分布	310
図Ⅸ-6	低湿部・東 Loc. 1の主要花粉化石群集の層位的分布	311
図Ⅸ-7	G56区北の植物珪酸体群集の層位的分布	314
図Ⅸ-8	低湿部・東 Loc. 1の植物珪酸体群集の層位的分布	315
図Ⅸ-9	X-3周溝の植物珪酸体群集	316
図Ⅸ-10	珪藻化石 顕微鏡写真(1)	320
図Ⅸ-11	珪藻化石 顕微鏡写真(2)	321
図Ⅸ-12	花粉化石 顕微鏡写真(1)	322
図Ⅸ-13	花粉化石 顕微鏡写真(2)	323
図Ⅸ-14	植物珪酸体 顕微鏡写真	324

X 成果と問題点

図X-1	II黒層遺物とその遺構 関連図	328
図X-2	アヨロ3類 aと併行する土器	330
図X-3	後北A式の変遷	331
図X-4	文様帯の説明	332
図X-5	後北C ₂ ・D式深鉢の分類	334
図X-6	後北C ₂ ・D式深鉢の変遷	335
図X-7	VI群c類無文土器の変遷	336
図X-8	土坑墓等出土土器の時期	338
図X-9	土坑墓等の軸長・長軸方向	340
図X-10	石器器種別割合	346
図X-11	石鏃長さ幅グラフ	347
図X-12	石鏃長さ重さグラフ	348

表 目 次

I 遺跡の位置と環境

表 I - 1 周辺の遺跡	17
---------------------	----

III 調査の概要

表 III - 1 当報告遺構一覽(1)	38
表 III - 2 当報告遺構一覽(2)	39

IV 表土層の遺構とその遺物

表 IV - 1 杭列 - 7 杭等一覽	49
表 IV - 2 杭列 - 8 杭等一覽	50
表 IV - 3 杭列 - 9 杭一覽	51

V 0 黒層・I 黒層の遺構とその遺物

表 V - 1 遺構の金属製品等一覽	78
表 V - 2 遺構出土の土器観察表(1)	99
表 V - 3 遺構出土の土器観察表(2)	100
表 V - 4 遺構出土の土器観察表(3)	101
表 V - 5 遺構出土の土器観察表(4)	102
表 V - 6 土器・石器掲載一覽	103
表 V - 7 遺構遺物集計表(1)	104
表 V - 8 遺構遺物集計表(2)	105
表 V - 9 遺構遺物集計表(3)	106

VI II 黒層の遺構とその遺物

表 VI - 1 土器掲載一覽	169
表 VI - 2 石器掲載一覽	170
表 VI - 3 焼土規模一覽	170
表 VI - 4 遺構遺物集計表(1)	171
表 VI - 5 遺構遺物集計表(2)	172
表 VI - 6 遺構遺物集計表(3)	173
表 VI - 7 遺構遺物集計表(4)	174

VII 低湿部包含層の遺物

表 VII - 1 土器観察表	187
表 VII - 2 I 黒層掲載土器一覽	187
表 VII - 3 I 黒層掲載石器一覽	188
表 VII - 4 II 黒層掲載土器一覽	192
表 VII - 5 II 黒層掲載石器一覽	196

表 VII - 6 掲載木製品(1)	222
表 VII - 7 掲載木製品(2)	223
表 VII - 8 未掲載木製品等(1)	224
表 VII - 9 未掲載木製品等(2)	225
表 VII - 10 未掲載木製品等(3)	226
表 VII - 11 未掲載木製品等(4)	227
表 VII - 12 未掲載木製品等(5)	228
表 VII - 13 未掲載木製品等(6)	229

VIII 台地部包含層の遺物

表 VIII - 1 I 黒層掲載土器一覽	245
表 VIII - 2 土器観察表(1)	253
表 VIII - 3 土器観察表(2)	254
表 VIII - 4 I 黒層掲載石器一覽	255
表 VIII - 5 I 黒層等の金属製品等一覽	259
表 VIII - 6 II 黒層掲載土器一覽(1)	282
表 VIII - 7 II 黒層掲載土器一覽(2)・土製品 一覽	283
表 VIII - 8 II 黒層掲載石器一覽	287

IX 自然科学的分

表 IX - 1 微化石分析試料	297
表 IX - 2 珪藻分析結果(1)	299
表 IX - 3 珪藻分析結果(2)	300
表 IX - 4 珪藻分析結果(3)	301
表 IX - 5 珪藻分析結果(4)	302
表 IX - 6 珪藻分析結果(5)	303
表 IX - 7 珪藻分析結果(6)	304
表 IX - 8 花粉分析結果	309
表 IX - 9 植物珪酸体分析結果	313

X 成果と問題点

表 X - 1 後北 C ₂ ・D 式深鉢の分類(1)	332
表 X - 2 後北 C ₂ ・D 式深鉢の分類(2)	333
表 X - 3 土坑墓等の分類要素一覽	339
表 X - 4 北海道式古墳との比較	342
表 X - 5 石器器種別集計表	346

図 版 目 次

I 遺跡の位置と環境

図版 I-1 遺跡全景	351
-------------------	-----

II 調査の方法、遺物の分類

図版 II-1 水対策施設	352
図版 II-2 ウェルポイント装置	353
図版 II-3 基本土層(1)	354
図版 II-4 基本土層(2)	355

IV 表土層の遺構とその遺物

図版 IV-1 杭列-7	356
図版 IV-2 杭列-7 杭	357
図版 IV-3 杭列-7・8 木製品	358
図版 IV-4 杭列-8・9 杭	359
図版 IV-5 室状遺構	360

V 0黒層・I黒層の遺構とその遺物

図版 V-1 H-1	361
図版 V-2 H-2(1)	362
図版 V-3 H-2(2)	363
図版 V-4 H-10	364
図版 V-5 H-2・10の遺物	365
図版 V-6 X-1・2・3	366
図版 V-7 X-1(1)	367
図版 V-8 X-1(2)	368
図版 V-9 X-1の遺物(1)	369
図版 V-10 X-1の遺物(2)	370
図版 V-11 X-1の遺物(3)	371
図版 V-12 X-2(1)	372
図版 V-13 X-2(2)	373
図版 V-14 X-2の遺物、X-3	374
図版 V-15 P-2・3・4・5	375
図版 V-16 P-8・9・11	376
図版 V-17 P-12・14	377
図版 V-18 P-17・26・27	378
図版 V-19 P-28・29・30・31	379
図版 V-20 土壌の遺物(1)	380
図版 V-21 土壌の遺物(2)	381
図版 V-22 土壌の遺物(3)	382
図版 V-23 土壌の遺物(4)	383
図版 V-24 F-1・7・8・24・30・76	384
図版 V-25 F-20・29・37・39・41・60	385
図版 V-26 焼土の遺物(1)	386
図版 V-27 焼土の遺物(2)	387
図版 V-28 送り場	388
図版 V-29 鍛冶遺構	389
図版 V-30 鍛冶遺構の遺物、灰集中	390
図版 V-31 集石	391
図版 V-32 道跡、溝	392

VI II黒層の遺構とその遺物

図版 VI-1 H-3	393
図版 VI-2 H-4	394
図版 VI-3 H-5	395

図版 VI-4 H-3・4・5の遺物	396
図版 VI-5 H-6・7・8・9	397
図版 VI-6 H-8・9	398
図版 VI-7 H-6の遺物	399
図版 VI-8 H-6・7・8の遺物	400
図版 VI-9 H-8・9の遺物	401
図版 VI-10 H-11	402
図版 VI-11 H-12	403
図版 VI-12 H-11・12の遺物	404
図版 VI-13 P-1・6・7・10	405
図版 VI-14 P-13・15・16	406
図版 VI-15 P-18・19・20	407
図版 VI-16 P-21・22・23	408
図版 VI-17 P-24・25・32	409
図版 VI-18 P-33・34・35	410
図版 VI-19 土壌の遺物(1)	411
図版 VI-20 土壌の遺物(2)	412
図版 VI-21 土壌の遺物(3)	413
図版 VI-22 土壌の遺物(4)	414
図版 VI-23 土壌の遺物(5)	415
図版 VI-24 土壌の遺物(6)	416
図版 VI-25 F-6・18・74・379・381	417
図版 VI-26 焼土の遺物	418
図版 VI-27 TP-1・2・3	419
図版 VI-28 TP-9・10・11	420
図版 VI-29 TP-12・13・14	421
図版 VI-30 TP-13・14・15・16	422
図版 VI-31 TP-17・18	423
図版 VI-32 TP-19・20	424
図版 VI-33 TP-21・22・23	425
図版 VI-34 TP-24・25	426
図版 VI-35 TP-26・27	427
図版 VI-36 Tピットの遺物	428

VII 低湿部包含層の遺物

図版 VII-1 調査前状況	429
図版 VII-2 Ta-a等除去作業(1)	430
図版 VII-3 Ta-a等除去作業(2)	431
図版 VII-4 調査風景(1)	432
図版 VII-5 調査風景(2)	433
図版 VII-6 調査風景(3)	434
図版 VII-7 調査風景(4)	435
図版 VII-8 調査風景(5)	436
図版 VII-9 調査完了状況	437
図版 VII-10 低湿部I黒層の土器(1)	438
図版 VII-11 低湿部I黒層の土器(2)	439
図版 VII-12 低湿部I黒層の石器	440
図版 VII-13 低湿部II黒層の土器(1)	441
図版 VII-14 低湿部II黒層の土器(2)	442
図版 VII-15 低湿部II黒層の土器(3)・石器等	443
図版 VII-16 木製品(1)	444
図版 VII-17 木製品(2)	445
図版 VII-18 木製品(3)	446
図版 VII-19 木製品(4)	447

図版Ⅶ-20	木製品(5)	448
図版Ⅶ-21	木製品(6)	449
図版Ⅶ-22	木製品(7)	450
図版Ⅶ-23	木製品(8)	451
図版Ⅶ-24	木製品(9)	452
図版Ⅶ-25	木製品(10)	453
図版Ⅶ-26	木製品(11)	454
図版Ⅶ-27	樹皮	455
図版Ⅶ-28	木製品樹種 顕微鏡写真(1)	456
図版Ⅶ-29	木製品樹種 顕微鏡写真(2)	457
図版Ⅶ-30	木製品樹種 顕微鏡写真(3)	458
図版Ⅶ-31	木製品樹種 顕微鏡写真(4)	459
図版Ⅶ-32	木製品樹種 顕微鏡写真(5)	460
図版Ⅶ-33	木製品樹種 顕微鏡写真(6)	461
図版Ⅶ-34	木製品樹種 顕微鏡写真(7)	462
図版Ⅶ-35	木製品樹種 顕微鏡写真(8)	463
図版Ⅶ-36	木製品樹種 顕微鏡写真(9)	464
図版Ⅶ-37	木製品樹種 顕微鏡写真(10)	465
図版Ⅶ-38	木製品樹種 顕微鏡写真(11)	466
図版Ⅶ-39	木製品樹種 顕微鏡写真(12)	467

Ⅷ 台地部包含層の遺物

図版Ⅷ-1	Ta-a等除去作業	468
図版Ⅷ-2	調査風景(1)	469
図版Ⅷ-3	調査風景(2)	470
図版Ⅷ-4	調査風景(3)	471
図版Ⅷ-5	調査完了状況	472
図版Ⅷ-6	台地部Ⅰ黒層の土器(1)	473

図版Ⅷ-7	台地部Ⅰ黒層の土器(2)	474
図版Ⅷ-8	台地部Ⅰ黒層の土器(3)	475
図版Ⅷ-9	台地部Ⅰ黒層の土器(4)	476
図版Ⅷ-10	台地部Ⅰ黒層の土器(5)・石器	477
図版Ⅷ-11	台地部Ⅰ黒層等の金属製品	478
図版Ⅷ-12	台地部Ⅱ黒層の土器(1)	479
図版Ⅷ-13	台地部Ⅱ黒層の土器(2)	480
図版Ⅷ-14	台地部Ⅱ黒層の土器(3)	481
図版Ⅷ-15	台地部Ⅱ黒層の土器(4)	482
図版Ⅷ-16	台地部Ⅱ黒層の土器(5)	483
図版Ⅷ-17	台地部Ⅱ黒層の土器(6)	484
図版Ⅷ-18	台地部Ⅱ黒層の土器(7)	485
図版Ⅷ-19	台地部Ⅱ黒層の土器(8)	486
図版Ⅷ-20	台地部Ⅱ黒層の土器(9)	487
図版Ⅷ-21	台地部Ⅱ黒層の土器(10)	488
図版Ⅷ-22	台地部Ⅱ黒層の土器(11)	489
図版Ⅷ-23	台地部Ⅱ黒層の土器(12)	490
図版Ⅷ-24	台地部Ⅱ黒層の土器(13)	491
図版Ⅷ-25	台地部Ⅱ黒層の土器(14)	492
図版Ⅷ-26	台地部Ⅱ黒層の土器(15)	493
図版Ⅷ-27	台地部Ⅱ黒層の土器(16)	494
図版Ⅷ-28	台地部Ⅱ黒層の土器(17)	495
図版Ⅷ-29	台地部Ⅱ黒層の土器(18)	496
図版Ⅷ-30	台地部Ⅱ黒層の土製品	497
図版Ⅷ-31	台地部Ⅱ黒層の石器(1)	498
図版Ⅷ-32	台地部Ⅱ黒層の石器(2)	499
図版Ⅷ-33	台地部Ⅱ黒層の石器(3)	500

調査要項

事業名：北海道横断自動車道埋蔵文化財発掘調査

事業委託者：日本道路公団北海道支社

事業受託者：財団法人 北海道埋蔵文化財センター

遺跡名：ユカンボシ C 15遺跡（北海道教育委員会登録番号：A-03-263）

所在地：千歳市長都183-1, 1190-1ほか

調査期間：平成8年4月1日～平成9年3月26日（発掘 6月26日～10月30日）

平成9年4月1日～平成10年3月31日（発掘 5月6日～10月31日）

調査面積：平成8年度 3,025㎡（うち当報告分 605㎡）

平成9年度 8,855㎡（うち当報告分 3,180㎡）

調査体制

平成8年度

第2調査部	部長	鬼柳 彰
第2調査部第2調査課	課長	西田 茂
	主任	三浦 正人（発掘担当者）
	文化財保護主事	倉橋 直孝（発掘担当者）
	〃	吉田裕吏洋

平成9年度

第2調査部	部長	鬼柳 彰
第2調査部第2調査課	課長	西田 茂（発掘担当者）
	主査	三浦 正人（発掘担当者）
	主任	鈴木 信（発掘担当者）
	〃	中田 裕香（発掘担当者）
	文化財保護主事	倉橋 直孝（発掘担当者）
	〃	吉田裕吏洋
	〃	大泰司 統
第1調査部資料調査課	主任	田口 尚
	〃	菊池 慈人

I 遺跡の位置と環境

1 位置と環境

(1) 位置 (図 I-1)

ユカンボシ C 15 遺跡は、JR 千歳駅の北方約 6 km に位置し、千歳川の西方 500 m にある。千歳川にかかる「長都大橋」から「東 6 線」(道道馬追原野北信濃線) を南に一区画進むと「市道南 23 号」に達する。この東 6 線と南 23 号とが交わるあたりから西側 300 m ほどが遺跡の広がりとして確認できている。標高は 5 ~ 9 m である。ここらでの水位は通常 6 m ほどであるが、千歳川の改修工事が一段落する 30 年前までは、標高 8 m のあたりまでは沼沢地であった。この沼沢地は千歳川、長都川、ユカンボシ川の水を集める停滞水域であり、「オサットー」、「長都沼」と呼ばれていた。

5 万分の 1 地形図から割りだした遺跡の位置は、東の地区の中央部が東経 141 度 38 分 49 秒、北緯 42 度 52 分 41 秒である。

(2) 地形 (口絵 2 下、図 I-6・7、図 II-1)

ユカンボシ C 15 遺跡の調査予定地は図 II-1 に示した。概略東西の長さ 300 m、南北の幅 80 m の範囲である (図 I-6・7)。遺跡の広がりには南北方向にのびることは確実であるが、東西方向にどれほど延びているのかは明らかでない。市道南 23 号の道路敷地、側溝部分を含んでいる。一見平らなところに見えるが、相対的な地形として台地と低湿地とが推定されている。

図 I-7 は道路工事予定図をもとにした地形図である。ユカンボシ C 15 遺跡は、高速道路の計画路線のうちで盛り土による本線部分にあたる。

東側の地区 (東地区) と西側の地区 (西地区) とは 60 ~ 80 m ほどの距離がある (図 II-1)。この空隙は試掘調査の成果から、耕作等によって遺物包含層が消失した地域であるとの北海道教育委員会文化課の判断による。2 か年にわたる発掘調査の結果、東地区と西地区との間には流路の地形が横切って低湿部をなしており、東西の地区は別の地形単位として理解できることになった。

このような台地部と低湿部とがどのように形成されたのかについて、今回の調査によって得られた資料からは次のように考えられる。

図 I-8 は高速道路の建設に際しての機械ボーリングによる資料をもとに、堆積土層の概略を明らかにするために簡略化した土層柱状図である。地表を厚さ 30 cm ほどで覆っているのは樽前 a 火山灰であり、基底は支笏 (シコツ) 火砕流である。支笏火砕流と樽前 a 火山灰の間にある火山灰は恵庭火山灰である。西が高く東に低い緩やかな平坦面は、支笏火砕流と恵庭火山灰の残存から推定すると西から東へ 2 km につき 12 m ほどの割合で低下している。

支笏火砕流で形成された緩斜面が、湧水・流水による浸食・下刻作用によって谷地形がつくられ、場所によっては砂、礫などの堆積がすすむ。そこでは草木の繁茂の具合により泥炭質土が形成されるところもあり、また粘土、シルト、泥炭などの互層が発達するところもある。

支笏火砕流の二次堆積によって形成された地形の上には、さらに厚さ 2 m の恵庭火山灰層が、谷地形を埋めるように堆積する。基底地形に起因する水脈をもつ湧水・流水の浸食・下刻作用により再び谷地形が出現する。しかしながら、恵庭火山灰をすべて流失してしまうほどの強い作用ではなく、谷地形の形成には至っていないようである。谷地形形成にいたらぬ理由としては、緩やかな傾斜地 (平坦面) であることから堆積作用が下刻作用より卓越する、三角洲地形に変わりゆく場所だったからであろう。このようなことからユカンボシ C 15 遺跡の近辺には、恵庭火山灰を基盤とする島状あるいは半島状の地形の残存が見られることになる。

図 I-9 は F-22・23・24 区でおこなった深掘の試掘溝の土層断面図をもとに、擦文時代の住居跡、

1 位置と環境

現在の舗装道路などを加筆したものである（口絵2下）。

恵庭火山灰は標高6m付近を基底部とし、厚さ2mほどほぼ平らに堆積している。最上部のローム（En-L）と記すのが波状断面を示しているのは、寒冷期における構造土の結果なのであろう。樹木が繁茂する平坦面に厚さ2mにも達する火山灰が堆積し、これによって直径30cmほどの樹木も根こそぎ倒れている様子が見てとれる。恵庭火山灰の堆積によって地下水位に変化があり、標高7m付近を上下しているのもわかる。縄文時代の遺物、遺構が検出されるのは、8mよりも高いところの第Ⅱ黒色土、ならびに恵庭火山灰が削平されてしまった場所（最下位で5.5m）などである。この恵庭火山灰が削平されてしまったところは、水位の上下変化により、水面下になったり、陸化したりしたようである。擦文文化期からアイヌ文化期、さらに河川改修が一段落する現代までは、停滞水域であり泥炭の形成が進行していた。

(3) 周辺の環境（図Ⅰ-6・7、図Ⅱ-1）

高速道路用地になる前は、東側の地区は民家、畑、水田、市道であり、西側の地区は畑、水田、市道であった。低平な地域であるが、相対的に高いところが宅地、畑、低いところが水田という土地利用である。

遺跡の西側には幅72m（40間）で南北に伸びる防風林（国有保安林）がある。これは北海道庁が1893年に完了した「植民地区画割」にもとづく樹林地帯であり、1918年（大正7年）から始められた「耕地防風林の人工造成」の成果である。トドマツやイチイなどの針葉樹、ヤチダモ、ハンノキ、カシワ、ミズナラ、コブシ、オニグルミ、クリ、ホオノキ、カエデなどの落葉広葉樹が目につく。ミズキは初夏に白い花が咲くので防風林内の多くの場所に育っていることがわかった。林内樹上の高いところにアオサギが営巣、繁殖しているのも認められた。

林床で目を引くのは早春であれば黄色のフクジュソウ、赤紫のタチツボスミレ、青のエゾエンゴサク、初夏は白色のエンレイソウである。遺跡の近辺にはヤマクワ、タラノキ、ヤマブドウ、コクワなどがみられた。林縁の一部には荒れ地をあらわすヨモギ、イタドリ、ヤナギなどが侵入している。

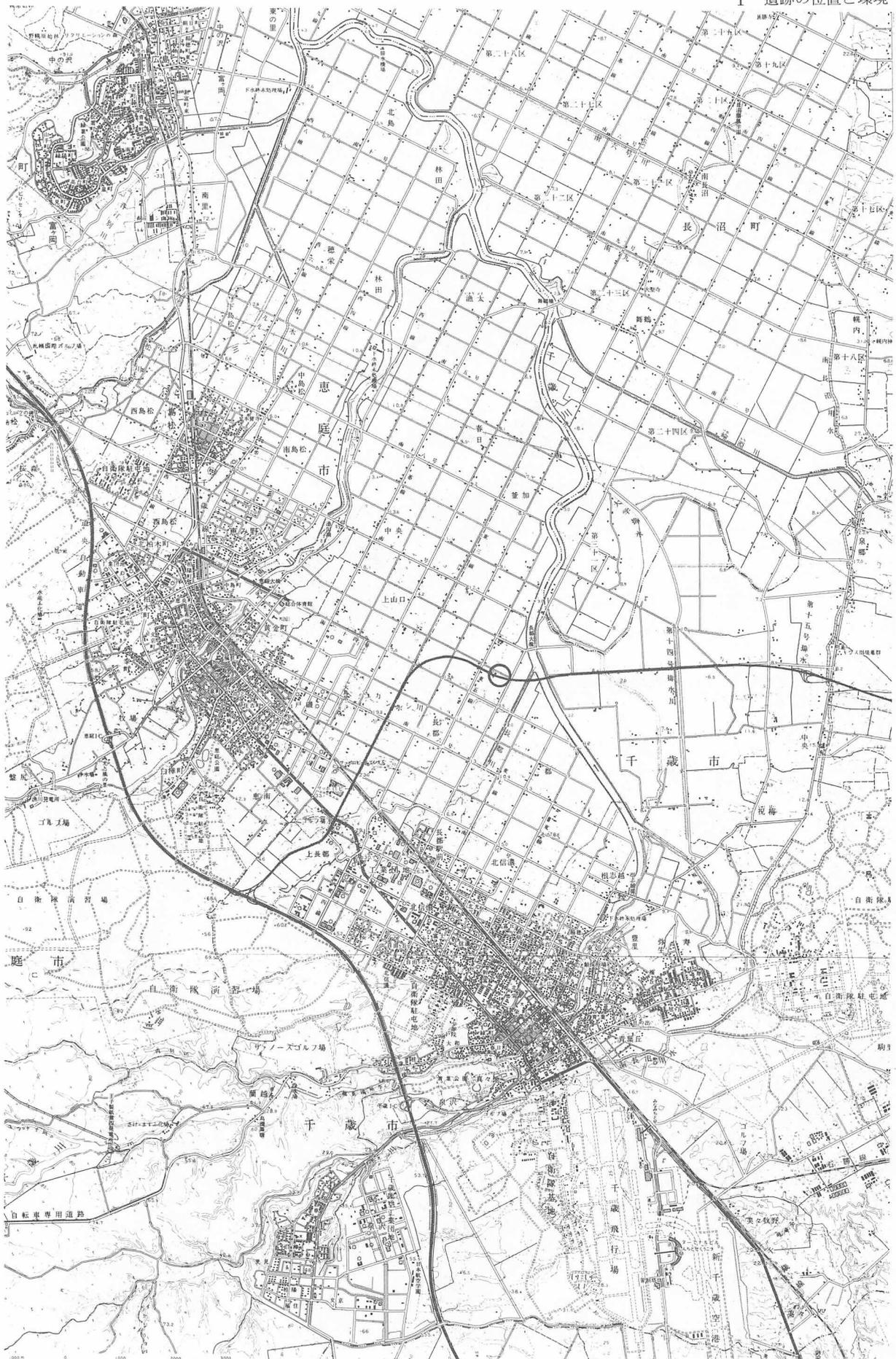
初夏に白く咲くスズランは畑の栽培種で換金作物である。周辺の畑では小麦、ジャガイモ、アスパラガス、カボチャ、ダイコン、キャベツ、飼料、牧草などが作ってある。夏の休耕田でホテイアオイの群落がなす青い花敷きは壮観である。道路の脇で目につく野の花には白いコンロンソウ、赤紫のムラサキケマン、青紫のナギナタコウジュ、黄色のツリフネソウ、曇天時の白いマツヨイセンノウなどがある。これらの作物、野草の分布は用水路、排水路の整備、水位の低下によるところが大きい。

東地区にあった民家では、鶏卵用のニワトリ飼育が企業的に行われていた。ニワトリ舎をイタチ、キツネ、アライグマなどから守るために多数の犬が杭につながれていた。犬杭の多くは深く打ち込まれ、樽前a火山灰を突き抜けており、第Ⅰ黒色土層まで達して遺構を攪乱しているものもあった。遺構、遺物包含層の攪乱部分には、ゴミ穴、井戸、民家の基礎などによるところもあった。2か所の井戸は、開拓期以降のものであり飲用水の確保用と思われる。

(4) 古地図（口絵1下、図Ⅰ-2（上）（下）・3（上）（下）・4・5）

「口絵1下」は、1894年（明治27年）北海道庁が刊行した「胆振国千歳郡千歳原野区画図」（部分）である。これは恵庭市郷土資料館の所蔵品を撮影したものであり、元図は25000分の1である。原野に東西150間（270m）、南北100間（180m）の区画が示してあり、すでに入植者の人名も一部記入してある。青色は河川湖沼、緑色は「風防林及ヒ堤防地」、赤色は「既貸下済地」である。

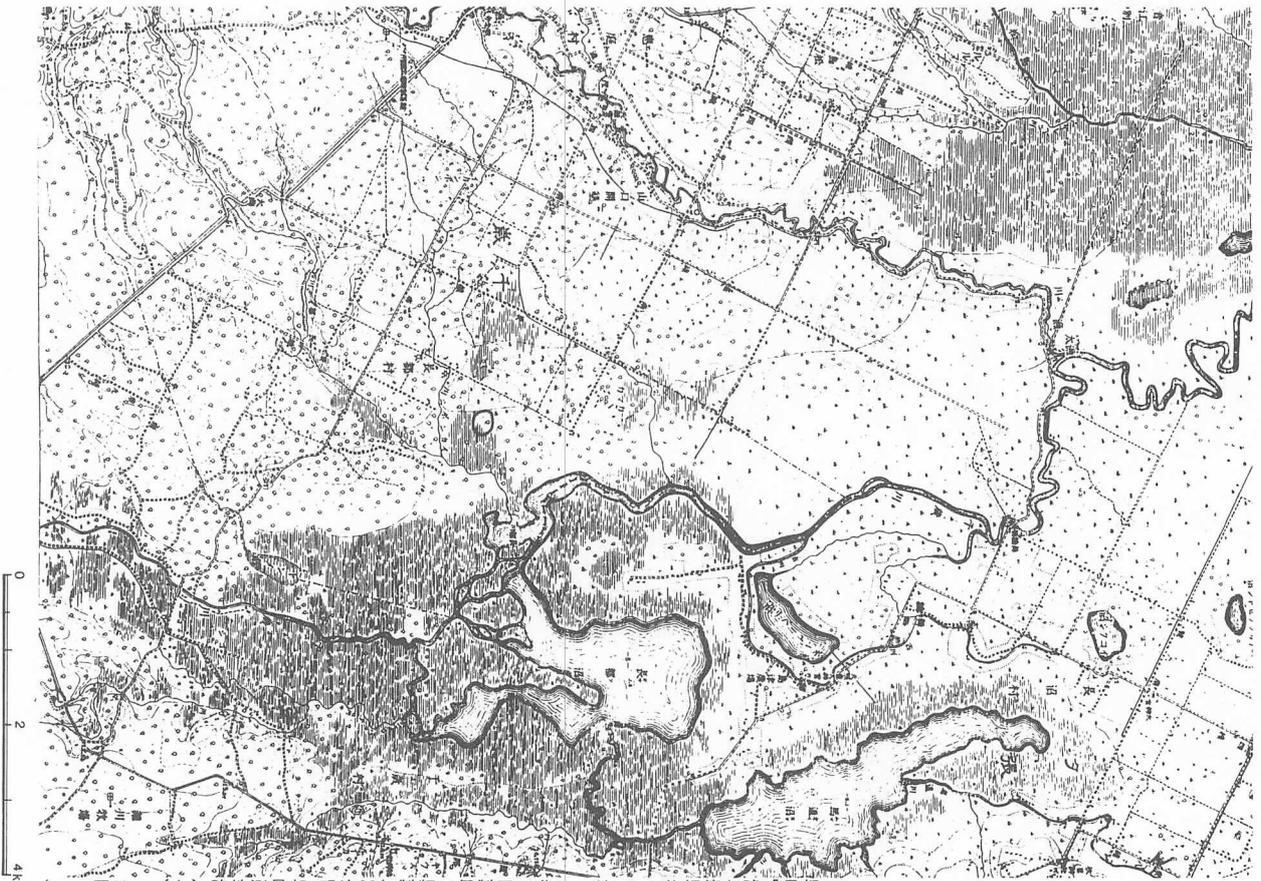
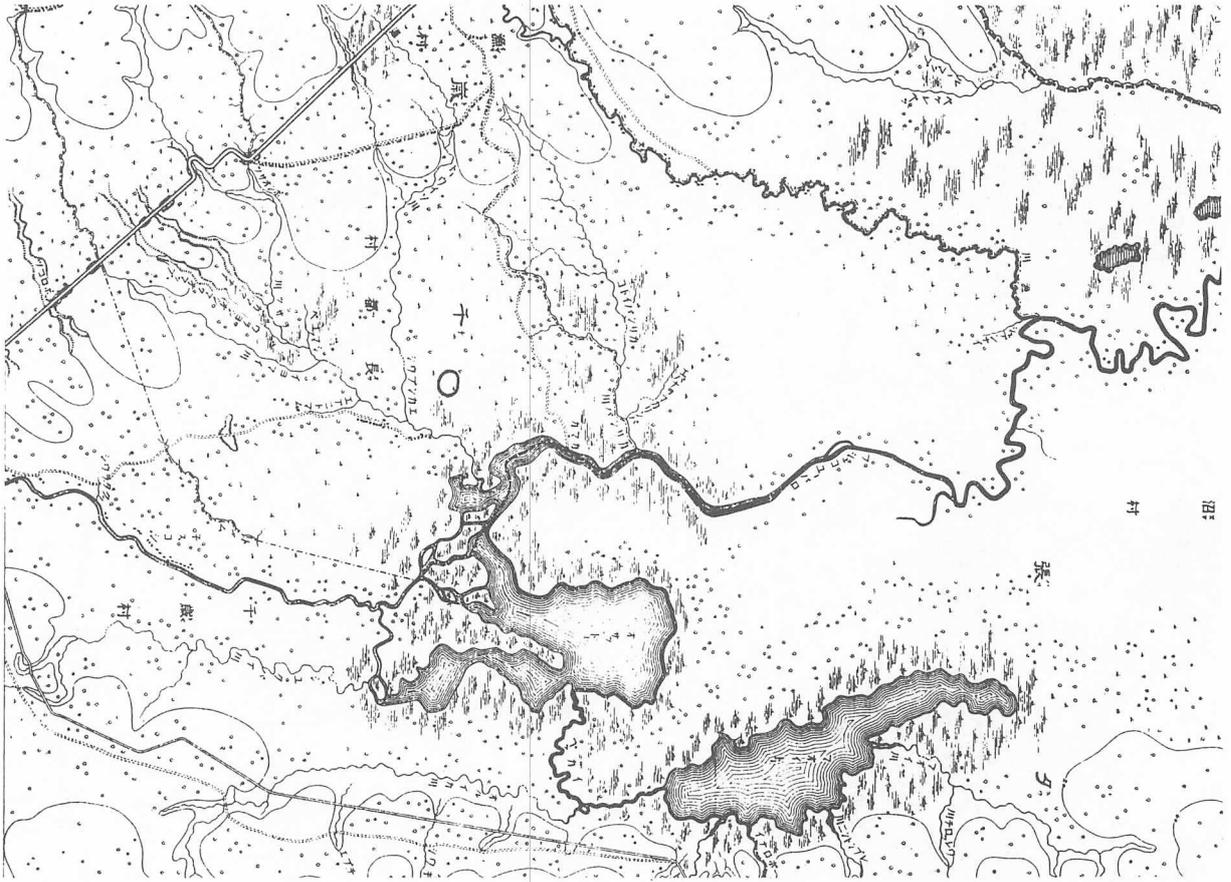
図Ⅰ-2（上）（下）・3（上）（下）はユカンボシC15遺跡周辺の古い地図である。ともに元図は5万分の1の図である。



(この図は、国土地理院、平成7年発行の五万分の一地形図「恵庭」・「千歳」に加筆し、1/100,000に縮小複製したものである。)

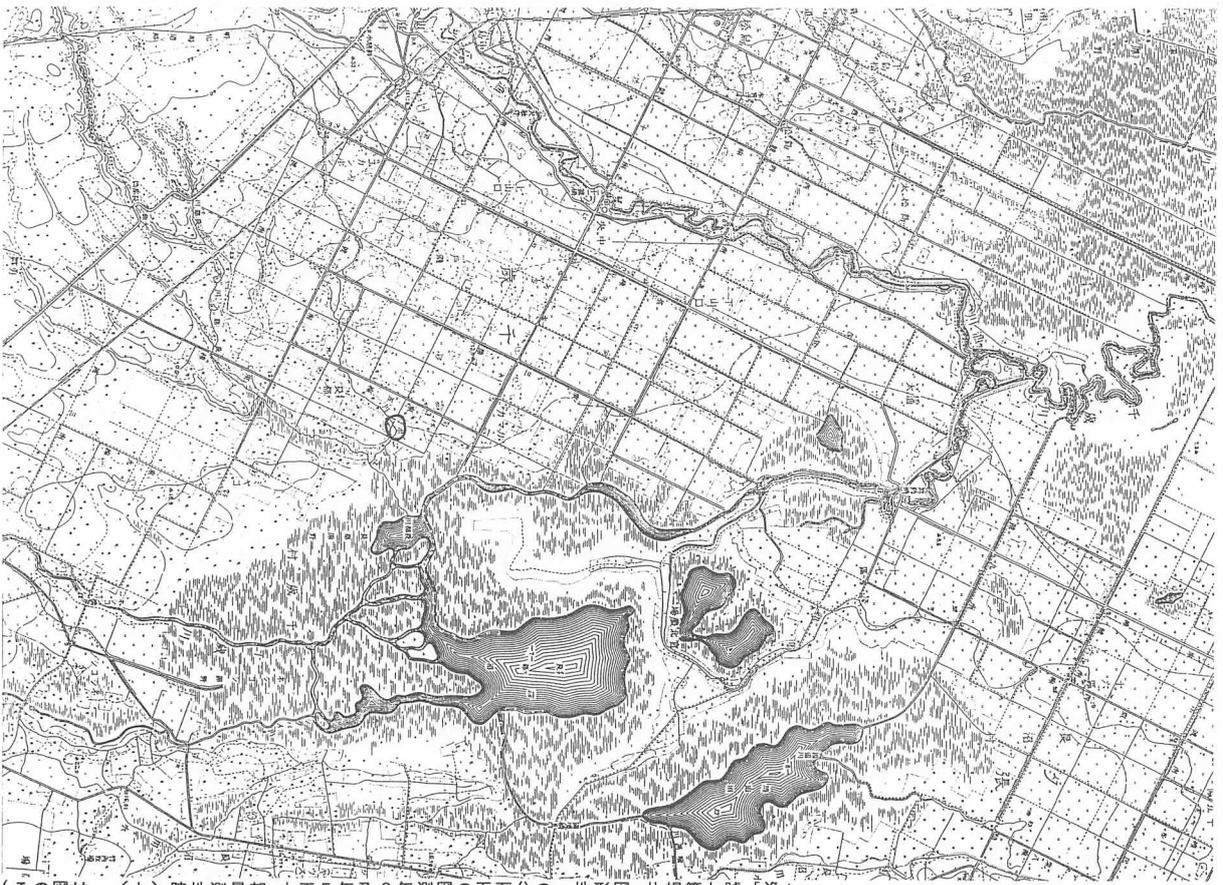
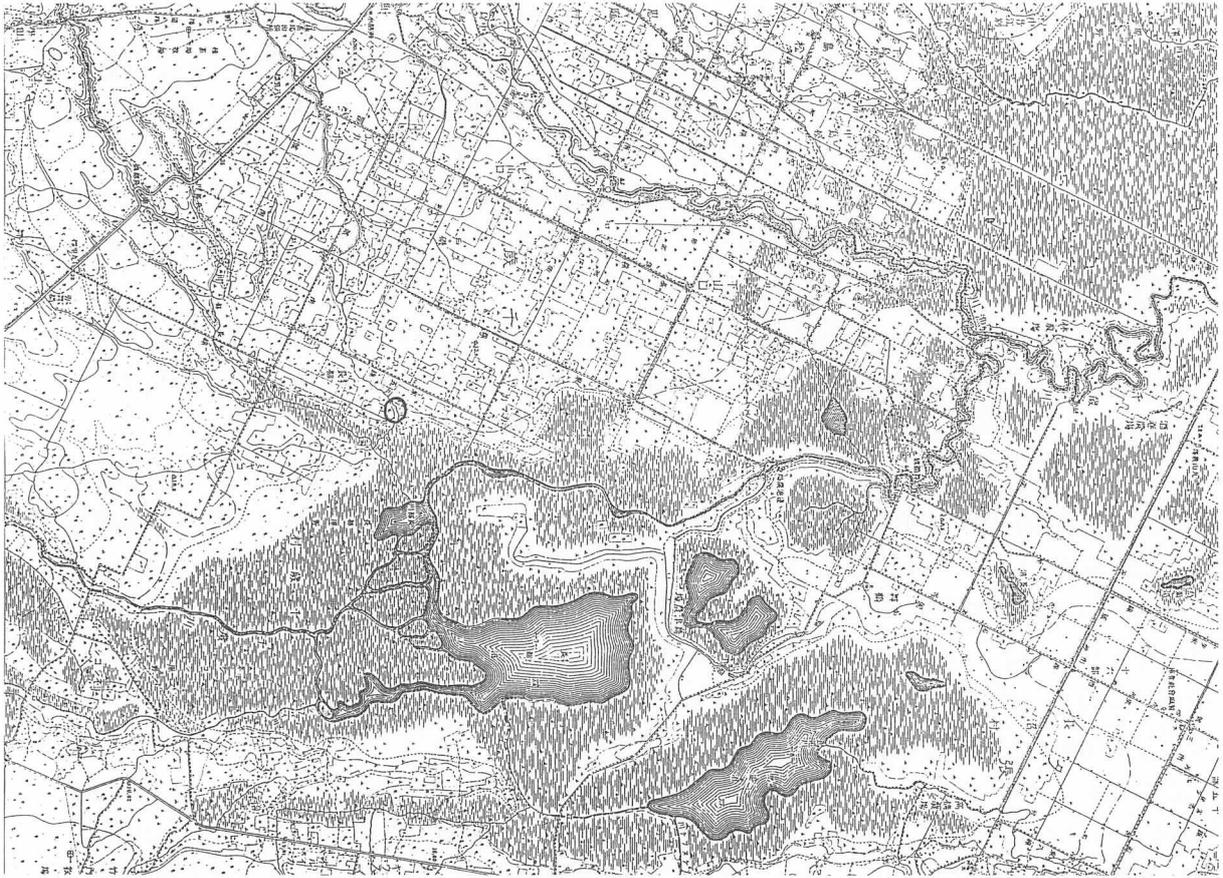
図I-1 遺跡の位置(1)

1 位置と環境



(この図は、〈上〉陸地測量部、明治29年製版の假製五万分の一地形図、札幌第七號「長都」
 〈下〉同、明治42年部分修正測、43年改版の假製五万分の一地形図、札幌第七號「漁」に
 加筆し、1/100,000に縮小複製したものである。)

図 I - 2 遺跡の位置(2)



(この図は、〈上〉陸地測量部、大正5年及6年測図の五万分の一地形図、札幌第七號「漁」
 〈下〉同、昭和10年修正測五万分の一地形図、札幌第七號「恵庭」に
 加筆し、1/100,000に縮小複製したものである。)

図I-3 遺跡の位置(3)

1 位置と環境

図Ⅰ-2(上)は1896年(明治29年)「陸地測量部」製版の「北海道假製五万分一図」『長都』(おさつ)である。これは「假製」という制約もあって、湖岸線や河川に比べて丘陵や山地の表示は概略的なものである。行政の区画として、右下に「千歳(チトセ)村」、左端に「漁(イザリ)村」、中央部に「長都(オサツ)村」が記入してある。この図の地名表記は「千歳」を例外として、アイヌ語を片仮名・漢字で写したもののばかりである。ユカンボシC15遺跡の位置は「長都(オサツ)村」のなかであり、「エカンプウシ」の表示の北側にあたる。

ユカンボシC15遺跡付近の地表のようすは、低湿な原野と表現してある。川の流れは、「トーウイソ川」を合わせて西から流れて来る川(無記名)と、南から流れて来る「ヲサツ川」「イヨマイ川」が合流し、「オサツトー」の西端に注ぎ込むように描いてある。

ユカンボシC15遺跡にあたるころから目を西の方に向けてみると、標高20mと40mの間の丘陵斜面に沿って直線的に延びる道路が認められる。これは1873年(明治6年)に完成した札幌と室蘭とを結ぶ「札幌本道」、別名「室蘭街道」(むろらんがいどう)の一部である。系譜をたどれば、1807年(文化4年)の山田文右衛門にはじまる石狩と千歳とを結ぶ道路開削の後身、改良物である。1858年(安政5年)夏にはぼこの道筋を西から東へ歩いた松浦武四郎が「新道」という表現をしているのは、その前年に幅2間で開削、改修なされたことの反映である(『戊午日誌第三十三巻東西新道誌』)。かつての室蘭街道の一部は、現在国道36号と呼ばれている。

この道路よりもいくぶん低いところに「小路」の表示がある。これらはアイヌコタンや「場所」「番屋」「会所」を連絡するものであり、室蘭街道開設以前からの踏み分け道である。例えば、同じく「小路」の表示になっている「エカンプウシ」の下流の川岸からはじまり、「エアニトマム」の東側を通り、「クッタラウシ」まで南に延びる小路は、石川和助が安政4年(1857年)の視察時に通過した道筋でもある。このときの報告書『観国録』には、ここからは流れが速く、舟の扱いが難しいので「ヲサツ」から「千歳会所」までは陸行するのだと記してある。

さきに引用した松浦武四郎の報告には、アイヌの小屋9軒ほどがあるとの聞き書きが記されている。「エアニトマム」のいくぶん北側に認められる人家の記号は、上述の人家に関連するものであろう。

図Ⅰ-2(下)は1910年(明治43年)「陸地測量部」発行の『漁』(いざり)である。

この図の全体に関しては等高線から地形が良好に読み取れるが、あいにくユカンボシC15遺跡の周辺は低平な原野であり、地形の判読は困難である。ユカンボシC15遺跡のある場所は、「長都沼」に注ぐ「長都川」の西側であり、「イカンボシ川」の表示の北側に広がる低湿な原野である。地表のようすは低湿な原野(沼沢地)の西側いくぶん高い場所は「濁葉樹林」地として表現されている。「イカンボシ川」の表示から川を3kmほどさかのぼったところに「イカンボシ」の地名表記がある。

この図の大きな特色は、広大な原野に格子目の道路が描き込まれていることである。これは北海道庁が農耕地開拓のために企画した「植民区画」の道路である。一つの区画を300間(540m)とするもので、東西に走るものを「号」と呼び、南北のものを「線」と称する。南北の道では「基線」「東3線」「東6線」が読み取れ、東西のものは「南18号」「南20号」「南24号」「南26号」が読み取れる。これらの号線道路の基準となる「基線」「零(基)号」の交点は現在の長沼町にある。

この「千歳原野植民地区画割」(号線の設定)は1893年には完了しており、翌1894年2月から「植民地払下」は始まっている。「イカンボシ川」が「東4線」と交差した南側には「文」の記号が認められる。これは1901年に開校した「長都尋常小学校」である。学校の北およそ300mの「イカンボシ川」には「水車房」の記号がある。

室蘭街道のなかほどには「大曲」という和語の地名が明記してある。さらに「山口開墾」「舞鶴」「島

津農場」も和語地名である。

「長都沼」を含む「千歳川」の流域には広大な沼沢地が描き込まれている。これは農耕地としての可否を示したものであろう。さきに「オサットー」と記されていたところは「長都沼」となっている。

図I-3(上)は1920年(大正9年)「大日本帝国陸地測量部」発行の『漁』(いざり)である。この図は複写の繰り返しのためにいささか明瞭を欠くが、「植民区画」の道路建設が進展していることが見てとれる。等高線は5m毎に描いてあり、ユカンボシC15遺跡を横切るように10mの等高線が走っている。遺跡の周辺は、東側は低湿の荒地、西側は「潤葉樹林」の荒地と表現してある。南側には「田」の記号も認められる。ここで注目すべきは「ユカンボシ川」の流路である。「ユカンボシ」の呼称もさることながら、ユカンボシC15遺跡の中を北に流れ、そして東に折れて「長都川」に注いでいる。およそ9mよりも低いところは滞水域と推定できる。

行政区画が「千歳」となっているのは、1915年(大正4年)に「千歳、長都、蘭越、烏柵舞」の村が合併して「千歳村」になったからである。水準点は、「東3線」に沿って「南18号」に10、「南22号」に13.9、「南27号」に21があり、「東6線」と「南26号」との交点に12がある。学校の位置は「東5線」と「南26号」とが交わるところに移動している。

図I-3(下)は1936年(昭和11年)「大日本帝国陸地測量部」発行の『恵庭』(えにわ)である。この図には左下に直線で伸びる「鉄道」が描いてあり、左端には「糸には」駅もある。鉄道線路は1926年(大正15年)開業の「北海道鉄道札幌線」(苗穂-沼ノ端)の一部である。「植民区画」の「号線」もさらに整備されている。

この図に到って、ユカンボシC15遺跡の位置が道路との関係において具体的かつ詳細に述べることができるようになる。すなわち、発掘調査しているところは「南23号」と「東6線」とが交わるところから西側であるということである。「ユカンボシ川」の流路は、ここでも「東5線」と「東6線」との間を北流し、大きく東に折れて「長都川」に注いでいる。遺跡の周辺には「乾田」の記号が多くなっている。

学校の位置は再び移動しており「東5線」と「南22号」とが交わるところにある。

図I-4は1947年撮影の空中写真をもとにして、1997年に図化した地形図である。

河川改修の工事前なので、自然地形がよく表現されている。10mの等高線で示される島状、半島状の地形がよく残っている。号線道路で大きく区画された内側の農地は、地形の起伏にそったさらに小さな地割になっている。「南23号」と「東6線」とが交わるところは標高9.5mである。

図I-5は1962年撮影の空中写真をもとにして、1997年に図化した地形図である。

千歳川の改修工事ははじまり、長都川の下流部の直線化が進行中である。農耕地の地割はいくぶん大きくなっている。「南23号」と「東6線」とが交わるところは標高8.2mである。

現在の5万分の1地形図の図幅名称は『恵庭』(図I-1)である。千歳川、長都川などの河川改修により水位が低下し、かつての「長都沼」の湖沼は消失した。「植民区画」の道路、「防風林」が整然と直進している。改修工事による流路変更の結果、現在のユカンボシ川は「南24号」の南側を東に流れ、長都川に合流している。千歳市域においては、河川改修の工事が進展し、護岸はコンクリートブロックで覆われ、直線化した流路になっている。自然河川の姿が残るのは最上流部の恵庭公園内とその下流部のわずかな範囲だけである。「東5線」と「南22号」とが交わるところに位置している長都小学校は、中学校との併置校である。

このユカンボシC15遺跡の発掘調査が終了し、高速道路の建設工事がすすめば、東西に走る長大な構造物が、低平な地域に出現することになる。(西田 茂)

1 位置と環境

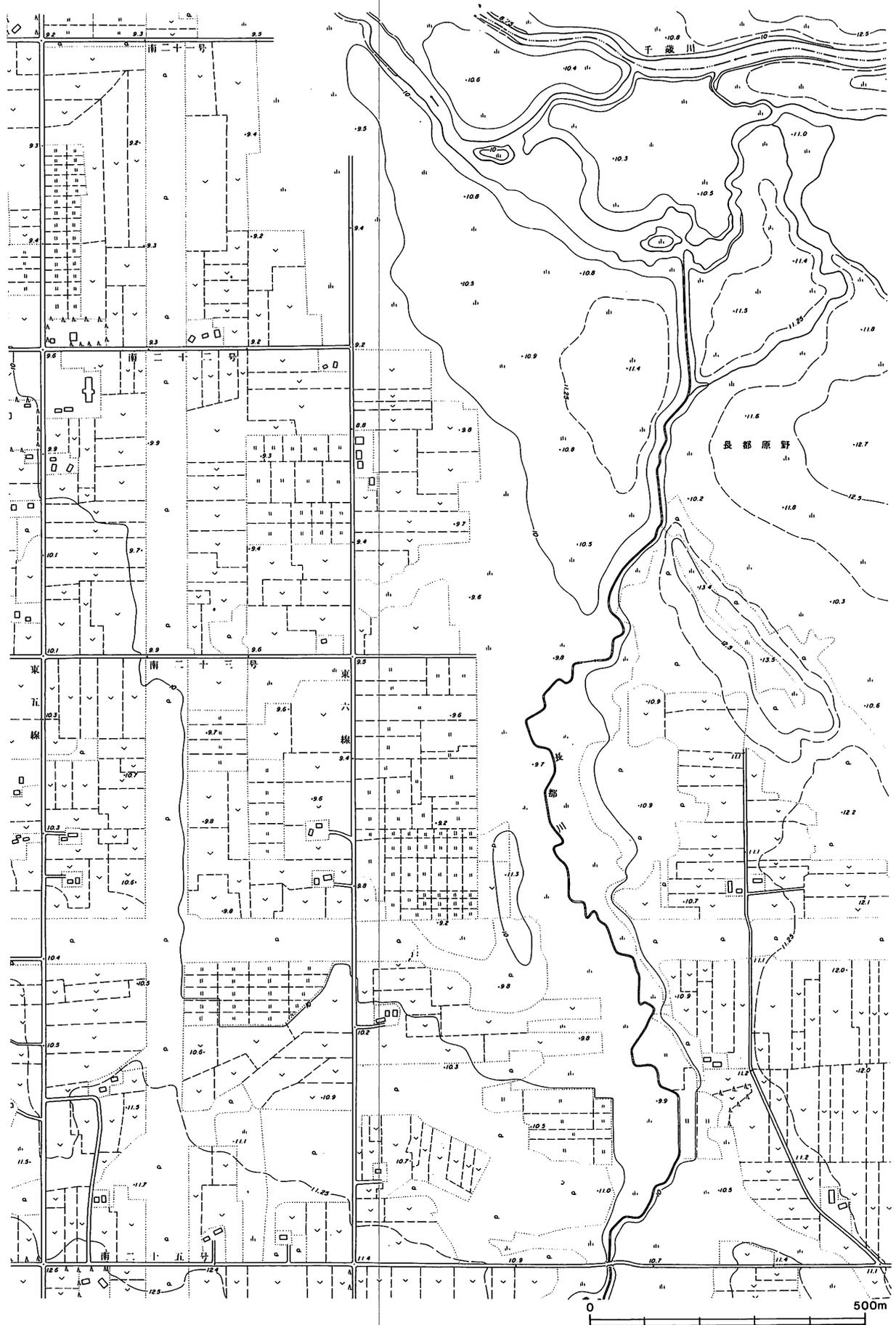


図 I - 4 周辺の地形(1)



図 I - 5 周辺の地形(2)

1 位置と環境



図 I-6 周辺の地形(3)

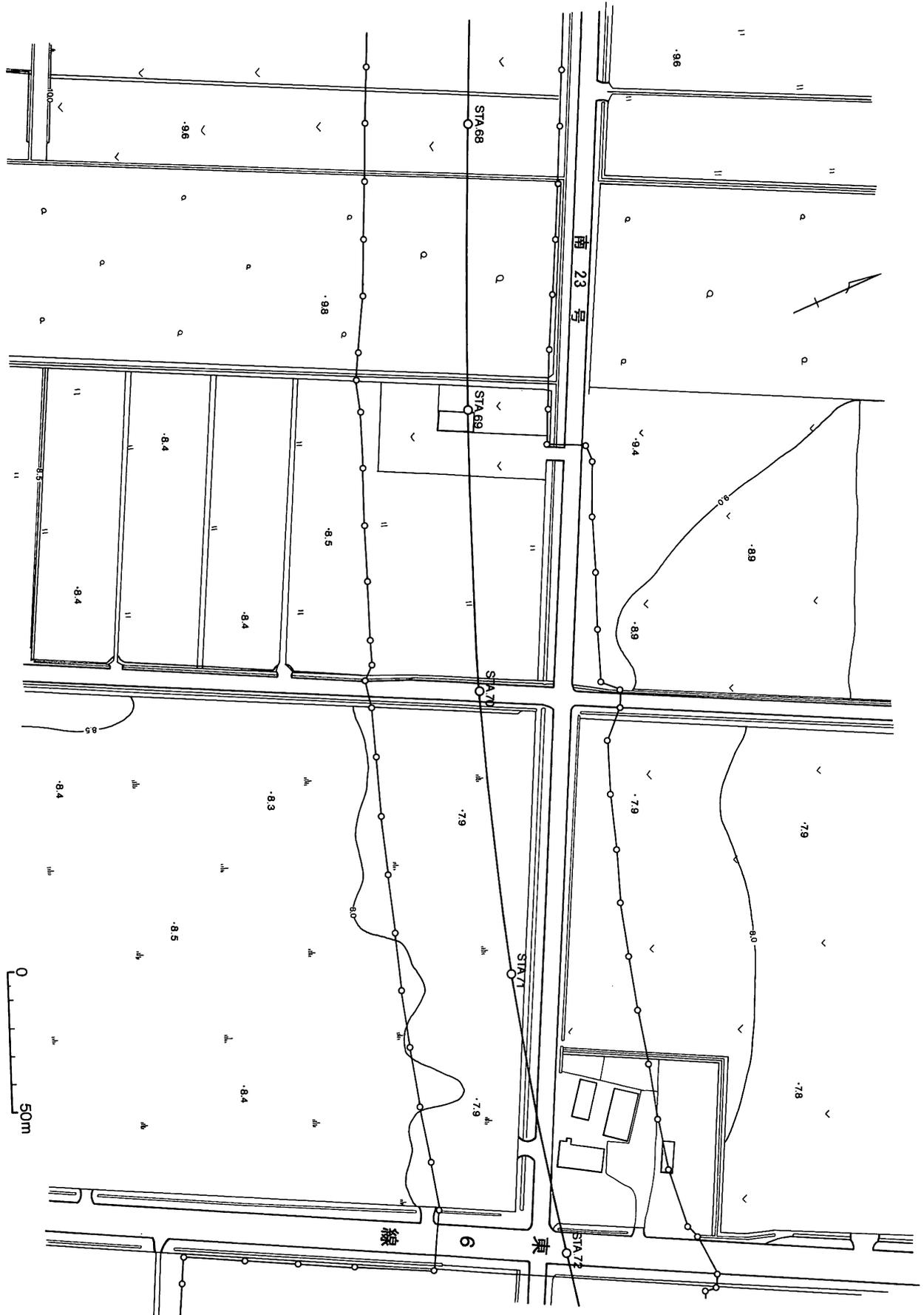


図 I - 7 調査前状況図

1 位置と環境

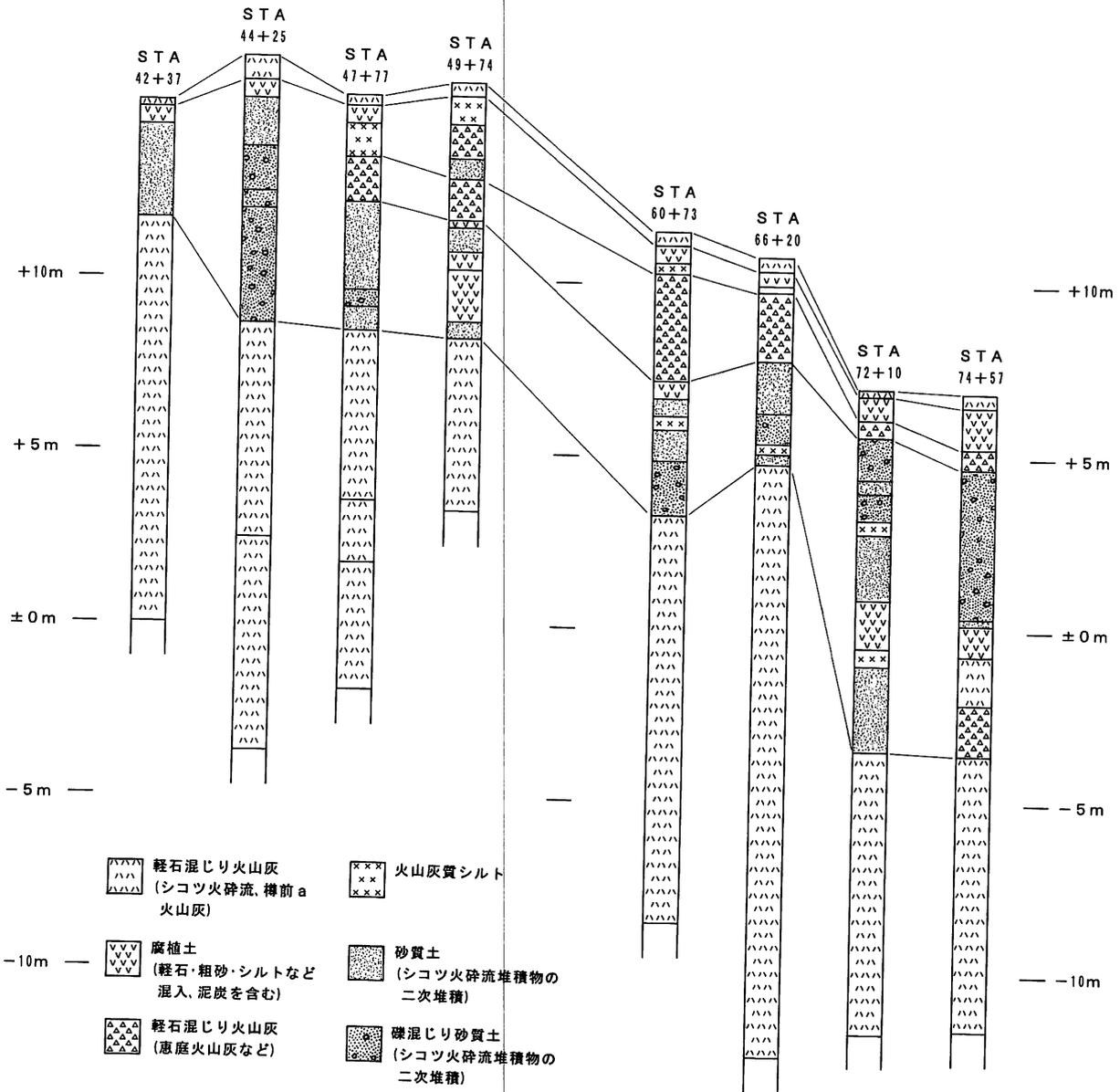
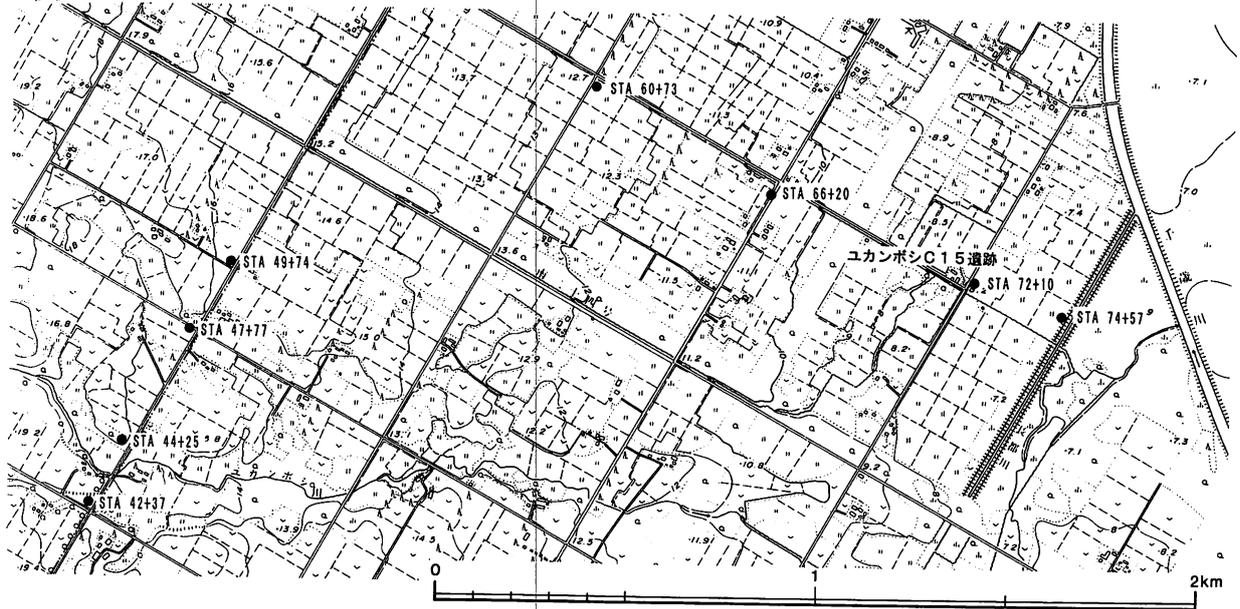


図 I - 8 周辺の土層柱状略図

I 遺跡の位置と環境

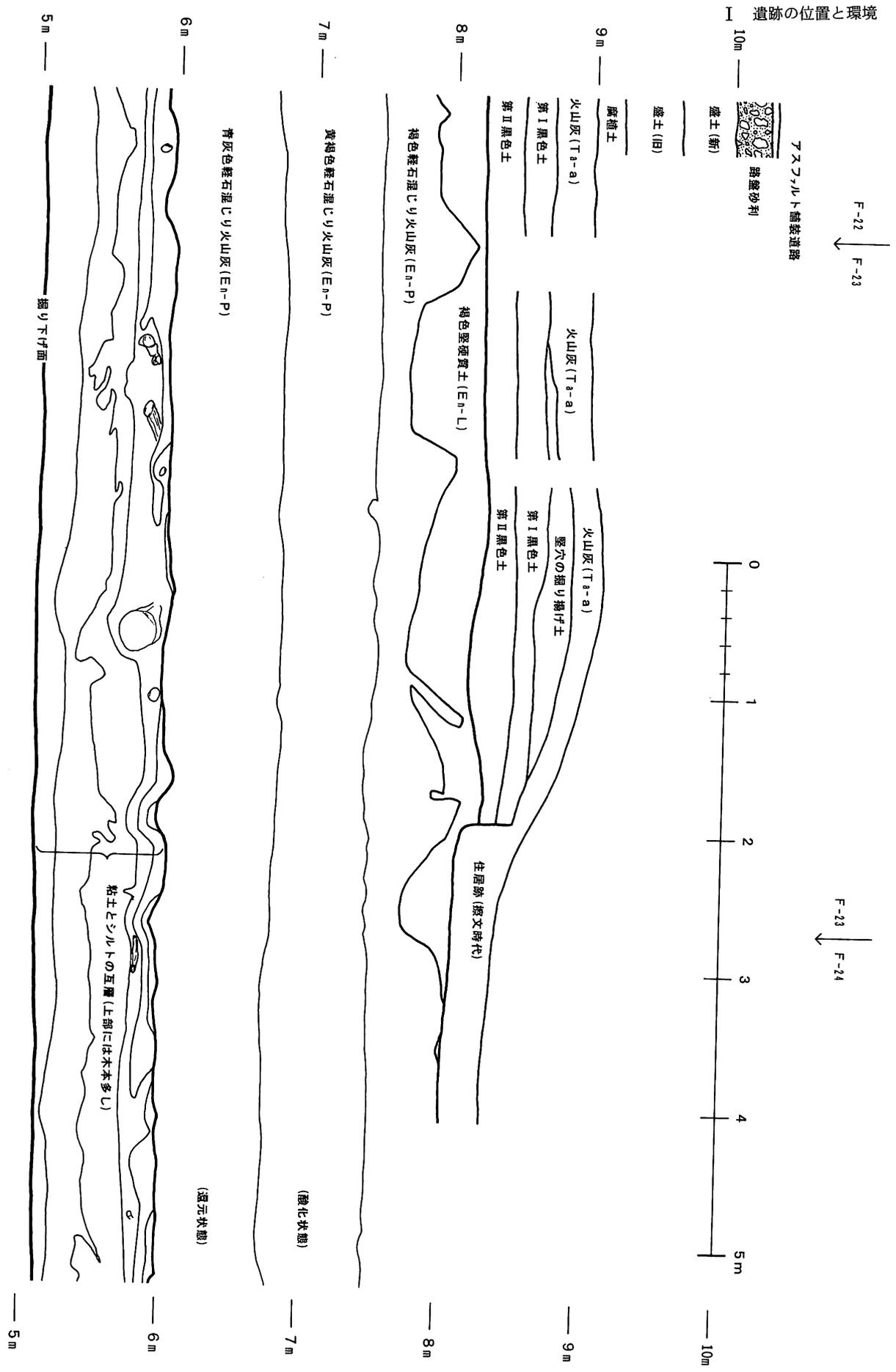


図 I - 9 台地部深掘り土層略図

2 周辺の遺跡 (図 I-10、表 I-1)

図 I-10は、北海道教育委員会作成の埋蔵文化財包蔵地カードと『千歳市埋蔵文化財包蔵地分布図』(1994年、千歳市教育委員会)、恵庭市教育委員会作成の埋蔵文化財包蔵地カードなどをもとにして作ったユカンボシ C 15遺跡周辺の遺跡分布図である。これによると長都川の流域、ユカンボシ川の流域には、いたるところに遺跡が見つかっている。

これらの遺跡のなかには大正時代から知られているものもあるが、大半は最近20年間の分布調査、発掘調査によって明らかになったものである。遺跡の時代・時期については、調査の歴史、報告書の有無を含めて表に示した。遺跡の特色について、最近5年ほどの新しい知見を主にして記述すると、次のようになる。

なお、遺跡の名称は千歳市、恵庭市ともにアイヌ語の河川名をもとにして、河川流域ごとに数字を付して区別してある。ユカンボシに関しては上流が恵庭市(E)、下流部が千歳市(C)なのでアルファベットを加えて識別している。

旧石器時代 地図から少しはみ出した位置にあるオサツ16遺跡から土壌、焼土を伴う細石刃石器群が検出されている。細石刃核には、峠下型とオショロッコ型とがあり、オショロッコ型の点数は100点をうわまわるものである。オサツ2遺跡では焼土3か所とともに少量の細石器石器群が出土している。ユカンボシ E 5遺跡の低地面からも細石刃核1点が見つかっている。1997年夏の調査でユカンボシ E 10遺跡で、少量の細石器石器群が検出されている。これらはすべて恵庭 a 降下軽石層(En-a)よりも上位からの出土である。

縄文時代 早期後半から前期、中期、後期、晩期の住居跡・墓などの遺構、土器・石器などの遺物は長都川、ユカンボシ川に面した遺跡から重複して見つかる例が多い。遺構、遺物のまとめ、濃淡から判断すると少しずつ場所をずらしながら生活が営まれていたことがわかる。Tピットと呼ばれる落とし穴は、発掘調査が行われたほとんどの遺跡から検出されている。時期ごとの特色はつぎのようになっている。土器型式が判明したものは()で示してある。

早期前半 貝殻条痕文土器がオサツ16遺跡、オサツ18遺跡、ユカンボシ E 8遺跡から出土している。

早期後半 ユカンボシ E 8遺跡では住居跡、土壌墓(東釧路Ⅲ式、コッタロ式)が検出され、東釧路Ⅱ式土器も出土している。ユカンボシ C 2遺跡では、標高7.5~8.0mのあたりから住居跡(東釧路Ⅲ式、コッタロ式)が検出されている。ユカンボシ E 9遺跡では土壌(東釧路Ⅲ式)が見つかっている。ユカンボシ E 10遺跡からは東釧路Ⅱ式土器、ユカンボシ E 4遺跡では、中茶路式、東釧路Ⅳ式などの出土が報告してある。ユカンボシ E 5遺跡では、東釧路Ⅲ式、コッタロ式、中茶路式などの土器が出土している。

縄文時代前期 前半の時期の住居跡はユカンボシ C 13遺跡(網文式)、オサツ14遺跡(静内中野式)で検出されている。ユカンボシ C 2遺跡からは、網文土器、静内中野式土器が出土している。静内中野式土器は、ユカンボシ E 3遺跡の川床低湿部分からも検出されている。ユカンボシ E 5遺跡では後半の住居跡(大麻5式)が調査されている。

縄文時代中期 前半の住居跡はオサツ14遺跡(円筒上層式)、ユカンボシ C 9遺跡(円筒上層式)で見つかっている。ユカンボシ E 5遺跡では中葉の住居跡(萩ヶ岡2式)が検出されている。ユカンボシ C 9遺跡でも中葉の住居跡(天神山式)が検出されている。後半の住居跡はオサツ2遺跡、ユカンボシ E 3遺跡(柏木川式)、ユカンボシ E 4遺跡、カリンバ2遺跡などにある。中期末の住居跡はオサツ15遺跡、ユカンボシ C 13遺跡で調査されている。

縄文時代後期 前半の住居跡はオサツ2遺跡、オサツ14遺跡、カリンバ4遺跡で検出されており、

これらには土器囲い炉がみられる（すべて余市式）。

後期中葉の大規模な集落がユカンボシ E 3 遺跡、ユカンボシ E 8 遺跡で確認されている。ともに多くの土壌墓もある。ユカンボシ E 3 遺跡の住居跡は 4 本の支柱穴、地床炉、出入口遺構が明瞭に検出できたものが多い。ここでは住居構築時の排土置場（盛土遺構）も見つかっている。ユカンボシ E 3 遺跡とユカンボシ E 8 遺跡のあいだの川床低湿部分からも多量の遺物が出土している。ユカンボシ E 9 遺跡には土壌墓（ウサクマイ C 式）がある。

ユカンボシ C 8 遺跡からは中葉のホッケマ式土器が、ユカンボシ C 5 遺跡からは後葉の堂林式土器が多く出土している。

縄文時代晩期 前半期の遺物がユカンボシ E 7 遺跡で出土している。

続縄文時代 土壌墓はオサツ 2 遺跡、カリンバ 2 遺跡で検出されている（後北式）。天王山式系あるいは赤穴式として報告された土器が出土しているのは、ユカンボシ E 4 遺跡、ユカンボシ E 8 遺跡、ユカンボシ E 9 遺跡などである。これらには後北 C₂・D 式土器がともなっている。ユカンボシ E 9 遺跡では土製紡錘車も出土している。

ユカンボシ E 5 遺跡では「袋状掘り込み」のある土壌墓が検出されている。この土壌墓から出土した土器 2 点には底部穿孔がある。

擦文文化期 竪穴住居跡が窪地として残っており、地表面の観察によって集落であると判断されるのは、つぎのように数多い。オサツ 1 遺跡、オサツ 2 遺跡、オサツ 3 遺跡、オサツ 5 遺跡、イヨマイ 1 遺跡、長都田中遺跡、ユカンボシ C 2 遺跡、ユカンボシ C 3 遺跡、ユカンボシ C 5 遺跡、ユカンボシ C 6 遺跡、ユカンボシ C 8 遺跡、ユカンボシ C 9 遺跡、ユカンボシ C 10 遺跡、恵庭公園遺跡、ユカンボシ E 1 遺跡。

発掘調査によって集落であるとわかったのは、オサツ 14 遺跡、ユカンボシ E 7 遺跡、ユカンボシ E 10 遺跡、カリンバ 2 遺跡、カリンバ 3 遺跡である。カリンバ 3 遺跡では溝状遺構が報告されている。ユカンボシ E 4 遺跡の竪穴遺構からは底部に穿孔のある土器 2 個体が出土している。

ユカンボシ C 8 遺跡からは、擦文文化期初頭の土器と一緒に「南貝塚式」土器が出土している。ユカンボシ E 7 遺跡では初期の土壌墓が見ついている。カリンバ 2 遺跡でも土壌墓が検出されている。鍛冶遺構が検出されたのはオサツ 2 遺跡である。

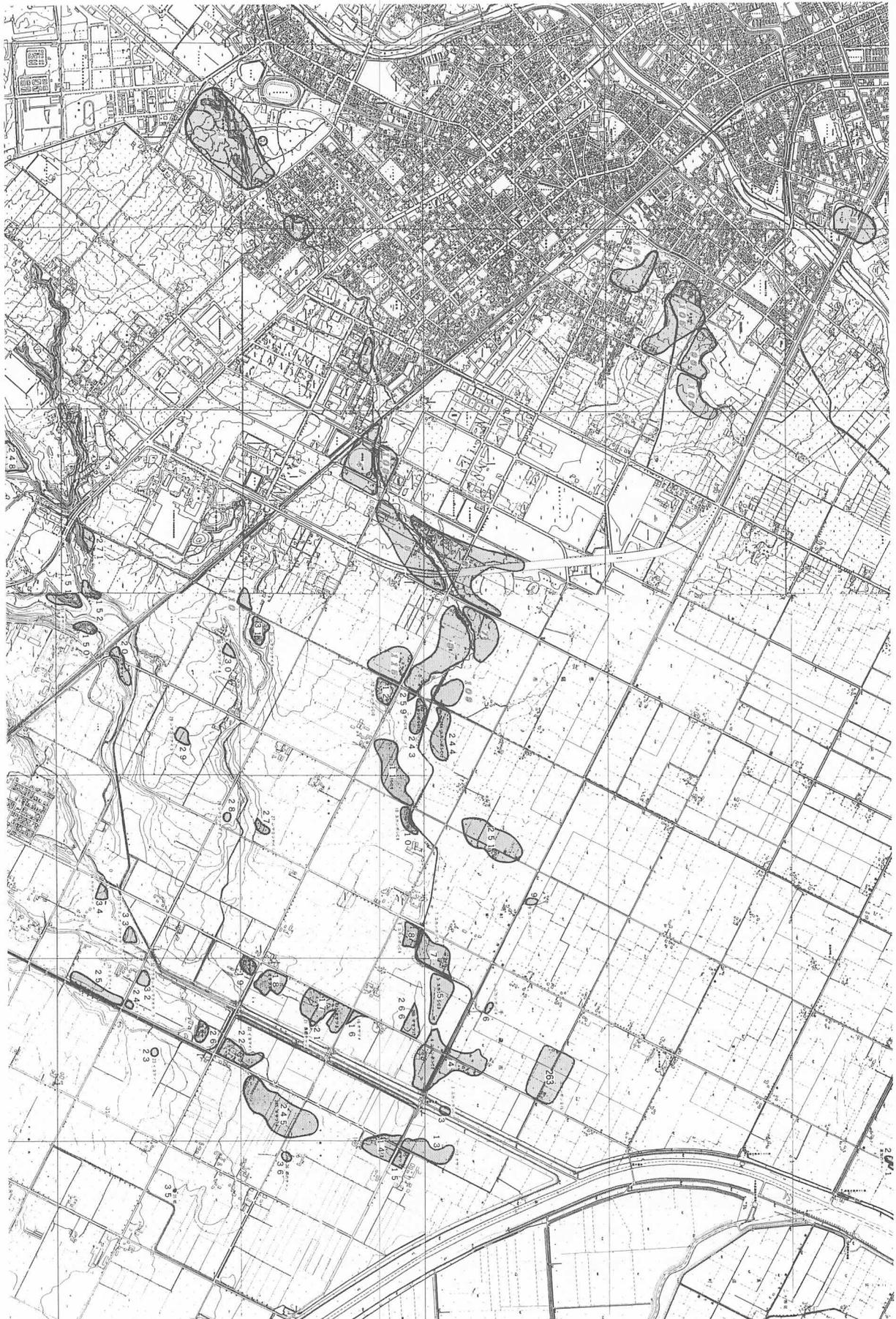
ユカンボシ C 1 遺跡は、かつて河野広道が苫小牧での講演において「北海道における古墳様墳墓」を説明するなかで「近年私が発見したもの」と述べている場所と推定される場所である。河川改修の結果、現在では長都川の流路のなかになってしまったが、1947年の空中写真から作った地形図によると細長い島状の高まりとなっている場所である（図 I-4）。

オサツ 2 遺跡の低湿部からは、1997年夏の千歳市教育委員会の調査でも、木製遺物が出土している。同じく1997年夏、カリンバ 2 遺跡の竪穴住居跡から、銅鏡が出土した。これは白頭山-苫小牧火山灰の下からの検出であり、9世紀後半から10世紀初頭の時期が推定されている。

アイヌ文化期 チャシは釜加（カマカ）、長都（オサツ）、都（ミヤコ）の 3 か所がある。1997年 5 月 7 日、都のチャシと図示してあるところよりも南側、市道「南25号」に並行して、幅 1 m 深さ 1 m ほどで長さ 100 m 余りの溝が掘られていた。溝の壁には上部の幅 2 m あまりで、地表からの深さが 0.7 m ほどの略三角形をなす黒色土の落ち込みを 2 か所観察できた。黒色土の落ち込み間の距離は 20 m ほどであった。この長大な溝は畑地防風のためのイチイ植樹のためのものであり、翌翌日には埋めもどされた。

発掘調査で土壌墓に遭遇したものは、オサツ 2 遺跡、ユカンボシ E 3 遺跡、ユカンボシ E 4 遺跡、

2 周辺の遺跡



(この図は、千歳市教育委員会発行「千歳市埋蔵文化財包蔵地分布図」のNo.24・25・26と
恵庭市教育委員会作成の恵庭市埋蔵文化財包蔵地分布図の該当図に加筆し、1/30,000に縮小複製したものである。)

図 I-10 周辺の遺跡

表I-1 周辺の遺跡

No.	遺跡名	種別	時期	発掘調査歴等	文献No.等
1	カリンパー	集落跡	擦文		1 [釜加遺跡]・2 p215
2	釜加のチャシ	チャシ跡	アイヌ	1965 石川徹・大場利夫	1 [釜加遺跡]・2 p215・3
3	ユカンボシC1	墓	擦文, アイヌ	1947 河野広道 No.13か	4・5
4	ユカンボシC2	集落跡・墓・遺物包含地	縄文前・中・後・晩期, 擦文, アイヌ	1969 石川徹, 1988・89 千歳市教委, 1993 (財)道埋文センター, 1994 千歳市教委	2 p166・6 [長都壱穴遺跡] 7・8・市教委整理中
5	ユカンボシC3	集落跡	縄文中・後期, 擦文, アイヌ等	1990 千歳市教委	9・整理中
6	ユカンボシC4	集落跡	縄文・擦文		
7	ユカンボシC5	集落跡・墓	縄文中・後期, 擦文, アイヌ等	1990・91 千歳市教委	9・10・整理中
8	ユカンボシC6	集落跡・墓	縄文中・後期, 擦文, アイヌ	1990 千歳市教委	9・整理中
9	ユカンボシC7	集落跡	擦文		
10	ユカンボシC8	集落跡	縄文中・後期, 擦文, アイヌ	1991 千歳市教委	10・整理中
11	ユカンボシC9	集落跡	縄文中・後期, 擦文, アイヌ	1995 (財)道埋文センター	11
12	ユカンボシC10	墓・遺物包含地	縄文中・後期, 擦文, アイヌ	北海道式古墳?	
243	ユカンボシC11	墓・遺物包含地	縄文前・中・後期, 擦文	1992 千歳市教委	10・整理中
244	ユカンボシC12	遺物包含地	縄文後期		
251	ユカンボシC13	遺物包含地	縄文前・中・後・晩期, 擦文, アイヌ	1991 千歳市教委	12
259	ユカンボシC14	遺物包含地	縄文		
263	ユカンボシC15	集落跡・墓・低湿地ほか	縄文前・中・後・晩期, 擦文, アイヌ	1996・97~ (財)道埋文センター	13・14・15 当報告・整理中・継続調査
13	オサツ 1	集落跡・墓	擦文, アイヌ	1950 河野広道 No.3か	
14	オサツ 2	集落跡・墓・低湿地ほか	縄文中・後期, 擦文, アイヌ	1992・93・94 (財)道埋文センター 1997~ 千歳市教委	2 p218・16・17 市教委継続調査
15	オサツ 3	集落跡	擦文		
16	オサツ 4	遺物包含地	縄文中・後期		
17	オサツ 5	集落跡・低湿地	縄文中・後期, 擦文, アイヌ		1 p3 [長都遺跡]
18	オサツ 6	遺物包含地	縄文		
19	オサツ 7	遺物包含地	擦文		
20	オサツ 8	遺物包含地	擦文		
150	オサツ 9	集落跡	擦文		
151	オサツ 10	集落跡	擦文		
152	オサツ 11	集落跡	擦文		
245	オサツ 14	集落跡・墓・低湿地ほか	縄文中・後期, 擦文, アイヌ	1994 (財)道埋文センター	16
248	オサツ 15	集落跡	縄文中・晩期	1995・96・97~ 北海道文化財保護協会	18・19・整理中・継続調査
266	オサツ 17	集落跡	縄文中・後期, 擦文		
271	ボンオサツ	墓・遺物包含地	縄文晩期, 擦文	1995・96 北海道文化財保護協会	20・21・整理中
21	長都のチャシ	チャシ跡	アイヌ	1965 千歳市教委測量	1 p3 [長都遺跡]・2 p215・3
22	イヨマイ 1	集落跡・墓ほか	擦文・アイヌ		
23	イヨマイ 2	遺物包含地	縄文後・晩期		
24	イヨマイ 3	集落跡	擦文		
25	イヨマイ 4	集落跡ほか	縄文中・後期, 擦文		
26	長都田中	集落跡	縄文, 擦文, アイヌ	1953 Howard A. MacCord	22
27	シマコツナイ 1	遺物包含地	縄文中期		
28	シマコツナイ 2	遺物包含地	縄文中～晩期		
29	シマコツナイ 3	遺物包含地	縄文・擦文		
30	シマコツナイ 4	集落跡	擦文		
31	シマコツナイ 5	遺物包含地	縄文晩期		
32	ウラヨシマクマツ 1	集落跡	擦文		
33	ウラヨシマクマツ 2	集落跡	擦文		
34	カマクンナイ	集落跡	擦文	チャシ跡?	
35	都	遺物包含地	縄文晩期		
36	都のチャシ	チャシ跡	アイヌ	1966 石川徹・大場利夫	1 [都遺跡]・3
7	恵庭公園	集落跡	擦文	1963 石川徹・大場利夫	23 [公園遺跡]
2	ユカンボシE1	遺物包含地	縄文後・晩期, 擦文		
3	ユカンボシE2	遺物包含地	縄文後期, 擦文		
4	ユカンボシE3	集落跡・墓	縄文前・中・後期, 擦文, アイヌ	1991・92 恵庭市教委	24・25・26
5	ユカンボシE4	集落跡・墓ほか	縄文前・中・後期, 擦文, アイヌ等	1991 (財)道埋文センター, 1995 恵庭市教委	27・28・市教委整理中
6	ユカンボシE5	集落跡・墓ほか	縄文前・中・後期, 擦文, アイヌ等	1991・92 (財)道埋文センター, 1993 恵庭市教委	29・30
7	ユカンボシE6	遺物包含地ほか	縄文前・中・後期, 擦文	1996 恵庭市教委	31・整理中
8	ユカンボシE7	集落跡・墓ほか	縄文, 擦文, 擦文, アイヌ	1994 恵庭市教委, 1996・97 (財)道埋文センター	13・14・32・33・道埋センター
108	ユカンボシE8	集落跡ほか	縄文前・中・後期, 擦文, アイヌ	1988・90・91 恵庭市教委	24・34
109	ユカンボシE9	墓・遺物包含地ほか	縄文前・中・後期, 擦文, 擦文	1992・94 恵庭市教委	26・35
175	ユカンボシE10	集落跡ほか	縄文前・中・後・晩期, 擦文	1996 恵庭市教委, 1997 (財)道埋文センター	14・36・道埋センター
170	シマコツナイE1	遺物包含地ほか	縄文早・中期	1995 恵庭市教委	37
104	カリンバ 1	遺物包含地	縄文早・中期, 擦文		
105	カリンバ 2	集落跡・墓ほか	縄文, 擦文, 擦文, アイヌ	1986・87・95・96・97~ 恵庭市教委	28・31・38・39・整理中
96	カリンバ 3	集落跡ほか	縄文, 擦文, 擦文	1976・82・84 木村英明	40
106	カリンバ 4	集落跡ほか	縄文中・後・晩期, 擦文, アイヌ	1996 恵庭市教委	41
95	漁川	遺物包含地	縄文		

2 周辺の遺跡

表 I-1 の文献

- 1 大場利夫・石川徹 1967 『千歳遺跡』千歳市教委
 - 2 宇田川洋校註 1981 『河野常吉ノート 考古篇 1』
 - 3 北海道教育委員会 1983 『北海道のチャシ』
 - 4 河野広道 1954 『苫小牧地方古代史』苫小牧市教委
(1972 『統北方文化論 河野広道著作集Ⅱ』所収)
 - 5 宇田川洋編 1984 『河野広道ノート 考古篇 5』
 - 6 石川徹 1979 『統千歳遺跡』千歳市教委
 - 7 千歳市教委 1989・90 『ユカンボシ 2 遺跡発掘調査概要報告 1・2』
 - 8 (財)北海道埋蔵文化財センター 1994 『千歳市ユカンボシ C 2 遺跡』北埋調報 86
 - 9 千歳市教委 1991 『ユカンボシ 3・5・6 遺跡発掘調査概要報告』
 - 10 北海道教育庁文化課 1993 『市町村における発掘調査の概要 (平成 3・4 年度)』
 - 11 (財)北海道埋蔵文化財センター 1996 『千歳市ユカンボシ C 9 遺跡』北埋調報 100
 - 12 千歳市教委 1992 『ユカンボシ C 13 遺跡における考古学的調査』
 - 13 (財)北海道埋蔵文化財センター 1997 『調査年報 9 平成 8 年度』
 - 14 (財)北海道埋蔵文化財センター 1998 『調査年報 10 平成 9 年度』
 - 15 北海道考古学会 1997 『1997 年度 遺跡調査報告会資料集』
 - 16 (財)北海道埋蔵文化財センター 1995 『千歳市オサツ 2 遺跡 (1)・オサツ 14 遺跡』北埋調報 96
 - 17 (財)北海道埋蔵文化財センター 1996 『千歳市オサツ 2 遺跡 (2)』北埋調報 103
 - 18 北海道文化財保護協会 1996 『千歳市オサツ 15・16・18 遺跡』北文保調報 3
 - 19 北海道文化財保護協会 1997 『千歳市オサツ 15 遺跡 (2)』北文保調報 6
 - 20 北海道文化財保護協会 1996 『千歳市ボンオサツ 遺跡・ケネフチ 5 遺跡』北文保調報 2
 - 21 北海道文化財保護協会 1997 『千歳市ボンオサツ 遺跡 (2)・オサツ 18 遺跡 (2)・ケネフチ 5 遺跡 (2)』北文保調報 5
 - 22 Howard A. MacCord 1960 『CULTURAL SEQUENCES IN HOKKAIDO』
[Proceedings of the United State National Museum] 3443
 - 23 大場利夫・石川徹 1966 『恵庭遺跡』恵庭市教委
 - 24 恵庭市教委 1992 『ユカンボシ E 3 遺跡 A 地点・ユカンボシ E 8 遺跡 B 地点』
 - 25 恵庭市教委 1992 『ユカンボシ E 3 遺跡 B 地点』
 - 26 恵庭市教委 1993 『ユカンボシ E 3 遺跡・ユカンボシ E 9 遺跡』
 - 27 (財)北海道埋蔵文化財センター 1992 『恵庭市ユカンボシ E 4 遺跡』北埋調報 75
 - 28 北海道教育庁文化課 1996 『市町村における発掘調査の概要 (平成 7 年度)』
 - 29 (財)北海道埋蔵文化財センター 1993 『恵庭市ユカンボシ E 5 遺跡』北埋調報 81
 - 30 恵庭市教委 1994 『ユカンボシ E 5 遺跡 低地面における調査』
 - 31 北海道教育庁文化課 1997 『市町村における発掘調査の概要 (平成 8 年度)』
 - 32 恵庭市教委 1995 『ユカンボシ E 7 遺跡』
 - 33 北海道考古学会 1996 『1996 年度 遺跡調査報告会資料集』
 - 34 恵庭市教委 1989 『ユカンボシ E 8 遺跡』
 - 35 恵庭市教委 1996 『ユカンボシ E 9 遺跡 B 地点』
 - 36 恵庭市教委 1997 『ユカンボシ E 10 遺跡』
 - 37 恵庭市教委 1996 『シマコツナイ E 1 遺跡』
 - 38 恵庭市教委 1987 『カリンバ 2 遺跡』
 - 39 恵庭市教委 1989 『カリンバ 2 遺跡 第 I 地点における調査』
 - 40 木村英明 1985 『いわゆる北大式土器とその文化に関する基礎的研究 (予報)』
 - 41 恵庭市教委 1997 『カリンバ 4 遺跡』
- * 千歳市教委 1979 『千歳市における埋蔵文化財 (上)』市文調報 V
 * 千歳市教委 1994 『千歳市埋蔵文化財包蔵地分布図』
 * 北海道教育委員会生涯学習部文化課 埋蔵文化財包蔵地カード
 遺跡 No は包蔵地カードの登録番号による

カリンバ 2 遺跡などである。建物跡が検出されているのはユカンボシ C 2 遺跡、ユカンボシ C 4 遺跡、ユカンボシ C 5 遺跡、カリンバ 2 遺跡である。

オサツ 2 遺跡からは鉋が、ユカンボシ C 9 遺跡では鉄鍋、山刀、曲鎌などが出土している。ユカンボシ E 8 遺跡からは内耳鉄鍋、集石の出土が報告してある。カリンバ 4 遺跡では建物を推測させる小柱穴が検出されている。ここからは刀、鉋、刀子などの鉄製品が出土している。ユカンボシ E 5 遺跡では小土壌に伏せた鉄鍋が出土しているが、これは開拓期の遺物の可能性もあるとのことである。

オサツ 2 遺跡の低湿部からは、板綴船舟敷部、櫂、中柄、篋、串、漆椀、下駄、立杭、樹皮製品などの木製遺物が多量に検出されている。オサツ 14 遺跡では、焼土と建物跡が検出され内耳鉄鍋、串、割り材などの木製遺物も出土している。

(西田 茂)

II 調査の方法、遺物の分類

1 調査の方法

発掘区の設定 (図 II-1)

現地調査の基本図は、北海道横断自動車道工事予定図1,000分の1を使用した。発掘区の設定は、以下のおこなった。

まず、工事予定中央線の STA 69、STA 70をそれぞれ M-10、M-30とする。これを基軸線として5mの方眼を設定する。この5mの方眼は、北西端の交点のアルファベットと数字の組み合わせで呼称される(例：D-62)。さらにこの5mの方眼は2.5m四方に分割されて小発掘区となり、反時計まわりに、北西端から a、b、c、d と呼ぶ(例：D-62-b)。

この方眼の平面直角座標は、第Ⅶ系でつぎの通りである。

STA-69 (M-10) : X = -124295.5363、Y = -49502.1207

STA-70 (M-30) : X = -124332.6406、Y = -49409.2737

調査予定地の遺跡内容の推定 (図 II-1、III-1・2)

試掘調査によって推定される遺跡内容は以下のようなものであった。

a : 調査区域は、東と西二つの地区に分かれている。b : 広い調査範囲は、低湿部を多く含んでいる。c : 台地部分とでも称すべき高まりでは農耕地として遺物包含層が削平を受けたところもある。d : ほぼ全面に樽前 a 火山灰がみられる。その厚さは30cmほどである。e : 低湿部では木製遺物の検出が予想される。その時期はアイヌ文化期、あるいは擦文文化期であろう。f : また、縄文時代後期の土器破片も出土している。

調査計画と結果

広い調査範囲であるから、発掘は2か年あるいは3か年に渡るものとなるであろう。このような長期の発掘において良好な調査記録を残すには、より周到的な計画が必要となる。とりわけ調査範囲の大半は低湿部であり、湧水や滲水が予想される。結果的には、除水、排水にはウエル・ポイント法で対処し、安全確保とともに、遺物の検出にあたっては台地上の発掘に近い形で進行できた。

2か年の調査によってその8割(計画面積比)が終了したことになる。

1996年の発掘調査 (日誌抄)

5月29日(水)30日(木)東の地区で建設用重機を使っての表土の除去作業を行う。現表土、盛り土、旧表土、樽前 a 火山灰などを剥ぎ捨てる。

6月5日(水)高速道路工事施工業者(大林組、東洋建設共同企業体)と現地で具体的な打合せを行う。調査事務所、現地整理作業室などの設置場所。電気、水道の導配線、排水の処理、発掘調査の廃土の扱い方法、ベルトコンベアの設置と移動、電源の確保など。

6月17日(月)~21日(金)鋼矢板の設置確認。木製遺物整理作業室の砂利敷、排水施設などの整備。カマ場の確保、ベルトコンベア、排水ポンプなどの設置をおこなう(図 II-2)。

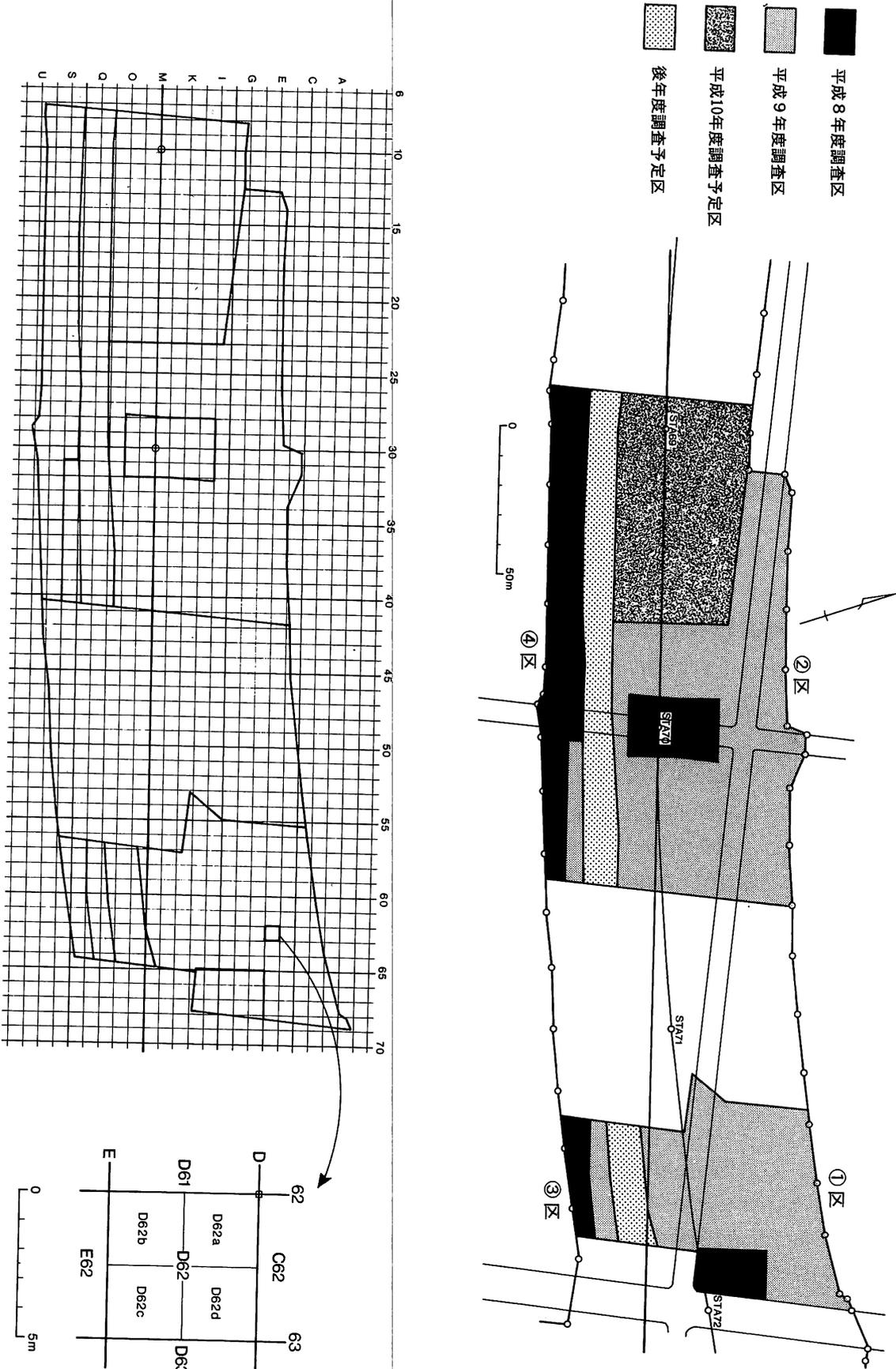
6月24日(月)~29日(土)発掘用器材、諸物品の搬入。発掘前の写真撮影、地形測量、安全確認などのうち、作業員の移動を行い発掘調査を始める。木製遺物、土器、石器の出土がはじまる。土層、遺物包含層、火山灰の層序関係の把握に努める。本格的な調査になる。

7月1日(月)~6日(土)降雨溜水のための排水溝を作り発掘を行う。0B層、I B層、II B層を順次掘り下げ、自然倒木の判別、廃棄を行う。0B層、I B層、II B層の遺物取上げを始める。

7月8日(月)~13日(土)東の地区の調査が終了に近づく。西の地区の準備作業を行う。

7月22日(月)~27日(土)東の地区の調査を終了し、西の地区を掘り始める。

1 調査の方法



図II-1 年度別調査区図・グリッド設定図

7月29日(月)～8月3日(土)30日の豪雨のために調査区域が水没する。木製遺物は製品とみなせるものが多く出土し始める。また、立杭列の検出は、建物跡を推定できる。

8月5日(月)～9日(金)木製遺物の写真撮影、実測、取上げ、水洗いを順次行う。曲げ物の取上げ方法を検討し、発泡ウレタンで周囲を固めることにする。お盆休みに備えての保全作業を行う。

8月19日(月)～24日(土)調査再開。22日からの雨で調査区域水没。23日の早朝が激しい。「…夜半からの豪雨でI-31区の23号道路沿い側溝の土管や暗渠連結部から水漏れが始まった(6:30)。オランダの少年状態で水止めをしたが、効果なく。水量が増加し側溝決壊のおそれがあったため、土嚢を積む(～7:30)。その間に共同企業体へ連絡(7:00)。土嚢を積み重機で土砂を投入し、一段落(9:20)…」

8月26日(月)～9月28日(土)木製遺物の出土が多くなる。取上げを順次進める。

9月31日(月)～10月5日(土)付替道路の工事関連で、調査範囲の拡大検討を求められ、了解する。

10月7日(月)～12日(土)木製遺物の検出、取上げを順次進める。範囲拡大区域の調査を始める。

10月14日(月)～19日(土)木製遺物のパック詰め作業を本格化し、撤収準備を始める。

10月21日(月)～26日(土)発掘作業を順次縮小し、撤収のための作業を行う。

10月28日(月)～31日(木)遺物を札幌の整理作業場所へ搬送する。物品、器材を整理し、次年度調査計画のあらまし検討を終えて、札幌に撤収する。

1997年の発掘調査(日誌抄)

4月のうちに、調査区域を取り囲むように鋼矢板を打ち並べ、ウェルポイント、排水ポンプ、ベルトコンベアなどを設置する。東地区の一部では建設用重機を使って、表土の除去を行う(図Ⅱ-2)。

5月6日(火)7日(水)札幌を出発してユカンボシC15遺跡に到着。調査事務所内外の整備を行う。

5月8日(木)人力による表土の除去作業など、発掘をはじめる。調査員7名、作業員129名である。これでも作業員不足なので随時採用ということにする。

5月10日(土)東地区、西地区を同時に発掘。東地区にて竪穴住居の凹地から「送り場」を確認する。

5月12日(月)～17日(土)鉄製品、木製遺物、土器、石器等の多量出土が始まる。木製品では中柄、制裁棒、漆椀、下駄も出土する。東地区では住居跡、土壌、焼土などの検出が相次ぐ。17日(土)朝8:50、調査区内の仮設電柱に落雷があり、電線が切断され停電となる。FAXが火を噴き電話不通となる。

5月19日(月)～24日(土)東地区では遺構、包含層の調査が進展する。擦文時代の土壌墓、縄文時代のTピットの検出が相次ぐ。多数の攪乱の小土壌は番犬の繋ぎ杭の跡と理解する。

5月27日(火)北海道教育委員会文化課(調査員:種市、藤原)による範囲確認のための(追加)試掘調査が行なわれる。今回の区域での調査範囲拡大は不要との結論である。

5月28日(水)のちに周溝のある墓(X-1)と呼ぶことになる遺構の調査方法の検討を始める。

5月29日(木)西地区で重機を使っての表土除去を開始する。とりあえずは東側から行う。

6月11日(水)市道南23号を切り替え、アスファルト、路盤砂利などを除去して、発掘を始める。

6月24日(火)周溝のある墓の調査に着手する。北海道教育委員会文化課(調査員:大沼)による範囲確認のための(追加)試掘調査が行なわれる。今回の区域での調査範囲拡大は120㎡である。

6月30日(月)西地区の市道部分に竪穴住居の凹みを確認する。空中写真による地形測量を検討する。

7月10日(木)周溝のある墓などの空中写真撮影。15日(火)高所作業車を使っての写真撮影。

7月18日(金)東地区の調査を終了し、以後西地区の調査を行う。西地区は木製遺物が多量である。

8月西地区の低湿部では木製遺物が多量に出土。台地部では住居跡、土壌などの検出が相次ぐ。

9月低湿部では木製遺物がさらに多量に出土。船材が目につく。台地部では遺構の検出が相次ぐ。

1 調査の方法

10月前半で当初計画範囲の発掘を終了する。後半は遺物整理、物品、機材の整理、遺物搬送を行う次年度の調査計画のあらましを検討して、月末に札幌に撤収する。

2か年の調査経過の概略は以上のものであった。東地区、西地区ともにそれぞれ調査区域が2か所づつあり、準備、発掘、最終確認、後始末の繰り返しであった。

発掘調査の進行と手順 東地区、西地区ともに広い調査予定地であるから遺構・遺物の全体的な濃淡を早めに把握する必要がある。はじめ5m四方の発掘区を飛び飛びに四分の1程度発掘した(25%調査)。これをもとに遺構・遺物の分布状況を推定し全体の調査に取りかかった。

低湿部ではI B層とII B層とは間層(Ta-c層)によって区別できるので分層発掘とした。さらに遺物包含層であるI B層とII B層の発掘はそれぞれに細かく分層しておこなった。Ta-c層の希薄な台地部では、I B層にTa-cが混入することによって分層しえた。これらの調査は人力による手掘り作業で、発掘区ごとにスコップ、ツルハシ、移植ゴテ、竹ヘラなどを用いて遺物の多寡、土層の変化をみきわめながらおこなった(包含層調査)。

遺構の調査 25%調査、包含層調査時に住居跡、土壌などを推定できたときは、その平面形の長軸と短軸方向に土層観察用の土手を残して掘り下げた。想定される床面の検出は、土層観察用の土手に接して小さな先行溝を掘るなどして、慎重に行った。遺物は、出土の状況を詳細に記録化してから取り上げた。時期判定、遺構の判断は、Ta-a、Ta-cなどの火山灰混入の有無でなしたものもある。

遺物の取り上げ 土器、石器等の遺物は出土の状況に応じて、位置や土層を記録してから発掘区ごとに取り上げた。とりわけ本来的な遺物包含層と考えられるI B層、II B層・II B下層から検出される遺物については、出土状態の詳細な記録化をおこなった。集中的に出土する土器破片は、破損の状況を十分に検討して接合・復元作業を考慮した取上げにつとめた。微細遺物の密集部分では、水洗いによって取り上げたところもある。

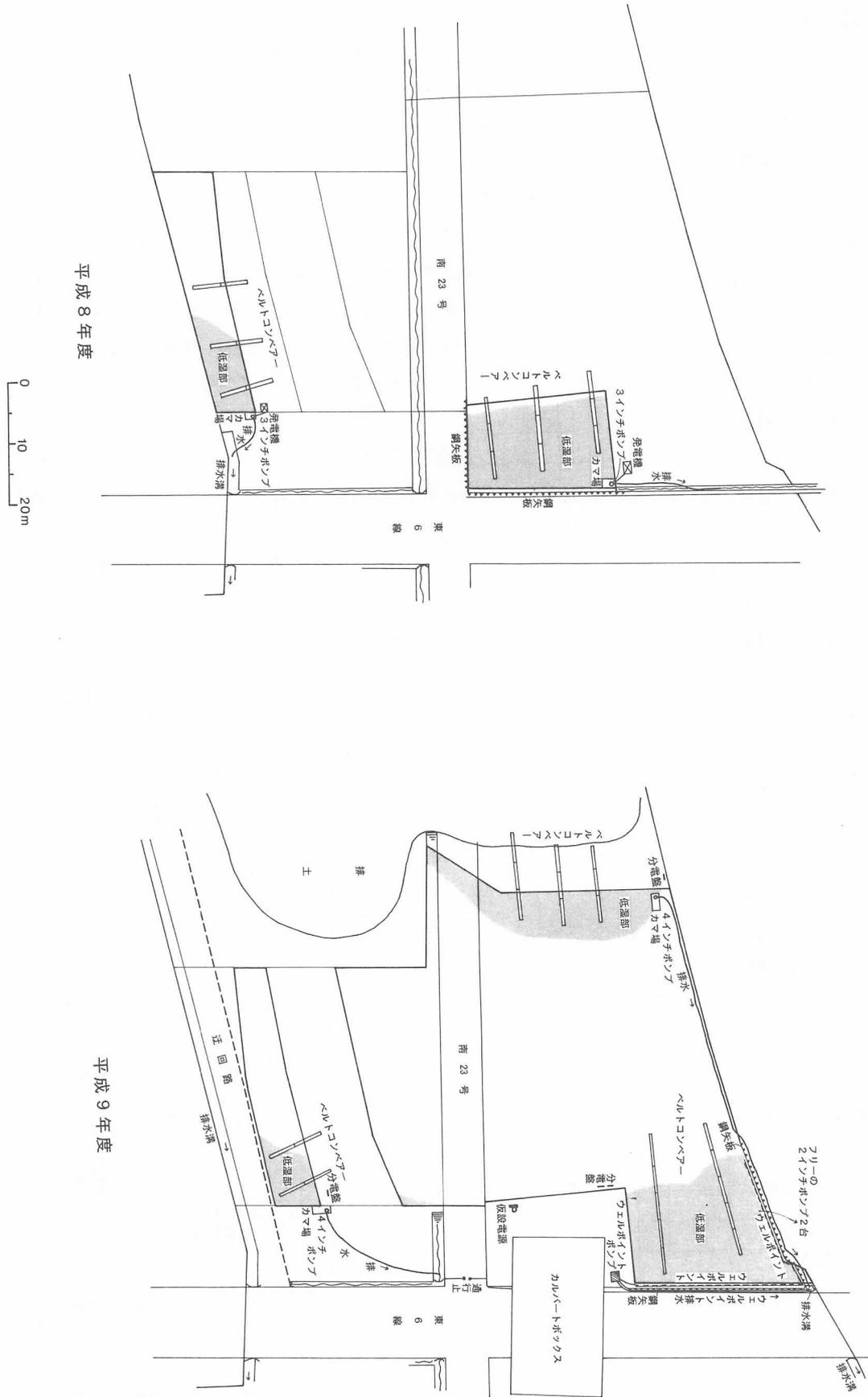
En-a層も手掘り作業でいくつか試掘溝を掘ったが、この土層からは遺物が検出されなかった。さらに重機を使ってEn-P層の火山灰層を除去した後、手掘り作業でF-22・23・24に試掘溝をもうけたが、この土層からは遺物が検出されなかった(旧石器時代の遺物確認調査)。

木製遺物の発掘、取上げ 発掘作業はスコップ、移植ゴテ、竹ヘラなどを用い、慎重を期した。木製遺物は乾燥による変形、変質が著しいので、これを防ぐために検出の後、速やかに水を含んだ晒布で保全しさらにビニールで蔽った。出土状態、位置の記録化の後に取上げるのは土器、石器等と同じである。取上げたものは、簡易プールや遺物収納箱などで水に浸けて、変形、変質を防いでいる。

木製品の保存処理は美々8遺跡低湿部での方法と同じである。詳細は次回以降に記す予定である。

遺物整理の方法 出土した遺物は、野外作業と並行して現地で水洗・注記作業をおこなった。小片あるいは微細なものを除いて、大多数の遺物には発掘区と出土層、および取上げ番号を注記した。現地では遺物収集帳点検・補正(遺物台帳作成)、大まかな遺物の分類までおこなった。冬期の室内整理作業で、土器・木製品の接合・復元作業、石器や黒曜石剥片類の接合、土器・石器・木製遺物の実測・製図、集計およびそのほかの記録類の整理をおこなった。

土器の接合・復元作業においては、破片個々の出土位置を明記することによって、土器の破損状況を明らかにすることにつとめた。遺跡は縄文時代、続縄文時代、擦文文化期、アイヌ文化期において繰り返し人が利用する場所であったが、各時期における占拠が異なっており、さらにTa-a火山灰の厚い堆積があり耕作等による攪乱を免れたことも幸いして、遺構・遺物の残存状態が比較的良好であった。このために、土器破損の様子を把握できたものが多い。したがって、いくつかの小地域において住居跡、土壌と多量の土器との相互の関係に関して、明確な結論が得られたものがある。(西田)



図II-2 東地区低湿度部調査機材配置図

2 土層の区分

2. 土層の区分

調査にあたっての土層区分は、基本的には東地区・西地区とも通覧できるものとした。さらに台地と低湿部の有機的連続性が明確なものとなるよう意識した。図Ⅱ-3はこれを模式化した柱状図である。次に土層図の位置関係を示し、その特徴を示す。

図Ⅱ-4 土層図(1)

ア-ア'-イ-イ'は西側低湿部と台地部肩のEライン東西セクション。ポイント「イ」でずれているのは、低湿部セクションの良好な面を選択したためである。Ta-aと攪乱土除去後の図。I B 3層中にB-Tmが断続的に確認できる。Ta-cは確認できず、II黒層相当は砂と泥の互層である。

ウ-ウ'は台地部から東側低湿部のEライン東西セクション。平成8年度調査時の図に平成9年度調査の修正を加えた。I B 3層中にB-Tmがほぼ連続して確認できる。Ta-cはc₂しか確認できないが、腐植土としてのII黒層や、低湿部と台地のI黒層連続性・分層が見てとれる。

図Ⅱ-5 土層図(2)と図Ⅱ-6 土層図(3)

2枚5本の図連続でア-ア'。東側低湿部の調査範囲東壁のセクション。平成8年度と9年度がEラインで接合。9年度調査の修正を加えた、Ta-a除去後の図。I B 3層中にB-Tmがほぼ連続して確認できる。Ta-cはc₁・c₂とその間層腐植土が確認できる。腐植土や粘土化した状態のII黒層が観察できる。I B 3層とI B 4層の間の時期にあった流路の跡やそこへの泥と砂の堆積、倒木痕も確認できる。II黒層対応の古い倒木痕もみられる。

図Ⅱ-7 土層図(4)

ア-ア'は台地中央部の61ラインG-I間の南北セクション。台地の標準的な土層である。

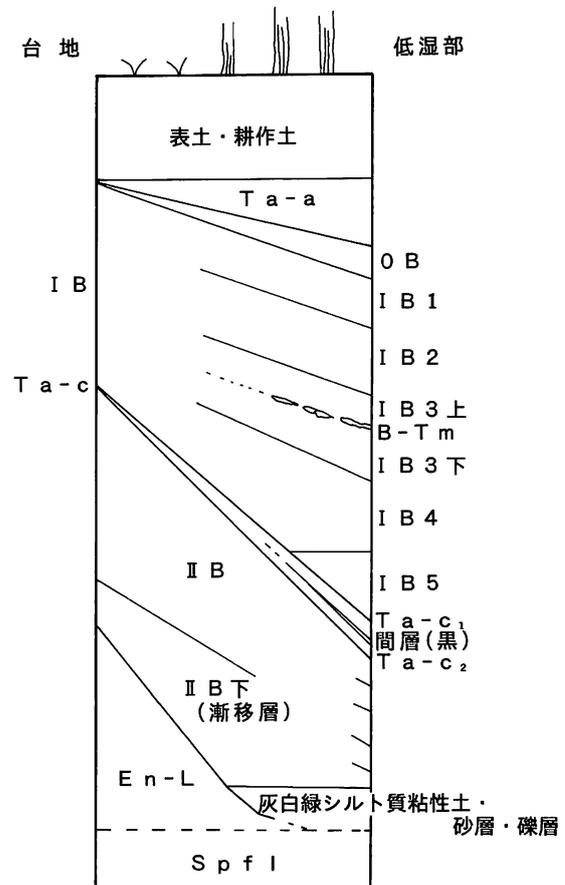
イ-イ'は西側低湿部の南北セクションの一部である。調査範囲と合わないのは、東西セクションと直交した面で図化したためである。

I B 3層中にはB-Tmがほぼ連続して確認できる。やはり、Ta-cは確認できず、I B 4層以下とII黒層相当は砂と泥の互層である。

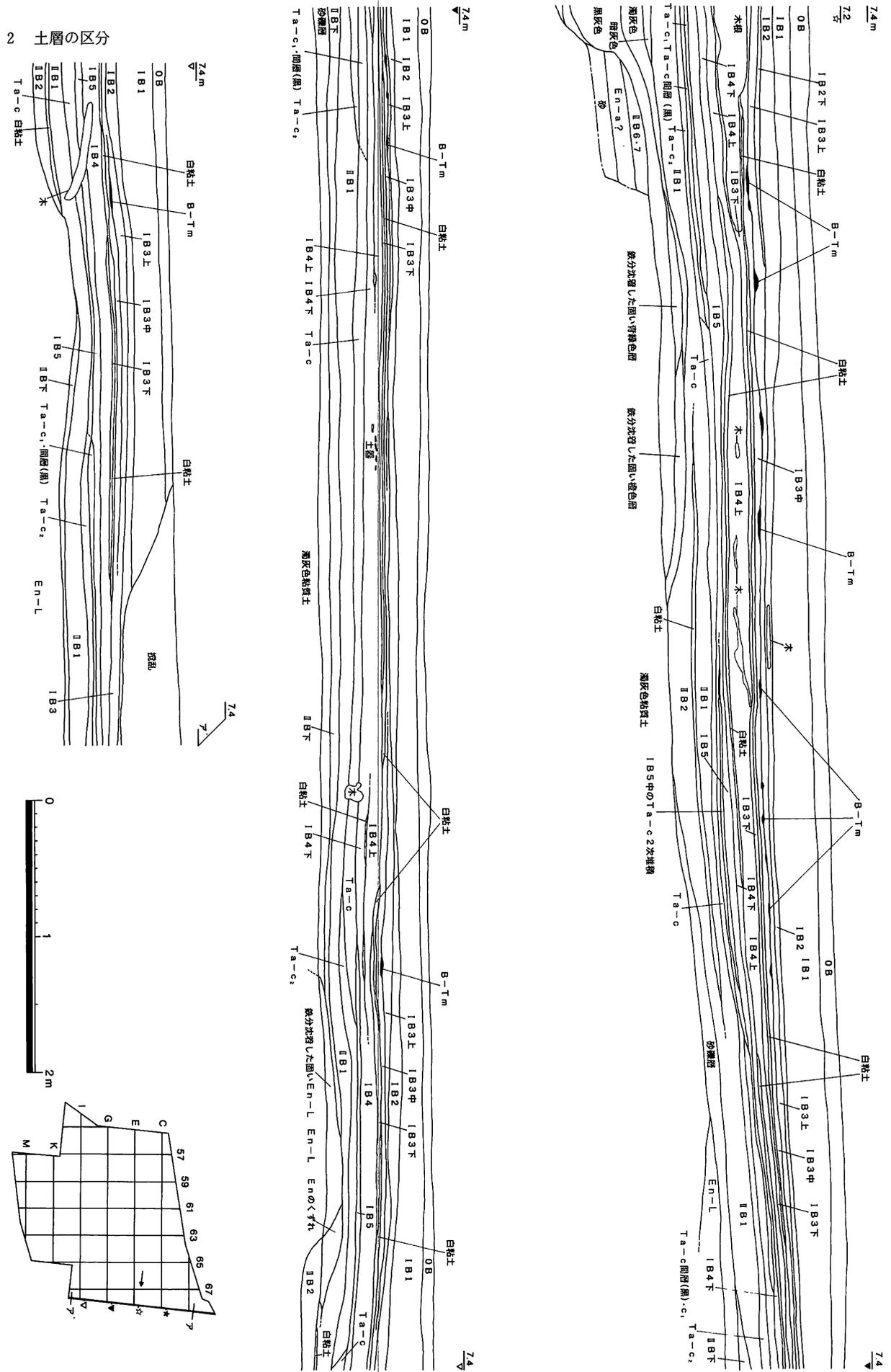
図Ⅱ-8 土層図(5)

ア-ア'は南側低湿部の調査範囲南壁のセクションの一部。平成8年度調査時の図に平成9年度調査の修正を加えた。I B 3層中にB-Tmが断続的に確認できる。II黒層は薄く粘土化している。

イ-イ'は南側低湿部の調査範囲東壁のセクションの一部。上層は耕作攪乱を受けている。B-Tmは確認できない。



図Ⅱ-3 土層模式図



図二-5 土層図(2)

2 土層の区分

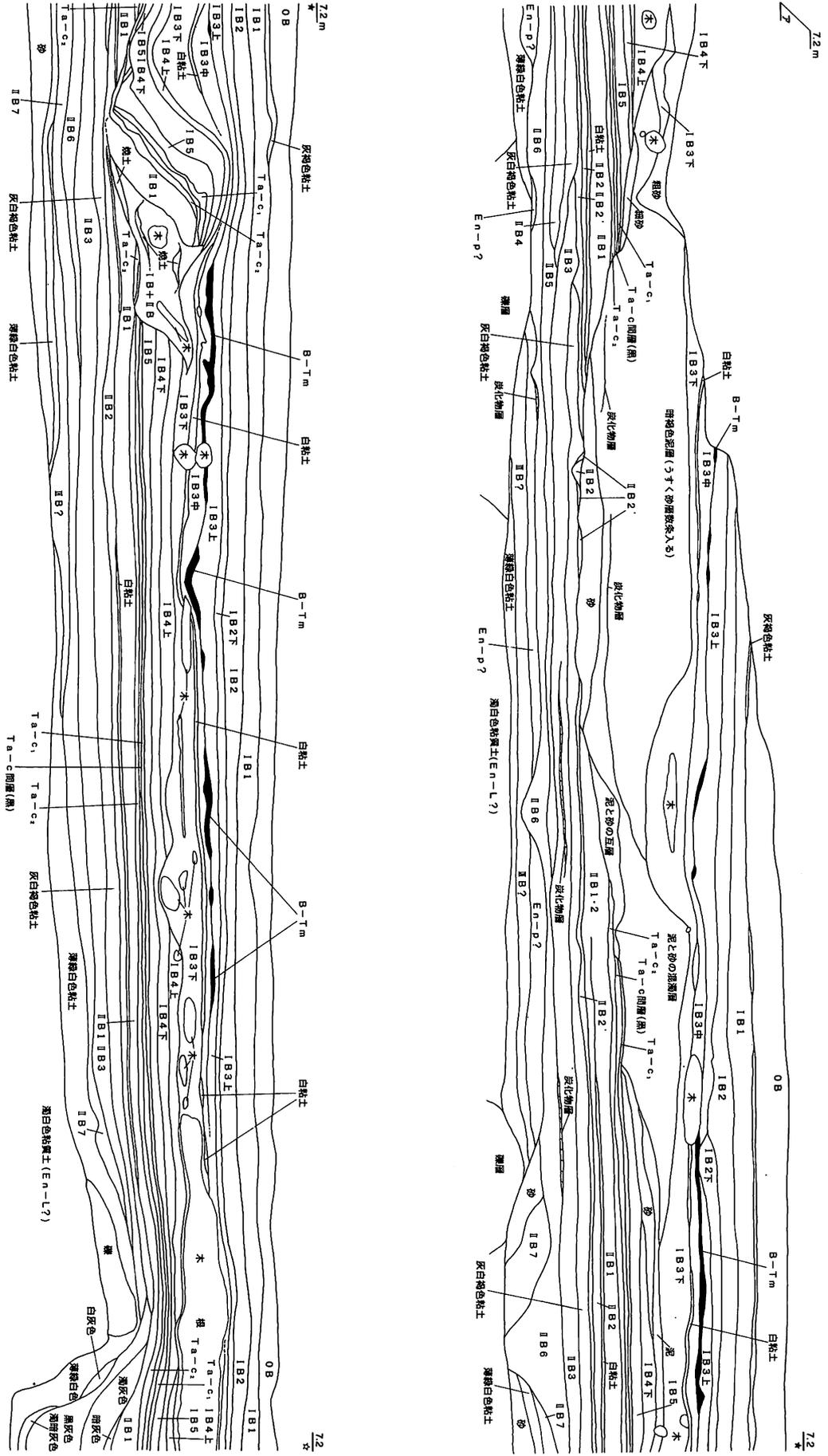
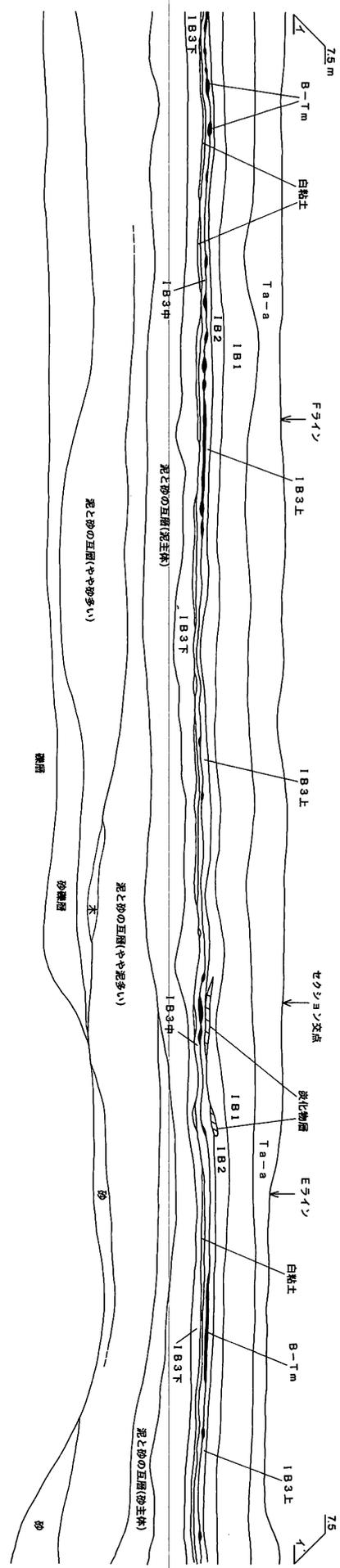
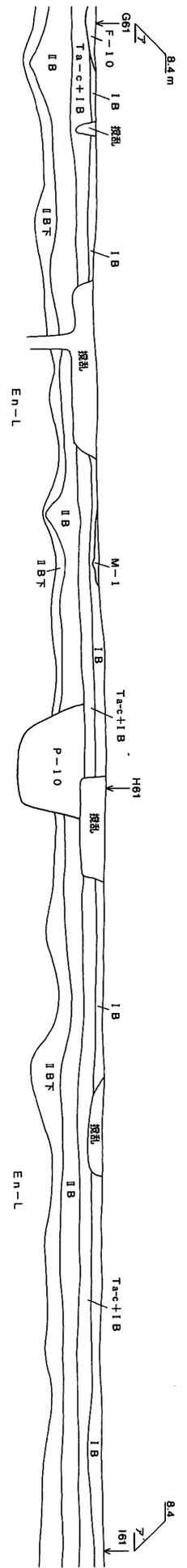
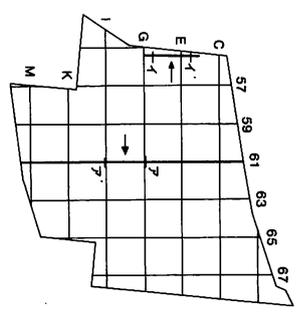


図 II-6 土層図(3)

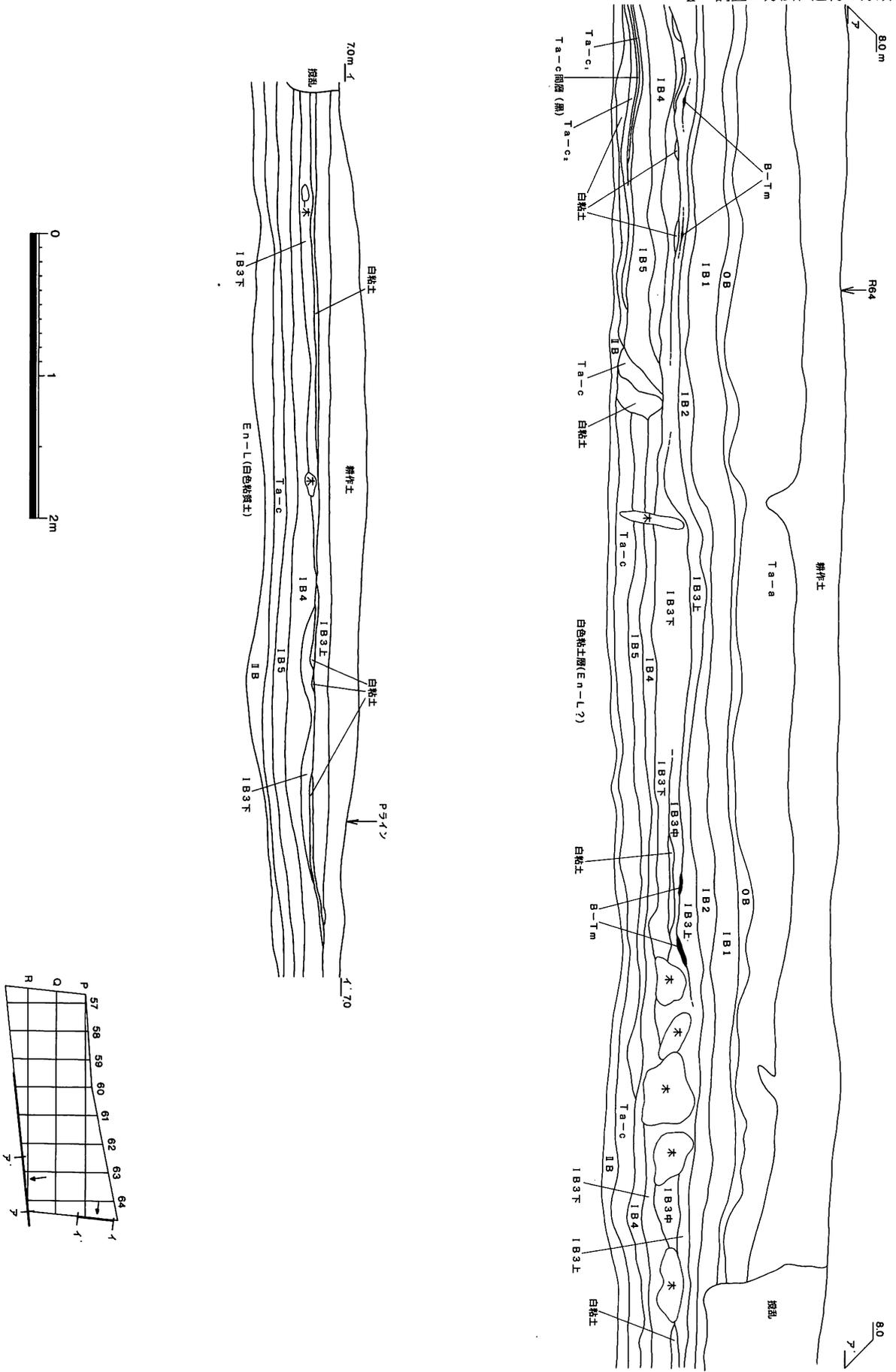


2 土層の区分



図二-7 土層図(4)

II 調査の方法、遺物の分類



図II-8 土層図(5)

2 土層の区分

以下、当報告分である東地区の細分した層の説明を記す。全体的な色の傾向は、口絵-2を参照願いたい。

耕作土：台地上では耕作はⅠ黒層まで、部分的にはⅡ黒層までおよんでいる。西側の低湿部のように搬入土が混ぜられている可能性もある。

旧表土：耕作がTa-a上面まで達しているところが多く、ほとんど残存していない。本来は開拓が入るまでTa-aの上に堆積していた腐植土層で、Ⅳ章で遺構を報告している。

Ta-a：樽前a降下軽石層。1739年（元文4年7月）噴出。良好な残存部で層厚30～40cm。

0B：紫がかった褐色泥炭層でおもに低湿部に形成。層厚10～20cm。新千歳空港内の美々8遺跡低湿部で、ⅠB層よりも上位の泥炭層としてTa-aとTa-b（1667年噴出、当遺跡では確認されていない）の間に確認されたのが最初の命名である。近世アイヌ文化期の包含層で、当遺跡では木製品が若干出土する。

ⅠB：台地上では分層されず、層厚10～15cmの黒色土層となる。低湿部のⅠB1～3に対応する。

ⅠB1：黒褐色泥炭層。腐植進行中の層。層厚15～30cmで均一に分層されず、低湿部全域に堆積する。アイヌ文化期にかけての主要包含層で、自然木とともに大量の木製品が検出される。

ⅠB2：濁暗灰褐色泥炭層。比較的腐植の進んだ層。層厚10～20cmでほぼ均一に低湿部全域に堆積する。擦文文化期後期からアイヌ文化期にかけての主要包含層で、自然木とともに大量の木製品が検出される。

ⅠB2下：東側低湿部セクションの中央部分で、上層より腐植未発達層の確認できた。

ⅠB3：濁暗褐色～暗褐色泥炭層。低湿部全域に堆積する。B-Tmや白粘土が見られない部分では、わずかな色と植物質のちがいで分層できる場所とそうではない部分とがある。大きな木根や自然木が多く、木製品も出土する。擦文文化期相当層。

ⅠB3上：B-Tmより上位のⅠB3層。やや暗い色で、下層よりは腐植発達。

B-Tm：白頭山-苦小牧火山灰。灰白色で粉状。低湿部や擦文文化期の遺構覆土に層厚0～2cmで断続的に分布する。10世紀中頃の降下。これでⅠB3の上中および上下を分層する。

ⅠB3中：B-Tmと白粘土層に挟まれた層。やや明るい色で、上層より腐植未発達。

白粘土：低湿部でⅠB3中下層の間やⅠB4上下層の間、ⅡB1とⅡB2層の間にある、層厚0～4cmの粘質土層。Spfl（支笏軽石流堆積物）やEn-a（恵庭a降下軽石層）の水成二次堆積と思われる。

ⅠB3下：B-Tmより下位のⅠB3層。白粘土層のある部分では、中層とに分層できる。やや茶色がかかった層で、ⅠB3上層より腐植未発達。

ⅠB4：濁暗褐～濁黒褐色泥炭層。部分的には腐植の発達した腐植土層。白粘土層や色の違いで、上下に分層できることが多い。大きな木根や自然木が多く、木製品も出土する。縄文時代～擦文文化期初頭相当層。

ⅠB4上：濁暗褐色。下層よりも腐植未発達で、部分的に砂質のことがある。

ⅠB4下：濁黒褐色。上層よりもやや腐植が発達し、黒味がち。

ⅠB5：黒褐色腐植土層。部分的には腐植未発達の泥炭層で、Ta-cと混合する部分もある。確認できないところもある。少量の木製品や土器が出土する。縄文時代晩期～縄文時代の層。

ⅠB+Ta-c：台地上ではTa-cが明確な層をなしておらず、Ⅰ黒層の一部と混合している。層厚10～20cmの黒色土層で、低湿部のⅠB4・5層に対応するものであろう。

Ta-c：樽前c降下軽石・岩片層。2,000～2,500 B.P. 噴出。低湿部の浅い部分や斜面では1枚

で確認される。 c_1 と c_2 の混合の場合と c_2 主体のことがある。

Ta - c_1 : 樽前 c_1 降下軽石層。層厚 1 ~ 3 cm で出現し、暗灰色を呈する。

間層 (黒) : Ta- c_1 と c_2 の間の黒色腐植土で、層厚 1 ~ 2 cm。堆積には約 50 年かかると推定される。従って、 c_1 と c_2 の時間差も約 50 年と考えられる。遺物は確認できていない。

Ta - c_2 : 樽前 c_2 降下岩片層。層厚 1 ~ 10 cm で、一部直上層の黒色土と混合する部分もある。茶褐色 ~ 暗褐色を呈する。

II B : Ta-c 下の黒褐色腐植土で、台地上および低湿部の浅い部分や斜面は II B 下とにしか分層されない。層厚 10 ~ 25 cm。縄文時代の包含層で、低湿部の II B 1 ~ 3 層に相当する。

II B 下 : 漸移層で暗褐 ~ 暗黄褐色を呈す。層厚 10 ~ 25 cm。遺物はほとんどみられない。分層された II B 4 層以下に対応する。

II B 1 : 黒 ~ 黒灰色土。15 ~ 25 cm のほぼ均一な層厚を持つ。水の影響下でより粘質な部分と腐植土的なところとがある。縄文時代の主要包含層で、土器・石器や少量の木を含む。

II B 2 : 濁暗灰色粘質土で層厚 5 ~ 15 cm。少量の縄文土器や木を含む。

II B 3 : 黒灰色粘質土で層厚 5 ~ 20 cm。少量の縄文土器を含む。炭化物層が入る。以下の層からの遺物の出土はない。

II B 4 : 濁暗灰色粘質土で、北側でのみ確認できる。

II B 5 : 濁黒灰色粘質土で、北寄りでのみ確認できる。

II B 6 : 黒灰色粘質土で、層厚不均一。小流路に溜ったように見受けられる。

II B 7 : 濁暗灰 ~ 濁灰色粘質土で、En-a に近い。

泥と砂の互層等 : 西側低湿部では、西沖合に行くに従い、II B 層以下、I B 4 層以下が水流でなくなり、かわりに河川堆積と思われる泥と砂の互層がみられる。両者の混合比や色合いで幾層かに分層できる。下層部では磨滅した縄文土器等が出土することからも II B 相当層ととらえられる。

また、東側低湿部でも I B 4 層以下 II B 1・2 層までをえぐるような流路があり、その泥と砂の溜りも河川堆積と思われる。続縄文後半から擦文文化期前半に相当する。

砂・砂層・砂礫層・礫層 : 水流があったと思われる箇所では、基盤層が En-a 系ではなく、径 1 mm ほどの砂質や径 3 cm ほどの礫、あるいはその混合土となる。灰 ~ 灰緑色を呈す。

En - P : En-a (恵庭 a 降下軽石層) の未風化軽石礫層。黄褐 ~ 明黄褐色。低湿部ではさらに脱色し、白っぽい。

En - L : En-a (恵庭 a 降下軽石層) 起源のローム層。黄褐 ~ 濁黄褐色。低湿部では脱色し、白っぽかったり腐植土混じりになる部分もある。

鉄分沈着した固い橙色層 or 青緑色層 or En - L 等 : En-L 層に水の影響で鉄分が沈着し、岩盤のように固化した層。場所や高低差で発色や固さ、厚さが違う。

…… (白 or 灰色系) 粘土・粘質土 : En-L 層が水の影響で脱色、粘土化した層。色や水分状態などが場所や高低差で違う。Spfl の水成二次堆積の可能性もある。

III B ? : II B 2 ~ 7 層と同じく、やや黒味がかかる粘質土。En-a 系の層よりも下層にあるため、III とした。

炭化物層 : 各層中にみられる厚さ 1 cm 以上の炭化物層を図示した。 (三浦)

3. 遺物の分類

(1) 土器の分類

基本的な分類は、昭和51年度の『美沢川流域の遺跡群Ⅰ』に準拠し、今回はこれに修正・加筆を加えながら使用した。

I群 縄文時代早期に属する土器群を本群とする。

a類：貝殻腹縁圧痕文、条痕文のある土器群。

b類：縄文、撚糸文、絡条体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文のある土器群。

b 1類：東釧路Ⅱ・Ⅲ式に相当するもの。

b 2類：コッタロ式に相当するもの。

b 3類：中茶路式に相当するもの。

b 4類：東釧路Ⅳ式に相当するもの。

今年度の調査では早期は唯一、Ⅱ黒層の遺構P-18から東釧路Ⅳ式が1点出土している。

Ⅱ群 縄文時代前期に属する土器群を本群とする。

a類：胎土に繊維を含み厚手で縄文が施された丸底・尖底の土器群。

a 1類：網文、組紐回転文、羽状縄文が施された土器群。

a 2類：静内中野式に相当するもの。

b類：円筒土器下層式、大麻Ⅴ式に相当するもの。

今年度の調査では出土していない。

Ⅲ群 縄文時代中期に属する土器群を本群とする。

a類：円筒土器上層式、萩ヶ岡1式、萩ヶ岡2式に相当するもの。

b類：萩ヶ岡3式以降の土器群。

b 1類：天神山式に相当するもの。

b 2類：柏木川式に相当するもの。

b 3類：北筒式（トコロ6類）、ノダツプⅡ式、煉瓦台式に相当するもの。

今年度の調査においてa類（萩ヶ岡1式、萩ヶ岡2式）は本群の65.5%を占め、Ⅱ黒層出土の土器の主体となる型式群である。b類ではb 1・b 2類が出土していない。なお、a類については成果と問題点で詳述する。

Ⅳ群 縄文時代後期に属する土器群を本群とする。

a類：余市式～入江式に相当するもの。

b類：舶泊上層～エリモB式に相当するもの。

c類：堂林式～御殿山式に相当するもの。

今年度の調査において、余市式、堂林式が多く出土し、入江式、ウサクマイC式が少量出土している。

Ⅴ群 縄文時代晩期に属する土器群を本群とする。

a類：大洞B式、大洞B-C式に相当するもの。

b類：大洞C₁式、大洞C₂式に相当するもの。

c類：大洞A式、大洞A'式に相当するもの。

今年度の調査において、a～c類の在り系土器と亀ヶ岡系土器が出土している。

VI群 続縄文時代に属する土器群を本群とする。

a類：大狩部式、江別太1式・2式、江別太遺跡最下層の土器群、後北式に並行しない恵山式（南川Ⅲ群・アヨロ2類以前）に相当するもの。

b類：後北A式、後北B式、後北C₁式、後北式に並行する恵山式（南川Ⅳ群・アヨロ3類）に相当するもの。

c類：後北C₂・D式、北大I式に相当するもの。

d類：北大II式、北大III式に相当するもの。

今年度の調査において、b・c類が出土しており、台地部で後北A式、後北B式が多く出土している。なお、b類はF-41からは恵山系（アヨロ3a並行）の深鉢が出土している。c類は後北C₂・D式末期～北大I式の深鉢・片口が出土し、有文と無文の2系統がある。c類については成果と問題点で詳述する。d類については、石狩市ワッカオイC地点遺跡1・2・3号墓（1975年）、恵庭市ユカンボシE5遺跡GP-1（1992年）、恵庭市ユカンボシE7遺跡（1996）で北大II式と無文の北大III式の共伴例があることからd類を設定した。

VII群 擦文文化期に属する土器群を本群とする。

a類：十勝茂寄式に相当するもの。

b類：千歳市美々8遺跡における佐藤和雄分類（1989年）のⅡ・Ⅲ・Ⅳに相当するもの。

c類：佐藤和雄分類Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷに相当するもの。

d類：佐藤和雄分類Ⅸ・Ⅹに相当するもの。

a類は沈線文の北大III式と無文の北大III式。今年度の調査の土坑墓・周溝のある墓の土器はb類である。c・d類が少量出土している。

(2) 土製品の分類

今年度の調査において、I黒層では紡錘車、ファイゴの羽口が出土し、II黒層では再生土製円盤、三角土製品などを再生土製品として扱っている。ほかには焼成粘土塊、スタンプ形土製品などがある。

（鈴木）

参考文献

石狩町教育委員会『Wakkaoi』（1975）

（財）北海道埋蔵文化財センター『美沢川流域の遺跡群Ⅷ』（1989）

（財）北海道埋蔵文化財センター『ユカンボシE5遺跡』（1992）

（財）北海道埋蔵文化財センター『調査年報9』（1996）

3 土器・土製品の分類

(3) 石器・石製品の分類

器種別の大分類にとどめ、記号等による細分はおこなっていない。

剥片石器には、石鏃、石槍・ナイフ（ポイント・ナイフ）、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー類、楔形石器、二次加工痕のある剥片（R フレイク）、刃こぼれ状の使用痕のある剥片（U フレイク）、などがある。石鏃の製作途上のものは、「石鏃未製品」と呼称した。

礫石器には、石斧、たたき石、くぼみ石、すり石、北海道式石冠、台石・石皿、砥石、石錘などがある。ほかには、フレイク、有意な礫（二次加工痕や使用痕が明瞭ではない礫が、人により動かされたり、使用されている可能性を持つ）などがある。石斧の製作途上のものは、「石斧未製品」と呼称した。

そのほかには石核、原石、礫がある。

なお、「石斧」と分類したものは、刃部や基部など明確な部位が遺存し、識別できたもので、「石斧片」と分類したものは、明確な部位が遺存していないものである。石斧以外の礫石器は、明確な分類条件としての部位が遺存していない破片もあったが、大分類にまとめている。 (倉橋)

Ⅲ 調査の概要

1 調査にいたる経緯

日本道路公団が建設を進めている北海道横断自動車道（千歳市～夕張市間）にかかる埋蔵文化財の保護についての活動は、北海道教育委員会が行っている。すなわち1988年（昭和63年）4月～5月の遺跡所在確認調査、1991年10月以降の遺跡範囲確認調査である。

範囲確認調査を終えた遺跡で、工事計画の変更が不可能であるために発掘調査を必要とする埋蔵文化財包蔵地は千歳市11か所、恵庭市3か所、由仁町2か所、夕張市3か所が明らかになっている。千歳市内の11か所は、西から東に、次のような遺跡名である。オサツ16遺跡、オサツ18遺跡、オサツ15遺跡、ポンオサツ遺跡、ユカンボシ C 15遺跡、オサツ1-1遺跡、キウス4遺跡、キウス5遺跡、キウス7遺跡、ケネフチ5遺跡、ケネフチ8遺跡。

恵庭市内の3か所は、千歳市内のポンオサツ遺跡とユカンボシ C 15遺跡とのあいだに、西からシマコツナイ C 1遺跡、ユカンボシ E 10遺跡、ユカンボシ E 7遺跡である。

ユカンボシ C 15遺跡は、道路の路線が決定したのちに遺跡であることが判明した。遠からず、建設工事が予定されていることもあって、北海道教育委員会による範囲確認のための試掘調査は次のような日程で行われた。

1995年（平成7年）5月29日～6月2日（調査員：大沼忠春。西側の低湿部）

1995年6月26日～27日（調査員：大沼忠春。防風林の西側）

1995年11月6日～10日（調査員：千葉英一、西脇対名夫。西側の台地部分、東端部）

1995年11月27日～12月1日（調査員：種市幸生、千葉英一、田才雅彦。中央の低湿部、東側の台地）

1996年（平成8年）4月17日（調査員：大沼忠春。民家、宅地部分）

以上のように行われた範囲確認調査をもとに、1996年6月から財団法人北海道埋蔵文化財センターにより、発掘調査が継続されている。発掘調査中の1997年5月27日（調査員：種市幸生、藤原秀樹）と6月24日（調査員：大沼忠春）に民家跡の西側部分で、追加の試掘がおこなわれた。

1996年の調査面積は3,025㎡、1997年の調査面積は8,855㎡である。当埋蔵文化財センターが今後の調査を予定している範囲は3,000㎡である。

本書は1996年、1997年に調査したうちの東地区（①区③区）3785㎡についての報告である。

2 調査の概要（図Ⅱ-1、図Ⅲ-1・2）

調査予定地は概略東西の長さ300m、南北の幅80mの範囲である。このなかで調査区域は、東と西の二つの地区に別れている。さらに道路工事の工程を考慮して①②③④の四区画に分けて調査を進めている（図Ⅱ-1）。2か年の調査によってその8割（計画面積比）が終了したことになる。

1996年の発掘調査

遺構と遺物

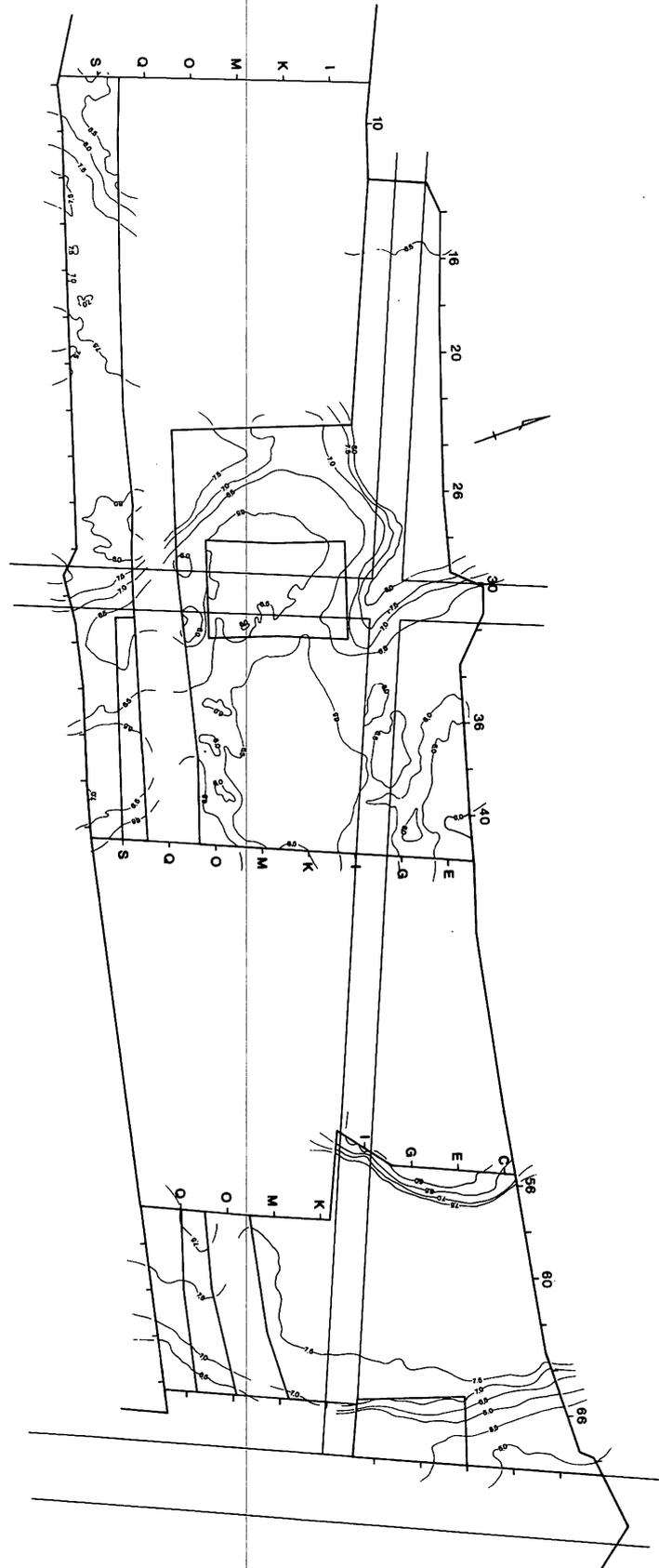
検出した遺構は西と東の台地部からTピット8基、東地区の低湿部で焼土6基、西地区の低湿部で杭列6連である。遺物は土器、石器等10,000点、木製遺物が破片数で35,000点が出土した。また土壌水洗等によって種子、骨片、昆虫等も見つかっている。

第Ⅰ黒色土の遺構と遺物

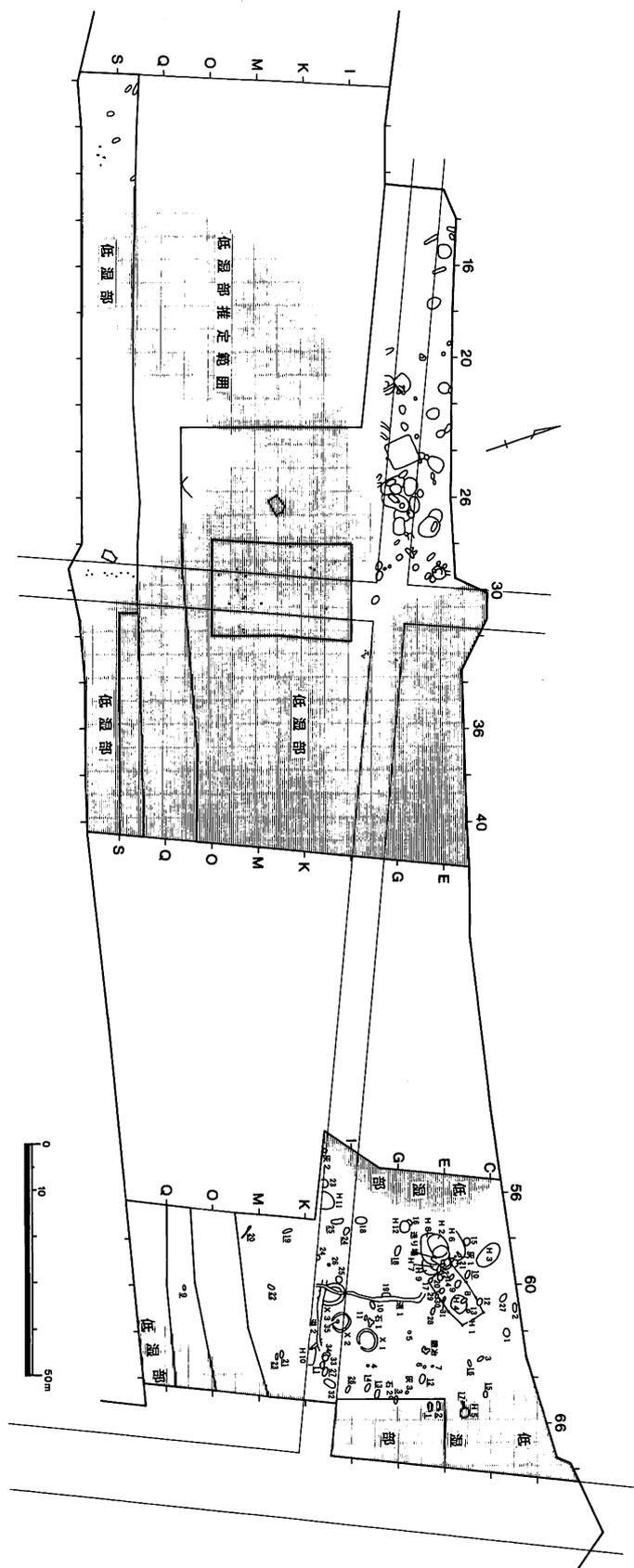
東地区の低湿部の焼土1基は縄文時代とみなされる土層から検出された。西地区の低湿部で検出された杭列6連は擦文文化期～アイヌ文化期のものである。

木製遺物は西地区から多く出土している。製品のうちで交易で得たものは漆椀、曲げ物、竹製品等である。一方、自家製品とみなされるものは舟部材ならびに櫂、櫂軸受け、あかくみ等の舟材である。

2 調査の概要



図Ⅲ-1 最終面コンター全図



- ・当報告分のみ施を示した
- ・標土は位置, Noとも示していない
- ・数字のみのものは土塊
- ・数字, アンダーライン入りはトビット
- ・灰集中は灰, 鍍治遺構は鍍治, 集石は石, 道跡は道と各々跡した

図III-2 遺構位置図

表Ⅲ-1 当報告遺構一覽(1)

種別	遺構名	グリッド	部位	時期
住居跡	H-1	C 60・61, D 59・60, E 59・60	0 B	アイヌ文化期
	H-2	B 57・58, C 57・58	I B 上部	縄文文化期
	H-3	B 58・59, C 58・59	II B	縄文時代後期初頭余市式期
	H-4	C 60, D 60・61	II B	縄文時代中期中葉
	H-5	C 65, D 65	II B	縄文時代中期後半～後期中葉
	H-6	D 57・58, E 57	II B	縄文時代後期後葉堂林式期
	H-7	D 58・59, E 58・59	II B	縄文時代後期初頭余市式期
	H-8	D 58, E 57・58・59	II B	縄文時代後期初頭余市式期
	H-9	D 58・59, E 58・59	II B	縄文時代後期初頭余市式期
周溝のある墓	H-10	J 62・63	I B 上部	縄文文化期
	H-11	I 56, J 56	II B	縄文時代後期後葉堂林式期
	H-12	F 57	II B	縄文時代後期後葉堂林式期
土壌	X-1	H 61・62	I B 上部	縄文文化期
	X-2	I 61・62	I B 上部	縄文文化期
	X-3	I 60, J 60	I B 上部	縄文文化期
	P-1	B 61 d, B 62 a	II B	縄文時代中期前半終末
	P-2	A 60 c, A 61 b, B 60 d, B 61 a	I B 上部	縄文文化期
	P-3	C 63 a b	I B 上部	縄文文化期
	P-4	H 63 d	II B	縄文時代後期?
	P-5	F 62 a b	I B 下部	縄文時代
	P-6	E 63 b c	II B	縄文時代中期?
	P-7	E 63 a d	II B	縄文時代中期
	P-8	D 60 d	I B 上部	縄文文化期
	P-9	D 59 c d, D 60 a b	I B 上部	縄文文化期
	P-10	G 60 c, G 61 b, H 60 d	II B	縄文時代中期後葉
	P-11	H 61 a b	I B 下部	縄文時代
	P-12	C 60 c d	I B 上部	縄文文化期
	P-13	C 61 b	II B	縄文時代中期前半
	P-14	D 59 c	I B 上部	縄文文化期
	P-15	C 57 c, D 57 d, C 58 b, D 58 a	II B	縄文時代中期前半
	P-16	F 57 a d	II B	縄文時代後期初頭余市式期
	P-17	E 59 c	I B 上部	縄文文化期
	P-18	H 57 a b	II B	縄文時代後期中葉
	P-19	G 60 a b c d	II B	縄文時代中期前半終末
	P-20	D 59 c, E 59 d	II B	縄文時代後期後葉
	P-21	C 59 b c, D 59 a b	II B	縄文時代後期後葉
	P-22	D 59 b c, E 59 a b	II B	縄文時代後期後葉
	P-23	I 55 c, J 55 d	II B	縄文時代後期中葉
	P-24	J 58 d	II B	縄文時代後期以降
	P-25	I 59 c d	II B	縄文時代中期前半終末
	P-26	J 59 a	I B 下部	縄文時代
	P-27	B 60 a b c d	I B 上部	縄文文化期
	P-28	E 61 a b	I B 上部	縄文文化期
	P-29	E 60 a	I B 上部	縄文文化期
	P-30	E 60 a b	I B 上部	縄文文化期
	P-31	D 60 c, E 60 d	I B 上部	縄文文化期
	P-32	I 64 b, J 64 a	II B	縄文時代中期前葉
P-33	I 63 b, J 63 a	II B	縄文時代中期前葉 P-33C新	
P-34	I 62 c, I 63 b, J 62 d, J 63 a	II B	縄文時代中期前葉	
P-35	I 61 c d	II B	縄文時代後期前葉	
土壌	F-1	G 67 a b	I B 4	縄文時代北大1式期
	F-2	E 65 d	II B 上 中面	縄文時代後期
	F-3	G 66 c	II B 下面	縄文時代中期
	F-4	G 66 c	II B 下面	縄文時代中期
	F-5	E 66 c	II B 下面	縄文時代中期
	F-6	E 66 c	II B 下面	縄文時代中期
	F-7	G 59 d	0~I B 上面	アイヌ文化期
	F-8	G 58 c, G 59 a b	0~I B 上面	アイヌ文化期
	F-9	G 57 d, G 58 a	I B 上部	縄文文化期
	F-10	F 60 c, F 61 b, G 60 d, G 61 a	0~I B 上面	アイヌ文化期
	F-11	G 62 b	I B 中部	縄文時代
	F-12	G 62 a d	I B 中部	縄文時代
	F-13	G 57 b	I B 上部	縄文文化期
	F-14	G 57 b	I B 上部	縄文文化期
	F-15	G 57 b c	I B 上部	縄文文化期
	F-16	G 57 a	II B 上 中面	縄文時代後期
	F-17	F 60 c, G 60 d	I B 下部	縄文時代
	F-18	G 57 c, G 58 b	II B 下面	縄文時代中期
	F-19	G 58 a	II B 下面	縄文時代中期
	F-20	F 63 a	I B 中部	縄文時代
	F-21	E 62 b	0~I B 上面	アイヌ文化期
	F-22	B 58 c	II B 上 中面	縄文時代後期
	F-23	E 64 a	I B 中部	縄文時代
	F-24	E 64 d	0~I B 上面	アイヌ文化期
	F-25	G 63 d	I B 中部	縄文時代
	F-26	F 64 d	0~I B 上面	アイヌ文化期
	F-27	E 60 d	I B 上部	縄文文化期
	F-28	G 63 b	I B 中部	縄文時代
	F-29	G 63 a	I B 中部	縄文時代後北A式期
	F-30	F 60 b c	I B 中部	縄文時代
	F-31	H 64 d	II B 上 中面	縄文時代後期
	F-32	G 63 a	II B 下面	縄文時代中期
	F-33	B 61 b	II B 下面	縄文時代中期
	F-34	F 63 b	I B 下部	縄文時代
	F-35	F 63 c	I B 中部	縄文時代後北C1式期
	F-36	H 63 a d	II B 上 中面	縄文時代後期
	F-37	H 61 a d	I B 下部	縄文時代
	F-38	F 60 a	I B 中部	縄文時代
	F-39	F 62 a	I B 中部	縄文時代後北B式期
	F-40	E 61 c d	II B 下面	縄文時代中期

表Ⅲ-2 当報告遺構一覽(2)

種別	遺構名	グリッド	層位	時期
焼	F-41	F62b	I B下部	縄文時代
	F-42	H61c	I B下部	縄文時代
	F-43	H61bc	I B下部	縄文時代
	F-44	H61ad	I B下部	縄文時代
	F-45	H60c	I B下部	縄文時代
	F-46	H59d	II B下面	縄文時代中期
	F-47	F62c	II B下面	縄文時代中期
	F-48	E63c	II B下面	縄文時代中期
	F-49	D60d	I B上部	縄文文化期
	F-50	F61c	II B下面	縄文時代中期
	F-51	K62b	II B下面	縄文時代中期
	F-52	H58a	I B上部	縄文文化期
	F-53	B58b, C58a	II B下面	縄文時代中期
	F-54	E61b	I B下部	縄文時代
	F-55	F58c	I B上部	縄文文化期
	F-56	F58c	I B上部	縄文文化期
	F-57	F58c	I B上部	縄文文化期
	F-58	I56a	II B下面	縄文時代中期
	F-59	E61c	II B下面	縄文時代中期
	F-60	E62b	I B中部	縄文時代後北B式期
	F-61	E62c, E63b	I B中部	縄文時代
	F-62	E62bc	I B中部	縄文時代
	F-63	H57b	0~I B上面	アイヌ文化期
	F-64	I55c	II B上面	縄文時代後期
	F-65	E61a	I B中部	縄文時代
	F-66	B56c, B57b	II B下面	縄文時代中期
	F-67	I58a	II B上面	縄文時代後期
	F-68	F59c	I B上部	縄文文化期
	F-69	J58a	I B下部	縄文時代
	F-70	J57a	II B下面	縄文時代中期
	F-71	H59b	I B下部	縄文時代
	F-72	H56c	II B下面	縄文時代中期
	F-73	H57cd, H58ab	II B下面	縄文時代中期
F-74	I56c	II B下面	縄文時代中期	
F-75	I60d	I B中部	縄文時代北大式期?	
F-76	J61c	0~I B上面	アイヌ文化期	
F-77	J62a	I B下部	縄文時代	
F-78	I63b	I B中部	縄文時代北大I式期	
F-79	I57d	0~I B上面	アイヌ文化期	
F-80	H62d	I B上部	縄文文化期	
F-81	I62b	II B上面	縄文時代後期	
F-82	I58a	0~I B上面	アイヌ文化期	
F-83	H62b	II B下面	縄文時代中期	
F-84	I61a	I B上部	縄文文化期	
F-85	I61c	II B上面	縄文時代後期	
F-378	G61b	II B上面	縄文時代後期	
F-379	E58a	II B上面	縄文時代後期	
F-380	J58a	II B下面	縄文時代中期	
F-381	H62c	II B下面	縄文時代中期	
F-382	E60c, E61b	I B上部	縄文文化期	
F-383	E61b	I B上部	縄文文化期	
T	TP-1	E65abcd	II B	縄文時代中期後葉
	TP-2	E65b	II B	縄文時代中期後葉
	TP-3	G64d, G65a	II B	縄文時代中期後葉
	TP-9	P60a	II B	縄文時代中期後葉
	TP-10	C59bc, D59ad	II B	縄文時代中期後葉
	TP-11	J63ad	II B	縄文時代中期後葉
	TP-12	E63c, E64b	II B	縄文時代中期後葉
	TP-13	G64c, H64d	II B	縄文時代中期後葉
	TP-14	H64ad	II B	縄文時代中期後葉
	TP-15	C64d	II B	縄文時代中期後葉
	TP-16	C63bc	II B	縄文時代中期後葉
	TP-17	D65a	II B	縄文時代中期後葉
	TP-18	F58bc, G58ad	II B	縄文時代中期後葉
	TP-19	K57c	II B	縄文時代中期後葉
	TP-20	M57cd, M58b	II B	縄文時代中期後葉
	TP-21	K62c, K63b, L62d, L63a	II B	縄文時代中期後葉
	TP-22	L60ab	II B	縄文時代中期後葉
TP-23	L36a	II B	縄文時代中期後葉	
TP-24	I57d	II B	縄文時代中期後葉	
TP-25	I57ab	II B	縄文時代中期後葉	
TP-26	I64ad	II B	縄文時代中期後葉	
TP-27	J63d	II B	縄文時代中期後葉	
送り場	送り場-1	D58, D59, E58, E59	0 B	アイヌ文化期
灰集中	灰集中-1	D58cd	0 B	アイヌ文化期
	灰集中-2	J53d, J54a	I B2	縄文文化期
	灰集中-3	F64c	0 B	アイヌ文化期
鍛冶遺構	鍛冶遺構-1	E62c	I B上部	縄文~アイヌ文化期
集石	集石-1	H60abcd	I B中部	縄文時代
	集石-2	G64d	I B中部	縄文時代
溝	溝-1	I64acd	I B上部	縄文時代
	溝-2	E, F, G, H, I, J60	0 B	アイヌ文化期
道跡	道跡-1	I59, 60, 61, 62	I B上部	縄文文化期
	道跡-2	A67, A68, B66, B67	表土	1739年以降
杭列	杭列-7	A65, A66, A67, B65, C65	表土	1739年以降
	杭列-8	C65, C66, D65, D66	表土	1739年以降
	杭列-9	C65, C66, D65, D66	表土	1739年以降
室状遺構	M-1	G60c, G61ad	表土	1739年以降
	M-2	F64d	表土	1739年以降
	M-3	H59a	表土	1739年以降

2 調査の概要

さらにたたき棒、板、器類、ヘラ類、串箸類、矢中柄、花矢、かんじき、火鑽板などもある。

このほか柱・杭などの建材、割材類、丸木材、又木類、枝材、炭化材、切片、樹皮などがある。これらの木製遺物は擦文文化期～アイヌ文化期のものであるが、擦文文化期のものが多種多量であることは特筆される。

第Ⅱ 黒色土の遺構と遺物

Tピット8基は西地区の台地部に5基、東地区の台地部に3基検出された。東地区の低湿部で検出された焼土5基は縄文時代とみなされるものである。

土器は磨滅した状態で散在的に出土している。縄文時代中期、後期、晩期とみなされるものである。石器の点数は多くはないが石鏃、石槍、ドリル、石斧、すり石などの定形的なものが出土している。

1997年の発掘調査

遺構と遺物

検出した遺構は、住居跡33基、土壇69基、Tピット54基、周溝のある墓3基、焼土382基である。遺物は土器43,000点、石器等14,000点、木製遺物90,000点、金属遺物等38点が出土した。また土壌水洗等によって種子、骨片、昆虫等も見つかっている。市道南23号の区域では舗装、路盤砂利、盛り土を除去して調査した。水道管、排水管、側溝等により遺構、包含層が帯状に消失したところも多い。

第Ⅰ 黒色土の遺構と遺物

遺構、遺物の大部分は東地区、西地区ともに台地部分から検出されている。

東地区の遺構は、擦文文化期のものが住居跡1、土坑墓12、周溝のある墓3であり、アイヌ文化期のものは、建物跡、鍛冶遺構、送り場、灰集中、道跡などである。なかでも注目されるのは、擦文文化期の土坑墓と周溝のある墓である。

土坑墓の平面形は楕円形と隅丸長方形のものがある。長さはともに1.2m程度のものが多い。副葬品は鉄斧、鎌、小刀、須恵器坏、土師器坏、擦文土器甕などがある。副葬品から判断すると8世紀後葉から9世紀初頭のものと考えられる。土坑墓の長軸方向のまともりが二方向に集中していることは、二世代にわたった構築を推定させる。

周溝のある墓は上述の土坑墓とほぼ同じ時期のものである。周溝の直径は4～5mであり、墳丘は認められない。周溝は3基とも南東部で途切れている。

土器、石器等は縄文時代晩期、続縄文時代、擦文文化期のものがある。木製遺物は東側と西側の低湿部から出土している。擦文文化期のものは矢中柄、串、やす等があり、アイヌ文化期のものは制裁棒、矢中柄、キテ中柄、へら、串、マキリ鞘、皿、櫛などが目につく。

西地区の遺構は擦文文化期の住居跡3、土坑墓2、アイヌ文化期の建物跡、杭列などがある。このうち平面形が方形の竪穴は、一辺が5.5m、深さ80cmほどであり、4本の主柱、煙道のある竈がある。これの覆土には、B-Tmが認められた。

西地区の低湿部からは多量の木製遺物が出土した。大多数は、擦文文化期、アイヌ文化期のものである。製品として個別の認定ができるものには、制裁棒、たたき棒、横槌、縦杵、樹皮製容器、箸類、串類、萱針、へら状製品、矢柄、矢中柄、やす、キテ中柄、鉄斧柄、下駄などがある。

前年度の調査でも注目されていた舟に関する部材、製品類が今回も多数出土した。具体的には舟底(舟敷)、舳先、艫(とも)、舷側板、舟縁板、舟胴の支え板、車櫂、車櫂受台部、早櫂、あか汲みなどである。

このほか柱、杭などの建材、割材類、枝材、正目板、切片、炭化材、樹皮、股木類、草本類のまともりなどが断片を含めて多数出土している。竹棒、漆椀、曲げ物などのように移入品と考えられるも

のもある。これらの木製遺物とともに永楽通宝、青磁皿、擦文後期の土器がI B 2・3層から検出された。

第Ⅱ 黒色土の遺構と遺物

遺構は東地区、西地区ともに縄文時代中期、後期の住居跡、土壙、Tピット、焼土がある。縄文時代中期、後期の住居跡は、東地区、西地区ともに重複して検出されるものがある。西地区のTピットには重複したものがある。焼土は縄文時代中期、後期のものが多い。

土器、石器等は縄文時代中期、後期、晩期のものが台地部のみならず、低湿部（標高6～7m）からも検出されている。これらは流路や水面高度の変化を示す資料でもある。ごく少数であるが縄文時代早期の土器破片が東地区から出土している。

3 本書の概要（図Ⅲ-2、表Ⅲ-1、2）

1996年、1997年調査のうち東地区3,785㎡についての報告である。なお、以下の説明の（ ）内は員数、あるいは遺構名称である。

遺構 遺構は住居跡（12）、周溝のある墓（3）、土壙（35）、焼土（91）、Tピット（22）、送り場（1）、灰集中（3）、鍛冶遺構（1）、集石（2）、溝（1）、道跡（2）、杭列（3）、室状遺構（3）である。

住居跡の時代・時期別の区分はアイヌ文化期（H-1）、擦文文化期（H-2・10）、縄文時代後期後葉（H-6・11・12）、縄文時代後期前葉（H-3・7・8・9）、縄文時代中期中葉（H-4）、縄文時代中期後半～後期中葉（H-5）である。H-6・7・8・9は重複している。

H-1は10本の柱穴が長さ12m、幅6mの長方形に形作るもので、中に2か所の焼土がある。H-2は縄文時代の竪穴住居跡の凹地に作られており、白色の粘土塊が出土した。炉は検出されたがカマドはなかった。H-10は道路の側溝等により大きく破壊されており、一部を検出したに過ぎない。

縄文時代の住居跡はその所属時期を土器型式名で示すことにつとめた。

周溝のある墓（X-1・2・3）は擦文文化期のものである。周溝の直径が4～5mで、墳丘は存在しない。したがって、北海道式古墳とは異なる。墓の時期は8世紀後葉から9世紀初頭である。

X-1では周溝の埋積土のなかにB-Tmが認められた。周溝の底面には掘削工程を明瞭に示す凹凸が残っていた。この周溝には器形を復元できる球胴甕もあった。主体部には土坑墓が4つあり、長軸方向の相違や切りあいからみて、追葬がなされたものと考えられる。X-2の主体部は、いわゆる木棺直葬である。ここからは小刀が1点出土した。X-3の主体部は検出できなかった。

土壙の時代・時期別の数は擦文文化期（12）、続縄文時代（3）、縄文時代後期（9）、縄文時代中期（11）である。擦文文化期のものは、その形態、出土遺物、埋積土の様子などの類似から周溝のある墓とほぼ同じ頃のものとして判断される。

焼土の時代・時期別の数は近世アイヌ文化期(10)、擦文文化期～中世アイヌ文化期(15)、続縄文時代(30)、縄文時代後期（11）、縄文時代中期（25）である。これら多数の焼土のなかには出土した土器等をもとにしてさらに詳細な時期が推定できるものがある。近世アイヌ文化期のものは西側の高いところに集中している。擦文文化期～中世アイヌ文化期のものは北西側に集中している。続縄文時代の場合、前葉では中央部西側に集中し、中葉では中央部分に集中しているが、後葉では南東側に散在的である。

縄文時代の焼土は検出土層、出土土器、周辺の出土遺物などを参考にして時期の細分につとめた。

TピットはすべてTa-c火山灰の降下時期よりも古い。台地部の縁に沿う立地で、配列を認めうる。

送り場は凹地に灰・炭化物・焼土・動植物遺存体のまとまりがあり、銅製煙管が出土したものである。銅製煙管は火皿と吸い口のみならず羅宇も検出できた。埋積過程にある竪穴住居跡に残されたア

2 調査の概要

イヌ文化期の遺構である。

灰集中は3か所あり、これらの時期は以下のものである。**灰集中1**は近世アイヌ文化期、**灰集中2**は擦文文化期～中世アイヌ文化期、**灰集中3**は近世アイヌ文化期である。

鍛冶遺構は1か所ある。2か所の焼土と炭層の形態および銑鉄片、鉄滓、鍛造剥片？、磁性のある球状遺物（湯玉状）、羽口などの出土から鍛冶遺構と判断した。時期は擦文文化後期～中世アイヌ文化期である。

集石は2か所ある。**集石1**は礫39点、**集石2**は礫2点である。ともに続縄文時代の後北式土器の期時のものであろう。

溝は1条ある。擦文文化前期のものともみなされる。

道跡は2条ある。**道跡1**は住居跡（H-1）、**送り場1**、**灰集中1**を連絡するものとみなされる。時期は近世アイヌ文化期である。

表土層の遺構で**杭列**と**室状遺構**として報告したものがある。

遺物 土器、石器等は擦文文化期、続縄文時代、縄文時代晩期・後期・中期のものがある。木製遺物は東側と西側の低湿部から出土している。擦文文化期のは矢中柄、串、やす等があり、アイヌ文化期のは制裁棒、矢中柄、キテ中柄、へら、串、マキリ鞘、皿、櫛などが目につく。

土器

台地部での縄文時代の土器はもっとも多いのは中期中葉のもので、後期前葉、後期後葉のものも多い。縄文時代晩期の土器は前葉のものも多く、東側西側の低湿部から出土している。続縄文時代の土器は東側の低湿部の狭い範囲にまとまって出土した。低湿部の土器は流水が運んだ砂礫層や砂層から検出されるものもある。再生土製品と呼ぶものは縄文時代中期のものであろう。

石器等

台地部、低湿部ともに定形的な石器、および剥片・碎片類が出土している。定形的な石器は石鏃、石槍（ナイフ）、石錐、つまみ付ナイフ、スクレイパー、石斧、たたき石、すり石、台石・石皿、砥石、石錘などがある。片岩製の石鏃は続縄文時代の後北B式土器のそばから検出されている。

木製遺物

低湿部から多くのものが出土した。擦文文化期～アイヌ文化期のものがほとんどであるが、とりわけ近世アイヌ文化期のものが多い。

木製品は、舟関係・狩猟漁労具・杭や柱などの建材・容器・串類などのほか花矢・制裁棒・漆器・下駄などがある。さらに抉りや孔のある加工材、板材・割材・枝材・丸木材・樹皮などもある。なかでも注目に値するものは舟敷（舟底）であろう。これの残存状態は悪いが、長軸に直行するような切断が認められ、「物送り」を推定させるものである。

報告にあたっては木取りの観察、樹種の同定につとめた。樹種同定の結果は、スギ・ヒノキ属？アスナロ属？ブナ・ケヤキ属という近辺での自生よりも持込みを推察させるものもある。

自然科学的分析と年代測定値

環境変遷を明らかにするための分析なども進めており、その一部を報告してある（IX章）。Ta-c降下火山灰については、低湿部での調査でTa-c₁とTa-c₂との間層を確認していた。そこでこのTa-c₁とTa-c₂の間にある泥炭などを資料として年代測定を行った。以下のような測定値が得られている。

Ta-c ₁ の上	補正14 C 年代	2110±50	(Beta -112943)	
Ta-c ₁ とTa-c ₂ との間層	補正14 C 年代	2350±50	(Beta -112944)	
Ta-c ₂ の下	補正14 C 年代	2450±50	(Beta -112945)	(西田)

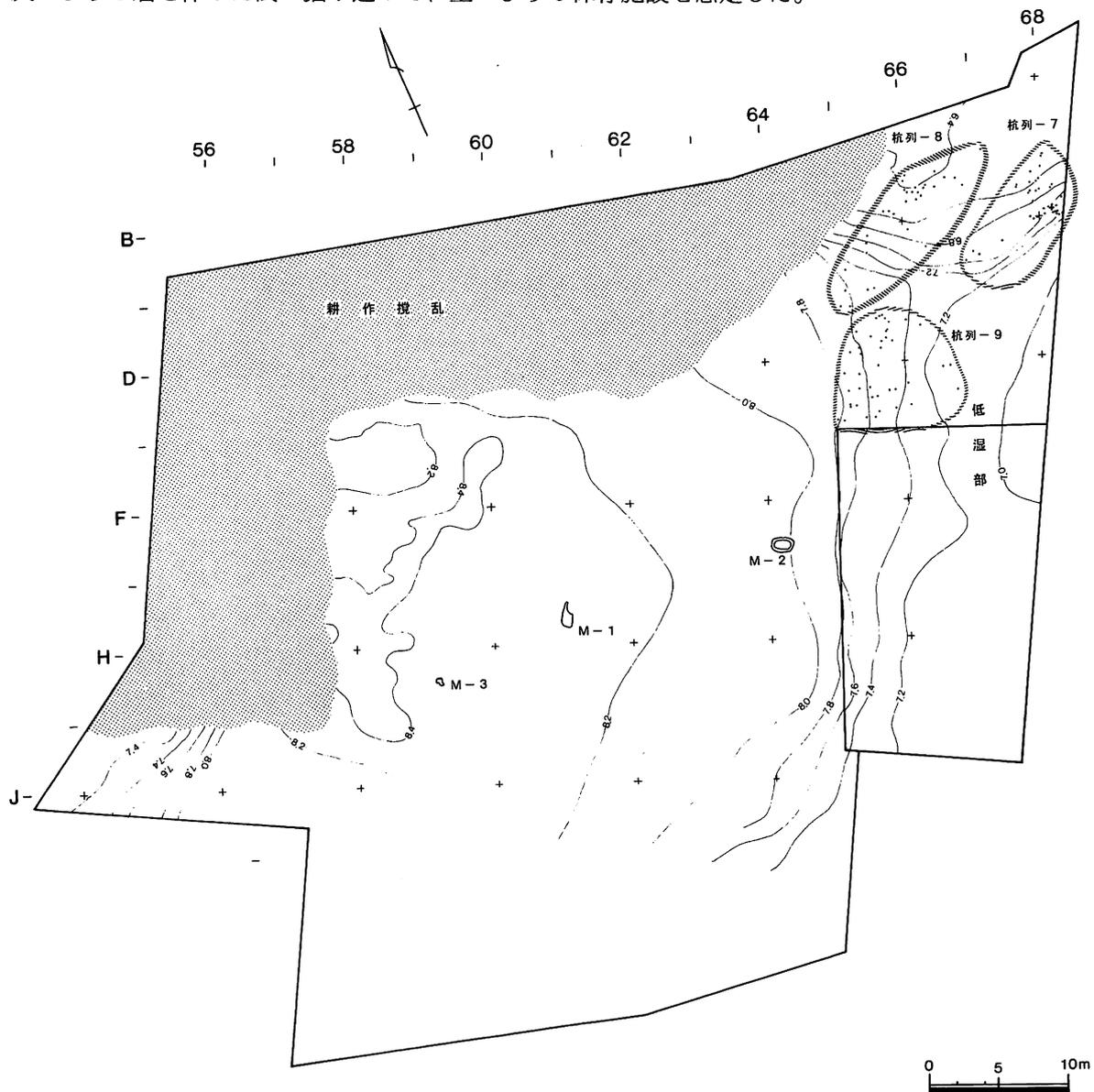
IV 表土層の遺構とその遺物

1. 概要

対象となる表土層の範囲は図IV-1に示した、Dライン以南、58ライン以东の台地部と東側の低湿部上面である。年代は、樽前a火山灰降下の1739年以降である。低湿部は0黒層からの調査を意識したため、Ta-aの重機での除去をあらかじめ行ったが、その時点で杭や木製品が出土したため、表土層に遺構があったらしいとは考えていた。台地部には家屋などの施設があり、これを撤去した状態で、すでにTa-aはほとんど残存していなかったため、表土層の遺構の確認は考慮に入れていなかった。

低湿部では、I黒層調査中に相当数の立杭が見つかった。先端や体部にTa-a粒の付着が見られることや、杭自体の残存状態から、より新しいものと判断し、これを表土層の遺構「杭列」として3列とらえた。

台地部でもI黒層調査中に、表土層からの構築と断面観察から判断される遺構が確認できた。白い灰のような層を伴った浅い掘り込みで、室のような保存施設を想定した。



図IV-1 表土層遺構位置図

2. 杭列

検出できた杭および杭跡が、建物跡か柵列・杭列なのか、単独の杭か、判別がつけにくかったため、3列の杭列としてまとめ報告する。なお杭列-1～6は、来年度以降報告する②④区（西地区）に所在する、主にI黒層の遺構である。

杭列-7（図IV-2・3・4、表IV-1、図版IV-1・2・3）

位置 A 67、A 68、B 66、B 67

構成 立杭はA 67 cd区とA 68 b区に集中する。ここでは、コンターラインに直交する列と並行する列が見られ、No. 19・20・23のような太い柱？も存在する。No. 4からNo. 7までの西に延びる列は、No. 10やNo. 21などに続くコンターラインと並行する列であろう。

杭の特徴 樹種のほとんどがトネリコ属で、体部に枝払いの切痕のあるものが多い。太い杭と細い杭が混在し、太細の配列はとらえにくい。ほとんどの先端にはあざやかな削り痕が見られる。

遺物 7-a・b・cはNo. 1・2・3の北あたりから、Ta-a除去の際に出土した木製品である。7-aは、樹心をはずして割った厚板で、作業台のようなものであろう。7-bは柁目板。7-cは樹心をはずして割った厚板に、長方形の角孔が開けられた材。孔は二つあり、いずれも両面から削り込んでいる。他の材と組合わせて使うものであろう。7-dは図示していないが、面取のある棒状の材である。

用途 作業小屋かそれに類する水辺の施設であろう。

杭列-8（図IV-2・4・5、表IV-2、図版IV-3・4）

位置 A 66、A 66、A 67、B 65、B 66、C 65

構成 東側に集中する列は、コンターラインと並行するきれいな並びを呈する。その他も2～3本で列になる小さなまとまりとなっている。西側の斜面上位のものは、杭列-9の北側と関係するものかもしれない。その斜面上位に太い柱？が散在する。

杭の特徴 樹種の構成は不統一である。No. 17以下の東列のものは、径3.0cm前後の細いものが多い。先端はほとんどにあざやかな削り痕が見られる。

遺物 8-a・bとも東列付近から出土。8-aは早樫の柄先端、8-bは早樫の水掻部であろう。

用途 船着場とそれに接続する施設であろうか。

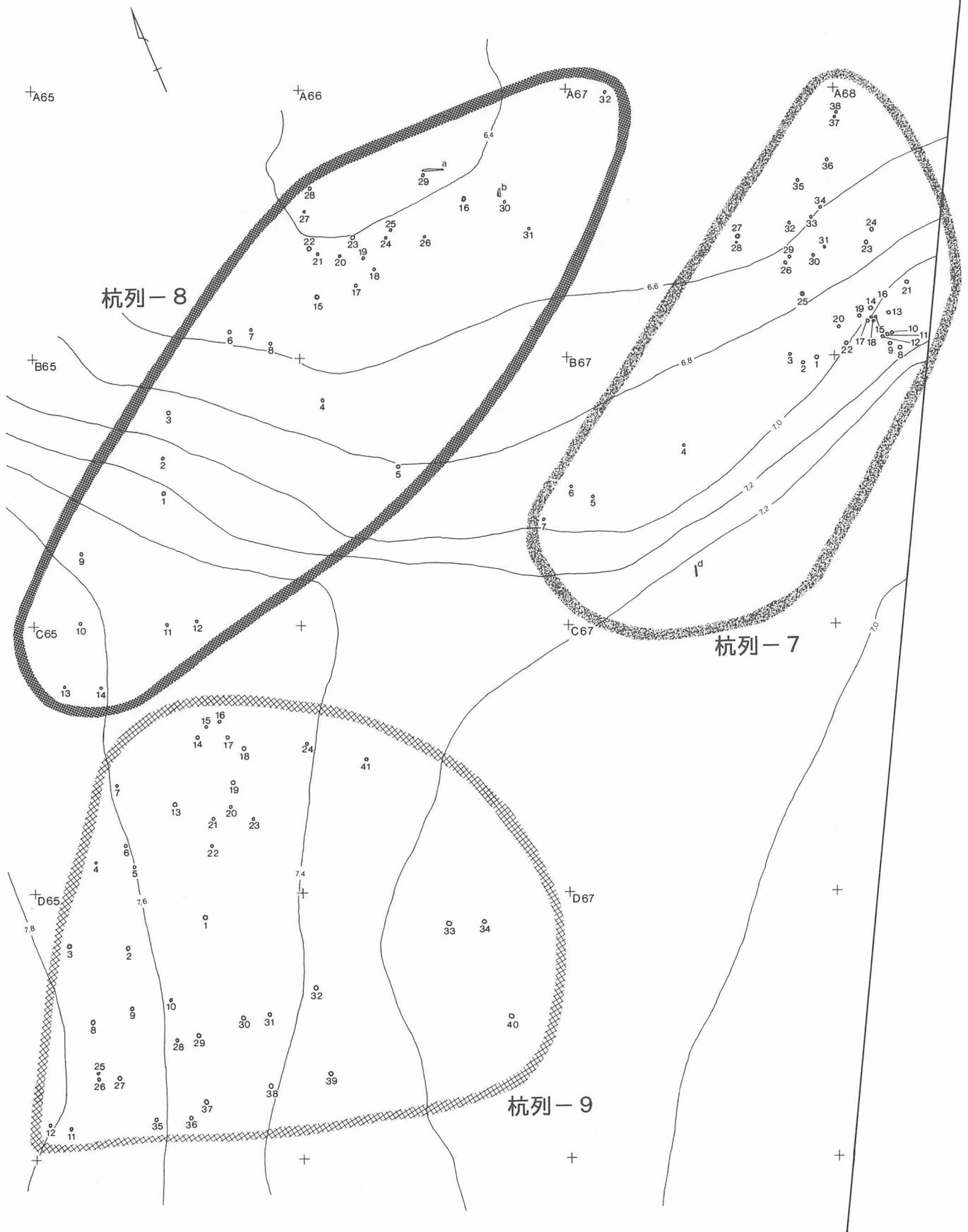
杭列-9（図IV-2・5、表IV-3、図版IV-4）

位置 C 65、C 66、D 65、D 66

構成 北側は、4～5本の組み合わせでコンターラインに直交する列と並行する列が見られる。南側は、コンターラインに直交して東西に延びる2～3列で構成される。この列は各々の杭が、南北でもほぼ対応関係にある。No. 16・23・32・34・35・39・40と要になる位置に太い柱？が配置されているのが特徴的である。

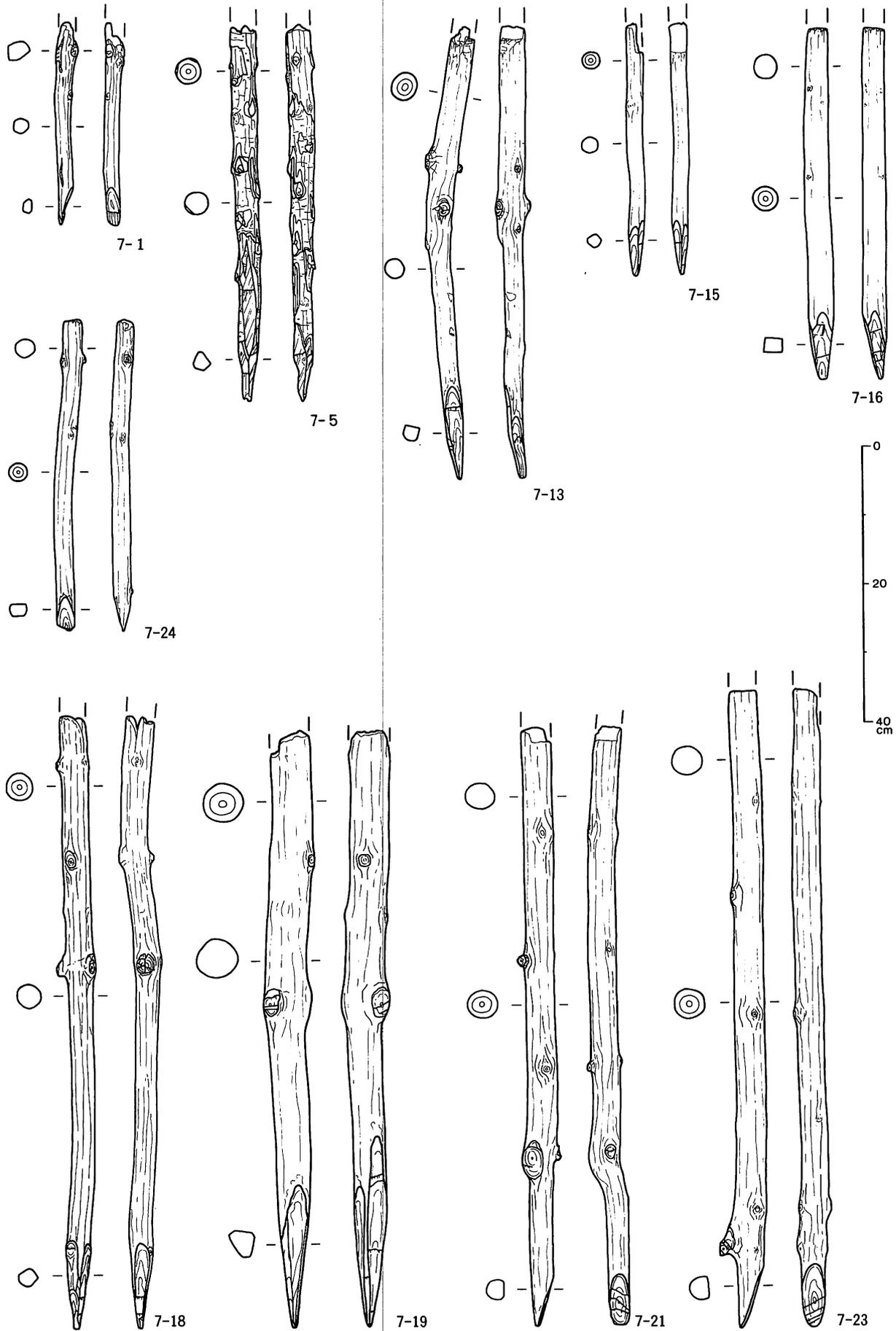
杭の特徴 樹種の構成は不統一の感があるが、トネリコ属とハンノキ属が比較的多い割合を示す。斜面上位のものが多いためか、杭跡のみの確認も多い。残存する杭の先端はほとんどが削りで尖っている。割材から作られた杭が数本見られる。

用途 建物か、斜面の上り下りのための階段のような施設であろうか。

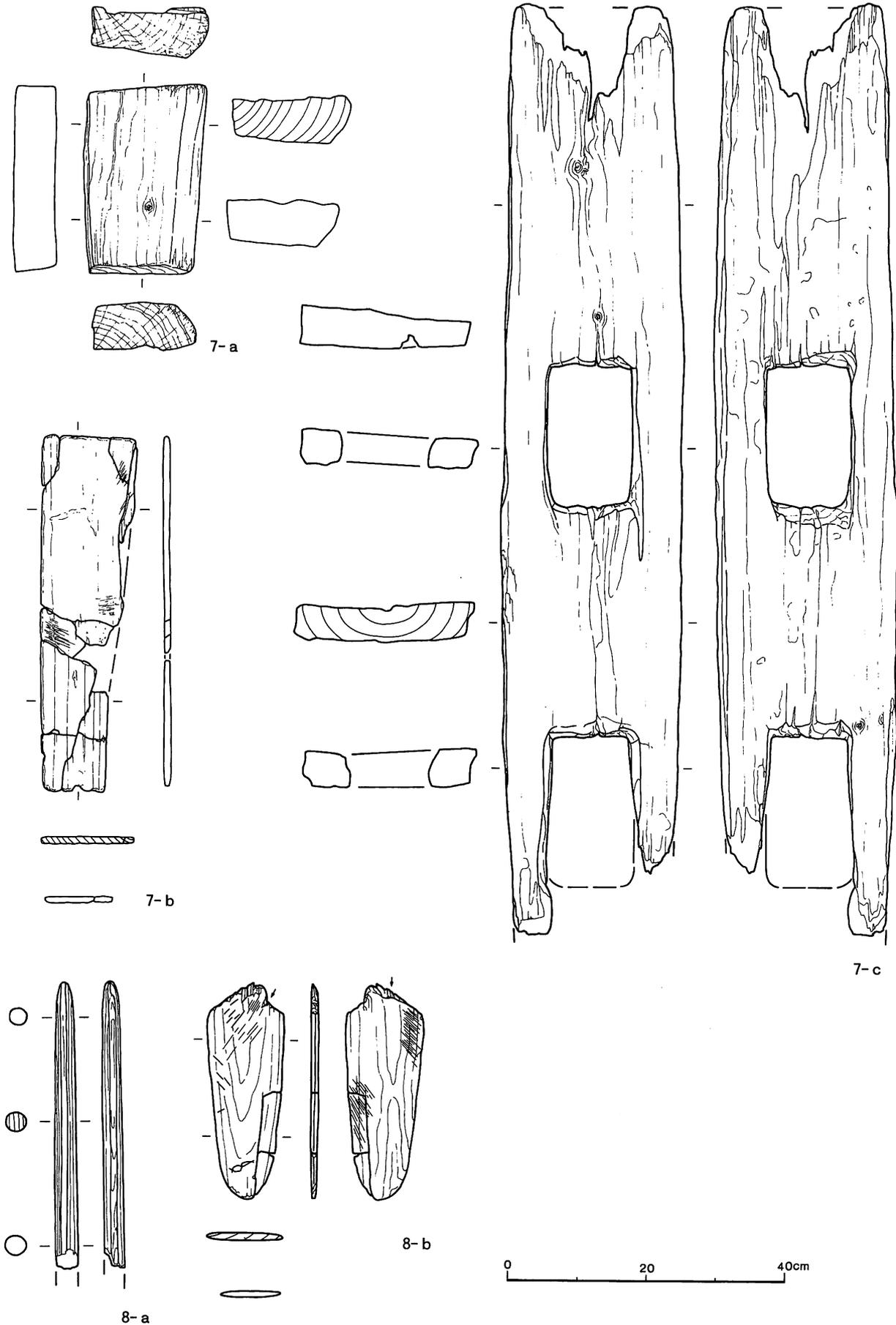


図IV-2 杭列

2 杭列

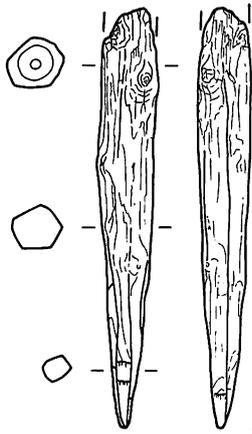


图IV-3 杭列-7 杭

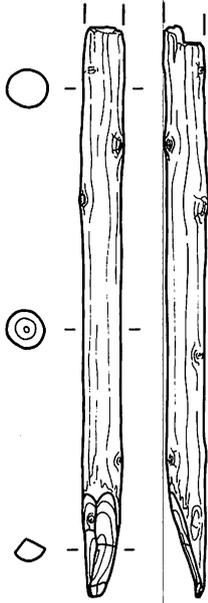


図IV-4 杭列-7・8 木製品

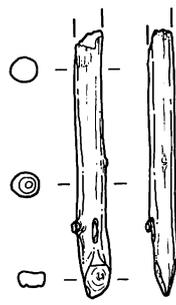
2 杭列



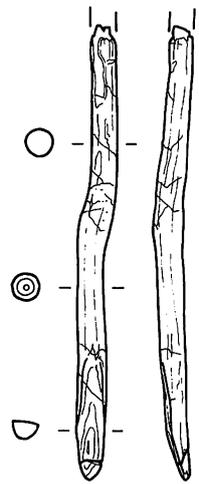
8-1



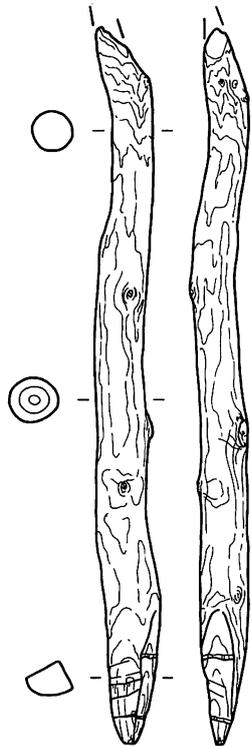
8-4



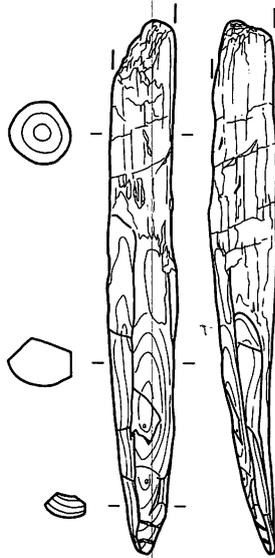
8-5



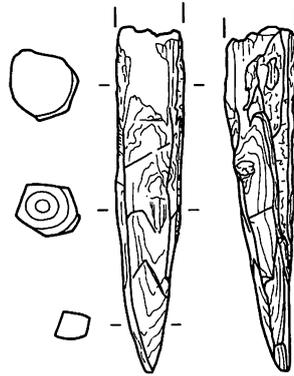
8-8



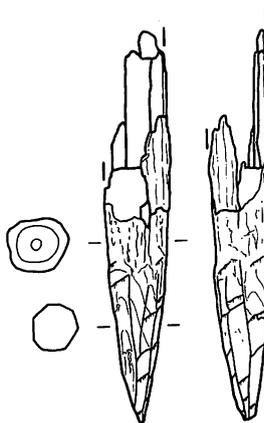
9-14



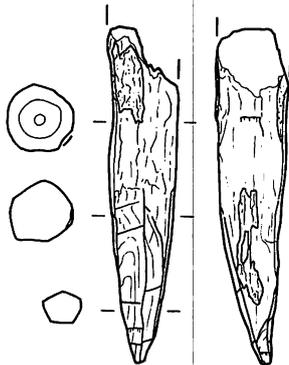
9-16



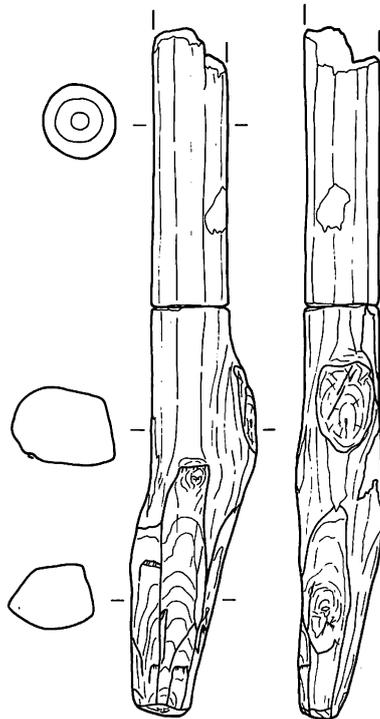
9-12



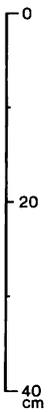
9-20



9-39



9-34



图IV-5 杭列-8·9 杭

表IV-1 杭列-7 杭等一覧

杭列No.	杭No.	遺物名称	図版No.	遺物No.	木取り	先端	形状	状態	元末	樹皮	樹種	長さcm	径cm	重さg	破片	備考	
杭列7-1	1	細杭先	IV-2	106	丸木	尖	対面2面削	片面削大	未先	○	トネリコ属	(29.1)	3.1	97	1	枝払い切痕あり	
杭列7-2	2	杭	-	107	丸木	尖	直交4面削		未先		トネリコ属	(81.8)	3.1	542	1	枝払い切痕あり	
杭列7-3	3	杭	-	108	丸木	尖	直交4面削		未先		トネリコ属	(84.1)	3.5	695	2	枝払い切痕あり	
杭列7-4	4	杭	-	109	丸木	尖	1面削	樹表面残	未先	○	ハジドイ属	(50.8)	3.4	311	1	枝払い切痕あり	
杭列7-5	5	杭	IV-2	110	丸木	尖	1面削	樹表面残	未先	○	トウヒ属	(54.1)	3.9	400	1	枝払い切痕あり	
杭列7-6	6	細杭	-	111	丸木(側)	尖	4面削	削部長23cm	未先		カエデ属	(29.2)	2.1	88	2		
杭列7-7	7	杭	-	156	丸木	つぶれ	削りあり		未先		トネリコ属	(67.8)	4.8	1140	1		
杭列7-8	8	杭先	-	157	丸木	尖	直交4面削		?		トネリコ属	(19.8)	4.0	140	1		
杭列7-9	9	杭	-	158	丸木	尖	直交4面削		未先		トネリコ属	(66.4)	4.9	975	1		
杭列7-10	10	杭	-	159	丸木	尖	直交3面削	樹表面残	未先		トネリコ属	(61.5)	2.9	372	1	枝払い切痕あり	
杭列7-11	11	杭	-	160	丸木	尖	直交4面削		未先		トネリコ属	(81.0)	3.3	737	1		
杭列7-12	12	杭先	-	161	丸木	尖	直交2面削	樹表面残	未先		オニグルミ	(29.8)	4.3	354	1		
杭列7-13	13	杭	IV-2	162	丸木	尖	直交3面削	樹表面残	未先		トネリコ属	(64.7)	5.1	510	1	枝払い切痕あり	
杭列7-14	14	細杭	-	163	丸木	尖	1面削	樹表面残	未先	○	トネリコ属	(53.6)	2.5	235	2	枝払い切痕あり	
杭列7-15	15	細杭	IV-2	164	丸木	尖	5面削		未先		トネリコ属	(94.2)	2.4	121	1		
杭列7-16	16	杭	IV-2	165	丸木	尖	直交4面削		未先		トネリコ属	(50.4)	3.7	410	1		
杭列7-17	17	杭	-	166	丸木	尖	直交3面削	樹表面残	元先		トネリコ属	(75.4)	3.8	781	1	枝払い切痕あり	
杭列7-18	18	杭	IV-2	167	丸木	尖	直交4面削		未先		トネリコ属	(87.7)	5.5	860	1	枝払い切痕あり	
杭列7-19	19	杭(柱?)	IV-2	168	丸木	尖	6面削		未先		トネリコ属	(86.2)	6.9	1750	1	枝払い切痕あり	
杭列7-20	20	杭(柱?)	-	169	丸木	尖	8面前細調整	削部長38cm	元先	○	ハンノキ属	(55.2)	6.4	1260	1	枝払い切痕あり	
杭列7-21	21	杭	IV-2	170	丸木	尖	1面削	樹表面残	未先		トネリコ属	(86.3)	5.5	1060	1	枝払い切痕あり	
杭列7-22	22	杭	-	171	丸木	尖	対面2面削		未先		トネリコ属	(98.1)	3.0	290	1	枝払い切痕あり	
杭列7-23	23	杭(柱?)	IV-2	172	丸木	尖	1面削	樹表面残	未先		トネリコ属	(92.1)	6.3	1260	1	枝払い切痕あり	
杭列7-24	24	杭	IV-2	173	丸木	尖	対面2面削		未先		トネリコ属	(45.2)	3.5	224	1		
杭列7-25	25	杭・杭先	-	-	丸木	尖	直交4面削		?		トネリコ属	52.0	4.4	705	1		
杭列7-26	26	杭・杭先	-	-	丸木	尖	直交4面削		?		トネリコ属	(25.3)	4.2	303	1		
杭列7-27	27	杭・杭先	-	-	丸木	尖	直交2面削	樹表面残	?		トネリコ属	(26.3)	3.4	227	1		
杭列7-28	28		-	-	丸木	10点	杭列7-28~38のうち丸木10点と 杭列8-17~32の合計26本で、 尖2:つぶれor丸1の比率 尖のうち 1・2面削樹表面残 約7割 3面以上削 約3割				同左26本の樹種内訳は、 トネリコ属 : 10本 ヤナギ属 : 13 イヌエンジュ : 1 モミ属 : 1 モクレン属 : 1						
杭列7-29	29		-	-	丸木	1点	尖 5面削				トネリコ属						
杭列7-30	30		-	-	丸木	1点	尖 5面削				トネリコ属						
杭列7-31	31		-	-	丸木	1点	尖 5面削				トネリコ属						
杭列7-32	32		-	-	丸木	1点	尖 5面削				トネリコ属						
杭列7-33	33		-	-	丸木	1点	尖 5面削				トネリコ属						
杭列7-34	34		-	-	丸木	1点	尖 5面削				トネリコ属						
杭列7-35	35		-	-	丸木	1点	尖 5面削				トネリコ属						
杭列7-36	36		-	-	丸木	1点	尖 5面削				トネリコ属						
杭列7-37	37		-	-	丸木	1点	尖 5面削				トネリコ属						
杭列7-38	38		-	-	丸木	1点	尖 5面削				トネリコ属						
杭列7-a	a	作業台	IV-3	391	偏半割	片側面に樹表面の残る厚板			-		コナラ属	27.8X16.0X7.3		2870	1	A67c付近出土	
杭列7-b	b	板	IV-3	392	柱目	均等な厚みの板			-		トネリコ属	(51.9)X13.7X1.0		(460)	10	"	
杭列7-c	c	有孔厚板	IV-3	393	板目	連続した大型角穴を持つ板			-		コナラ属	(140.0)X26.4X5.7		(12200)	1	"	
杭列7-d	d	丸木材	-	105	丸木	薄く面取りあり			-		トウヒ属	(49.0)X5.3X4.9		(840)	1		

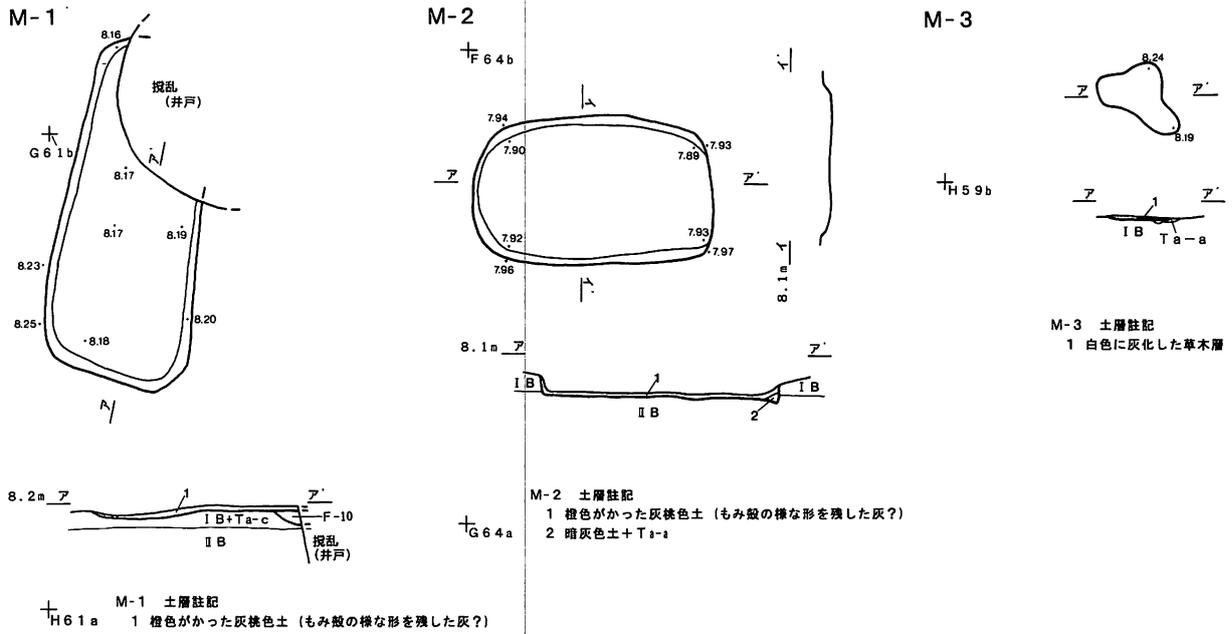
表IV-2 杭列-8 杭等一覽

杭列No.	杭No.	等	遺物名称	図版No.	脚上階	木取り	先端	形態	等	元末樹皮焼痕	樹種	長さcm	径cm	重さg	破片	備	考
杭列8-	1		杭	IV-4	147	丸木	尖	6面削	削部長29cm	末先	トネリコ属	(44.0)	5.9	670	1		
杭列8-	2		杭先(柱?)	-	148	丸木	尖	3面削	樹表面残	?	カエデ属	(18.0)	6.7	270	2		
杭列8-	3		杭先	-	149	丸木	尖	5面削	元先	元先	トネリコ属	(19.9)	5.2	224	1		
杭列8-	4		杭	IV-4	150	丸木	尖	直交2面削	樹表面残	末先	トネリコ属	(39.5)	4.5	670	1		
杭列8-	5		杭先	IV-4	151	丸木	尖	対面2面削	樹表面残	末先	オニグルミ	(28.0)	3.7	158	1		
杭列8-	6		杭	-	152	丸木	尖	3面削	樹表面残	?	コシアブラ	(36.0)	3.8	333	2		
杭列8-	7		杭	-	153	丸木	尖	直交3面削	樹表面残	末先	コシアブラ	(29.7)	3.6	235	1		
杭列8-	8		杭	IV-4	154	丸木	尖折	1面削	樹表面残	?	ハリギリ	(47.4)	3.3	250	2		
杭列8-	9		杭先(柱?)	-	155	丸木	尖	直交2面削	樹表面残	?	ハンノキ属	(25.2)	7.4	394	1		
杭列8-	10		杭	-	190	丸木	尖	3面削	樹表面残	?	イヌエンジュ	(38.8)	4.4	250	1		
杭列8-	11		杭先(柱?)	-	192	丸木	尖	7面削	削部長31cm以上	?	カエデ属	(35.7)	7.3	883	1		
杭列8-	12		杭先	-	191	丸木	尖	4面削		?	トネリコ属	(21.7)	4.4	277	1		
杭列8-	13		杭先	-	188	丸木	尖	2面削	樹表面残	?	イヌエンジュ	(29.9)	5.2	302	1		
杭列8-	14		杭先(柱?)	-	189	平削	尖	2面削	樹表面残	?	イヌエンジュ	(37.5)	8.8	563	1		
杭列8-	15		杭	-	-	丸木	つぶれ	2面削	樹表面残	?	ハンノキ属	(34.3)	5.8	1260	1		
杭列8-	16		杭	-	-	丸木	尖	直交3面削	樹表面残	?	トネリコ属	(35.9)	4.9	632	1		
杭列8-	17			-	-												
杭列8-	18			-	-												
杭列8-	19			-	-												
杭列8-	20			-	-												
杭列8-	21			-	-												
杭列8-	22			-	-												
杭列8-	23			-	-												
杭列8-	24			-	-												
杭列8-	25			-	-												
杭列8-	26			-	-												
杭列8-	27			-	-												
杭列8-	28			-	-												
杭列8-	29			-	-												
杭列8-	30			-	-												
杭列8-	31			-	-												
杭列8-	32			-	-												
杭列8-	a		柄(早樫柄?)	IV-3	221	1/4割	丸棒状に削り、表面調整				ヒノキ属	(41.0)	3.0	240	1		
杭列8-	b		早樫水掻部	IV-3	222	追証	端部は緩やかに尖がる				アスナロ属	(31.1)X(10.0)X(1.0)		210	2		
<p>杭・杭先</p> <p>杭列7-28~38のうち丸木10点と 杭列8-17~32の合計26本で、 尖2：つぶれor丸1の比率 尖のうち 1・2面削樹表面残 約7割 3面以上削 約3割</p> <p>同左26本の樹種内訳は トネリコ属 : 10本 ヤナギ属 : 13 イヌエンジュ : 1 モミ属 : 1 モクレン属 : 1</p>																	

表IV-3 杭列-9 杭一覽

杭列No.	杭No.	遺物名称	図版No.	出土層	木取り	先端	形態	状態	元末樹皮焼痕	樹種	長さcm	径cm	重さg	破片	備考
杭列9-1	1	杭先	-	182	丸木	尖	2面削	樹表面残	?	クワ属	(19.5)	4.5	164	1	
杭列9-2	2	杭先残片	-	183	丸木?	尖?	削りあり		?	クワ属	-	-	64	8	
杭列9-3	3	杭先残片	-	184	不明	不明			?	ヤナギ属	-	-	66	5	痕跡
杭列9-4	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	痕跡
杭列9-5	5	杭先残片	-	185	丸木	不明			?	ニレ属	(29.0)	4.5	363	多	
杭列9-6	6	杭先残片	-	186	不明	不明			?	オニグルミ	-	-	102	多	
杭列9-7	7	杭先	-	187	丸木	尖	直交4面削		?	イヌエンジュ	(32.1)	6.0	590	1	
杭列9-8	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	痕跡
杭列9-9	9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	痕跡
杭列9-10	10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	痕跡
杭列9-11	11	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	痕跡
杭列9-12	12	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	痕跡
杭列9-13	13	杭先	-	193	半削	尖	割面利用2面削	樹表面残	?	ヤナギ属	(26.4)	7.5	338	1	
杭列9-14	14	杭	IV-4	194	丸木	尖	3面削	樹表面残	元先	イヌエンジュ	(74.8)	5.9	1290	1	
杭列9-15	15	杭	-	195	丸木	尖	3面削	樹表面残	元先	サクラ属	(55.0)	6.5	1240	1	
杭列9-16	16	杭(柱?)	IV-4	196	丸木	尖	3面削	樹表面残 幅長38.5cm	?	ニレ属	(55.9)	7.3	1300	1	
杭列9-17	17	杭先	-	197	半削	尖	2面削	樹表面残	?	ハンノキ属	(13.0)	(5.4)	220	9	
杭列9-18	18	杭先	-	198	丸木	尖	4面削		?	ハンノキ属	(20.1)	4.7	200	1	痕跡
杭列9-19	19	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	痕跡
杭列9-20	20	杭	IV-4	199	丸木	尖	6面削		?	オニグルミ	(41.1)	6.2	500	11	
杭列9-21	21	杭	-	200	丸木	尖	直交2面削	樹表面残	?	トネリコ属	(47.0)	6.0	965	1	
杭列9-22	22	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	痕跡
杭列9-23	23	杭(柱?)	-	201	丸木	尖折	2面削	樹表面残	元先	ヤナギ属	(44.3)	6.9	1130	1	
杭列9-24	24	杭先	-	202	丸木	尖	直交2面削	樹表面残	元先	サクラ属	(27.3)	6.5	525	3	
杭列9-25	25	杭先残片	-	215	不明	不明			?	ハンノキ属	(6.8)	(3.3)	34	1	
杭列9-26	26	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	痕跡
杭列9-27	27	杭先	-	214	丸木	尖	削りあり		?	ニレ属	(15.2)	(5.2)	273	8	
杭列9-28	28	杭先	-	213	半削	尖	割面と先を細かく削る		?	トネリコ属	(18.5)	5.2	228	16	
杭列9-29	29	杭先	-	206	丸木	尖	3面削	樹表面残	?	ハンノキ属	(26.2)	5.1	382	1	
杭列9-30	30	杭先	-	212	丸木	尖	3面削	樹表面残	?	ハンノキ属	(28.9)	6.2	480	1	
杭列9-31	31	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	痕跡
杭列9-32	32	杭先(柱?)	IV-4	205	丸木	尖	直交3面削	樹表面残	?	ハンノキ属	(36.2)	7.3	800	1	
杭列9-33	33	杭先	-	204	丸木	尖	1面削	樹表面残	元先	ヤナギ属	(24.6)	5.0	344	1	
杭列9-34	34	杭(柱?)	IV-4	203	丸木	尖	4面削	樹表面残 幅長25cm	?	トネリコ属	(67.3)	11.0	3550	2	
杭列9-35	35	杭先(柱?)	-	216	丸木	尖	5面削		?	ハンノキ属	(33.3)	7.5	633	43	
杭列9-36	36	杭先	-	207	1/4割	尖	割面利用2面削		?	トネリコ属	(17.0)	3.7	124	1	
杭列9-37	37	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	痕跡
杭列9-38	38	杭先	-	208	丸木	尖	直交2面削	樹表面残	?	サクラ属	(20.2)	6.5	370	3	
杭列9-39	39	杭先(柱?)	IV-4	209	丸木	尖	5面削	削面部長30cm以上	?	ハンノキ属	(35.4)	7.4	1840	1	
杭列9-40	40	杭先(柱?)	-	210	丸木	欠損			?	トネリコ属	(29.0)	8.1	927	1	
杭列9-41	41	杭	-	116	丸木	尖	5面削	削面部長33.8cm	元先	トネリコ属	(72.1)	6.2	1500	1	枝払い切痕あり

3 室状遺構



図IV-6 室状遺構

3. 室状遺構

M-1 (図IV-6、図版IV-5)

位置 G 60 c、G 61 ad

長軸方向 N-22°-E

規模 (1.82) / (1.70) × 0.79/0.70 × 0.06m

調査 61ラインの土層精査中、井戸の攪乱断面上部に白色の灰のような薄層と焼土が確認された。断面観察をしながら白色の薄層を追いかけると、これは緩く凹ませてI黒層の上に形成されたものであることがわかった。下の焼土はI黒層の遺構でF-10とした。

形態 井戸で壊されているが、平面形はほぼ長方形で、浅い凹みになっている。南側がやや深い。

特徴 白色の薄層は、3~4cmの厚さで全体に敷き詰められたたようになっている。拡大視すると籾殻のような形態を残した灰のような物質である。これを敷いて何かを保存した室状の遺構であろう。

M-2 (図IV-6、図版IV-5)

位置 F 64 d

長軸方向 N-69°-W

規模 1.27/1.24 × 0.79/0.71 × 0.11m

調査 当初、白色の灰の集中としてI黒層の遺構調査としていたが、M-1の発見と、覆土2に入るTa-aにより、表土の遺構として扱うこととなった。

形態 平面形はほぼ長方形で、底面は平坦である。壁はほぼ垂直でしっかりした掘り込みになっており、II黒層まで達している。

特徴 M-1と同様であるが、M-1よりもしっかりした室状の土壌となっている。

M-3 (図IV-6、図版IV-5)

位置 H 59 a

長軸方向 N-37°-E

規模 0.49 × 0.28 × 厚さ0.02m

調査 当初、灰の集中としてI黒層の遺構調査としていたが、下層へのTa-aの入り込みや、M-1・2の調査から、表土の遺構として扱うこととなった。

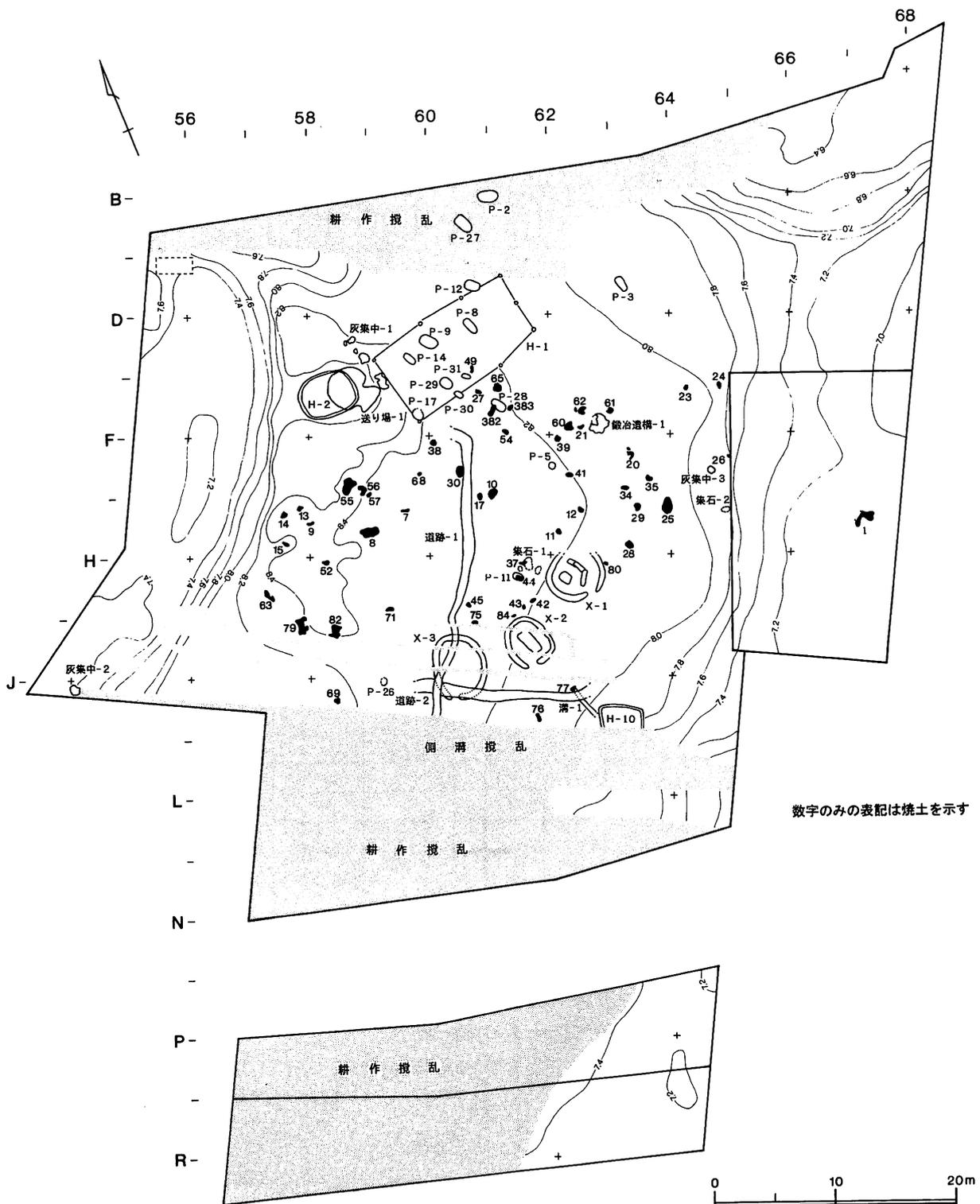
形態・特徴 不定形の薄い草木灰層。部分的な残存だろうか。

(三浦)

V 0黒層・I黒層の遺構とその遺物

1 概要 (図V-1)

遺構は、北にむかって伸びる舌状台地の頂部（標高8.4~7.8m）に位置する。0黒層では住居跡1軒、送り場1か所、灰集中1基、道跡1条。I黒層では住居跡2軒、周溝のある墓3基、土坑墓12基、



図V-1 0黒・I黒層遺構位置図

2 住居跡

土壙3基、焼土54基、灰集中2基、鍛冶遺構1基、集石2か所、溝1条、道跡1条を検出した。層準と時期はほぼ以下のように対応する。0黒層・I黒層の上面は近世アイヌ文化期、上部は中世アイヌ文化期、擦文文化期から続縄文時代後葉、中部と下部は続縄文時代中葉である。

近世アイヌ文化期の遺構は、台地の北西側に集中する。H-1と送り場1と灰集中1と道跡1は配置から見て一時期の遺構群ととらえられる。擦文文化期の遺構はおもに、台地の北西側と南東側に集中し、北西側には前期の土坑墓・焼土が多く、南東側には前期の周溝のある墓がある。竪穴住居跡は中・後期で2軒出土しており、土坑墓・周溝のある墓と時期が異なる。続縄文時代後葉の遺構は台地の南東側に焼土が散在している。続縄文時代中葉の遺構は台地の中央部分に焼土が集中している。

遺構の遺物はおもに、周溝のある墓・土坑墓から8世紀代の擦文土器・須恵器・鉄製品が出土している。焼土からは後北A・B、北大I式が出土している。包含層の遺物は、擦文土器が台地の北西側と南東側、後北A・B式は台地の中央部分、後北C₂・D～北大I式は台地の南東側の低い部分に多く出土する。包含層の遺物は遺構の集中する地域に多く出土する傾向にある。(鈴木)

2 住居跡

H-1 (図V-2、表V-7、図版V-1)

位置 C 60・61、D 59・61、E 59・60 長軸方位 N-78°-E

規模 2.04×6.48m

調査 Ta-a層除去後、0黒層の上面にTa-aに覆われた柱穴の並びを確認した。また、柱穴の並びに囲まれた同一面には焼土が2基(HF 1・2)確認された。HF 2の脇には集石があった。

覆土 柱穴の覆土はTa-aを多量に含む黒色土である。ウ・カ・サ・シの形は先端が円筒形、エ・オ・キ・ク・ケ・コは截頭円錐形である。深さはウ・オ・カ・シの上面が削平を受けていて確かなことはわからないが、ウ・サ・シは先端が漸移層中で止まっているのに対してエ・キ・ク・ケ・コは先端がEn-L層に達している。以上より、ウ・サ・シは浅くエ・キ・ク・ケ・コはやや深く設置されたと考えることができる。

形態 平面形は長方形で、柱穴の間隔は、長軸並が4m前後、短軸並が2m前後である。

付属遺構 炉はいずれも地床炉で住居の長軸方向に長軸をむけて一列に並ぶ。HF 1はよく焼けており、白色化した・魚骨(サケ科、ニシン科)・獣骨片を含んでいた。HF 2もよく焼けており、白色化した魚骨(サケ科、コイ科)片を少量含んでいた。HF 2は灰像分析を依頼中である。

遺物出土状況 礫が11個出土した。

時期 柱穴・炉の検出層準から近世アイヌ文化期と考えられる。

H-2 (図V-3・4、表V-6・7、図版V-2・3・5)

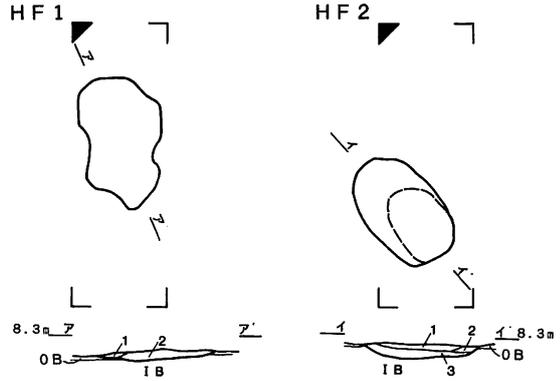
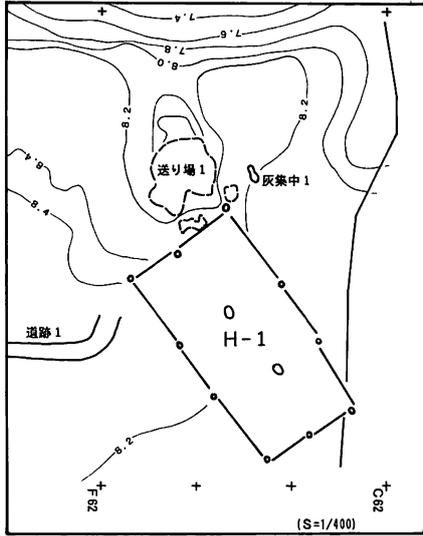
位置 D 58・59、E 58・59 長軸方位 N-87°-W

規模 4.55/4.24×3.67/3.47×0.17m

調査 Ta-a層除去後、0黒層の上面に深さ40cm位のくぼみを確認した。くぼみ内には0黒層が厚く堆積していた。擦文文化期の竪穴住居跡であると予想されたが、くぼみがアイヌ文化期の送り場として利用されていることが多いので0黒層の上面の精査を優先した。その結果、くぼみが送り場であることが判明したのでそれを調査した後にH-2の調査を行なった。

H-2の調査はくぼみの中心から東西南北に試掘溝を設定した。土層断面の観察よりB-Tm層が切られていること、掘り揚げ土があること、下層に縄文時代の住居跡があることがわかった。構築面での上場平面形を検出するため竪穴周辺を少しづつ下げはじめたところで、くぼみの北東側と南西側の2か所に弧状の揚げ土の拡がりを検出した。試掘溝による立上りの確認と揚げ土の拡がりによって

V 0黒層・I黒層の遺構とその遺物

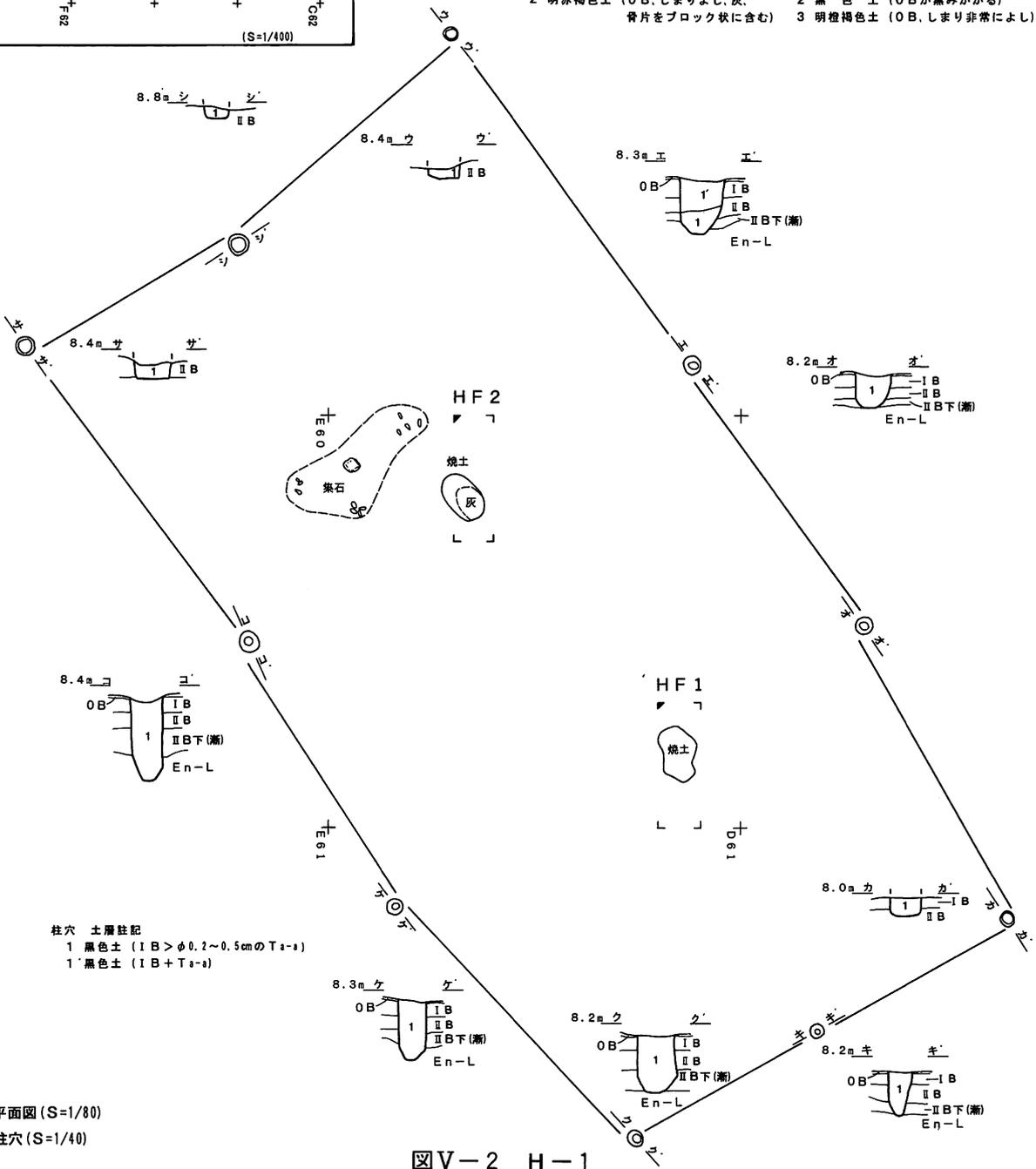


HF1 土層註記

- 1 暗褐色土 (O B, しまりなし, 骨片を少量含む)
- 2 明赤褐色土 (O B, しまりよし, 灰, 骨片をブロック状に含む)

HF2 土層註記

- 1 明灰白色土 (O B, しまり非常によし, 骨片多し)
- 2 黒色土 (O Bが黒みがかかる)
- 3 明橙褐色土 (O B, しまり非常によし)



柱穴 土層註記

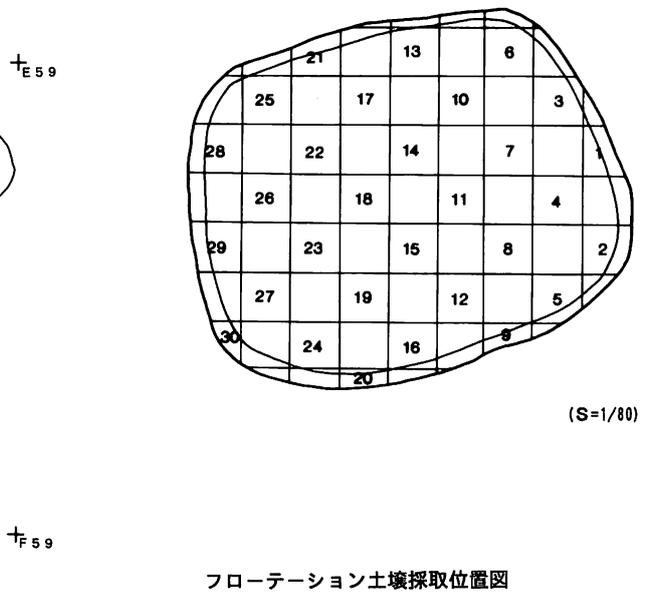
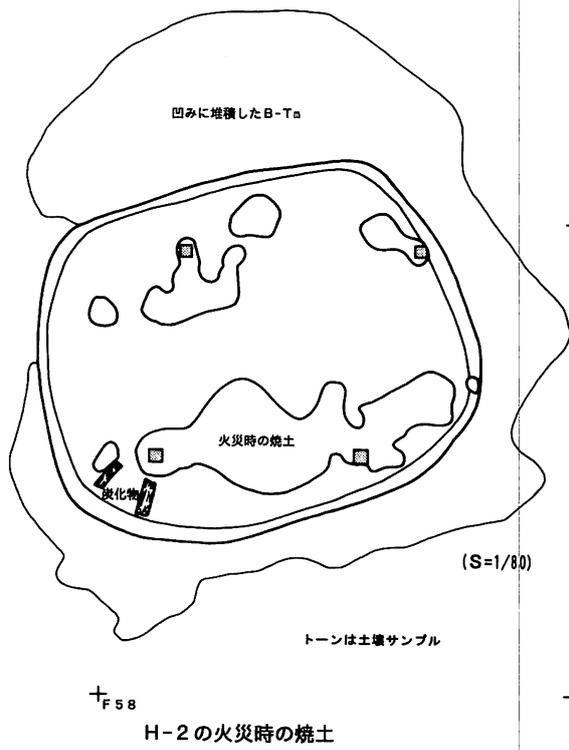
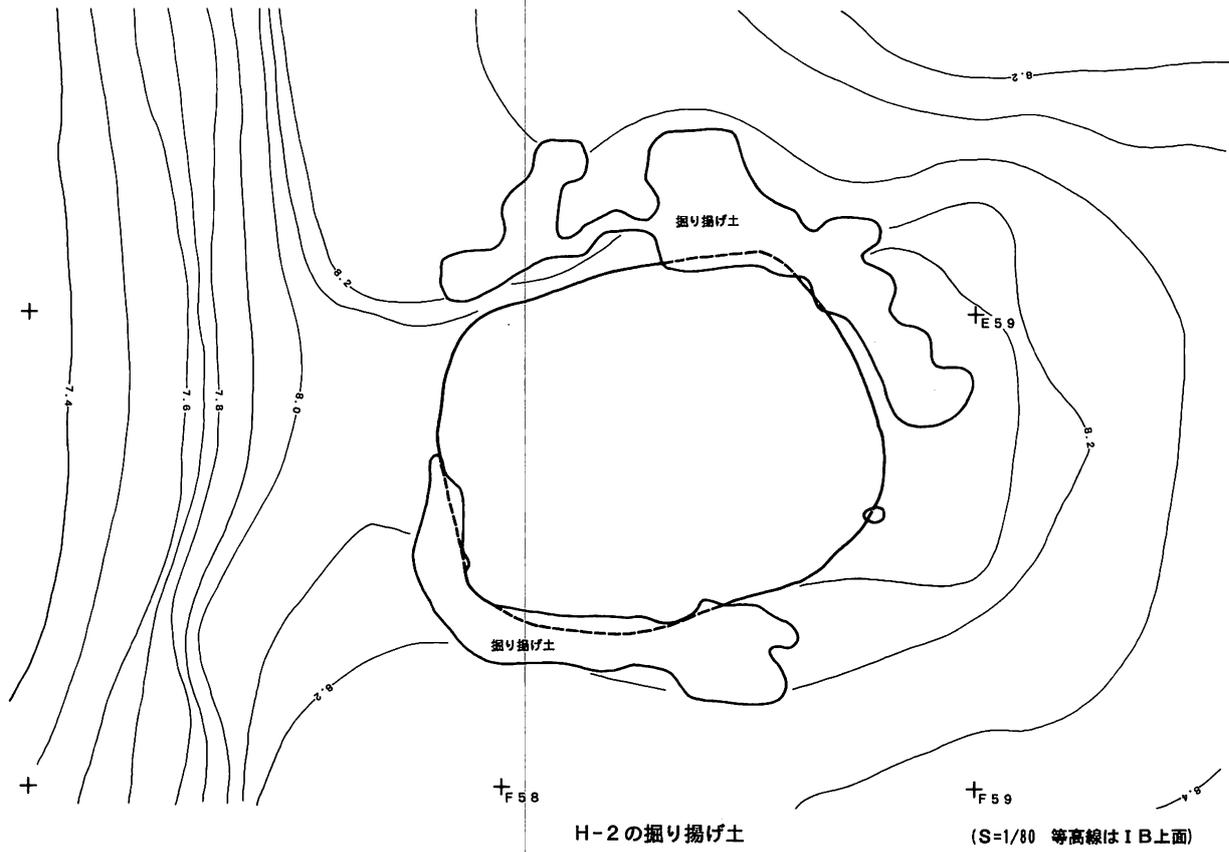
- 1 黒色土 (I B > φ0.2~0.5cmのT a-a)
- 1 黒色土 (I B + T a-a)

平面図 (S=1/80)

柱穴 (S=1/40)

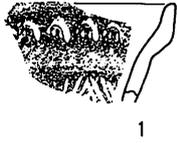
図V-2 H-1

2 住居跡

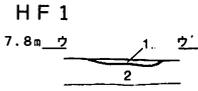
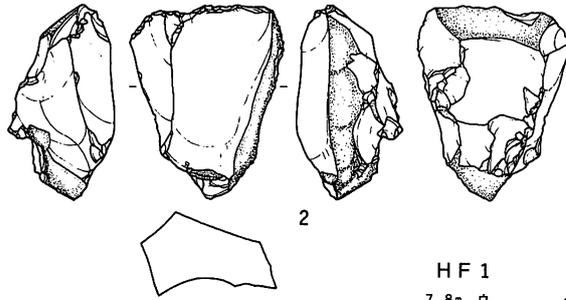


図V-3 H-2(1)

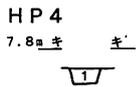
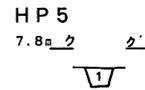
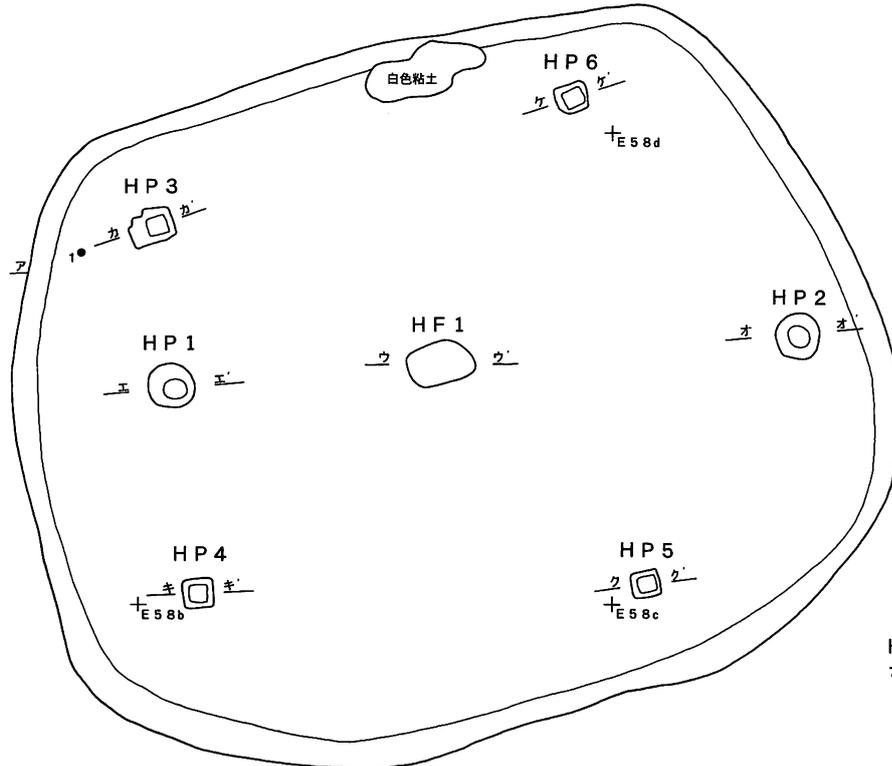
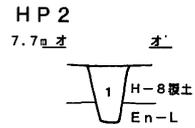
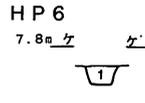
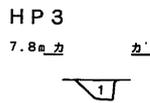
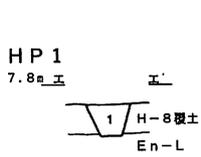
V 0黒層・I黒層の遺構とその遺物



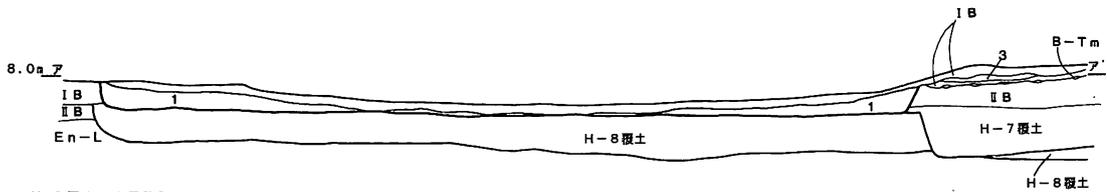
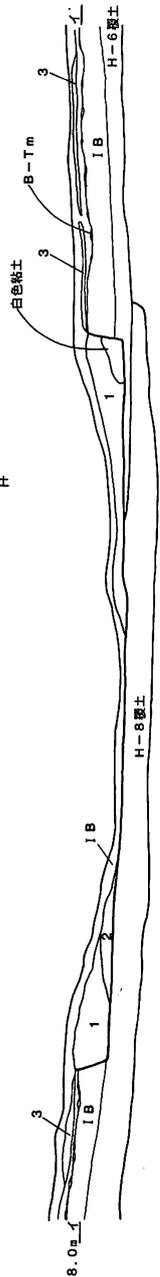
土器・礫石器 (S=1/3)
剥片石器 (S=1/2)



HF1 土層註記
1 明橙褐色焼土 (H-8覆土 > IB, しまりよし)
2 黒色土 (H-8覆土)



HP 土層註記 [HP1~6]
1 黒色土 (IB+H-2覆土1層, しまりなし)



H-2覆土 土層註記
1 黒色土 (IB, 掘り上げ土よりも黒い, しまり弱い)
2 明橙褐色土 (IB, H-2焼失時の焼土, 炭化物を多く含む)
3 黒褐色土 (IB > H-6・8覆土, H-2の掘り揚げ土, 焼土粒, 炭化物を含む, しまり弱い)

図V-4 H-2(2)

2 住居跡

上場平面形が確定できたので竪穴内調査を開始した。竪穴内のⅠ黒層、覆土1層を除去したところ、床面直上で火災による焼土の拡がりや炭化材を検出した。フローテーション用に焼土を4か所で採取した。床面では柱穴6か所、HF1を検出し、HF1はフローテーション用に土壌を採取、床面土壌はフローテーション用に50cm方格割付けをおこない31か所で採取した。HF1は灰像分析を依頼中である。

覆土 覆土1は竪穴中央部分では極めて薄く、住居焼失後に流れ込んだものと推定される。覆土2は住居壁からやや離れたところの床面直上に分布している。平面形と堆積状況から火災によって屋根土が焼土となったものと判断できるが、竪穴中央部分に分布していないことから、屋根全面を覆っていたわけではないようだ。

形態 隅丸長方形。床面は平坦で、壁は高さ15cm前後で外傾し直線的に立ち上がる。

付属遺構 柱穴は6か所で、平面形が方形で浅い柱穴が四隅に4か所、平面形が円形でやや深い柱穴が長軸上に2か所検出された。炉は地床炉で、長軸は住居の長軸方向と同じである。HF1はよく焼けていた。フローテーションの結果未炭化のイネ内外穎が2点検出された。魚骨・獣骨片は含まれていない。竈はなかった。入り口部分は、掘り揚げ土が北西側と南東側の2か所で途切れていること、柱穴の位置から南東部分に想定される。

遺物出土状況 床面から口唇が角張る摩滅した坏の口縁部片が1点、Ⅶd類の甕口縁部片が覆土1層下部から出土した。1と同一個体片がE57d、F59dから出土している。ほかには礫が6個、フレイク2個、縄文後晩期の土器片が10片出土している。また、脱色したEn-Lの白色粘土塊が北側壁際から出土した。粘土塊はしまりはなく、汚れ・混じりが無い。竈がないことから補修材とは考えられず、かつ汚れ・混じりが無いことから土器の原材料と考えられる。

粘土塊をフローテーションした結果未炭化のエゾニワトコの種子が1点検出された。

遺物 1はⅦd類の甕の口縁部片で、同一個体はE57d(図Ⅷ-2-29)、F59d(図Ⅷ-2-30)から出土している。図Ⅷ-2-29は、外面がヨコナデ→馬蹄形圧痕文。内面は内黒、ヨコミガキ。図Ⅷ-2-30は、外面が貼付帯→馬蹄形圧痕文→横位沈線→下段鋸歯状文→上段鋸歯状文。内面は内黒、タテミガキ。29・30とも炭化物が付着する。

2は礫面を打面とする石核で、稜に摩滅がある。この石核はH-2に伴うものではなく、H-2が下層のH-8を破壊した際に紛れ込んだものである。黒曜石製。

時期 B-Tm層を切って構築されていること、掘り揚げ土の上にⅠ黒層が堆積していること、覆土1層下部からⅦd類の甕口縁部片が出土していることからⅦd類の時期以降で、その時期からあまり隔たっていないと考えられる。約10m離れたD55のⅠB2層からⅦd類の甕が1個体出土していることも傍証になるか。

H-10(図V-5・6、表V-2・6・7、図版V-4・5)

位置 J62・63

長軸方位 N-87°-W

規模 -/-×3.62/3.47×0.41m

調査 Ta-a層除去後、0黒層の上面に深さ30cm位のくぼみを確認した。また、道路の側溝によって削り取られた断面の観察より擦文文化期の竪穴住居跡であると予想された。くぼみがアイヌ文化期の送り場として利用されていることが多いのでⅠ黒層の上面の精査を優先したが送り場はなかった。

H-10の調査は側溝によって削り取られた断面を土層観察面として利用した。土層断面の観察よりB-Tm層が切られていること、掘り揚げ土があることがわかった。構築面での上場平面形を検出するため竪穴周辺を少しづつ下げはじめたところで、くぼみの北側と東側に掘り揚げ土の拡がりを検

出した。断面観察により立上りの確認と掘り揚げ土の拡がりによって上場平面形が確定できたので竪穴内調査を開始した。竪穴内の0黒層、覆土を除去し床面の精査を行なった。床面では浅い小穴2か所を検出し、床面土壌はフローテーション用に50cm方格割付けをおこない21か所で採取した。

覆土 覆土6・7・8は竪穴埋没時に最初に堆積した壁際の崩落土である。覆土5は中央部分でやや薄くなってはいるものの全面を覆っており、住居に流れ込んだものと推定される。覆土3・4は竪穴廃棄後暫くたって壁際に流入した土である。覆土5は全面を覆ってはいるものの、すでに覆土6・7・8が堆積していることから、住居中央部分には屋根土はなかったものと考えられる。掘り揚げ土はB-Tm層直上に堆積していた。

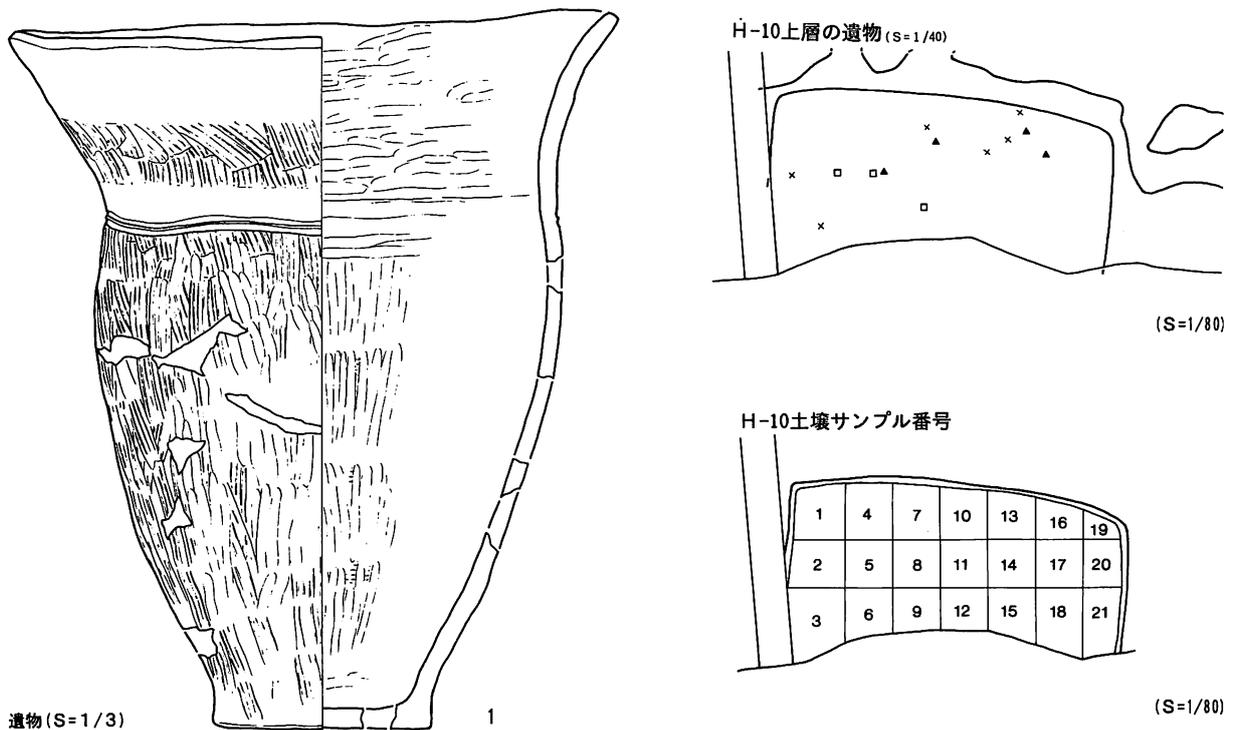
形態 約2/3が削除されているが方形とおもわれる。床面は平坦で、壁は高さ40cm前後で屈曲しながら外方に立ち上がる。

付属遺構 小穴は2か所で、平面形が円形で浅く、柱穴として機能していたかは疑問の残るところである。炉・竈は確認されなかった。竈は南西側に付設されている可能性がある。

遺物出土状況 1はⅦc類の甕で掘り揚げ土下の層準から出土した。ほかに覆土からは礫が2個、フレイク8個、Ⅲ群土器片が7個、時期不明土器片が3個出土し、床面からⅢ群a類土器片が1個、Ⅳb類土器片が1個、時期不明土器片が3個出土している。床面土壌フローテーションの結果炭化種子が出土している。

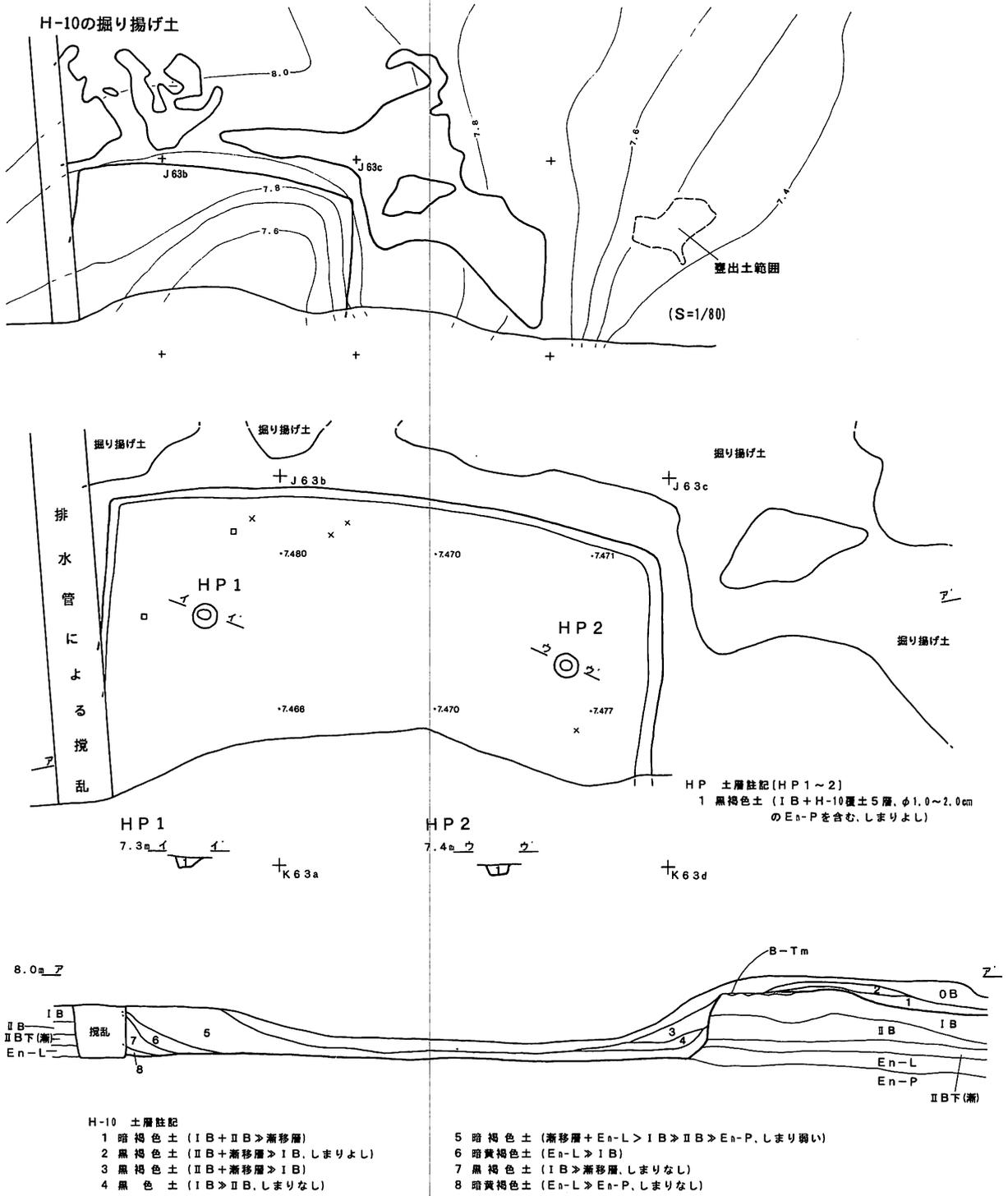
遺物 1はⅦc類の甕で、頸部下半に2本の沈線が施されている。

時期 掘り揚げ土がB-Tm層直上に堆積していること、B-Tm層を切って構築されていることや掘り揚げ土付近出土の甕からB-Tm降下後に近い擦文文化期中期である。(鈴木)



図V-5 H-10(1)

2 住居跡



図V-6 H-10(2)

3 周溝のある墓

周溝のある墓は3基あり台地尾根部分の南側に集中している。これらは同じ平面形をもっているが、主体部構造が異なる。主体部は長軸方向によって3群位に分かれる。時期は擦文文化期前期で、8世紀後葉～9世紀初めの暦年代が与えられる。また、これらは土坑墓と併設されてる。

X-1 (図V-7~9、表V-2・6・7、図版V-6~11)

位置 G 62、H 62

規模 4.22/4.10×3.85/3.71×0.48m (区画域) **長軸方位**

1.08/0.96×0.47/0.36×0.43m (G 1) N-25°-W (G 1)

1.09/0.92×0.57/0.43×0.36m (G 2) N-46°-W (G 2)

-/-×0.50/0.41×0.34m (G 3) N-51°-W (G 3)

1.16/1.00×0.33/0.28×0.26m (G 4) N-22°-E (G 4)

調査 Ta-a層除去後、H 62 bで0黒層の上面に深さ8cm位の楕円形くぼみ(G 1にあたる)を確認した。このくぼみは土壌の落ち込みと予想されたため、その周囲を残してH 62全体を3cm位(0 B層厚分)下げたところ、直径4m、幅20cm位の輪状で僅かに褐色がかかった土の拡がり(周溝にあたる)とG 1に当たるくぼみの西側に紡錘形で僅かに褐色がかかったわずかなくぼみ(G 2にあたる)を確認した。そこで、くぼみの短軸上と輪状の直径線上を横断する位置にトレンチを設けた。その結果中央に土壌2基、両端に溝が確認された。

この時すでに、G ライングリットは排土用通路確保のために先行して調査を進め、En-P面まで下がっていた。H 62の北面セクションを確認したところ2か所でB-Tmが堆積する溝を追認できた。以上より、B-Tm降灰以前の溝・土壌を持つ擦文文化期の遺構であることがわかった。周溝断面オ・キの上中下部で花粉分析を行なっている。

土壌の数は2基と予想されたので、溝の調査を先行させた。面を下げての調査は溝の構築面を削平してしまう可能性があるため、トレンチの断面からB-Tmの堆積を目安に、溝底を追ようにして調査した。土壌はG 1の調査をはじめに行なった。トレンチ両面から掘り進んでゆくと、北西壁と南東壁に別な土壌(G 3・G 4)を検出した。G 1・G 3・G 4調査終了後にG 2を調査した。

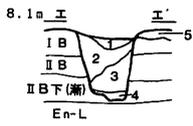
周溝の覆土 溝の深さによって覆土層の枚数は異なるが、すべて流れ込みの堆積を示している。周溝の1層は区画域内の掘り揚げ土の上を覆うI B層である。B-Tmは周溝がほぼ埋まりきった時期に降下していることがわかる。周溝を掘り揚げた排土は区画域(周溝の内側を区画域と呼ぶ)に置いている。

土壌の覆土 いずれの土壌も覆土は埋土で構成されている。G 2・G 3は土壌上面が周溝の掘り揚げ土によって覆われている。周溝の掘り揚げ土の上に堆積した褐色がかかった土の拡がり(I B'層のこと)、G 2・G 3が遺体が腐食した後に掘り揚げ土が若干陥没して堆積したものである。G 1・G 4は周溝の掘り揚げ土を切っている。

周溝の形態 幅は40~25cmで南西部分が広く北東部分が狭い。深さは50~25cmで南西部分が深く北東部分が浅い。底面は平坦で、断面形は直線的で外傾する立ち上りをもつ。南西部分の底面には幅20cm位の長楕円形の凹みがあった。その形態から鋤による掘削が行われたと推定される。周溝は南側で途切れており意図的に周溝の掘削を停止している。その位置が土壌の長軸方向上であることから、途切れは墓道として機能していたと考えられる。

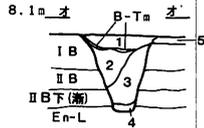
土壌の形態 G 1・G 2・G 3は平面形が長方形で、立上りは直線的でやや外傾する。墳底面はEn-Lまで掘削されている。G 4は平面形が長細い楕円形で、立上りは直線的でやや外傾する。墳底

3 周溝のある墓



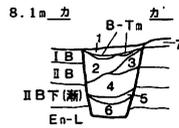
イ 土層註記

- 1 黒色土 (I B, しまりなし) N1.5/0
- 2 黒色土 (I B+II B, しまりなし) N1.5/0
- 3 黒褐色土 (I B+II B>漸移層, しまりなし) Hue10YR2/2
- 4 黒褐色土 (I B+II B>漸移層, 漸移層ブロック状) Hue10YR3/2
- 5 周溝の掘り揚げ土



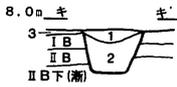
オ 土層註記

- 1 黒色土 (I B, しまりなし) N1.5/0
- 2 黒褐色土 (I B+II B>漸移層, しまりなし) Hue10YR2/2
- 3 黒褐色土 (I B+II B>漸移層) Hue10YR2/2
- 4 黒褐色土 (I B+II B>漸移層, 漸移層ブロック状) Hue10YR3/2
- 5 周溝の掘り揚げ土



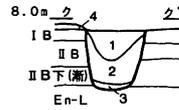
カ 土層註記

- 1 黒色土 (I B, しまりなし) N1.5/0
- 2 黒褐色土 (I B+II B>漸移層, しまりなし) Hue10YR2/2
- 3 暗褐色土 (I B>漸移層, しまりなし) Hue10YR3/3
- 4 黒褐色土 (I B+II B>漸移層, 炭化物を多く含む, しまりなし) Hue10YR3/2
- 5 黒褐色土 (I B+II B>漸移層, しまりなし) Hue10YR2/2
- 6 暗褐色土 (漸移層+En-L>II B, しまりなし) Hue10YR3/3
- 7 周溝の掘り揚げ土



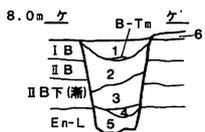
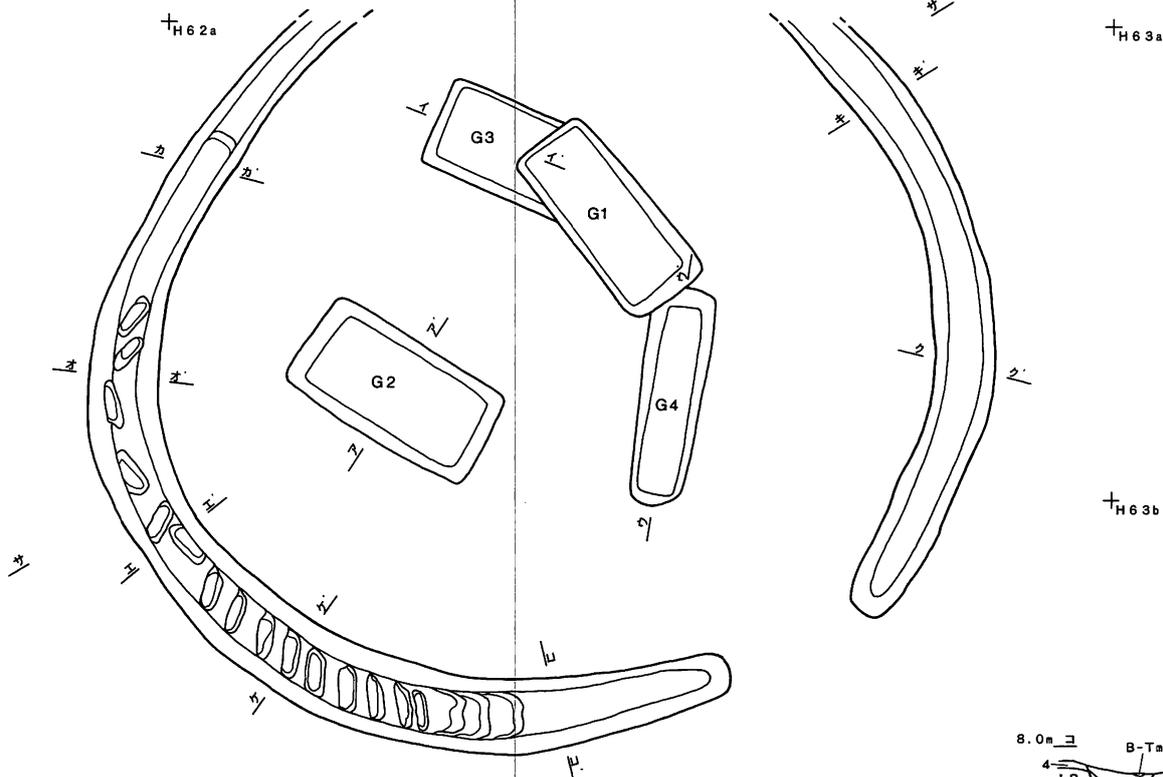
キ 土層註記

- 1 黒色土 (I B, しまりなし) N1.5/0
- 2 黒褐色土 (I B+II B>漸移層, 炭化物を多く含む, しまりなし) Hue10YR3/2
- 3 周溝の掘り揚げ土



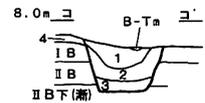
ク 土層註記

- 1 黒色土 (I B, しまりなし) N1.5/0
- 2 黒褐色土 (I B+II B>漸移層, しまりなし) Hue10YR3/2
- 3 黒色土 (I B+II B>漸移層, 漸移層ブロック状) Hue7.5YR1.7/1
- 4 周溝の掘り揚げ土



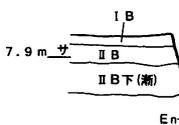
ケ 土層註記

- 1 黒色土 (I B, しまりなし) N1.5/0
- 2 黒褐色土 (I B+II B>漸移層, しまりなし) Hue10YR3/3
- 3 黒色土 (漸移層+En-L>II B, 漸移層ブロック状) Hue7.5YR1.7/1
- 4 黒褐色土 (I B+II B>漸移層, しまりなし) Hue10YR2/2
- 5 黒色土 (漸移層+En-L>II B, 漸移層ブロック状) Hue7.5YR1.7/1
- 6 周溝の掘り揚げ土



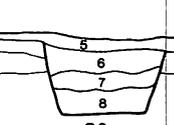
コ 土層註記

- 1 黒色土 (I B, 炭化物を多く含む, しまりよし) N1.5/0
- 2 黒色土 (I B+II B, しまりなし) N1.5/0
- 3 黒褐色土 (I B+II B>漸移層, しまりなし) Hue10YR3/2
- 4 周溝の掘り揚げ土



G2 土層註記

- 6 黒色土 (I B>II B, しまりよし) Hue10YR1.7/1
- 7 暗褐色土 (漸移層>II B+En-L, しまり弱い) Hue10YR3/3
- 8 にぶい黄褐色土 (En-L>漸移層, しまりなし) Hue10YR4/3



G1 土層註記

- 1 黒色土 (I B+II B>En-L+漸移層, 草本炭化物を多く含む, 粘性強し) Hue7.5YR1.7/1
- 2 暗褐色土 (En-L+漸移層>I B+II B, 粘性強し, しまりなし) Hue10YR3/3

周溝・掘り揚げ土 土層註記

- 3 黒色土 (I B) N1.5/0
- 4 黒褐色土 (I B+II B>漸移層, 炭化物を多く含む, しまりなし) Hue10YR2/2
- 5 黒色土 (I B>II B>漸移層>En-L, 漸移層ブロックを含む, 炭化物を多く含む, しまりなし) Hue7.5YR1.7/1

図 V-7 X-1(1)

面は漸移層中で止まっている。

遺構の構築順序 G 2・G 3は周溝の掘り揚げ土に覆われていること、G 2・G 3は長軸方向を同じくすること、G 1・G 4は周溝の掘り揚げ土に覆われていないこと、G 1はG 4を切っていることより以下の順序が考えられる。

1 : G 2・G 3の掘削・埋め戻し→2 : 周溝の掘削→3 : 掘り揚げ土を区画域とG 2・G 3の上に覆う→4 : G 4の掘削・埋め戻し→5 : G 1の掘削・埋め戻し。

また、G 4はG 2・G 3を避け、長軸方向を変えて設けられていること、G 1はG 4をやや避け、長軸方向を変えて、G 3の1/2を破壊して設けられていることから、構築順「3 : 」と「4 : 」、「4 : 」と「5 : 」の時間差は互いの存在が認識できていたくらい時間と推定でき、追葬と考えられる。

遺物出土状況 土壙からは、G 1壙底から頁岩の礫片が1点、G 4埋土1層から坏片2点、うち1点は土器集中aの破片と接合して坏(図V-8-6)となった。周溝内からは球胴甕(図V-9-10)が1個体出土している。この球胴甕は周溝セクション-Cの2層上部から出土していること、接合破片が区画域縁(土器集中e)にもあることから、溝が少し埋ったときに区画域縁に置かれたものである。区画域内では墓道側の周溝の縁に多く出土しており、いずれも周溝の掘り揚げ土上面から出土している。土器集中a・dの接合例は4例であり、大型甕2個(図V-9-11・12)、内外黒坏・内黒坏2個(図V-8-6・7)である。土器集中aからは内黒坏1個(図V-8-5)、その脇からは須恵器坏1個(図V-9-8)が出土している。土器集中dからは紡錘車(図V-8-3)が出土している。球胴甕胴部~底部(図V-9-9)は区画域の内と外の接合例で、胴部が区画域内の土器集中dで底部が区画域外の土器集中bから出土している。また、9・10はG 59・60、H 59のI黒層とも接合関係を持つ(図V-30参照)。5・6・7は内面の剝落が特に顕著であることから、風化・凍結するような環境に正位置で置かれていたと考えられる。また、11・12は表面の劣化が著しい同じような状態にあったと推定できる。9・10には表面の劣化がみられない。これらの土器はすべてⅦ群b類である。

ほかには、周溝内から縄文中期の土器片2点、後北B式深鉢胴部片4点、礫2点出土した。G 62は周溝の及んでいたグリットであるが擦文土器は1点も出土してなく、供献土器はなかったようだ。区画域から甕片1点、土器集中dで接合しない甕・坏の細片が15点出土している。

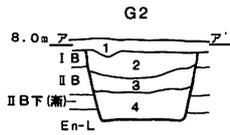
遺物(図V-8・9、図版V-9~11)

1は球胴甕の口縁部、同一個体片?がG 58(図Ⅷ-2-23)、G 59(図Ⅷ-2-24)から出土している。外面はタテハケ→ヨコナデ→沈線→ヨコナデ、内面はヨコハケ→ヨコナデ→ヨコミガキ。これらは、口縁端面がへこむくらい内外面から強くはさまれてナデられ、頸部と口縁部の境に沈線が施される。2は甕の底部、内面はヨコハケ、外底面は葉脈圧痕がある。3は紡錘車で側面の沈線をミガキで所々潰している。5は体部下半がわずかに外反し、体部上半が内彎しながら立ち上がる内黒坏で、内面の劣化・剝落が著しい。6は体部が内彎している内外黒坏で所々剝落がある。7は体部下半が外彎し、体部上半が内彎気味に立ち上がる大型の内黒坏で、内面の剝落が著しい。8は須恵器坏で、体部下半は腰が張らずやや内彎気味に立上り、体部上半でやや外反する。高台は外へ踏ん張らない。畳付きは内傾して凹む。9・10は球胴甕で内外面に劣化・剝落はない。11は大型甕で内外面の劣化が著しい。12は大型甕で外面に劣化がみられ、炭化物が付着する。

4は珪質頁岩の垂角礫、層理に沿って割り、厚みを減じた後に角を打ち欠いている。

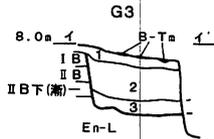
時期 G 1・G 2・G 3・G 4・周溝はいずれもB-Tm降灰以前に埋没していることや区画域内・周溝出土の土器の時期から、8世紀後葉から9世紀はじめと考えられる。(鈴木)

3 周溝のある墓



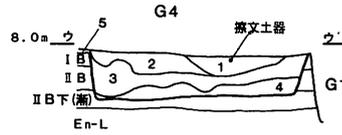
G2 土層註記

- 1 黒色土 (IB>漸移層、やや褐色がかる、炭化物を多く含む、しまりなし、周溝の掘り揚げ土) Hue7.5YR1.7/1
- 2 黒色土 (IB>IIB、しまりよし) Hue10YR1.7/1
- 3 暗褐色土 (漸移層>IIB+En-L、しまり弱い) Hue10YR3/3
- 4 にぶい黄褐色土 (En-L>漸移層、しまりなし) Hue10YR4/3



G3 土層註記

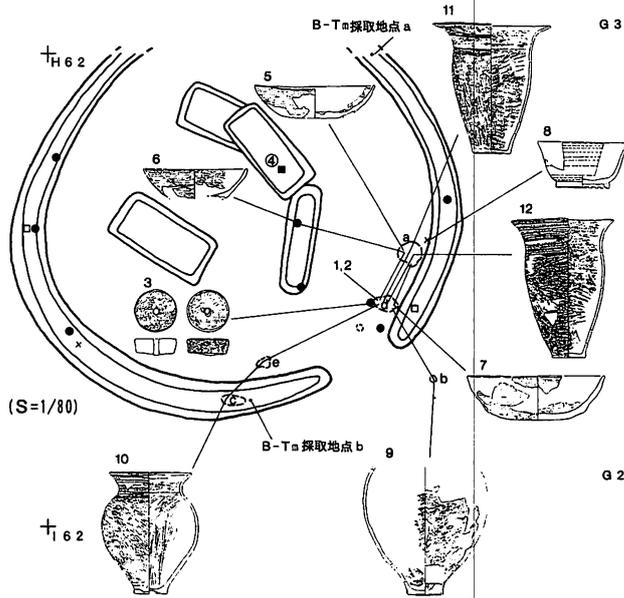
- 1 黒色土 (IB>漸移層、やや褐色がかる、炭化物を多く含む、しまりなし、周溝の掘り揚げ土) Hue7.5YR1.7/1
- 2 暗褐色土 (漸移層+En-L>IIB、しまり弱い) Hue10YR4/3
- 3 褐色土 (En-L>漸移層、やや粘質、しまり弱い) Hue10YR4/4



G4 土層註記

- 1 黒色土 (IB、しまりなし) Hue10YR1.7/1
- 2 黄褐色土 (漸移層+En-L、しまりよし) Hue2.5Y5/6
- 3 黒色土 (IIB>IB>漸移層、漸移層ブロック状) Hue10YR1.7/1
- 4 褐色土 (漸移層>IIB、しまり弱い) Hue10YR4/4
- 5 周溝の掘り揚げ土

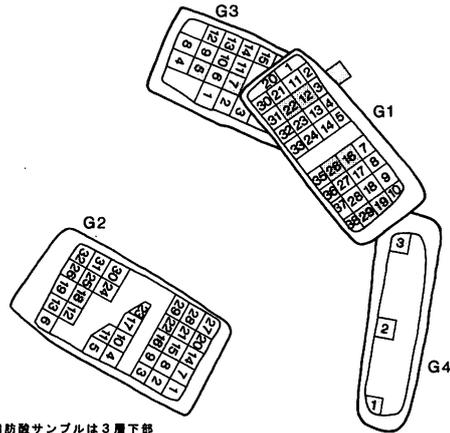
遺物出土状況



サンプル位置図

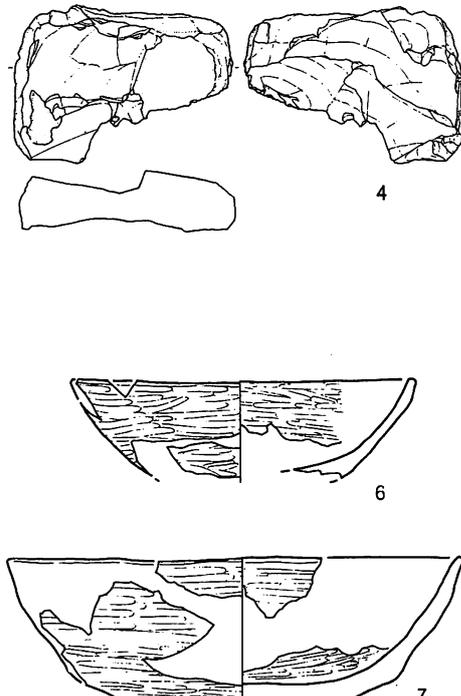
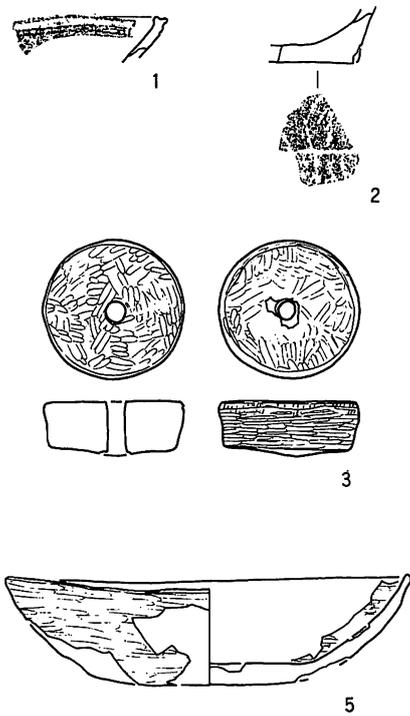
G3:脂肪酸サンプルは3層下部
フローテーションサンプルは2層下部

G1:脂肪酸サンプルは2層下部
フローテーションサンプルは1層下部



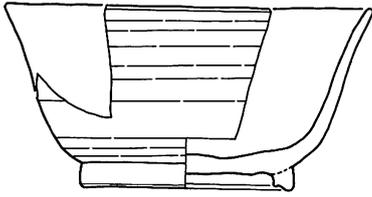
G2:脂肪酸サンプルは3層下部
フローテーションサンプルは2層下部

トーンは脂肪酸サンプル

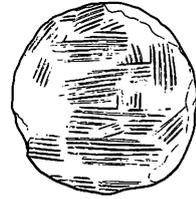


図V-8 X-1(2)

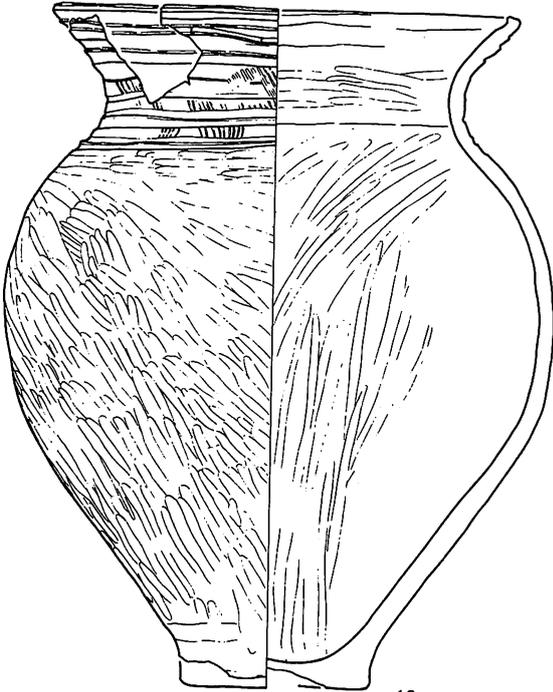
遺物(S=1/3)



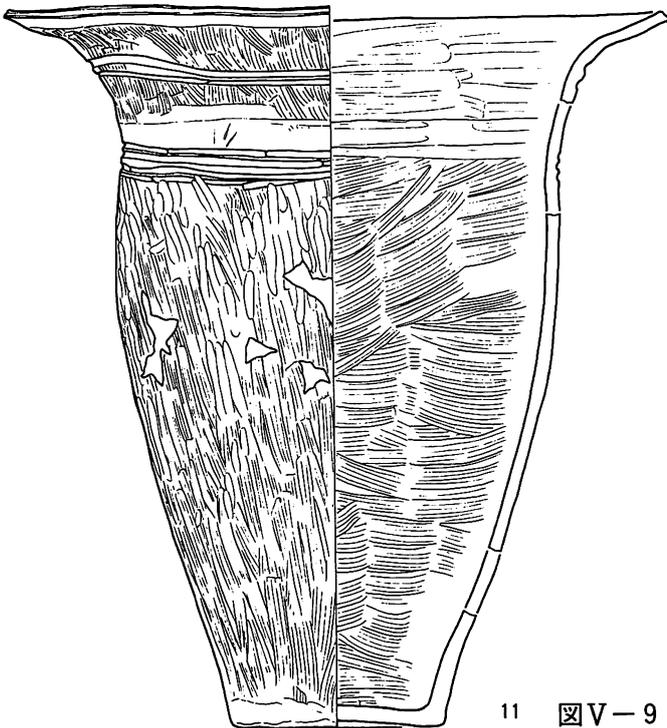
8



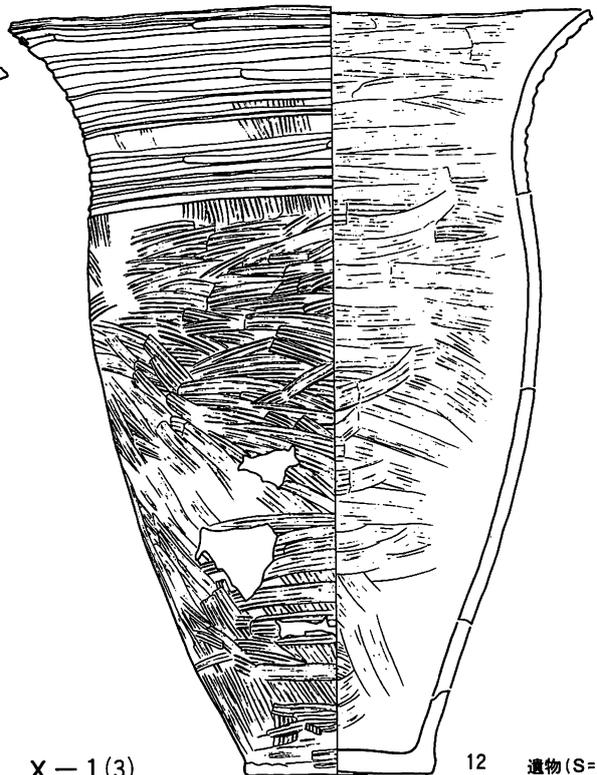
9



10



11 図V-9 X-1(3)



12 遺物(S=1/3)

3 周溝のある墓

X-2 (図V-10・11、表V-1、図版V-6・12~14)

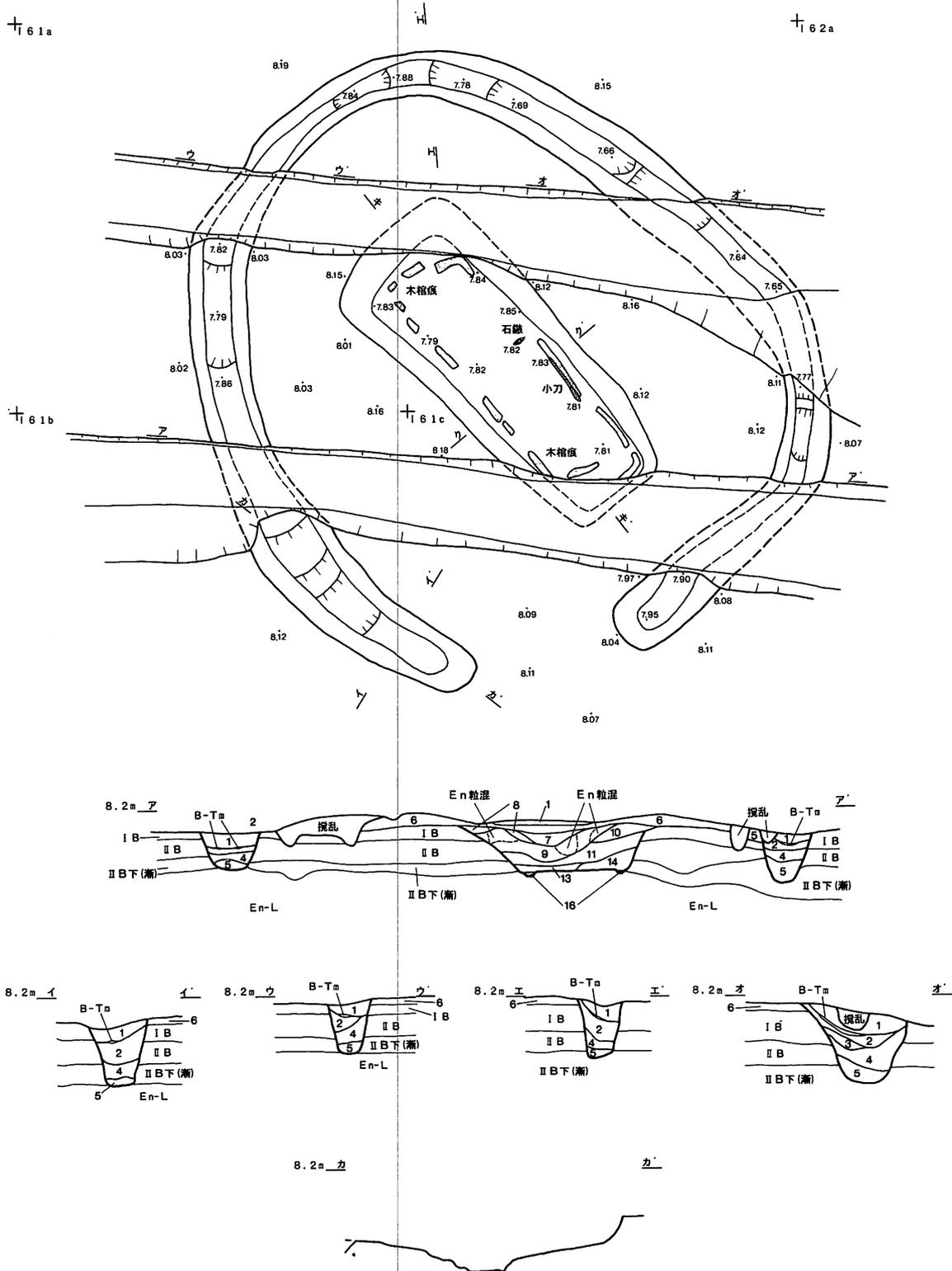
位置 I 61、I 62

墓壇長軸 N-20°-W

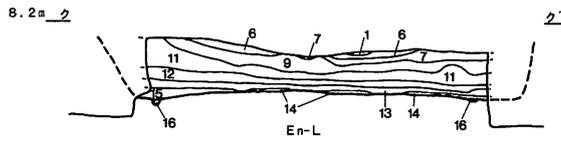
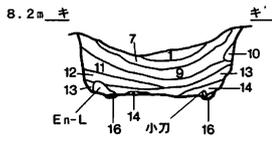
規模 4.10 / (3.50) × 3.71 / (2.77) × 0.50m (区画域)

(2.30) / (2.03) × 0.93 / 0.65 × 0.37m (墓壇)

調査 X-1の調査中、これが墓であれば近接してもう何基か同様の遺構がありそうだという予測

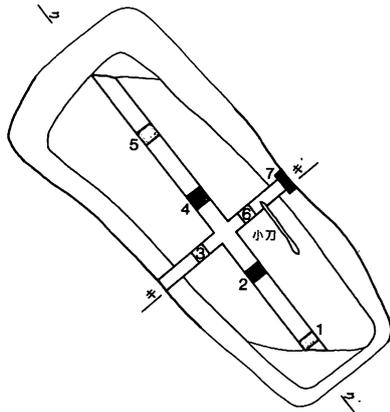


図V-10 X-2(1)



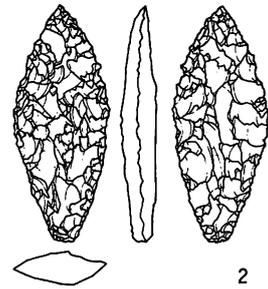
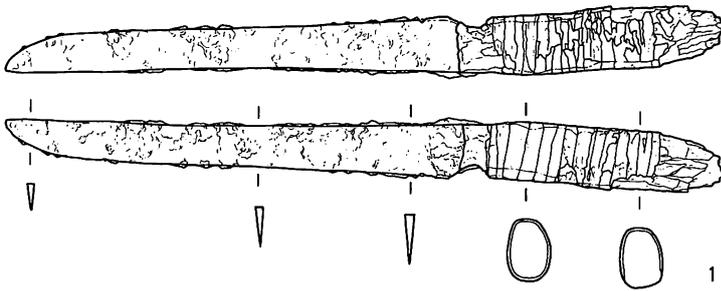
X-2 土層註記

- | | |
|-------------------------------------|--|
| 1 黒褐色土 (IB>T _{a-c}) | 9 暗褐色土 (IB>T _{a-c} >II B+漸移層+E _{n-L} , E _{n-L} 粒を多量に含むブロックあり) |
| 2 黒褐色土 (IB) | 10 暗褐色土 (IB>II B+T _{a-c} >漸移層+E _{n-L}) |
| 3 暗褐色土 (IB>E _{n-L} ブロック) | 11 黒褐色土 (IB>T _{a-c} >E _{n-L}) |
| 4 黒色土 (IB, T _{a-c} を微量に含む) | 12 黒色土 (IよりE _{n-L} 粒少なく, 黒味がさらに強い) |
| 5 褐色土 (漸移層>IB) | 13 褐色土 (E _{n-L} >漸移層>II B) |
| 6 黒色土 (IB>II B>漸移層) | 14 濁黄褐色~濁黄茶褐色土 (漸移層>IB+II B+T _{a-c}) |
| 7 濁黄褐色土 (IB+E _{n-L}) | 15 濁暗黄褐色土 (I4より黒味強い) |
| 8 黒色土 (IB>T _{a-c}) | 16 黒褐色土 (φ0.5mmのE _{n-P} を多量に含む, 木棺痕) |



1・5：花粉分析
2・4・7：脂肪酸分析

X-2 墓底底土層サンプル位置図



剥片石器 (S=1/2)

図V-11 X-2(2)

のもと、南23号道路下のⅠ黒層を精査した結果、X-3と並んでX-2をとらえた。道路部分は現道・旧道の側溝や上下水道管により数条の攪乱を受け、細長く分断されていた。しかし上層にはTa-a層が残存しており、広く大きな攪乱はない。この攪乱溝の壁面観察とⅠ黒層の上面からの凹み確認で、周溝とその中央部にある墓壙を発見したのである。

調査はまず、攪乱で寸断された周溝の正確な位置をおさえるため、攪乱溝の壁面を精査し、寸断ごとに1～3箇所ベルトを残して周溝を掘りあげた。これら断面や調査中の溝の全域でB-Tmの堆積が検出され、X-1同様B-Tm降灰以前の擦文文化期の遺構と確認された。

墓壙も攪乱溝の壁面に南北の斜断面が観察できたため、これをもとに長軸・短軸に直交する10cm幅のベルトを設定し、4ブロックにわけて土壌を採取しながら徐々に掘り下げた。墓壙断面や副葬品、木棺跡を精査し、ベルトから脂肪酸分析用土壌サンプルを採取した後、完掘した。

周溝の覆土 溝は、流れ込みの土によって埋まっている。Ta-a降下前は、凹みの痕跡程度であったことがわかる。B-Tmは溝が埋まりかかった頃に降灰している。溝の掘り揚げ土は覆土6で、セクション図のように周溝内側の区画域に薄く置かれており、墓壙の上にもかかっている。

墓壙の覆土 覆土各層の土砂混在具合から、埋め戻されたものと思われる。溝の掘り揚げ土が墓壙の上にもかかっており、しかもやや落ち込んでいることは、墓壙を埋めた後で周溝を掘ったこと、遺体の腐食後、少しへこんだことがわかる。

周溝の形態 幅は26～50cmで、北側が狭く、東側や南西部が広めの傾向がある。深さは24～50cmで南東部と北西部がやや浅い傾向にある。底面には鋤による掘削痕が認められ、エレベーション図で示したごとく凹凸が著しい部分が多い。断面で見ると底面は平坦に作られ、立上りは直線的で比較的垂直気味であるが、区画域の肩が崩落した部分もみられる。周溝はX-1と同じく南側には巡っておらず、墓道としての意味を持つものと考えられる。

墓壙の形態 上端の平面形はほぼ長方形で、壁面は直線的に外傾斜して立ち上がる。壙底面はEn-Lの最上面に平坦につくられ、平面はやはり長方形である。攪乱により、北と南の2コーナーを失っている。壙底縁部には断続する帯状の黒色土が確認でき、これは木棺の跡と考えていた。調査後、青森県八戸市殿見遺跡の同型の遺構との類似性を指摘された。木棺跡のありかたから見て、底に板はなく墓壙内縁に立てかけた板に蓋板を乗せた棺で、遺体安置後に墓壙内で組み合わされたものと推定された。頭位は後述する小刀の向きから、南と思われる。なお、棺の板や遺体およびその外包物の残存などは確認されていない。壙底から脂肪酸分析用土壌サンプルを採取し、現在分析依頼中である。

遺物出土状況 墓壙底の東長辺中央部、木棺跡の内側に沿って小刀が1本副葬されていた。切先を北に、刃を上に向けた状態であった。その切先の20cm北には、石槍が横位置で出土した。これは墓壙掘り込み時に壊したP-35かⅡ黒層から出土したものを置いたか、埋め戻し時にP-35から脱落したものと考えられる。

遺物 1は平棟平造の小刀で、反りはなく、刃部長17.6cm、緩く湾曲する刃区を持ち、刃には使い減りがみられる。茎には柄の拵えが良好な状態で残っており、木質とそれを巻いた桜?の皮が観察できる。2は、黒曜石製の石槍(またはナイフ)で、横長剥片を素材としている。腹面側の二次調整は丁寧な施され、主要剥離面を残していない。

時期 X-1との関連や、溝が埋まりかかった頃にB-Tmが降灰していることから、8世紀後葉から9世紀初めころの、擦文文化期前期の墓ととらえられる。(三浦)

X-3 (図V-13、表V-7、図版V-14)

位置 I 60、J 60 ad

長軸方向 N-30°-E

規模 5.4×4.28×0.18~0.38m 周溝の幅0.4~0.6m

調査 包含層調査中に、馬蹄形の周溝を持つ墓 X-1 を検出した。さらに擦文時代の土坑墓が調査区内台地上に集中していた。そこで、台地上を擦文時代の墓域として推察した。そのため X-1 のならびに同様な遺構、馬蹄形の周溝を持つ墓がまだあることを想定せねばならなかった。上面清掃後、道路の側溝による攪乱をサブトレンチとして利用するなどして確認調査した。すると X-1 の東側から、ふたつの馬蹄形の周溝を発見した。包含層 II 黒中にやや色調の異なる黒色土が馬蹄形状に入り込んでいた。三基のうち西端に位置するのが X-3 である。溝を掘りあげ、墓穴の確認を行った。

形態 周溝は他の 2 基とは異なり、ほぼ楕円形に近い。長軸は南北方向を向く。溝の断面形態を観察すると、ほぼ箱堀形に掘込んでいる事がうかがえる。短軸方向と並行に二本の溝状の攪乱がはしる。いずれも道路の側溝痕である。周溝部分は南西端に 1 m の切れ目がある。主体部もしくは土層については検出できなかった。可能性として図中で周溝の中央に示した凹み (トレンチ A 土層 4・5・6) がある。しかし、床面と壁面の区別がはっきりしない為、風倒木による攪乱である可能性が高い。墓穴が、攪乱で消失した可能性もあるが、もともと土層を持つ墓がなかった可能性がある。八戸市殿見遺跡 1 号墳など青森県における円形周溝墓にそのような類例はある。

覆土 周溝の土層は自然堆積による埋没状況を示している。

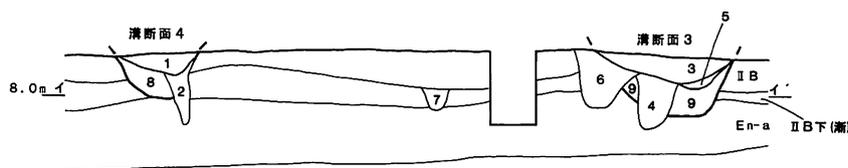
遺物出土状況 溝中から、流入による縄文土器が出土した。他に、遺物の出土はなかった。

時期 立地から他の 2 基の円形周溝墓と同時期であることが想定できる。8 世紀後葉~9 世紀初頭と思われる。(大泰司)



トレンチ A (溝断面 1・2) 土層註記

- 1 黒色土 (φ0.5cmのTn-cおよびEn-Pを極微量に含む)
- 2 黄褐色土 (En-Lブロックがうすく層状に入り込む)
- 3 暗黄褐色土 (II BからEn-Lへの漸移層)
- 4 黒色土
- 5 暗褐色土 (II B > En-L)
- 6 黒色土 (II B、腐植土、木根による攪乱)
- 7 黒色土 (φ0.5cmのTn-cおよびEn-Pを微量に含む)
- 8 黒褐色土 (φ1.0~2.0cmのEn-P斑状に混じる)

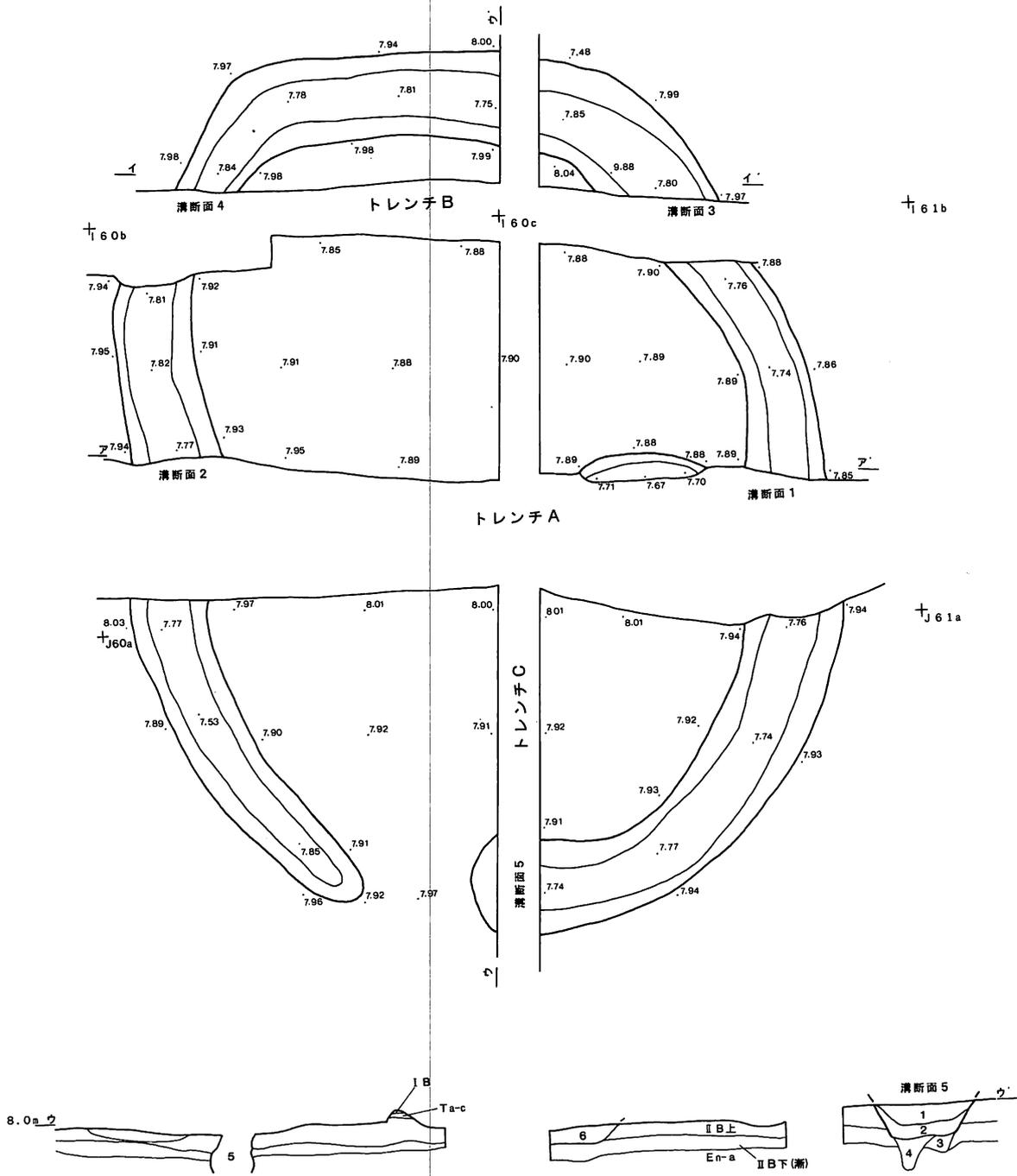


トレンチ B (溝断面 3・4) 土層註記

- 1 黒色土 (φ0.5cmのEn-Pを含む)
- 2 暗褐色土 (II B + En-L、木根による攪乱)
- 3 黒色土 (φ0.5~0.4cmのEn-Pを微量に含む)
- 4 黒褐色土 (II B > En-L、φ0.5cmのEn-Pを微量に含む)
- 5 暗褐色土 (II B > En-L)
- 6 暗褐色土 (II B > En-L、木根による攪乱)
- 7 暗褐色土 (II B > En-L、φ0.1cmのEn-Lが斑状に入り込む、木根による攪乱)
- 8 暗黄褐色土 (1にEn-Lを多量に含む、しまりなし)
- 9 暗黄褐色土 (3にEn-Lを多量に含む、しまりなし)

図V-12 X-3(1)

3 周溝のある墓



- トレンチC(溝断面5) 土層註記
- 1 黒色土 (Ta-cを微量に含む)
 - 2 黒褐色土 (Ta-cを微量に含む、鉄分がよく混じる)
 - 3 暗褐色土 (φ1.0~2.0cmのEn-Pが斑状に入り込む、木根による攪乱)
 - 4 黒褐色土 (φ0.1cmのEn-Pを含む、木根による攪乱、しまりなし)
 - 5 黒褐色土 (φ0.5~1.0cmのTa-cを多量に含む、φ0.5~1.0cmのEn-Pを微量に含む)
 - 6 黒色土 (しまりあり)

図V-13 X-3(2)

4 土墳

土坑墓は台地尾根部分の北側に集中している。土坑墓は平面形で4群に分かれ、長軸方向で2群位に分かれる。時期は擦文文化期前期で、8世紀中葉～9世紀初めの暦年代が与えられる。またこれら土坑墓は周溝のある墓と併置されているものもある。P-9、12、17、28、29、30、31は墳底の土壌の脂肪酸分析を依頼中である。(鈴木)

(1) 擦文文化期の土坑墓

P-2 (図V-14、表V-6・8、図版V-15)

位置 A 60 c・61 b、B 60 d・61 a 長軸方向 N-67°-W

規模 (1.32)/1.17×(0.86)/0.96×(0.51) m

調査 上面は耕作によって削平されていたので、En-Lで平面形を確認した。長軸方向にセクションを設定して半割した。

覆土 1層は上面からの攪乱。層界の乱れている2～4層は流れ込みの覆土。En-Lをブロックで含む5層は埋土。5層以下は埋土。埋め戻しの堆積状況を示すことから土坑墓と考えられる。

形態 平面形は長楕円形、墳底は平坦で、壁は直線的でやや外傾する。深さは上面が削平されているわりに深い。

遺物出土状況 遺物はすべて2層からの出土である。非ロクロ内黒坯の口縁部・体部細片が9点、縄文土器片が1点、礫が3点。また、同じグリットの耕作土から段状沈線の甕(Ⅷ-4-42)下半部が出土した。P-2の上半部は耕作により削平されているのでP-2の墳口に置かれた可能性が高い。

時期 2層から非ロクロ内黒坯が出土していることからⅦb類の頃と考えられ、平面形が他の土坑墓(P-17、P-29)と類似するので、これらの土坑墓と時期が近接していると考えられる。

P-3 (図V-14、表V-8、図版V-15)

位置 C 63 ab 長軸方向 N-12°-W

規模 (1.25)/1.12×(0.76)/0.60×(0.11) m

調査 上部は耕作によって削平されていたので、En-Lで平面形を確認した。短軸方向にセクションを設定して半割した。

覆土 1層はEn-Lが混じったI黒で埋土である。埋め戻しの堆積状況を示すことから土坑墓と考えられる。

形態 平面形は隅丸長方形、墳底は平坦で、壁は直線的でやや外傾する。

遺物出土状況 遺物はすべて1層からの出土である。礫は墳底付近から、土器は上部から出土した。縄文晩期土器片が3点、礫が3点。

時期 1層上部から縄文晩期土器片が出土してはいるものの、平面形が他の土坑墓(平面形:P-9、P-12、P-27)と類似することから、Ⅶb類の頃と考えてよく、これらの土坑墓と時期が近接していると考えられる。

P-8 (図V-14・16・17、表V-3・6・8、図版V-16・20)

位置 D 60 d 長方方向 N-25°-W

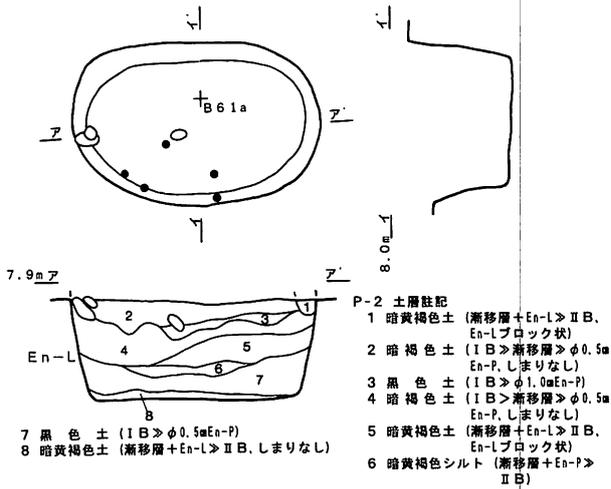
規模 1.42/1.22×0.53/0.43×0.26 m

調査 I黒層を4cm下げたところで暗褐色の土の拡がりを検出した。長軸方向にセクションを設定して半割した。

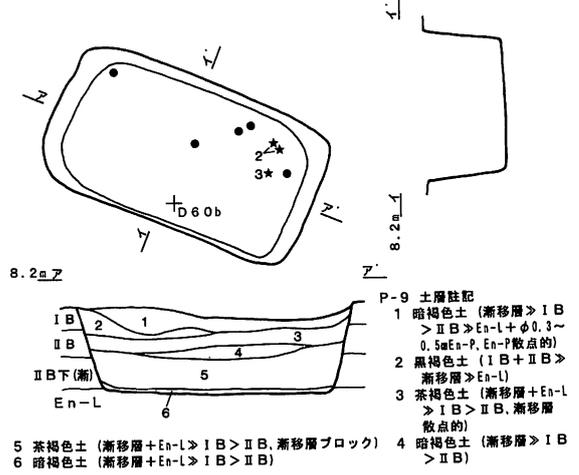
覆土 漸移層をブロックで含む1層は埋土。1層以下は埋土。埋め戻しの堆積状況を示すことから

4 土壌

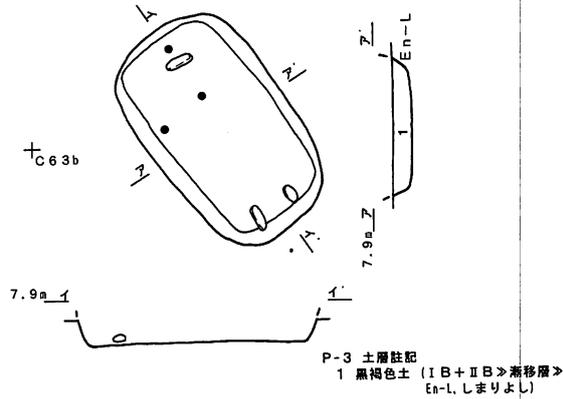
P-2



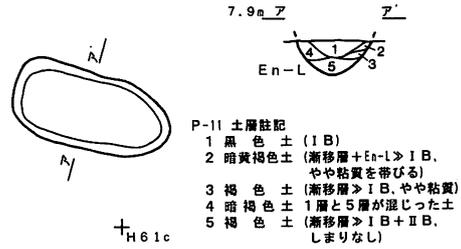
P-9



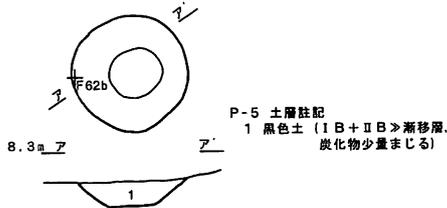
P-3



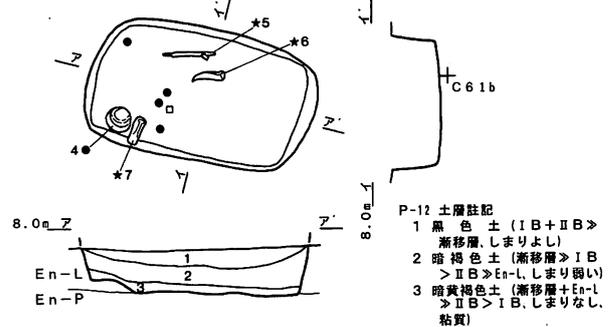
P-11



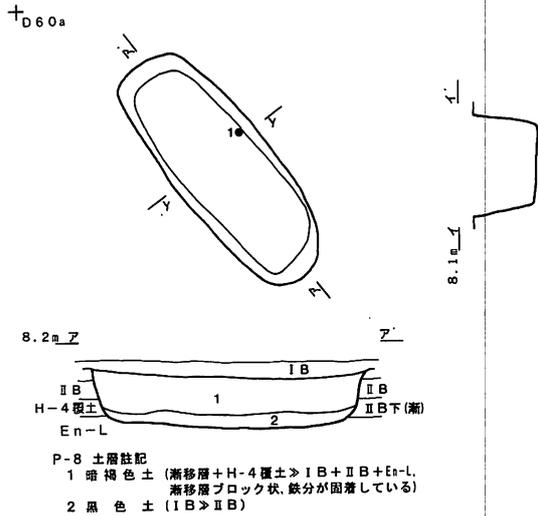
P-5



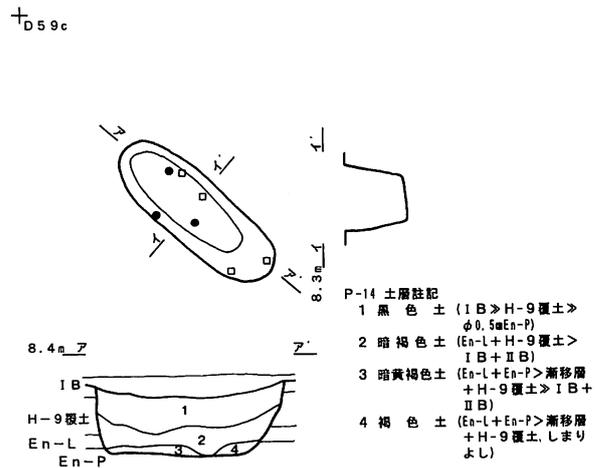
P-12



P-8



P-14



図V-14 土壌(1)

土坑墓と考えられる。

形態 平面形は長楕円形、壙底は平坦で En-L 上部に及んでいる。壁は直線的で外傾する。

遺物出土状況 遺物はほとんど1層からの出土である。壙底面から非ロクロ坏の口縁～体部片（図 V-17-1）が1点、そのほか、1層から縄文晩期土器片が4点、縄文後期土器片が2点、縄文中期土器片が1点、不明土器片2点、フレイク4点、石斧片1点、礫が1点出土している。

遺物 1は坏の口縁～体部片で1/12しか残存していなかったが復元・実測した。体部は内彎し、体部中央に段状沈線を持つ。

時期 壙底面から非ロクロ坏の口縁～体部片が出土していることからⅦb類の頃と考えられる。平面形・長軸方向が他の土坑墓（平面形：P-28）（長軸方向：X-1・G1）と類似することから、これらの土坑墓と時期が近接していると考えられる。

P-9（図V-14・16・17、表V-1・8、図版V-16・20）

位置 D 59 a・60 d

長軸方向 N-53°-W

規模 1.45/1.25×0.79/0.72×0.44m

調査 I黒層を数cm下げたところで暗褐色の土の拡がりを検出した。長軸方向にセクションを設定して半割した。

覆土 層界の乱れている1～4層は流れ込みの覆土。En-Lをブロックで含む5層は埋土。5層以下は埋土。埋め戻しの堆積状況を示すことから土坑墓と考えられる。

形態 平面形は隅丸長方形、壙底は平坦で En-L 上面に及んでいる。壁は直線的で外傾する。

遺物出土状況 5層下部の壙底面近くから刀子と手斧が出土している。土器は一次整理時に所在が不明になったので詳細は不明である。3層からは擦文土器4点、時期不明1点。5層上部から擦文土器5点、縄文中期土器片が1点。

遺物 2は小型の曲刃鎌。両端を欠失しているが大きな湾曲が見てとれる。3は小型の手斧。柄の袋部には隙間があり、その正面には木質の付着がみられる。刃部を錆で欠損している。

時期 5層上部から擦文土器が出土していることから擦文文化期と考えられる。平面形・長軸方向が他の土坑墓（平面形：P-3、P-12、P-27）（長軸方向：P-30、P-31）と類似することから、これらの土坑墓と時期が近接していると考えられる。

P-12（図V-14・16・17、表V-1・3・6・8、図版V-17・20）

位置 C 60 cd

長軸方向 N-63°-W

規模 (1.20)/1.08×(0.69)/0.63×(0.25)m

調査 上面は耕作によって削平されていたので、En-Lで平面形を確認した。長軸方向にセクションを設定して半割した。

覆土 1層は流れ込みの覆土。En-Lを含む2層は埋土。2・3層は埋土。埋め戻しの堆積状況を示すことから土坑墓と考えられる。

形態 平面形は隅丸長方形、壙底は掘削痕を残してやや平坦で En-P 上面に及んでいる。壁は直線的で外傾する。

遺物出土状況 壙底から刀子と鎌、壁際の壙底から完形内黒坏（図V-17-4）と斧が出土している。ほかには、1層から内黒坏口縁片1点、続縄文期土器片が2点、縄文後期土器片が1点、フレイク1点出土している。

遺物 4は内黒坏で体部は直線的に外上方にたちあがり、内面に凹線状の段、外面に体部中ばに段を持つ。外底面にはケズリがみられる。5は刀子。柄と鞘の木質の残存状態からみて、区部にある柄

縁金具までが鞘に収まる呑口式である。切先は欠損する。6は緩い曲刃鎌。柄を装着する折り返しがある。先は欠損、中央部に綾織布?が付着している。7は袋柄斧。刃縁は曲率を持ち、袋部はあわせが大きく開いている。

時期 壙底から非ロクロ内黒坏が出土していることからⅦb類の頃と考えられる。平面形・長軸方向が他の土坑墓(平面形:P-3、P-9、P-27)(長軸方向:P-2)と類似することから、これらの土坑墓と時期が近接していると考えられる。

P-14 (図V-14、表V-8、図版V-17)

位置 D 59 c

長軸方向 N-33°-W

規模 1.01/0.74×0.35/0.23×0.42m

調査 I黒層を4cm下げたところでEn-Pを含んだ黒色の土の拡がりを検出した。長軸方向にセクションを設定して半割した。

覆土 En-Pを含んだ1層は流れ込みの覆土。2層以下は埋土。埋め戻しの堆積状況を示すことから土坑墓と考えられる。

形態 平面形は長楕円形、壙底は平坦でEn-P上面に及んでいる。壁は外彎する。

遺物出土状況 壙底面から縄文中期土器片が1点、そのほか、1層から縄文後期土器片が1点、不明土器片1点、フレイク2点、礫が2点出土している。

時期 壙底面から縄文中期土器片が1点出土してはいるものの、平面形・長軸方向が他の土坑墓(平面形:P-30、P-31)(長軸方向:P-8、P-17)と類似することから、これらの土坑墓と時期が近接していると考えられる。

P-17 (図V-15、表V-8、図版V-18)

位置 E 59 c

長軸方向 N-32°-W

規模 0.98/0.76×0.63/0.49×0.55m

調査 I黒層を4cm下げたところで12cm位のくぼみを検出した。長軸方向にセクションを設定して半割した。

覆土 1~2層は流れ込みの覆土。1層と2層のあいだにB-Tmが堆積している。3層以下は埋土。埋め戻しの堆積状況を示すことから土坑墓と考えられる。

形態 平面形は楕円形、壙底は平坦でEn-L上部に及んでいる。壁は直線的で外傾する。

遺物出土状況 2層からフレイク3点、礫が1点出土している。

時期 平面形・長軸方向が他の土坑墓(平面形:P-2、P-29)(長軸方向:P-8、P-14)と類似することから、これらの土坑墓と時期が近接していると考えられる。

P-27 (図V-15・16・17、表V-1・3・6・8、図版V-18・21)

位置 B 60 acd

長軸方向 N-45°-W

規模 (1.48)/1.30×(0.91)/0.85×0.26m

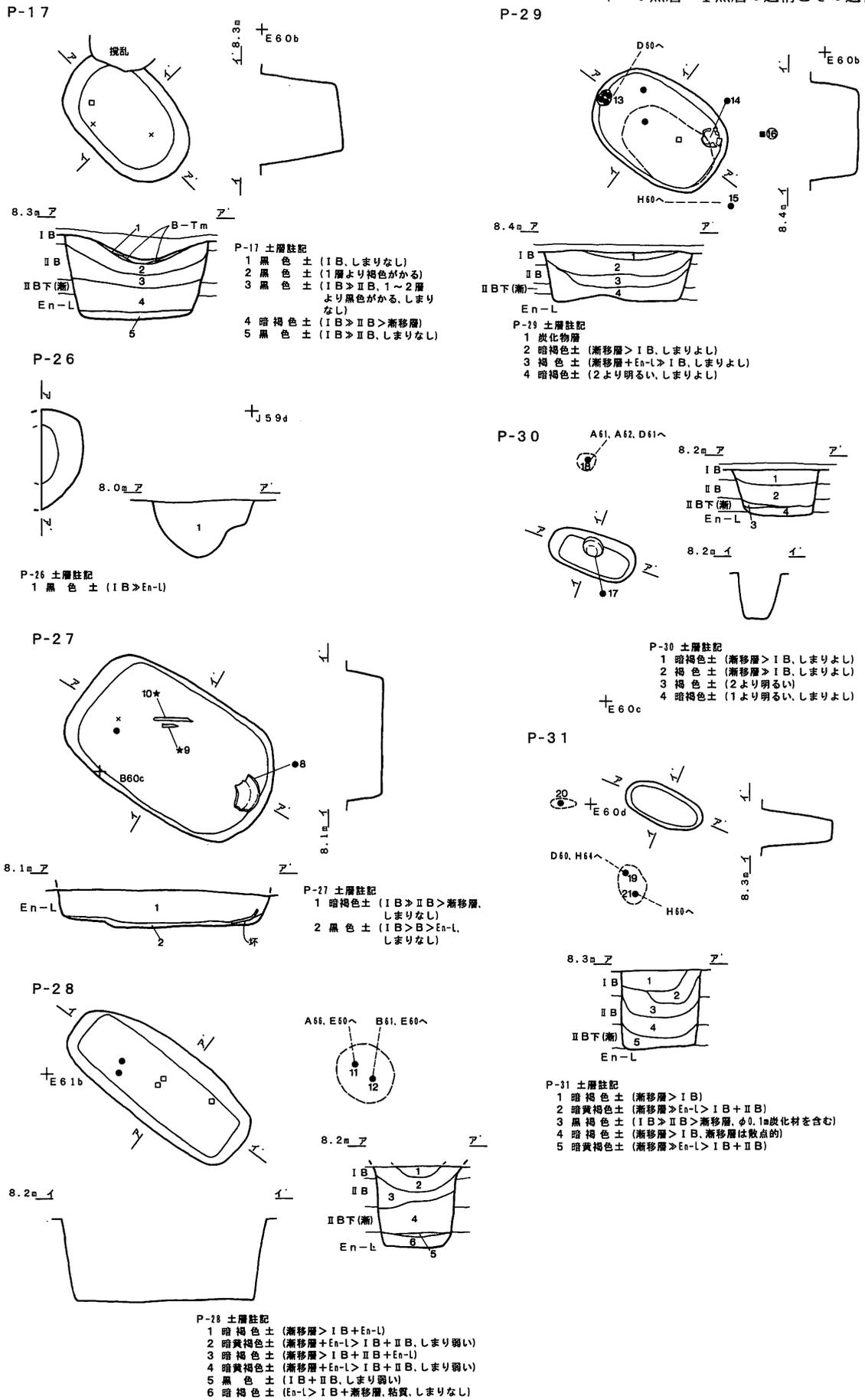
調査 上面は耕作によって削平されていたので、En-Lで平面形を確認した。長軸方向にセクションを設定して半割した。

覆土 1層以下は埋土。埋め戻しの堆積状況を示すことから土坑墓と考えられる。

形態 平面形は隅丸長方形、壙底は平坦でEn-L中部に及んでいる。壁は直線的で外傾する。

遺物出土状況 壙底から鉄素材・刀子が2点、2層の壙底面近くから内黒坏1点、内黒坏は約1/2が打ち欠かれ壙底の立上り部分にあわせて、枕のようにおかれていた。2層から続縄文土器片1点、1層からフレイク1点が出土している。

V 0黒層・I黒層の遺構とその遺物



図V-15 土層(2)

遺物 8は体部下半が外彎し、体部上半が内彎気味に立ち上がる大型の内黒坏、内外面は体部と底部の境に段を持つ。**9**は細帯状の鉄素材。**10**は細身の刀子。緩い傾斜の刃区がある。柄は刃部とほぼ同じ長さの柄の木質が残存しており、特異な形態を呈する。切先は欠損する。

時期 2層の壙底面近くから非ロクロ内黒坏が出土していることからⅦb類の頃と考えられる。平面形・長軸方向が他の土坑墓（平面形：**P-9**、**P-12**）（長軸方向：**P-28**、**P-29**）と類似することから、これらの土坑墓と時期が近接していると考えられる。

P-28（図V-15・16・18、表V-3・6・9、図版V-19・21）

位置 E 61 ab

長軸方向 N-41°-W

規模 (1.41) / 1.22 × (0.58) / 0.40 × (0.57) m

調査 I黒層上部で暗褐色の楕円形の拡がりを検出した。またその東側約0.6mには小型甕片の集中があった。短軸方向にセクションを設定して半割した。

覆土 1～2層は流れ込みの覆土。3層以下は埋土。埋め戻しの堆積状況を示すことから土坑墓と考えられる。

形態 平面形は長楕円形、壙底は平坦でEn-L上面に及んでいる。壁はやや外彎する。

遺物出土状況 5層から縄文後期土器片1点、礫2点。3層から縄文後期土器片1点が出土している。壙口付近からはミニチュア甕と小型甕が出土している。

遺物 11は頸部に段状沈線があるミニチュア甕で頸部と胴部の境に段状沈線による段を持つ。耕作土出土の土器片と接合することから、石膏復元部分は耕作によって失われたと考えられる。底部は砂圧痕が付き、穿孔されている。**12**は頸部に凹線がある小型甕で、耕作土出土の土器片と接合することから、石膏復元部分は耕作によって失われたと考えられる。

時期 壙口付近から小型甕が出土していることからⅦb類の頃と考えられる。平面形・長軸方向が他の土坑墓（平面形：**P-8**）（長軸方向：**P-27**、**P-29**）と類似することから、これらの土坑墓と時期が近接していると考えられる。

P-29（図V-15・16・18、表V-3・6・9、図版V-19・22）

位置 E 60 a

長軸方向 N-41°-W

規模 0.98/0.89 × 0.66/0.58 × (0.34) m

調査 I黒層上部で炭化物の楕円形の拡がりを検出した。またその南側約0.2mには須恵器双耳坏が置かれていた。長軸方向にセクションを設定して半割した。

覆土 1層は炭化物層。2層は流れ込みの覆土。3層以下は埋土。埋め戻しの堆積状況を示すことから土坑墓と考えられる。

形態 平面形は楕円形、壙底はやや凹凸があり、En-L上部に及んでいる。壁は直線的で外傾する。

遺物出土状況 壁際4層中位から内黒坏と小型甕、壙口付近から須恵器双耳坏と敲石が出土している。その他には4層から上述の小型甕を除く甕片が3点、4層から縄文晚期土器片2点、不明土器片1点、礫2点出土している。2層からⅦb群細片が16点出土している。**15**は外内面に剝落があることから、風化・凍結するような環境に正位置で置かれていたと考えられる。**13・14**には内外面に剝落がみられない。

遺物 13は内黒坏で体部は内彎しながら立ち上がる。外面体部上半に弱い凹線。内面体部上半にミガキ残された弱い凹線状の溝が巡る。**14**は小型甕で内外面・口縁部破断面に炭化物が付着する。**15**は須恵器双耳坏で内外面に剝落がある。**16**は敲石で安山岩の円礫、長軸側の一端を使う。土壙の脇から30cm離れたところで出土した。

時期 壁際4層中位から非ロクロ内黒坏と小型甕、壙口付近から須恵器双耳坏が出土していることからⅦb類の頃と考えられる。平面形・長軸方向が他の土坑墓（平面形：P-2、P-17）（長軸方向：P-27、P-28）と類似することから、これらの土坑墓と時期が近接していると考えられる。

P-30（図V-15・16・18、表V-3・4・6・9、図版V-19・23）

位置 E 60 ad

長軸方向 N-53°-W

規模 0.61/0.48×0.29/0.19×(0.32) m

調査 I黒層上部でEn-Lを含んだ暗褐色土の楕円形の拡がりを検出した。またその北側約0.4mには中型甕の破片が集中していた。長軸方向にセクションを設定して半割した。

覆土 1層は流れ込みの覆土。2層以下は埋土。埋め戻しの堆積状況を示すことから土坑墓と考えられる可能性がある。

形態 平面形は楕円形で土坑墓にしては小さい。壙底は平坦でEn-L上面に及んでいる。壁は直線的で外傾する。

遺物出土状況 壁際壙底から完形内黒坏が1点、壙口付近から中型甕が出土している。

遺物 17は非ロクロ非内黒坏で体部は直線的に外上方に立ち上がる。体部下半の底部近くに沈線。18は中型甕で頸部と胴部の境に段状沈線による段を持つ。耕作土出土の土器片と接合することから、石膏復元部分は耕作によって失われたと考えられる。

時期 壁際壙底から非ロクロ非内黒坏が1点、壙口付近から中型甕が出土していることからⅦb類の頃と考えられる。平面形・長軸方向が他の土坑墓（平面形：P-14、P-31）（長軸方向：P-9、P-31）と類似することから、これらの土坑墓と時期が近接していると考えられる。

P-31（図V-15・16・18、表V-4・6・9、図版V-19・23）

位置 E 60 d

長軸方向 N-54°-W

規模 0.56/0.49×0.27/0.20×0.54 m

調査 I黒層上部でEn-Lを含んだ暗褐色土の楕円形の拡がりを検出した。またその南側約0.3mには小型甕・ミニチュア甕2個体分の破片が集中し、西側に約0.3mに須恵器坏が出土している。長軸方向にセクションを設定して半割した。

覆土 1～3層は流れ込みの覆土。4層以下は埋土。埋め戻しの堆積状況を示すことから土坑墓と考えられる。

形態 平面形は楕円形で土坑墓にしては小さい。壙底は平坦でEn-L上面に及んでいる。壁は直線的で上方に立ち上がる。

遺物出土状況 土壙内から遺物は出土していない。壙口付近から須恵器坏、ミニチュア甕、中型甕が出土している。20は細片になって出土し、外面の剝落が特に顕著であることから、風化・凍結するような環境に逆位置で置かれていたと考えられる。

遺物 20は須恵器坏で外面の剝落が著しい。19はミニチュア甕で頸部と胴部の境に段を持つ。底部穿孔。21は小型甕で底部穿孔。

時期 壙口付近から小型甕、須恵器坏が出土していることからⅦb類の頃と考えられる。平面形・長軸方向が他の土坑墓（平面形：P-14、P-30）（長軸方向：P-9、P-30）と類似することから、これらの土坑墓と時期が近接していると考えられる。
(鈴木)

(2) 続縄文時代相当の土坑

P-5 (図V-14、表V-8、図版V-15)

位置 F 62 ab 規模 (0.62) / 0.28 × (0.60) / 0.24 × (0.14) m

調査 I 黒層中部で確認した。

覆土 1層は Ta-c が混じった I B である。

形態 平面形は円形、坑底は平坦で、壁は外彎する。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

時期 構築面の層準をとらえていないこと、遺構内から遺物が出土していないことから正確なことは不明である。当該グリットから後北 B 式土器片が 6 点出土しているのでこの時期の可能性はある。

P-11 (図V-14、図版V-16)

位置 H 61 ad 長軸方向 N - 60° - W

規模 (0.85) / 0.67 × (0.41) / 0.33 × (0.18) m

調査 En-L 層中で確認した。短軸方向にセクションを設定して半割した。

覆土 層界の乱れている 1 ~ 5 層は流れ込みの覆土。

形態 平面形は楕円形、坑底は皿状で En-L 中部に及んでいる。壁は外彎する。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

時期 構築面の層準をとらえていないこと、遺構内から遺物が出土していないこと、平面形が他の土坑墓と異なること。正確なことは不明であるが当該グリットからは後北 B 式土器片が 38 点出土していることからこの時期の可能性はある。

P-26 (図V-15、図版V-18)

位置 J 59 a 規模 0.69/0.34 × - / - × 0.38 m

調査 道路側溝の攪乱に断面が見えていた。長軸方向にセクションを設定して半割した。

覆土 1層は Ta-c が混じった I 黒である。埋め戻しの堆積状況を示していない。

形態 平面形は楕円形、坑底は皿状、壁は外彎する。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

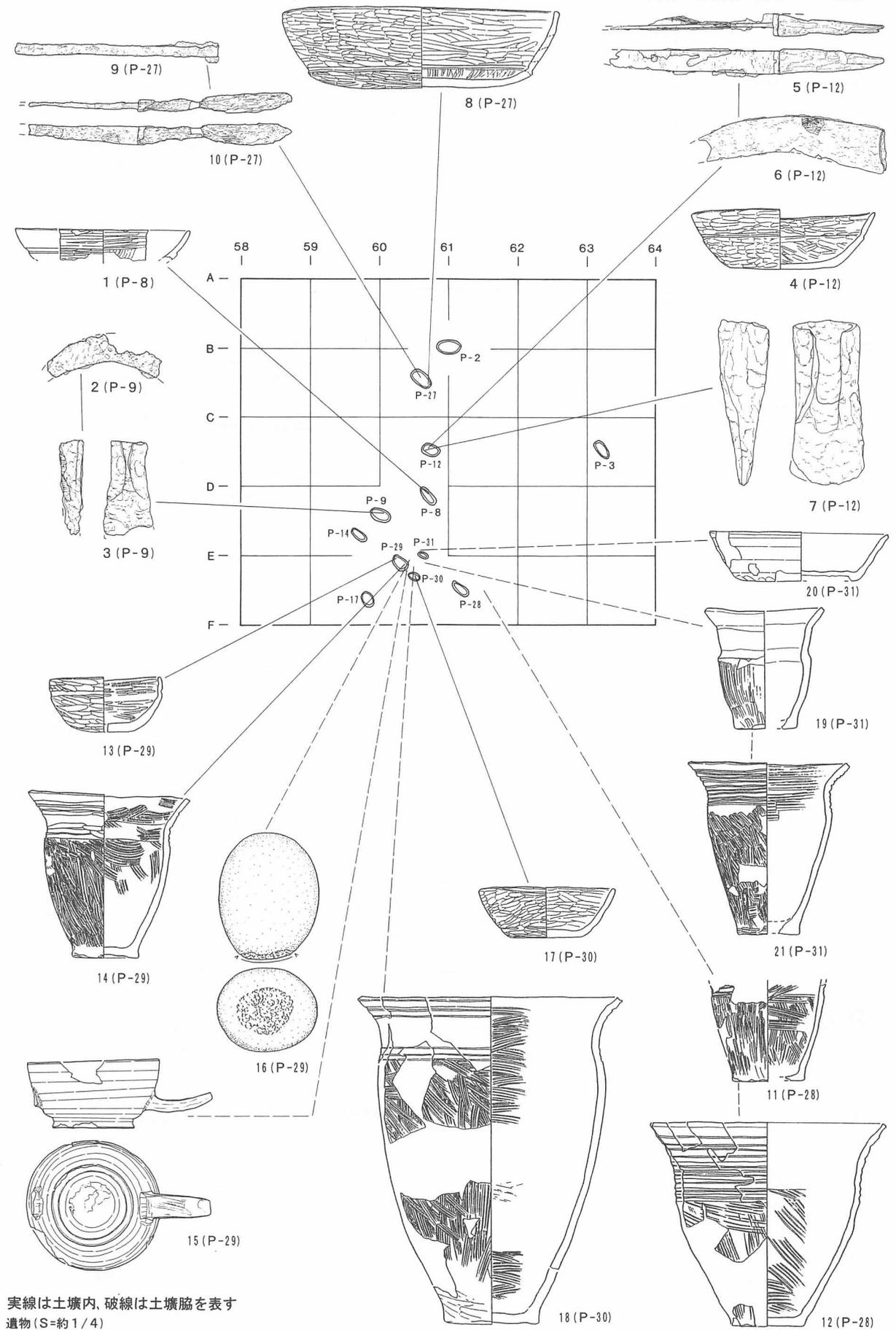
時期 遺構内から遺物が出土していないこと、平面形が他の土坑墓と異なることより正確なことは不明であるが、当該グリットから後北 C₁ 式土器片が 1 点出土しているのでこの時期の可能性はある。

(大泰司)

表V-1 遺構の金属製品等一覧

図No.	図版No.	名 称	遺構・グリット	層	大 小 寸 法	重 量	備 考
V11 1	V-14	小 刀	X-2	I B 3相当	長さ 28.3 刃幅 2.2 棟厚 0.4	重量 55.5	墓坑底副葬品
V17 2	V-20	鎌	P-9	I B 3相当	長さ (9.5) 幅 2.2 厚 0.2	重量 (6.8)	"
V17 3	V-20	手 斧	P-9	I B 3相当	長さ (8.0) 推定刃幅 4.3 袋径 3.0	重量 (39.0)	"
V17 5	V-20	刀 子	P-12	I B 3相当	長さ (22.6) 刃幅 1.95 棟厚 0.35	重量 (46.0)	" ・ 呑口鞘
V17 6	V-20	鎌	P-12	I B 3相当	長さ (15.8) 幅 3.7 厚 0.35	重量 (32.8)	" ・ 布付着
V17 7	V-20	斧	P-12	I B 3相当	長さ 13.5 推定刃幅 6.2 袋径 5.5	重量 (377.6)	"
V17 9	V-21	素 材	P-27	I B 3相当	長さ 17.0 幅 0.85 厚 0.2	重量 9.6	"
V17 10	V-21	刀 子	P-27	I B 3相当	長さ (21.8) 刃幅 1.5 棟厚 0.4	重量 (26.0)	"
-	V-27	鉄 片	F-10	I B 上	総重量 2.7		鍛造剥片か?
V27 1	V-28	キセル 雁首	送り場	O B 相当	長さ 11.5 口径 1.4 径 0.9	重量 (5.4)	らお竹一部残存
V27 2	V-28	キセル 吸口	送り場	O B 相当	長さ (3.8) 径 0.8	重量 (1.6)	"
-	V-30	鉄 滓 (大)	鍛冶遺構	I B 上	径 3 cm 以上	総重量 107.0	
-	V-30	鉄 滓 (小)	鍛冶遺構	I B 上	径 0.5 ~ 3 cm	総重量 117.5	
-	V-30	脱炭途中の銹鉄片等	鍛冶遺構	I B 上			
-	V-30	球状磁性物 (湯玉)	鍛冶遺構	I B 上	総重量 713.8 (一部未分類のため)		
-	V-30	球状粘土質磁性土	鍛冶遺構	I B 上			フイゴ羽口も出土

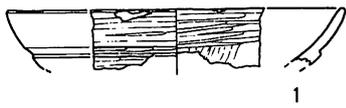
V 0 黒層・I 黒層の遺構とその遺物



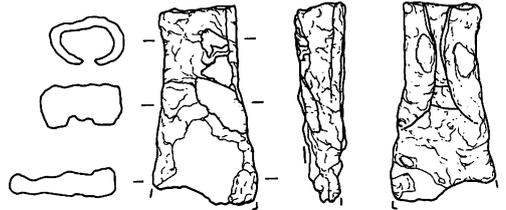
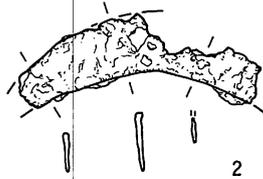
実線は土壌内、破線は土壌脇を表す
遺物 (S=約 1/4)

図V-16 土壌とその遺物

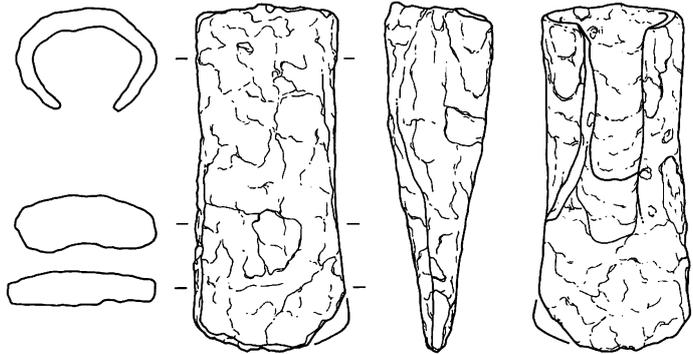
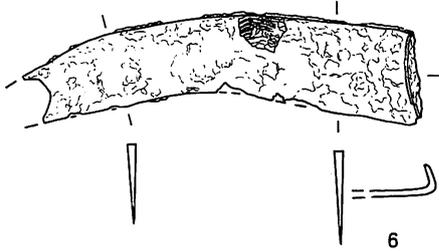
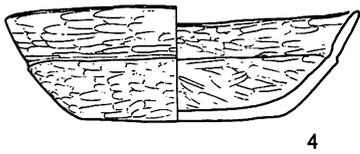
P-8



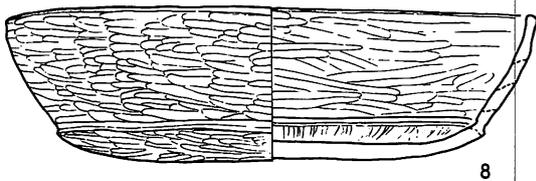
P-9



P-12



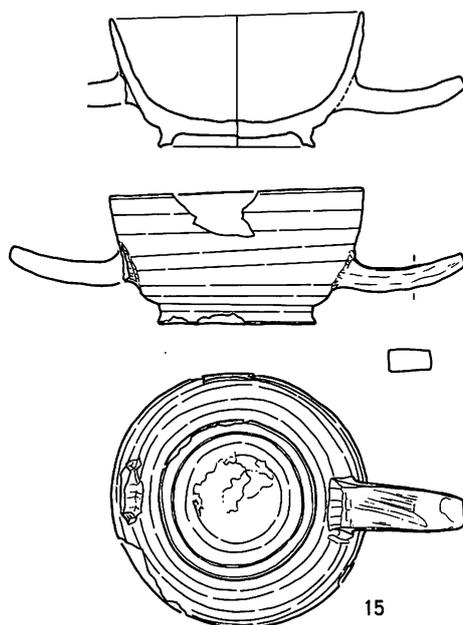
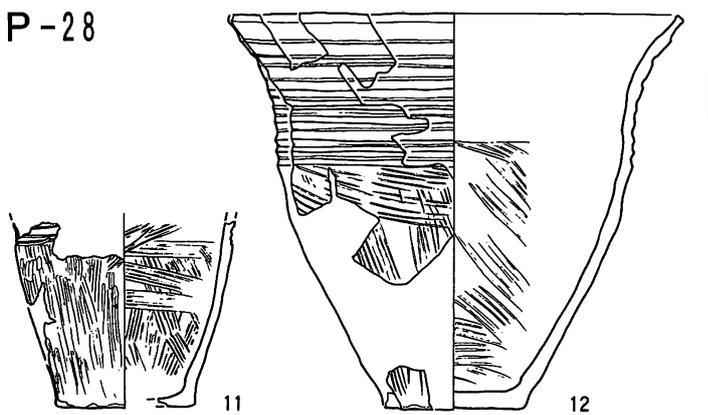
P-27



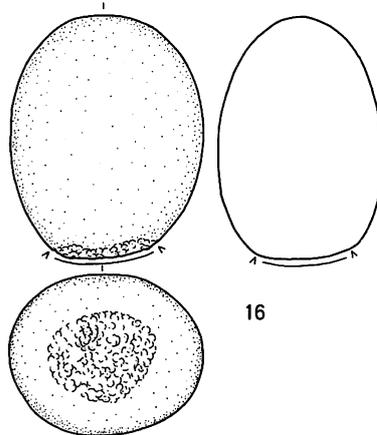
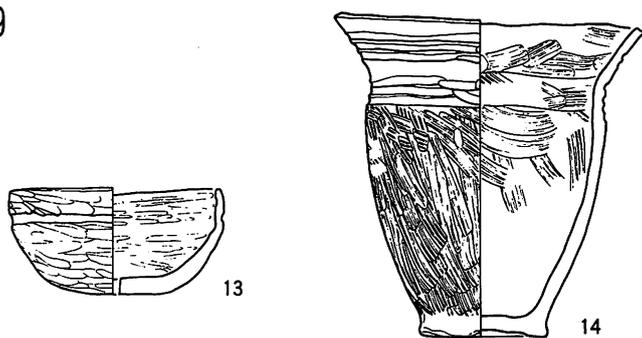
遺物(S=1/3)

図V-17 土壙の遺物(1)

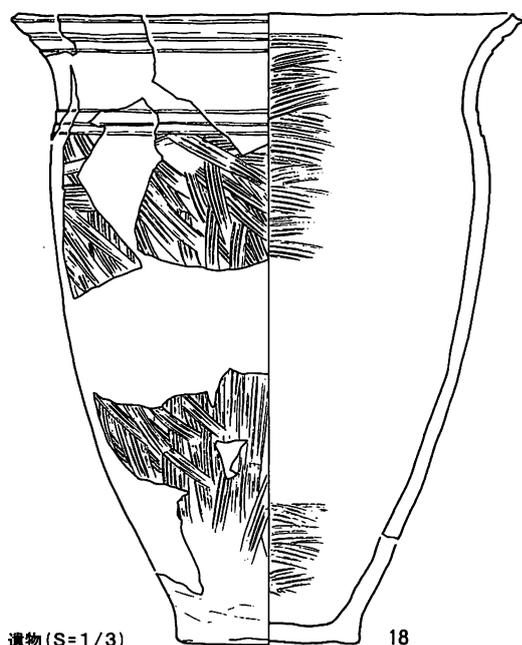
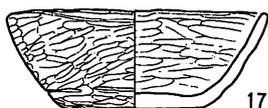
P-28



P-29

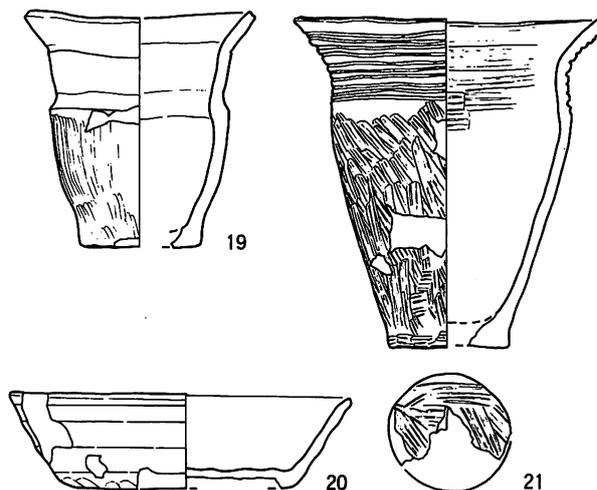


P-30



遺物(S=1/3)

P-31



図V-18 土壌の遺物(2)

5 焼土

焼土は構築層準を主な分類根拠とし、同一小グリット内の土器の出土状況、伴出土器を加えて4種類に分類した。ただし二例外がある。F-52は構築層準からみるとI黒下部であるが、同一小グリット内の土器の出土状況を考慮してI黒上部に分類した。F-1は構築層準からみるとI黒下部であるが、伴出土器よりI黒上部に分類した。

焼土は堆積状況から3種類の分類できる。第一に、土色に橙色が加わっていて締まりのある焼土は屋外炉と考えられる。第二に、土色に橙色が加わっていて締まりのないものは焼土遺構ではなく焼土が廃棄された遺構（廃棄遺構Iと仮称）と考えられる。第三に、土色が暗褐色で、締まりのないものは焼土遺構ではなく、灰・いろいろなものの燃えさしと一緒に廃棄された遺構（廃棄遺構IIと仮称）と考えられる。
(鈴木)

(1) I黒層上面の焼土 (図V-19、表V-9、図版V-24・27)

I黒層上面の焼土は台地西側の標高8.4mあたりに集中している。遺構の時期はその層準からアイヌ文化期と考えられる。

屋外炉はF-7・8・10・21・24・63・82である。廃棄遺構IはF-76である。廃棄遺構IIはF-26・79である。

フローテーションの結果F-7・8・10・21・63から種子は出土しているが堅果類は出土していない。F-10からは2.7gの鍛造鉄片が出土している。F-8・10・24・76からサケ科の遺存体が出土しており、白色になるまでよく焼けている。

これらはH-1と送り場1と灰集中1と道跡1の配置から見て近い時期の遺構群と捉えられる。

(2) I黒層上部の焼土 (図V-20・21、表V-9、図版V-24・26・27)

中世アイヌ文化期～擦文文化期の焼土 中世アイヌ文化期～擦文文化期の焼土 (F-9・13・14・15・27・49・52・55・56・57・68・80・84・382・383)はおもに台地北西側に集中し、近くにはVII d類期の竪穴住居H-2がある。その他には台地南東側にF-80・84がありX-1・2の近くである。

屋外炉はF-9・13・14・27・52・55・84・382・383である。廃棄遺構IはF-15・49・68・80である。廃棄遺構IIはF-56・67である。

F-56から擦文土器甕の頸部が1点出土している。

フローテーションの結果種子はF-13・14・15・27・52・55・56から出土している。堅果類・動物遺存体は出土していない。F-68からイネ未炭化内外類が出土している。

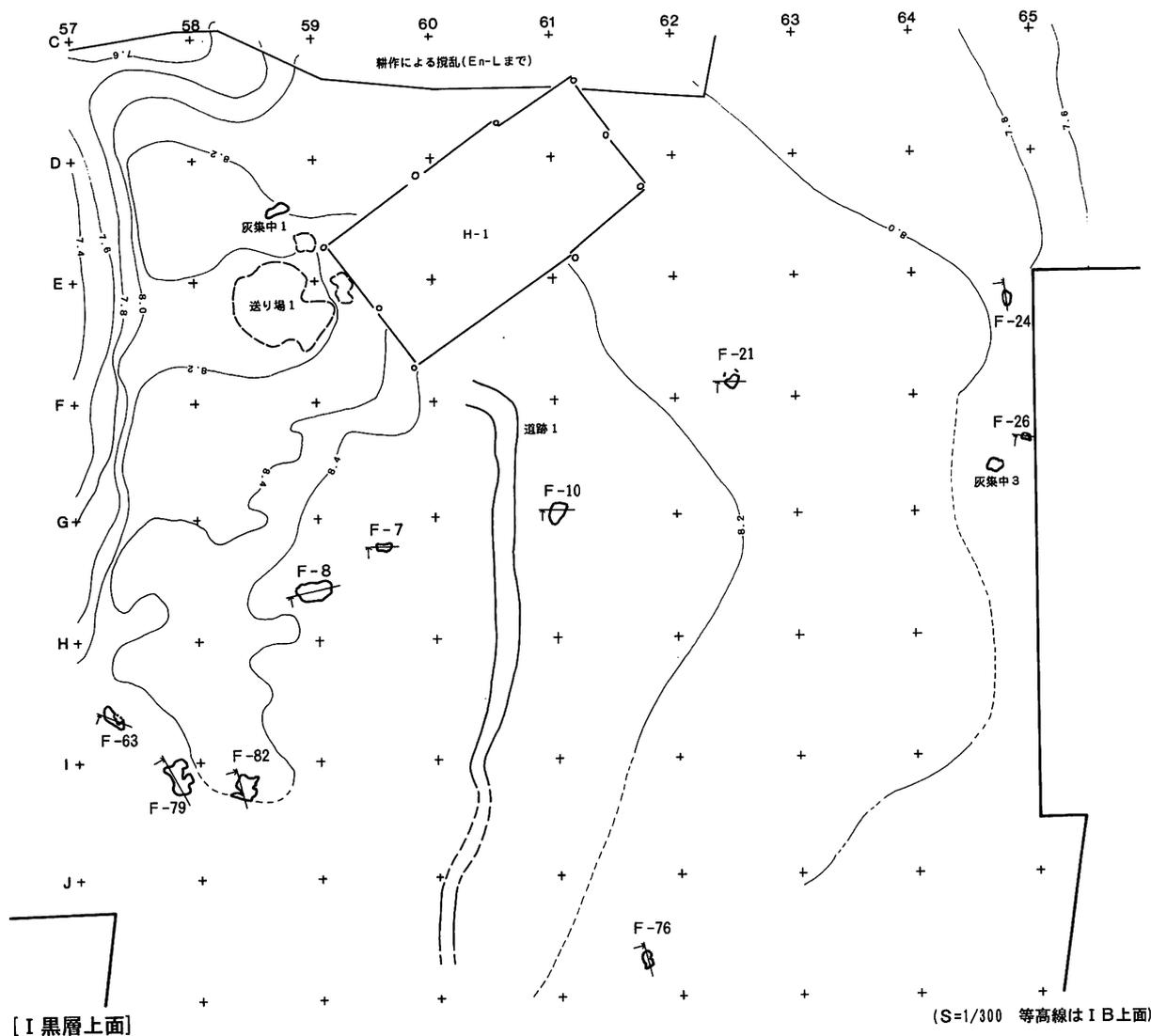
北大II・III式期～後北C₁式期の焼土 VI d類期 (F-30・38)、北大I式期 (F-1・75・78)、後北C₁式期 (F-35)、VI c類期 (F-23)の焼土は台地の南東側に散在している。これらの時期のいずれの焼土の近辺にも住居などの定住を推測させる遺構がない。

F-1から北大I式の深鉢2個体、搔器1点が出土している。F-30から被熱したVI d類の鉢?口縁部 (図V-24-4) が1点出土している。F-38から石鏃1点が出土している。

屋外炉はF-23・30・38・75・78、F-1である。廃棄遺構IIはF-35である。

F-75付近から北大I式の深鉢 (VIII-4-41) が出土している。F-78中から北大I式の片口1個体、深鉢1個体、搔器1点、石核1点 (図V-24-14~19) が出土している。

フローテーションの結果、F-1・38・78から種子が出土している。堅果類・動物遺存体は出土していない。



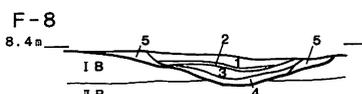
[I 黒層上面]

(S=1/300 等高線はI B上面)



F-7 土層註記

- 1 黒色土 (魚骨片を含む、しまりなし)
- 2 明褐色土 (魚骨を多く含む、しまりよし)
- 3 明黄褐色土 (魚骨を多く含む、ややしまりあり)



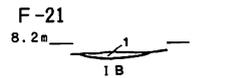
F-8 土層註記

- 1 明黄灰褐色土 (φ1.0cmの炭化物・魚骨片を含む、しまりなし)
- 2 炭化物 (しまりよし)
- 3 明灰褐色土 (魚骨片を含む、1よりしまりよし)
- 4 明橙褐色土 (φ0.5cmの炭化物を含む、しまり非常によし)
- 5 暗灰褐色土 (炭化物・骨片を含む、しまり弱い)



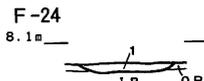
F-10 土層註記

- 1 暗橙褐色土 (炭化物・灰を含む、しまりよし)



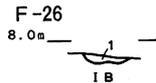
F-21 土層註記

- 1 橙褐色土 (しまりよし)



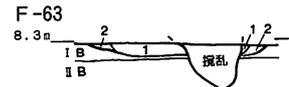
F-24 土層註記

- 1 暗橙褐色土 (上面に灰が混じる、しまりよし)



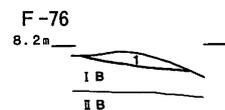
F-26 土層註記

- 1 暗灰褐色土 (魚骨片を多く含む、しまり弱い)



F-63 土層註記

- 1 明橙褐色土 (しまりよし)
- 2 明橙褐色土 (1より被熱していない)



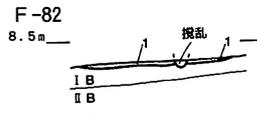
F-76 土層註記

- 1 明橙褐色土 (しまり弱い)



F-79 土層註記

- 1 暗褐色土 (骨片を含む、しまり弱い)



F-82 土層註記

- 1 暗茶褐色土 (炭化物を含む、しまりよし)

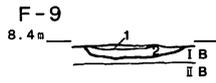
図V-19 焼土(1)



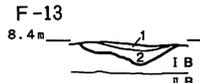
[I 黒層上部]

(S=1/300 等高線は I B 上面)

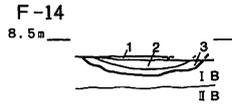
図 V-20 焼土(2)



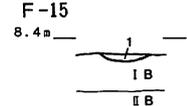
F-9 土層註記
1 暗褐色土 (骨片・炭化物を少量含む)
2 明褐色土 (しまりよし)



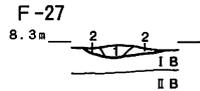
F-13 土層註記
1 暗褐色土 (しまりよし)
2 明褐色土 (しまり非常によし)



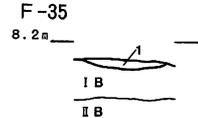
F-14 土層註記
1 暗褐色土 (φ0.2cmの炭化物・骨片を多く含む)
2 明褐色土 (骨片を多く含む、しまりよし)
3 明褐色土 (しまり非常によし)



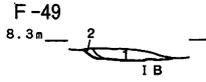
F-15 土層註記
1 暗黄褐色土 (骨片を含む、しまり弱い)



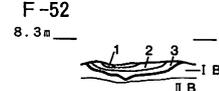
F-27 土層註記
1 明褐色土 (しまりよし)
2 暗褐色土 (しまりよし)



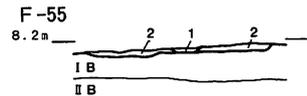
F-35 土層註記
1 暗褐色土 (しまり弱い)



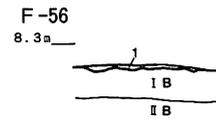
F-49 土層註記
1 明褐色土 (しまり弱い)
2 暗褐色土 (しまり弱い)



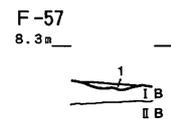
F-52 土層註記
1 暗褐色土
2 明褐色土 (しまり非常によし)
3 暗褐色土 (しまり弱い)



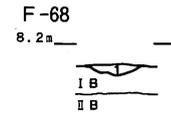
F-55 土層註記
1 明褐色土 (しまり非常によし)
2 暗褐色土 (φ0.5~2.0cmの炭化物・焼土粒を含む)



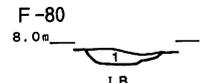
F-56 土層註記
1 暗褐色土 (φ0.5~2.0cmの炭化物・焼土粒を含む)



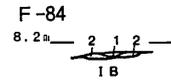
F-57 土層註記
1 暗褐色土 (φ0.5~2.0cmの炭化物・焼土粒を含む)



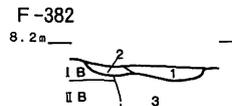
F-68 土層註記
1 暗褐色土 (しまり弱い)



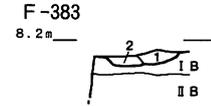
F-80 土層註記
1 明褐色土 (しまりなし)



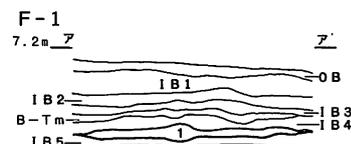
F-84 土層註記
1 橙褐色土 (しまり非常によし)
2 暗灰褐色土 (灰がまじる)



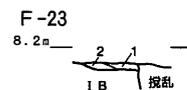
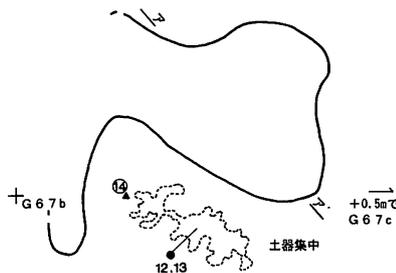
F-382 土層註記
1 明褐色土 (しまりよし)
2 暗褐色土 (しまりよし)
3 暗黄褐色土 (P-18の埋土)



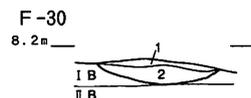
F-383 土層註記
1 明褐色土 (しまりよし)
2 暗褐色土 (しまりよし)



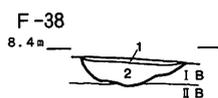
F-1 土層註記
1 灰白色土 (炭化物を微量に含む)



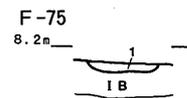
F-23 土層註記
1 暗褐色土 (灰・炭化物を含む、しまりよし)
2 暗褐色土 (しまりよし)



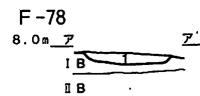
F-30 土層註記
1 暗褐色土 (灰がまじる、しまりよし)
2 橙褐色土 (しまりよし)



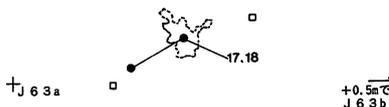
F-38 土層註記
1 暗褐色土 (灰が混じる、しまりよし)
2 橙褐色土 (しまりよし)



F-75 土層註記
1 暗褐色土 (しまり非常によし)



F-78 土層註記
1 橙褐色土 (しまり非常によし)



図V-21 焼土(3)

(3) I 黒層中部の焼土 (図V-22、表V-9、図版V-25・26)

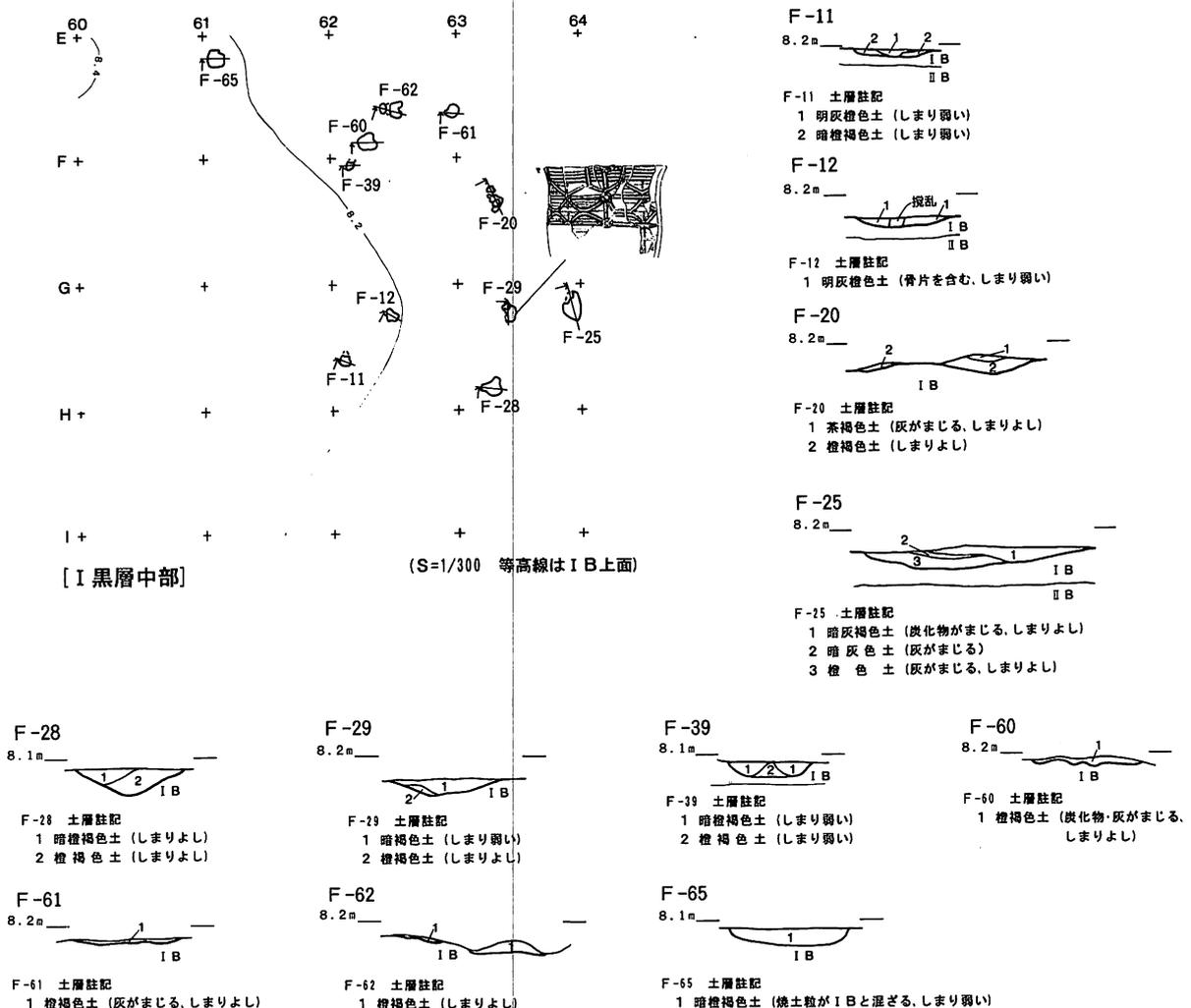
I 黒層中部の焼土は台地のほぼ中央部分に集中している。近辺に住居などの定住を推測させる遺構はない。遺構の時期は遺構は同一小グリット内の土器の出土状況と遺構の層準から判断すると、後北A式から後北B式の時期である。

屋外炉は F-20・25・28・29・60・61・62である。廃棄遺構IIは F-12・39・65である。

F-20わきからVI群深鉢底部片 (図V-24-2)、F-29中から後北B式深鉢 (図V-25-10)、F-39上から後北B式深鉢口縁部片 (図V-24-6)、F-60中から後北B式深鉢胴部片 (図V-24-7)、F-65中からVI群深鉢胴部片が出土している。なお、F-29中から後北A式深鉢口縁部 (図V-24-3) が出土しているが混入である。

その他に、後北A式深鉢 (図VIII-3-33) は F-25・28・29の傍わらから出土しており F-25・29の傍わらの破片は被熱している。後北B式壺 (図VIII-3-36) は F-25・28の傍わらから出土しており F-25の傍わら破片は被熱している。

フローテーションの結果、F-20・25・28・29・61・62・65から種子が出土している。堅果類は出土していない。F-12・20・25・29・61から動物遺存体が出土している。



図V-22 焼土(4)

(4) I 黒層下部の焼土 (図V-23、表V-9、図版V-25・26)

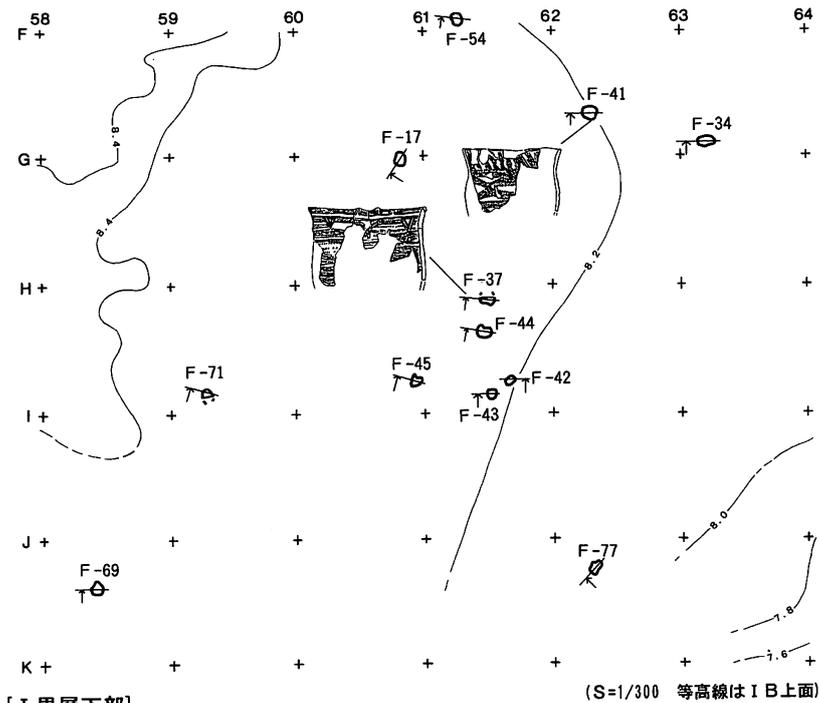
I 黒層下部の焼土は台地中央部分の西側寄りに集中している。近辺に住居などの遺構はない。遺構の時期は遺構は同一小グリット内の土器の出土状況と遺構の層準から判断すると、後北A式の古い時期である。

屋外炉は F-17・34・37・41・42・69・71・77である。廃棄遺構 I は F-43・45・54である。廃棄遺構 II は F-44である。

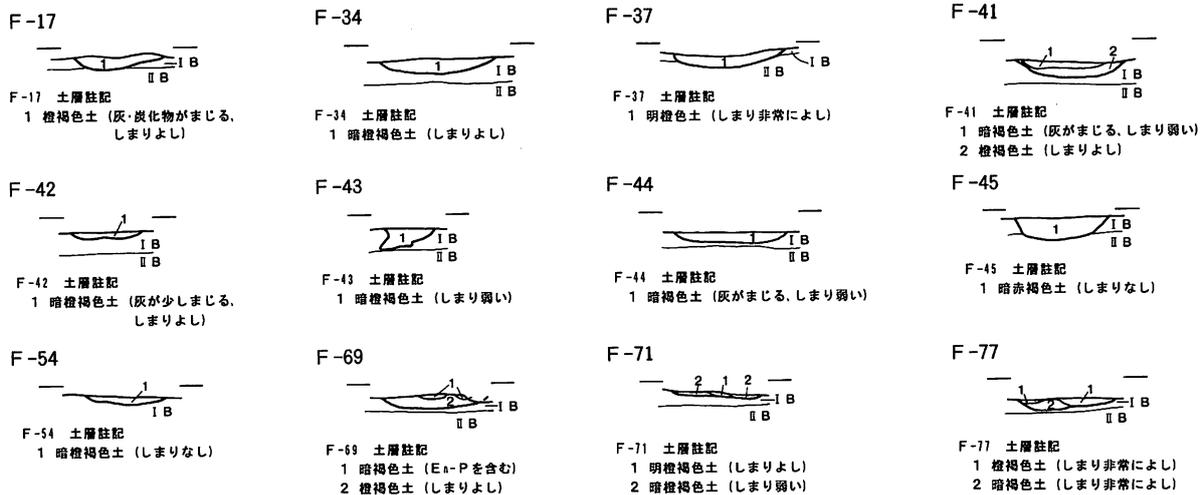
F-37中から後北A式深鉢口縁部破片 (図V-24-9) が出土し、接合破片は F-42・43の傍わらから出土し被熱している。F-41中から恵山系深鉢胴部破片 (図V-25-11) が出土し、隣のグリットには F-17・34・54がある。

F-17付近から後北A式深鉢 (図VIII-3-32) が出土している。

フローテーションの結果、F-44・45・69・71から種子が出土している。堅果類・動物遺存体は出土していない。



[I 黒層下部]



図V-23 焼土(5)

(5) 焼土の遺物 (図V-24・25・26、表V-4・5・6、図版V-26・27)

土器：1は後北B式深鉢頸上半部片で被熱していない。胴部にはRL縦走、頸部にはRL横走→ナデ→隆起線文・刺突→刺突。2は後北B式深鉢頸下半部片、RL横走→ナデ→隆起線文・刺突→刺突。3は後北A式深鉢口縁部片、被熱している。口縁部に隆起線文→隆起線間に刺突。4はVIe群で鉢とおもわれる口縁部片、被熱している。外面は未調整、内面はヨコハケのあとナデ。胎土は後北C₂・D式や北大I式のものよりも精良である。5は後北深鉢頸部下半片、被熱している、RL横走→ナデ→刺突。6は後北B式深鉢口縁部片、被熱している。隆起線文・刺突。7は後北B式深鉢頸部片、被熱している。隆起線文・刺突。8は後北B式深鉢口縁部片、被熱している。隆起線文・刺突。

9は4対の突起の下位に大きめのV字隆起線文をもち、そのあいだに4対のV字隆起線文をもつ。隆起線はナデにより断面が台形を呈する。後北A式中頃のもの。

10は突起下に二重の円形隆起線文を縦位に2個配置する。

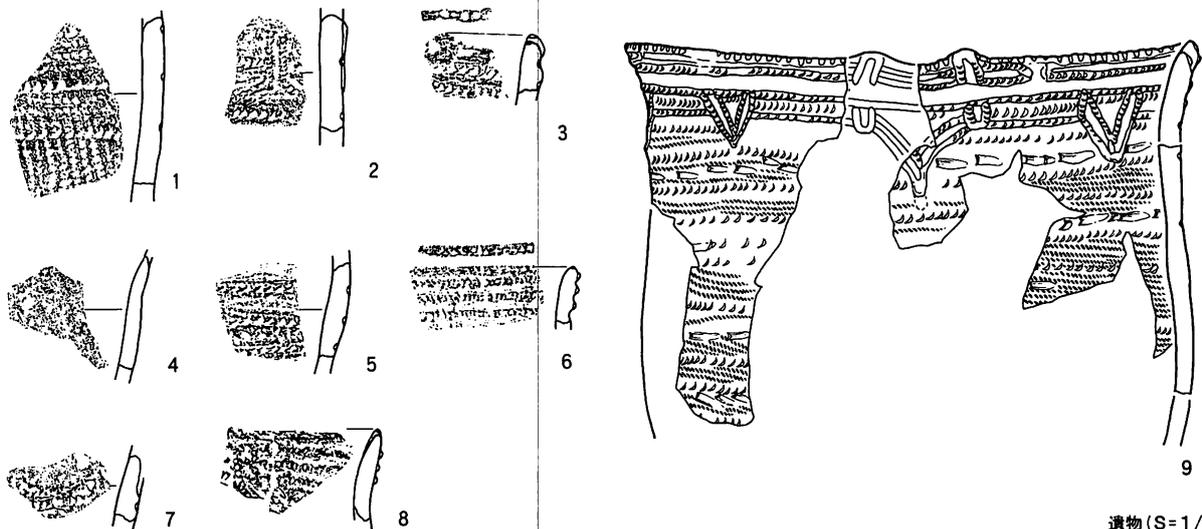
11は帯縄文を刺突で区画する。器面に対して鈍角に刺突しているため短い押引き文のようにも見える。沈線で区画していないので典型的な恵山式とはいえないが、アヨロ3a併行し、分布地域が典型的な恵山式と異なる可能性が高い。

12は口縁部断面形が方形で、口縁端面が外傾し、胴部下半は内湾気味にたちあがり胴部上半では直線的で、頸部が若干くびれている。口縁部に微隆起線文と円形刺突文を持つ北大I式の古い時期。

13は胴部上半が直線的で、胴部下半は内湾気味にたちあがり、頸部が若干くびれている。刺突文が充填文として施され帯縄文を縁取っていないこと、口縁部に微隆起線文がないことから北大I式ではない。しかし、口縁部断面形が方形であること、口縁端面が外傾することから後北C₂・D式としては奇異である。後北C₂・D式末期の型式にあたる。

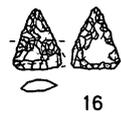
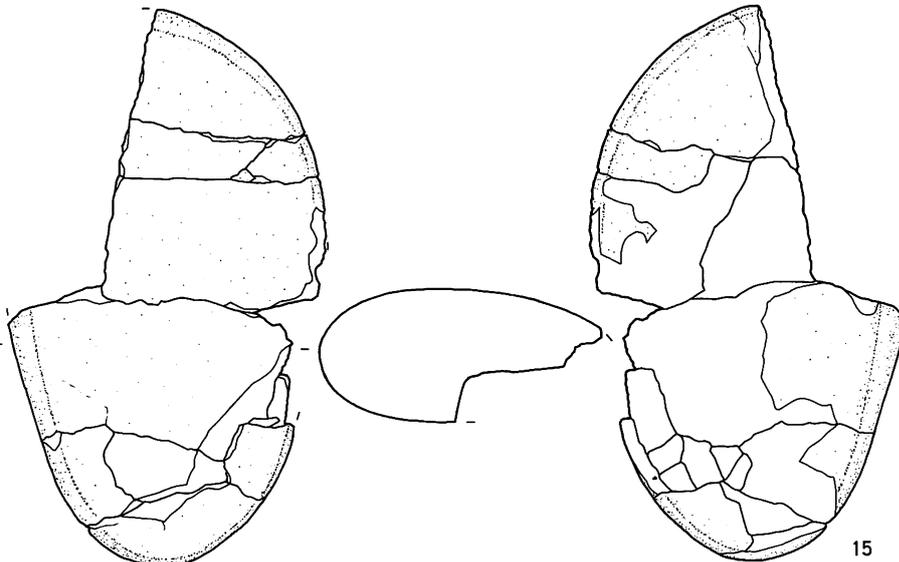
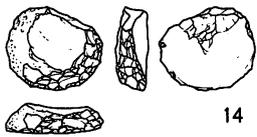
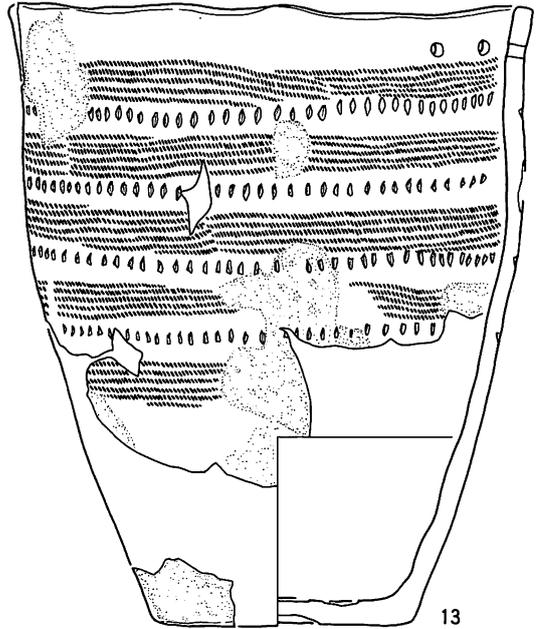
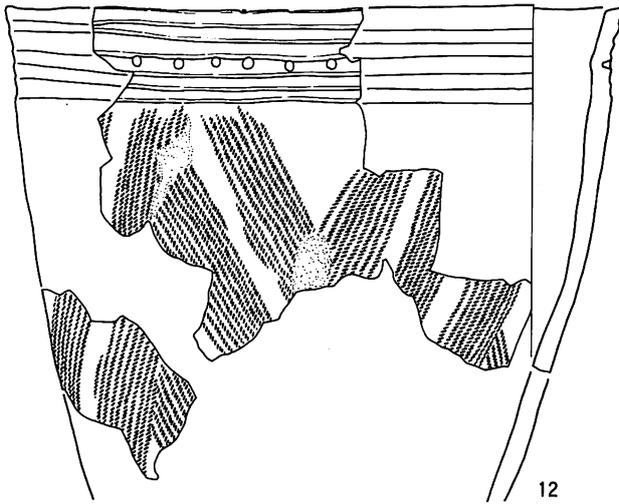
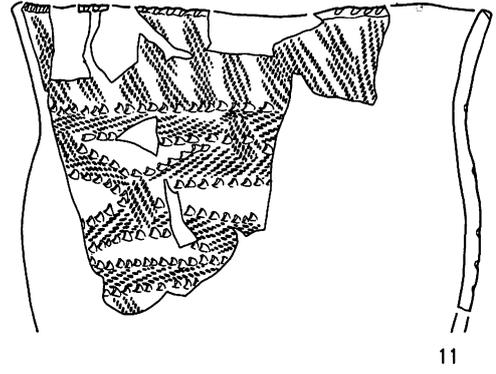
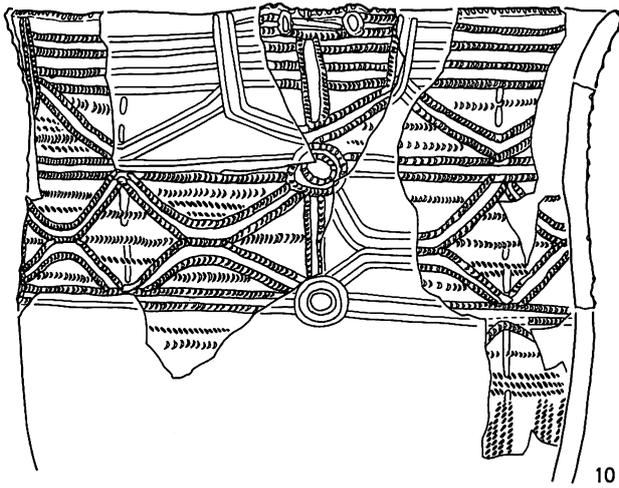
17は口縁部が上面観が五角形で波状となる。口縁部断面形が方形で口縁端面が外傾すること、体部は直線的に外上方に立ち上がること、口縁部に刻みのある微隆起線文がないことから北大I式であるが、口縁端面に刻みがあり後北C₂・D式のなごりをとどめている。底部は薄く高台状に発達していない。北大I式の古い時期の型式にあたる。

18は口縁部がわずかな波状で、波頂間の口縁部は内側に4か所入り込んで上面観は真円を呈さない。頸部は若干くびれており、口縁部断面形は丸い。北大I式の古い時期にあたる。



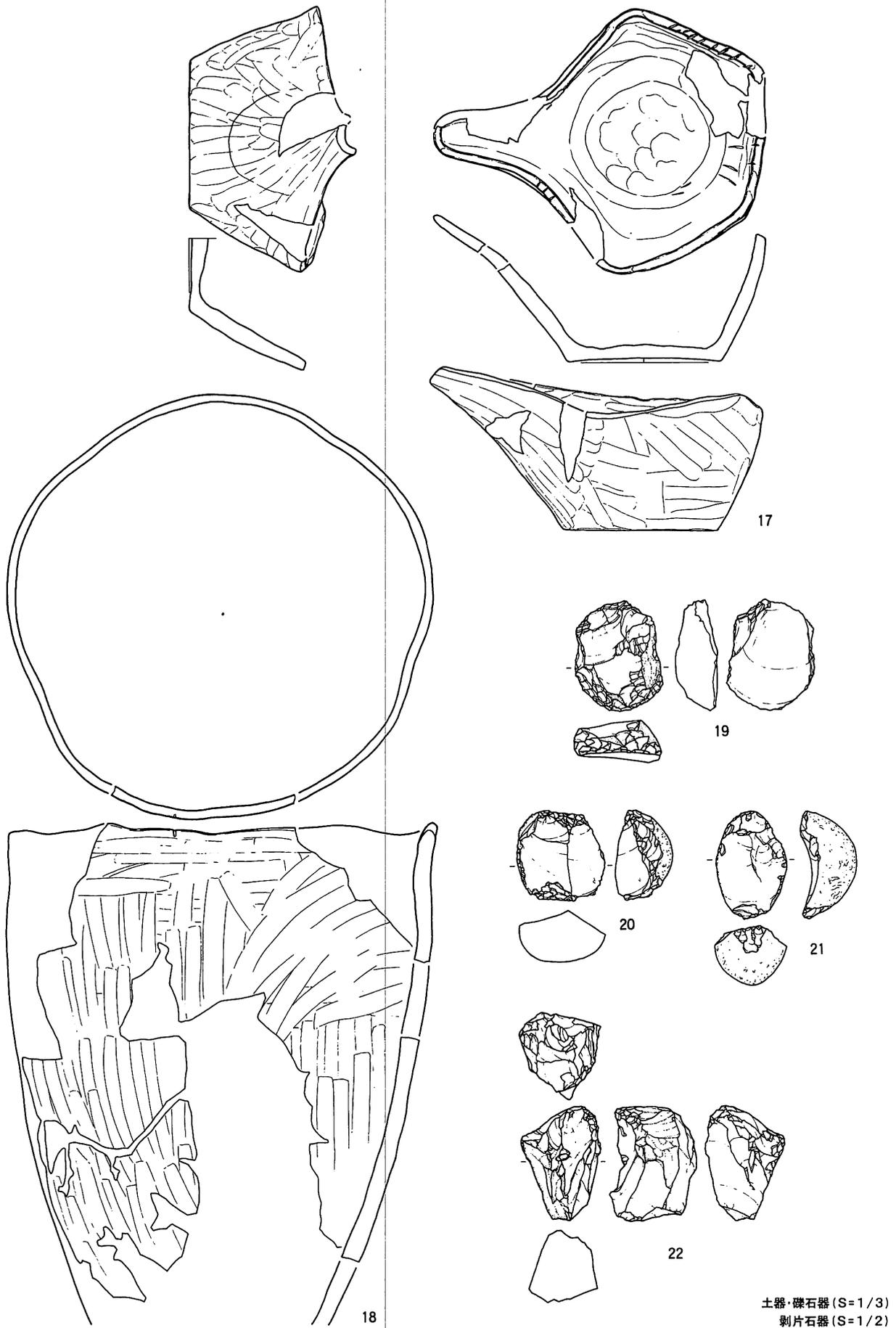
図V-24 焼土の土器(1)

遺物(S=1/3)



土器・礫石器 (S=1/3)
剥片石器 (S=1/2)

図V-25 焼土の土器(2)・石器(1)



図V-26 焼土の土器(3)・石器(2)

土器・礫石器 (S=1/3)
剥片石器 (S=1/2)

石器：14は背面側片側面に礫皮を残す。バルブの厚みを減じる調整が行われている。15は被熱した偏平楕円礫で、短軸方向に分割されている。G 58 a に接合個体がある。16は被熱して光沢を失っている。19は小礫を両極打法で割った石核を素材とした搔器、片面に3か所礫皮を残す。球顆が発達している。20は小円礫が素材で打面は作出しない。並列剝離。楔形石器に転用する。21は小円礫が素材で打面は作出しない。作業面が彎曲して残核となった。作業面打点側を調整して彎曲を減じ、底面に作業面側から調整を入れて刃部を作出し搔器に転用した。22は打面転移を3回行なっている。上面には潰れが見られる。(鈴木)

6 送り場1 (図V-27、表V-1、図版V-28)

位置 D 58 c ・ D 59 b ・ E 58 ・ E 59 a

規模 4.23×3.48×0.04 m (集中イ)

0.79×0.68×0.02 m (集中ロ)

1.54×1.00×0.02 m (集中ハ)

調査 Ta-a 層除去後、0黒層の上面に深さ40cm位のくぼみを確認した。擦文文化期の竪穴住居跡であると予想されたが、くぼみがアイヌ文化期の送り場として利用されていることが多いので0黒層の上面の精査を優先した。その結果くぼみが送り場であることが判明したので、竪穴住居跡の土層観察をかねると予想された長軸方向にトレンチを設定した。

覆土 1層は締まりがなく、灰・炭化物・焼土・動植物遺存体を含む。

遺物出土状況 動植物遺存体のほかには、礫2個、南西約1mのところに銅製煙管の雁首と吸い口が出土し、羅字が残存していた。フローテーションの結果動植物遺存体が多量に検出された。

時期 0黒層の上面の遺構であること、銅製煙管の雁首と吸い口が出土していることから近世アイヌ文化期である。(鈴木)

7 灰集中

灰集中1 (図V-27)

位置 D 58 d **規模** 0.38×0.18×0.03 m

調査 Ta-a 層除去後、0黒層の上面に検出した。

覆土 1層は締まりがなく、灰・炭化物・動植物遺存体を含む。

遺物出土状況 フローテーションの結果動植物遺存体は検出されなかった。

時期 0黒層上面の遺構であることから近世アイヌ文化期である。

灰集中2 (図V-27、表V-9、図版V-30)

位置 J 53 d ・ J 54 a **規模** -×-×0.05 m

調査 I B 2層上面で検出した。一部の灰を灰像分析に出している。

覆土 灰・炭化物・焼土・動植物遺存体を含む。

形態 上部灰層の平面はほぼ円形、下部炭化物層は一部を攪乱によって失われているが、平面は不整形である。ところどころに焼土や骨片のブロックがある。

遺物出土状況 フローテーションの結果、イネ種子、イネ内外穎、堅果類、サケ科等が検出された。

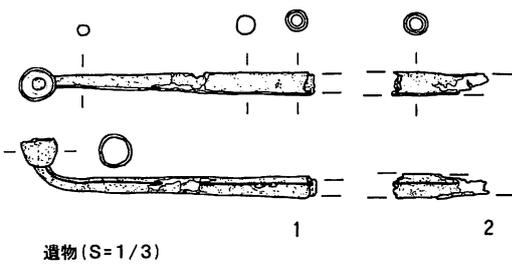
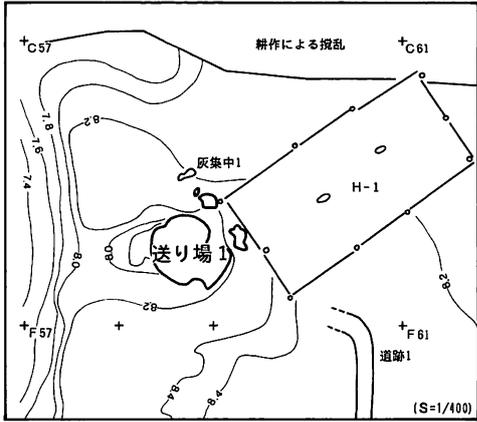
時期 検出層準、同一小グリット内の土器出土状況より中世アイヌ文化期～擦文文化期である。

灰集中3 (図V-27、図版V-30)

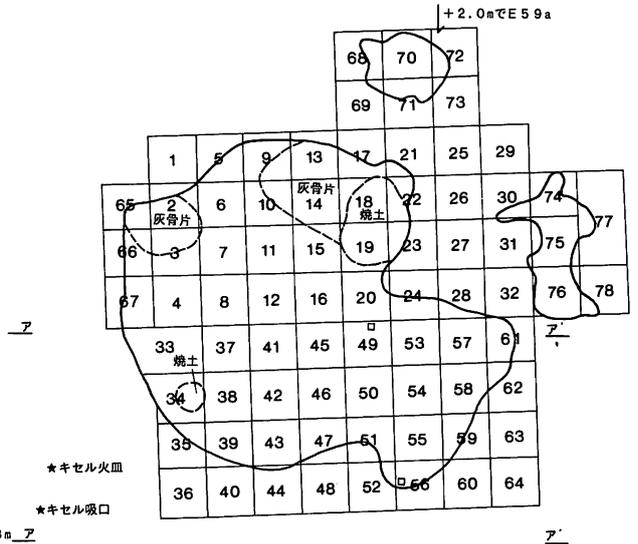
位置 F 64 c **規模** 0.28×0.25×0.02 m

調査 Ta-a 層除去後、0黒層の上面に検出した。フローテーションは行っていない。一部を灰像分析に出している。

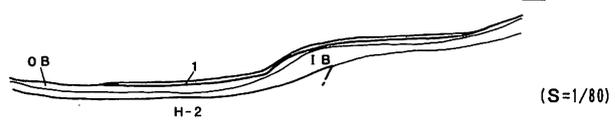
7 灰集中
送り場1



遺物 (S=1/3)

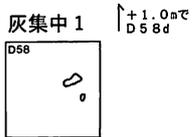


8.3m



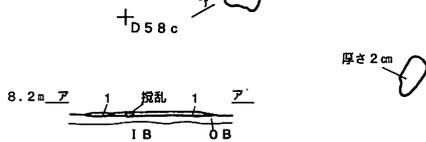
送り場1 土層註記

- 1 茶褐色粘質土 (灰・焼土・カワシンジュ具殻皮・炭化物を含む、しまりなし)

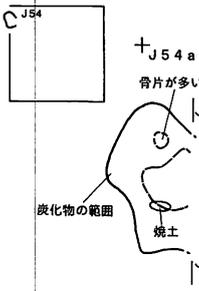


灰集中1 土層註記

- 1 明灰白色灰 (魚骨・炭化物がまじる)



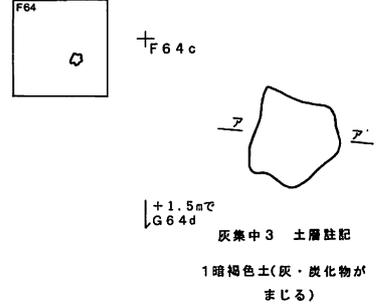
灰集中2



灰集中2 土層註記

- 1 灰白色灰
- 2 黒色炭化物

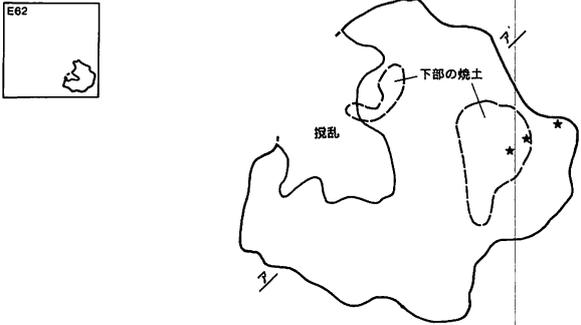
灰集中3



灰集中3 土層註記

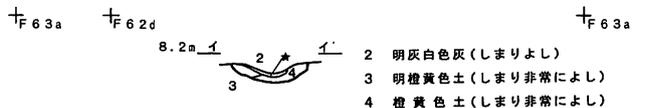
- 1 暗褐色土 (灰・炭化物がまじる)

鍛冶遺構1



鍛冶遺構1 土層註記

- 1 暗褐色土 (炭化物・鉄滓を含む、しまりよし)



- 2 明灰白色灰 (しまりよし)
- 3 明橙黄色土 (しまり非常によし)
- 4 橙黄色土 (しまり非常によし)

図V-27 送り場・灰集中・鍛冶遺構

覆土 1層は締まりがなく、灰・炭化物を含む。

時期 検出層準が0黒層の上面であることより近世アイヌ文化期である。 (鈴木)

8 鍛冶遺構1 (図V-27・28、図版V-29・30)

位置 E 62 c

規模 0.78×0.74×0.05 m (炭化物層)

調査 I黒層を3 cm下げたところで、炭化物層1ヵ所(図左側)と下層に焼土層2ヵ所(図右側)検出した。炭層を半截したところ下層に焼土を検出した。当初、炭層と2ヵ所の焼土は関連はないと考えていた。炭層調査後に1つの焼土を半截したところ断面から鉄滓が出土した。そこで初めて鍛冶遺構ということがわかった。土壌サンプルは鍛冶遺構との判断が遅れたためにメッシュは組まず、炭層で一括、2ヵ所の焼土で一括採取した。

覆土 上層に炭化物層、下層に焼土層がある。ともに締まりはよく焼土層は特に締まっている。焼土層の上部には灰のような白い物が堆積している。

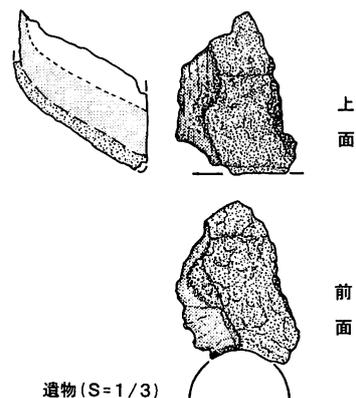
形態 炭層は一部攪乱を受けているが不整な方形。炉1は弧状で橙黄色で炉2よりは発色がよくない。炉2は半円形に突出部が付く形である。突出部は鞆の羽口先に当たる部分の可能性が高い。焼土層の断面は上が明瞭にくぼむ皿状を呈する。形態と断面形より、炉1は鍛冶炉、炉2は精錬炉であり、炭層は別な遺構の可能性もあるが小規模な上屋の可能性もある。

遺物出土状況 炭層、炉1・2から脱炭途中の銑鉄片、鉄滓、鍛造剥片?、磁性のある球状遺物(湯玉状)が多数出土している。近くの攪乱(F-62-a区)から厚手の羽口が出土している。銑鉄片の出土例は千歳市オサツ2遺跡、厚手の羽口の出土例は奥尻町青苗遺跡、千歳市オサツ2遺跡の例がある。

遺物 羽口は先端部分の破片である。残存最大厚約3.5cm、内径2.4cm。外面には黒褐色(Hue 2.5 Y 3/1)の滓がつく。滓がついた部分から内面に向かって1cmは暗赤色(Hue 10 R 3/4)を呈し、なかば溶解しておりやや光沢がある。さらに内面側は橙色(Hue 2.5 YR 6/8)を呈する。胎土は比較的精良で、スサ(草本の茎)が混和されている。

性格 磁性のある球状遺物(湯玉状)、脱炭途中の銑鉄片、鉄滓があることから鋼精錬を行っており、鍛造剥片?、磁性のある球状粘土があることから鋼で製品・鋼素材を製造していたと考えられる。厚手の羽口の出土例のある鍛冶遺構はいずれも鋼精錬を行なっていることも傍証になる。鋼精錬から製品・鋼素材の製造を一貫して行なっていた可能性がある。これらは成分分析依頼中であるので、その結果を待って詳細を述べたい。

時期 I黒層上部の遺構であることから中世アイヌ文化期～擦文文化後期である (鈴木)



図V-28 ファイゴの羽口

8 鍛冶遺構 1



Q5

40

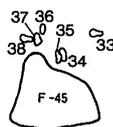
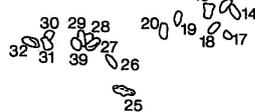
3

H60c

Q6

8

12

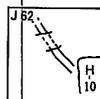


H60d



G65a

溝 1



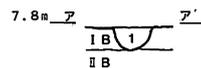
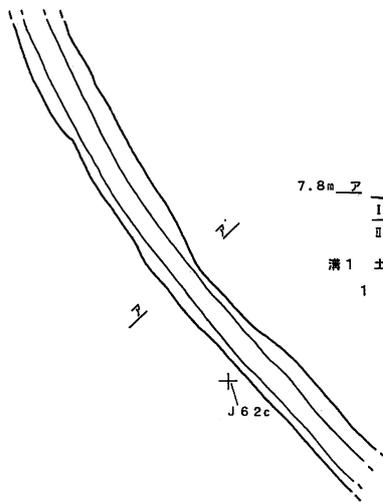
J62d

7.8m Z Z'



Z BC Z'

G65b



溝 1 土層註記
1 黒色土 (しまりなし)

J62c

図V-29 集石・溝

9 集石

集石1 (図V-29、図版V-31)

位置 H 60 規模 39個

調査 I黒層下部で検出した。

遺物出土状況 礫が39個出土した。

時期 I黒層下部の遺構であること、そばにF-45があることから後北式期であろう。

集石2 (図V-29、図版V-31)

位置 G 61 d 規模 2個

調査 I黒層下部で検出した。

遺物出土状況 礫が2個出土した。

時期 I黒層下部の遺構であることから後北式期であろう。

(鈴木)

10 溝1 (図V-29、図版V-32)

位置 J 62 規模 1.5×0.13×(0.06) m

調査 I黒層中で検出した。道跡2に切られており、道跡2の上にはH-10の揚げ土が載っていた。

時期 道跡2に切られており、上にはH-10の揚げ土があるので擦文前期と思われる。(鈴木)

11 道跡

道跡1 (図V-30、図版V-32)

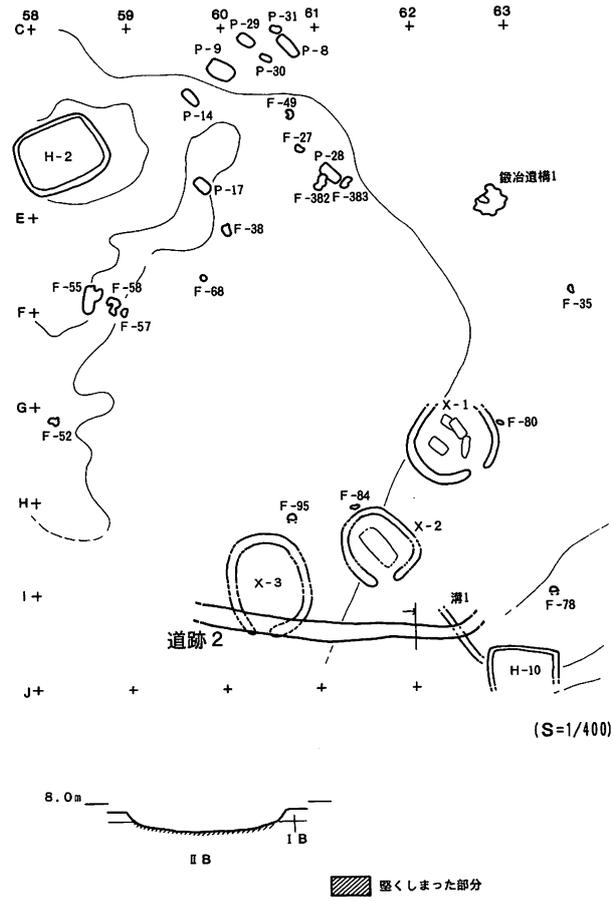
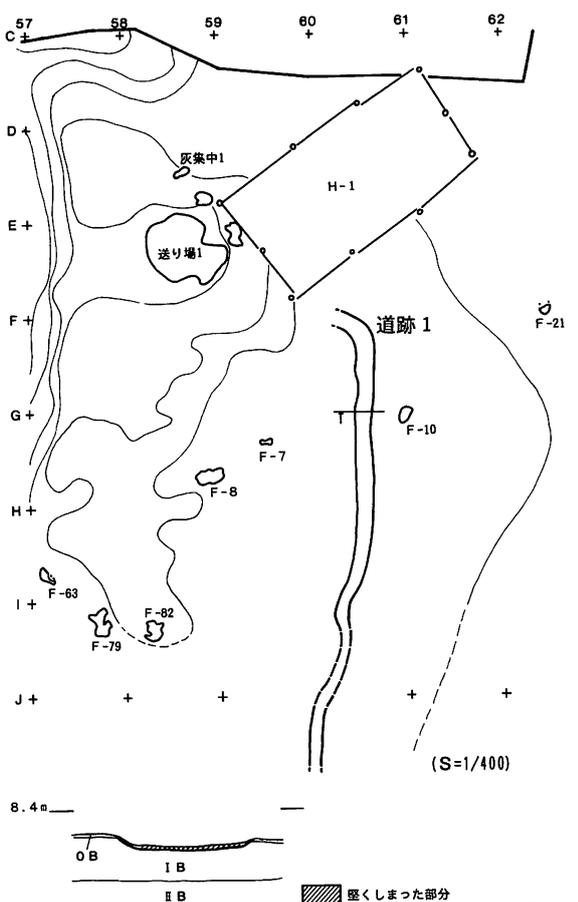
位置 F 60・G 60・H 60・I 60・J 60

規模 25.4×0.7×0.06m

調査 0黒層上面でくぼんでいた。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

時期 I黒層上面の遺構であること、H-1と送り場1と灰集中1へ向かっていることから見て一時期の遺構群と捉えられることから近世アイヌ文化期である。



図V-30 道跡

道跡 2 (図 V-30、図版 V-32)

位置 J59・J60・J61・J62

規模 14.2×0.8×0.1m

調査 I 黒層上部で検出した。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

時期 X-1 の上層にあり、**道跡 2** の上に H-10 の揚げ土があるので擦文前期である。(鈴木)

12 土器観察表・土器接合図・土器分布図の見方について

土器観察表 V-2・3・4・5、VII-1、VIII-2・3 の見方は、成形・調整・施文の内容について、外面を上段に、内面を下段に分けて示した。外面または内面のなかで上下方向は成形・調整・施文の新旧を表し、下にいくほど新しい。縦方向は部位別に区分した。同一部位内において異なる調整等がある場合はその境界を破線で示した。

ただし、甕形・深鉢形の底部については外面の底部側面と外底面を分け、外面底部側面の内容を表中「外面×底部側面」の欄に記述し、外底面の内容は備考に記した。内面は底部側面が存在しないので、内底面の内容を表中「内面×底部側面」の欄に記述した。非ロクロ坏形については外面に底部側面が存在しないので、底部側面という欄はない。調整等の欄に「?」があるのは技法不明を表す。施文は網掛けで示している。施文に括弧があるのは沈線などの本数などを示している。備考には、土器外面の全体的な土色を目安で示し、胎土等・型式名・残存状態を記した。

復元個体接合図 V-31・32、VII-4・5、VIII-5・6 の見方は次のとおりである。小グリット (2.5×2.5m) ごとの集計を基本としている。小グリットの上に重ねて表現している柵は、大グリット (5×5m) の集計しかできなかったものである。また、柵内の数字の配置は部位別の集計で、凡例を示した。部位が判明していて地点不明の個体は集計表中には加算されているが、分布図には示せない。従って、集計表の個数が分布図よりも多くなる場合がある。なお、接合関係が小グリット内に収まる個体や隣り合う小グリット内に収まる個体は掲載しない (VII-3-19 を除く)。

土器分布図 VII-6~10、VIII-7~14 の見方は次のとおりである。集計の仕方は復元土器接合図と同じである。柵内の数字の配置は甕・深鉢形は上段：口縁部+頸部、下段：胴部+底部+不明を表す。ただし、VII 群坏形は上段：口縁部+体部、下段：底部+不明を表す。VII 群は上段：(甕の口縁部+頸部) + (坏の口縁部+体部)、下段：(甕の胴部+底部+不明) + (坏の底部+不明) である。

なお、群の数値は各類の数値の合計と群以下の細分が不可能なものの合計であり、類の数値は各型式の数値の合計と類以下の細分が不可能なものの合計である。

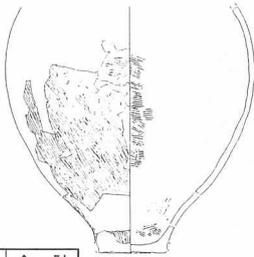
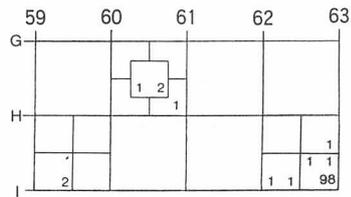
13 復原個体の接合関係について (図 V-31・32)

X-1 の球胴甕 (9-9・10) は接合地点と部位がほぼ同じであり、そこには F-7・8 がある。P-2 の小型甕 (18-12) は P-27 付近に接合関係をもつ。P-2 と P-27 とは長軸方向が類似する。P-29 のミニチュア坏 (18-13) と P-31 の小型甕 (18-19) は接合地点が同じで、X-2 付近である。P-30 の中型甕 (18-18) は P-2 付近に接合関係をもつ。P-31 のミニチュア甕 (18-21) は H 64c に接合地点を持つ。

F-41 (25-11) の深鉢は F-37 (25-9) の深鉢と重複し、後北 A 式の深鉢 (VIII-3-33) の接合関係とやや重複する。F-29 (25-10) の深鉢は後北 B 式の壺 (VIII-3-36) や後北 B 式の深鉢 (VIII-3-34) の接合関係と重複する。

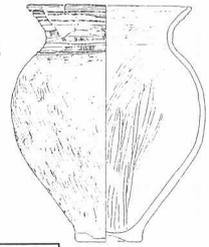
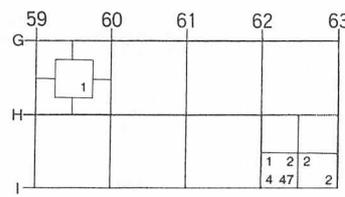
F-1 (25-12) の深鉢はその周辺に主に分布し、北大 I 式の深鉢 (VII-3-16) の接合関係と重複する。F-78 (26-18) の深鉢はその周辺に分布し、F-1 の接合個体の分布に隣接する。(鈴木)

V-9-9 X-1



	口縁部	頸部	胴部	底部	合計
復元	0	0	77	1	78
復元残	1	2	29	0	32
合計	1	2	106	1	110

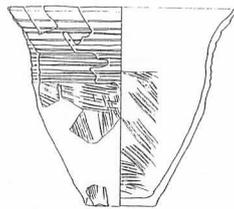
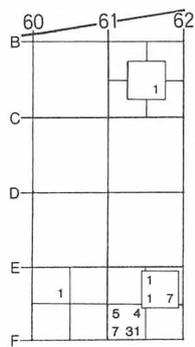
V-9-10 X-1



	口縁部	頸部	胴部	底部	合計
復元	4	4	46	2	56
復元残	0	0	3	0	3
合計	4	4	49	2	59

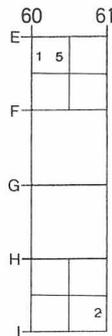
部位不明細片数：12

V-18-12 P-28



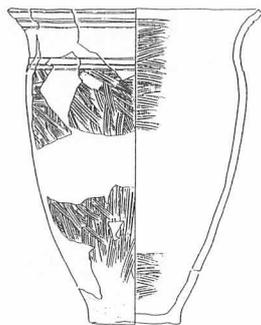
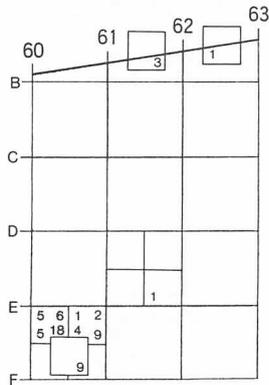
	口縁部	頸部	胴部	底部	合計
復元	2	4	17	4	27
復元残	4	4	23	0	31
合計	6	8	40	4	58

V-18-13 P-29



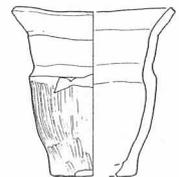
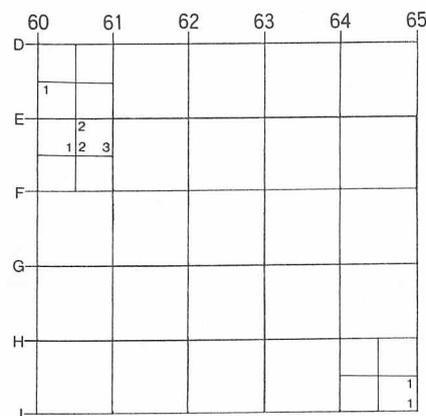
	口縁部・体部	底部	合計
復元	1	7	8
復元残	0	0	0
合計	1	7	8

V-18-18 P-30



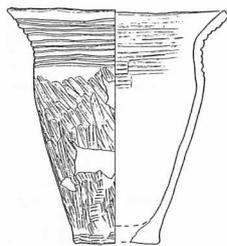
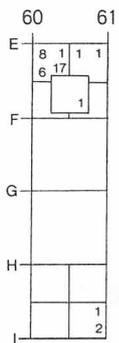
	口縁部	頸部	胴部	底部	合計
復元	6	6	28	8	48
復元残	0	5	12	0	17
合計	6	11	40	8	65

V-18-19 P-31



	口縁部	頸部	胴部	底部	合計
復元	3	2	5	1	11
復元残	0	0	0	0	0
合計	3	2	5	1	11

V-18-21 P-31



	口縁部	頸部	胴部	底部	合計
復元	9	6	20	3	38
復元残	0	0	0	0	0
合計	9	6	20	3	38

(トーンは遺構出土破片)

甕

口縁部	底部
頸部	胴部

坏

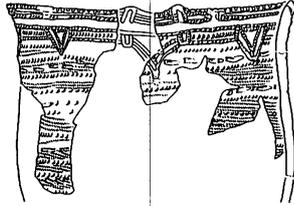
口縁・体部	底部
-------	----

図V-31 遺構の土器接合図(1)

13 復原個体の接合関係について

V-24-9 F-37

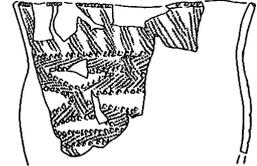
	61	62	63	64	65
D					
E					
F					
G					
H	1	2		1	1
I	1	3	2	4	2
J	3	2	2		



	口縁部	頸部	胴部	不明	合計
復元	15	7	0	0	22
復元残	0	13	0	0	13
合計	15	20	0	0	35

V-25-11 F-41

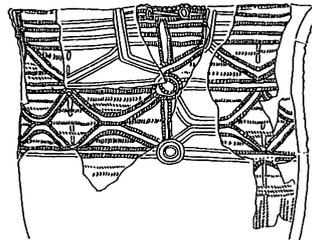
	61	62	63	64	65
E					
F			1		
G	2	5	3	1	1
H	2		1		
I	2			1	
J					1



V-25-10 F-29

	59	60	61	62	63	64	65	66	67
D									
E									
F			1						
G					2	3			
H					1	4			
I					3	1	2		
J			2	4					

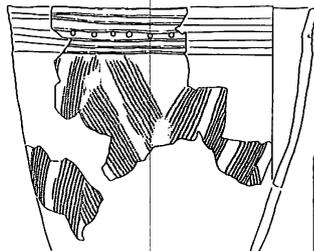
	口縁部	頸部	胴部	不明	合計
復元	5	5	0	0	10
復元残	0	4	4	2	10
合計	5	9	4	2	20



	口縁部	頸部	胴部	不明	合計
復元	6	14	0	0	20
復元残	0	3	0	0	3
合計	6	17	0	0	23

V-25-12 F-1

	64	65	66	67	68
F					
G			1		
H				4	1
I				51	1
J				1	13
K	6				
L			1	2	1



	口縁部・頸部	胴部	不明	合計
復元	7	19	0	26
復元残	8	53	0	61
合計	15	72	0	87

V-26-18 F-78

	60	61	62	63	64	65
H						
I					1	3
J				3	17	1
K					1	1
L		2	1		1	4



	口縁部	頸部・胴部	不明	合計
復元	2	33	0	35
復元残	0	4	0	4
合計	2	37	0	39

V-25-12 F-1

V-26-18 F-78 以外

口縁部	不明
頸部	胴部

(トーンは遺構出土破片)

V-25-12 F-1

口縁部	不明
頸部	胴部

V-26-18 F-78

口縁部	不明
頸部	胴部

図V-32 遺構の土器接合図(2)

表V-2 遺構出土の土器観察表(1)

V-5-1

口唇部	口縁部	頸部	胴部	底部	底部側面	備考
外	ヨコナデ	粘土紐巻上げ ?	タテハケ ヨコナデ 沈線(?)	タテミガキ		・Heu7.5YR8/6 (橙黄褐色) ・補修孔 ・全体に麻減
内	ヨコナデ	粘土紐巻上げ ?	ヨコハケ	タテミガキ		・VII b ・ほぼ完形

V-8-7

口唇部	口縁部	体部	底部	備考
外	ヨコミガキ	粘土紐巻上げ ?	ミガキ	・Heu5YR5/6 (明赤褐色) ・内黒
内	ヨコミガキ	粘土紐巻上げ ?	ミガキ	・VII b ・2/5残存

V-9-8

口唇部	体部	底部	備考
外	回転ヨコナデ ?	回転ヘラ切り履し 回転ナデ 高台貼付 回転ナデによる 高台整形	・外面 N3/0 (暗灰色) ・内面 N5/0 (灰色) ・断面 Hue5YR4/4 (にぶい赤褐色) ・VII b ・外面自然釉 (透明) ・胎土精良、海綿骨針 ・3/4残存
内	回転ヨコナデ ?		

V-8-3

上	側	下	備考
ミガキ	?	ミガキ	・上面 Heu5YR5/6 (明赤褐色) ・側面、下面黒色
?	?	?	
上面からのミガキ	沈線	?	
側面からのミガキ	?	?	
ミガキ	?	?	・VII b ・完形

V-9-9

胴部	底部側面	備考
粘土紐巻上げ ?	ヨコナデ	・Heu10YR7/4 (明黄色) ・外底面にハケ
ナナメハケ	ヨコナデ	
ナナメミガキ	タテミガキ	
ヨコミガキ	ヨコハケ	
粘土紐巻上げ	ヨコハケ	
ヨコナデ	ヨコハケ	
タテミガキ	タテミガキ	・VII b ・頭部より上は 欠失

V-9-11

口唇部	口縁部	頸部	胴部	底部側面	備考
外	ヨコナデ	粘土紐巻上げ ?	タテハケ	ヨコナデ	・Heu10YR8/4 (淡黄褐色)
内	ヨコナデ	段状沈線(口縁側 2+胴部側 3)	粘土紐巻上げ ?	ヨコナデ	
内	ヨコナデ	ヨコハケ	タテミガキ		・VII b ・完形

V-8-5

口唇部	体部	底部	備考
外	粘土紐巻上げ ヨコナデ	ミガキ	・Heu7.5YR7/6 (橙色) ・内黒 ・内面剥落
内	ヨコミガキ	ミガキ	・VII b ・5/8残存

V-9-10

口唇部	口縁部	頸部	胴部	底部側面	備考
外	ヨコナデ	段状沈線	粘土紐巻上げ ヨコナデ	ナナメハケ	・Heu5YR6/8 (橙色) ・外底面にハケ
内	ヨコナデ	ヨコハケ	ヨコミガキ	ナナメミガキ	
内	ヨコナデ	ヨコハケ	粘土紐巻上げ ヨコナデ	タテケズリ	
内	ヨコナデ	ヨコハケ	ヨコハケ	タテハケ	
内	ヨコナデ	ヨコミガキ	タテミガキ	タテミガキ	・VII b ・ほぼ完形

V-8-6

口唇部	体部	底部	備考
外	粘土紐巻上げ ?	ミガキ	・外面ほぼ黒色 ・内外黒 ・内面剥離
内	ヨコミガキ	ミガキ	・VII b ・3/4残存

V-9-12

口唇部	口縁部	頸部	胴部	底部側面	備考
外	ヨコナデ	粘土紐巻上げ ?	タテハケ	ヨコハケ	・Heu7.5YR7/8 (黄褐色) ・補修孔 ・口縁部内面に 剥落あり ・外底面薬師庄痕
内	ヨコナデ	ヨコハケ	ヨコミガキ	ナナメハケ	
内	ヨコナデ	粘土紐巻上げ ?	ヨコハケ	ヨコハケ	
内	ヨコナデ	ヨコハケ	ヨコハケ	ヨコハケ	・VII b ・完形

表V-3 遺構出土の土器観察表(2)

V-17-1

口唇部	口縁部	頸部	肩部	腹部	底部	備考
				粘土紐巻上げ ?		・Heu10YR7/6 (明黄褐色) ・内底面は黒色
外面				ヨコナデ 凹線 段状沈線 ?	ミガキ	・VII b ・1/12残存
内面				粘土紐巻上げ ?		

V-17-4

口唇部	口縁部	頸部	肩部	腹部	底部	備考
				粘土紐巻上げ ?		・Heu10YR8/6 (黄褐色) ・内黒
外面				ヨコナデ 段 ヨコミガキ	ケズリ	
内面				粘土紐巻上げ ヨコナデ 凹線 ヨコミガキ	ナデ ミガキ	・VII b ・完形

V-17-8

口唇部	口縁部	頸部	肩部	腹部	底部	備考
				粘土紐巻上げ	ナデ	・Heu5YR6/8 (橙色) ・内黒
外面				ヨコナデ ヨコミガキ	ミガキ	
内面				粘土紐巻上げ ヨコナデ 段 ヨコミガキ	ナデ 放射状ミガキ	・VII b ・ほぼ1/2残存

V-18-11

口唇部	口縁部	頸部	肩部	腹部	底部	備考
				粘土紐巻上げ ?		・Heu7.5YR6/8 (橙色) ・外底面砂圧痕 ・外底面穿孔 ・頸部以上は欠失 ・炭化物付着
外面				タテハケ 沈線 ?	タテミガキ	
内面				粘土紐巻上げ ヨコナデ タテハケ ヨコハケ		・VII b ・1/4残存

V-18-12

口唇部	口縁部	頸部	肩部	腹部	底部側面	備考
				粘土紐巻上げ ?		・Heu7.5YR6/6 (橙色)
外面				ヨコナデ 凹線 ヨコハケ タテハケ ?		・VII b ・1/4残存
内面				粘土紐巻上げ ヨコナデ ナナメハケ ヨコハケ ヨコナデ		

V-18-14

口唇部	口縁部	頸部	肩部	腹部	底部側面	備考
				粘土紐巻上げ ?		・Heu7.5YR7/6 (橙色) ・口縁の破断面に炭化物が付着 ・内面の口縁~底部に炭化物が付着
外面				ヨコナデ 沈線(口縁側3+胴部側3) ヨコナデ ?	ヨコナデ	
内面				粘土紐巻上げ タテハケ ヨコハケ ヨコナデ	ナナメハケ	・VII b ・ほぼ完形

V-18-15

口唇部	口縁部	頸部	肩部	腹部	底部	備考
				回転ヨコナデ ?		・外面Heu10Y2/1 (黒色) ・内面N4/0 (灰色) ・断面Heu2.5YR3/4 (暗赤褐色) ・外面自然釉(透明) ・内外面剥離 ・胎土長石、石英を多く含む ・VII b ・片耳以外ほぼ完形
外面				回転ヨコナデ 回転へ字切り磨し ナデ 高台貼付 回転ナデによる高台整形	耳貼付 ケズリ	
内面				回転ヨコナデ ?		

V-18-13

口唇部	口縁部	頸部	肩部	腹部	底部	備考
				粘土紐巻上げ	ナデ	・Heu7.5YR5/6 (明褐色) ・内黒
外面				ヨコナデ 凹線 ヨコミガキ	ミガキ	
内面				粘土紐巻上げ ヨコナデ ヨコミガキ	?	・VII b ・3/4残存

V-18-17

口唇部	口縁部	頸部	肩部	腹部	底部	備考
				粘土紐巻上げ ?		・Heu10YR6/6 (明黄褐色) ・口唇部に黒斑
外面				沈線 ?	ミガキ	
内面				ヨコミガキ 粘土紐巻上げ ?	ナデ	・VII b ・完形

表V-4 遺構出土の土器観察表(3)

V-18-18

口唇部	口縁部	頸部	胴部	底部側面	備考
		粘土紐巻上げ ヨコナテ			<ul style="list-style-type: none"> ・ Heu10YR7/4 (純い黄褐色) ・ 内面に炭化物 ・ 外底面薬師痕
外		タテケスリ タテハケ			
面	ヨコナテ	段状波線	ヨコハケ ナナメハケ		
	ヨコナテ				
内		粘土紐巻上げ ヨコナテ			<ul style="list-style-type: none"> ・ VII b ・ 1/4残存
面	ヨコナテ	タテケスリ タテハケ ヨコハケ			

V-18-19

口唇部	口縁部	頸部	胴部	底部側面	備考
		粘土紐巻上げ タテハケ			<ul style="list-style-type: none"> ・ Hue7.5YR6/6 (橙色) ・ 底面穿孔
外		ヨコハケ		タテハケ	
面	ヨコナテ				
	ヨコナテ				
内		粘土紐巻上げ ヨコナテ			<ul style="list-style-type: none"> ・ VII b ・ 1/2残存
面	ヨコハケ ヨコナテ				

V-24-9

口唇部	口縁部	頸部	胴部	底部側面	備考
		粘土紐巻上げ			<ul style="list-style-type: none"> ・ Hue10YR3/2 (黒褐色) ・ 炭化物付着
外		突起貼付			
面		突起に短い構位隆起線・突起			
		突起に深い構位隆起線・突起			
内		刻み			
面					

V-18-21

口唇部	口縁部	頸部	胴部	底部側面	備考
		粘土紐巻上げ ヨコナテ			<ul style="list-style-type: none"> ・ Hue7.5YR6/6 (橙色) ・ 外底面ハケメ ・ 外底面穿孔
外		ヨコナテ		タテハケ ヨコハケ	
面		ヨコナテ			
		ヨコナテ			
内		粘土紐巻上げ ヨコナテ			<ul style="list-style-type: none"> ・ VII b ・ 6/7残存
面		ヨコハケ ヨコナテ			

V-18-20

口唇部	体部	底部	備考
外	回転ヨコナテ	回転ヘラ切り磨し ナテ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内外断面とも Hue7.5Y6/1(灰色) ・ 口唇部に重ね焼痕 ・ 胎土やや粗 ・ 焼成やや不良 ・ VII b ・ ほぼ完形(外面剥落)
内	回転ヨコナテ		

表V-5 遺構出土の土器観察表(4)

V-25-10

口唇部	口縁部	頸部	胴部	備考
	突起貼付	粘土紐巻上げ ?	RL縦走帯縄文	・ Hue10YR3/2 (暗褐色) ・ 炭化物付着
外面	突起下位に短い横位隆起線・刺突 突起下位に丸い貼付文	ヨコナデ RL横走帯縄文	ヨコナデ U字隆起線・刺突(4本) U字隆起線・刺突(2本) U字隆起線内に縦位隆起線・刺突	
内面	刻み	刺突 縦位弾引巻	二本組横位隆起線・刺突(2カ所) 円形隆起線間に縦位隆起線・刺突 U字隆起線間にV字隆起線・刺突 二本組横位隆起線間に逆台形状隆起線・刺突(2) 二本組横位隆起線間に台形状隆起線・刺突(2)	・ 後北B式 ・ 上半3/5残存

V-25-12

口唇部	口縁部	頸部	胴部	備考
		粘土紐巻上げ ?	タテナデ ヨコナデ 微塵起線 円形刺突 RL縦走帯縄文(右下がり) RL縦走帯縄文(左下がり)	・ Hue10YR7/4 (にぶい黄褐色) ・ 石英、長石、チャートが多い ・ 炭化物
外面				
内面		粘土紐巻上げ ヨコナデ		・ 北大I式 ・ 1/3残存

V-25-13

口唇部	口縁部	頸部	胴部	底部側面	備考
		粘土紐巻上げ ?	ナデ		・ Hue10YR5/4 (にぶい黄褐色)
外面	ヨコナデ				
内面		RL縦走帯縄文 刺突 粘土紐巻上げ ヨコナデ			・ 補修孔 ・ VI c ・ 3/5残存

V-26-17

注口部	口唇部	口縁部	頸部	胴部	底部側面	備考
			本体部 粘土紐巻上げ ヨコナデ タテナデ ヨコナデ			・ Hue7.5YR7/6 (褐色): 外面 ・ Hue7.5YR7/6 (淡黄褐色): 内面 ・ 内外面に炭化物 ・ 外底面ナデ
外面						
内面	ヨコナデ	上から下へケズリ(注口接合側の半面)		粘土紐巻上げ ヨコナデ		・ 北大I式 ・ ほぼ完形

V-25-11

口唇部	口縁部	頸部	胴部	備考
		粘土紐巻上げ ヨコナデ	RL縦走帯縄文 閉いヨコナデ	・ Hue7.5YR6/6 (褐色)
外面			RL横走帯縄文(凸レンズ状文) 凸レンズ状文の交点RL縦走帯縄文 帯縄文を刺突で区画	
内面	刻み	粘土紐巻上げ ?		・ アヨロ3a併進行 ・ 上半1/3残存
ヨコナデ				

V-26-18

口唇部	口縁部	頸部	胴部	備考
		粘土紐巻上げ ?	タテナデ ヨコナデ 粘土紐巻上げ ヨコナデ	・ Hue10YR4/2(灰黄褐色) ・ 石英、長石、軽石 ・ チャートが多い ・ 炭化物
外面				
内面				・ VI c ・ 1/3残存
ヨコナデ				

表V-6 土器・石器掲載一覧

住居の土器

図番号	発掘区	遺構名	層位	分類
V-4-1	E57d	H-2	覆土1層	VII e
V-5-1	J64b	H-10	遺構付近	VII d

土壌の土器

図番号	発掘区	遺構名	層位	分類
V-17-1	D60a	P-8	塋底面	VII c
4	C60c	P-12	壁際の塋底面	VII c
8	B60c	P-27	2層塋底面近く	VII c
V-18-11	E61b	P-28	4層	VII c
12	E61a	P-28	塋口付近I B	VII c
13	E60a	P-29	壁際4層中位	VII c
14	E60a	P-29	壁際4層中位	VII c
15	E60a	P-29	塋口付近I B	VII c
17	E60a	P-30	壁際の塋底面	VII c
18	E60a	P-30	塋口付近I B	VII c
19	E60d	P-31	塋口付近I B	VII c
20	D60b	P-31	塋口付近I B	VII c
21	E60d	P-31	塋口付近I B	VII c

鍛冶遺構

図番号	発掘区	層位	備考
V-28-1	F62a	攪乱	鍛冶遺構1付近 羽口

X-1の土器

図番号	発掘区	遺構名	分類
V-8-1	H62c	X-1 区画内 土器種 d	VII c
2	H62c	X-1 区画内 土器種 d	VII c
3	H62c	X-1 区画内 土器種 d	VII c
5	H62d	X-1 区画内 土器種 a	VII c
6	H62c	X-1 区画内 土器種 a・d	VII c
7	H62c	X-1 区画内 土器種 a・d	VII c
V-9-8	H62d	X-1 区画内	VII c
9	H62c	X-1 区画内 土器種 b・d	VII c
10	H62b	X-1 区画内 土器種 c・d・e 周溝内2層上部	VII c
11	H62c	X-1 区画内 土器種 a・d	VII c
12	H62c	X-1 区画内 土器種 a・d	VII c

焼土の土器

図番号	発掘区	遺構名	層位	分類
V-24-1	G67b	F-1	焼土の脇	VI b 後北B式
2	G67b	F-20	焼土の脇	VI b 後北B式
3	G63a	F-29	焼土中	VI b 後北A式
4	F60b	F-30	焼土中	VI d
5	H65a	F-37	覆土中	VI b 後北式
6	F62a	F-39	焼土中	VI b 後北B式
7	E62b	F-60	焼土中	VI b 後北B式
8	J61c	F-76	焼土中	VI b 後北B式
9	H64a他	F-37	焼土中	VI b 後北A式
V-25-10	F64b他	F-29	焼土中	VI b 後北B式
11	F61a他	F-41	焼土中	VI b 恵山式
12	I66d他	F-1	焼土上	VI c 北大I式
13	G67a他	F-1	焼土上	VI c
V-26-17	F63b	F-78	焼土の脇	VI c 北大I式
18	F63b	F-78	焼土の脇	VI c

遺構石器掲載一覧

図番号	遺構名	層位	分類	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
V-4-2	H-2	覆土1層	石核	黒曜石	51.5	40.6	21.2	39.9	
V-8-4	X-1	G1 塋底	有意な礫	縞頁岩	54.0	81.4	24.7	123.0	
V-11-2	X-2	墓 塋底	石槍	黒曜石	62.5	24.2	9.0	9.7	
V-18-16	P-29	塋口付近	たたき石	安山岩	95.9	76.9	65.8	715.7	
V-25-14	F-1	焼土上面	スクレイパー	黒曜石	23.8	23.6	7.0	4.6	
V-25-15	F-13	焼土脇	有意な礫	砂岩	220.0	124.0	52.0	1290.9	G58a・6と接合
V-25-16	F-38	焼土上面	石鏃	黒曜石	15.5	(12.2)	2.4	0.5	
V-26-19	F-78	焼土中	スクレイパー	黒曜石	39.5	31.1	13.4	18.4	赤井川産
V-26-20	F-78	焼土中	石核	黒曜石	38.4	27.8	26.3	28.9	
V-26-21	F-78	焼土中	石核	黒曜石	38.3	25.9	16.6	17.3	
V-26-22	F-78	焼土中	石核	黒曜石	31.6	31.9	18.4	19.6	

表V-7 遺構遺物集計表(1)

H-1		床 面
石 器	礫・礫片	9
	有意な礫・礫片	2
	石器合計	11

H-2		覆 土	床	合 計
土 器	IV	2		2
	V	8		8
	VII	1	1	1
土器合計		11	1	12
石 器	石 核	1		1
	フレイク・チップ	2		2
	礫・礫片	6		6
	石器合計	9		9

H-10		5 層	6 層	7・8層	床 直	掘 揚 土	揚土の下	合 計
土 器	III	6			4	2		12
	III a			1				1
	IV b				1			1
	不明	3			3			6
	土器合計	9		1	8	2		20
石 器	フレイク・チップ	5	3				7	15
	礫・礫片	2			1	1		4
	石器合計	7	3		1	1	7	19

X-1		区 画 内	G1 墳底	G4 覆土	G4 覆土上面	G4 覆土1層	周 溝	合 計
土 器	III			1	2	1	2	5
	III a					1		1
	VI b						4	4
	VII b	3 3 3				2	4 8	3 8 3
	須 恵 器 VII b	5						5
	紡 錘 車	1						1
土器合計		3 3 9		1	2	4	5 2	3 9 8
石 器	礫・礫片							2
	有意な礫・礫片		1				2	1
	石器合計		1				2	3

X-2		墓 墳 覆 土	墓 墳 底	周 溝	合 計
土 器	III b	3			3
	VI			1	1
	土器合計	3		1	4
石 器	石 鎌・未製品			1	1
	R・F			2	2
	フレイク・チップ	1		3 1	3 2
	礫・礫片	2			2
	石器合計	3		3 4	3 7
金属製品	鉄 製 品		1		1

X-3		周 溝
土器	III	5

表V-8 遺構遺物集計表(2)

P-2		覆土2層
土	Ⅶ	9
	縄文土器	1
器	土器合計	10
石	礫・礫片	1
	有意な礫・礫片	2
器	石器合計	3

P-3		覆土1層
土	Ⅴ	2
	Ⅴb	1
器	土器合計	3
石器	礫・礫片	3

P-8		墳底	覆土1層上部	覆土1層下部	覆土1層	合計
土器	Ⅲ		1			1
	Ⅳ		1			1
	Ⅳc		1			1
	Ⅶb	1				1
	不明		1		2	2
	土器合計	1	5		4	10
石器	フレイク・チップ			1	3	4
	石斧片			1		1
	礫・礫片				1	1
	石器合計			2	4	6

P-9		覆土3層	覆土5層上部	覆土5層下部	合計
土器	Ⅲ		1		1
	Ⅶb	4	5		9
	不明	1			1
	土器合計	5	6		11
金属製品	鉄製品			3	3

P-12		覆土1層	墳底	合計
土器	Ⅳb	1		1
	Ⅵ	2		2
	Ⅶb	1	1	2
	土器合計	4	1	5
石器	フレイク・チップ	1		1
金属製品	鉄製品		3	3

P-14		1層	墳底	合計
土器	Ⅲ		1	1
	Ⅳ	1		1
	不明	1		1
	土器合計	2	1	3
石器	フレイク・チップ	2		2
	礫・礫片	2		2
器	石器合計	4		4

P-17		覆土2層
石器	フレイク・チップ	3
	礫・礫片	1
器	石器合計	4

P-27		覆土1層	覆土2層上部	墳底	合計
土器	Ⅵ		1		1
	Ⅶb		3		3
	土器合計		4		4
石器	フレイク・チップ	1			1
金属製品	鉄製品			2	2

表V-9 遺構遺物集計表(3)

P-28		I	B	覆土3層	覆土5層	合計
土	IV				1	1
	IVc			1		1
	VIIb	5	7			5 7
器	土器合計	5	7	1	1	5 9
石	軽石				1	1
	礫・礫片				1	1
器	石器合計				2	2

P-29		2層	4層	合計
土	III		1	1
	V		2	2
	VIIb	1	6	5
器	不明		2	2
	土器合計	1	6	5
石	フレイク・チップ		1	1
	たたき石		1	1
	礫・礫片	1		1
器	石器合計	1	2	3

P-30		墳底	I	B	合計
土器	VIIb	1	4	5	4 6

P-31		I	B
土	VIIb	5	4
器	須恵器 VIIb	5	9
	土器合計	1	1 3

F-1		焼土上
土	VIb	7
	VIc	1 4 5
器	土器合計	1 5 2

F-13		焼土上
石器	礫・礫片	1

F-20		I	B
土器	VI		2

F-27		焼土中
石	礫・礫片	3
	有意な礫・礫片	1
器	石器合計	4

F-29		焼土中
土器	VIb	1

F-30		焼土面
土	VIb	1
	VI d	6
器	土器合計	7

F-37		焼土上面
土器	VIb	2
石	R・F	1
	フレイク・チップ	9
器	石器合計	1 0

F-38		焼土上面
土	VI	2
	VIb	1
器	土器合計	3
石	石 鏃	1
	フレイク・チップ	1 2
器	石器合計	1 3

F-39		焼土上
土器	VIb	4
石器	フレイク・チップ	1

F-41		焼土上
土器	VIb	1

F-43		焼土
土器	IVa	1

F-56		焼土上
石器	礫・礫片	2

F-60		焼土中
土器	IVb	1
石器	フレイク・チップ	1

F-65		焼土上	焼土中	合計
土	V	1 1 6		1 1 6
	Vc	7		7
	VI		1	1
器	土器合計	1 2 3	1	1 2 4

F-77		焼土内
土器	VI	2
石器	礫・礫片	1

F-78		焼土脇
土	III	2
	IIIa	1
	VIc	2 4
器	土器合計	2 7
石	R・F	1
	フレイク・チップ	1
	石 核	4
	礫・礫片	4
器	石器合計	1 0

灰 集 中 2		灰 層
土器	VI	1

VI II 黒層の遺構とその遺物

1 概要

遺構は、北にむかって伸びる舌状台地の頂部（標高8.4～7.8m）と東西斜面の肩部分に集中する。住居跡9軒、土壇20基、Tピット21基、焼土36基を検出した。おもな遺構の時期は縄文時代中期前半、後葉、後期初頭、後期中葉、後期後葉である。住居跡はおもに台地の北西側斜面肩部に集中し、H-6～9は切り合い関係を持つ。おもな時期は後期初頭余市式である。土壇は台地の西半に後期中葉から後葉にかけての土壇が集中する。Tピットは東西斜面の両肩部分に等高線と直交するように配列されている。特に東斜面に多い。焼土は台地全面に分布している。H-6～9は切り合い、その凹みには堂林式期の遺物が集中する。住居覆土最上部のF-379も堂林式期である。

遺構番号の欠番について、TP-4～8は1996年度④地区の調査であり、焼土F-85～F-378は1997年度②地区の調査であり、報告は次年度以降である。

2 住居跡

H-3（図VI-2・12、表VI-1・4、図版VI-1・4）

位置 B 58・59、C 58・59 長軸方向 N-53°-E

規模 (5.79)/5.29×(3.53)/3.13×0.29m

調査 遺構の上部は耕作によって漸移層上面まで削平を受けていた。また東側の一部は家屋の基礎によって削平を受けていた。長軸と短軸方向に2本のベルトを設けた。覆土の調査終了後に壁際で柱穴を検出した。床面には石囲い炉の抜き取り痕のようなものを検出したが、焼土の痕跡が不明瞭であるために付属遺構番号はつけなかった。床面土壌はフローテーション用に50cm方格割付けをおこない9か所で採取した。

覆土 覆土1～2は流れ込みの堆積を示していた。覆土3は竪穴全面に分布しておらず、層厚の変動が激しい。なお、覆土上面には堂林式期の焼土（F-22）がある。

形態 平面形は長楕円形で、床面は平坦で、壁は高さ25cm前後で内彎して立ち上がる。

付属遺構 柱穴は8か所で、平面形は円形で浅い。床面に石囲い炉の抜き取り痕のようなものを検出したが、くぼみ列の内側の土質は焼土の痕跡が認められなかった。

遺物出土状況 覆土上位のII B層からはIII・IV群が多く出土している。覆土2層からは余市式土器が出土している。覆土4・5層からは遺物は出土していない。床面からは、III群胴部の破片が1点と表面を研磨した軽石や石器類が少量出土している。

土器 1～3はII B層出土、4～6は覆土2層遺物出土。1はLR縄文→磨り消し→沈線文、堂林式。外面に炭化物が付着する。II B層出土。C 59 bから同一個体が1点出土している。2はLR縄文→貼付帯・RL縄文、余市式。3は横走ぎみのRL縄文で良く締まった節、余市式。4はRL縄文→弱いナデ、口縁端外面が外側に肥厚する、余市式。5はLR縄文→貼付帯・LR縄文→口縁端面・LR縄文→貼付帯の下側にナデによる無文帯、余市式。6はLR縄文→弱いナデ、余市式。

時期 覆土2層の遺物出土状況から、縄文後期初頭の可能性が高い。（鈴木）

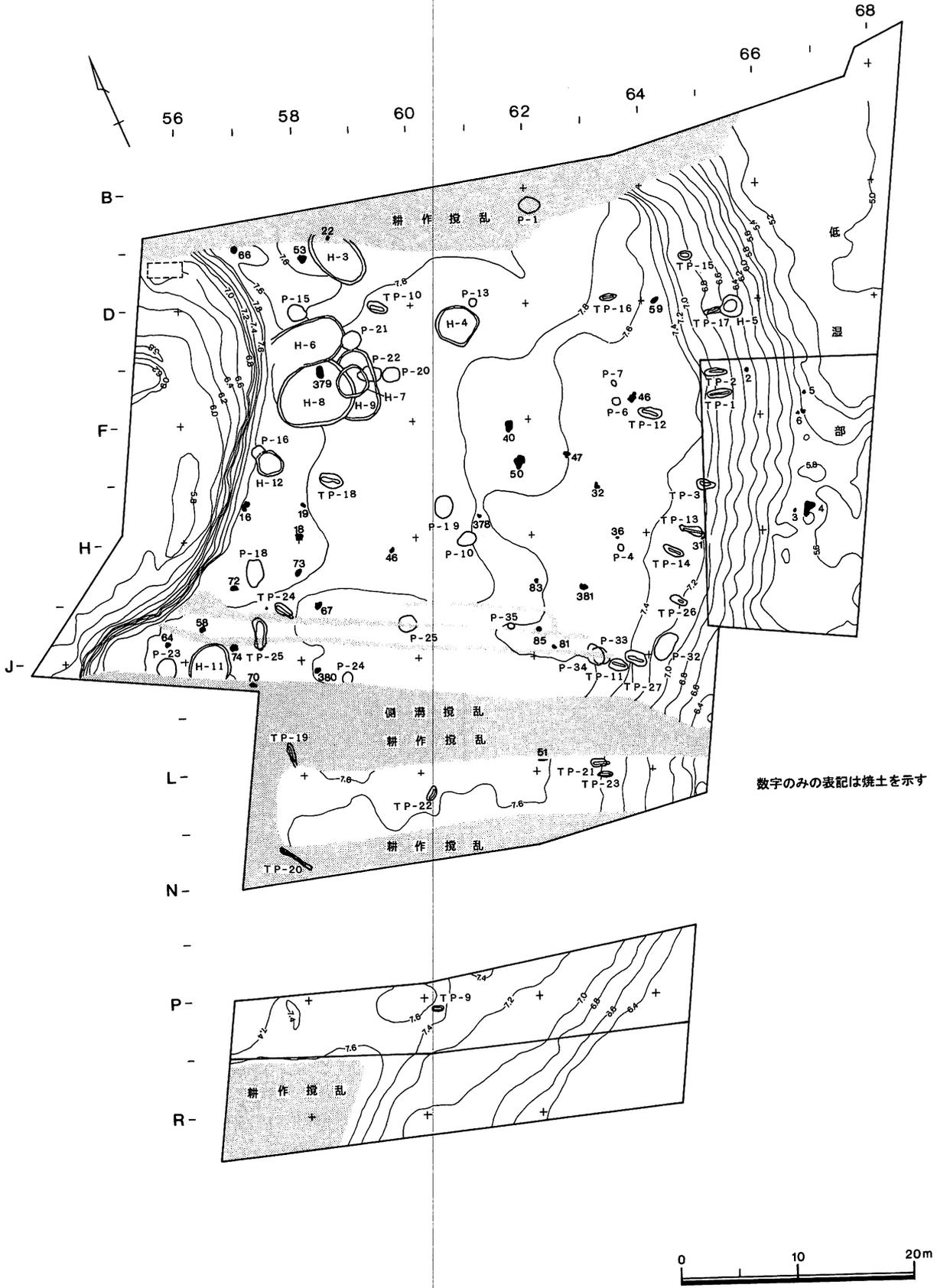
H-4（図VI-3・12、表VI-1・4、図版VI-2・4）

位置 C 60 c、C 61 b、D 60 cd、D 61 ab 長軸方向 N-37°-W

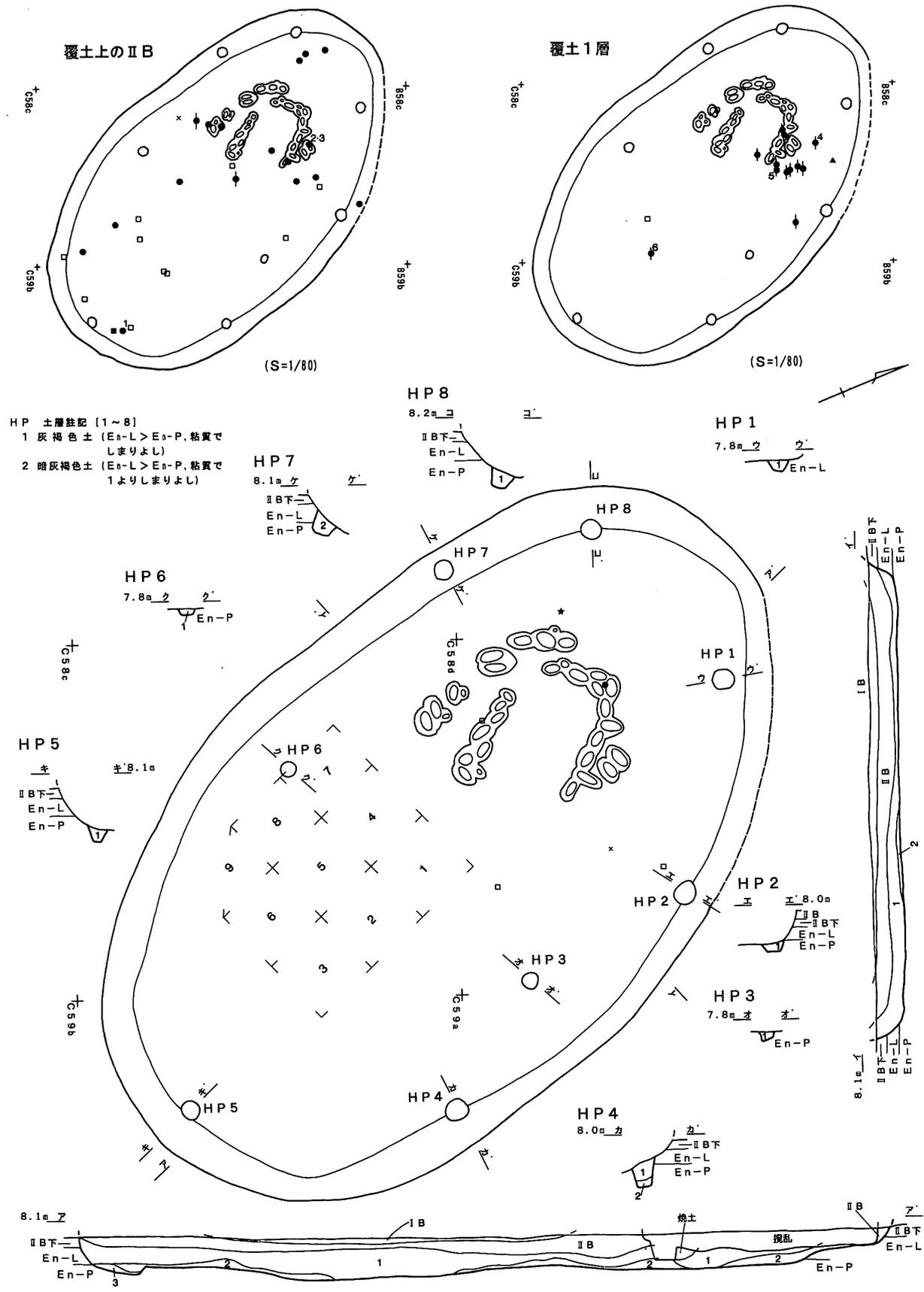
規模 3.28/3.15×3.32/3.07×0.19m

調査 II B層下面を掘り下げている際に、隅丸方形の黒色土入り込みを検出した。大きさから住居の可能性があると調査を開始した。土層観察のため、グリット61ラインをベルト状に残し、黒

2 住居跡



図VI-1 II黒層遺構位置図



図VI-2 H-3

2 住居跡

色土部分を掘り下げた。掘り込み面は土層断面からⅡB下層の直上である。土層確認後、完掘を行った。

HPの配列を考慮して、遺構北半分に空間を確保した、竪穴式住居であると判断した。

覆土 覆土は比較的しまっている。覆土について土砂の流入による埋没を観察できなかった。そのため、人為的に埋め戻した可能性がある。

形態 床面は比較的平坦である。プランは隅丸方形であるが北に面した辺以外の辺は丸みを帯びる。HP-1、4、7、10を結んだ方形の長軸方向は掘り込みのプランの長軸より20°程北へずれる。

付属遺構 9つの柱穴とひとつの小土壇を遺構床面から検出した。

HP-1、4、7、10を結ぶラインが方形を描く。HP1、HP10は直径8cm、HP4、HP7は直径15cm以上ありそれぞれ対をなしている。HP1が30cmほど入り込んでいるのに対し、HP10は10cmほどの入り込みである。しかしHP9がその20cm北に並ぶ。いずれの柱穴も覆土はよく似る。深い1本の柱穴と浅い2本の柱穴が対をなして並ぶことになる。HP8はその覆土の土層から埋め戻した痕跡をうかがえる。

遺物 覆土中からフレイクが10点、礫が2点、有意な礫が1点出土している。床面直上からRFが1点、フレイクが6点出土している。そのうち土器片6点を図示した。いずれも床面直上の遺物であり、Ⅲ群a類土器である。

7は口唇部の肥厚帯と隆帯上を短沈線で加飾する。逆‘く’の字状に2本の短沈線を連続して施文する。8は指先原体としてを‘く’の字に連続刺突する。平行する隆帯の間を、隆帯と同じ様に平行して半截竹管による沈線を充填する。片方の側縁はよく爪を立てるが、対になる側は指頭のみ押しつける。9は半截竹管を連続して短く押し引く装飾を施す。‘く’の字あるいは、逆‘く’の字に連続施文する。10は沈線による加飾がある胴部破片である。11は隆帯上に、爪先による連続刺突を施す。爪は隆帯の両側縁を留めるような対として刺突する。12は半截竹管による縦方向の沈線を施す。6点とも内面は磨き調整を丁寧に施す。8・9・10・12は特に焼成が良好であり、器壁がよくしまる。

時期 床面直上出土のⅢ群a類土器から縄文時代中期中葉の住居と判断した。 (大泰司)

H-5 (図VI-4・12、表VI-1・4、図版VI-3・4)

位置 C 65 bc、D 65 ad **長軸方向** N-49°-E

規模 2.17/1.26×1.81/1.04×0.49m

調査 東低湿部斜面のⅡB層調査中、ⅡB下層面に円形の黒い落ち込みを確認した。北半分を掘り下げ、En-a層に達した一定の深さで床面を確認したので、住居跡と認識して調査に入った。西側の床と壁を調査中にTP-17との切り合いを発見。覆土中にTピットの痕跡がみられなかったことから、本遺構がTP-17を破壊していることを確認した。

覆土 覆土4層と5層は、濁った崩落土。全体で自然埋没を示している。

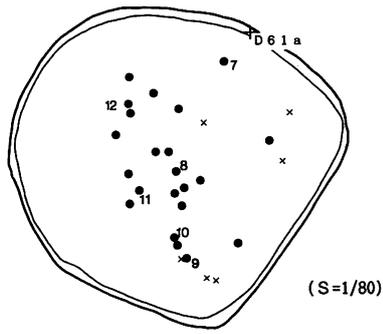
形態 平面形はやや楕円形、床面は皿状で、壁は内湾しながら立ち上がる。

遺物出土状況 覆土1層と床面直上から中期の土器が少量、確認面よりやや上からは後期中葉の土器が1点出土している。石器類は覆土2層からRF、床面から長さ10cm前後の礫が3点出土している。

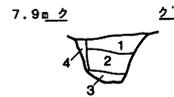
土器 13は覆土1層、14は床面直上。13は小突起下に円錐台形の貼付文→偏平な横位貼付帯→結束第1種(LR・LR)→小突起下に横位縄線文→口縁端に縄端による刺突。萩ヶ岡1式。14は結束第1種(RL・LR)で、内面はミガキ。Ⅲ群a類。

時期 TP-17を破壊していること、周囲にⅣ群b類土器が出土していることから、中期後半以降、後期中葉のあいだに営まれた以降と推定できる。 (三浦)

遺物出土状況

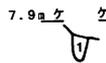


HP 8

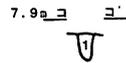


- HP 8 土層註記
 1 暗黄褐色土 (II B+VII, 細かい粒子によって構成される, しまりなし)
 2 黒色土 (II B主体, ややしまりあり)
 3 暗黄褐色度 (1に似るが灰色味が強い)
 4 暗黄褐色度 (1に似るがやや粘質)

HP 9

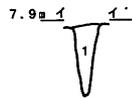


HP 10



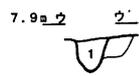
- HP 9・10 土層註記
 1 黒色土 (II B, 周囲に鉄分入り込む, しまりあり)

HP 1



- HP 1 土層註記
 1 黒褐色土 (II B主体, ややしまりあり)

HP 2



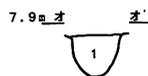
- HP 2 土層註記
 1 黒褐色土 (II B主体, 粘質で ややしまりあり)

HP 3



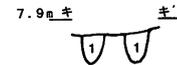
- HP 3 土層註記
 1 黒褐色土 (II B主体, ややしまりあり)

HP 4



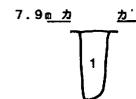
- HP 4 土層註記
 1 黒褐色土 (II B主体, ややしまりあり)

HP 6 HP 7

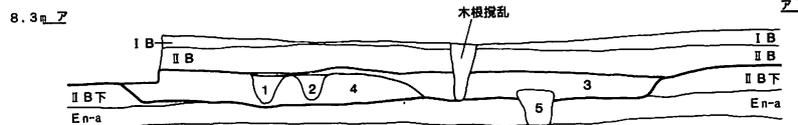


- HP 6・7 土層註記
 1 暗黄褐色土 (II B+VII)

HP 5



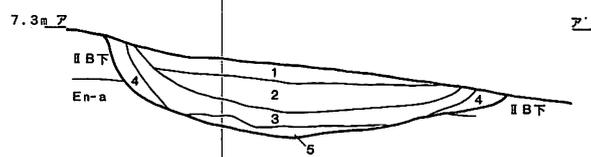
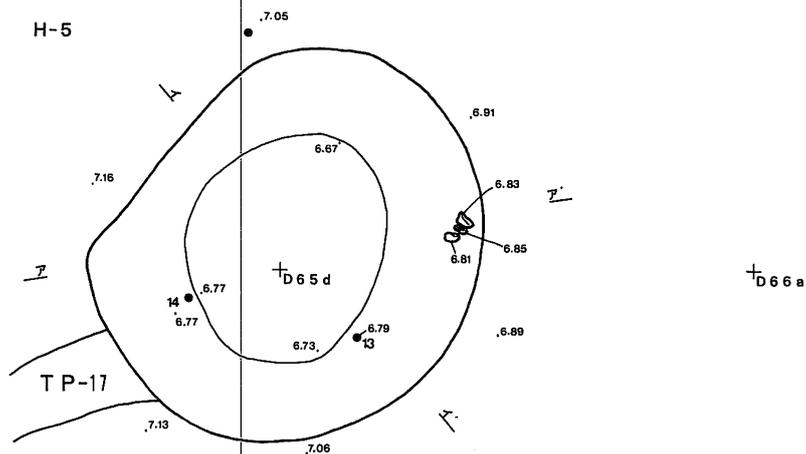
- HP 5 土層註記
 1 黒褐色土 (II B主体, E_n-Pうすく 層状に入り込む)



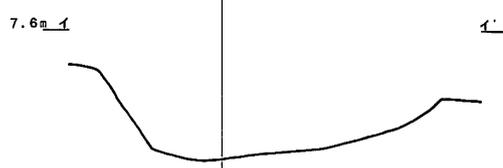
- H-4 土層註記
 1 暗褐色土 (II B > E_n-L, ややしまりあり)
 2 暗褐色土 (II B > E_n-L, 1と類似, ややしまりあり)
 3 黒褐色土 (II B > E_n-L, φ1.0cmのE_n-Pを微量に含む, ややしまりあり)
 4 褐色土 (II B + E_n-L, φ0.2cmのE_n-Pを含む, しまりあり)

図VI-3 H-4

2 住居跡



- H-5 土層誌記
- 1 黒色土 (T a-c混じる)
 - 2 黒灰褐色土 (T a-c混じる、部分的に灰色の粘土粒が入り込む)
 - 3 黒色土 (T a-c混じる)
 - 4 暗黄褐色土 (II B土塊、E_p-L入り込む、しまりなし)
 - 5 暗緑灰色土 (φ0.3~0.5cmの小礫入り込む、砂質)



図VI-4 H-5

H-6 (図VI-5・13・16、表VI-1・2・4、図版VI-5・7・8)

位置 D 57・58、E 58

長軸方向 N-81°-E

規模 -/-×-/-×0.27m

調査 遺構の先後関係の確認はH-2の調査で設けた東西南北トレンチを利用した。土層断面の観察よりH-2に切られていること、掘り揚げ土があること、下層にH-8があることがわかった。H-2の調査後、トレンチによる立上りの確認と揚げ土の拡がりによって上端平面形が確定できたので竪穴内調査を開始した。

覆土 覆土2は住居廃絶時の流入を示していた。

形態 平面形は長楕円形で、床面は平坦で、壁は高さ25cm前後で、外傾し直線的に立ち上がる。南西側の一部は河川の浸食によって失われている。

付属遺構 柱穴は6か所で、平面形は円形で浅い。炉は検出されなかった。

遺物出土状況 覆土上部の遺物は東半分によく出土し、中期・後期の土器が多い。覆土中部の遺物は後期の土器が多く、とくに後期後葉の土器が多い。床面からは後期後葉の土器が多く出土している。石斧が覆土中部・床面から4点出土している。

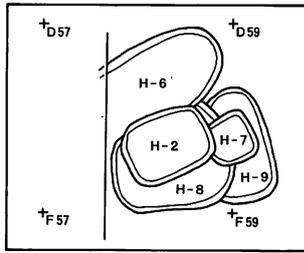
土器 15・19は覆土上部、8・19・21は覆土中部、16~18は覆土下部、19・20は床面出土。15は結束第1種羽状縄文、内面は丁寧なナデ。中期。16はRL縄文→貼付帯・RL縄文→貼付帯・LR縄文、余市式。17はLR縄文→沈線文、手稻式。H-8覆土6層から同一個体が出土している。18はLR縄文→沈線文、堂林式。口縁部は肥厚せず端面は内傾する。19はRL縄文→沈線文→沈線に向かって刺突、堂林式。口縁部はわずかに肥厚し端面は内傾する。H-8覆土5・6層とH-9覆土5層上部とD58bに接合個体がある。20はLR縄文→刺突、堂林式。口縁部は肥厚せず端面はやや外傾する。H-8覆土5層とH-7覆土上部に接合個体がある。21はLR縄文→横位沈線文(上から7本)→充填沈線文→横位沈線文(下の2本)、堂林式。口縁部は肥厚せず端面は内傾する。H-8覆土6層に接合個体がある。

石器 4・5は覆土上部、1~3・6は覆土下部、7は床面出土。1は有茎、背面に厚みを減じるため、左側縁から右側縁付近にまで及ぶ深い調整が入る。2は主要剥離面がなくなるくらい調整が施されている。刃部はつぶれが著しく、腹面の稜に摩滅がある。3は白濁した色調を持ち、錯交剥離調整で側縁に刃部を整形する。右側縁刃部は潰しが著しい。背面の一部に礫皮を残す。基部・末端部側縁には潰しが入っている。4は自然面を残す角礫で、礫打面である。稜に摩滅がある。5は自然面を残す角礫で、礫打面である。1~5は黒曜石製。6は扁平棒状の転石を素材とする石斧の再生未製品である。刃部側を敲打し再生しようとしている。刃部の一部に研磨面が残存している。7は扁平な転石を分割したものを素材とする石斧、基部に礫面(転摩面)を残す。刃部両面に刃縁と直交する方向に条痕がある。8は扁平棒状の転石を素材とする。右側縁には自然面を残し、左側縁には剥離調整→研磨が加わる。折れ面の両主面の角に磨滅がみられる。9はやや厚みのある棒状の転石を素材とする。基部に自然面を残し、両側縁・主面には剥離調整→敲打→研磨が加わる。折れ面にはまばらに敲打痕が付く。10は扁平棒状の転石の側縁の一部を使用する。石斧素材の転用。6~10は緑色泥岩。

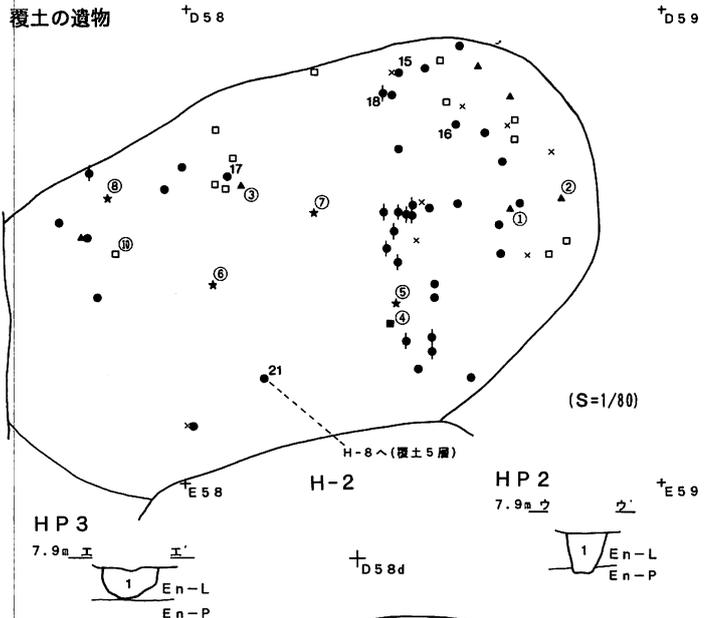
時期 H-8・P-21を切っていること。床面の遺物出土状況から、縄文後期後葉と考えられる。

(鈴木)

2 住居跡

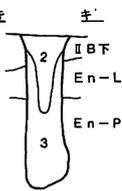


覆土の遺物



HP 6

7.9m 幸

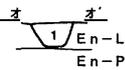


HP 土層註記 [HP 1~6]

- 1 黒褐色土
- 2 暗灰褐色土
- 3 明灰褐色土

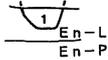
HP 4

7.9m 才



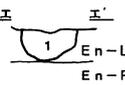
HP 5

7.7m 才



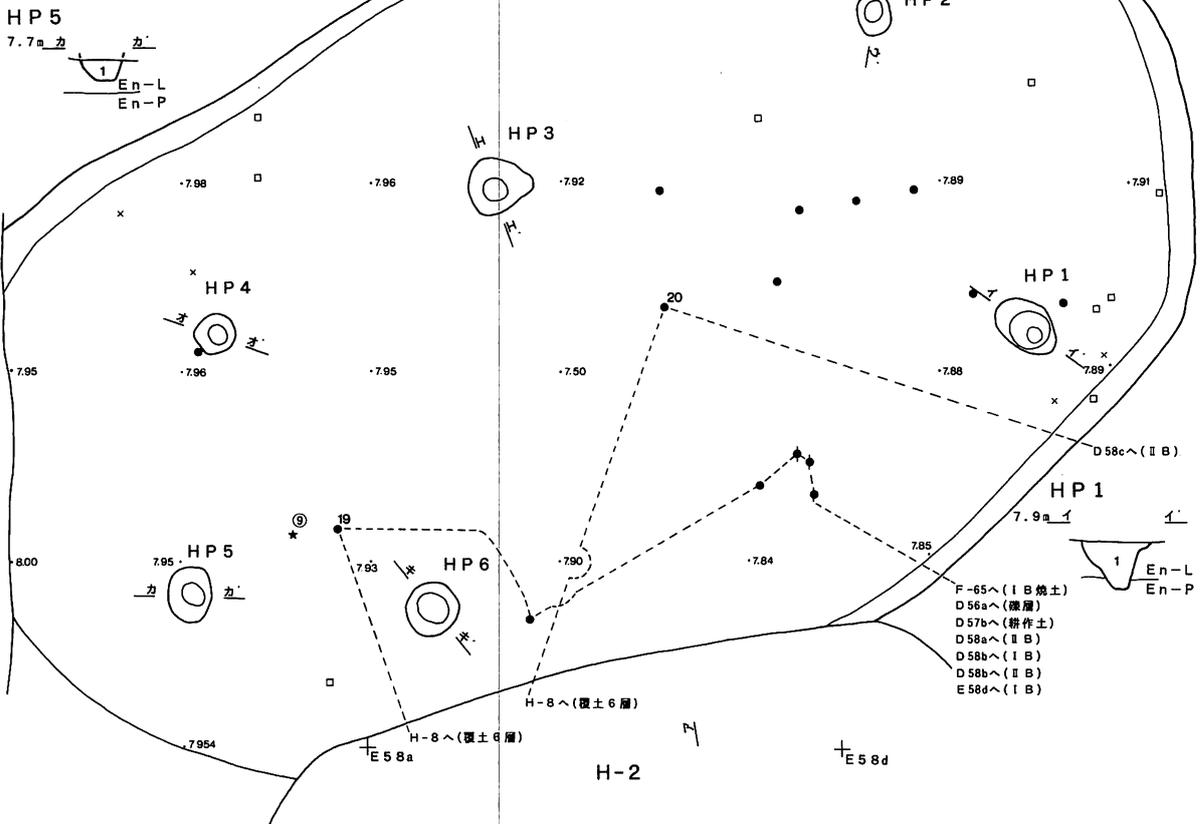
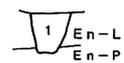
HP 3

7.9m 才



HP 2

7.9m 才



HP 5

7.95m 才



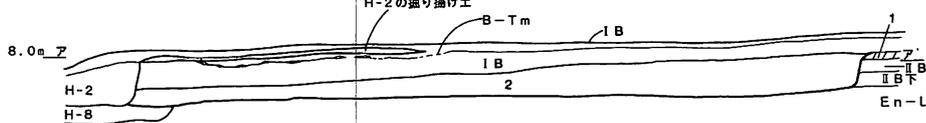
HP 6

7.93m 才



HP 1

7.9m 才



H-6 土層註記

- 1 暗黄褐色土 (En-L > IB + En-P, しまり弱い, H-6 掘り揚げ土)
- 2 黒褐色土 (En-L > IB しまり弱い)

Ⅵ-5 H-6

H-7 (図VI-6・13・16、表VI-1・2・4、図版VI-5・8)

位置 D 58・59、E 58・59

長軸方向 N-22°-E

規模 2.67/2.35×2.89/2.68×0.29m

調査 先後関係の確認は井戸の側面とH-2の調査で設けた東西トレンチを利用した。土層断面の観察よりH-2に切られていること、下層にH-8、H-9があることがわかった。H-2の調査後、トレンチによる立上りの確認と揚げ土の拡がりによって上端平面形が確定できたので竪穴内調査を開始した。

覆土 覆土6は住居廃絶時の流込を示していた。

形態 平面形は短い卵形で、床面は平坦で、壁は高さ30cm前後で、外傾し直線的に立ち上がる。

付属遺構 柱穴や炉は検出されなかった。

遺物出土状況 覆土上部の遺物はほぼ全面に出土し、後期後葉の土器・礫・礫片が多い。覆土中部の遺物は北東側に多く出土し、余市式土器・礫・礫片が多い。床面遺物は南西側に出土し、余市式土器がある。IV群a類土器はすべて余市式である。

土器 20は覆土上部出土、22~25・37は覆土中部出土、37は床面でも出土している。22はL縄文→貼付帯・L縄文→弱いナデ、余市式。23はR縄文→貼付帯・R縄文→弱いナデ、余市式。24はLR縄文→貼付帯・LR縄文、余市式。25は底部でLR縄文、外底面にも縄文、余市式。20は堂林式、H-6床面とH-8覆土5層に接合個体がある。37は余市式、H-8とH-9に床面と接合個体がある。

石器 10・11は覆土上部出土。10は扁平な転石(垂角礫)を素材とした石斧未製品、側縁に剝離調整→敲打、刃部の剝離調整に失敗して放棄した。緑色泥岩。11は安山岩角礫で片主面を使用する。

時期 H-8・H-9を切っていること。床面の遺物出土状況から、余市式期と考えられる。

(鈴木)

H-8 (図VI-7・8・14・17、表VI-1・2・5、図版VI-5・6・8・9)

位置 D 58、E 57・58

長軸方向 N-72°-E

規模 -/-×5.82/5.52×0.22m

調査 先後関係の確認は井戸の側面とH-2の調査で設けた東西南北トレンチを利用した。土層断面の観察よりH-2、H-6、H-7に切られていることが確認できた。H-2・7の調査後、トレンチによる立上りの確認と揚げ土の拡がりによって上端平面形が確定できたので竪穴内調査を開始した。

覆土 覆土5はH-6・7掘り揚げ土、覆土6は住居廃絶時の流込を示していた。なお、覆土上面には堂林式期の焼土(F-379)があり、堂林式土器が多数出土している。

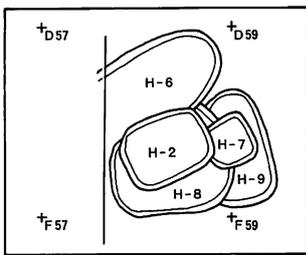
形態 平面形は短い卵形で、床面は平坦で、壁は高さ30cm前後で、外傾し直線的に立ち上がる。

付属遺構 柱穴は壁の近くに8か所、炉2基、付属土壇1基が検出された。柱穴は先端がとがらず浅い。HF 2とHF 1は前後関係がある。

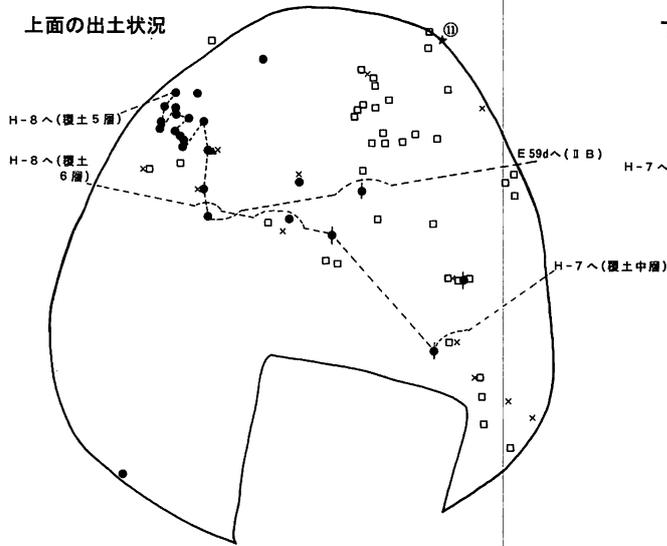
遺物出土状況 覆土5層上部の遺物は西側と東側によって分布し、後期の土器・礫・礫片が多い。覆土5層下部の遺物はほぼ全面に分布し、後期の土器・礫・礫片・フレイク・チップが多い。床面遺物は南西側にやや多く出土し、余市式土器が多い。IV群a類はすべて余市式である。石器の接合例は、遺構間で石斧未製品(図VI-17-7)とH-9の覆土5層中部、覆土の黒曜石フレイクがP-21覆土。遺構内で覆土中層の礫が1例。

土器 20・27は覆土5層、21・22・28~30は覆土6層出土、37は床面出土。26はL縄文→弱いナ

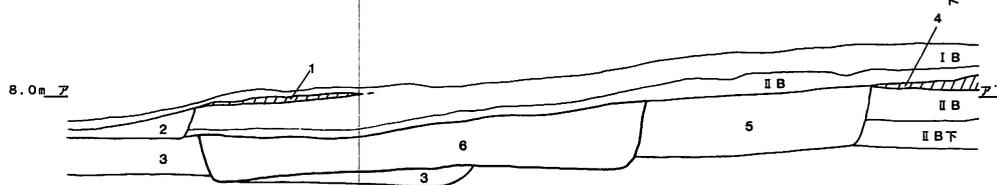
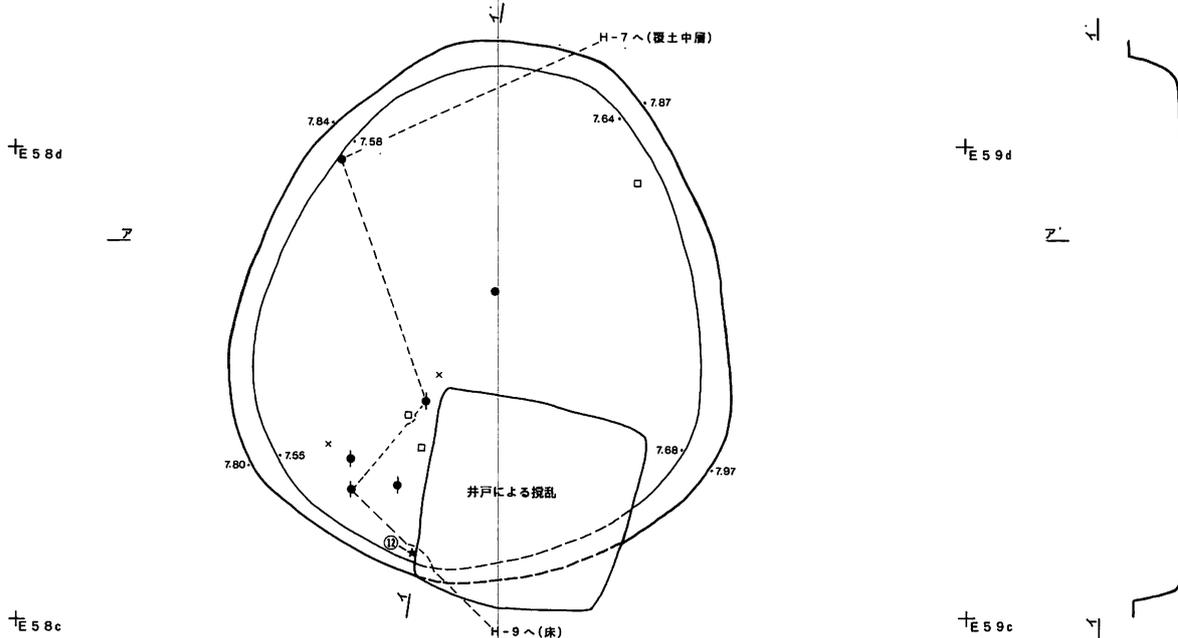
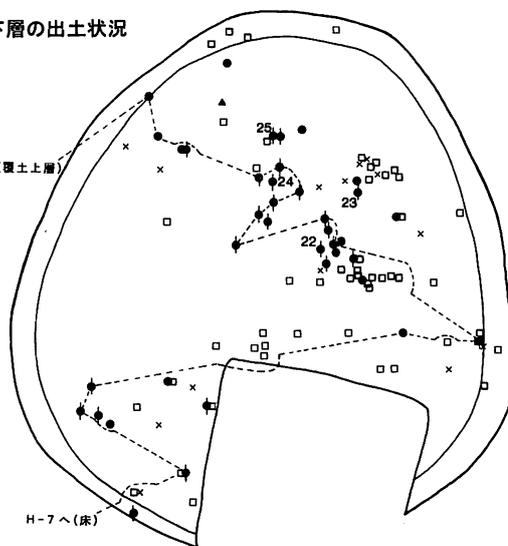
2 住居跡



上面の出土状況



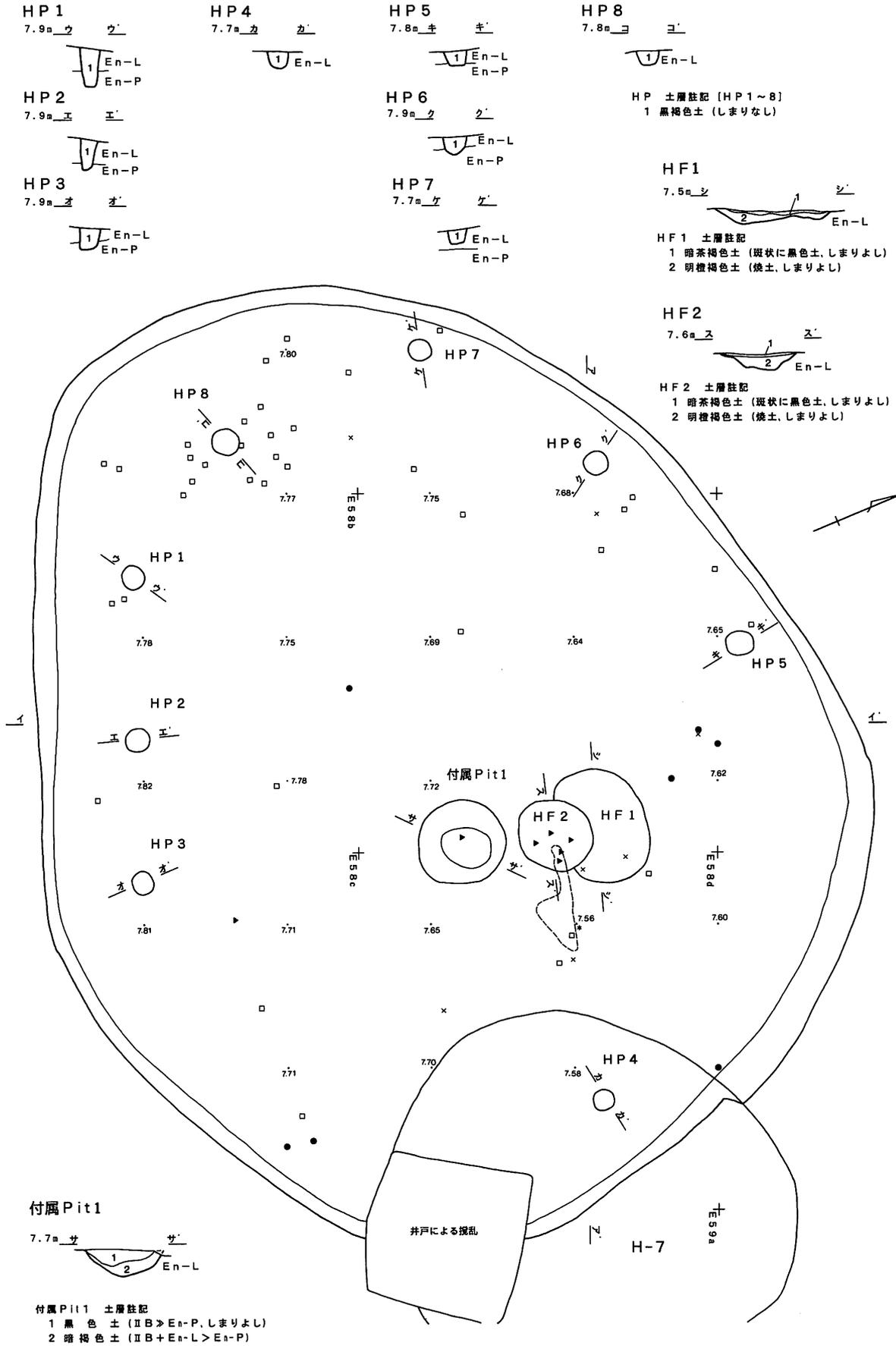
下層の出土状況



H-7 土層註記

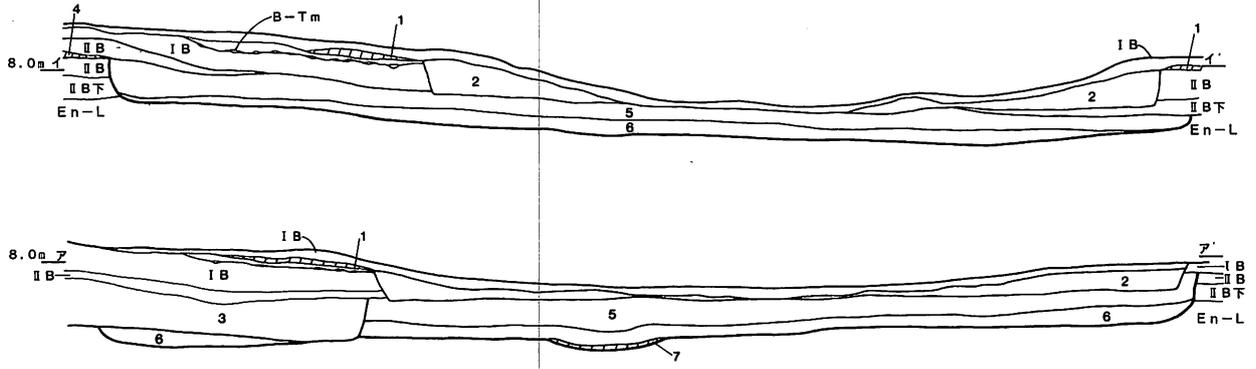
- | | |
|---------------------|-------------------------------------|
| 1 黒褐色土 (H-2掘り掛け土) | 4 黄褐色土 (H-9掘り掛け土) |
| 2 黒色土 | 5 暗黄褐色・黄褐色土 (H-9覆土) |
| 3 暗黄褐色・暗褐色土 (H-8覆土) | 6 黒褐色土 (H-7覆土, H-6覆土よりやや明るい, しまりよし) |

図VI-6 H-7



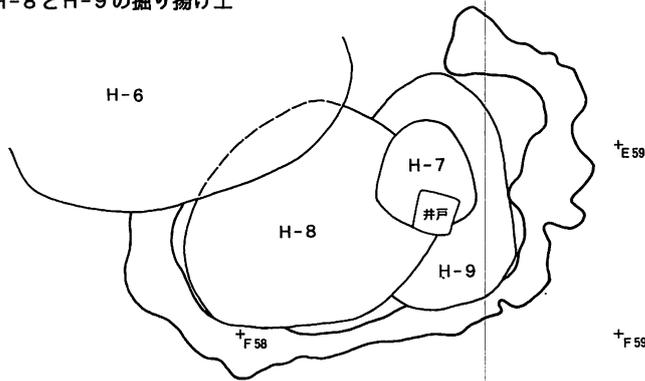
図VI-7 H-8(1)

2 住居跡

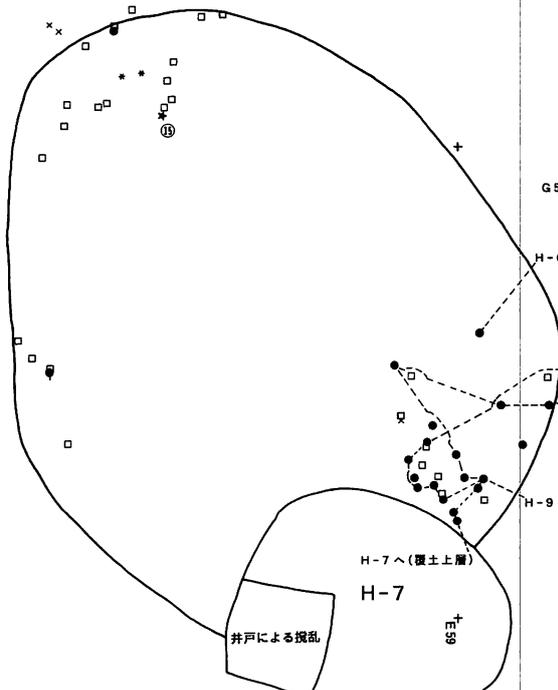


- H-8 土層註記
- | | |
|-------------|---|
| 1 H-2 掘り揚げ土 | 5 暗褐色土 (IB > En-L > En-P, 遺物を多く含む, 上面に堂林式土器, F62がある, しまり弱い) |
| 2 H-2 覆土 | 6 暗黄褐色土 (En-L > IB > En-P, 遺物をあまり含まない, 住居中央では厚くなる) |
| 3 H-7 覆土 | 7 赤褐色土 炉の焼土 |
| 4 H-8 掘り揚げ土 | |

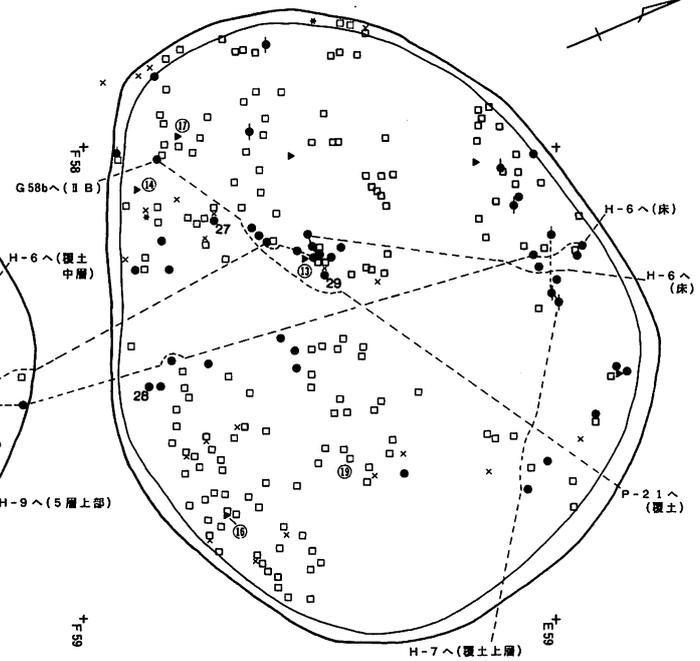
H-8とH-9の掘り揚げ土



覆土上層の遺物 (S=1/80)



覆土中層の遺物 (S=1/80)



図VI-8 H-8(2)

デ→横位沈線文→充填沈線文、堂林式。E 61 b から同一個体が2点出土している。27は突起（頂部に十文字沈線）→LR 縄文→横位沈線文→斜沈線文→沈線間に向かって刺突（刺突は小さい）、堂林式。口縁部はやや肥厚し端面は内傾する。28は注口土器、LR 縄文→斜沈線文→横位沈線文→磨り消し帯、手稲式の古いもの。29はLR 縄文→沈線文、手稲式。H-6 覆土中部から同一個体が出土している。30は浅鉢のミニチュア、ナデ→沈線文→横位沈線文→沈線に向かって刺突、堂林式。19は堂林式、H-6 覆土上・中部・床面とH-9 覆土5層上部、D 58 b に接合個体がある。20は堂林式、H-6 床面とH-7 覆土上部に接合個体がある。21は堂林式、H-6 覆土中部に接合個体がある。37は余市式、H-7 覆土上・中部・床面とH-9 床面と接合関係を持つ。

石器 12・13は覆土5層、14~18は覆土6層。12は有茎で折れている。背面に礫皮を残す。13は横長剥片を素材にしている。刃部の潰れが著しい。背面の稜に摩滅がある。14は刃部の潰れが著しい。被熱して光沢が失われている。15は球顆の発達著しい。稜・刃部の潰れが著しい。16は被熱して光沢が失われている。17は球顆の発達著しい横長剥片を素材にしている。先端が欠失している。18は偏平棒状転石（亜角礫）を素材とした石斧未製品、側縁・基部の剝離調整中に折れたものである。H-9の覆土5層中部に接合資料がある。12・16は珪質頁岩、13~15・17は黒曜石。

時期 H-6・H-7に切られていること。床面の遺物出土状況から、余市式期と考えられる。

（鈴木）

H-9（図VI-9・14・17、表VI-1・2・5、図版VI-6・9）

位置 D 58・59、E 58・59

長軸方向 N-6°-E

規模 6.20/5.82×-/ー×0.33m

調査 先後関係の確認は井戸の側面とH-2の調査で設けた東西南北トレンチを利用した。土層断面の観察よりH-7、H-8に切られていることが確認できた。H-7・8の調査後、トレンチによる立上りの確認と揚げ土の掘り上げによって上端平面形が確定できたので竪穴内調査を開始した。

覆土 覆土5はおもにH-7掘り揚げ土、覆土6は壁の崩落土である。

形態 平面形は一端がたいらな楕円形で、床面は平坦で、壁は高さ30cm前後で、外傾し直線的に立ち上がる。

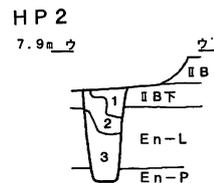
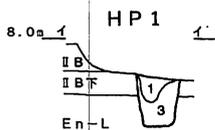
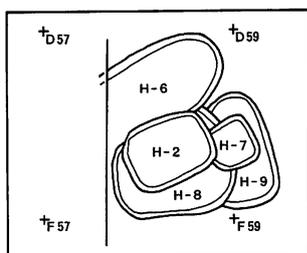
付属遺構 柱穴は4か所、炉はH-7によって破壊された可能性が高い。

遺物出土状況 覆土5層上部の遺物は北側に偏って分布し、後期中葉以降土器・礫・礫片が多い。覆土5層下部の遺物はほぼ全面に分布し、中期、後期初頭の土器・礫・礫片・フレイク・チップが多い。床面遺物は南側に多く分布し、礫・礫片・フレイク・チップが多く、後期初頭の土器が少量出土している。IV群a類はすべて余市式である。石器の接合例は、遺構掘り揚げ土と包含層との間で片岩製石斧が1例あった。

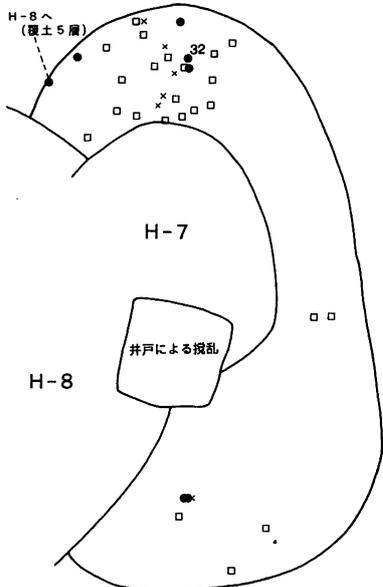
土器 20・31・32は5層上部、33・34は5層下部、36~37は床面出土。31はLR 縄文→横位沈線文→沈線間に向かって刺突、堂林式。口縁部はやや肥厚し端面は内傾する。32はLR 縄文→刺突、堂林式の新しいもの。口縁部は肥厚せず端面は平坦。33は結束第1種羽状縄文→貼付帯・丸軸絡条体、円筒上層a式？。34はRL 縄文、余市式。35はRL 縄文→弱いナデ、III群。36はRL・RL 羽状縄文、余市式。37はLR 縄文→横位貼付帯・LR 縄文→口縁部の縦位貼付帯・LR 縄文、所々で縦位貼付帯が横位貼付帯を連結している、余市式。H-7 覆土上・中部、床面、H-8 床面と接合関係を持つ。19は堂林式、H-6 覆土上・中層・床面とH-8 覆土5・6層とD 58 b に接合個体がある。

石器 19は床面、21・23・18は覆土5層中部、20・22は掘り揚げ土、24は覆土。19は先端が欠失しており、刃部の潰れが著しい。20は球顆の発達著しい。先端部両面が衝撃により剝離している。21

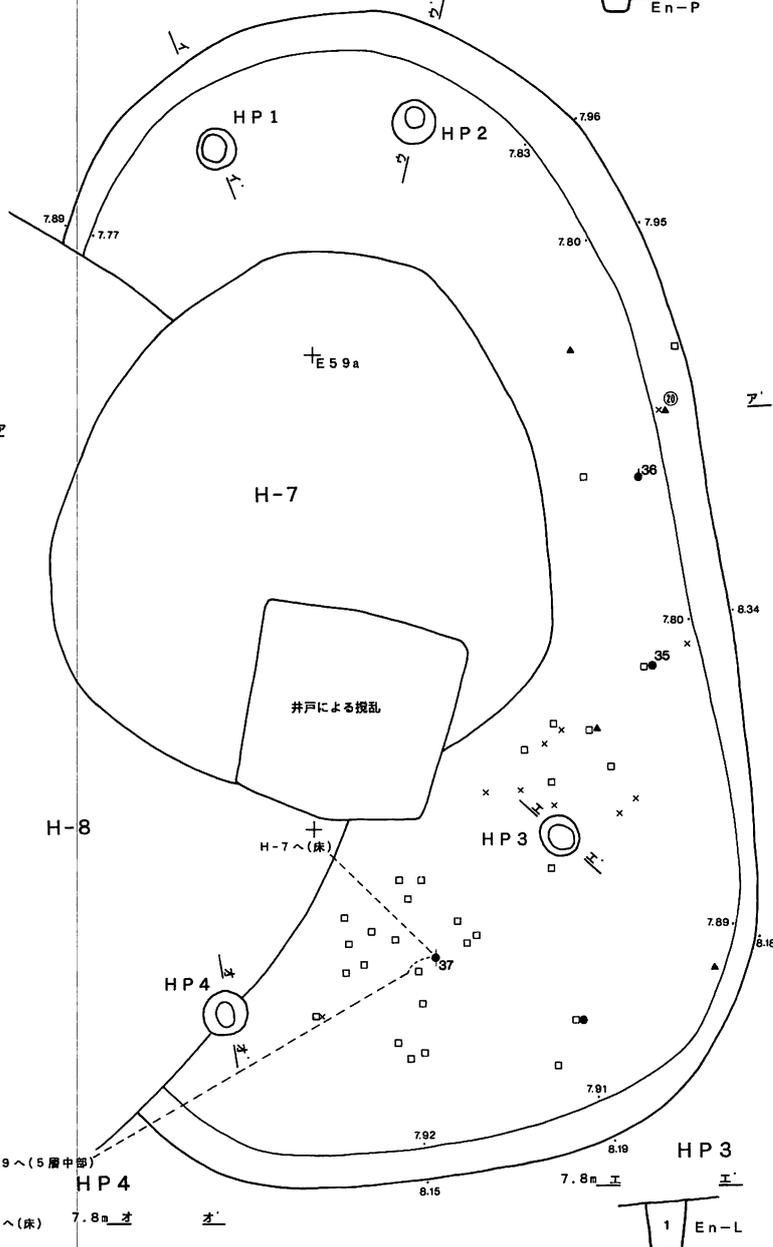
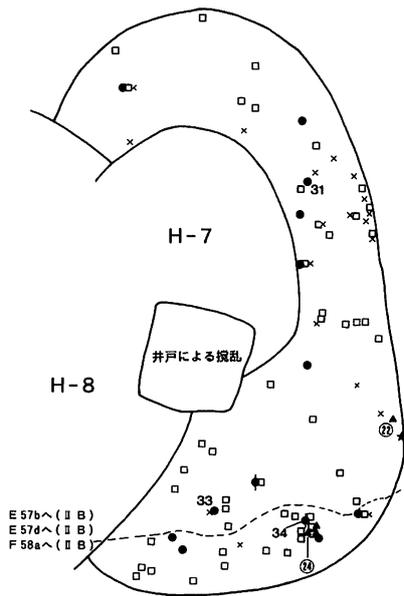
2 住居跡



覆土上層の遺物 (S=1/80)

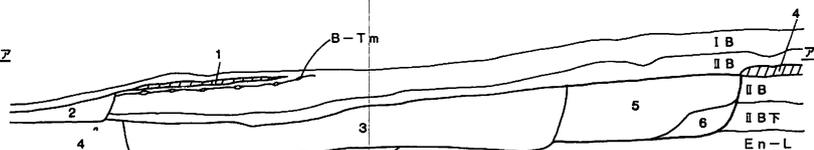


覆土中層の遺物 (S=1/80)



- HP 土層註記 (HP1~4)
- 1 明黄褐色土 (En-L > En-P, 明るい)
 - 2 明灰褐色土 (En-L > En-P, 暗い)
 - 3 明灰褐色土 (En-L > En-P, やや明るい)

8.1m



- H-9 土層註記
- 1 H-2 掘り揚げ土
 - 2 H-2 覆土
 - 3 H-7 覆土
 - 4 H-8 覆土
 - 5 暗黄褐色土 (4より明るい, φ1.0cm En-Pを含む, しまりよし)
 - 6 暗黄褐色土 (φ1.0cm En-Pを多量に含む)

図VI-9 H-9

は再生により先頭部が小さくなっている。**22**は背面に再生のための急角度の調整がはいる。背面側の稜に摩滅が著しく、刃部の潰れが著しい。**23**は縦長の礫端片を素材としており、背面に礫皮を残す。右辺先端が欠失している。**24**は球顆の発達が著しい。**18**は偏平棒状転石（亜角礫）を素材とした石斧未製品、側縁・基部の剝離調整中に折れたものである。**H-8**の覆土6層に接合資料がある。**19~24**は黒曜石製、**18**は緑色砂岩。

時期 **H-7**、**H-8**に切られていること。**P-21**が切っていること。覆土5層下部、床面の遺物出土状況から、縄文後期初頭と考えられる。(鈴木)

H-11 (図VI-10・15・17、表VI-1・2・5、図版VI-10・12)

位置 H 56、J 56

長軸方向 N-23°-E

規模 -/-×3.47/3.23×0.24m

調査 道路の側溝に切られて断面が確認できた。立上がりの確認をし、II B層を下げた上端平面形を確定し、竪穴内調査を開始した。

覆土 覆土1は住居廃絶時の流込み。覆土2は火災時の焼土。覆土3は火災以前に堆積している。

形態 平面形はほぼ円形、床面は平坦、壁は高さ20cm前後で浅く、内彎気味立ち上がる。

付属遺構 柱穴が2か所確認できた。炉1基、付属土壇1基が検出された。

遺物出土状況 覆土上部の遺物はほぼ全面に分布し、後期後葉の土器・礫・礫片・フレイク・チップが出土している。覆土下部の遺物は全面にまばらに出土し、後期後葉の土器がある。床面遺物はほとんどない。石器の接合例は、覆土上部と焼土層で砂岩製砥石(図VI-17-2)が1例。

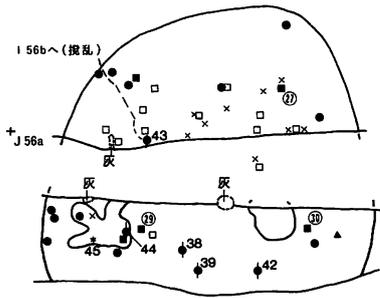
土器 **38・39・42~45**は覆土1層、**40・41**は覆土3層。**38**はLR縄文→磨り消し帯→横位沈線文、手稻式。**39**はLR縄文→磨り消し帯→横位沈線文、手稻式。**40**はLR縄文→弱いナデ→斜沈線文・充填沈線文→横位沈線文、堂林式。**41**はLR縄文→斜沈線文→横位沈線文、堂林式。**42**はLR縄文→ナデ→沈線文、堂林式。**43**はヨコナデ→LR縄文→底部ナデ、堂林式。口縁部はやや肥厚し端面は内傾する。**44**はミニチュア、LR縄文→ナデ→沈線文、堂林式。**45**はスタンプ型土製品。柄部に貫通孔を持つ。施文単位は3を基調とする。円形刺突によって正三角形を描く。

石器 **25・27**は覆土3層、**26・28**は覆土1層、**29**は覆土1層と2層の接合資料。**25**は背腹両面に主要剝離面をやや多めに残す。左側刃部は潰れが著しい。黒曜石。**26**は基部が被熱による破損で欠失し、刃縁は再研磨し面を持つ。泥岩。**27**は安山岩の棒状亜円礫、長軸側の一端を使用する。**28**は偏平な素材の両主面を使用する。砂岩。**29**は厚さの偏りから推定すると、大きな皿状砥石の中央部分が薄くなったので分割した破片がこの砥石であろう。両主面を使用している。割れ面に被熱による黒変が見られる。砂岩。

時期 覆土の遺物出土状況から、縄文後期後葉と考えられる。(鈴木)

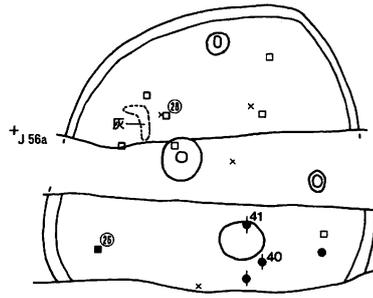
2 住居跡

覆土上層の遺物 (S=1/80)



+J 56c

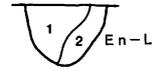
覆土下層の遺物 (S=1/80)



+J 56c

HP 1

8.1m_上 上



HP 1 土層註記

- 1 暗褐色土 (En-Lをブロックで含む)
- 2 黒褐色土 (しまりなし)

HP 2

8.1m_中 中



HP 2 土層註記

- 1 黒褐色土 (しまりなし)
- 2 暗黄褐色土 (En-Lを多量に含む)
- 3 暗灰褐色土 (しまり弱い)

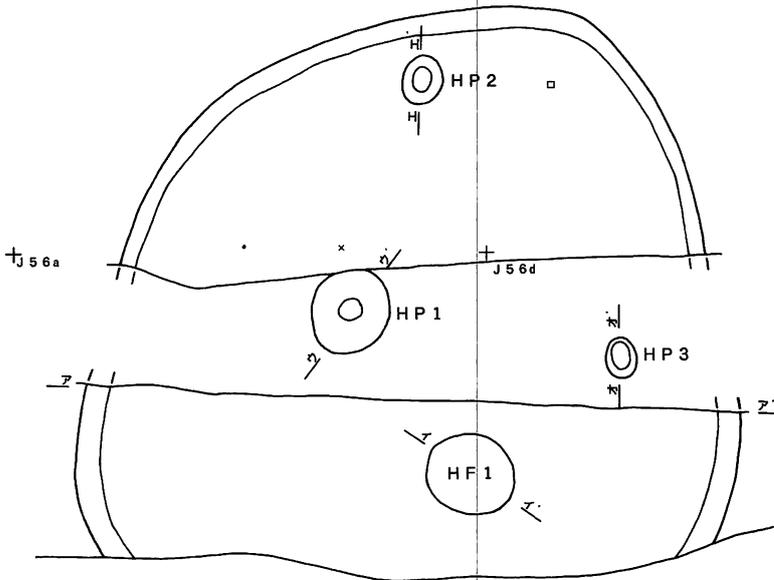
HP 3

8.1m_下 下

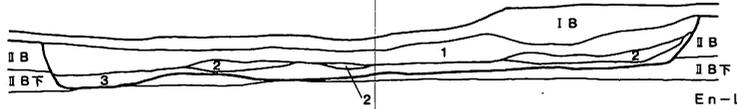


HP 3 土層註記

- 1 黒褐色土 (しまりなし)



8.5m_下



H-1 1 土層註記

- 1 黒色土 (遺物を多く含む、φ0.3~0.5cmのEn-Pを含む、しまりあり)
- 2 明橙褐色土 (火災による焼土、炭化材を大量に含む)
- 3 暗褐色土 (黒色土を主体としたロームが散点的にまじる、しまりあり)

HF 1

8.1m_下 下



HF 1 土層註記

- 1 暗褐色土 (覆土3層)
- 2 明赤褐色土 (焼土、ややしまりあり)

図VI-10 H-11

H-12 (図VI-11・15、表VI-1・2・5、図版VI-11・12)

位置 F 57

長軸方向 N-27°-W

規模 (1.32) / 1.08 × (1.28) / 1.01 × (0.36)

調査 II黒層除去後、En-L上面において黒色土の落ち込みを確認した。形態から2つの遺構が切り合っていることが予想された。ベルトを残して土層観察を行ったところ、P-16崩落後にH-12が構築されたことが確認された。

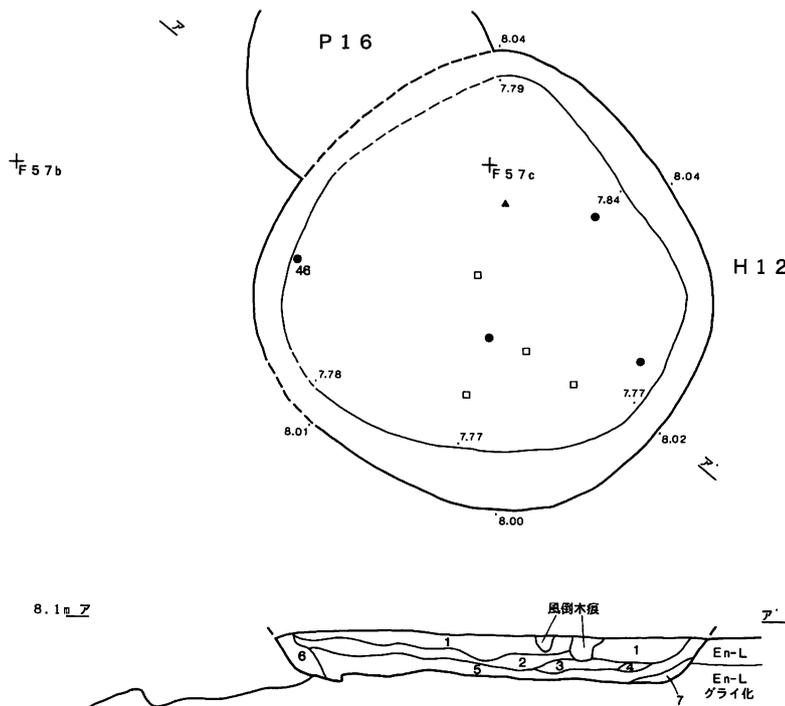
覆土 覆土6・7は竪穴埋没時に堆積したもので、その他は流れ込んだものと認識される。

形態 平面は隅丸台形である。床面はほぼ平面で壁への立ち上がりは明瞭である。北西側の床面においてP-16の壁への立ち上がりが確認される。

遺物出土状況 覆土からIV群c類の口縁部1点、時期不明土器細片1点、礫4点、石核1点、床直上から時期不明土器細片が1点出土している。

遺物 46はIV群c類堂林式土器である。平行な細沈線で口縁部を加飾する。口縁断面は切り出し小刀状である。器面について、縄文を施した後、撫で付けた様子が窺える。

時期 P-16崩落後に構築されていること、出土遺物から縄文時代後期後葉堂林式の時期と考えられる。

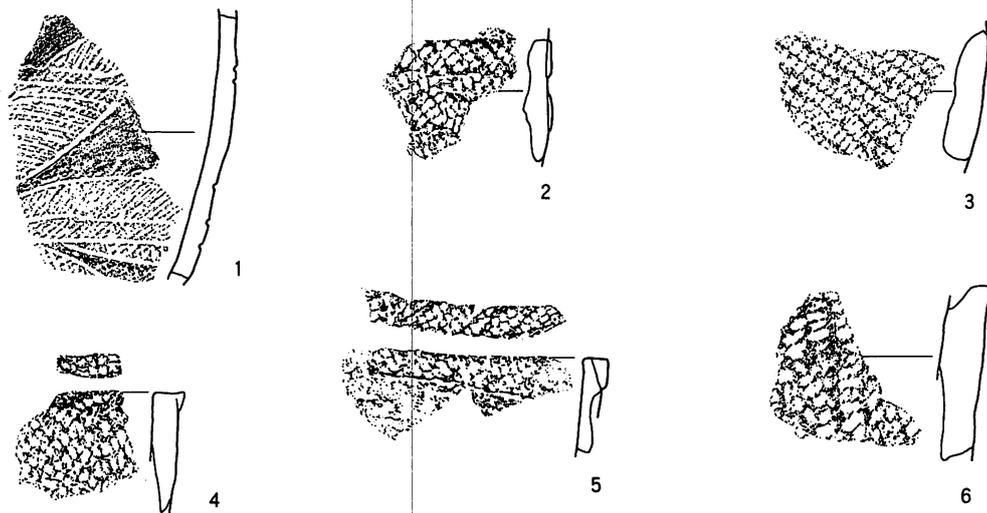


H-12 土層註記

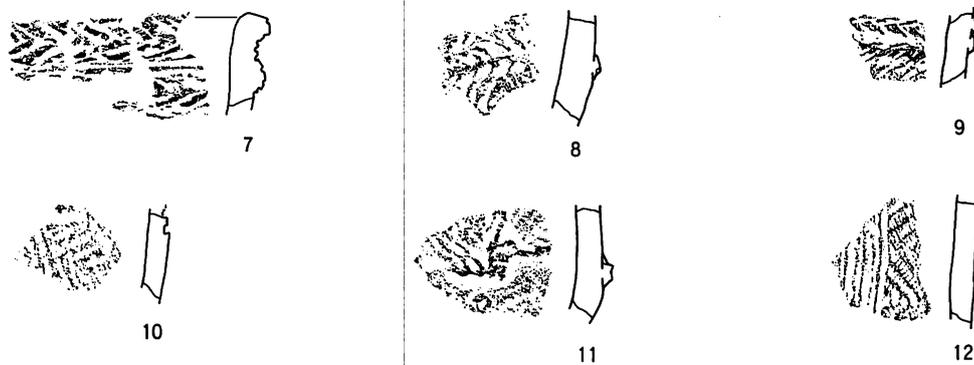
- 1 黒色土 (II B、φ0.5cm程度のEn-Pを極微量含む)
- 2 暗褐色土 (II B>En-L、II BにEn-Lを微量含む)
- 3 黄褐色土 (En-P>II B、グライ化したEn-LにII Bを微量含む、砂質)
- 4 暗黄褐色土 (En-P>II B、グライ化したEn-LにII Bを少量含む、草根の攪乱が入り込む)
- 5 黒褐色土 (II B>En-P、II Bにグライ化したEn-Lを微量含む、しまり弱い)
- 6 黒赤褐色土 (II B>En-P、II Bにグライ化したEn-Lを極微量含む、鉄分が酸化し赤色化したものが入り込む)
- 7 黒色土 (II B>En-L、II Bにグライ化したEn-Lを微量含む、しまりなし)

図VI-11 H-12

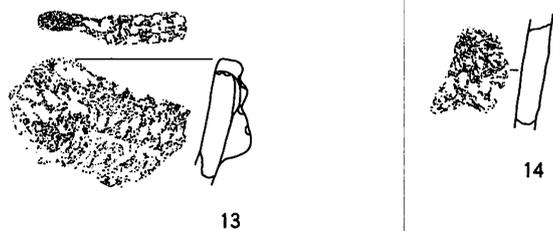
H-3



H-4



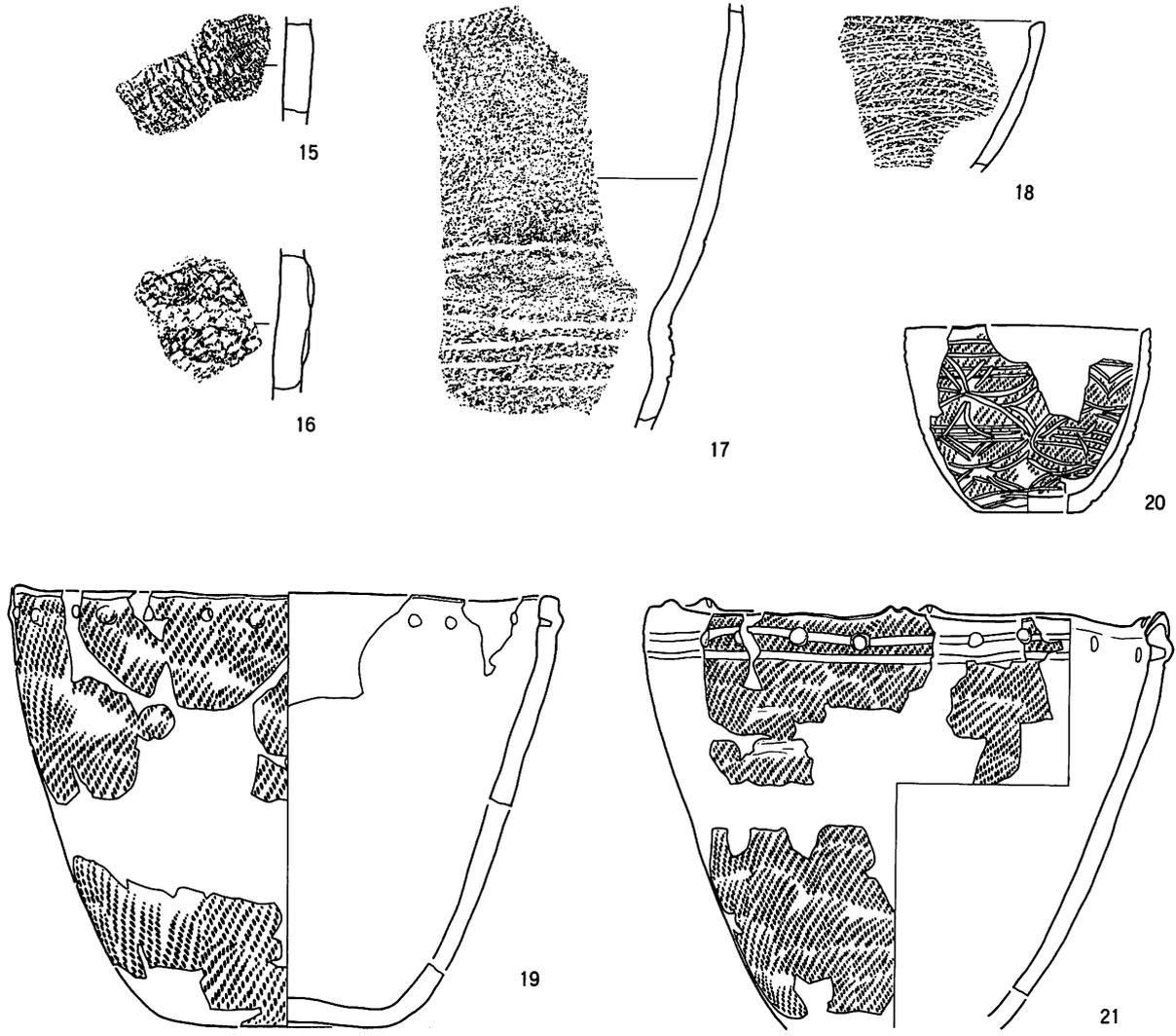
H-5



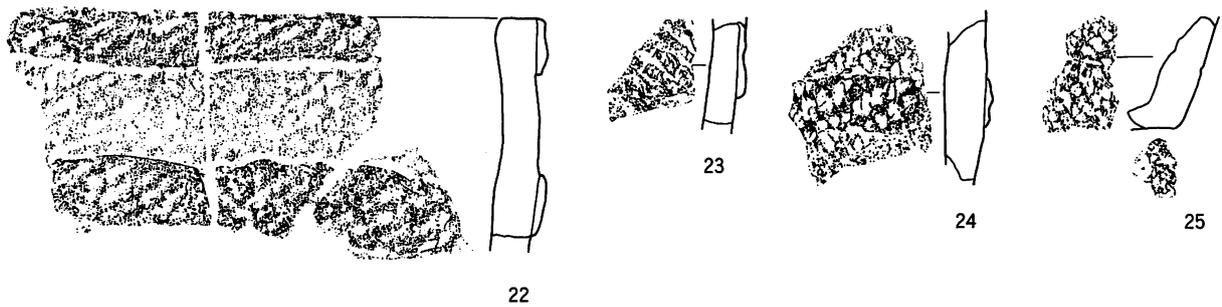
遺物(S=1/3)

図VI-12 住居跡の土器(1)

H-6



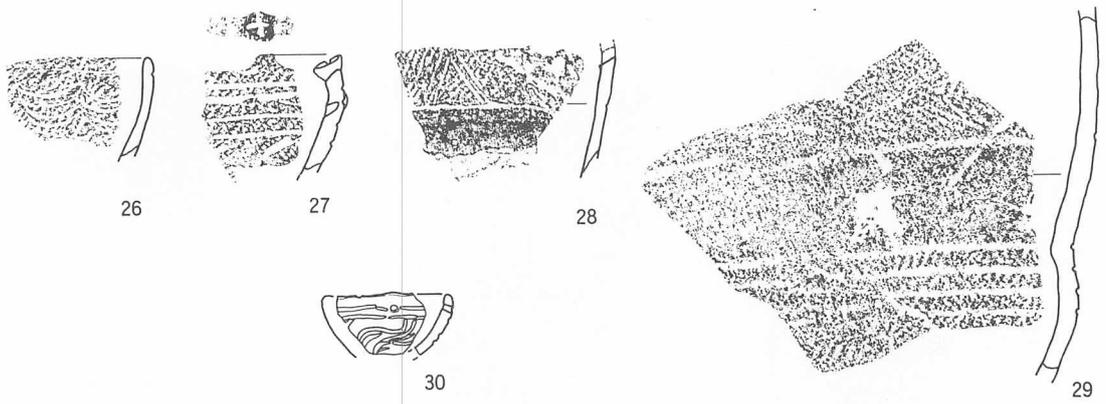
H-7



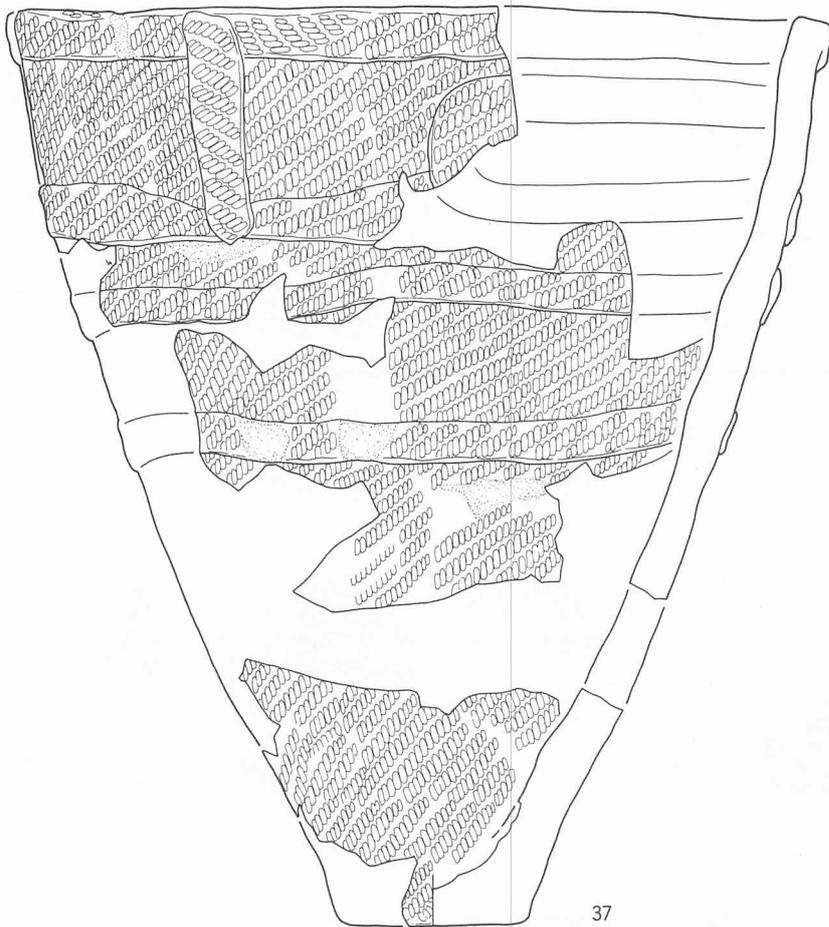
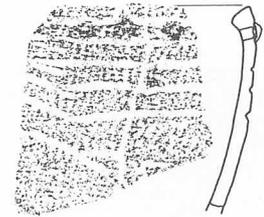
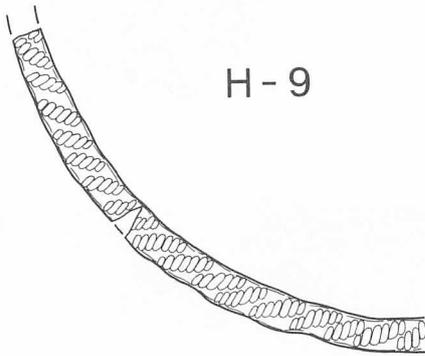
図VI-13 住居跡の土器(2)

遺物(S=1/3)

H-8



H-9



32



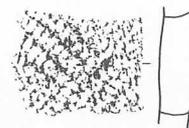
33



34



35

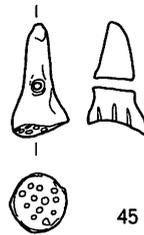
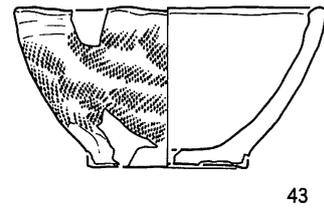
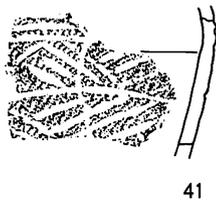
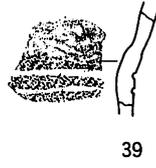
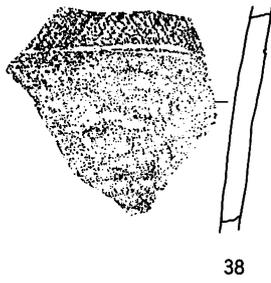


36

遺物(S=1/3)

図VI-14 住居跡の土器(3)

H-11



H-12

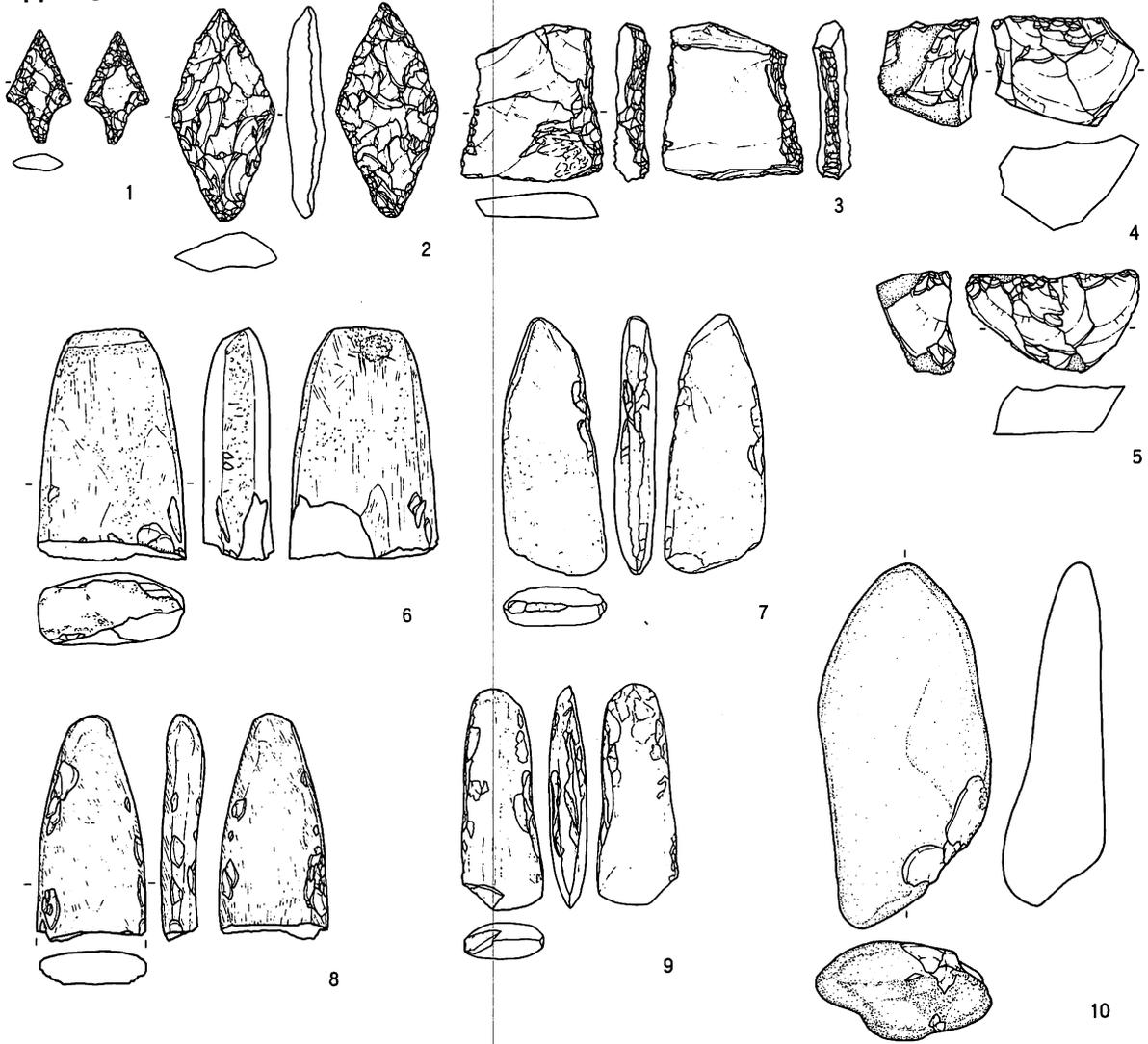


遺物(S=1/3)

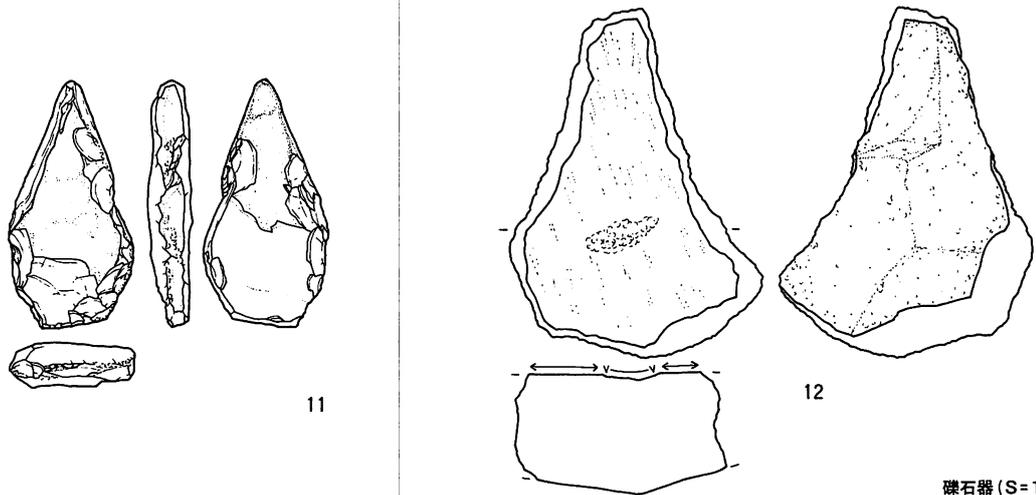
図VI-15 住居跡の土器(4)

2 住居跡

H-6



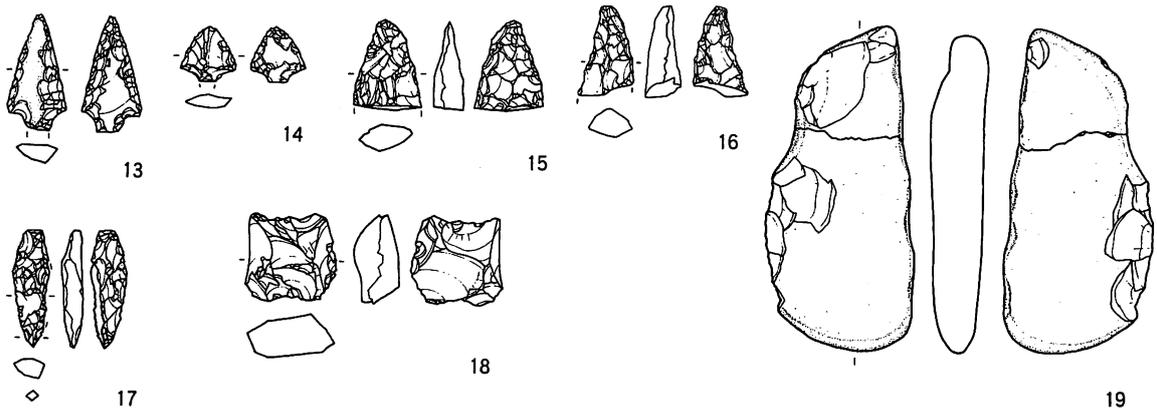
H-7



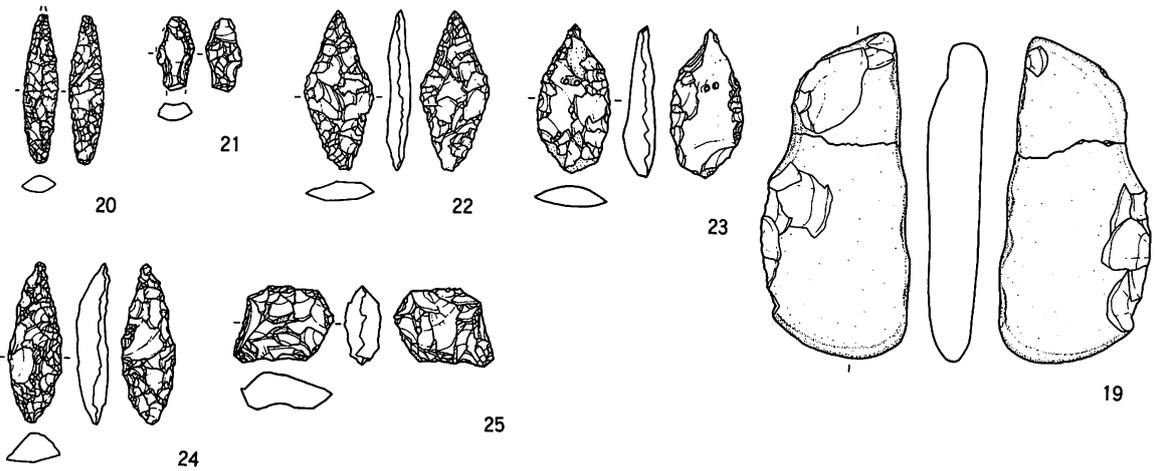
礫石器 (S=1/3)
剥片石器 (S=1/2)

図VI-16 住居跡の石器(1)

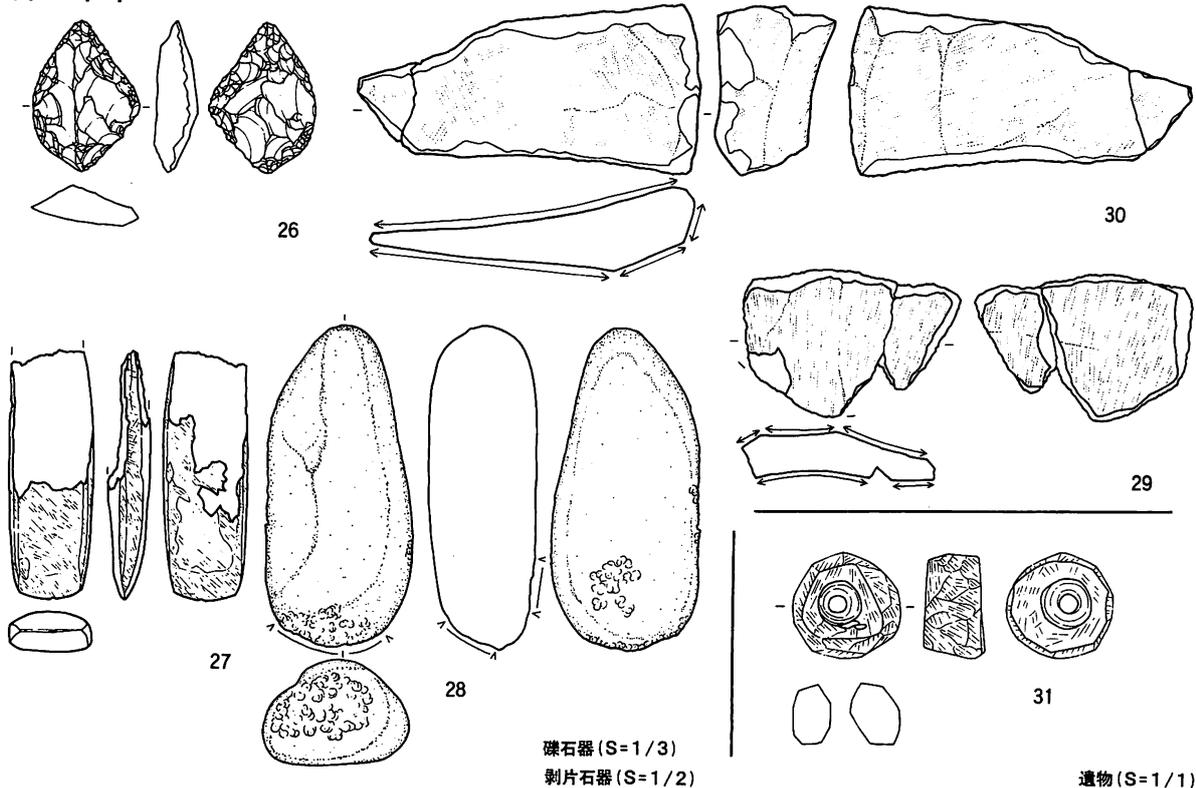
H-8



H-9



H-11



礫石器 (S=1/3)

剥片石器 (S=1/2)

遺物 (S=1/1)

図VI-17 住居跡の石器(2)

3 土壌

3 土壌

P-1 (図VI-18・33・35、表VI-1・6、図版VI-13・19)

位置 B 62 a

長軸方向 N-73°-W

規模 (0.92)/0.80×(0.75)/0.66×(0.09) m

調査 上面は耕作によって削平されていたので、平面形はEn-Lで確認した。長軸方向にセクションを設定して半割した。

覆土 覆土は1層で構成されている。しまりがなく、En-L・En-Pがブロックで混入していいないことから流入したものと考えられる。

形態 平面形は楕円形、壙底は平坦で、壁は内彎する。

遺物出土状況 遺物はすべて土器で1層からの出土である。萩ヶ岡1式24点、萩ヶ岡2式6点である。

遺物 35-1は結束第1種(LR・RL)羽状縄文→貼付帯・半截竹管押し引き文・長めの半截竹管刺突、萩ヶ岡2式の新しいもの。波状口縁の波頂部である。P-19そしてD 61 d・F 63 d・H 61 d・G 60 cから同一個体が出土している。およそ30m離れたの接合である。波頂部から垂下する隆帯が剥落した痕跡がある。内面は丹念に磨き調整を施す。焼成は良好であり、胎土はよく締まる。33-1は突起→結束第1種(LR・RL)羽状縄文→口縁部横位貼付帯・縦位貼付帯→口縁部横位貼付帯に縄文・親指の爪による連続刺突→縦位貼付帯に刺突→突起に沈線文、萩ヶ岡1式。結束第1種(LR・RL)羽状縄文を地文として施し、ある程度乾燥した後に粘土紐を貼り付ける。

時期 萩ヶ岡1式の大型破片、萩ヶ岡2式が出土していることから縄文時代中期前半と考える。

(鈴木)

P-4 (図VI-18、表VI-1・6)

位置 H 63 d

長軸方向 N-34°-E

規模 0.76/0.48×0.58/0.46×0.36 m

調査 I B 上面にTa-aのたまった凹みを検出した。I Bの遺構の可能性のあるものとして掘り下げたところ、土壌の周囲から続縄文土器が出土した。そこで凹みの様子から平面プランを推定して半割を行った。土層観察をした結果、Ta-aのたまった凹みは風倒木痕であることが判った。しかしその下にII Bの遺構があることがわかった。遺構はII B中位より掘り込まれている。そこで完掘を行った。形態と覆土の状況から墓の可能性はある。

覆土 覆土は埋め戻しを示しており、しまりがある。

形態 不正な円形を基調とした平面プランであり壙底部から外側へ開き気味に立ち上がる。

遺物出土状況 遺物の出土はなかった。

時期 時期不明であるが、掘り込み面のレベルから縄文時代後期の可能性がある。

P-6 (図VI-18、図版VI-13)

位置 E 63 b、E 63 c

長軸方向 N-79°-W

規模 0.68/0.4×0.66/0.38×0.27 m

調査 II B からEn-Lへの漸移層をII B下とする。包含層をII B下まで掘り下げたところ、円形の黒色土落ち込みを検出した。半割を行った結果、壁面と底面がしっかりしており遺構と判断した。掘り込み面は検出面より上である。

覆土 単層である。覆土はパミス混じりの埋め戻し土であり、よくしまる。

形態 土壌は平面プランについてはほぼ円形であり、形状としてはすり鉢形である。

遺物出土状況 遺物の出土はなかった。

時期 時期不明であるが、掘り込み面のレベルから縄文時代中期の可能性ある。(大泰司)

P-7 (図VI-18・3、表VI-1・6、図版VI-13・19)

位置 E 63 d **長軸方向** N-86°-W

規模 (0.55)/0.21×(0.49)/0.18×(0.19) m

調査 平面形はEn-Lで確認した。長軸方向にセクションを設定して半割した。

覆土 覆土はI B層で構成されている。En-L・En-Pがブロックで混入していないことから流入したものと考えられる。

形態 平面形は円形、壙底は平坦で、壁はやや内彎する。

遺物出土状況 単層の覆土中からⅢ群a類土器が1点、礫が1点出土した。

遺物 35-2は結束第1種羽状縄文、Ⅲ群a類。全体に摩耗している。

時期 Ⅲ群破片が出土していることから縄文時代中期である。(鈴木)

P-10 (図VI-18・35、表VI-1・6、図版VI-13・19)

位置 H 60 d **長軸方向** N-67°-W

規模 1.47/1.16×1.13/0.89×0.28m

調査 II B上面まで掘り下げたところ、黒色土の入り込みを確認した。遺構の可能性があると判断し、遺構東側を半割し、土層を観察した。構築面は検出面とほぼ同じである。完掘し、形状を観察したところ、覆土の状況から土層を掘ったまま、放置された穴の可能性ある。

覆土 土層底部直上に黒色土の堆積(覆土13)を確認した。土層埋没時の流入である。その上には、さらに土砂の流入による堆積を示す層が続く。

形態 平面プランは不整な楕円形である。土層床面は比較的平坦である。壁面もしっかりしている。

遺物出土状況 覆土中からⅢ群土器が7点、Ⅲ群a類土器が1点、Ⅲ群b3類土器が1点出土した。土層底部の土層、覆土13層からの出土である。

土器 35-3はⅢ群b3類、中期後葉の土器である。口唇部および器内面は磨き調整が著しく、口唇部は細かい磨き調整によって平坦に面をとる。器壁は薄く、よく締まる。粒径1mmの長石、石英が混和材として目立つ。登別市千歳市6遺跡などから出土している短刻沈線文土器に器壁が似る。

時期 土層底部の土層、覆土13層からのⅢ群b3類土器より、縄文時代中期後葉の遺物である。

P-13 (図VI-18・35、表VI-1・6、図版VI-14・19)

位置 C 61 b **長軸方向** N-30°-E

規模 0.64/0.28×0.54/0.2×0.18m

調査 包含層をEn-Lまで掘り下げたところ、円形の黒色土入り込みを検出した。遺構の可能性があると判断し、半割を行った。人為的な穴と判断、完掘した。掘り込み面は検出面より上である。

覆土 覆土はパミス混じりの埋め戻し土であり、よくしまる。

形態 土層は平面プランについてはほぼ円形であり、形状はすり鉢形である。

遺物出土状況 最上層である覆土1層の上部からⅢ群a類土器が1点出土し、それを図示した。

土器 35-4は結束第1種羽状縄文を持つ胴部破片である。器外面は摩耗が著しい。内面にはよく煤が付着し、調整として縦方向の研磨が顕著である。

時期 検出レベルと、覆土中からのⅢ群a類土器より、縄文時代中期前半と考える。(大泰司)

P-15 (図VI-19・35、表VI-1・6、図版VI-14・19)

位置 C 57 c、C 58 b、D 57 d、D 58 a **長軸方向** N-82°-W

3 土壌

規模 (1.59) / 0.59 × (1.46) / 0.59 × (0.31) m

調査 平面形は En-L で確認した。長軸方向にセクションを設定して半割した。

覆土 2層は H-6 の掘り揚げ土で構成されている。3層は En-L・En-P がブロックで混入していないことから流入したものと考えられる。

形態 平面形は円形、壙底は皿状で、壁は内彎する。

遺物出土状況 遺物はほとんど土器、壙底直上からⅢ群 a 類土器の破片が 1 点出土している以外は 2 層からの出土である。

遺物 35-5 は結束第 1 種 (RL) 羽状縄文を地文として持つ。横位貼付帯には縦位丸軸絡条体による刺突を連続して施す。Ⅲ群 a 類土器であり、縦位丸軸絡条体を刺突原体として用いる事から円筒上層 a 式併行の可能性を示す。

時期 壙底からのⅢ群 a 類土器から、中期前半の土壌である。 (鈴木)

P-16 (図 VI-19・33、表 VI-1・6、図版 VI-14・19)

位置 F 57 ab

長軸方向 N-16°-W

規模 (1.32) / 1.08 × (1.28) / 1.01 × (0.36)

調査 II B 層除去後、En-L 上面において黒色土の落ち込みとし確認された。低湿部に向かう斜面の肩に位置するため西側の上場は確認できなかった。土壌埋没後 H-12 が構築されたため南東側の壁面は攪乱されていた。

覆土 覆土 6・7 は土壌埋没時に堆積したもので、他は流れ込んだものと認識される。

形態 上場は 3/4 が削除されているが、床面から円形と推測される。床面はやや凸凹しており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

遺物出土状況 覆土からⅣ群 a 類土器が 93 点、礫が 5 点出土した。土器についてはすべて同一個体のⅣ群 a 類土器、余市式土器である。

遺物 図 VI-33 において、胴部上半(3)と底部(4)に分けて図示した。LR 縄と RL 縄を交互に施文する。口縁端部は平たく面を取り、LR 縄文を施す。器内面はよく磨く。器壁には粒径 0.2~0.5cm の長石小砂粒をよく含む。3、4 は同一個体である。実測図について 4 の地文原体が単節縄文のように表現されているが、3 と同じ地文を持つ個体が上から撫で付けられたものである。

時期 出土遺物から縄文時代後期前葉余市式の時期と考えられる。

(吉田)

P-18 (図 VI-19・33・35、表 VI-1・6、図版 VI-15・20)

位置 H 57 a、H 57 b

長軸方向 N-19°-E

規模 2.34/2.0 × 1.78/1.4 × 0.32m

調査 一般道路南 23 号を横断道工事による振替えの前、①地区の調査は道路北側までの展開であった。道路の北の際、H 57 a グリットの包含層を II B 中位まで掘り下げた時、黒色土の入り込みを観察した。黒色土入り込みは道路の下側に入り込んでいた。そこで道路際で土層を観察することとして、黒色土部分を掘り下げた。壙底部分からは残存率の高い土器底部を検出した。土壌であると判断した。

道路を切り替え後、道路下の調査を行った。遺構を完掘したところ、壙底部に遺物が集中していた。覆土の状況から一括廃棄の穴、あるいは墓の可能性はある。

覆土 土層は土壌の両側について (覆土 3・4・5・7) は崩落しているものの、埋め戻しの土層 (覆土 1) を示していた。壙底部にうすく暗褐色土層が入り込む (覆土 2)。

形態 不正な楕円形の平面プランを確認した。壙底部はほぼ平坦である。

遺物出土状況 覆土 1 層から I 群土器 1 点、Ⅲ群土器 2 点、Ⅲ群 a 類土器 1 点、Ⅳ群土器 1 点、Ⅳ

群b類土器4点、V群土器1点、不明の土器片1点が出土している。たたき石1点、礫1点、覆土2層から礫が4点出土している。覆土3層からⅢ群土器1点、Ⅳ群土器1点床面直上からⅣ群b類土器が1点出土している。そのうち復元個体1点(図VI-33-2)、土器片4点を図示した(図VI-35-6~8)。いずれも覆土1層からの出土である。

土器 33-2はⅣ群b類土器、手稻式である。深鉢の胴下半部である。器の内外面には丹念に横方向の磨きを施す。器壁には粒径0.2~0.5cmの黒曜石細片、長石小粒をよく含む。底部には削って調整した痕跡がある。被熱が甚だしい。35-8と同一個体である可能性が高い。

35-6はⅠ群b4類土器である。東釧路Ⅳ式であり横位の絡条体圧痕により加飾する。器内面口縁端部にも加飾する。粘土で凸形をとった結果、径1mmの紐を軸として同様な紐をコイル状に巻き付けたものが原体である。今回の報告において、Ⅰ群土器はこの1点のみである。7はⅢ群a類台形波頂部の破片である。萩ヶ岡2式土器である。立体的な波頂部であり、横断面を三角形に形造る。半截竹管により器面を飾る。8は特に覆土1層の上部からの出土である。Ⅳ群b類、手稻式土器である。平行沈線を基調とした文様部分である。器壁は薄くよく締まる。器内面は丁寧に磨き調整を施す。

時期 覆土中の遺物について、土壌底部の手稻式土器から、縄文時代後期中葉の遺構である。

(大泰司)

P-19 (図VI-20・35、表VI-1・6、図版VI-15・20)

位置 G 60 a、G 60 d **長軸方向** N-26°-E

規模 1.85/1.65×1.34/1.14×0.1m

調査 包含層をEn-Lまで掘り下げたところ楕円形の黒色土入り込みを検出した。遺構の可能性があると判断し、南半分を掘り下げた。遺構構築面は検出面よりやや上である。完掘をしたところ壙底部直上によく遺物が分布することがわかった。埋め戻した土壌である。

覆土 覆土は埋め戻し土である。単層であり、掘り上げ土を含む黒色土である。

形態 遺構の平面プランは楕円形である。土壌底部は比較的平坦であるが、床面をつくりだしてはいない。壁面は比較的しっかりしている。

遺物出土状況 遺物はほとんどが壙底部直上からの出土である。Ⅲ群土器が47点、Ⅲ群a類土器が5点、分類不明の土器が4点出土している。覆土1より礫が1点出土している。そのうち4点を図示した(35-9~12)。4点いずれも覆土1層からの出土であり、Ⅲ群a類土器である。

土器 9は口縁部の肥厚帯を含めて、逆‘く’の字に短沈線を施す。隆帯を貼付した後、隆帯間に沈線を充填し、その後短沈線を施す。10はP-1出土遺物(図VI-35-1)と同一個体である。11は口唇部分まで縄文を施した後、薄い隆帯を貼り付けて加飾する。へらの先端によって連続して斜位の刺突を施す。12はG 60 d、G 60 cグリッド出土遺物と接合する。焼成は良好であり、器壁はよく締まる。口縁部に2条の隆帯を貼り付ける点、隆帯上を半截竹管の押し引きを施す点、胎土から10と同一時期の個体という可能性がある。10・12の同一個体はF-33、P-1、P-19、H-4からそれぞれ出土している。萩ヶ岡2式土器の新しい個体である。

時期 覆土中の遺物はⅢ群a類土器が主体である。縄文時代中期前半の土壌であると考えられる。さらに、F-33、P-1、P-19、H-4がほぼ同一時期であるならば中期前半の終末に位置づけできる。

(大泰司)

P-20 (図VI-20、表VI-6、図版VI-15)

位置 E 59 d **長軸方向** N-75°-W

規模 (1.50)/0.80×(1.26)/0.63×(0.09)m

調査 平面形は En-L で確認した。長軸方向にセクションを設定して半割した。

覆土 覆土は1層で構成されている。1層は En-L・En-P がブロックで混入していないことから流入したものと考えられる。

形態 平面形は円形、壙底は皿状で、壁は内彎すると思われる。

遺物出土状況 遺物は礫・礫片・フレイク・チップで1層からの出土である。

時期 検出状況を考慮すると縄文時代後期後葉の土壌である。P-22に近い時期と思われる。

(鈴木)

P-21 (図VI-20・33・35・37、表VI-1・2・6、図版VI-16・21)

位置 E 59 a

長軸方向 平面プランの形状に方向性なし

規模 (2.19) / 1.49 × (1.19) / 0.45 × (0.34) m

調査 平面形は En-L 層で確認した。南北方向にセクションを設定して半割した。P-21との先後関係は確認面が下がり過ぎていたのでつかめなかった。

覆土 覆土は3つの層で構成されている。1層は En-L・En-P がブロックで混入していないことから流入したものと考えられる。

形態 平面形は円形、壙底は皿状で、壁は内彎すると思われる。

遺物出土状況 覆土からは礫・礫片・フレイク・チップが出土し、壙底からは礫・礫片・フレイク・チップが出土している。IV群 a 類はすべて余市式である。

遺物 33-5 は突起→LR 縄文→横位沈線文→円形沈線文→横位沈線文間に鋸歯状沈線文→沈線に向かって刺突、突起に円形刺突→ナデ、堂林式。口縁部は肥厚し端面は内傾する。内面に炭化物。H-8 覆土6層に同一個体がある。35-13はLR 縄文→刺突、堂林式の新しいもの。口縁部は肥厚せず端面は平坦。35-14は底部破片である。器種は注口土器である。横走る沈線が器面を飾る。37-6はスタンプ型土製品。柄部は貫通孔で欠失、スタンプ面について、縁辺と中央の凹み部に長方形型の刺突を施す。縁辺の刺突はスタンプ面の中心から放射状に施す。凹み部にはアトランダムに刺突を施す。37-1は横長剝片を素材とし、腹面に急角度の調整がはいる。刃部の潰れ、稜の摩滅が著しい。

時期 H-6に切られ、H-9を切っていることから、覆土の遺物出土状況より縄文時代後期後葉と考えられる。

(鈴木)

P-22 (図VI-21、表VI-1・2・6、図版VI-16・21)

位置 D 58 d、59 a

長軸方向 N-75°-W

規模 -/- × (1.69) / 1.43 × (0.12) m

調査 平面形は漸移層で確認した。南北方向にセクションを設定して半割した。P-22との先後関係は確認面が下がり過ぎていたのでつかめなかった。

覆土 覆土は1層で構成されている。1~3層は En-L・En-P がブロックで混入していないことから流入したものと考えられる。

形態 平面形は長方形に近い形、壙底は皿状で、壁は内彎すると思われる。土壌の周囲には柱穴が8か所あり、土壌内の北側の壁には半円形の小柱穴が4か所あった。これらの柱穴は土壌の付属施設と考えられ、上屋の柱の可能性はある。

遺物出土状況 覆土1~2層からは礫・礫片・フレイク・チップが出土し、壙底からは礫・礫片・フレイク・チップが少量出土している。IV群 a 類はすべて余市式である。

遺物 35-15、16はIV群 a 類余市式である。16はLR 縄文→別条で末端を閉じたRL 縄文が施さ

れる。37-2は石鏃である。両側縁の潰れが著しい。再生の可能性を示唆する。

時期 H-9に切られていること、覆土の遺物出土状況より縄文時代後期後葉と考えられる。(鈴木)
P-23 (図VI-21・34・35、表VI-1・2・6、図版VI-16・22・23)

位置 J55d、I55c **長軸方向** N-29°-E

規模 (1.36) / (1.22) × 1.58/1.38 × 0.52m

調査 メインセクションを観察するために、グリッドJラインから南へ50cmを残して包含層を掘り下げていたところ黒色土の入り込みを確認した。黒色土を掘り下げて土層を確認した。するとII B中位から掘り込まれた土壌である事がわかった。覆土13、14は明らかな埋め戻し土であった。完掘を開始したところ、遺構覆土上面に落ち込み(覆土1)があり、落ち込み部分に縄文時代後期後葉の土器を多く含む遺物の集中があった。(図VI-21：A層を参照)さらに掘り下げたところ土壌中央部の、壙底部より10cm高いレベルにおいて縄文時代後期中葉、手稻式土器のまとまった廃棄を検出した。土器は同一個体である。残存率が三分の一ほどの個体が出土した(34-6)。

完掘の結果、遺構壁面と底部はしっかりと形造られていた。縄文時代後期中葉に、人体の埋葬か、あるいは大量の有機物を廃棄した後、有機物が腐蝕、凹みが生じ、そこに縄文時代後期後葉の人間が土器を含んだ廃棄物を投棄したという想定を行った。そこで土壌底部直上、覆土14を土壌サンプルとして取り上げ、脂肪酸分析を行うものとした。分析を依頼中である。

覆土 覆土13、14が遺構構築時の埋め戻し土である。いずれも腐植土である。その上部には自然にの流入が見られる。覆土1からまとまった遺物の出土があった。

形態 攪乱で一部消失しているが、残存部から楕円形の土壌と判断できる。壙底部は平坦である。

付属遺構 覆土1上面からHF1を検出した。廃棄遺物と同時期の層位である。縄文時代後期後葉堂林式期の廃棄に伴う焼土の可能性はある。

遺物出土状況 流入である層位、覆土3、5、9層からIV群c類土器が主体となって出土している。IV群c類土器を廃棄した層位である覆土1層からはスクレイパーが2点、フレイクが3点出土している。床面直上からIV群b類、手稻式土器が出土している。

土器 そのうち8点を図示した(34-6・8、35-17~22)。

34-6はIV群b類土器、手稻式である。壙底部からの一括出土である。5単位の波頂部を持つ深鉢の口縁である。口縁部には無文帯がめぐり、器面には平行沈線を基調とした文様を施文する。口縁端部は丹念に成形する。器内面は丁寧に磨く。

34-8・35-19~23は土壌上部(覆土1層およびその直上)の一括した廃棄からの出土である。土層は1層の直上、II Bからの出土である。8はIV群c類土器、堂林式である。複数の波頂部を持つ小型の深鉢である。器表面は縄文施文後、丁寧に撫で付ける。口縁断面は端部について丸みを帯びて肥厚する。19はIV群a類である。入江式と呼称される一群の土器にあたる。器面には沈線による加飾をする。水平方向に長い、長楕円形、入り組み文様を配する。区画のなかは縄文が施されている。雑な磨消縄文である。内面については横方向に丁寧な撫で調整を施す。器壁は薄く、よく締まる。20はよく締まった器壁を持つ。細沈線による鋸歯状文様を持つ。21は内面はよく磨く。口縁端部は粘土紐の貼り付けを丁寧に撫で付けて肥厚帯を成型する。口縁部は内側に肥厚する。波頂部は縦位の短沈線を施す。22は磨り消し縄文による文様を器面に持つ。沈線によって加飾する。23は注口土器の注口部分である。節の細かいLR縄を全面に施す。17はIV群c類の口縁部破片である。口縁部内側には屈曲するような肥厚帯がめぐり、微妙に内彎する。土壌の埋め戻し土である覆土5からの出土である。18はIII群b3類土器である。輪積みによる成型痕がよく残る。器面調整はかるく撫で付けた程度で

3 土壌

ある。流入による覆土3層からの出土である。

時期 壙底部から一括出土した手稻式土器から、縄文時代後期中葉の土壌である。 (大泰司)

P-24 (図VI-20、表VI-6、図版VI-17)

位置 J58 d

長軸方向 N-25°-E

規模 (0.54) / (0.36) × 0.82/0.4 × 0.28 m

調査 水道管による攪乱の壁面に遺構掘り込みを確認した。その時点で攪乱の壁面を清掃、記録した後、完掘した。土壌の半分は攪乱で消滅していた。II B 上面から掘り込まれた土壌であり、腐植土によって埋められた土である。

覆土 覆土は黒色土部分(3層)についてよくしまる。

形態 攪乱により半分消滅している。残部から、楕円形の土壌を推定できる。

遺物出土状況 覆土中よりIII群a類土器が2点、IV群b類土器が1点出土している。図化しなかったが軽石が1点出土している。

時期 遺物は流入による物である。検出状況をみた結果、層位的には縄文時代後期以降の遺構である可能性が高いといえる。 (大泰司)

P-25 (図VI-22・35、表VI-1・6、図版VI-17・23)

位置 I59 d

長軸方向 N-42°-W

規模 (1.50) / 1.36 × (1.44) / 0.72 × (0.28) m

調査 水道管による攪乱によって断面形、平面形を確認した。攪乱を東西方向のセクションに利用した。

覆土 覆土は3つの層で構成されている。1~3層はEn-L・En-Pがブロックで混入していないことから流入したものと考えられる。

形態 平面形は円形、壙底は平坦で、壁は外傾し直線的に立ち上がる。

遺物出土状況 覆土1層から壙底まで遺物の分布は土壌の東側によっている。覆土2層からは中期前葉の土器が出土し、覆土3層からも中期前葉の土器が多量に出土している。壙底からは中期の土器が出土している。中期前葉の土器は、サイベ沢Ⅶ式3点、萩ヶ岡1式13点、萩ヶ岡2式2点出土している。丸軸絡条体で連続刺突がほどこされていることから、円筒上層a式に併行する可能性がある個体が6点出土している。

遺物 いずれもIII群a類土器であり、壙底の土層、覆土3層からの出土である。**24**は貼付帯・丸軸絡条体圧痕文→沈線、は表面が剥落した破片の表面部分である。肥厚部分には縄を軸とした絡条体を‘く’の字に刺突する。刺突の原体が丸軸絡条体であることから、円筒上層a式併行の可能性ある。**25**は底部破片である。結束第1種羽状縄文→ナデ、III群a類土器。底部が張り出す。

時期 覆土、壙底の遺物出土状況より中期前葉と考えられる。

(鈴木)

P-32 (図VI-22・34・36、表VI-1・7、図版VI-17・23・24)

位置 I64 b、J64 a

長軸方向 N-57°-E

規模 2.72/2.17 × 1.51/0.84 × 0.64 m

調査 上下水道管による攪乱の底面に、近接する二箇所黒色土の落ち込みを確認した。位置と形状から一つの遺構と考え、攪乱に沿って中央部にベルトを残し、両側トレンチ調査を開始した。小片の遺物が多いため覆土層ごとに取り上げながら掘り進め、底と壁を確認してから全体を掘り広げた。

覆土 覆土4以外はしまりのない土で、自然埋没を示す土層となっている。

形態 平面形は、側偏する長卵形を呈する。底部にほとんど平坦面はなく、西南側が段差を持って

深くなる。

遺物出土状況 中期の土器や小礫片が全層からほぼ満遍なく出土した。覆土上中層からは、後期の土器や石鏃、フレイク・チップが、ごく少量出土している。

土器 図34-7・36-26~30・33・34はⅢ群土器、31・32はⅣ群 a類の破片である。

7はⅢ群 a類土器の底部である。内面は磨き調整を施すが、成型痕がよく残る。地文は結束第1種羽状縄文である。縄文は複節である。26は口縁部破片である。口縁部に貼付けた2本の隆帯は断面三角形を呈する。逆‘く’の字形に爪の先端部を刺突する。器内面には撫で付けによる調整を施す。27は偏平な細い隆帯によって器面を加飾する。隆帯上には斜位方向からの連続刺突を施す。28は波頂部から半截竹管による2本の沈線を垂下する。H-4、図Ⅷ-19-2と同一個体である。29は波状口縁の頂部である。細い粘土紐を器面に貼付け、更に半截竹管の押し引きにより隆帯および地文部分を飾る。30は口縁部端部に粘土紐を2本並べて平たく貼付ける。刻みを2本の隆帯にまたがって‘く’の字状に施す。内面には丹念に磨き調整を施す。31はⅣ群 a類土器である。胎土には粒径1mmの長石をよく含む。32はⅣ群 a類土器である。口縁端部に肥厚帯を有する。胴部直上には段状を形成する。段状になったか所を境界としてRL縄、LR縄を交互に施し、羽状に器面を飾る。口唇部にもLR縄文を施す。肥厚帯の直下には円形刺突を施す。刺突した後、刺突原体を器面に押しつけながら、下方向に抜き取る。33は底部破片である。内面には炭化物が薄く付着する。底部分は丁寧に撫で付ける。34は再生土製円盤である。隆帯上に爪による刺突を持つ。結束第1種羽状縄文を地文に持つ。

時期 覆土や墳底付近の土器から、中期前葉の土器といえる。(三浦)

P-33 (図Ⅵ-23・36、表Ⅵ-1・7、図版Ⅵ-18・24)

位置 I 63 b、J 63 a

長軸方向 N-39°-W

規模 1.70/1.27×1.28/1.10×0.38m

調査 水道管による攪乱の壁面に、二つの遺構が切り合った断面が観察できた。下部の遺構に嵌まり込むようにある、新しい方の土壌をP-33。これに切られた下部の古い方の土壌をP-34として調査を始めた。攪乱の両壁面をベルトで残し、両側を掘りかろうじて底と壁を確認したが、攪乱が中央部に入っているため形状がとらえにくかった。そのため北側のベルトをはずして広げ、形状把握をして調査を進めた。

覆土 覆土4・5は崩落土。自然の埋没と思われる。

形態 平面形は、不整な卵形。底面はほぼ平坦で、壁も明瞭である。

遺物出土状況 覆土や墳底付近のほぼ全域から中期(主に前葉)の土器や小礫が出土している。

土器 図Ⅵ-36-35~40はⅢ群 a類土器である。35は波状口縁の下部に展開する文様をもつ破片である。括れ部分を有する器形である。隆帯上について、外径2mmの半截竹管を連続して押し引く。器壁について焼成は良好であり、胎土は緻密である。36は偏平な粘土紐をはりつける。粘土紐を留めるために隆帯の両側縁に刺突を連続する。両側縁で刺突を対応させる。37は口縁部破片である。隆帯上には爪による刺突を有する。指頭まで深く刺突を施す。器内面には丹念に磨き調整を施す。38は口縁部破片である。口縁部には肥厚帯を有する。縄を軸とした絡条体によって肥厚帯および隆帯に刺突を施す。刺突は水平方向の隆帯に対して斜位に刺突する。39は偏平な隆帯に爪の先端を用いて連続刺突を施す。隆帯の一侧縁を微隆起状に浮き立たせる。器壁は焼成が良好であり、よく締まる。内面について横方向に丹念な磨き調整を施す。40は胴部破片である。結束第1種羽状縄文を施す。胎土は緻密でよく締まる。内面に炭化物がよく付着する。

時期 覆土や墳底付近の土器から、中期前葉と考えられる。(三浦)

P-34 (図VI-23、図版VI-18)

位置 I 62 c、I 63 b、J 62 d、J 63 a **長軸方向** N-3°-W

規模 1.91/1.52×(1.32)/(0.96)×0.43m

調査 上記のごとく新しい方の**P-33**を先に調査した。その終了後、断面の残る中央部から両側に掘り進んで底面と壁を確認していった。

覆土 自然埋没と思われるが、覆土は**P-33**にほとんどを壊され不明な点が多い。

形態 **P-33**に削りとられてはいるものの、卵形を呈する平面形や、ほぼ平坦な底面は確認できる。壁も明瞭である。

遺物出土状況 **P-33**に壊されているせいか、遺物は出土していない。

時期 **P-33**に切られていることから中期前葉以前と考えられるが、周囲からはこれと対応する土器の出土はない。中期前葉で**P-33**に先行するものと考えるのが、妥当であろう。(三浦)

P-35 (図VI-23・36・37、表VI-1・2・7、図版VI-18・23・24)

位置 I 61 cd **長軸方向** N-65°-W

規模 0.56/0.17×0.40/0.11×0.36m

調査 **X-2**の墓壇調査中に、墓壇東壁と壇底に黒色土の落ち込みを確認した。**X-2**の調査終了後、墓壇壁面に沿って断面を残し半截したところ、II黒層の土壌を検出した。

覆土 Enの入り方がまばらで、埋め戻したようにも見受けられる。

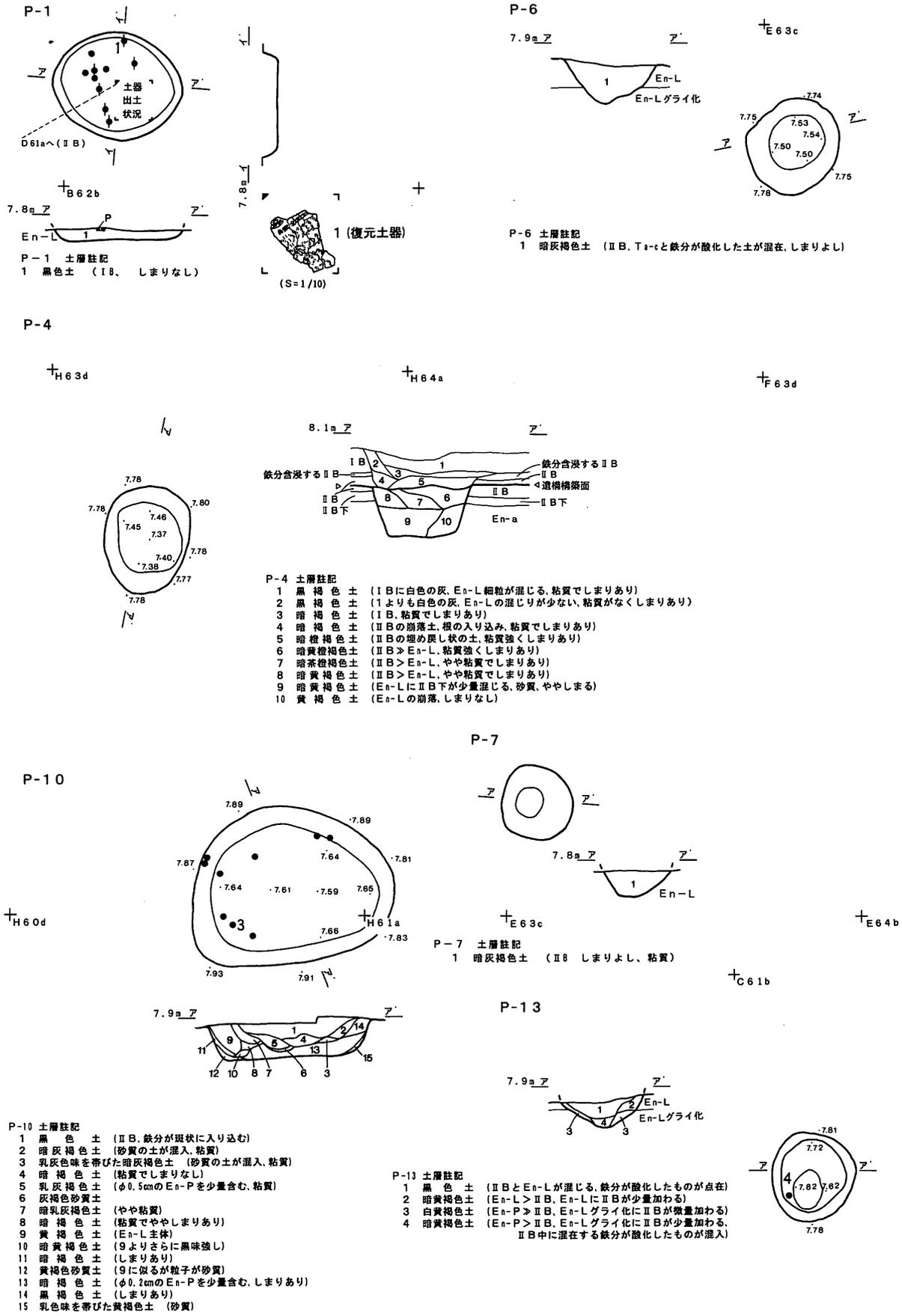
形態 平面形は、頭のつぶれた卵形。断面や全体形状は、すり鉢形で平坦面はない。

遺物出土状況 覆土1に埋め戻した上に置かれたように石斧が出土している。土器は覆土4の後期前葉のもの1点である。

土器 36-41はIV群a類、余市式土器の口縁部破片である。口唇部、口縁部肥厚帯、地文のいずれも同じRL縄で施文する。ずれも同じRL縄で施文する。

石器 37-5は片岩製の石斧で、両側縁や頭部・刃部にも打撃による剝離がみられる。

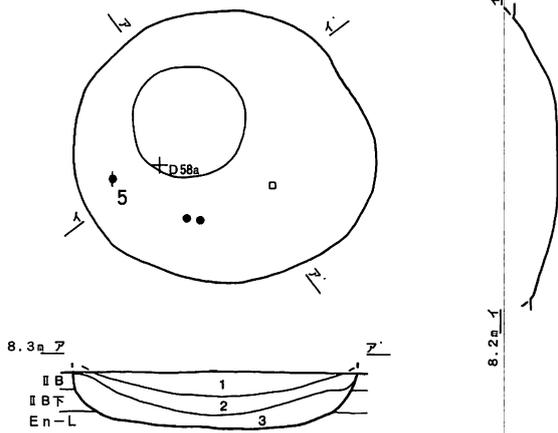
時期 後期前葉の遺構と思われる。(三浦)



図VI-18 土壌(1)

3 土壌

P-15

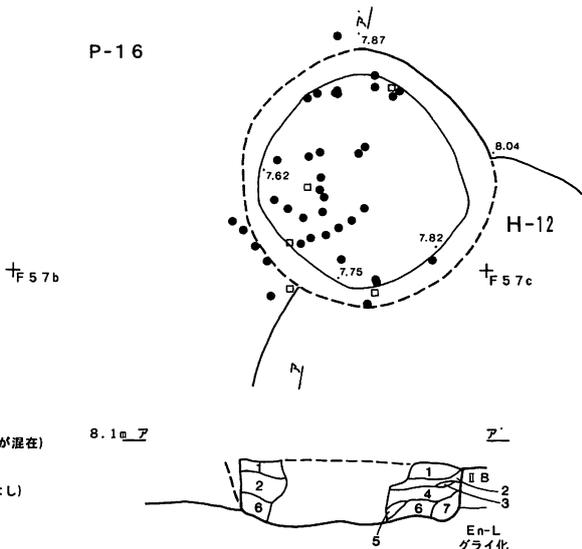


P-15 土層註記

- 1 黒色土 (II B層)
- 2 暗黄褐色土 (φ0.5cm En-Pを少量含む)
- 3 暗黒褐色土 (しまりよし)

※遺物は全て2層である

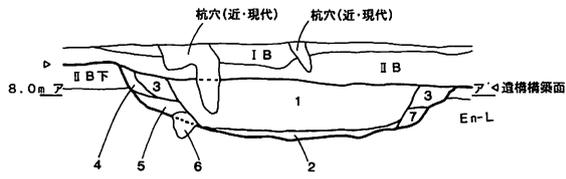
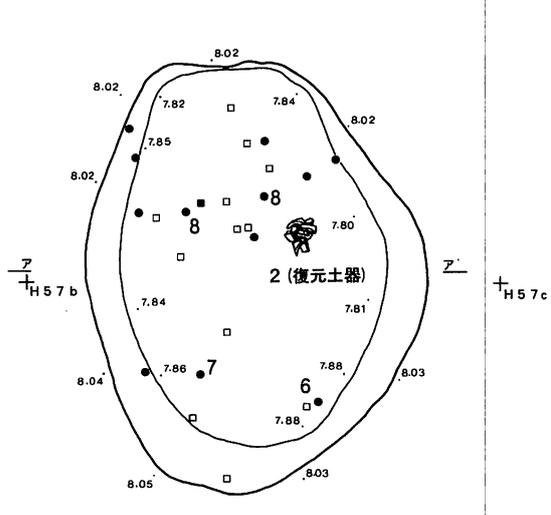
P-16



P-16 土層註記

- 1 黒色土 (II B, φ0.3cmの En-Pを微量含む)
- 2 黒黄褐色土 (II B>En-L, II Bにグライ化した En-Lを含む)
- 3 黒色土 (II B)
- 4 黒赤褐色土 (II B主体, φ0.5cmの En-Pを含む, 鉄分の酸化による赤色化したものが混在)
- 5 黒褐色土 (II B>En-L, II Bにグライ化した En-Lを含む, 草根による攪乱)
- 6 黒色土 (II B主体, II Bにφ3.0cmの En-Pが混じる)
- 7 黒色土 (II B>En-L, II Bにわずかにグライ化した En-Lが混じる, しまりなし)

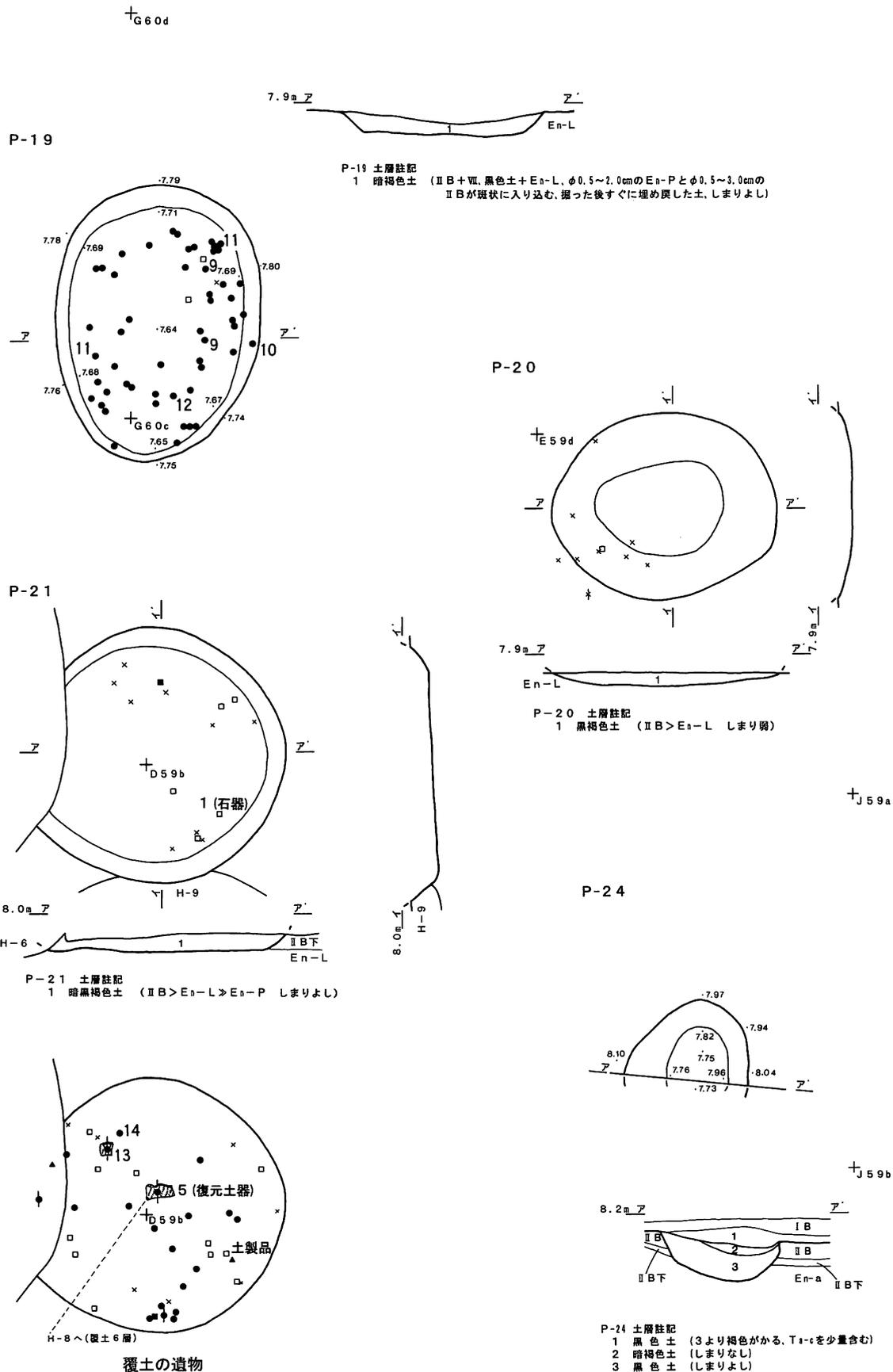
P-18



P-18 土層註記

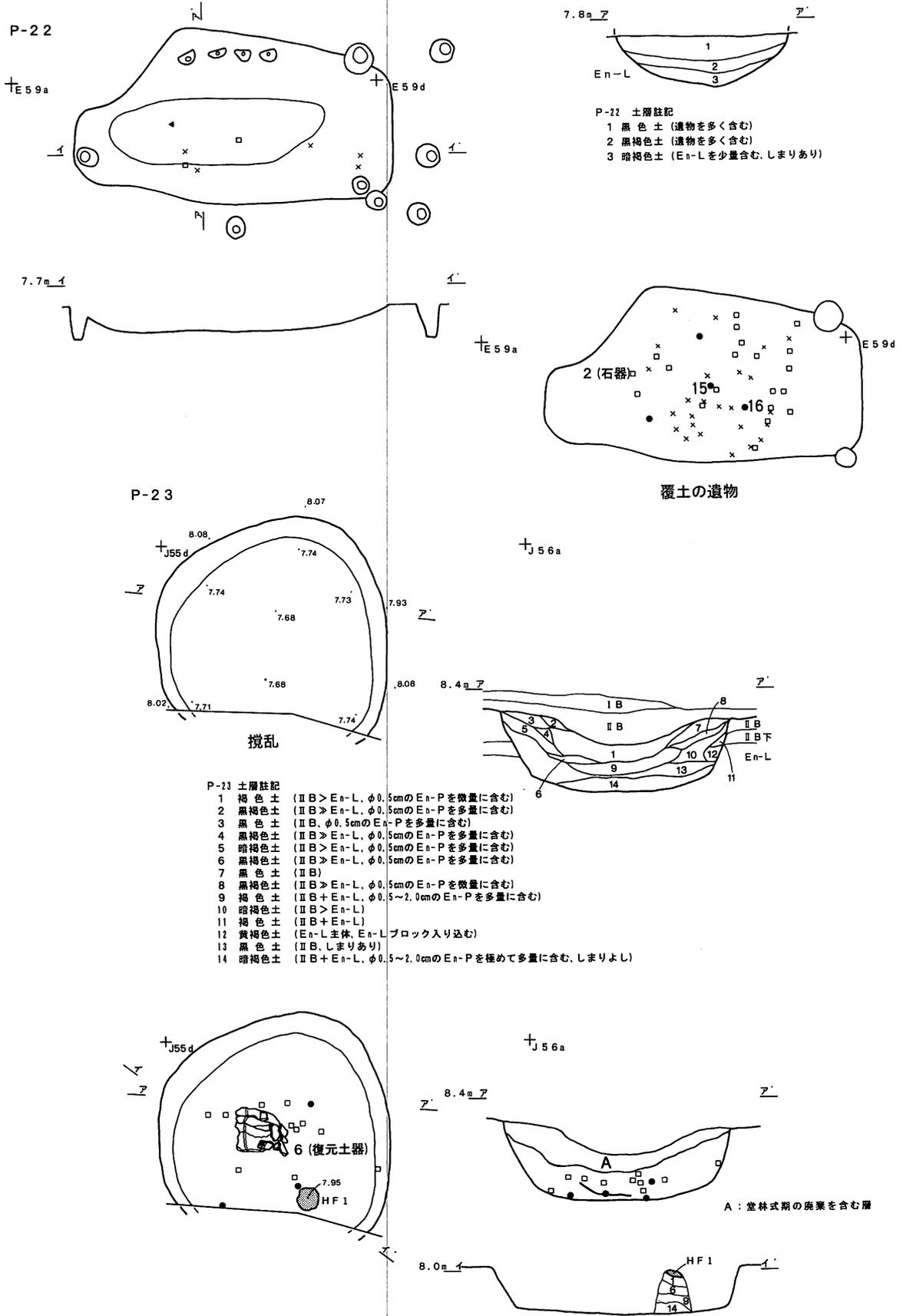
- 1 黒色土 (しまりあり)
- 2 明褐色土 (II B>En-L, φ0.5~2.0cmの En-Pを含む)
- 3 黒褐色土 (II Bを主体, やしまりあり)
- 4 暗褐色土 (II B>En-L, しまりなし)
- 5 褐色土 (II B+En-L, しまりなし)
- 6 暗褐色土 (木根による攪乱)
- 7 暗褐色土 (II B+En-L, しまりなし)

図VI-19 土壌(2)



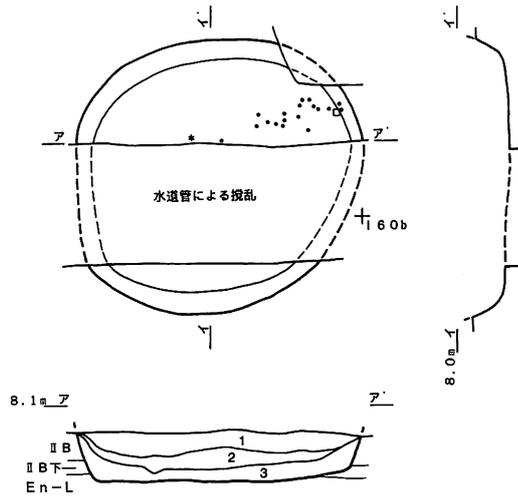
図VI-20 土壌(3)

3 土壌



図VI-21 土壌(4)

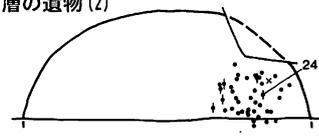
P-25



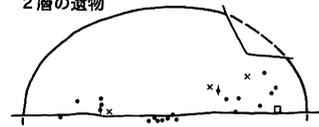
3層の遺物(1)



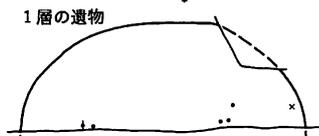
3層の遺物(2)



2層の遺物



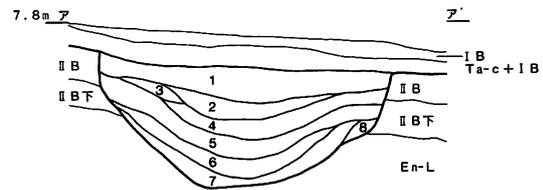
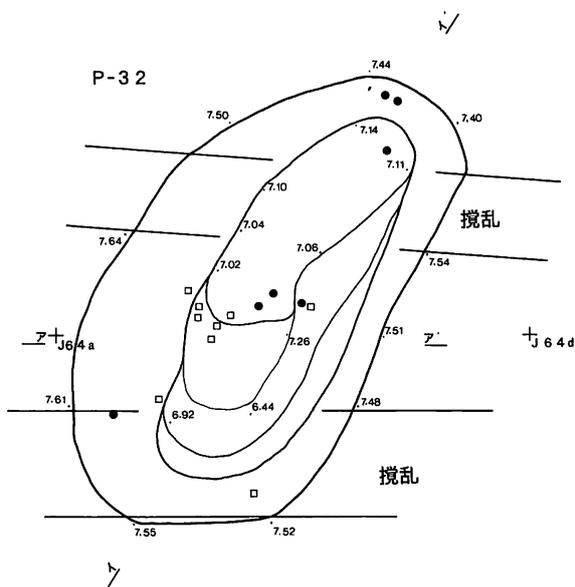
1層の遺物



P-25 土層註記

- 1 暗黒褐色土 (しまり弱)
- 2 暗黄褐色土 (しまり弱、土器が大量に出土する)
- 3 暗茶褐色土 (しまり弱、土器が少量出土する、炭化物を少量含む)

P-32



P-32 土層註記

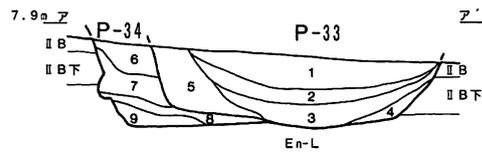
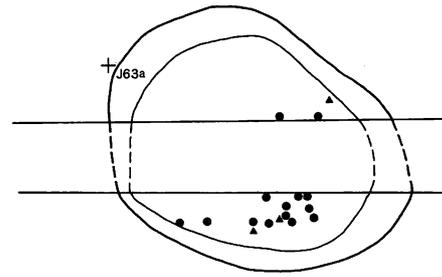
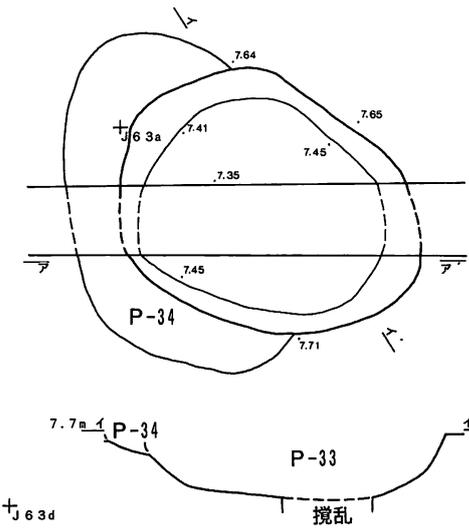
- 1 黒褐色土 (φ0.1~0.2cm En-Pを微量に含む、しまり弱い)
- 2 暗褐色土 (茶褐色土、φ1.0cmのEn-Pを含む、しまりよし)
- 3 黒色土 (しまりなし)
- 4 黒褐色土 (しまりよし)
- 5 暗褐色土 (しまり弱い)
- 6 黒褐色土 (しまりなし)
- 7 暗褐色土 (黒色土主体、φ0.1cmのEn-Lを散点的に含む、しまり弱い)
- 8 黒褐色土 (しまり弱い)



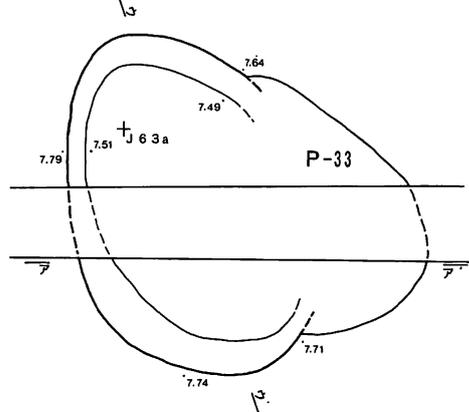
図VI-22 土壌(5)

3 土壌

P-33



P-34

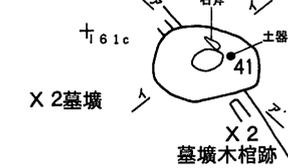


P-33-34 土層註記

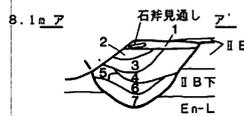
- 1 黒色土 (しまり弱い)
- 2 暗茶褐色土 (しまり弱い)
- 3 暗黒褐色土 (しまり弱い)
- 4 暗黄褐色土 (しまりあり)
- 5 暗黄褐色土 (しまり弱い, 4よりやや明るい)
- 6 暗茶褐色土 (しまり弱い)
- 7 暗黄褐色土 (しまり弱い, 8より明るい)
- 8 暗黄褐色土 (しまり弱い, En-Lを含む)
- 9 暗黄褐色土 (しまり弱い, 5とほぼ同じ)



P-35



J62b



P-35 土層註記

- 1 黒褐色土 (T_a-cを微量に含む)
- 2 黒色土
- 3 黒褐色土
- 4 暗褐色土 (En-Pを含む)
- 5 黄褐色土 (En-Lのブロック)
- 6 黒褐色土
- 7 暗黄褐色土 (4よりEn-Pをよく含む)



図VI-23 土壌(6)

4 焼土 (図VI-24・25・37、表VI-1・2・7、図版VI-25・26)

II B 包含層を掘り下げた際、焼土を36基検出した。台地の南北は斜面であり、黒色土の堆積厚が一定ではないため、検出面のレベルそのままの高低を比較する新旧関係の検討は不可能であった。また、焼土について、埋没後の攪拌や浸食による流出が作用するため、焚かれた面そのものは不明瞭である。そこで大まかな傾向として「II B 下層の上位、直上面から検出した焼土」、そして「II B 層の上、中位から検出した焼土」の2種類に分類した。

その作業を踏まえた上で、遺物について比較検討した。対象としたのは、焼土そのものから出土した遺物、焼土それぞれについて付近の包含層から出土した遺物である。さらには、焼土周辺に分布する遺構の時期を確認した。すると、例外として低湿地から検出したF-3~6を考慮せねばならなくなった。いずれもII B 層中位から検出した焼土であるが、周囲に伴う遺物は縄文時代中期の遺物であった。現在低湿地となった場所の堆積中から検出した遺構であり、他のII B 層中位検出焼土と共伴遺物の状況が異なる。むしろ共伴する土器について、II B 下層の上位検出の焼土群と内容が同じである。包含層出土の分類別土器分布とこれらの縄文時代焼土の位置を照らし合わせた。そして、焼土の時期を推定した。具体的な例として、F-67は後期後葉IV群c類、F-380は後期中葉IV群b類、F-40、50、378、83、381は中期中葉III群b3類の時期に伴う可能性がある。

その結果、焼土群とその時期を想定した。II B 下層の上位、あるいはその直上に検出面がある焼土は縄文時代中期以降、後期半ば以前の焼土群であり、II B の上、中位面に検出面があったものは縄文時代後期半ばより後、晩期以前の焼土群である。(大泰司)

(1) II B 下層の上位、直上面から検出した焼土 (図VI-24・37、表VI-1・2・7、図版VI-25・26)

[F-3・、F-5・F-6・F-4・F-18・F-19・F-33・F-40・F-46・F-32・F-47・F-48・F-50・F-51・F-53・F-58・F-59・F-66・F-70・F-72・F-73・F-74・F-83・F-380・F-381]

全部で25基検出した。よく焼けているものとしてF-6、18、33、40、46、32、48、50、53、66、70、72、74、380、381の16基がある。F-46は動いた焼土である。焼土周辺の包含層から出土した土器はIII群b1類を始めとしてIII群土器が多い。焼土から直接出土した遺物についてはF-18からIII群b1類土器が1点出土した。F-48についてIII群土器が1点出土した。F-66からIII群土器が1点出土した。F-68からはIII群土器が1点と時期不明の土器が1点出土した。F-74からはフレイクが1点、土器が3点出土した。F-79からはIII群b類土器が1点出土した。また、F-53に、黒曜石のフレイク集中が伴っていた。

ある程度の焼土の集中が見られるものとしてA群〔F-32、40、47、48、50〕とB群〔F-58、70、72、73、74〕がある。どちらもほぼ平坦な場所に焼土がかたまり、確実に中期とわかる遺構は付近にはない。ただし中期後半に構築された可能性があるTPについては例外である。

37-57はF-18の遺物である。焼けているために、器面の剝落が激しい。口縁部文様帯について、隆帯上に連続刻みを施した区画文を持つ。区画内には短沈線による‘く’の字形文様を充填する。内面には削るような磨き調整を施す。波状口縁の波頂部中央に把手を持つ個体を推定できる。

(2) II B 層の上、中位から検出した焼土 (図VI-25・37、表VI-1・2・7、図版VI-25・26)

[F-2・F-16・F-22・F-31・F-36・F-64・F-67・F-81・F-85・F-378・F-379]

全てで10基検出した。F-22、64、379についてよく焼ける。焼土周辺から縄文時代後期から晩期

4 焼土

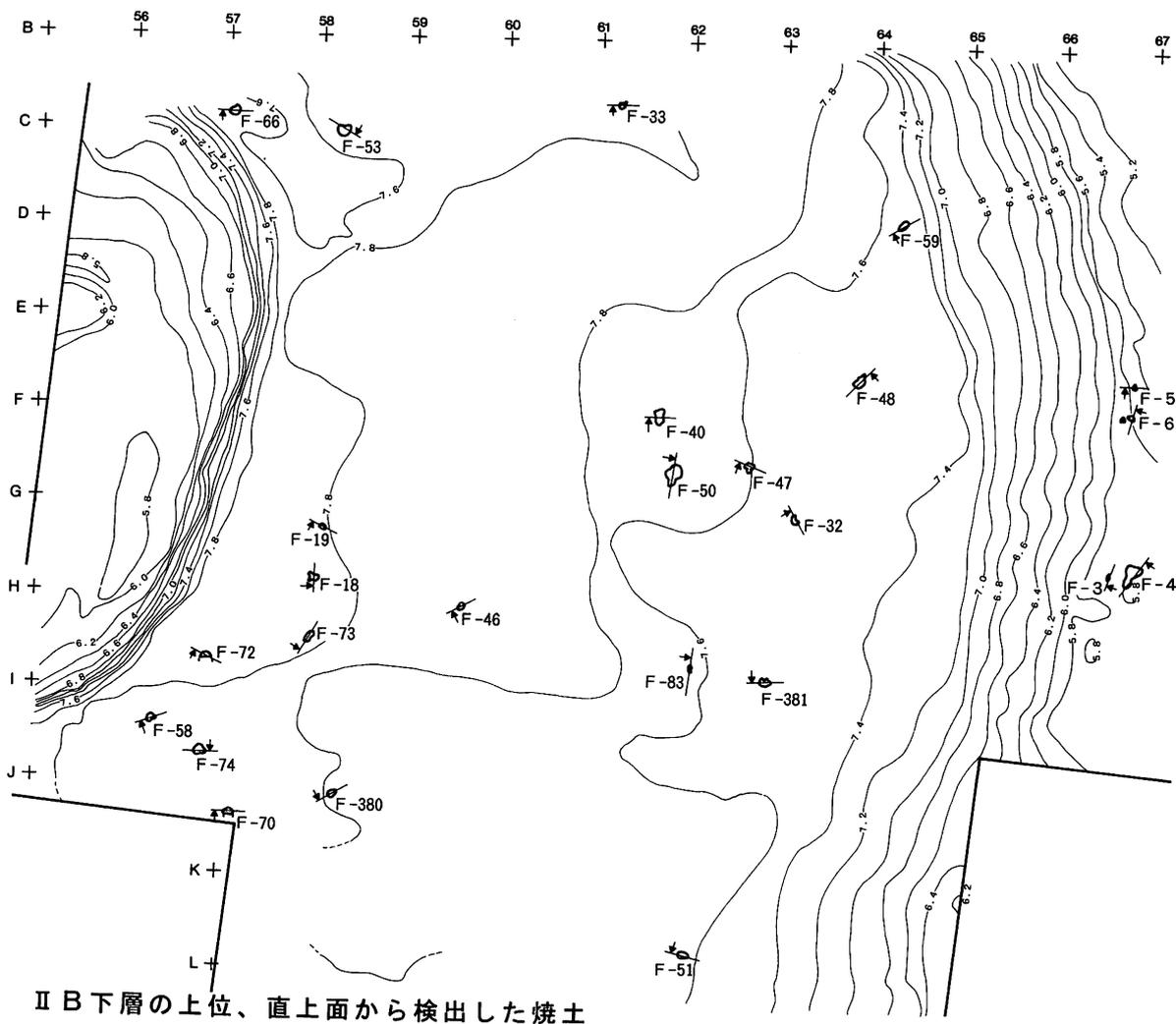
にかけての土器が出土している。また、それぞれの焼土近辺に縄文時代後期以降、晩期以前の遺構がある。特定の土器について分布の集中と焼土の位置が合致するものがあった。F-22、64、67、16、379である。いずれの焼土についても対応する土器はすべて堂林式である。しかしそれが即、焼土の時期につながるかどうかははっきりしない。他の焼土について共伴する土器の型式名が具体的にわかるものはない。しかし晩期も含めた、余市式以降の縄文土器が分布している。焼土そのものから、遺物は焼土中から出土しなかった。しかし同一検出面から出土した為、焼土に伴うと判断した遺物がある。

F-36とF-379のに関連する遺物を図示した。

37-58はF-36と同一検出面から出土した注口土器の胴部破片である。球形の胴部に縄文を充填した文様を施す。59はE 62cから出土した58との同一個体である。

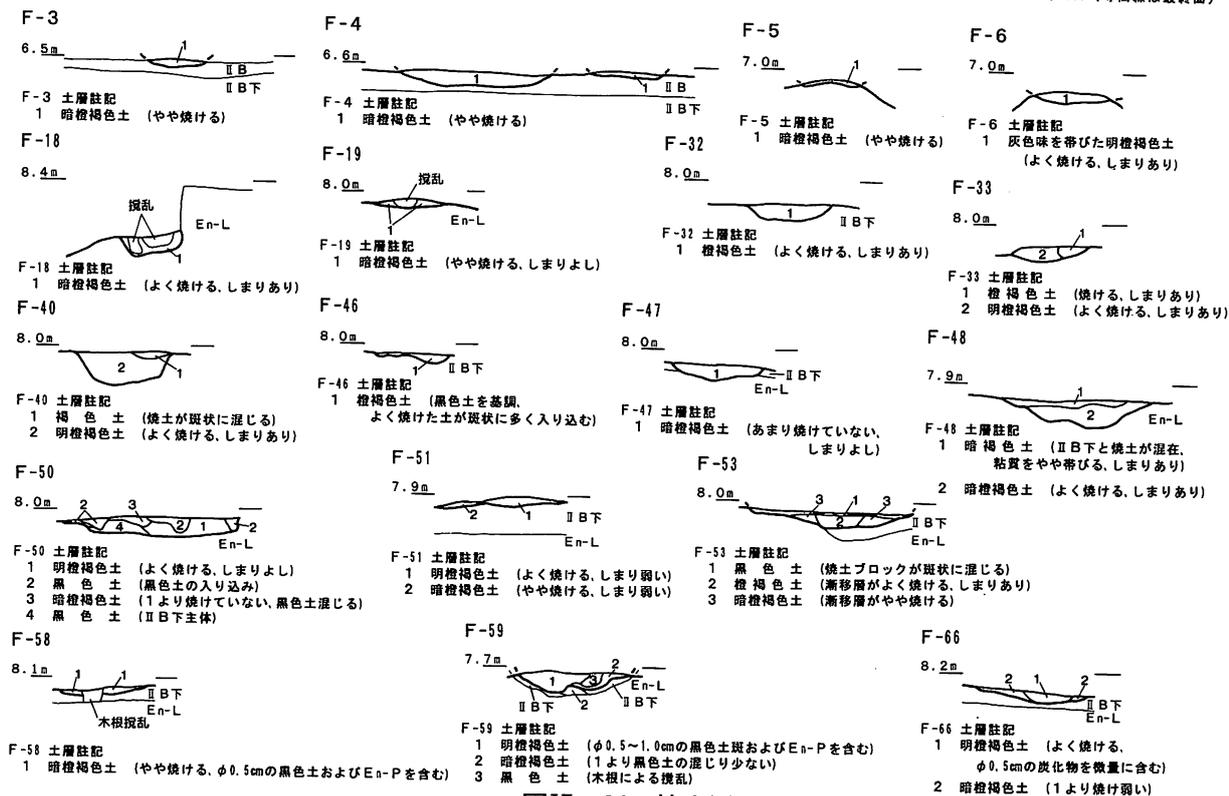
F-379に関連の遺物は34-9そして37-60~63である。9はIV群c類土器、堂林式である。口縁端部は撫で付けて調整する。豆粒状の突起が複数巡る。胴部には屈曲部分がある。屈曲部分には横方向に沈線が巡る。37-60は小型の浅鉢と推定できる破片である。器面はLR地文に細い沈線で明瞭な施文を施す。内面について丁寧に撫で付けて調整を施す。口縁端部には面をとる。口縁部付近に直径2mmの穿孔がある。61~63は注口土器の破片である。3点とも同一個体である。磨り消し縄文により、器面を飾る。無文部分は丹念に研磨されている。それに対して、器内面は指による成形痕がよく残る。注口部分は全面に縄文が施される。

(大泰司)



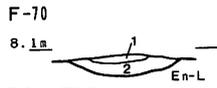
S=1/150 (等高線は最終面)

II B下層の上位、直上面から検出した焼土



図VI-24 焼土(1)

4 焼土



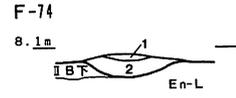
F-70 土層註記
1 暗褐色土 (黒色土に2の焼土混じる、しまりよし)
2 明橙褐色土 (よく焼ける、しまりあり)



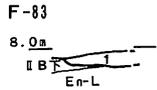
F-72 土層註記
1 明橙褐色土 (よく焼ける、しまりあり)
2 暗橙褐色土 (やや焼ける)



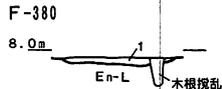
F-73 土層註記
1 暗橙褐色土 (やや焼ける、しまりあり)
2 暗褐色土 (焼け弱い)



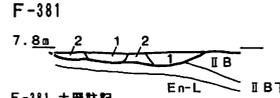
F-74 土層註記
1 黒色土 (II B)
2 明橙褐色土 (よく焼ける、しまりあり)



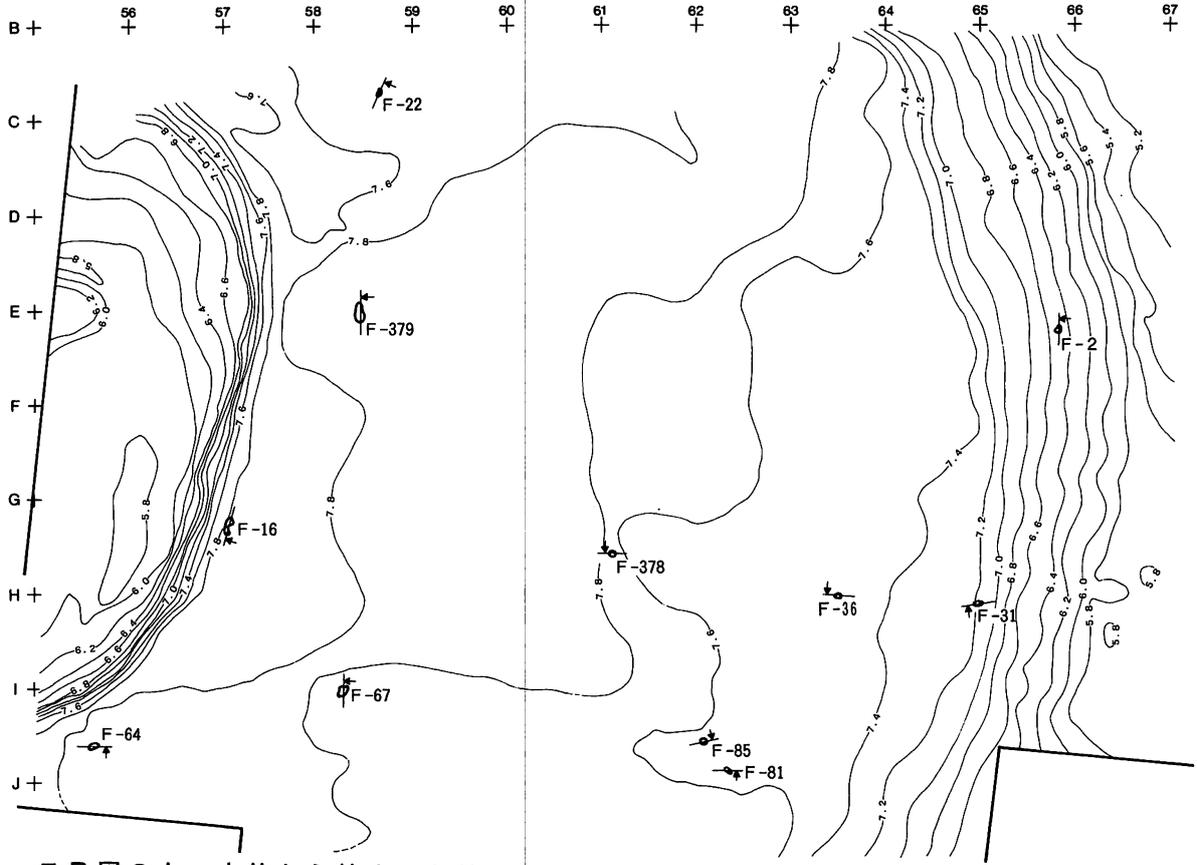
F-83 土層註記
1 明橙褐色土 (II Bを斑状に含む、しまりあり)



F-380 土層註記
1 明橙褐色土 (よく焼ける、しまりあり)



F-381 土層註記
1 明橙褐色土 (よく焼ける、しまりなし)
2 暗褐色土 (鉄分の浸透による赤褐色土を散点的に含む)



II B層の上、中位から検出した焼土

S=1/150 (等高線は最終面)



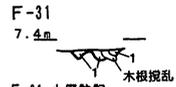
F-2 土層註記
1 橙褐色土 (II B比較的良好に焼ける)



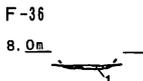
F-16 土層註記
1 暗橙褐色土 (II B焼土、しまりよし)



F-22 土層註記
1 明橙褐色土 (しまりよし)



F-31 土層註記
1 暗橙褐色土 (II Bが被除したもの、あまりよく焼けてなく、ややしまりあり)



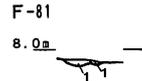
F-36 土層註記
1 暗橙褐色土 (Ta-cの入り込み、II B焼土を微量に含む)



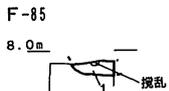
F-64 土層註記
1 橙褐色土 (II B比較的良好に焼ける、ややしまりあり)



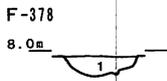
F-67 土層註記
1 暗橙褐色土 (あまり焼けていない、ややしまりあり)



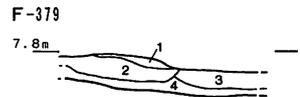
F-81 土層註記
1 暗橙褐色土 (やや焼ける)
2 暗褐色土 (焼土を微量に含む)



F-85 土層註記
1 橙褐色土 (En-Pを多量に含む、しまりよし)



F-378 土層註記
1 橙褐色土 (Ta-cを少量含む、焼けは悪くしまりなし)



F-379 土層註記
1 褐色土 (II BとEn-Lが混在)
2 明橙褐色土 (よく焼ける)
3 暗褐色土 (焼土がまばらに混じる)
4 暗黄褐色土 (焼土がブロック状に混じる)

図VI-25 焼土(2)

5 Tピット

Tピットについて概観する。Tピットは旧オサツ川本流に張り出す台地の端部に主として分布する。レベル的にはおおよそ7.0~7.5m前後に集中する。副次的な配列としては調査区内について西側の低湿地際、標高8.0mラインにそっても並ぶ。

形態としては、A；平坦な底面を造りだすもの、B；断面形態が漏斗状で、先細るもの、C；平面プランが小判型のもの、以上の3形態に分けることができる。大小に関わらず、遺構を分類にあてはめると、A；TP-1、2、11、13、17、19、20、21、23（23は小型）、24、B；TP-3、10、12、14、16、18、22（22は小型）、25、26、27、C；TP-9（逆杭を墳底部に持つ）、15である。大きさと形態そして立地を考えるとセットとして〔TP-19、20〕、〔TP-22、23〕、〔TP-10、18、25〕、〔TP-14、27〕、〔TP-11、13〕、〔TP-3、26〕、〔TP-12、16〕の組み合わせを想定できる。狩猟方法として、台地よりオサツ川本流へと追込み、Tピットに落とすという方法をとったと考える。

今回の調査区から検出したTピットについて、形態の類似、そしてシカ猟用の落とし穴という想定から、複数一組で用いたと想定できる。そこで形態と検出面を踏まえた上で、いずれのTピットも同時期の遺構と仮定した。構築時期として土壌底部や、ローム混じりで流入を示す土層から、Ⅲ群a類土器が出土しているTピットは、縄文時代中期後半以降であることを示している。また、遺構の断面から、Ta-c降下以前の遺構である。TP-10および焼土の集中がF~H 60~62グリッドに見られる。調査区全体の出土土器と遺構を時期に関して対比すると、Ⅲ群b3類期のみ住居の検出がない。本年度調査した②地区において、覆土中の遺物出土状況から北筒式期と認められる形態BのTピットを検出した。台地をⅢ群b3類期縄文時代中期後葉に狩猟域であったと想定し、Tピットを縄文時代中期後葉の遺構と位置づけた。（大泰司）

TP-1（図VI-26・36、表VI-1・2、図版VI-27・36）

位置 E 65 ab **長軸方向** N-75°-W

規模 2.09/2.07×0.83/0.21×0.79m

調査 E 65の包含層調査中にⅡB下面において、楕円形の黒色土入り込みを確認した。まず土層確認のため、短軸方向に対して南側を半割した。土壌の形状と覆土堆積状況からTピットと判断した。そして完掘を行った。中層はEn-P相当の橙褐色砂層の崩落土、最下層にⅡBの崩落土があり、その直下を底面とした。掘り込み面は検出面より高いと思われる。

覆土 自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態はよく開いた開口部となっているが、崩落によるものであろう。底面は東側にわずかに低い傾斜があるが、平たく造り出す。西壁と東壁について壁面はオーバーハングする。平面プランは長楕円形であり長軸は東-西方向を向く。形態分類はAAである。

遺物 覆土1、2層からⅢ群a類土器が2点、礫175点が出土している。そのうち1点を図示した。42は崩落と流入後のⅡBの堆積層からの出土である。Ⅲ群の胴部破片である。屈曲具合から胴下半部の破片と推測できる。器表面に輪積み痕が残る。

TP-2（図VI-26、表VI-2、図版VI-27）

位置 E 65 ab **長軸方向** N-69°-W

規模 1.91/1.16×0.77/0.26×0.81m

調査 E 65 aの包含層調査中にⅡB下位で黒色土の落ち込みを検出した。半割したところEn-L相当の灰色砂層を10cmほど掘り込むTピットと確認した。

覆土 覆土は上部はⅡB主体、中層はEn-P相当の橙褐色砂層の崩落土、下層にⅡBの崩落土があり、そこを底面とした。

形態 東側の底面は15cmほどオーバーハングしている。長軸のプランは、ほぼ東-西方向である。底面は東側にわずかに低い傾斜がある。形態分類はAである。

遺物 覆土1、2層からⅢ群a類土器が9点、礫67点が出土している。 (倉橋)

TP-3 (図VI-26、図版VI-27)

位置 G 64 d、G 65 a

長軸方向 N-65°-W

規模 1.68/1.08×0.74/0.22×0.73m

調査 平成7年度に64ラインの東側、平成8年度に64ラインの西側を調査した。平成7年度の調査ではG 64 d・G 65 a・bグリッドの包含層調査中にⅡB下位で黒色土の落ち込みを検出した。半割したところEn-P相当の礫層をわずかに掘り込むTピットと確認した。

平成8年度の調査については、Ⅵ層上面で、Ⅴ層黒色土の落ち込みを確認した。昨年度の調査結果から**TP-3**の残部であると判断、完掘を行った。

覆土 上部はⅡB主体、中層はEn-P相当の橙褐色砂層の崩落土、最下層にⅡBの崩落土があり、そこを底面とした。壙底部には埋没開始時の黒色土が堆積している。

形態 平面形態は長楕円形を基調とする。開口部分は崩落により、遺構上部の形は崩れている。壙底部分は長楕円形プランで平坦である。底面は東側にわずかに低い傾斜がある。長軸は東-西方向である。形態分類はBである。

遺物 平成8年度の調査において、覆土中から礫が2点出土している。

TP-9 (図VI-26、表VI-2、図版VI-28)

位置 P 60 a

長軸方向 N-67°-W

規模 1.38/1.14×0.71/0.36×0.71m

調査 ⅡB下層において、楕円形の黒色土入り込みを確認した。まず土層確認のため、短軸の東側を半割した。土壌の形状と覆土堆積状況からTピットと判断した。掘り込み面は検出面よりやや高いレベルと思われる。半割した部分から逆杭を検出した。木質部分が地下水に含まれる鋳物と置換していた。土層堆積状況を確認後、完掘を行った。

覆土 自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態は底部分からまっすぐ立ち上がる。遺構中央部から開きながら開口する。崩落によるものであろう。壙底部は平たく面に造り出す。平面プランは小判形をした長楕円形である。長軸は東-西向きである。形態分類はCである。

付属遺構 逆杭の痕跡を2か所から検出した。完掘時に検出した側に木質は残っていなかった。

遺物 覆土中から礫が2点出土した。

TP-10 (図VI-27、図版VI-28)

位置 C 59 b、C 59 c、D 59 a、D 59 d

長軸方向 N-49°-W

規模 (1.77) /1.50×(0.87) /0.37×(0.87) m

調査 Ⅴ層中位面において、楕円形の黒色土入り込みを確認した。まず土層確認のため、短軸の東側を半割した。土壌の形状と覆土堆積状況からTピットと判断した。掘り込み面は確認できなかったが、検出面よりやや高いレベルと思われる。土層確認後、完掘を行った。

覆土 土層について、自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態はよく開いた開口部となっているが、崩落によるものであろう。

土壇壁面中央部分からももう一段崩落が見受けられる。壇底部は平たい底面を造り出す。プランはゆがんだ長楕円形である。長軸は北西-南東方向である。形態分類は大型の B である。

遺物 遺物の出土はなかった。

TP-11 (図VI-27・36、表VI-1・2、図版VI-28・36)

位置 J 63 a、d

長軸方向 N-48°-W

規模 1.46/1.25×0.98/0.22×0.88m

調査 V層下面において、楕円形の黒色土入り込みを確認した。まず土層確認のため、短軸の南側を半割した。土壇の形状と覆土堆積状況から T ピットと判断し、完掘を行った。掘り込み面は検出面より上と思われる。

覆土 自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態はよく開いた開口部となっているが、崩落によるものであろう。壇底部は平たく造り出す。南側壁面はオーバーハングする。地形的に、南側の方が斜面の下方である。長軸方向は北西-南東方向である。形態分類は A である。

遺物 覆土上部黒色土の流入中から、Ⅲ群 a 類土器が 8 点、Ⅲ群土器が 2 点、礫が 1 点出土している。覆土12は黒色土の流入であり、壇底部直上に堆積する。その覆土12から、Ⅲ群土器が 1 点出土している。そのうち 4 点を図示した (図VI-36-43~46)。

4 点ともⅢ群 a 類の胴部破片である。43・45・46は覆土 1 層からの出土である。43は覆土12層からの出土である。43は結束第一種羽状縄文を持つ胴部破片である。44も結束第一種羽状縄文を持つ胴部破片である。遺構底部の遺物である。45は隆帯上に爪による連続圧痕を持つ。指頭まで深く刺突する。器壁は厚く、胎土は粗い。混和剤として黒雲母が目立つ。46は扁平な粘土紐をはりつける。粘土紐を留めるかのように隆帯の両側縁に刺突を連続する。刺突は 'く' の字形になるように両側縁で対応する。器壁は薄くよくしまる。器内面には丁寧に磨き調整を加える。

時期 特にこの T ピットに関しては壇底部のⅢ群土器、44から、中期前半より後の遺構と分かった。

TP-12 (図VI-27、図版VI-28)

位置 E 63 c、64 b

長軸方向 N-50°-W

規模 1.96/1.37×0.88/0.22×0.81m

調査 V層下面において、楕円形の黒色土入り込みを確認した。まず土層確認のため、短軸の南側を半割した。土壇の形状と覆土堆積状況から T ピットと判断した。そして完掘を行った。掘り込み面は検出面より上である。

覆土 自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態はよく開いた開口部となっているが、崩落によるものであろう。壇底部は平たく造り出す。長軸は北西-南東方向である。形態分類は大型の B である。

遺物 遺物の出土はなかった。

TP-13 (図VI-28、図版VI-29)

位置 G 64 c、H 64 d

長軸方向 N-53°-W

規模 0.24/0.17×0.79/0.14×0.8m

調査 V層下面において、楕円形の黒色土入り込みを確認した。まず土層確認のため、短軸の南側を半割した。土壇の形状と覆土堆積状況から T ピットと判断した。そして完掘を行った。掘り込み面は検出面より上である。

覆土 自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態はよく開いた開口部となっているが、崩落によるものであろう。壙底部は平たく造り出す。東壁について壁面はオーバーハングする。長軸は北西-南東方向である。形態分類はAである。

遺物 遺物の出土はなかった。

TP-14 (図VI-28、図版VI-29)

位置 H 64 ad

長軸方向 N-45°-W

規模 1.83/1.28×0.84/0.15×0.89m

調査 V層下面において、楕円形の黒色土入り込みを確認した。まず土層確認のため、短軸の南側を半割した。土壌の形状と覆土堆積状況からTピットと判断し、完掘を行った。掘り込み面は検出面よりやや高いと思われる

覆土 自然崩落および土砂の流入による埋没過程を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態はよく開いた開口部となっているが、崩落によるものであろう。壙底部は平たく造り出す。長軸は北西-南東方向を向く。形態分類はBである。

遺物 遺物の出土はなかった。

TP-15 (図VI-28、表VI-1・2、図版VI-30)

位置 C 64 d

長軸方向 N-75°-W

規模 1.33/0.62×0.72/0.53×0.69m

調査 V層中位面において、楕円形の黒色土入り込みを確認した。まず土層確認のため、短軸の南側を半割した。土壌の形状と覆土堆積状況からTピットと判断した。検出面は、掘り込み面とほぼ同じ面である。その後、完掘を行った。

覆土 自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態はよく開いた開口部となっているが、崩落によるものであろう。壙底部は平たい面として造り出す。プランは小判形であり、比較的小形である。長軸は東-西方向を向く。形態分類はCである。

遺物 覆土中から礫が1点出土している。

TP-16 (図VI-29、図版VI-30)

位置 C 63 bc

長軸方向 N-77°-W

規模 0.16/1.48×0.72/0.28×0.92m

調査 V層中位面において、楕円形の黒色土入り込みを確認した。まず土層確認のため、短軸の南側を半割した。土壌の形状と覆土堆積状況からTピットと判断した。検出面は、掘り込み面とほぼ同一である。その後、完掘を行った。長軸は東西方向である。

覆土 自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態はよく開いた開口部となっているが、崩落によるものであろう。壙底部について平坦に造り出す。平面プランは長楕円形であり、比較的小形である。長軸は東-西方向を向く。形態分類はBである。

遺物 遺物の出土はなかった。

TP-17 (図VI-29、図版VI-31)

位置 D 65 a

長軸方向 N-89°-W

規模 1.74/0.15×0.37/0.24×0.46m

調査 H-5を調査終了後、住居の西壁側、VI層中位面において、楕円形の黒色土入り込みを確

認した。まず土層確認のため、短軸の南側を半割した。深さは浅かったが、土壌の形状と覆土堆積状況から T ピットと判断した。H-5 よりは古い遺構である。掘り込み面は確認できなかった。その後、完掘を行った。

覆土 自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態はよく開いた開口部となっているが、崩落によるものであろう。壙底部は斜面の下方ほど掘り込みが深い。プランは長楕円形であり、比較的小形である。断面形状は漏斗形であるが、壙底部に長細い底面を造り出す。そのため形態分類は A にちかいが、B とした。

遺物 遺物の出土はなかった。

TP-18 (図 VI-29・36、表 VI-1・2、図版 VI-31・36)

位置 F 28 bc

長軸方向 N-52°-W

規模 (2.05) / 1.79 × (1.17) / 0.39 × (1.16) m

調査 V 層中位面において、楕円形の黒色土入り込みを確認した。まず土層確認のため、短軸の東側を半割した。土壌の形状と覆土堆積状況から T ピットと判断した。掘り込み面は崩落部分が多いため確認できなかった。検出面よりやや高いレベルと思われる。土層確認後、完掘を行った。

覆土 土層について、自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態はよく開いた開口部となっているが、崩落によるものであろう。壙底部は斜面下方ほど掘り込みが深い。プランはゆがんだ長楕円形である。長軸は東-西方向を向く。形態分類はゆがんだ B である。

遺物 覆土上部の黒色土流入部分から III 群 a 類土器が 4 点、III 群土器 31 点、IV 群 c 類土器 1 点、礫が 12 点出土した。覆土中位に土砂の流入を示す 8 層から III 群土器 14 点が出土した。そのうち 3 点を図示した (36-47~49)。

47、48 は III 群土器、49 は IV 群土器である。いずれも覆土 1 層からの出土である。

47 は結束第一種羽状縄文を持つ胴部破片である。48 は LR 縄の原体を施文方向を変えて交互に施すことにより羽状に器面を飾る。49 は IV 群 c 類土器の口縁部破片である。口縁部は内側に屈曲する。いわゆる IO 刺突を持つ。刺突は貫通するものとしもないものがある。波頂部分の突起の頂部には円形刺突を施す。器表面は沈線によって文様を施す。器内面には横方向の磨き調整を施す。

時期 特にこの T ピットについては覆土中の土器から、縄文時代中期以降の遺構である。

TP-19 (図 VI-30、図版 VI-32)

位置 K 58 a

長軸方向 N-13°-E

規模 -/- × 0.54 / 0.21 × 1.04 m

調査 V 層中位面において、楕円形の黒色土入り込みを確認した。黒色土入り込みプランの南端は水道管の攪乱によって消滅していた。まず土層確認のため、短軸の南側を半割した。土壌の形状と覆土堆積状況から T ピットと判断した。掘り込み面は崩落部分が多いため確認できなかった。検出面よりやや高いレベルと思われる。土層確認後、完掘を行った。

覆土 土層について、自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態はよく開いた開口部となっているが、崩落によるものである。土壌壁面の腹部からの崩落も見受けられる。壙底部は平たい面は造り出さない。プランはゆがんだ長楕円形である。長軸は南-北方向である。形態分類は A である。

遺物 遺物の出土はなかった。

TP-20 (図VI-30、表VI-1・2、図版VI-32)

位置 L 57 d、M 57 c、M 58 b 長軸方向 N-34°-W

規模 (3.26) / 3.15 × (0.38) / 0.16 × 1.05 m

調査 En-L 直上までの攪乱層を取り除いたところ、細長い不整楕円形状の黒色土入り込みを確認した。まず土層確認のため、短軸の南側を半割した。土壌の形状と覆土堆積状況から T ピットの可能性を考えた。完掘したところ、En-L 面において、北端部分の縁が大きなブロック状に崩れて落ち込んでいる様子がはっきりと残っていた。削平面からの崩落であるため、攪乱時の崩落であろう。平面プランについて、屈曲部分があるため、2つの T ピットが切り合っている可能性も考えた。しかし屈曲部壁面について構築の痕跡がなかったため、その可能性はないと判断した。掘り込み面は遺構上部が攪乱により無くなっているため確認できなかった。

覆土 自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態は直線的に立ち上がる。壙底部を平たく造り出した様子はない。長軸は南西-北東方向である。形態分類は A である。

遺物 図示はしなかったが、覆土 1 層から III 群 b 3 類土器が 1 点出土した。

TP-21 (図VI-30、図版VI-33)

位置 K 62 c、K 63 b、L 62 d、L 63 a 長軸方向 N-70°-W

規模 (1.52) / 1.29 × (0.65) / 0.24 × (0.94) m

調査 VI 層上面において、楕円形の黒色土入り込みを確認した。遺構がグリッドの境界にあったため、63 ライン以東を 10 cm ほど掘り過ぎた。まず土層確認のため、短軸の東側を半割した。土壌の形状と覆土堆積状況から T ピットと判断した。掘り込み面は検出面よりやや高い面と思われる。土層確認後、完掘を行った。

覆土 自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態は胴部が膨らんだような形となっているが、遺構壁面の崩落によるものである。プランはゆがんだ長楕円形である。土壌底部の形状について斜面下方向である東側がオーバーハングする。長軸は東-西方向である。形態分類は A である。

遺物 遺物の出土はなかった。

TP-22 (図VI-31、図版VI-33)

位置 L 60 a、L 60 b 長軸方向 N-53°-E

規模 1.27 / 1.10 × 0.54 / 0.24 × 0.81 m

調査 V 層最下面において、楕円形の黒色土入り込みを確認した。まず土層確認のため、短軸の南西側を半割した。土壌の形状と覆土堆積状況から T ピットと判断した。掘り込み面は確認できなかった。しかし検出面よりわずかに高いレベルと思われる。土層確認後、完掘を行った。

覆土 自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態はやや開いた開口部となっているが、崩落によるものであろう。壙底部は平たい面は造り出さない。プランはゆがんだ長楕円形である。長軸は北東-南西向きである。形態分類は小型の B である。

遺物 遺物の出土はなかった。

TP-23 (図VI-31、図版VI-33)

位置 L 63 a 長軸方向 N-67°-W

規模 (1.23) / 1.29 × (0.46) / 0.26 × (0.84) m

調査 V層最下面において、楕円形の黒色土入り込みを確認した。黒色土入り込みの平面プランについて南側は壊されている。まず土層確認のため、短軸の西側を半割した。土壌の形状と覆土堆積状況からTピットと判断した。掘り込み面は確認できなかった。検出面よりやや高いレベルと思われる。土層確認後、完掘を行った。

覆土 土層について、自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態は壙底部分からやや開きながら立ち上がる。崩落によるものであろう。底面は造り出さない。平面プランは長楕円形である。長軸は東-西向きである。土壌の下半部の形態について西側が微妙にオーバーハングする。壙底部分について斜面下方向である東側が深い。形態分類は小型のAである。

遺物 遺物の出土はなかった。

TP-24 (図VI-31・36、表VI-1・2、図版VI-34・36)

位置 I 57 d

長軸方向 N-31°-W

規模 1.76/1.77×0.92/0.34×1.20m

調査 V層下面において、楕円形の黒色土入り込みを確認した。まず土層確認のため、短軸の南側を半割した。土壌の形状と覆土堆積状況からTピットと判断した。掘り込み面は検出面とほぼ同じレベルと思われる。土層堆積状況を確認後、完掘を行った。

覆土 自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。近代もしくは現代の杭跡を土層断面において確認した。

形態 短軸方向について、断面形態は底部分からやや開きながら立ち上がる。崩落によるものであろう。東側壁面について壁面腹部から崩れた痕跡を確認できる。壙底部は平坦に造り出す。平面プランは長楕円形である。長軸は南-北向きである。土壌の下半部の形態について南側が微妙にオーバーハングする。壙底部分について斜面上方向である南側が深い。形態分類はAである。

遺物 覆土上部の黒色土流入か所からⅢ群a類土器が1点、Ⅳ群b類土器が1点、メノウ製のフレイクが1点出土している。攪乱部分から黒曜石製のフレイクが1点出土している。

そのうち2点を図示した(36-50、51)。いずれも覆土1層からの出土である。

50はⅣ群b類の胴部破片である。屈曲部分であり、屈曲部には無文帯がめぐる。器壁は薄く粒径1mm以下の長石粒が目立つ。同一個体がH 59 d、F 60 d、H 59 b グリッドから出土している。51はⅢ群a類土器の口縁部破片である。口縁部分には粘土紐を貼り付けて肥厚帯を形成する。隆帯部分にはLR縄によって連続した刺突を施す。胎土には粒径2mmの雲母が目立つ。

TP-25 (図VI-32・36、表VI-1・2、図版VI-34・36)

位置 I 57 a、I 57 b

長軸方向 N-20°-E

規模 (2.68)/2.39×1.12/0.67×1.13m

調査 V層中位面において、楕円形で大型の黒色土入り込みを確認した。まず土層確認のため、短軸の南側を半割した。特に遺構西壁について、倒れる様な崩れ方をした痕跡を確認した。本来この遺構はより細長い形状であったと推測できる。土壌の形状と覆土堆積状況からTピットと判断した。掘り込み面は検出面とほぼ同じレベルである。水道管による攪乱が遺構を東西方向に切っていたため掘込み面で検出が可能であった。土層堆積状況を確認後、完掘を行った。

覆土 遺構壁面の自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、崩落が激しいためもともとの形状は分からない。壙底部は平たく面に造り出す。平面プランは長楕円形である。長軸は南-北向きである。土壌の下半部の形態について、南

側、北側どちらも微妙にオーバーハングする。壙底部分について南側が深い。形態分類はAである。

遺物 遺構覆土上部の黒色土層、覆土1層からIV群b類土器が2点、III群土器が1点、黒曜石のフレイクが1点、礫が3点出土している。黒色土層よりやや下の褐色土層、覆土2層からIII群a類土器が1点、III群土器が1点、III群b1類土器が1点、IV群a類土器が7点、IV群b類土器が2点。縞頁岩の石核が1点、黒曜石のフレイクが4点出土している。西側壁面崩落直後の堆積層、覆土7層からIII群土器が7点、ロームの崩落を主体とする土層、覆土8層からIII群土器が点出土している。そのうち5点を図示した(36-52~56)。

52~55は覆土2層の遺物、56は覆土8層の遺物である。52はIV群土器である。磨消しも文様部分に幅広い原体によって直線を基調として文様を施す。器内面にはよく磨き調整を施す。53はIV群a類土器である。器面には粘土紐貼り付けによる肥厚帯がめぐる。肥厚帯の断面形態は偏平である。54はIV群a類の胴部破片である。器面に対して垂下するように粘土紐を貼り付ける。隆帯には器面に対して縦方向に軸をむけ、絡条体圧痕を施す。器壁は緻密であり、焼成が良好である。55は隆帯により器面を飾る。III群a類の胴部破片である。隆帯を用いて、器面を飾る。隆帯には器面に対して縦方向にヘラによる連続刺突を施す。器壁は緻密であり、焼成が良好である。56はIV群c類の土器である。小型の器形である。横走する沈線によって器面を飾る。内面は横方向の磨き調整を丹念に施す。

TP-26 (図VI-32、図版VI-35)

位置 I 64 a、I 64 d

長軸方向 N-39°-W

規模 (1.41) / 0.62 × (0.77) / 0.23 × 0.96 m

調査 V層下面において、楕円形の黒色土入り込みを確認した。まず土層確認のため、短軸の南側を半割した。土壌の形状と覆土堆積状況からTピットと判断した。掘り込み面は検出面よりやや高いレベルと思われる。土層堆積状況を確認後、完掘を行った。

覆土 自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態は底部分からまっすぐ立ち上がる。遺構中央部から開きながら開口する。崩落によるものであろう。西側壁面について壁面中央部から崩れた痕跡を確認できる。壙底部は北半分は南下がりに傾斜した掘り込みである。南側にかたよった位置に長楕円形の壙底部を持つ。検出面について平面プランは長楕円形である。長軸は南-北向きである。形態分類は小型のBである。

TP-27 (図VI-32、図版VI-35)

位置 J 30 d

長軸方向 N-48°-W

規模 (1.84) / 1.45 × 1.17 / 0.31 × (1.30) m

調査 V層下面において、楕円形の黒色土入り込みを確認した。遺構には水道管敷設のための攪乱によって、壊されている。まず土層確認のため、短軸の北側を半割した。土壌の形状と覆土堆積状況からTピットと判断した。掘り込み面は検出面とほぼ同じレベルと思われる。土層堆積状況を確認後、完掘を行った。

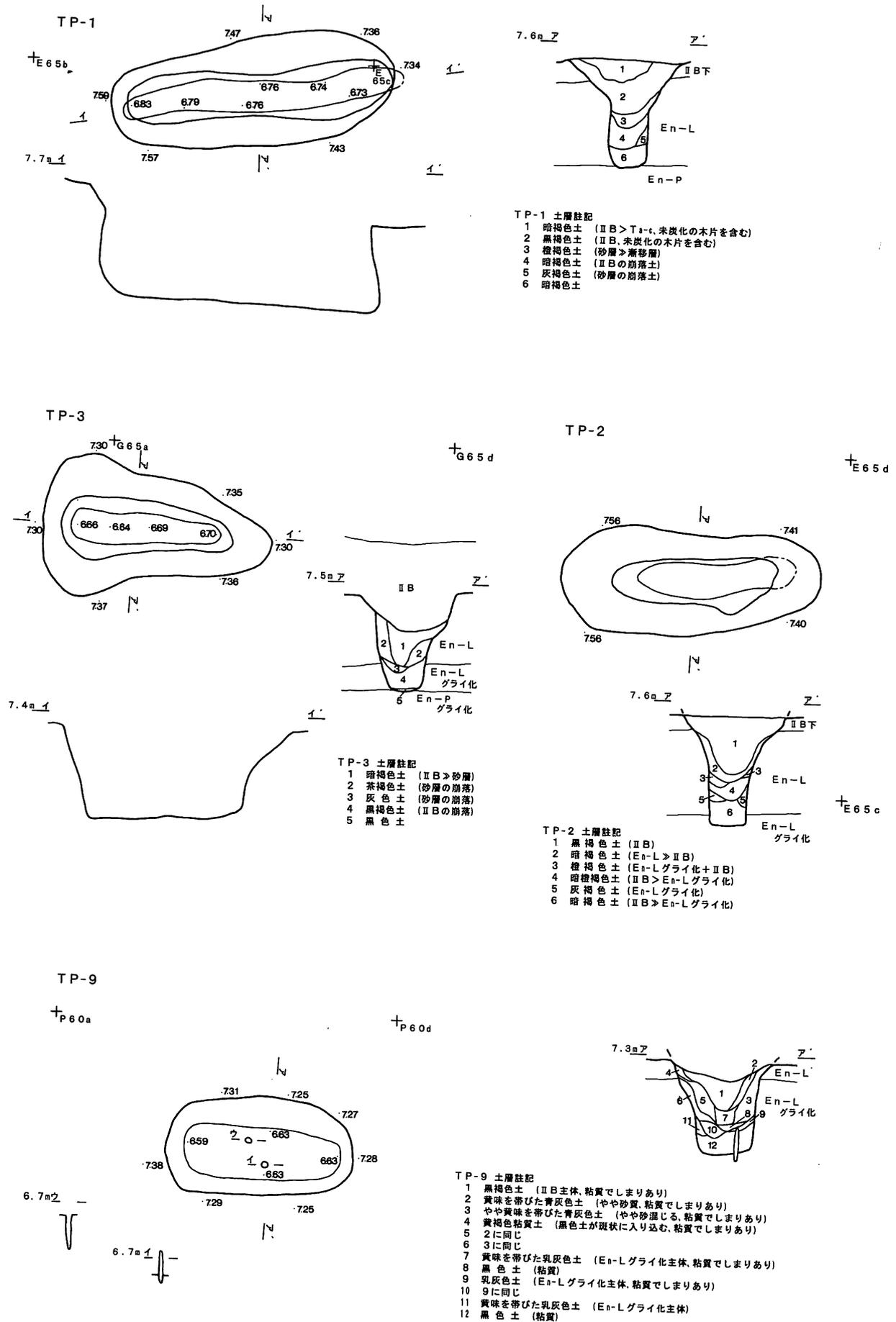
覆土 自然崩落および土砂の流入による埋没状況を確認した。

形態 短軸方向について、断面形態は底部分からまっすぐ立ち上がる。遺構中央部から開きながら開口する。崩落によるものであろう。壙底部は平たく面に造り出す。平面プランは長楕円形である。長軸は東南-西北向きである。形態分類はBである。

遺物 遺物の出土はなかった。

(大泰司)

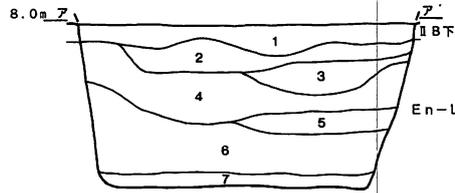
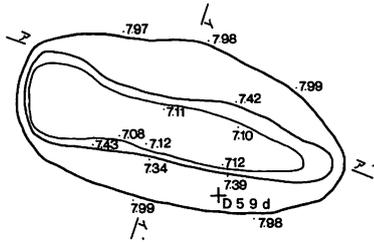
VI II黒層の遺構とその遺物



図VI-26 Tピット(1)

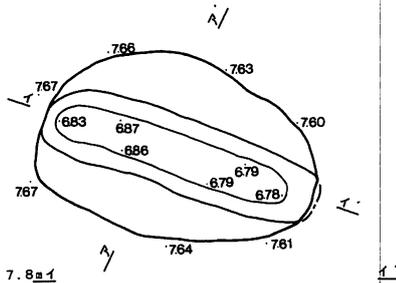
5 Tピット

TP-10



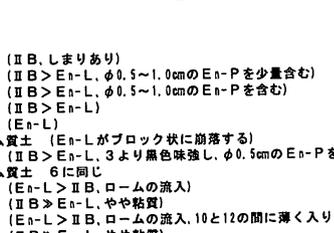
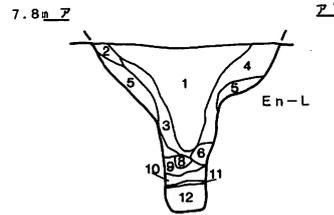
+J 63 d

TP-11



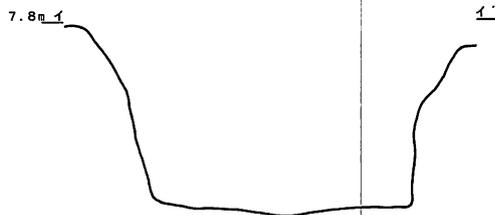
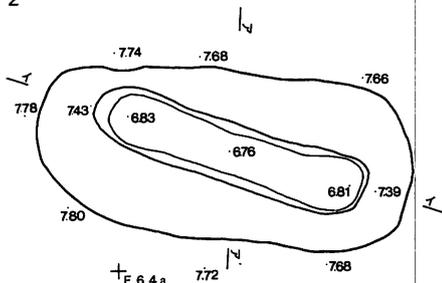
TP-10 土層註記
 1 黒色土 (鉄分の浸透による茶褐色土を斑状に含む)
 2 茶褐色土 (鉄分の浸透による茶褐色土を斑状に含む)
 3 黒褐色土 (鉄分浸透土, En-Lを含む)
 4 黒褐色土 (鉄分浸透土を散点的に含む)
 5 暗黄褐色土 (黒色土, En-Lを含む)
 6 黄褐色土 (En-Lを多量に含む)
 7 暗黄褐色土 (黒色土主体, φ0.5~1.0cmのEn-Lがブロック状に点在する)

+J 64 a



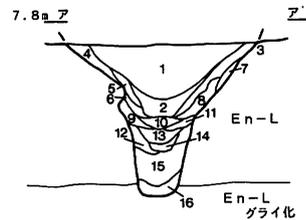
TP-11 土層註記
 1 黒色土 (II B, しまりあり)
 2 暗褐色土 (II B > En-L, φ0.5~1.0cmのEn-Pを少量含む)
 3 暗褐色土 (II B > En-L, φ0.5~1.0cmのEn-Pを含む)
 4 暗褐色土 (II B > En-L)
 5 明褐色土 (En-L)
 6 黄褐色ローム質土 (En-Lがブロック状に崩落する)
 7 暗褐色土 (II B > En-L, 3より黒味強し, φ0.5cmのEn-Pを含む)
 8 黄褐色ローム質土 6に同じ
 9 暗黄褐色土 (En-L > II B, ロームの流入)
 10 黒褐色土 (II B > En-L, やや粘質)
 11 暗黄褐色土 (En-L > II B, ロームの流入, 10と12の間に薄く入り込む)
 12 黒褐色土 (II B > En-L, やや粘質)

TP-12



+F 64 a

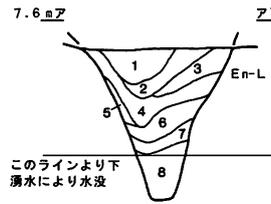
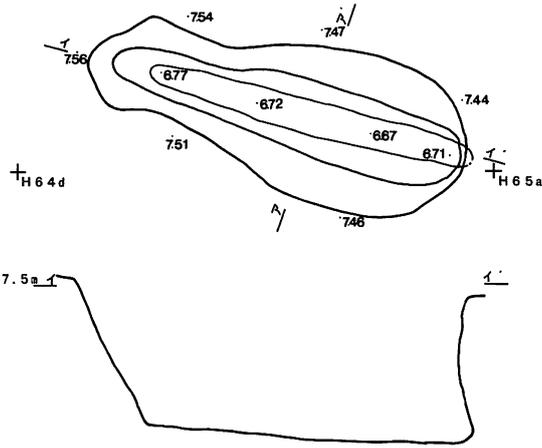
+F 64 d



TP-12 土層註記
 1 黒色土 (II B, φ0.8cmのEn-Pを微量に含む)
 2 黒色土 (II B, φ0.8cmのEn-Pを含む)
 3 黒褐色土 (しまりなし)
 4 暗黄褐色土 (En-L > II B)
 5 褐色土 (II B + En-L, しまりなし)
 6 黄褐色土 (En-Lの崩落)
 7 黄褐色土 (黄味強し, En-Lの崩落)
 8 暗黄褐色土 (II B + En-L)
 9 暗褐色土 (II B > En-L)
 10 暗褐色土 (II B > En-L, しまりなし)
 11 暗黄褐色土 (En-L > II B)
 12 暗黄褐色土 (鉄分多く含む)
 13 黄褐色土 (しまりなし)
 14 暗黄褐色土 (鉄子荒い, しまりなし)
 15 黄褐色土 (灰色味を帯びる, 砂質層湿る)
 16 黄褐色土 (灰色味を帯びる, 砂質層湿る, しまりなし)

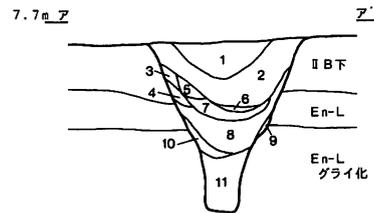
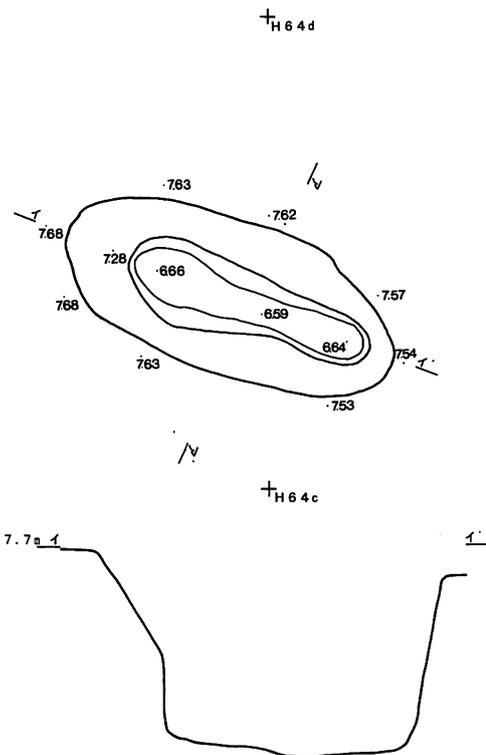
図VI-27 Tピット(2)

TP-13



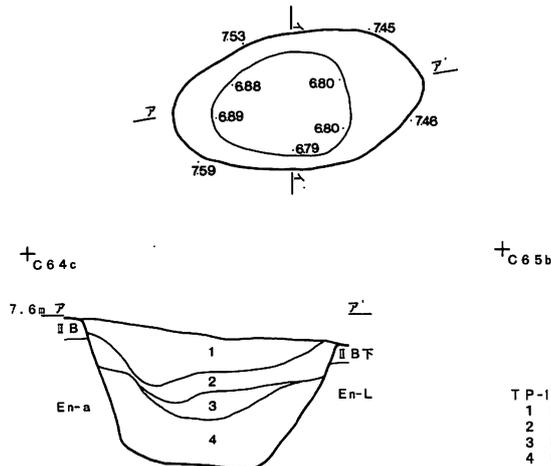
- TP-13 土層註記
- 1 黒色土 (II B, 鉄分多く含む)
 - 2 黒色土 (II B)
 - 3 暗茶褐色土 (粘質土)
 - 4 暗褐色土
 - 5 茶褐色土 (鉄分多く含む)
 - 6 灰色褐色土 (砂質土主体, 粘質)
 - 7 明灰色褐色土 (砂質土主体, 粘質)
 - 8 黒色土

TP-14



- TP-14 土層註記
- 1 黒色土 (II B, 2より褐色味を帯びる, ϕ 0.5cmの灰色粘土粒子を微量に含む)
 - 2 黒色土 (II B)
 - 3 暗灰褐色土 (粘質土)
 - 4 黄色味を帯びる暗灰色褐色土
 - 5 黒色土 (2とは鉄分の薄い層で分断される)
 - 6 黒色土 (鉄分の粒子が多く入り込む)
 - 7 黒色土
 - 8 黒色土 (7とは鉄分の薄い層で分断される)
 - 9 暗褐色土 (粘質土)
 - 10 黄色味を帯びる暗灰色褐色土 (ϕ 0.5cmのEn-Pを多量に含む)
 - 11 暗褐色土

TP-15

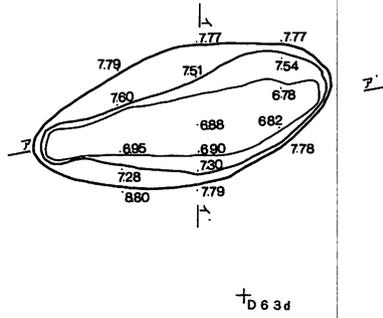


- TP-15 土層註記
- 1 暗褐色土 (ϕ 1.5cmのEn-Pを含む, しまりよし)
 - 2 明褐色土 (ϕ 1.0cmのEn-Pを含む, しまりよし)
 - 3 明黄褐色砂土 (ϕ 1.0cmのEn-Pを少量含む, しまりなし)
 - 4 明黄褐色砂土 (3より明るい, しまりなし)

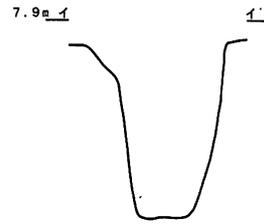
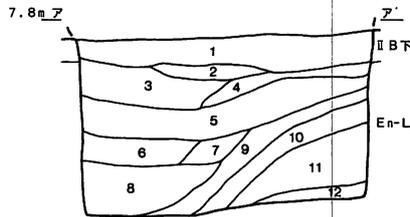
図VI-28 Tピット(3)

5 Tピット

TP-16



+D63d

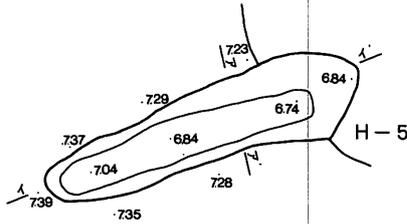


+D64a

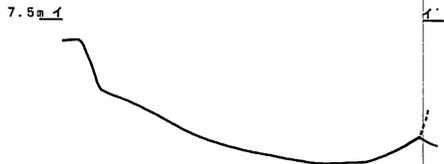
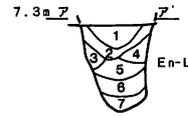
- TP-16 土層註記
- 1 黒褐色土 (鉄分浸透した茶褐色土が斑状に入り込む)
 - 2 暗褐色土 ($\phi 0.2 \sim 0.5$ cmのEn-Lが少量入り込む)
 - 3 黒褐色土 (茶褐色土を少量含む)
 - 4 暗褐色土 ($\phi 1.0$ cmのEn-Lブロックを少量含む)
 - 5 暗黄褐色土 (En-Lを含む)
 - 6 茶褐色土 (茶褐色土を含む)
 - 7 暗黄褐色土 (En-Lを多量に含む)
 - 8 茶褐色土 (茶褐色土を多量に含む)
 - 9 暗褐色土 ($\phi 1.0 \sim 1.5$ cmのEn-Lブロックを少量含む)
 - 10 暗黄褐色土 (En-Lを多量に含む)
 - 11 暗褐色土 ($\phi 1.0$ cmのEn-Lブロックを含む)
 - 12 暗黄褐色土 (En-L粒子、 $\phi 3.0 \sim 5.0$ cmの小礫を多量に含む)

TP-17

+D65a

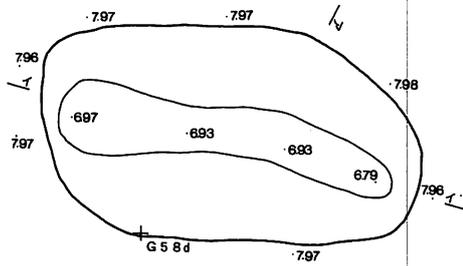


+D65d

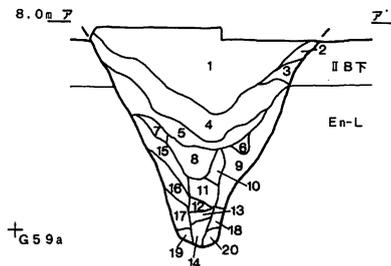


- TP-17 土層註記
- 1 黒色土 (II B、2よりやや黄味強し、2との境目に $\phi 0.5 \sim 1.0$ cmのEn-Pを微量に含む、鉄分よく含む)
 - 2 黒褐色土 (II B)
 - 3 褐色土 (II B + En-L、しまりなし、En-Pわずかに入り込む)
 - 4 黄褐色土 (En-L、砂質土、しまりなし)
 - 5 黒色土 (II B、1より鉄分少ない、 $\phi 0.5$ cm以下の灰褐色粘土粒を多量に含む)
 - 6 暗褐色土 (II B + En-L、灰褐色の砂質粒子多く入り込む)
 - 7 褐色土 (En-L主体、砂質土、灰色味を帯びた砂多く入り込む)

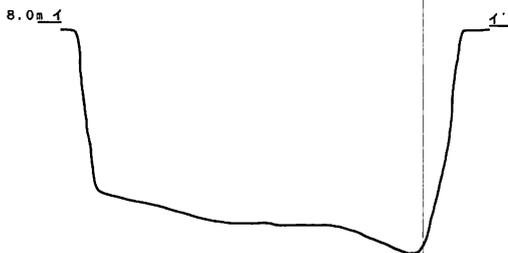
TP-18



+G58d



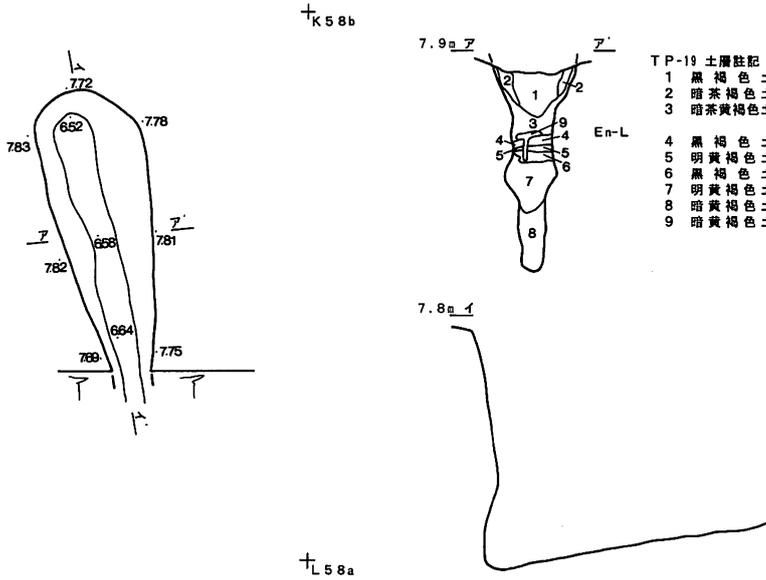
+G59a



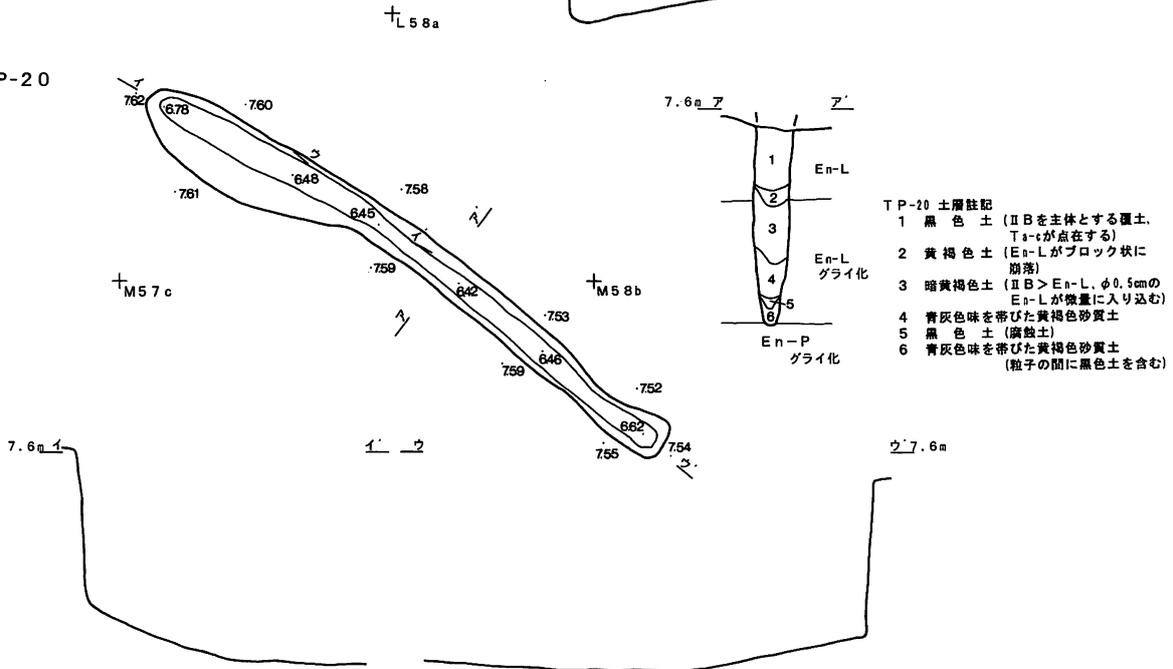
- TP-18 土層註記
- 1 黒色土 (II B、鉄分まばらに含む、しまりあり)
 - 2 黒褐色土 (II B > En-L)
 - 3 暗黄褐色土 (En-L > II B、砂質)
 - 4 黒褐色土 (II B > En-L、 $\phi 0.5 \sim 2.0$ cmのEn-Pを微量に含む)
 - 5 暗褐色土 (II B > En-P)
 - 6 暗灰褐色土 (本掘の入り込みによる攪乱)
 - 7 黄灰褐色土 (En-L主体、やや粘質)
 - 8 暗褐色土 (En-LとII Bが斑状に入り込む、 $\phi 0.5 \sim 2.0$ cmのEn-Pを微量に含む)
 - 9 明乳褐色土 (En-L主体、やや粘質)
 - 10 黄褐色土 (En-L主体、粘質でしまりあり)
 - 11 黄褐色土 (En-L主体、しまりなし)
 - 12 黄褐色土 (En-L主体、11より黄味強し)
 - 13 暗褐色土
 - 14 暗褐色土 (14より黄味強し)
 - 15 黄褐色土 ($\phi 0.5 \sim 0.2$ cmの黒色土が点在するローム質土)
 - 16 黄褐色土 (En-L主体、17より黄味強し)
 - 17 黄褐色土 (16より粘質味を帯びる)
 - 18 黄褐色土 (En-L主体、しまりなし)
 - 19 黄褐色土 (En-L主体、鉄分を多く含む)
 - 20 黄褐色土 (En-L主体、鉄分を多く含む)

図VI-29 Tピット(4)

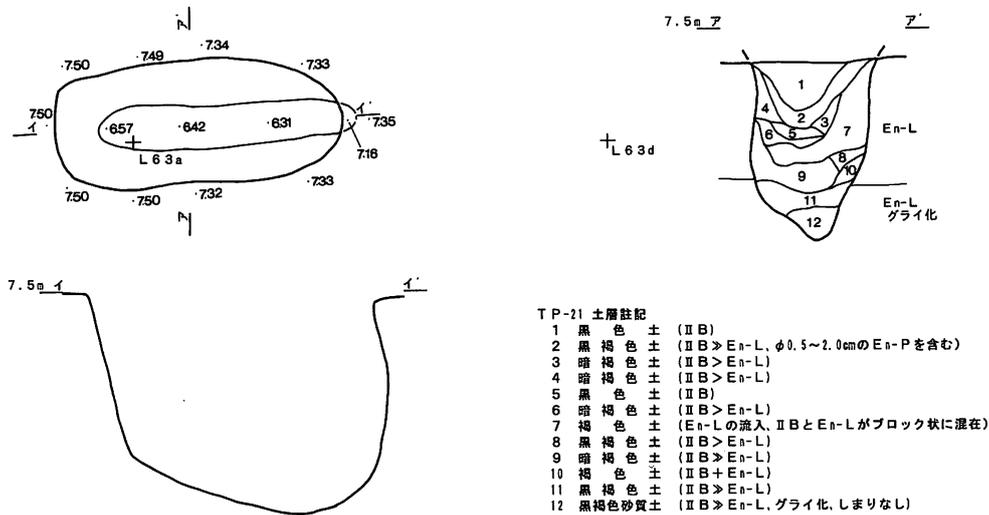
TP-19



TP-20



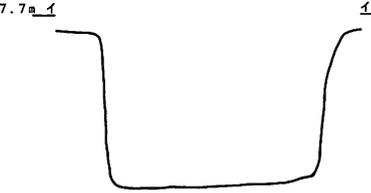
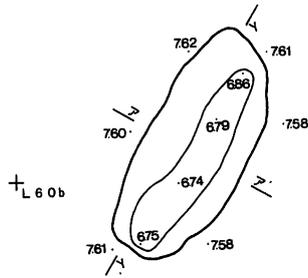
TP-21



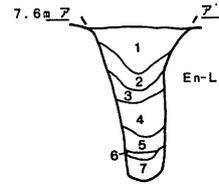
図VI-30 Tピット(5)

5 Tピット

TP-22



7.6m Z

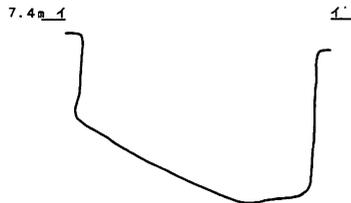
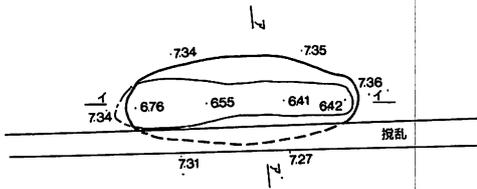


TP-22 土層註記

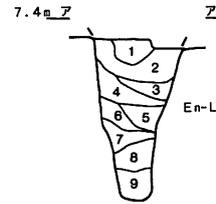
- 1 黒色土 (II B, φ1.0cmのEn-Pを微量に含む)
- 2 黒褐色土 (II B>En-L)
- 3 明黄褐色土 (En-L)
- 4 灰色味を帯びた黄褐色土 (グライ化したEn-L主体)
- 5 黒褐色土 (II B>En-L, φ2.0cmのEn-Lが入り込む)
- 6 黄褐色土 (En-Lがブロック状に崩落)
- 7 5と同じ

TP-23

7.4m Z



7.4m Z

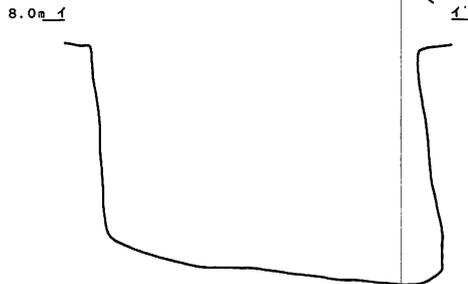
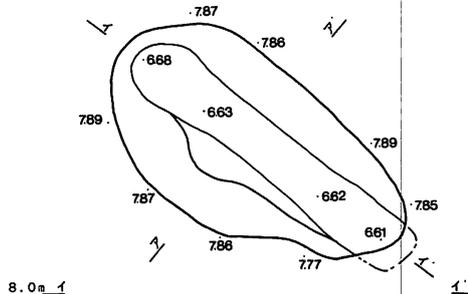


TP-23 土層註記

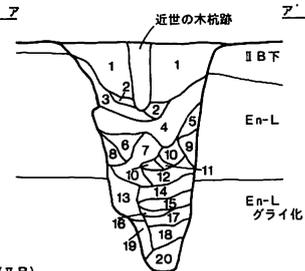
- 1 暗褐色土 (II B主体, φ0.5~2.0cmのEn-Pを多量に含む)
- 2 黒色土 (II Bの入り込み)
- 3 黒色土 (II B, φ0.5~2.0cmのEn-Pを微量に含む)
- 4 暗褐色土 (II B+En-L, 粒子細かい, しまりなし)
- 5 暗黄褐色土 (En-Lの流入を主体とする)
- 6 黒褐色土 (En-L+II B, φ0.5cmのEn-Pを微量に含む)
- 7 暗黄褐色土 (En-Lの流入主体)
- 8 暗褐色砂質土 (En-L>II B, 砂質)
- 9 黒色土 (腐蝕土, 粘質)

TP-24

8.0m Z



8.0m Z

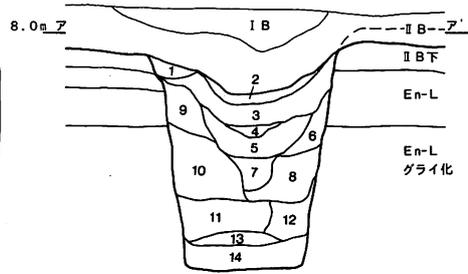
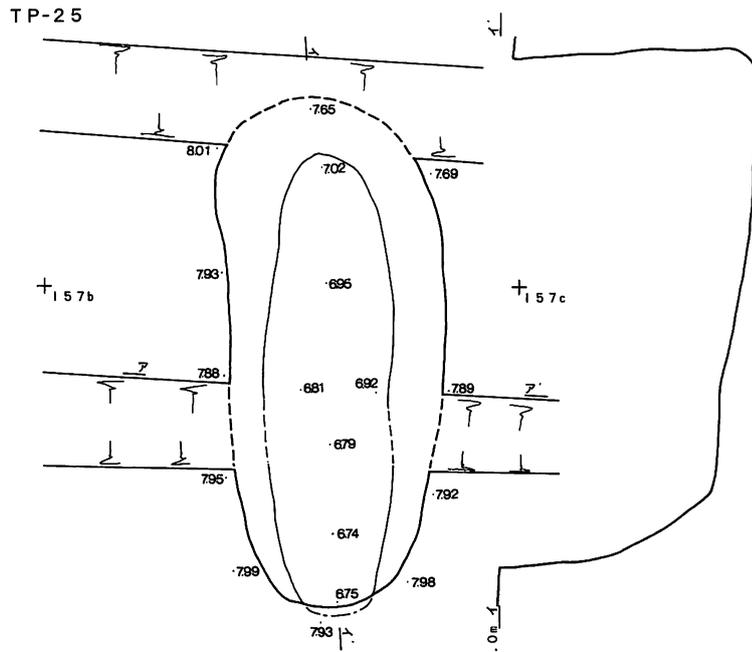


TP-24 土層註記

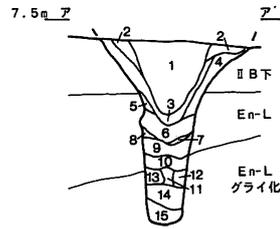
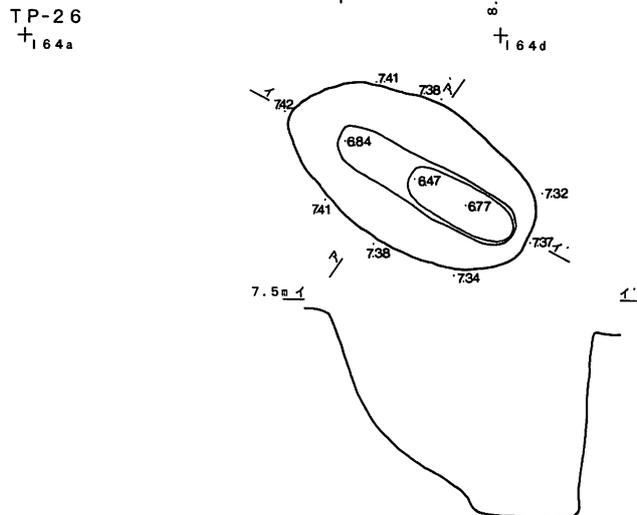
- 1 黒色土 (II B)
- 2 褐色土 (II B+En-L)
- 3 黒褐色土 (II B>En-L)
- 4 暗褐色土 (II B>En-L)
- 5 褐色土 (φ0.5~2.0cmのII BおよびEn-Lが斑状に混じる)
- 6 褐色土 (II B+En-L)
- 7 明黄褐色土 (II B, 遺構西壁の崩落部分がずり落ちる様にくずれたもの, ブロック状にEn-L崩落)
- 8 暗褐色土 (II B>En-L)
- 9 暗褐色土 (φ0.5~2.0cmのII BおよびEn-Lが斑状に混じる)
- 10 暗褐色土 (II B>En-L)
- 11 暗黄褐色土 (II B+En-L, En-Lがブロック状に崩落)
- 12 暗褐色土 (II B>En-L)
- 13 暗赤褐色土 (II B+En-L, 灰褐色砂層の崩落)
- 14 黒褐色土
- 15 明黄褐色土 (En-Lがブロック状に崩落, φ2.0cmのEn-Pを微量に含む, やや粘質)
- 16 黒褐色土 (II B>En-L)
- 17 暗褐色土 (II B>En-L, φ2.0cmのEn-Pを微量に含む)
- 18 暗赤褐色土 (II B>En-L, 鉄分入り込む)
- 19 暗赤褐色土 (II B>En-L, 砂質, 鉄分入り込む)
- 20 黒褐色土 (II B>En-L)

図VI-31 Tピット(6)

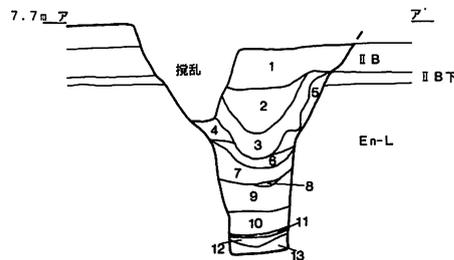
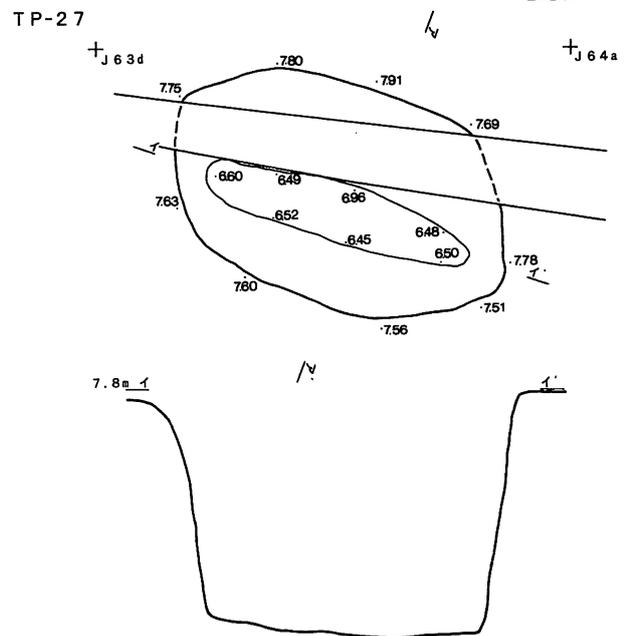
VI II 黒層の遺構とその遺物



- TP-25 土層註記
- 1 褐色土 (II B + En-L)
 - 2 褐色土 (II B + En-L)
 - 3 黒褐色土 (II B > En-L)
 - 4 暗乳褐色土 (En-L グライ化が崩落)
 - 5 暗褐色土 (II B > En-L グライ化, φ 5.0cm の En-L ブロックが混じる)
 - 6 暗灰色土 (II B + En-L グライ化)
 - 7 灰褐色土 (砂質)
 - 8 暗乳褐色土 (灰色味を帯び, φ 0.5~1.0cm の II B および En-L が斑状に混じる, 粘質)
 - 9 灰褐色砂質土
 - 10 明黄褐色土 (しまりなし)
 - 11 黄褐色土 (En-L 粒子による土)
 - 12 黄褐色土 (En-L グライ化が網状に入った En-L, 遺構西壁が倒れる様に崩落)
 - 13 12と14の間隙
 - 14 暗褐色土

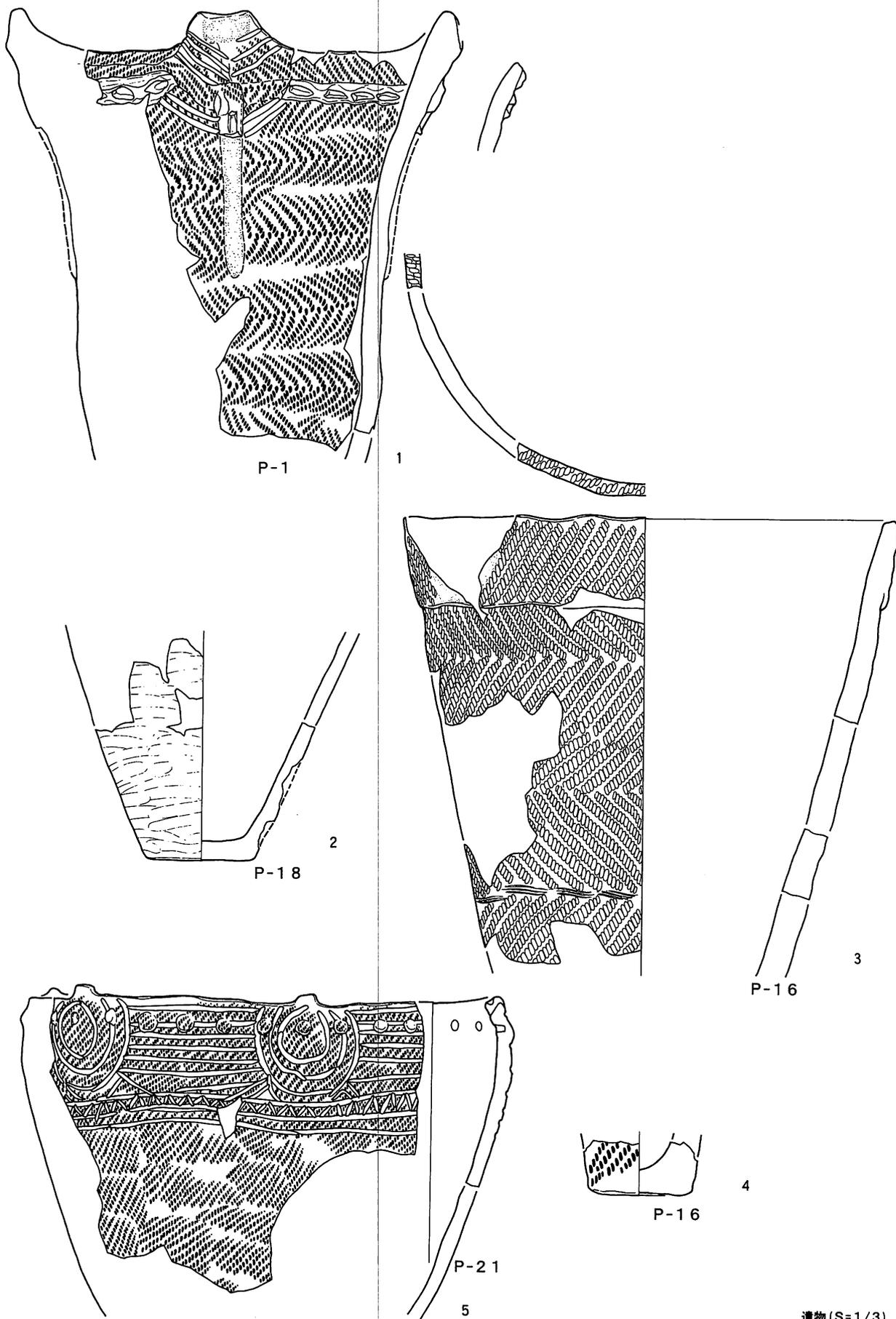


- TP-26 土層註記
- 1 黒色土 (II B)
 - 2 黒色土 (II B, 1よりやや褐色がかかる)
 - 3 黒褐色土 (II B > En-L)
 - 4 暗黄褐色土 (En-L > II B, En-L と II B の流入)
 - 5 暗黄褐色土 (En-L > II B, En-L の流入, 4よりやや黄味強し)
 - 6 暗褐色土 (II B + En-L)
 - 7 暗黄褐色土 (En-L > II B, En-L の崩落)
 - 8 暗黄褐色土 (En-L > II B, En-L の崩落, 7より黄味強し)
 - 9 黄褐色土 (En-L, En-L の崩落)
 - 10 黒褐色土 (II B > En-L)
 - 11 灰褐色土 (En-L 砂層)
 - 12 暗赤褐色土 (En-L > II B, En-L の崩落に鉄分混じる, 13より鉄分多し)
 - 13 暗赤褐色土 (En-L > II B, En-L の崩落に鉄分混じる)
 - 14 明黄褐色土 (En-L 砂層)



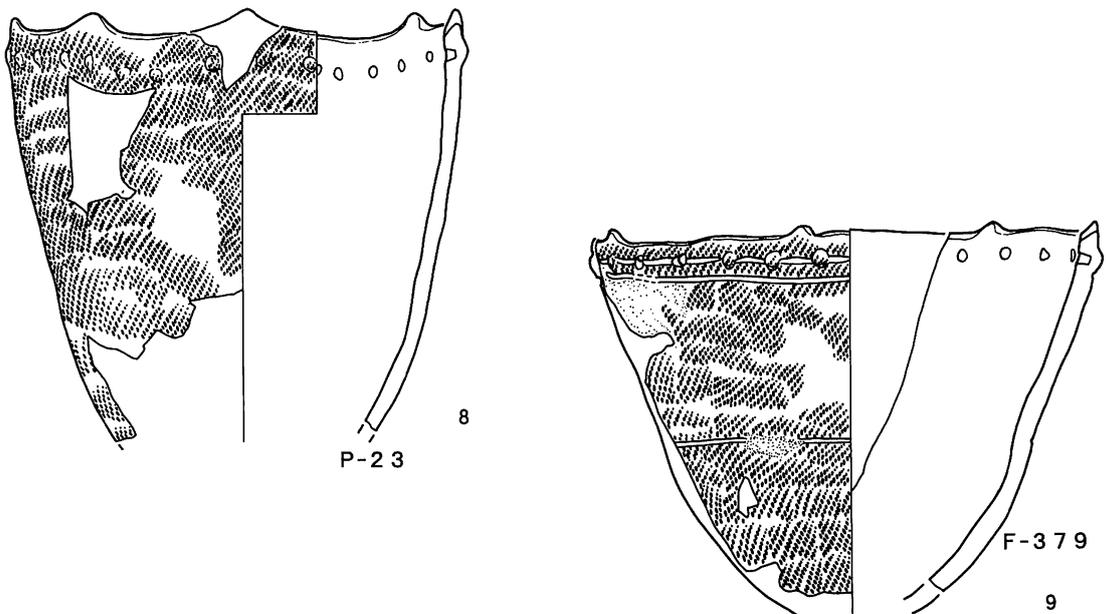
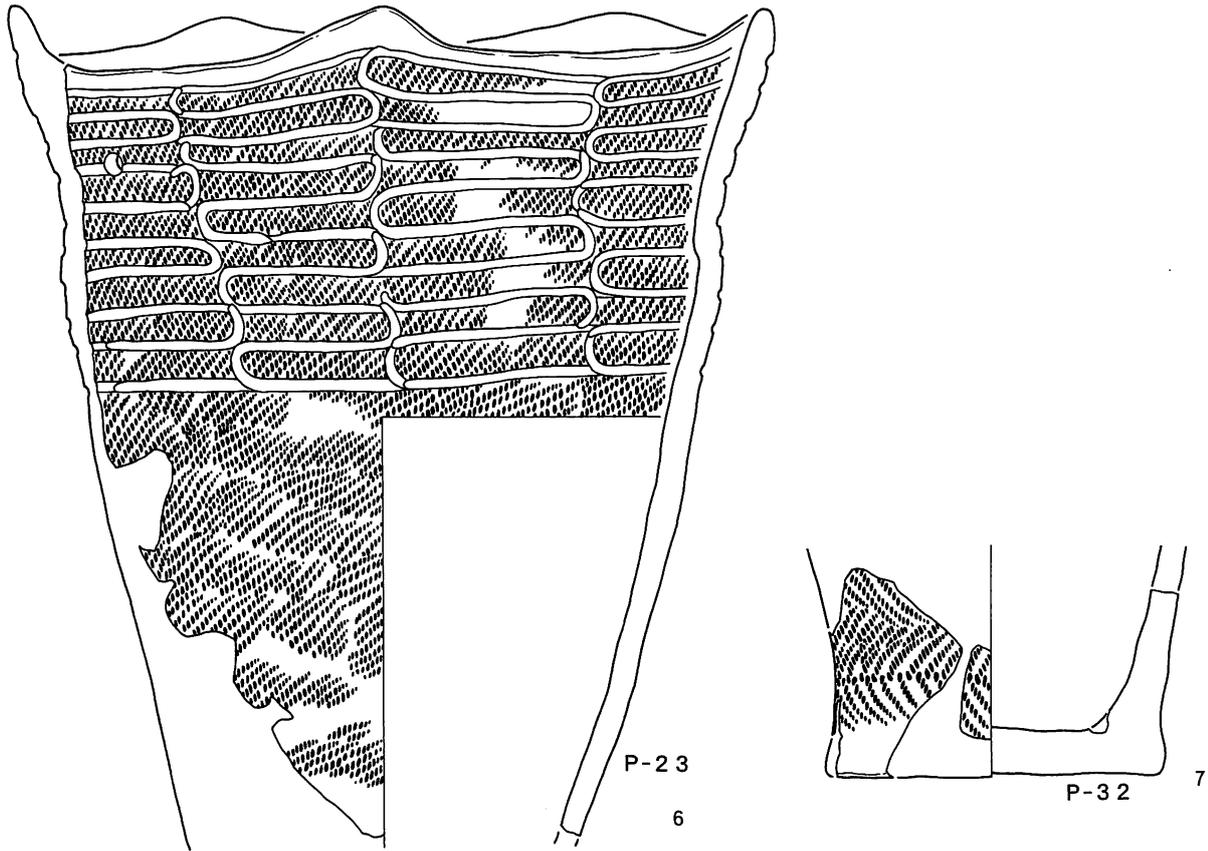
- TP-27 土層註記
- 1 黒色土 (I B, ややしまりあり)
 - 2 黒色土 (II B, ややしまりあり)
 - 3 黒褐色土 (II B > En-L, φ 0.5cm の En-P を含む)
 - 4 暗黄褐色土 (En-L > II B)
 - 5 黄褐色土 (En-L)
 - 6 暗褐色土 (II B > En-L, 3との間に φ 0.5~2.0cm の En-P が入り込む)
 - 7 黄褐色土 (En-L > II B)
 - 8 黒色土 (II B > En-L)
 - 9 黄褐色土 (En-L, φ 0.5~1.0cm の En-L を含む)
 - 10 黄褐色土 (砂質の En-L)
 - 11 黒色土 (腐蝕土の入り込み)
 - 12 10に同じ
 - 13 黒色土 (腐蝕土の入り込み)

図VI-32 Tピット(7)



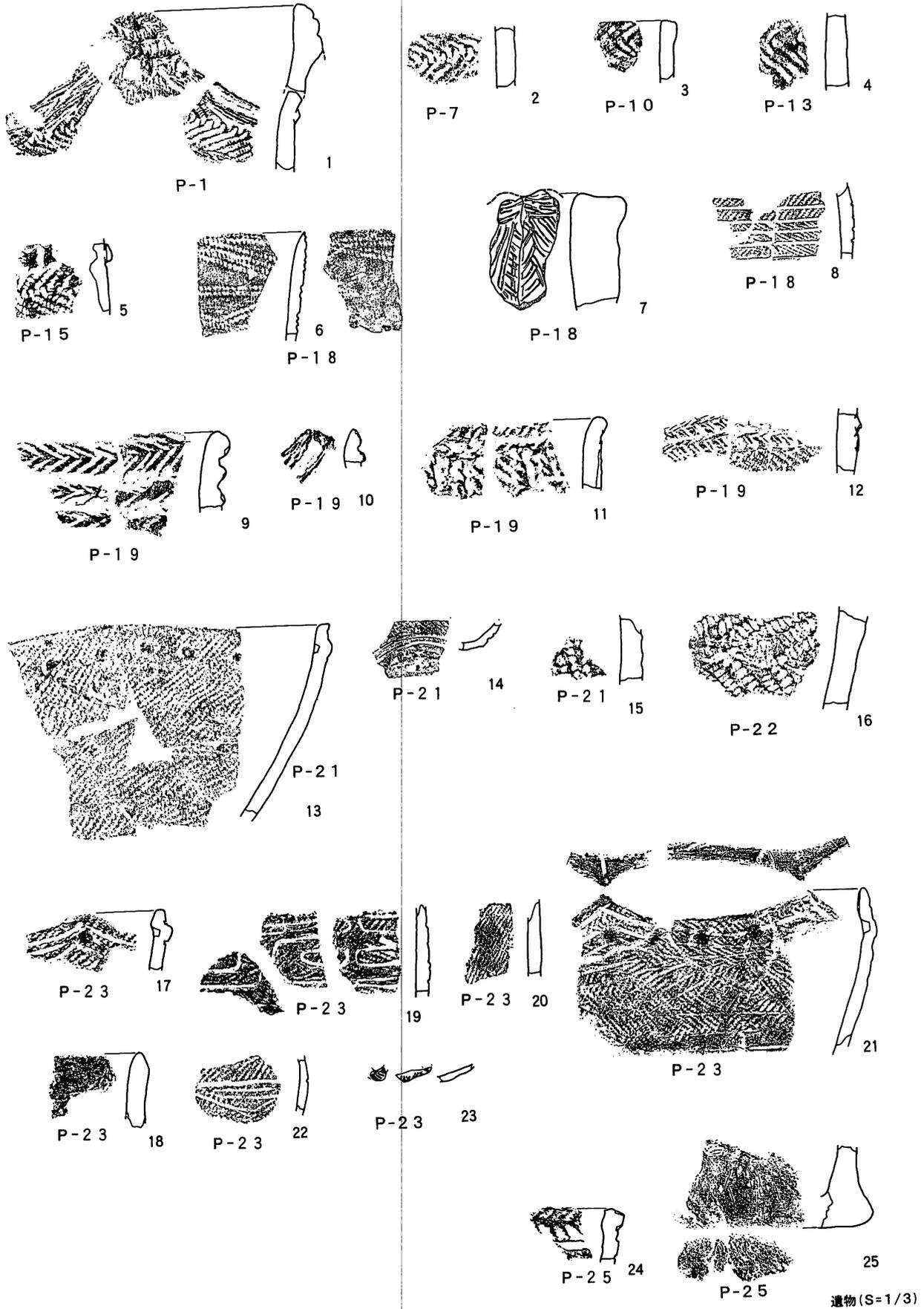
図VI-33 土壌の土器(1)

遺物(S=1/3)

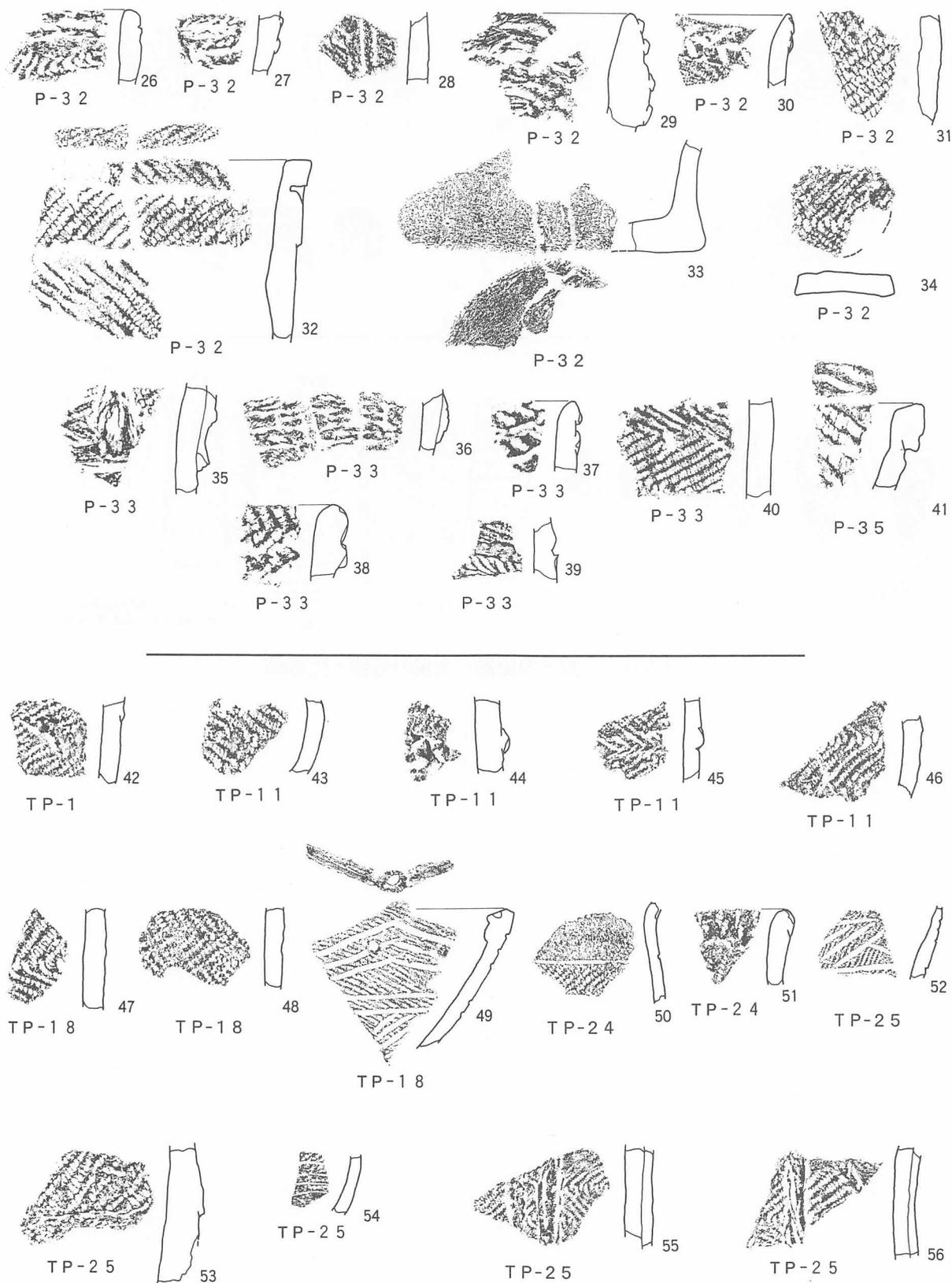


図VI-34 土壇の土器(2)

遺物(S=1/3)

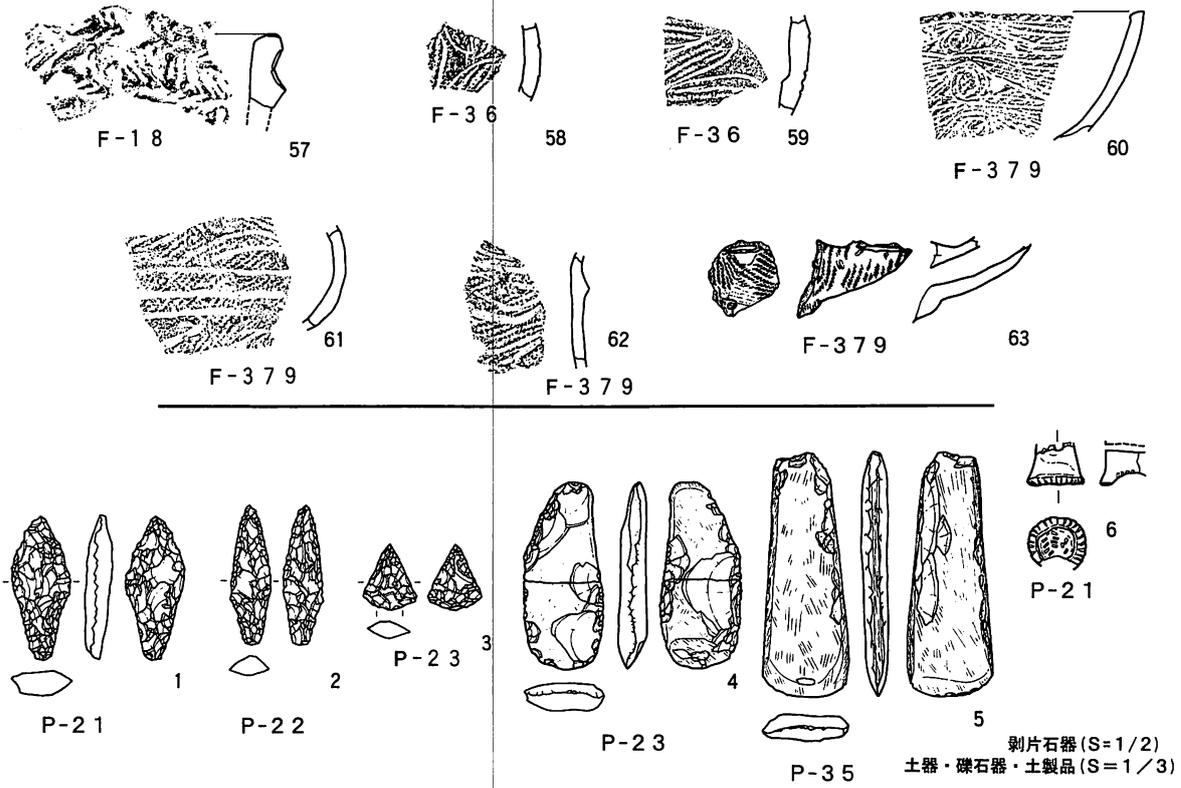


図VI-35 土器の土器(3)



図VI-36 土壌の土器(4) Tピットの土器

遺物(S=1/3)



図VI-37 焼土の土器、土壌の石器・土製品

表VI-1 土器掲載一覧

図番号	発掘区	遺構名	層位	分類
VI-12-1	C59 a	H-3	II B	IV c 堂林式
2	B58 c	H-3	II B	IV a 余市式
3	B58 c	H-3	II B	IV a 余市式
4	B58 c	H-3	覆土1・2層	IV a 余市式
5	B58 c	H-3	覆土1・2層	IV a 余市式
6	B58 c	H-3	覆土1・2層	IV a 余市式
VI-12-7	D61 a	H-4	床面	III a 萩ヶ岡1式
8	D61 a	H-4	床面	III a
9	D61 a	H-4	床面	III a
10	D61 a	H-4	床面	III a 萩ヶ岡1式
11	D61 a	H-4	床面	III a 萩ヶ岡1式
12	D61 a	H-4	床面	III a 萩ヶ岡1式
VI-12-13	D56 d	H-5	覆土1層	III a 萩ヶ岡1式
14	D56 a	H-5	床面	III
VI-13-15	D58 a	H-6	覆土上部	III
16	D58 d	H-6	覆土中部	IV a 余市式
17	D58 a	H-6	覆土中部	IV b 手稻式
18	D58 a	H-6	覆土中部	IV c 堂林式
19	D58 b	H-6	床面	IV c 堂林式
20	D58 b	H-6	覆土中部	IV c 堂林式
21	D58 b	H-6	床面	IV c 堂林式
VI-13-22	E59 a	H-7	覆土中部	IV a 余市式
23	E59 a	H-7	覆土中部	IV a 余市式

図番号	発掘区	遺構名	層位	分類
VI-13-24	E58 d	H-7	覆土中部	IV a 余市式
25	E58 d	H-7	覆土中部	IV a 余市式
VI-14-26	-----	H-8	覆土5層	IV c 堂林式
27	E58 c	H-8	覆土6層	IV c 堂林式
28	E58 c	H-8	覆土6層	IV b 手稻式
29	E58 a	H-8	覆土6層	IV b 手稻式
30	E58 b	H-8	覆土6層	IV c 堂林式
VI-14-31	-----	H-9	覆土5層上端	IV c 堂林式
32	D59 b	H-9	覆土5層上端	IV c 堂林式
33	E59 b	H-9	覆土5層中端	III a
34	E59 b	H-9	覆土5層中端	IV a 余市式
35	E59 a	H-9	床面	III
36	E59 a	H-9	床面	IV a 余市式
37	E59 b	H-9	床面	IV a 余市式
VI-15-38	J56 a	H-11	覆土1層	IV b 手稻式
39	J56 a	H-11	覆土1層	IV b 手稻式
40	J56 d	H-11	覆土3層	IV c 堂林式
41	J56 d	H-11	覆土3層	IV c 堂林式
42	J56 d	H-11	覆土1層	IV c 堂林式
43	J56 a	H-11	覆土1層	IV c 堂林式
44	J56 a	H-11	覆土1層	IV c 堂林式
45	J56 a	H-11	覆土1層	IV c 堂林式
VI-15-46	F58 a	H-12	覆土	IV c 堂林式

図番号	発掘区	遺構名	層位	分類
VI-35-1	B62 a	P-1	II B	III a 半截竹管
2	E63 d	P-7	覆土	III a
3	G60 c	P-10	覆土13層	III b-3
4	C61 b	P-13	覆土1上面	III a
5	C57 c	P-15	床直	III a 絡条体
6	H57 a	P-18	覆土1層	I b-4
7	H57 a	P-18	覆土1層	III a 半截竹管
8	H57 a	P-18	覆土1層	IV b 手稻式
9	G60 a	P-19	覆土1層	III a 刺突
10	G60 a	P-19	覆土1層	III a 半截竹管
11	G60 a	P-19	覆土1層	III a 半截竹管 押引き
12	G60 a	P-19	覆土1層	III a 短沈線
13	D58 d	P-21	覆土	IV c 堂林式
14	D58 d	P-21	覆土	IV c 堂林式
15	D59 b	P-22	覆土	IV a 余市式
16	D59 b	P-22	覆土上面	IV a 余市式
17	I55 c	P-23	覆土5層	IV c 堂林式
18	I55 c	P-23	覆土5層	III b-3
19	I55 c	P-23	覆土1上面	IV a 入江式
20	I55 c	P-23	覆土1上面	IV c 堂林式
21	I55 c	P-23	覆土1上面	IV c 堂林式
22	I55 c	P-23	覆土1上面	IV c 堂林式
23	I55 c	P-23	覆土1上面	IV c 堂林式
24	I59 b	P-25	覆土3層	III a 絡条体
25	I59 b	P-25	覆土3層	III a 底部
VI-36-26	I64 b	P-32	覆土2, 3, 4層	III a 爪
27	I64 b	P-32	覆土2, 3, 4層	III a 刺突
28	I64 b	P-32	覆土5, 6層	III a 半截竹管
29	I64 b	P-32	覆土2, 3, 4層	III a 半截竹管 押引き
30	I64 b	P-32	覆土2, 3, 4層	III a <の字に刻み
31	I64 b	P-32	覆土1層	IV a 余市式
32	I64 b	P-32	覆土1層	IV a 余市式
33	I64 b	P-32	覆土5, 6層	III a
34	I64 b	P-32	覆土1層	土製円盤 円形
35	I63 b	P-33	覆土3層	III a 爪
36	I63 b	P-33	覆土上面	III a 刺突
37	I63 b	P-33	覆土2層	III a 刺突

図番号	発掘区	遺構名	層位	分類
VI-36-38	I63 b	P-33	覆土2層	III a 絡条体
39	I63 b	P-33	覆土1層	III a 爪
40	I63 b	P-33	覆土	III
41	I61 c	P-35	覆土4層	IV a 余市式
42	E65 a	TP-1	覆土1層	III
43	J63 a	TP-11	覆土12層	III a
44	J63 a	TP-11	覆土1層	III a 爪
45	J63 a	TP-11	覆土1層	III a <の字に短沈線
46	J63 a	TP-11	覆土1層	III a
47	F58 b	TP-18	覆土1層	III
48	F58 b	TP-18	覆土1層	III
49	F58 b	TP-18	覆土1層	IV c 堂林式
50	I57 d	TP-24	覆土1層	IV c 堂林式
51	I57 d	TP-24	覆土1層	III a 絡条体
52	I57 a	TP-25	覆土2層	IV c
53	I57 a	TP-25	覆土2層	IV a 余市式
54	I57 a	TP-25	覆土8層	IV c 堂林式
55	I57 a	TP-25	覆土2層	III a 絡条体
56	I57 a	TP-25	覆土2層	III a 絡条体
VI-37-57	G59 b	F-18	焼土中	III a 沈線による加飾
58	G63 b	F-38	焼土上面	IV c 堂林式 注口土器
59	D58 c	F-38	I B	IV c 堂林式 注口土器
60	E58 a	F-379	覆土	IV c 堂林式 注口土器
61	G58 b	F-379	II B 前	IV c 堂林式 注口土器
62	H58 a	F-379	II B 前	IV c 堂林式 注口土器
63	H-8 覆土	F-379	II B 前	IV c 堂林式 注口土器
VI-37-6	D56 d	P-21	覆土1層	スタンプ形土製品
VI-33-1	B62 a	P-1	覆土中	III a 爪 数ヶ所2式 D61 a と接合
2	G60 a	P-18	床面直上	IV b 手稻式 I55 d, H57 a と接合
3	F57 a	P-16	覆土中	IV a 鉢式 F56 d, F57 a b と接合
4	F57 a	P-16	覆土中	IV a 余市式
5	D58 d	P-20	覆土中	IV c 堂林式 G58 d と接合
VI-34-6	I55 c	P-23	覆土9層	IV b 手稻式
7	I64 b	P-32	覆土中	III a 底部
8	I55 c	P-23	覆土1層	IV c 堂林式 J55 d と接合
9	D58 c	F-379	検出面	IV c 堂林式 H-8 覆土から出土

表VI-2 石器掲載一覧

図番号	遺構名	層位	分類	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
VI-16-1	H-6	覆土下部	石鏃	黒曜石	31.3	17.5	3.9	1.4	
VI-16-2	H-6	覆土下部	石槍	黒曜石	58.4	27.3	9.0	11.1	
VI-16-3	H-6	覆土下部	スクレイパー	黒曜石	43.4	38.4	7.5	15.4	
VI-16-4	H-6	覆土上部	石核	黒曜石	30.6	39.1	22.9	30.2	
VI-16-5	H-6	覆土上部	石核	黒曜石	25.8	47.8	18.1	21.8	
VI-16-6	H-6	覆土下部	石斧	泥岩	106.1	40.3	17.5	119.9	
VI-16-7	H-6	床面	石斧	泥岩	(88.3)	(44.4)	13.7	100.1	
VI-16-8	H-6	床面	石斧	泥岩	89.7	32.1	15.6	72.9	
VI-16-9	H-6	覆土下部	石斧	泥岩	89.7	32.1	15.6	72.9	
VI-16-10	H-6	覆土下部	たたき石	泥岩	140.0	68.0	68.0	498.9	
VI-16-11	H-7	覆土上部	石斧未製品	泥岩	96.7	48.9	15.0	106.6	
VI-16-12	H-7	床直上	台石	安山岩	137.0	83.0	45.0	711.9	
VI-17-13	H-8	覆土5層	石鏃	頁岩	30.3	15.7	4.3	1.7	
VI-17-14	H-8	覆土5層	石鏃	黒曜石	(14.3)	14.4	3.4	0.6	
VI-17-15	H-8	覆土6層	石槍(折れ)	黒曜石	23.8	18.3	(0.8)	2.6	
VI-17-16	H-8	覆土6層	石槍(折れ)	黒曜石	22.3	13.2	(9.4)	2.3	焼け
VI-17-17	H-8	覆土6層	石鏃	黒曜石	31.1	8.6	4.8	1.3	赤井川産
VI-17-18	H-8	覆土6層	楔形石器	黒曜石	21.7	22.8	11.2	5.8	焼け
VI-17-19	H-8	覆土6層	石斧未製品	閃緑岩	128.8	57.5	21.9	263.3	H-9・87と接合
VI-17-20	H-9	床面	石鏃	黒曜石	39.0	8.8	3.8	1.2	
VI-17-21	H-9	掘り上げ土	石鏃	黒曜石	39.0	8.8	3.8	0.8	
VI-17-22	H-9	覆土5層中	石鏃	黒曜石	41.8	17.8	4.7	2.7	
VI-17-23	H-9	掘り上げ土	石鏃	黒曜石	39.2	19.2	7.1	4.2	
VI-17-24	H-9	覆土5層中	石鏃	黒曜石	42.3	14.2	7.7	4.0	
VI-17-25	H-9	覆土	楔形石器	黒曜石	19.9	23.2	9.6	4.5	
VI-17-26	H-11	覆土3層	石槍・ナイフ	黒曜石	39.6	28.1	9.1	8.0	
VI-17-27	H-11	覆土1層	石斧	泥岩	(96.8)	33.5	15.0	58.6	
VI-17-28	H-11	覆土3層	たたき石	安山岩	126.5	58.7	43.3	455.7	
VI-17-29	H-11	覆土1層	砥石	砂岩	(65.0)	(135.0)	27.0	255.2	H-11・40と接合
VI-17-30	H-11	覆土1・2層	砥石	砂岩	(55.0)	(81.0)	16.0	88.3	
VI-17-31	H-11	覆土2層	平玉	かんざし岩	14.1	13.7	7.2	2.0	
VI-37-1	P-21	覆土1層	石槍	黒曜石	37.5	15.4	6.1	3.3	
VI-37-2	P-22	墳底	石鏃	黒曜石	36.4	9.7	4.9	1.5	
VI-37-3	P-23	覆土1層	石鏃	頁岩	(17.0)	13.7	4.5	0.8	
VI-37-4	P-23	覆土1層	石斧	泥岩	73.5	32.3	10.0	27.0	
VI-37-5	P-35	覆土1層	石斧	片岩	95.9	33.8	8.8	51.5	

表VI-3 焼土規模一覧

II B, 中, 上位面焼土	
焼土番号	長径×短径×厚さ(m)
F2	0.34×0.32×0.11
F16	0.79×0.23×0.12
F22	0.46×0.29×0.09
F31	0.23×0.17×0.06
F36	0.26×0.18×0.02
F64	(0.54)×0.48×0.07
F67	0.66×0.46×0.11
F81	0.22×0.18×0.03
F85	0.22×0.15×0.08
F378	0.34×0.2×0.1
F379	0.98×0.56×0.18

II B下焼土	
焼土番号	長径×短径×厚さ(m)
F3	0.38×0.18×0.04
F4	1.22×0.34×0.08
F5	0.29×0.12×0.02
F6	0.76×0.22×0.06
F18	0.48×0.33×0.09

焼土番号	長径×短径×厚さ(m)
F19	0.4×0.26×0.04
F32	0.63×0.52×0.09
F33	0.46×0.16×0.08
F40	0.86×0.64×0.17
F46	0.4×0.19×0.05
F47	0.62×0.22×0.08
F48	0.79×0.04×0.14
F50	0.94×0.74×0.1
F51	0.58×(0.22)×0.5
F53	0.83×0.49×0.07
F58	0.43×0.3×0.04
F59	0.64×0.36×0.12
F66	0.62×0.5×0.06
F70	0.68×(0.3)×0.11
F72	0.64×(0.31)×0.08
F73	0.62×0.32×0.06
F74	0.66×0.48×0.12
F83	0.34×0.22×0.09
F380	0.58×0.28×0.04
F381	0.69×0.44×0.07

表VI-4 遺構遺物集計表(1)

H-3		II B	1・2層	床直	合計
土器	III	4		1	5
	IIIa	1			1
	IIIb	2			2
	IV	2			2
	IVa	11	77		88
	IVb	1			1
	IVc	1			1
	V	2			2
	土器合計	24	77	1	102
	石器	U・F		1	
フレイク・チップ		1		1	2
石核		1			1
珪石製石製品				1	1
礫・礫片		34	1	1	36
有意な礫・礫片				1	1
石器合計		36	2	4	42

H-5		外	覆土1層	覆土2層	床	床直	合計
土器	III		2			2	4
	IVb	1					1
	不明		1				1
	土器合計	1	3			2	6
石器	R・F			1			1
	フレイク・チップ		1				1
	礫・礫片				3		3
	石器合計		1	1	3		5

H-4		I B	覆土	床直	床面	HP-10 1層	HP-10 1層	合計
土器	II		1					1
	III		22	15	1	1		39
	IIIa		5	8	2		1	16
	IIIb		1					1
	IIIb-3		1					1
	IVb		1					1
	不明		5	2		1		8
	土器合計		36	25	3	2	1	67
石器	R・F			1				1
	フレイク・チップ		10	6				16
	石斧片	1						1
	礫・礫片		2					2
	有意な礫・礫片		1					1
石器合計	1	13	7				21	

H-6		覆土	覆土上層	覆土中層	床直	合計
土器	III		4	1	2	7
	IIIa		3			3
	IIIb		1			1
	IV		2	5	5	12
	IVa			1		1
	IVb			2		2
	IVc		7	9	5	21
	V			1		1
	不明		1	1	2	4
	土器合計		18	20	14	52
石器	石鏃			1		1
	石槍・ナイフ		1	1		2
	石器			1		1
	R・F		1			1
	フレイク・チップ		5	2	5	12
	棒状原石		1			1
	石核		1			1
	石斧			3	1	4
	たたき石			1		1
	礫・礫片	1	8	3	9	21
有意な礫・礫片				1	1	
石器合計	1	17	12	16	46	

H-7		覆土上層	覆土中層	覆土	床直	合計	
土器	III		1		1	2	
	IIIa	1	1			2	
	IV	20				20	
	IVa	3	123	1	10	137	
	IVb		1			1	
	IVc	29				29	
	不明	53	19			72	
	土器合計	106	145	1	11	263	
	石器	R・F	1				1
		フレイク・チップ	14	23			37
石斧・未製品片		1				1	
石皿					1	1	
礫・礫片		36	66			102	
有意な礫・礫片		1				1	
石器合計	53	89		1	143		

5 Tピット

表VI-5 遺構遺物集計表(2)

H-8		覆土	5層	6層	床直	床	炉2焼土	合計	
土	Ⅲ	4	1	5				10	
	Ⅳ	6	23	20	1			50	
	Ⅳa	5	4	20	14			43	
	Ⅳb		1	17				18	
	Ⅳc	1	9	11				21	
	Ⅴ			1				1	
	不明	1	2	4				7	
	土器合計	17	40	78	15			150	
	石	石 鏃	1		1				2
		石 槍・ナイフ		1	1				2
石 鏟				1				1	
楔形石器				1				1	
フレイク・チップ		7	9	24	14	1	5	60	
原 石				1				1	
石 核				1				1	
石斧・未製品片				2				2	
石 斧 片		1		1				2	
軽石製石製品				1				1	
軽 石			5	2				7	
礫・礫片		62	43	190				295	
有意な礫・礫片				1				1	
石器合計		71	58	227	14	1	5	376	
その他	炭化材			3	1			4	
	ベンガラ		2		1			3	
	その他合計		2	3	2			7	

H-9		Ⅱ B	覆土	5層上部	6層中部	H-7覆土中	掘揚土	床直	合計	
土	Ⅲ				10			1	11	
	Ⅲa				2				2	
	Ⅳ	1		4	2	2			9	
	Ⅳa		2		6		1	2	11	
	Ⅳb			6					6	
	Ⅳc	5		1					6	
	Ⅴ			1					1	
	不明	1						27	28	
	土器合計	7	2	12	20		2	1	30	74
	石	石 鏃						1	1	2
石 槍・ナイフ					1		1		2	
楔形石器			1						1	
R・F								1	1	
フレイク・チップ		17	14	7	45	1	19	1	104	
石 斧 片					1		1		2	
石 鏟					1				1	
礫・礫片		24	132	35	139			64	394	
石器合計	41	147	42	187		1	22	67	507	

H-11		1層	2層	3層	床直	合計
土	Ⅲ	7				7
	Ⅳ	6		1		7
	Ⅳc	13		5		18
	不明	16				16
	土器合計	42		6		48
石	土製製品	1				1
	石 槍・ナイフ		1			1
	R・F	1		1		2
	フレイク・チップ	10		5	1	16
	石 斧	1				1
	たたき石			1		1
	石 皿		1			1
	砥 石	4				4
	石 製 品		1			1
	礫・礫片	21		8	1	30
有意な礫・礫片	1				1	
石器合計	38	3	15	2	58	

H-12		覆土	覆土1	覆土4	覆土5	床直	合計
土	Ⅲ			1			1
	Ⅴ	1					1
	不明		1			1	2
石器	土器合計	1	1	1		1	4
	石 核				1		1
	礫・礫片		4				4
石器合計		4		1		5	

表VI-6 遺構遺物集計表(3)

P-1		覆土
土	Ⅲ	11
	Ⅲa	31
器	土器合計	42

P-4		覆土	5
土器	Ⅲ	2	

P-7		Ⅱ	B	覆土
土器	Ⅲ	1		
石器	礫・礫片	1		

P-10		1層	5層	7層	8層	12層	13層	15層	合計
土	Ⅲ	2	1		1	1	1	1	7
	Ⅲa			1					1
	Ⅲb-3						1		1
器	土器合計	2	1	1	1	1	2	1	9

P-13		覆土	1
土器	Ⅲ	1	

P-15		2層	壇	底	合計
土	Ⅲ	4			4
	Ⅲa			1	1
器	土器合計	4		1	5
石器	礫・礫片	1			1

P-16		覆土上	覆土中	覆土下	ナシ	合計
土	Ⅲ	1				1
	Ⅳa	1	19	57	3	80
器	土器合計	2	19	57	3	81
石器	礫・礫片	1	1	3		5

P-18		覆土1層	覆土2層	覆土3層	床直	合計
土	Ⅰ	1				1
	Ⅲ	2		1		3
	Ⅲa	1				1
	Ⅳ	1		1		2
	Ⅳb	4			1	5
	Ⅴ	1				1
	不 明	1				1
器	土器合計	11		2	1	14
石	たたき石	1				1
	礫・礫片	8	4			12
器	石器合計	9	4			13

P-19		覆土1層
土	Ⅲ	47
	Ⅲa	5
	不 明	4
器	土器合計	56
石器	礫・礫片	1

P-20		覆土
石	フレイク・チップ	14
	礫・礫片	1
器	石器合計	15

P-21		覆土	壇	底	合計	
土	Ⅲ	14			14	
	Ⅳ	6			6	
	Ⅳa	17			17	
	Ⅳc	15			15	
	器	土製品	1			1
器	不 明	1			1	
	土器合計	54			54	
	石	石槍・ナイフ	1			1
		R・F	1			1
フレイク・チップ		11	7		18	
器	石核	1			1	
	原石	14	7		21	
	礫・礫片	11	5		16	
器	石器合計	39	19		58	

P-22		1層	2層	3層	床直	合計
土	Ⅲ	2	1			3
	Ⅳa	1				1
器	土器合計	3	1			4
石	石 鏃				1	1
	フレイク・チップ	12	21		8	41
	礫・礫片	14	12	2	2	30
器	石器合計	26	33	2	11	72

P-24		覆土
土	Ⅲa	2
	Ⅳb	1
器	土器合計	3
石器	磨石	1

P-23		1層上面	覆土1	覆土3	覆土5	覆土8	覆土9	合計
土	Ⅲ				2		1	3
	Ⅲa		1					1
	Ⅳ	18			2		1	21
	Ⅳa	1		7			1	9
	器	Ⅳc	40	37		2		
石	不 明	18	9		1			28
	土器合計	77	47	7	7		3	141
	石 鏃	1						1
	石器	3						3
	フレイク・チップ	17		1	2			20
	石 斧 ミ ニ	1						1
	原石	2						2
	礫・礫片	44		12	7	8	15	86
	有意な礫・礫片	1	22					23
	器	石器合計	69	22	13	9	8	15

P-25		覆土	覆土1	覆土2	覆土3	壇	底	合計
土	Ⅲ		1	16	54	20		91
	Ⅲa		1	5	24			30
	Ⅲb				4			4
	器	Ⅲb-3	1		6	3		10
器	不 明		3	4	18	2		27
	石器合計	1	5	31	103	22		162
石	フレイク・チップ		2	3	3			8
	礫・礫片			1	1	1		3
器	石器合計		2	4	4	1		11

5 Tピット

表VI-7 遺構遺物集計表(4)

P-32		覆土1	覆土2・3・4	覆土3	覆土5・6	床直	壁	不明	合計
土	Ⅲ	17	68		39	3	5	2	134
	Ⅲa	2	27		13	1		1	44
	Ⅲb					1			1
	Ⅳ							1	1
	Ⅳa	9	1					2	12
器	不明	11	46		19	5			81
	土器合計	39	142		71	10	5	6	273
石	石 鏃		1		1				2
	フレイク・チップ	1	4		1				6
	軽石製石製品					1		1	2
	礫・礫片	15	35	2	3	6	2	1	64
	石器合計	16	40	2	5	7	2	2	74
その他	スミ					1			1

P-33		覆土上面	覆土	覆土1	覆土2	覆土3	覆土4	覆土5	床	不明	合計
土	Ⅲ	5	3	10	16		9		1	3	47
	Ⅲa	2		1	1			1			5
	不明			2	2				1		8
器	土器合計	7	3	13	19		9	1	2	3	60
石器	礫・礫片			1			3		1		5
その他	クルミ		1								1

P-35		覆土1	覆土4	合計
土器	Ⅳa		1	1
石	石 斧	1		1
	石 斧 片	1		1
器	石器合計	2		2

TP-1		1 層
土器	Ⅲa	2
石器	礫・礫片	175

TP-2		1 層
土器	Ⅲa	9
石器	礫・礫片	67

TP-9		覆土
石器	礫・礫片	2

TP-11		覆土1	覆土12	合計
土	Ⅲ	2	1	3
	Ⅲa	4		4
器	土器合計	6	1	7
石器	礫・礫片	2		2

TP-15		覆土
石器	礫・礫片	1

TP-18		I 層	I層南半分	8 層	合計
土	Ⅲ	10	19	2	31
	Ⅲa	1	3		4
	Ⅳc	1			1
器	土器合計	12	22	2	36
石器	礫・礫片	8	4		12

F-36		焼土検出面
土器	Ⅳc	2

F-379		焼土検出面
土器	Ⅳc	32

F-18		焼土中
土器	Ⅲa	1

TP-20		覆土1
土器	Ⅲb-3	1

TP-24		1 層	覆土1層	機 乱	合計
土	Ⅲa	1			1
	Ⅳb		1		1
器	土器合計	1	1		2
石器	フレイク・チップ		1	1	2

TP-25		覆土	覆土1層	覆土2層	覆土7層	覆土8層	合計
土	Ⅲ	1		1	7		9
	Ⅲa			2			2
	Ⅳa			7			7
	Ⅳb		2	2			4
	Ⅳc					1	1
器	土器合計	1	2	12	7	1	23
石	フレイク・チップ		1	4			5
	台 石		1				1
	石 核			1			1
	礫・礫片		2				2
器	石器合計		4	5			9

F-48		焼土上
土器	Ⅲ	1

F-53		ⅡB上面
石器	フレイク・チップ	39

F-66		焼土中
土器	Ⅲ	1

F-74		焼土
土器	Ⅲ	1
石器	フレイク・チップ	2

VII 低湿部包含層の遺物

1 概要

報告する低湿部の範囲は、図Ⅶ-1のごとく東側・西側・南側にある。東側と南側は、一連のものでオサツ川の旧流に、西側は旧ユカンボシ川の右岸に位置する低湿部である。報告はⅠ黒層の土器・石器、Ⅱ黒層の土器・石器と、木製品に分けて行うこととしたので、ここでは低湿部を別に整理しておきたい。

東側では、擦文土器が少量、続縄文時代後葉の土器がF-1周辺を中心に300点ほど出土している。縄文土器は、中・後・晩各期の土器が出土しており、なかでは中期前半と中葉、晩期前・中葉の土器が目立つ。石器はスクレイパー類・石斧等が少数出土しているのみである。Ⅱ黒層の遺物は西側低湿部と較べると少量で、台地部の遺構の時期とも重なるものが少ない。

西側では、擦文文化期後期の復元土器一個体を除くと擦文・続縄文の土器の出土はごくわずかで、大半が縄文中・後・晩各期の土器である。中・後期は晩期ほどの点数ではないが、なかではそれぞれその前半の土器が多い。Ⅱ黒層の土器は、東側低湿部に比してはるかに多い。石器も石鏃・石錐・スクレイパー類・石斧・たたき石・砥石・石錘など器種、数ともに東よりも多い。

木製品は、舟関係・狩猟漁撈具・容器・串類・杭や柱等の建材のほか、花矢・制裁棒・漆器・下駄も出土している。他には抉りや有孔の加工材や板材・割材・枝材・丸木材や樹皮などで、合計約300点を製品や加工材料としてとらえることができた。東側と南側は、Ⅰ黒層とⅡ黒層に数点あった以外は、Ⅰ黒層で約150点。その中であって、南側の出土数は、非常に少ない。西側はⅠ黒層は確認できず、Ⅰ黒層で約150点、Ⅱ黒層で数点の出土で、木製品でみると、両低湿部は同程度の遺物包蔵状態であった。(三浦)

2 Ⅰ黒層の土器・石器

(1) 土器 (図Ⅶ-2~10、表Ⅶ-1・2、図版Ⅶ-10・11)

Ⅶ群はおもにⅠB3層以上で出土し、Ⅵ群はおもにⅠB4層以下で出土する。

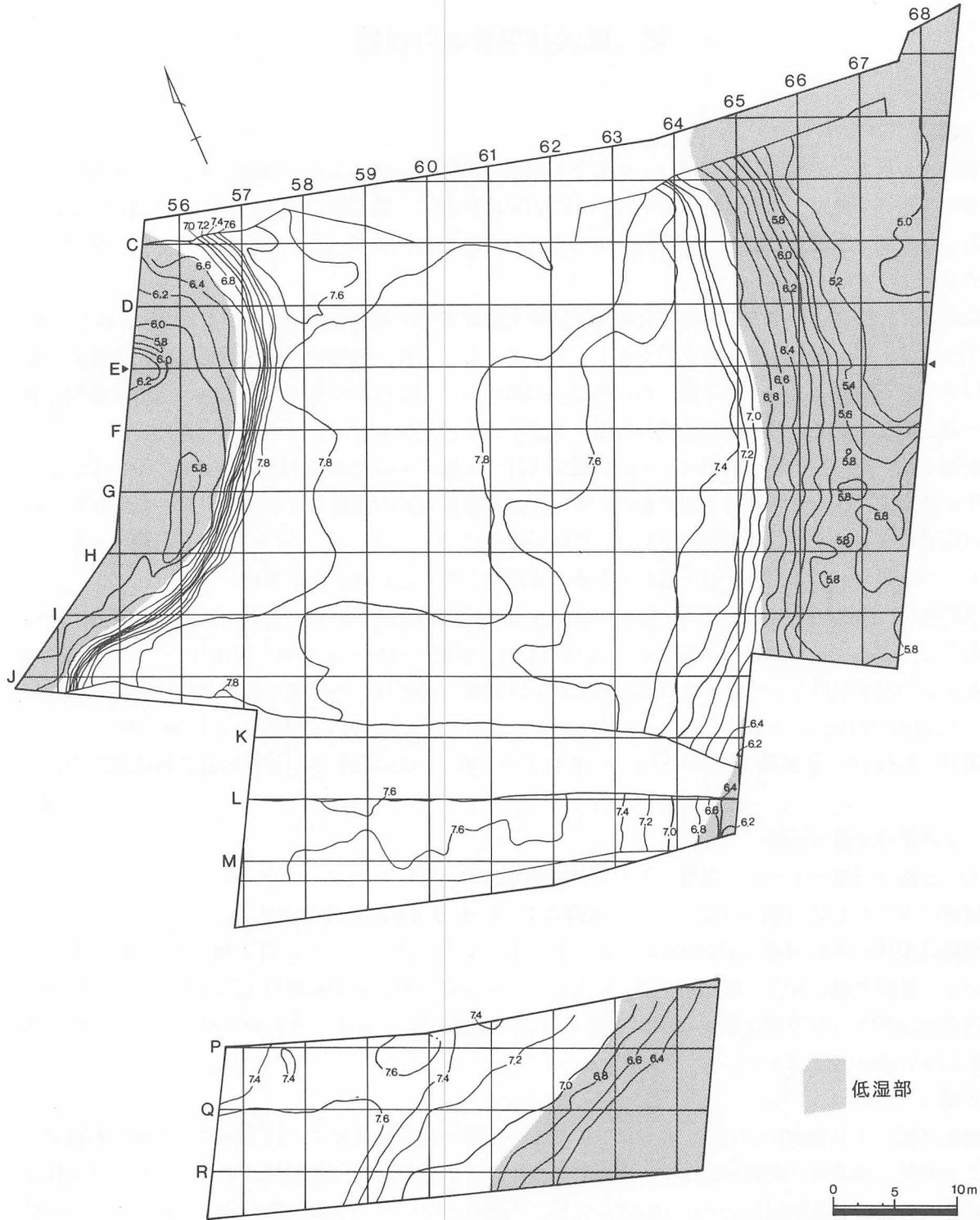
東側低湿部からはⅥ群土器が304点、Ⅵb類土器が35点出土しており、Ⅵc類土器が246点出土している。Ⅶ群土器が8点、Ⅶb類土器が1点出土している。擦文前中後期の土器は出土していない。

西側低湿部からはⅥ群土器が3点出土している。Ⅶ群土器が146点、Ⅶb類土器が1点出土し、Ⅶd類土器が146点出土している。

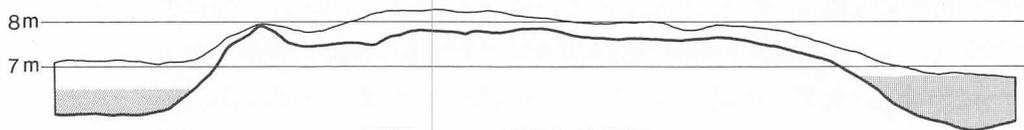
Ⅵb群

後北A式：1は深鉢の口縁部、外面はRL横走→ナデ→横位隆起線文・刺突→垂下する隆起線文・刺突→頸部文様帯内に刺突→斜線文、内面はヨコナデ。外面には炭化物が付着する。2・3は深鉢の口縁部、外面は横位隆起線文→隆起線間に刺突、内面はヨコナデ。7は深鉢の頸部、外面はナデ→横位隆起線文・刺突→隆起線わきに刺突、内面はヨコナデ。

後北B式：4は深鉢の口縁部、外面はRL横走→ナデ→横位隆起線文・刺突→頸部文様帯内に刺突、内面はヨコナデ。5は深鉢の口縁部で全体に摩滅している。外面はRL横走→ナデ→横位隆起線文・刺突→頸部文様帯内に刺突、内面はヨコナデ。6は深鉢の口縁部、外面はナデ→横位隆起線文・刺突→頸部文様帯内に隆起線文・刺突、内面はヨコナデ。8は深鉢の頸部で全体に摩滅している。外面はナデ→隆起線文・刺突、内面はヨコナデ。9は深鉢の胴部、外面はRL縦走→頸部文様帯内に刺突、内面はヨコナデ。10は深鉢の頸部、外面はRL横走→ナデ→頸部文様帯内に刺突→押引文、



・コンターは、最終面(E n-L 上面)での測量



図VII-1 低湿部範囲図

内面はヨコナデ、周囲を円盤状に打ち欠く。

VI c 群

後北 C₂・D 式：11は深鉢の口縁～頸部、外面はナデ→RL 帯状→弱いナデ→弧形の微隆起線文→刺突、内面はヨコナデ。内面に炭化物が付着する。12は深鉢の頸部、外面はナデ→RL 帯状→弱いナデ→弧形の微隆起線文→刺突、内面は摩滅している。14は口縁は端面を形成するくらいに肥厚気味である。口縁端面が内傾する。刻みのある微隆起線文がない。底部はいくぶん楕円形になっている。図の左側の体部上半が内傾し、上面観は口縁が弧を描かず尖っていることから注口が付くと思われる。後北 C₂・D 式末期に当たる。15は口縁部の上面観が四角形で4か所の平縁に小突起をもつ。胴部上半は直線的で頸部にくびれはない。口縁部断面形が方形で口縁端面がやや水平。後北 C₂・D 式末期の時期にあたる。

北大 I 式：13は胴下半～底部、外面はナデ→RL 帯状（V字のモチーフ）→刺突、内面は摩滅している。16は胴部上半は直線的で頸部にくびれはなく、胴部下半は内湾気味にたちあがる。口縁部断面形が方形で口縁端面がやや外傾する。口縁部に微隆起線文をもつが円形刺突文はない。17はミニチュアの鉢胴部が内湾気味にたちあがり、口縁部断面形が方形で口縁端面がやや外傾する。北大 I 式の古い時期にあたる。

VI e 類：18は内面はヨコナデ→タテナデ、外面はタテケズリ。胴部下半が内湾気味にたちあがり、底部はやや横に張り出す。

VII 群

VII d 類：19は口縁部が直線的に外反し立ち上がる。貼付帯に馬蹄形圧痕文をもつ。VIII-4-44より更に頸部が退化している。文様によって口縁部と頸部と胴部が区別できるに過ぎない。

(2) 復原個体の接合関係と分布について（図VII-4・5）

後北 C₂・D 式の深鉢（2-14）は E 61 a に離れて接合関係を持つ。無文の深鉢（4-15）は北大 I 式の深鉢（4-16）と接合関係が重複するがより広く分散している。

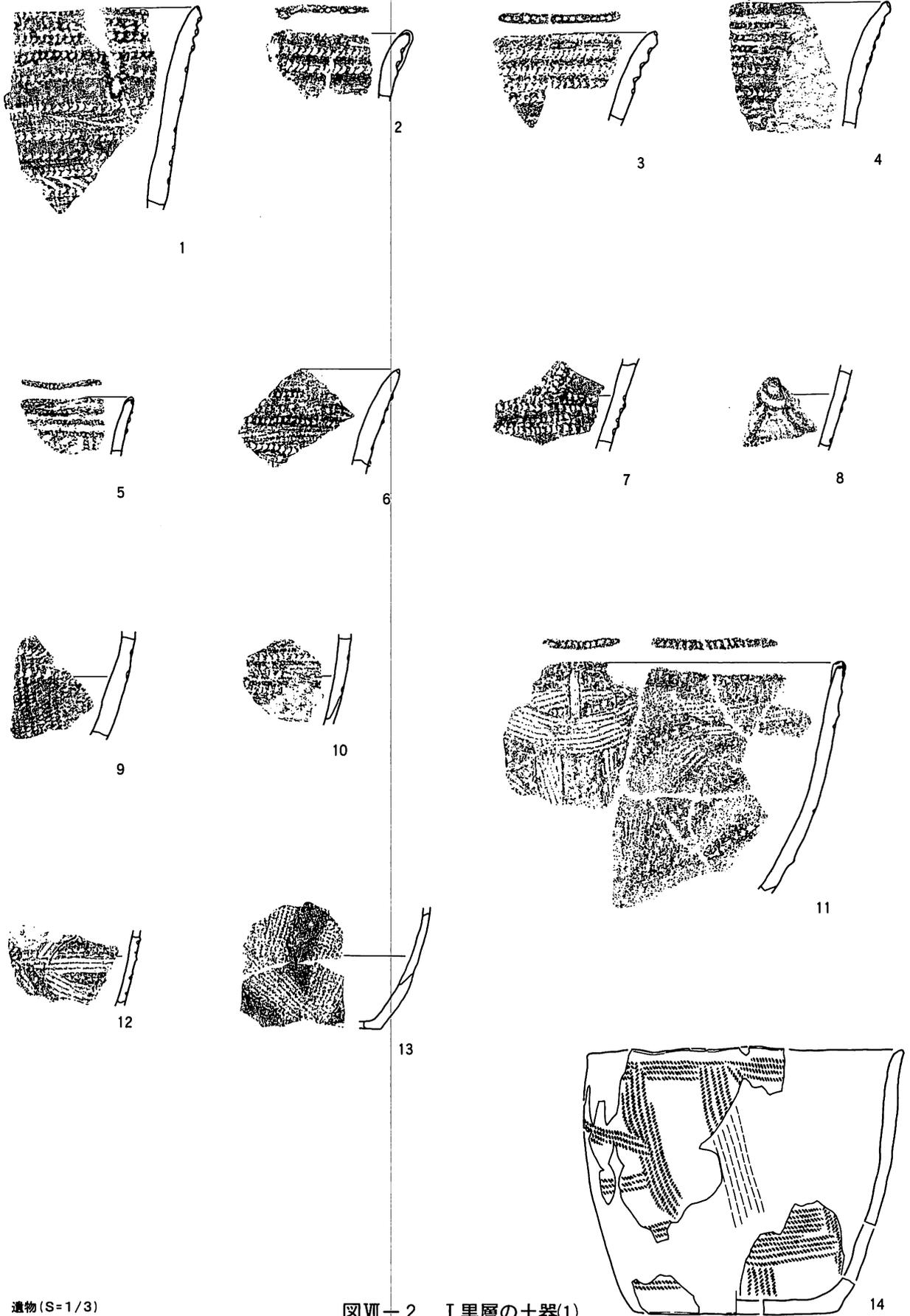
北大 I 式の深鉢（4-16）は F-1 の東側と I 66 a に分布し、北大 I 式の深鉢（図V-25-12）の接合関係と重複する。

北大 I 式の深鉢（4-16）、F-1 の深鉢（図V-25-12・13）は一群の土器集中と考えられ、一括性が強い。また、F-78（図V-26-18）の深鉢も同じ斜面の南西側に続いて分布していることから同じ時期ととらえてよい。

土器破片の分布の特徴は、西側低湿部（旧ユカンボシ川）よりも東側低湿部（旧オサツ沼）に多く出土している。このことは、河川口に面している立地よりも沼に面している立地を活動の中心としていることがうかがえる。

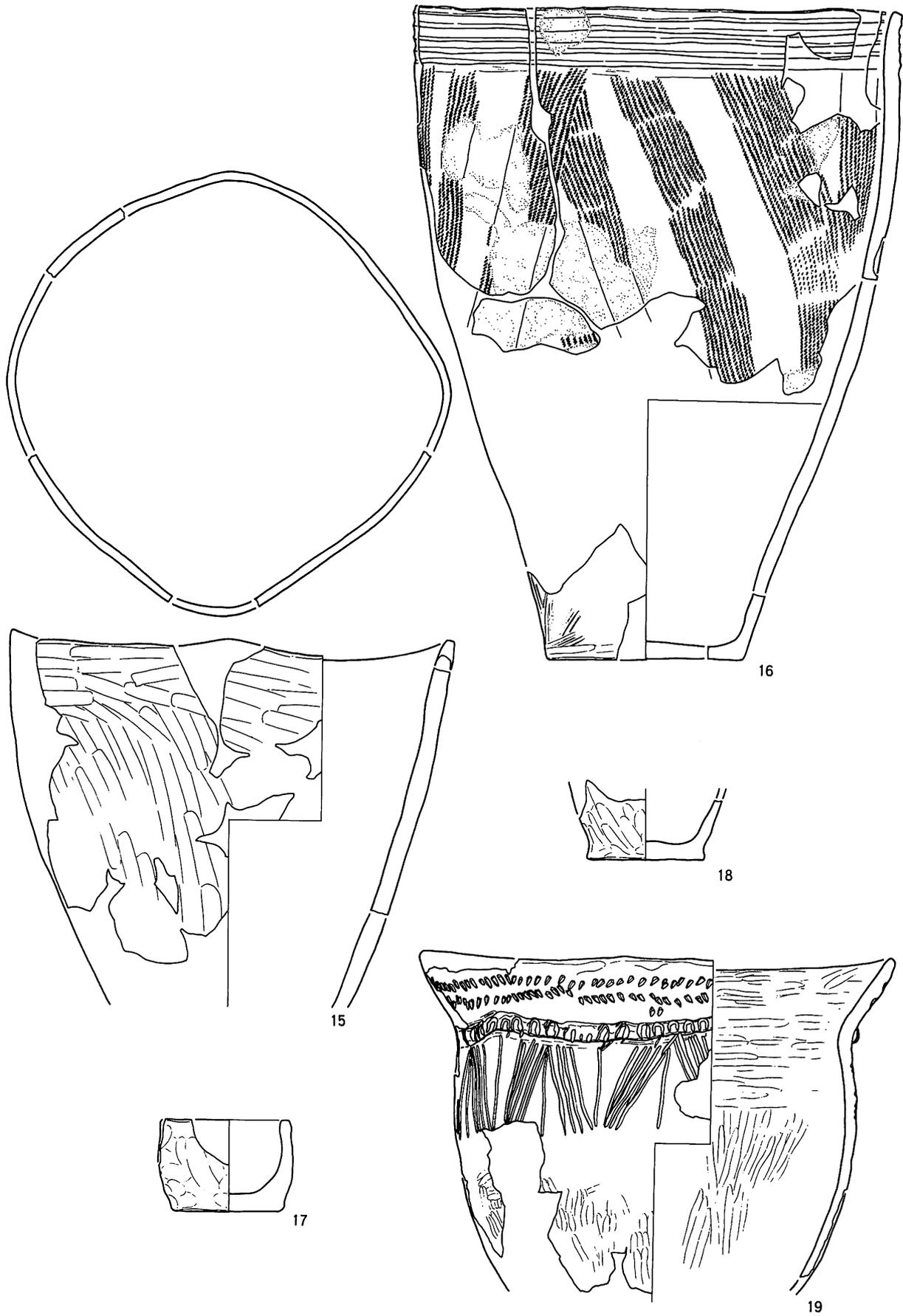
上述に傾向は縄文時代後葉に顕著である。後北 C₂・D 式は東側低湿部斜面の北東寄りの標高7.5m前後に分布している。北大 I 式は東側低湿部斜面の南東寄りの標高7.0m以下の一段低い斜面裾部に分布している。F-1 の標高は約6.7mである。北大 I 式期の頃には活動域が低い部分にあったといえる。

（鈴木）



遺物(S=1/3)

図VII-2 I 黒層の土器(1)

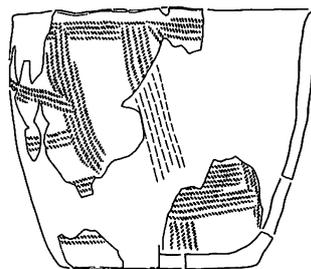
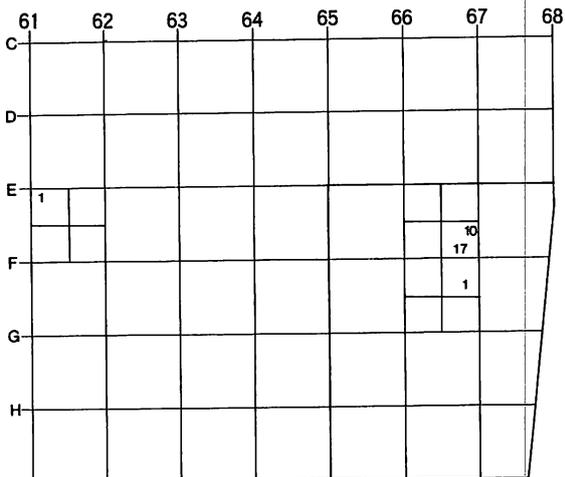


図Ⅶ-3 I 黒層の土器(2)

遺物(S=1/3)

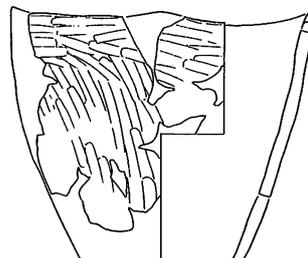
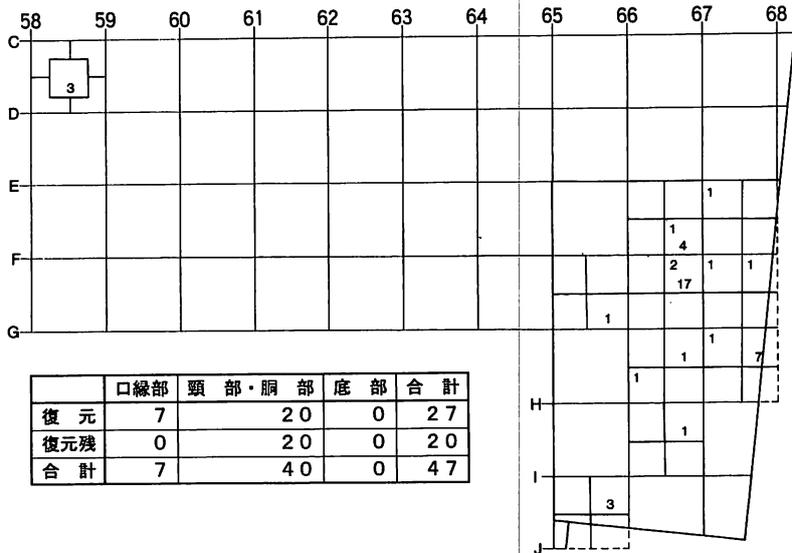
2 I 黒層の土器・石器

VII-2-14



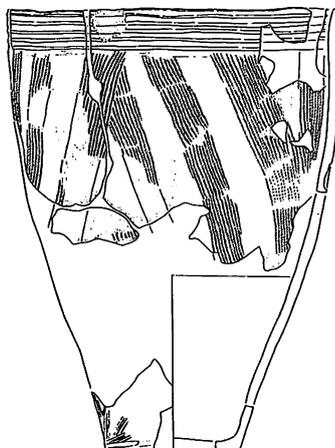
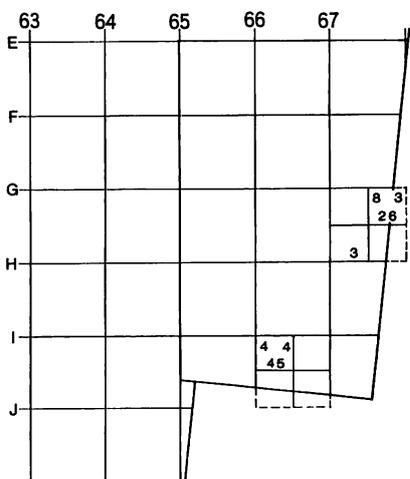
	口縁部	頸部・胴部	底部	合計
復元	1	7	7	15
復元残	0	11	3	14
合計	1	18	10	29

VII-3-15



	口縁部	頸部・胴部	底部	合計
復元	7	20	0	27
復元残	0	20	0	20
合計	7	40	0	47

VII-3-16

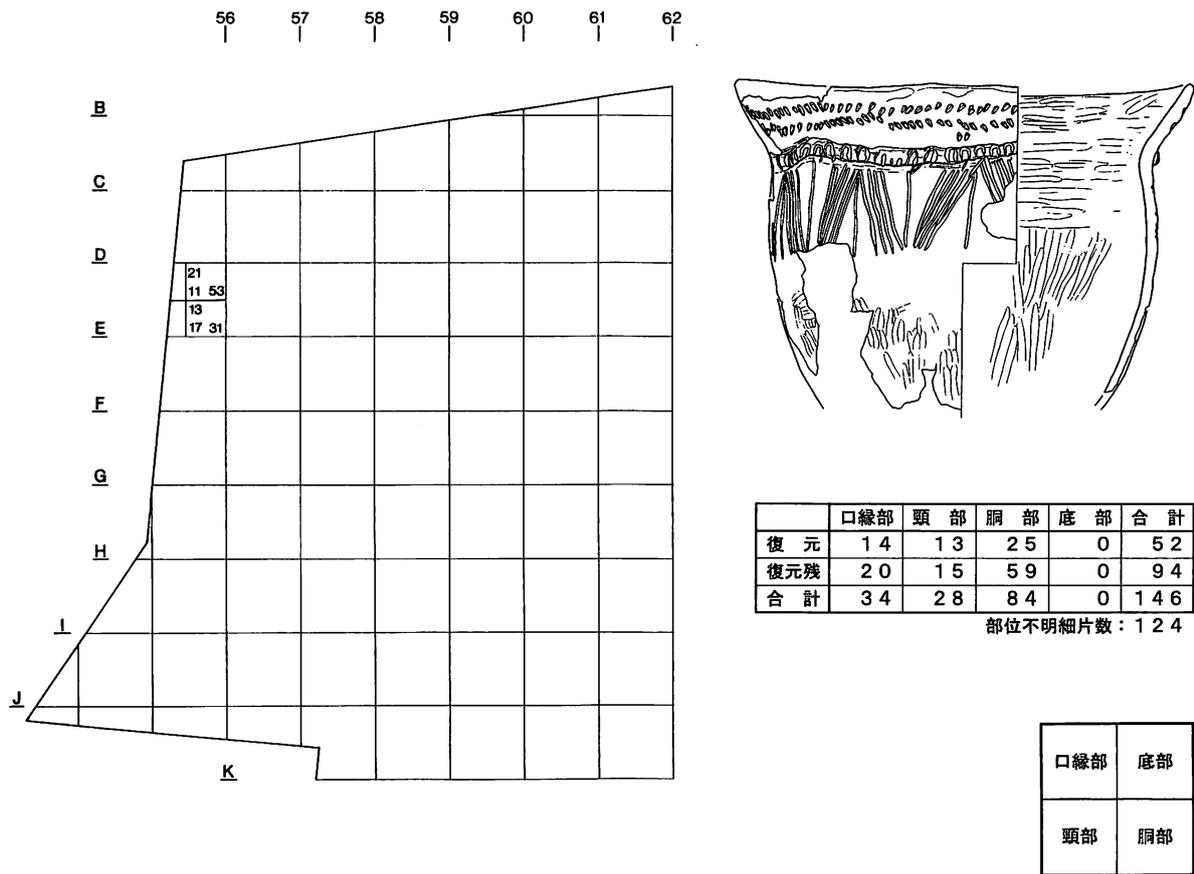


	口縁部	頸部・胴部	底部	合計
復元	14	84	7	105
復元残	0	0	0	0
合計	14	84	7	105

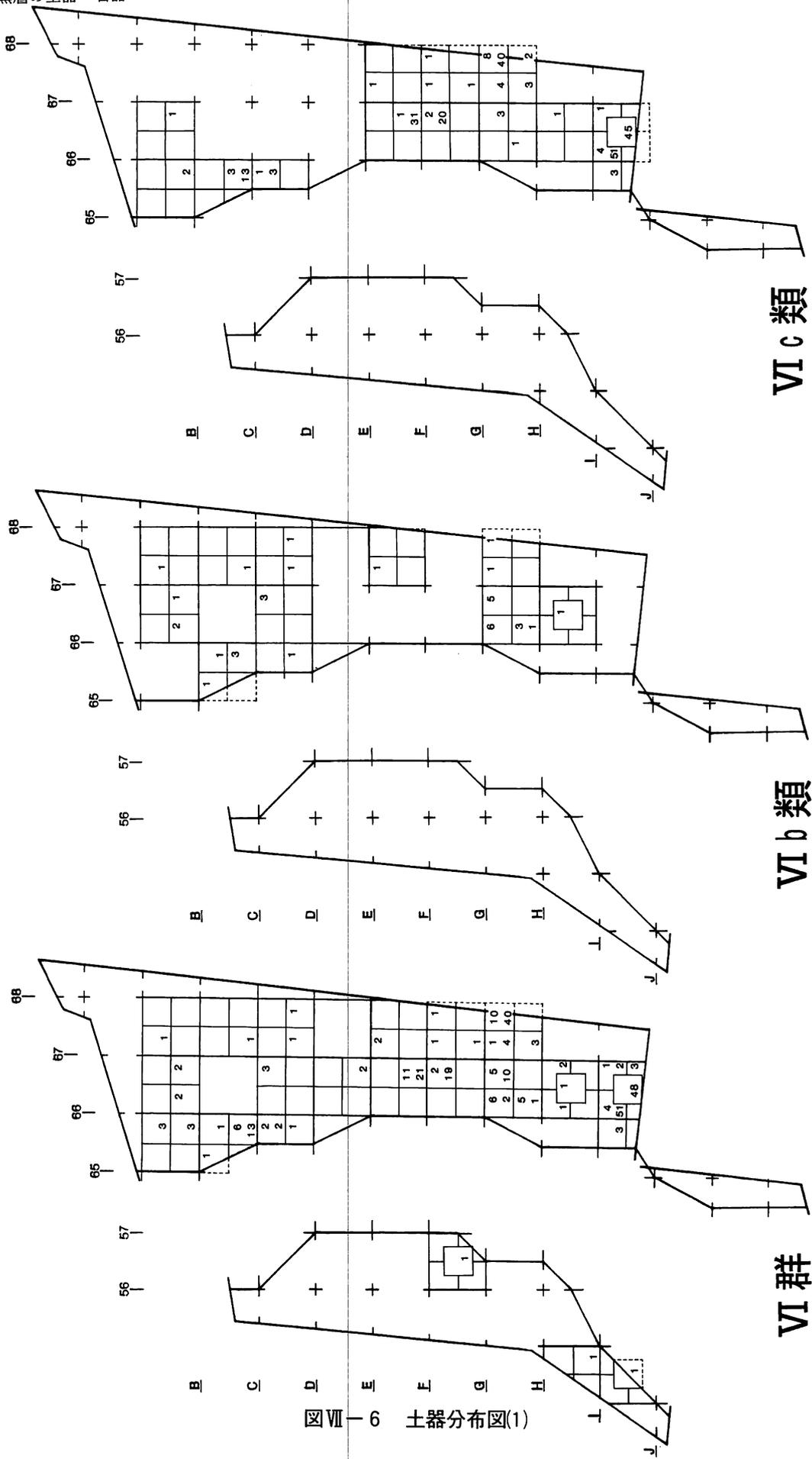
口縁部	底部
頸部・胴部	

図VII-4 I 黒層の土器接合図(1)

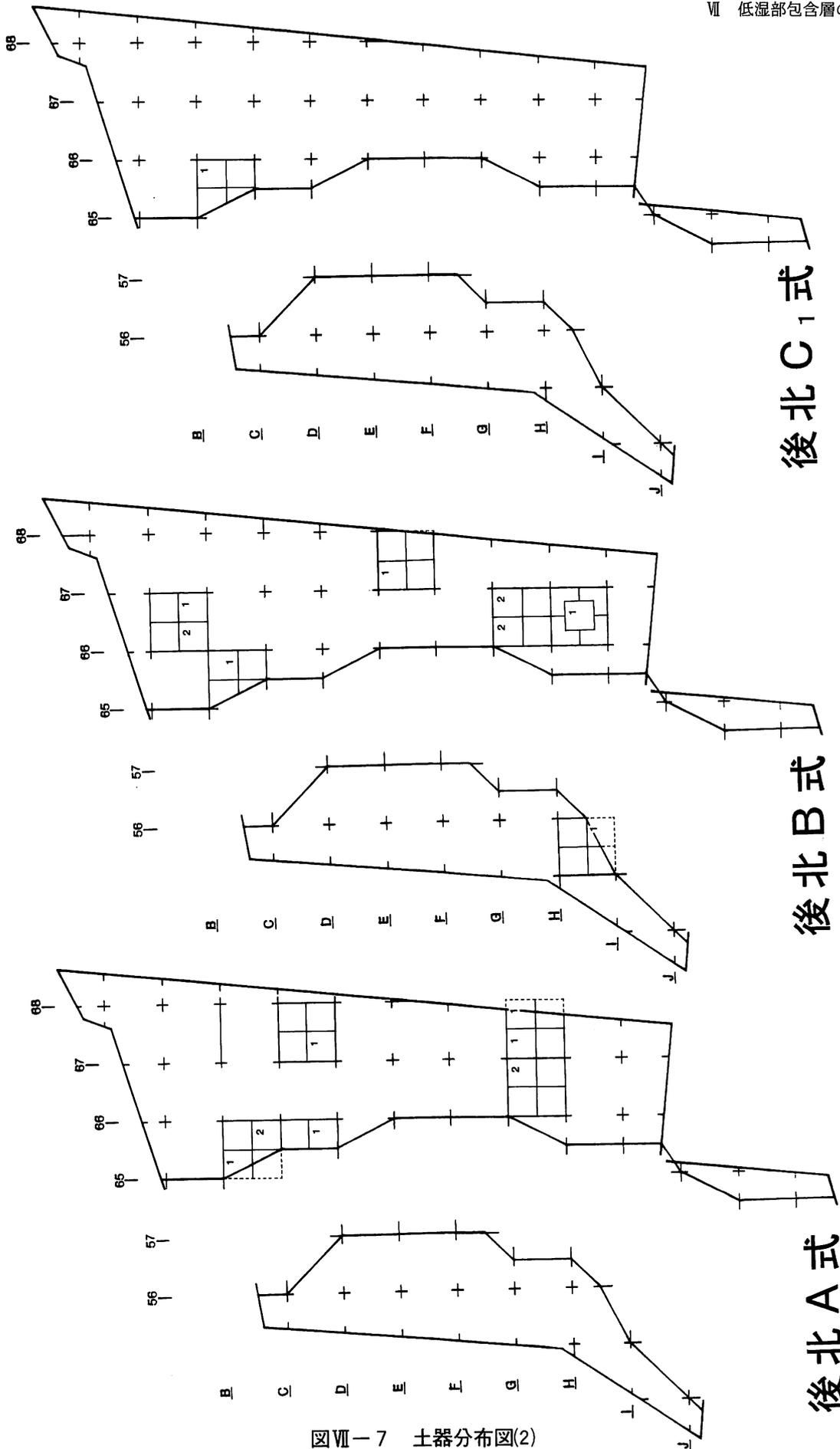
Ⅶ-3-19



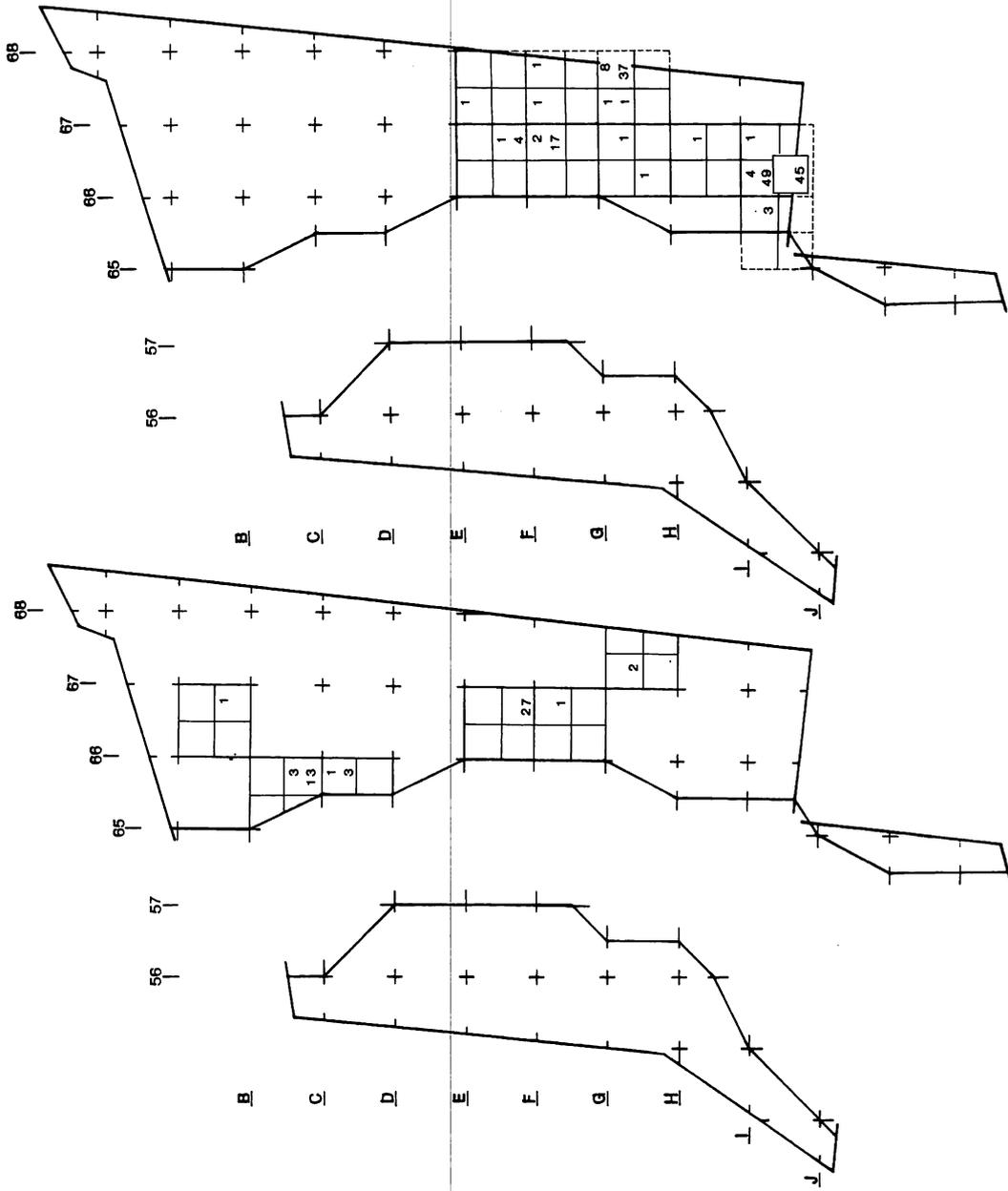
図Ⅶ-5 I 黒層の土器接合図(2)



図Ⅷ-6 土器分布図(1)



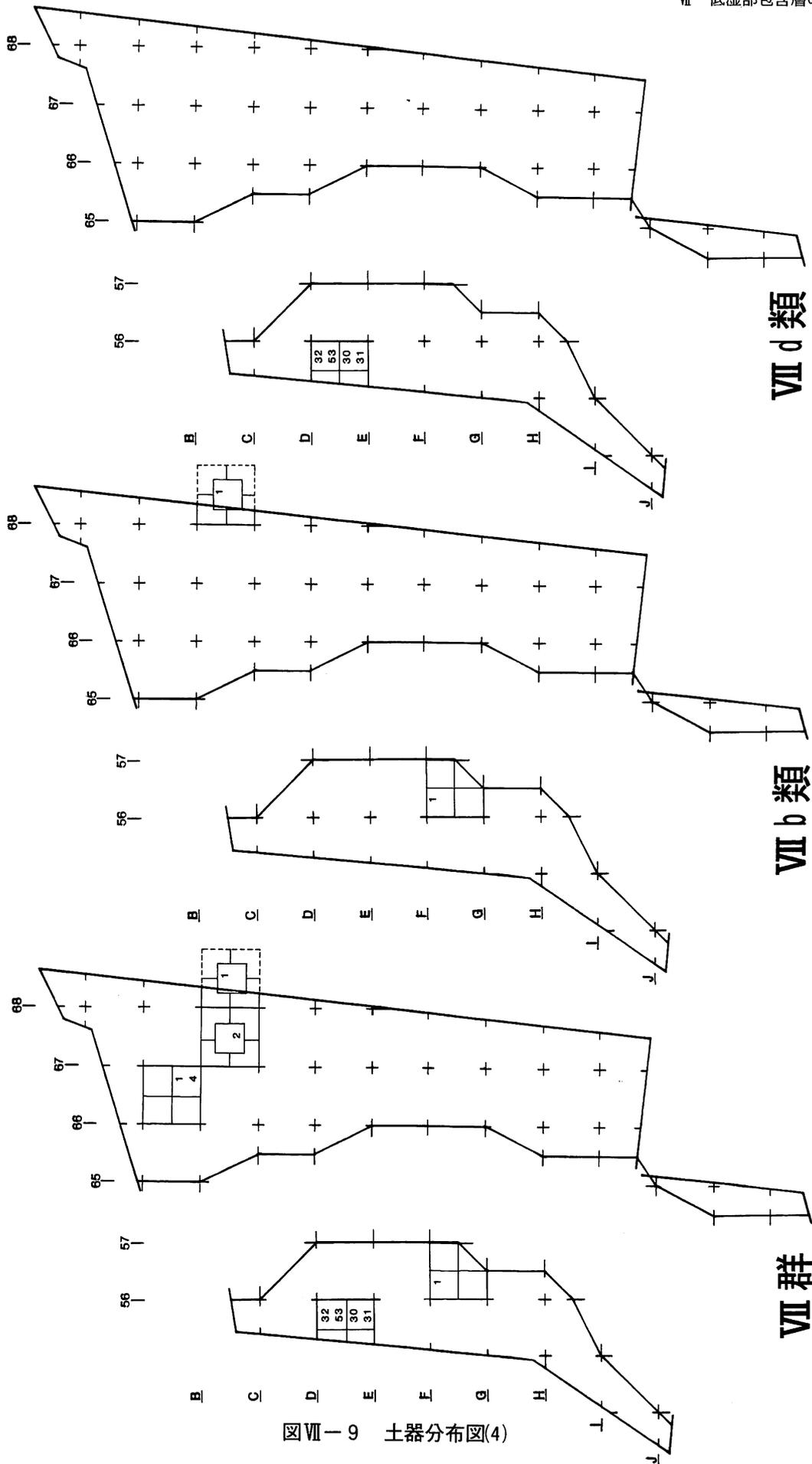
図Ⅶ-7 土器分布図(2)



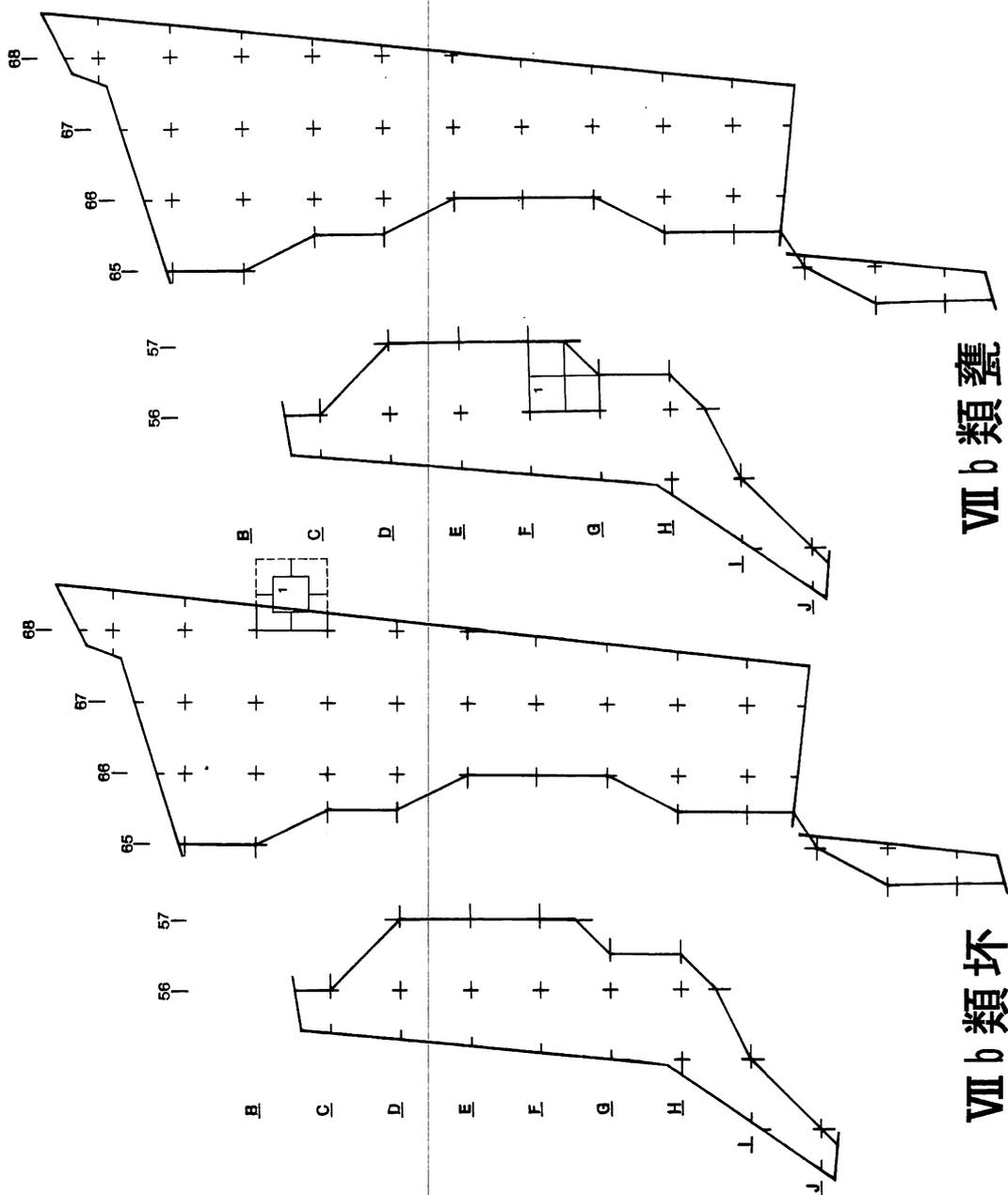
北大 I 式

後北 C₂・D 式

図 VII-8 土器分布図(3)



図Ⅶ-9 土器分布図(4)



图VII-10 土器分布图(5)

表VII-1 土器観察表

VII-2-14

口唇部	口縁部	頸部	胴部	底部側面	備考
	粘土紐巻上げ				・ Hue10YR4/3 (純い黄褐色) ・ 炭化物付着 ・ 外底面は RL斜走帯縄文 RL横走帯縄文
外	ナテ				
面	ナテ				
内	粘土紐巻上げ				・ 後北C ₂ ・D ・ 注口土器 ・ 1/3残存
面	ヨコナテ				

VII-3-15

口唇部	口縁部	頸部	胴部	備考
	粘土紐巻上げ			・ Hue10YR5/3 (にぶい黄褐色) ・ 石英、長石、 チャートが多い ・ 炭化物付着
外	口縁部を四角形に整形			
面	ヨコナテ	タテナテ		
内	粘土紐巻上げ			
面	ヨコナテ	ヨコケズリ		・ VI c ・ 1/3残存

VII-3-16

口唇部	口縁部	頸部	胴部	底部側面	備考
	粘土紐巻上げ				・ Hue10YR6/4 (にぶい黄褐色)
外	ナテ				
面	ナテ				
内	粘土紐巻上げ				・ 北大I式 ・ 4/5残存
面	ヨコナテ				

VII-3-17

口唇部	口縁部	頸部	胴部	底部側面	備考
	粘土紐巻上げ				・ Hue10YR6/4 (にぶい黄褐色) ・ 外底面に炭化物
外	ヨコナテ			ナテ	
面	粘土紐巻上げ			ナテ	
内	ヨコナテ				・ 北大I式 ・ 3/4残存

表VII-2 I 黒層掲載土器一覧

図番号	発掘区	層位	分類
VII-2-1	B65c	IB-4	VIb 後北A式
2	B65c	IB-4	VIb 後北A式
3	B65a	I B	VIb 後北A式
4	G66d	I B	VIb 後北B式
5	G66a	I B	VIb 後北B式
6	A66b	IB-4	VIb 後北B式
7	C65c	I B	VIb 後北A式
8	G66b	I B	VIb 後北B式
9	B65d	IB-4	VIb 後北B式
10	A66c	IB-4	VIb 後北B式
11	A66c	IB-4	VIc 後北C ₂ ・D式
12	C65d	IB-4	VIc 後北C ₂ ・D式
13	G67d	I B	VIc 北大I式
14	E66c他	I B	VIc 後北C ₂ ・D式
VII-3-15	F66d他	I B	VIc 後北C ₂ ・D式
16	I66d他	I B	VIc 北大I式
17	G67a	I B	VIc 北大I式
18	I66d	IB-5	VIe
19	D55d他	IB-2	VII d

VII-3-19

口唇部	口縁部	頸部	胴部	備考
	粘土紐巻上げ			・ Hue2.5Y6/2 (灰黄色) ・ 内黒 ・ 桶修孔
外	ヨコハケ			
面	タテハケ			
内	ヨコナテ			
面	ナテ			
内	ナテ			
面	ヨコハケ			
内	タテハケ			
面	ヨコナテ			
内	タテミガキ			・ VII d ・ 全体に磨減 ・ 上半1/2残存

(3) 石器等

石錐 (図VII-12)

1点が出土している。石質は黒曜石。図示していない。分布図のみ掲載した。

スクレイパー (図VII-11-1~5、図VII-12、表VII-3、図版VII-12)

11点が出土している。そのうち5点を図示した。石質は全て黒曜石である。1はII B層で検出されたが、I B層の縄文晩期、続縄文期の可能性が高い。下部と裏面右側面に刃部をもつもの。2は表面に原石面が残る。下部と右側面に刃部をもつ。3は下部と右側面に刃部をもつ。1~3はすべて裏面に主剥離面を残す。2・3は北大式期のF-1・78出土のスクレイパーの形態に似る。4は縦長の剥片のバルブ付近を刃部に形成。5は表面に原石面が残る。下部から右側面に刃部が形成される。

石核 (図VII-12)

2点が出土している。石質は1点が黒曜石、1点が縞頁岩で、図示していない。分布図のみ掲載した。

石斧 (図VII-11-6、図VII-12、表VII-3、図版VII-12)

1点が出土している。6は石質は泥岩。富良野市無頭川遺跡などの縄文晩期の石斧に似る。

たたき石 (図VII-12)

3点が出土している。石質は砂岩、安山岩と閃緑岩である。図示していない。分布図のみ掲載した。

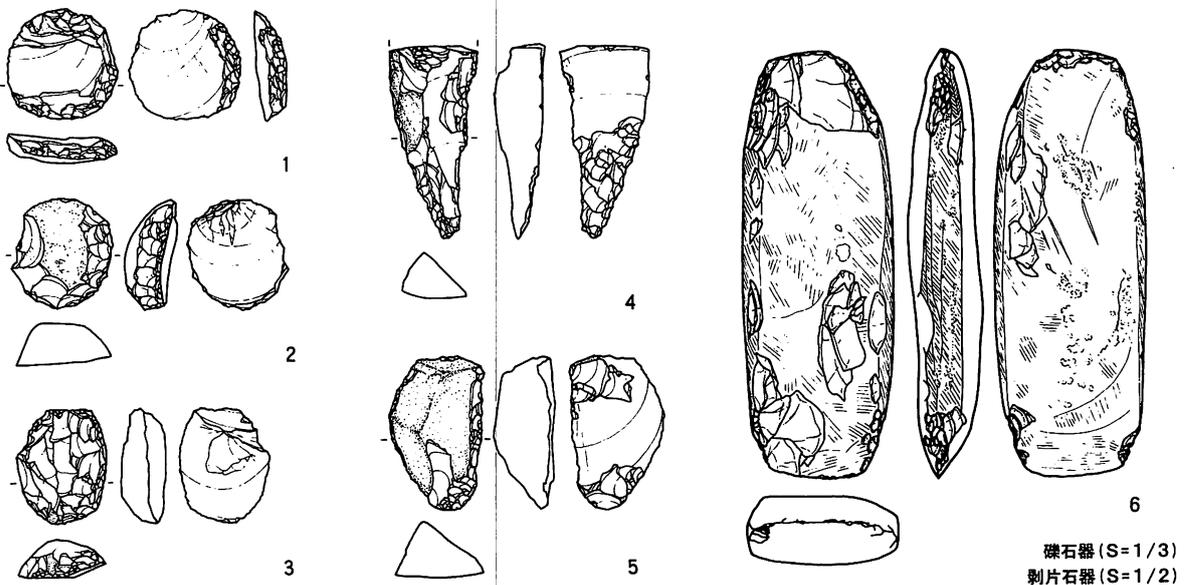
砥石 (図VII-12)

1点出土している。図示していない。分布図のみ掲載した。

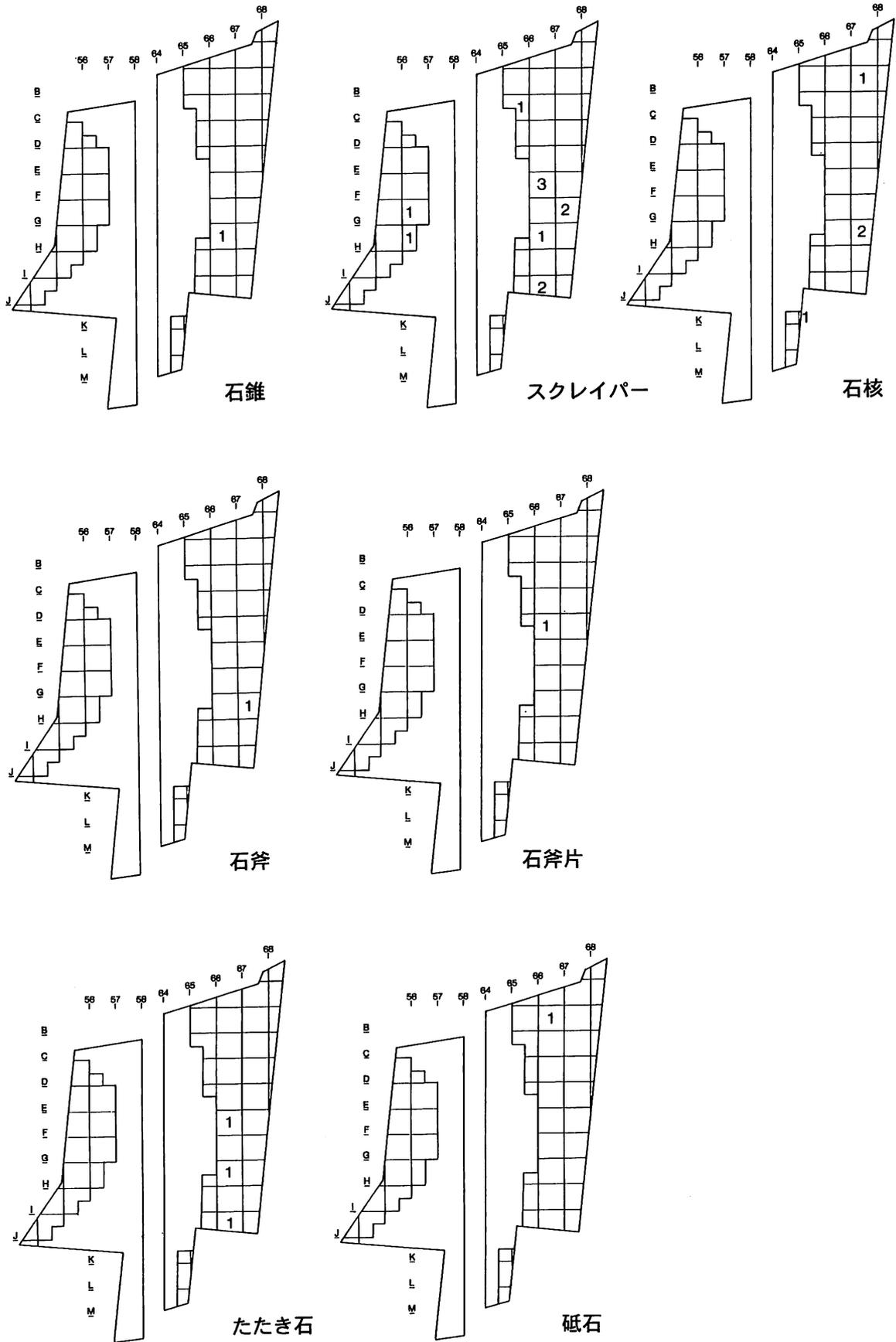
(倉橋)

表VII-3 I 黒層掲載石器一覧

掲載番号	調査区	遺物番号	分類	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	材質	備考
VII-11-1	H 65 c	189	スクレイパー	IB?	28.8	29.0	6.1	5.1	黒曜石	
VII-11-2	I 66 a	187	スクレイパー	IB	28.4	25.0	10.6	9.2	黒曜石	
VII-11-3	F 67 b	36	スクレイパー	IB	30.4	23.7	9.5	7.3	黒曜石	
VII-11-4	G 56 b	12	スクレイパー	IB1	50.8	22.0	11.6	10.1	黒曜石	
VII-11-5	F 56 c	10	スクレイパー	IB4	40.0	24.2	11.7	1.2	黒曜石	
VII-11-6	G 67 c	199	石斧	IB	170.0	58.0	3.1	492.7	泥岩	



図VII-11 I 黒層の石器



図Ⅷ-12 石器分布図(1)

3 II 黒層の土器・石器等

(1) 土器

III 群土器 (図VII-13-1~7、表VII-4、図版VII-13)

1~3・5・6はIII群a類土器である。1は波頂部破片である。器外面について、並列する2本の粘土紐を、口縁部沿いと波頂部からの垂下文様とに貼り付ける。隆帯上にLR縄線を施す。口唇部にはLR縄文を施す。粒径2mmの小砂粒を含む。内面は磨きによって調整する。2は口縁部が肥厚し、外面にLR縄文をほどこす。地文は結束第一種羽状縄文である。3は口縁部の肥厚帯直下に粘土ひもを貼り付け、縦方向の刻みを連続して施す。破片には斜めに貼り付けた隆帯をもつ。内面は横方向の丹念な磨きによって調整する。焼成は比較的良好である。5は胴部破片である。波頂部から垂下した隆帯文様が8の字形に残存する。内面は横方向の磨きによって調整する。胎土には、微細な長石粒を混和剤としてよく含む。焼成は良好である。6は口縁部分の隆帯を縄の端部によって連続押圧する。胎土には粒径1mmの小石粒をよく含む。内面はなでによる調整を施す。4、7はIII群b3類である。いずれも補修孔がある。4は結束第一種羽状縄文を地文に持つ。口縁部分にくびれを持つ。口縁端部には指頭による押圧痕がある。成形の際のものと思われる。胎土には微細な長石、雲母の小砂粒をよく含む。7は地文にLr縄文を施した後、調整と思われる擦痕が全面に残る。口縁部内面、口縁端部には器外面と同一原体による縄文を施す。器面にはさすが全面を覆う。またIII群土器片による再生土製円盤が出土している(図VIII-26-1、12)が、台地の項目に一括して記載した。

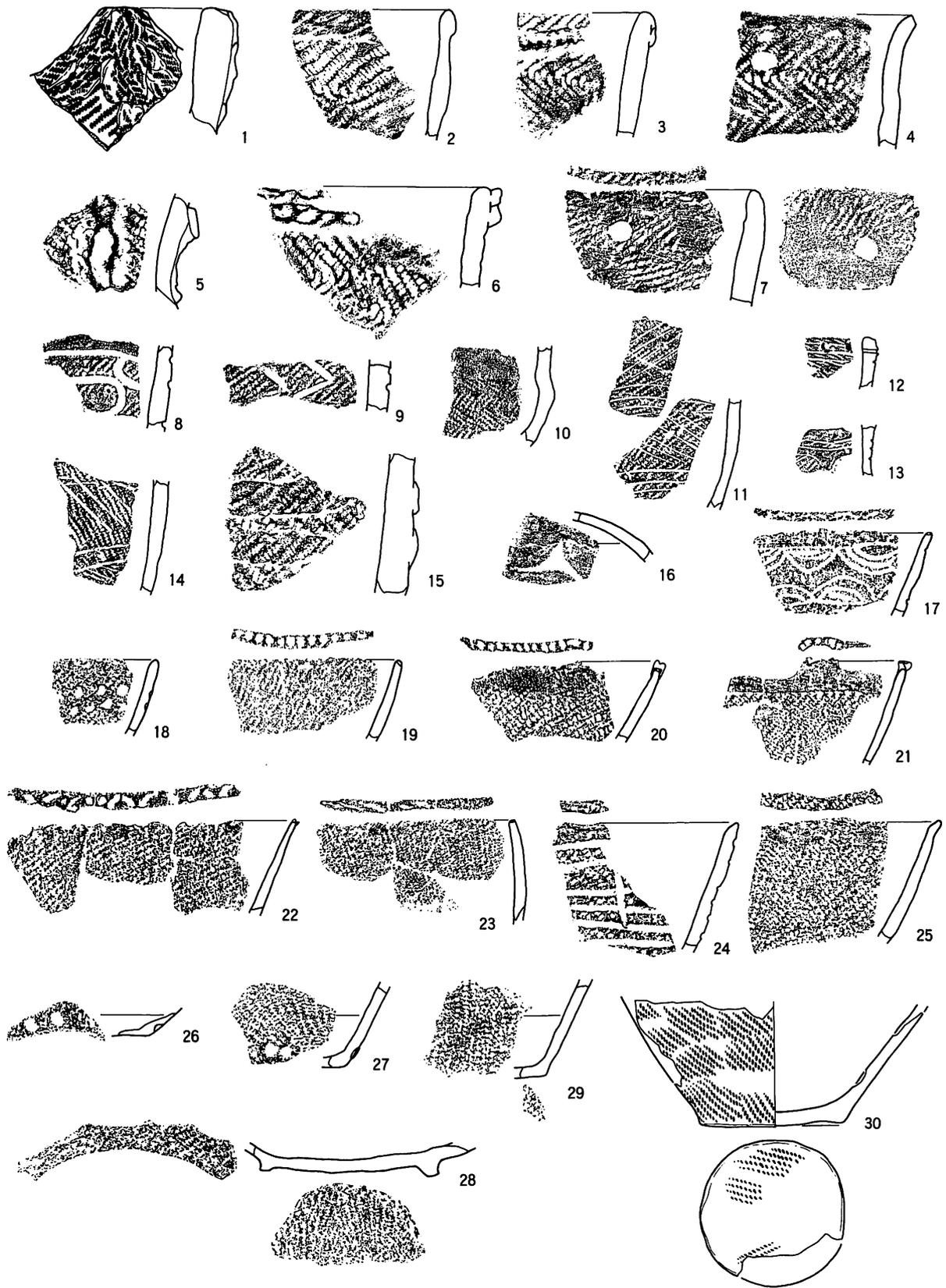
IV 群土器 (図VII-13-8~15、表VII-4、図版VII-13)

8・9はIV群b類土器である。8は手稻式土器の胴部である。沈線により器面を飾る。横方向に平行な直線を縦位の孤線により区画する。9は平行する鋸歯状の沈線を想定できる。10はIV群土器である。器の屈曲部分である。屈曲部は無文帯である。11~14はIV群c類土器である。11は球形をした胴部破片である。注口土器の可能性もある。器面には細沈線で直線構成の文様を描く。12・13は小型の器である。いずれも器壁が薄く、焼成が良い。磨り消し文様を持つ13は、残存する屈曲部分から注口土器の破片である可能性がある。15はIV群a類、余市式土器である。地文にRL縄、隆帯上にLR縄を施すことで、羽状に器面を飾る。(大泰司)

V 群土器 (図VII-13-16~30、VII-14-1、表VII-4、図版VII-14・15)

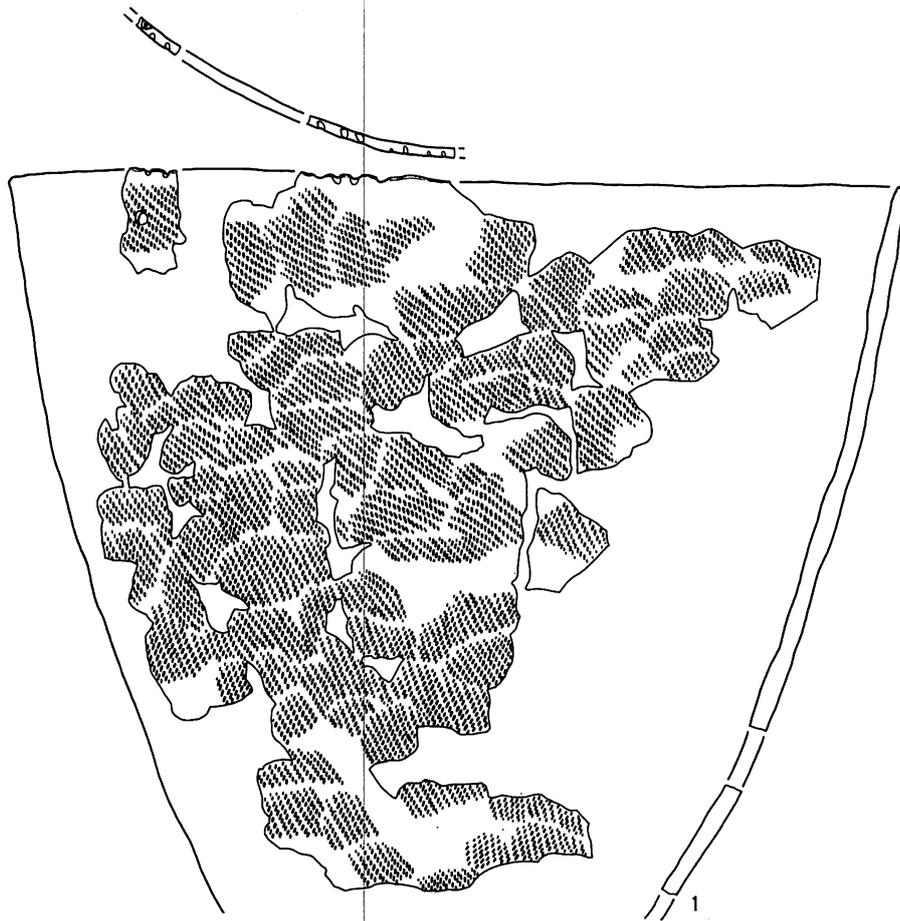
a類 東側の低湿部のEラインより北から主に出土したが、多くは磨滅し、細片化していた。16は壺の肩部で、無文地に三叉文が施されている。調整は外面がミガキ、内面はナデである。胎土に海綿骨針を含む。大洞B-C式かと思われる。17は無文地に横走る2条の沈線を施し、それらの上に沈線で連弧文を描いたものである。胴部には斜行縄文が施されていると思われる。口縁部の断面は角張り、口唇には円弧状の短沈線が施されている。内面の調整はヨコナデである。18はLR縄文を地として竹管状工具による刺突文が施されたもので、口唇直下には無文帯がある。26・27は立ち上がりの部分にLR縄文を施した後、刺突文(26)や爪形文(27)を加えたものである。26の同一個体片で口縁部に刺突文の施された破片が出土したが、磨滅が激しいため図示しなかった。18・27の内面はみがかれている。これらは大洞B-C式に併行するものかと思われる。

b類 1は東側の低湿部で径2.5mほどの範囲からまとまって出土した深鉢で、全面にRL縄文が施されている。やや内彎気味に立ち上がる器形で、口縁部の断面は角張り、口唇には刻み目が施されている。接合しなかったが、上げ底で縄文の施された底部破片が出土している。器壁は薄い。内面は粗いナデ調整がなされており、器面には凹凸が残る。内面には炭化物が付着している。19~22はLR縄文の施されたもので、口唇には刺突(21)や刻み目(19・20・22)が加えられている。20・21は口



遺物(S=1/3)

図Ⅶ-13 Ⅱ黒層の土器(1)



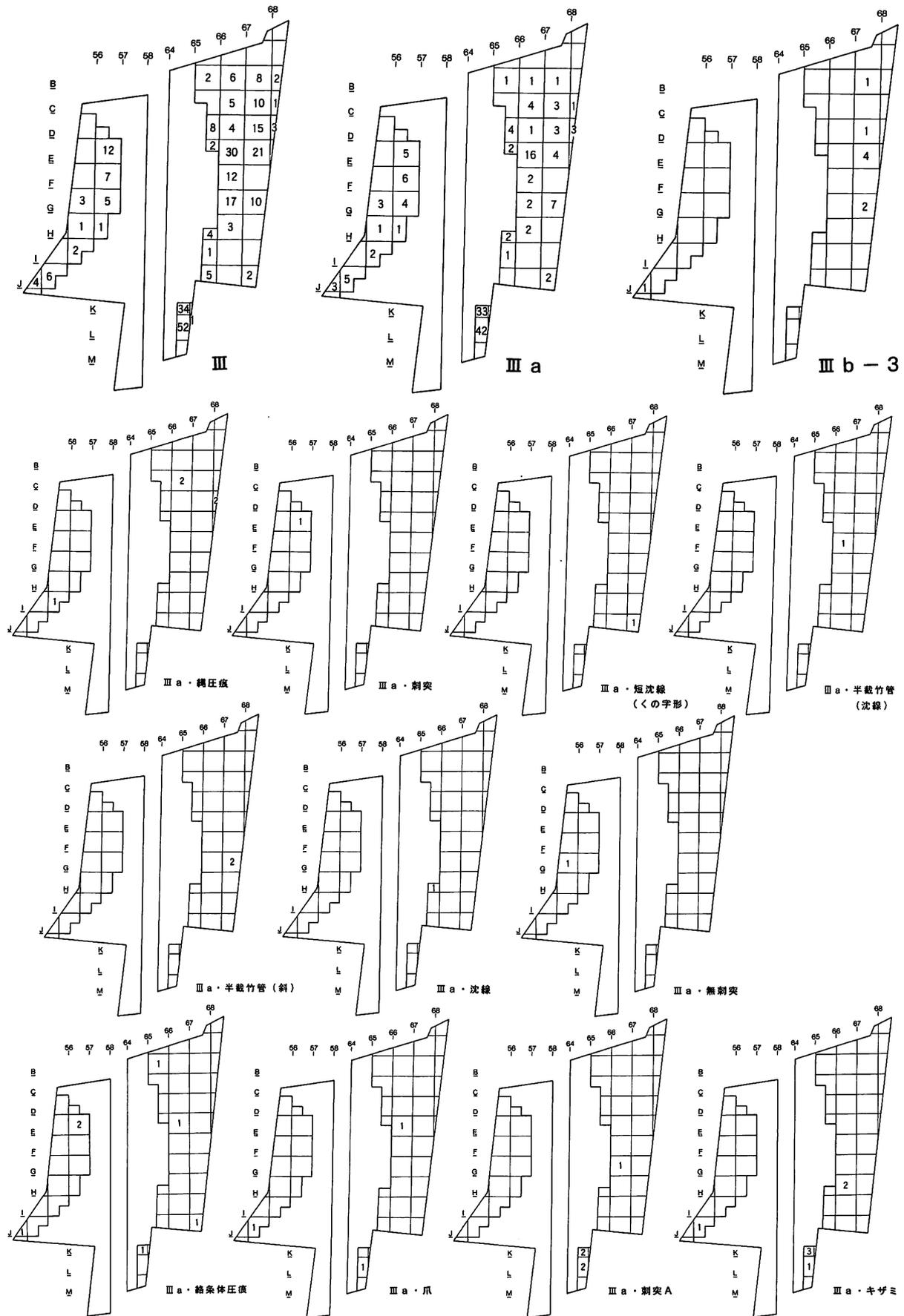
図VII-14 II黒層の土器(2)

表VII-4 II黒層掲載土器一覧

図番号	発掘区	層位	分類と備考
VII-13-1	I 55 a	II B	III a 縄線
2	A 66 c	II B下	III a 口縁部肥厚帯に縄文
3	I 55	攪乱	III a 口縁部肥厚帯に縄文
4	C 67 d	II B下	III b-3
5	J 65 a	II B	III a 爪
6	G 56 a	攪乱	III a 刺突
7	J 54 a	II B	III b-3
8	I 55 c	礫	IV b 手稻式
9	I 55 d	攪乱	IV b ウツリ式
10	I 55 b	II B	IV c 堂林式
11	I 53 c	礫	IV c 堂林式
	I 54 a	礫	IV c 堂林式
12	G 56 c	II B	IV c 堂林式
13	I 53 d	礫	IV c 堂林式
14	E 56 c	礫	IV c 堂林式
15	D 55 b	I B	IV a 余市式
16	C 65 d	I B 4	V a
17	B 66 a	II B上	V a
18	E 56 c	II B (礫)	V a
19	F 55 d	II B (礫)	V b
20	B 66 a	II B上	V b
21	C 65 d	I B	V b
22	H 54 a・H 55 d・I 59 d	I B・II B	V b
23	H 65 c・I 65 d	II B	V b
24	E 56 b	II B (礫)	V c
25	E 55 c	II B (礫)	V c
26	A 66 b	II B上	V a
27	G 56 a	II B (礫)	V a
28	E 55 d	II B (礫)	V b
29	E 56 c	I B 4	V b
30	B 66 a他	II B上	V b

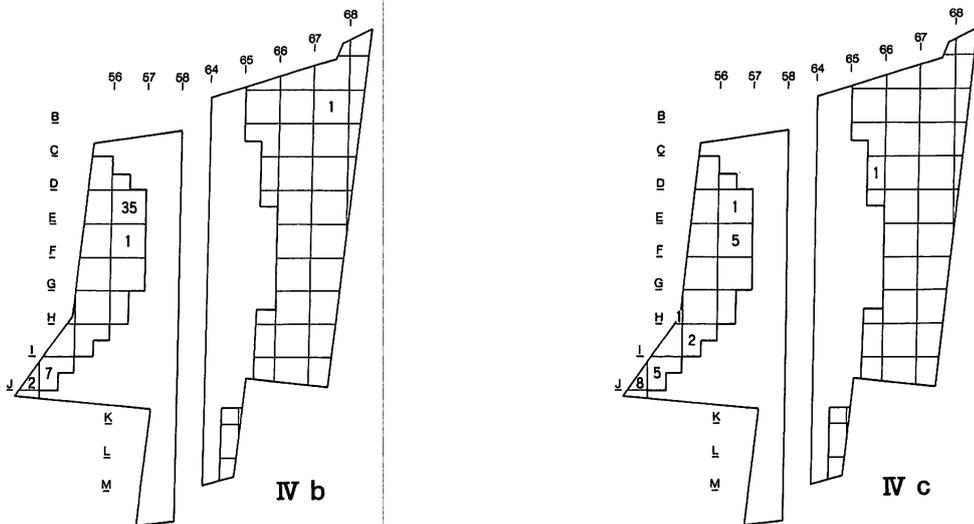
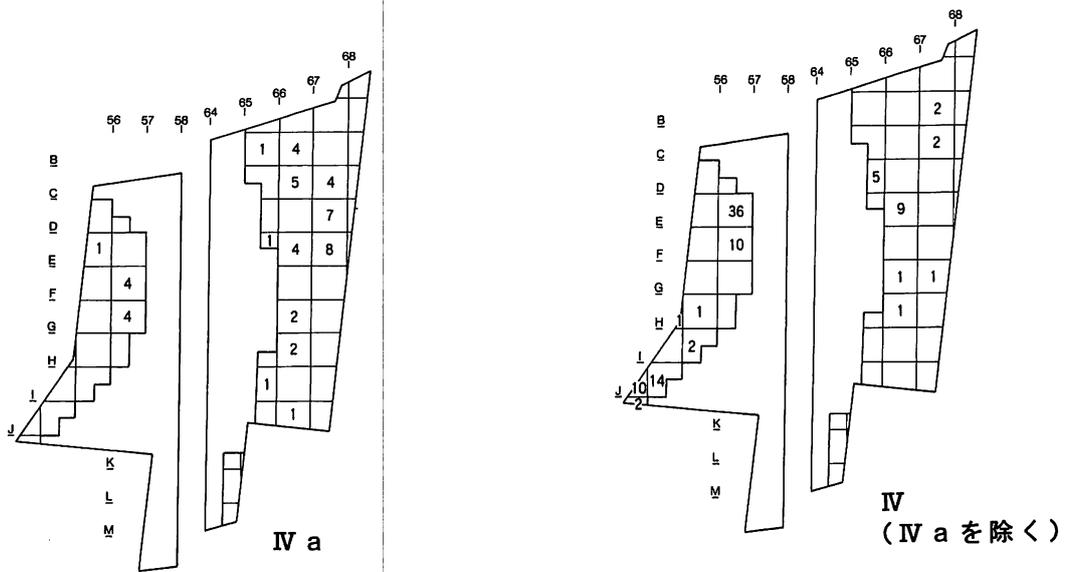
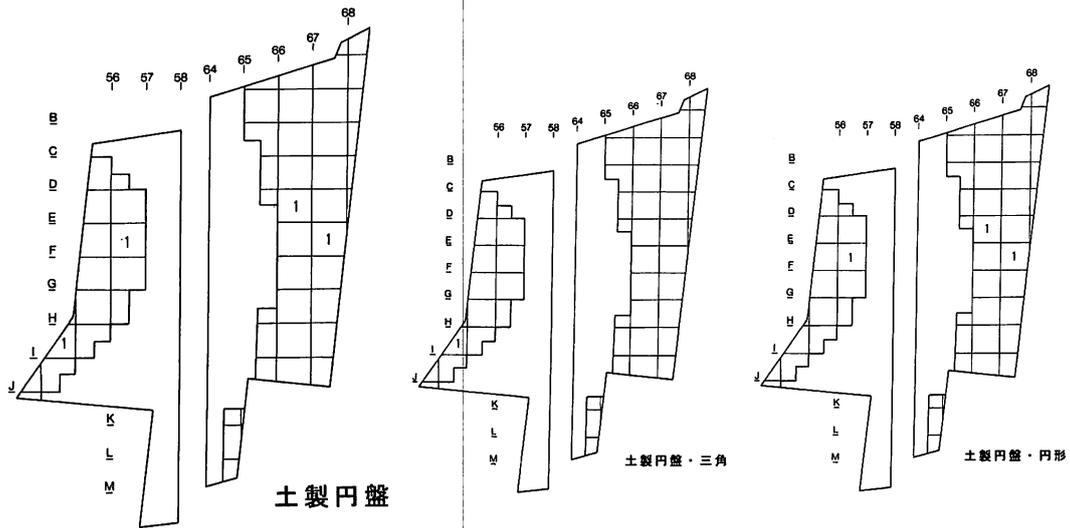
A 66 c・dから同一個体

図番号	発掘区	層位	分類と備考
VII-14	I 65 d他	II B	V b

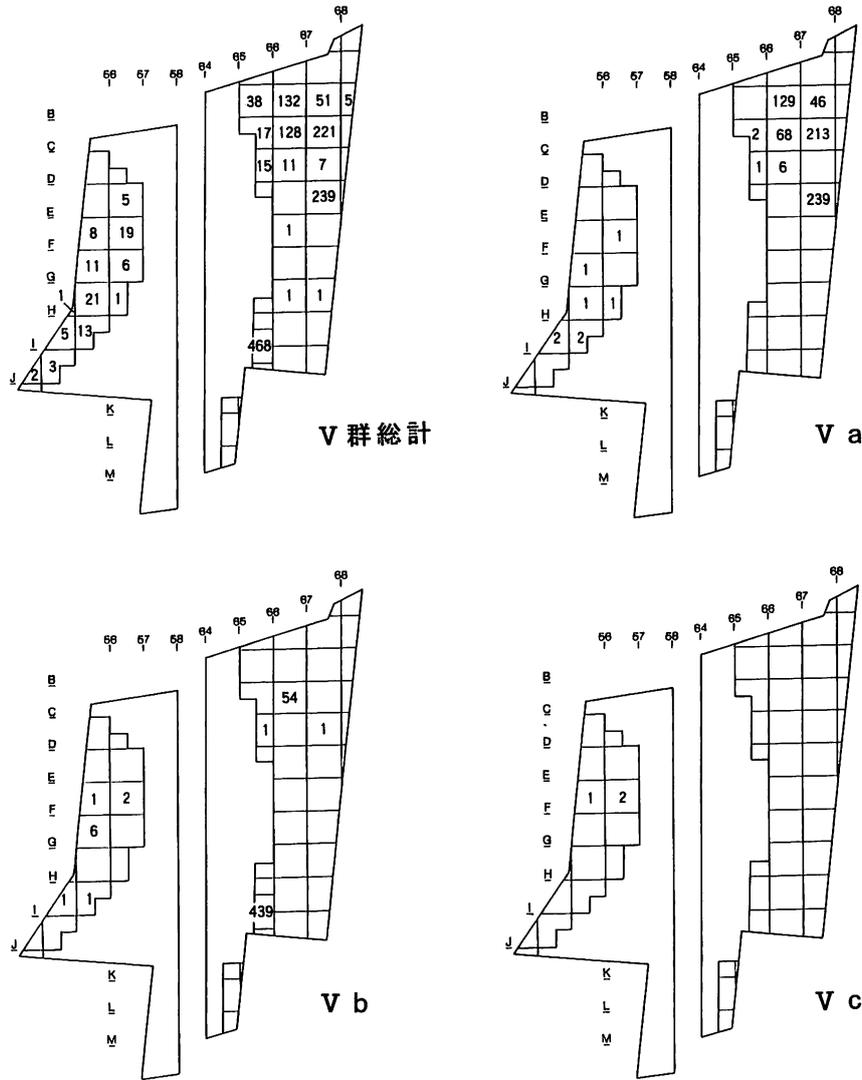


図Ⅶ-15 土器分布図(6)

3 II 黒層の土器・石器等



図VII-16 土器分布図(7)



図Ⅶ-17 土器分布図(8)

唇直下にヨコナデによる無文部がある。**21**は突起の両端に粘土粒を貼付し、それらの間を内面側にへこませている。**22**の刻み目はハの字状である。これらの内面は横方向になでられている。以上の土器は大洞 C₁ 式に併行すると思われる。

23は口縁の内彎する器形のもので、縦走る RL 縄文が施され、口唇には斜方向の刻み目がみられる。内面の調整はヨコナデである。大洞 C₂ 式に併行すると思われる。

28~30は深鉢の底部で、いずれも底面に縄文が施されたものである。**28**は上げ底で、底面には炭化物が付着している。**30**はわずかに高台状になり、底面は丸みがある。内面の調整は、**28**はミガキ、**29・30**がナデである。

c類 西側の低湿部からわずかに出土した。**24**は深鉢で、RL 斜行縄文を施した後に横走る沈線をめぐらし、縦位の沈線を加えたものである。**25**は鉢と思われ、LR 縄文が施されている。これらの口縁部の断面は切り出し形で、口唇には縄文が施されている。内面調整は横ナデである。**25**は胎土に海绵骨針を含む。これらはママチ 2 類に相当すると思われる。(中田)

3 II 黒層の土器・石器等

(2) 石器等

石鏃 (図 VII-18-1 ~ 3、図 VII-19、表 VII-5、図版 VII-15)

7 点が出土している。このうち 3 点を図示した。石質はすべて黒曜石である。1 は平基。2 は凹基。3 は有茎鏃。1、2 は縄文前期、3 は縄文後期に見られる石鏃に形態が似る。土器の分布は縄文早期、前期のものはほとんど見られず、出土の経緯、経路がはっきりしない。

石槍・ナイフ (図 VII-19)

1 点が出土している。図示していない。分布図のみ掲載した。

石錐 (図 VII-19)

1 点が出土している。図示していない。分布図のみ掲載した。

つまみ付きナイフ (図 VII-18-4、図 VII-19、表 VII-5、図版 VII-15)

1 点が出土し、図示した。4 は石質が黒曜石。表面が周縁加工されている。

スクレイパー (図 VII-18-5 ~ 7、図 VII-19、表 VII-5、図版 VII-15)

10 点が出土した。このうち 3 点を図示した。石質は 5 が頁岩、6 がメノウ質頁岩で、7 が黒曜石である。3 点とも側縁に刃部をもつもの。5 は裏面の剝離によりつまみ付ナイフのような使用も考えられる。

石斧 (図 VII-19)

石斧 8 点、石斧片 2 点、石斧未製品 1 点が出土している。図示していない。分布図のみ掲載した。

たたき石 (図 VII-20)

3 点が出土している。図示していない。分布図のみ掲載した。

北海道式石冠 (図 VII-18-8、図 VII-20、表 VII-5、図版 VII-15)

1 点出土した。4 点に破損して出土したが、接合により 1 点となった。①地区からの出土はこれ 1 点のみである。下方から上方へのすり面の調整が行われている。

台石・石皿 (図 VII-18-9、図 VII-20、表 VII-5、図版 VII-15)

1 点出土している。1 点図示した。9 は C 66 c II B 下から出土した台石である。全体に研磨され、整形されている。石質は多孔質の安山岩である。

砥石 (図 VII-20)

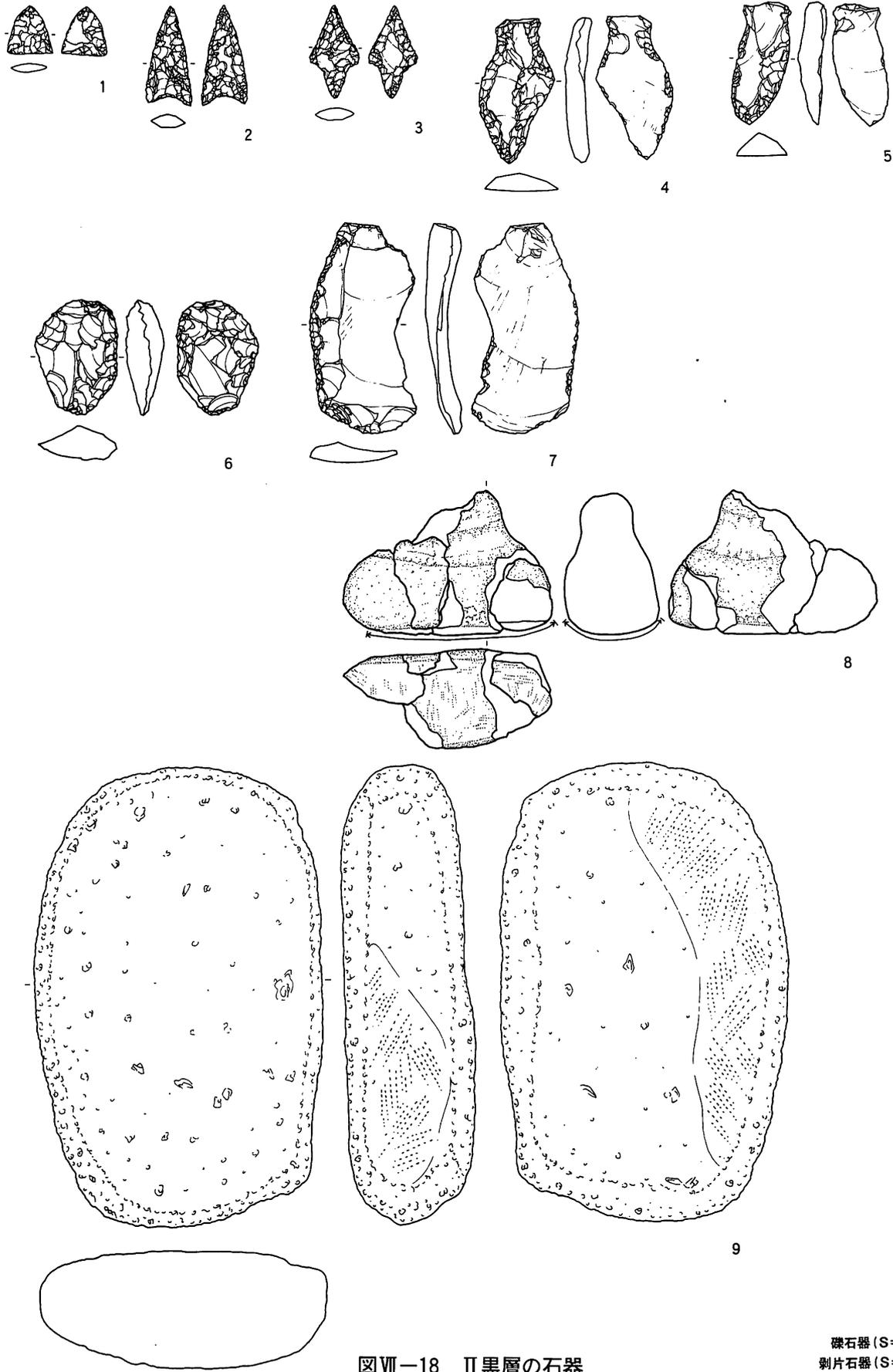
1 点が出土している。図示していない。分布図のみ掲載した。

石錘 (図 VII-20)

5 点が出土している。図示していない。石錘は台地部 F 65 区と低地部 F 67 区からそれぞれ 5 点の出土である。分布図のみ掲載した。
(倉橋)

表 VII-5 II 黒層掲載石器一覧

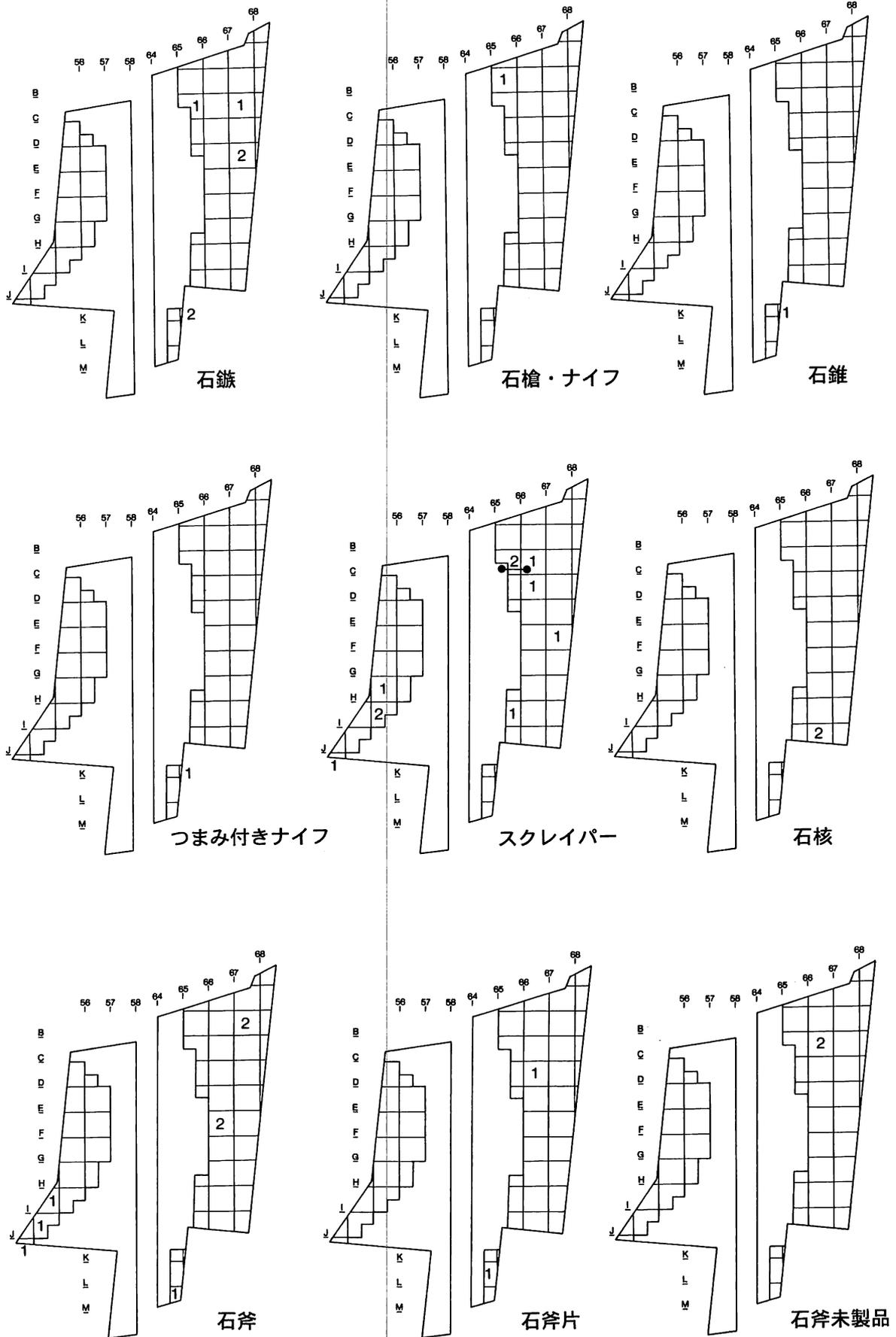
掲載番号	調査区	遺物番号	分類	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	材質	備考
VII-18-1	B 67 b	5	石鏃	II B 下	15.7	14.1	2.3	0.5	黒曜石	
VII-18-2	L 64 d	3	石鏃	II B	29.6	14.5	4.1	1.6	黒曜石	
VII-18-3	I 54 a	14	石鏃	II B	31.5	16.3	3.6	1.2	黒曜石	
VII-18-4	J 65 b	5	つまみ付きナイフ	II B	49.2	24.6	6.0	7.2	黒曜石	
VII-18-5	C 66 d	7	スクレイパー	II B 下	42.2	16.5	7.1	5.3	頁岩	
VII-18-6	J 53 d	5	スクレイパー	II B-4	38.2	27.1	12.0	11.7	頁岩	
VII-18-7	H 55 d	4	スクレイパー	II B	71.1	32.9	6.0	14.4	黒曜石	
VII-18-8	F 66 c	96	北海道式石冠	II B	(71.5)	(106.9)	48.0	316.0	安山岩	
VII-18-9	C 66 c	8	台石	II B 下	315.0	195.0	76.7	7600.0	安山岩	



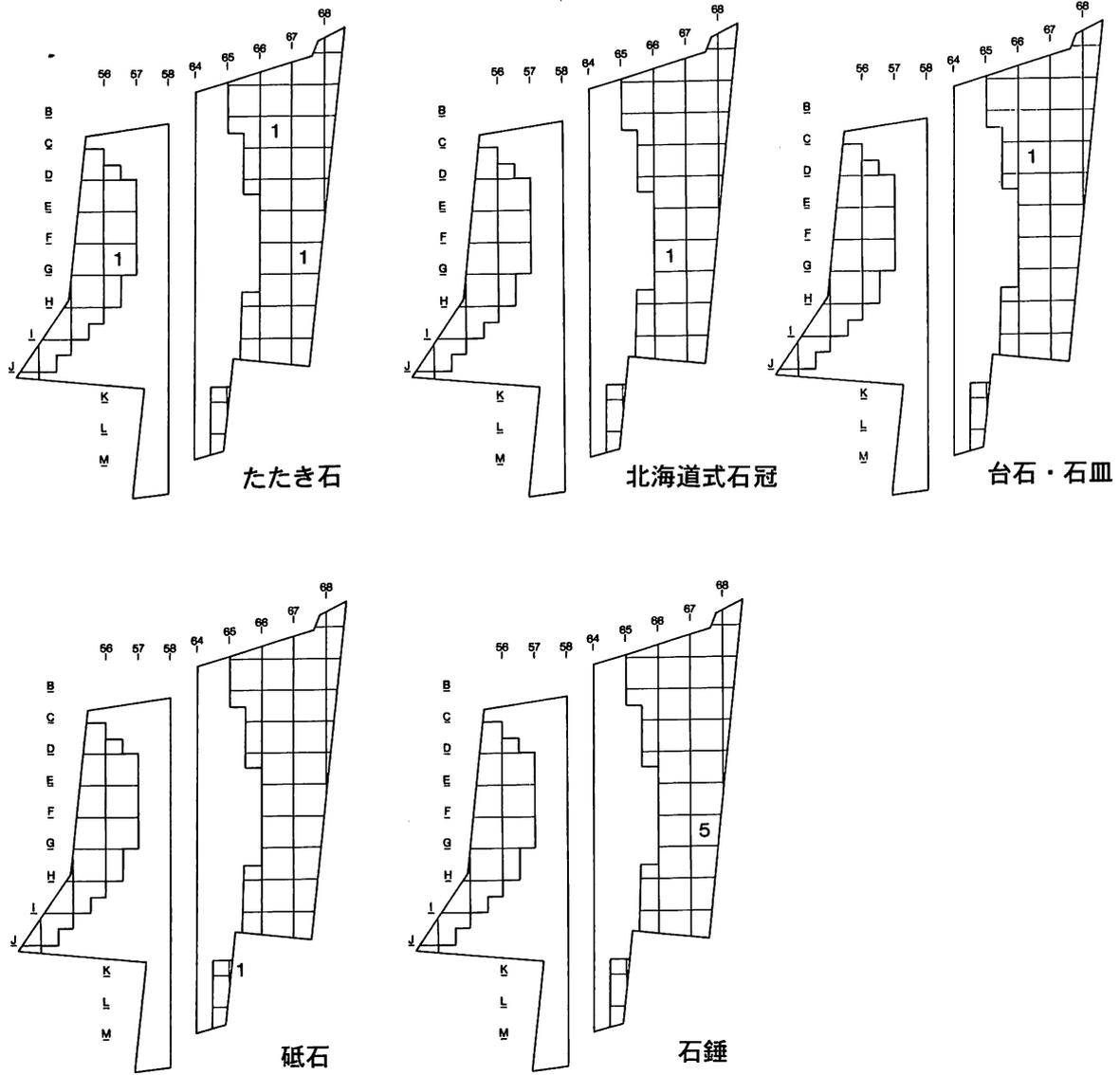
図Ⅶ-18 Ⅱ黒層の石器

礫石器 (S=1/3)
 剥片石器 (S=1/2)

3 II 黒層の土器・石器等



図VII-19 石器分布図(2)



図Ⅶ-20 石器分布図(3)

4 木製品

4 木製品

ここで報告する製品は、図Ⅶ-24~39、表Ⅶ-6・7、図版Ⅶ-16~27に示した計81点の木製品・漆製品・樹皮加工品を代表とする。ただし、図・写真未掲載の245点の製品等も表Ⅶ-8~13にまとめておいた。

(1) 出土状況

低湿部の0黒・I黒・II黒層から出土した木製品・漆製品・樹皮加工品は合計324点（攪乱の1点と、台地上0黒の漆製品1点を除く）で、その内訳は0黒層：木製品9点、I黒層：木製品272点・漆製品1点・樹皮29点、II黒層：木製品13点である。I黒層では、木製品の60%以上169点がI B 1層、20%55点がI B 2層、12%32点がI B 3層という割合を示す。総製品数に占める、アイヌ文化期から擦文文化期の製品は、0黒層からI B 3層で294点、90%以上である。特に0黒層とI B 1層の近世アイヌ文化期の製品が、199点60%以上と高い出土率を示す。

これを低湿部別で見ると、木製品では、東側と南側で0黒層とII黒層に数点あった以外は、I黒層で147点となる。南側の総出土数は10点と、その中であって非常に少ないが、そのうちI B 3層に6点と高い割合を示す。西側では0黒層は確認できず、I黒層で126点、II黒層で8点の出土である。樹皮は東側I B 1層の5点と、西側のI B 1~3層出土の24点となる。

東西の両低湿部は同程度の遺物包蔵状態といえるが、I黒層の細分で微妙な違いもある。I B 1・2層においては西側の方がやや多く、量的に少ないI B 3~5層では南側も含めて東側が高い割合を示している。全層、0 B・I B 1層、I B 2層の各木製品出土位置図を図Ⅶ-21~23に掲載してある。

(2) 木製品・漆製品・樹皮加工品

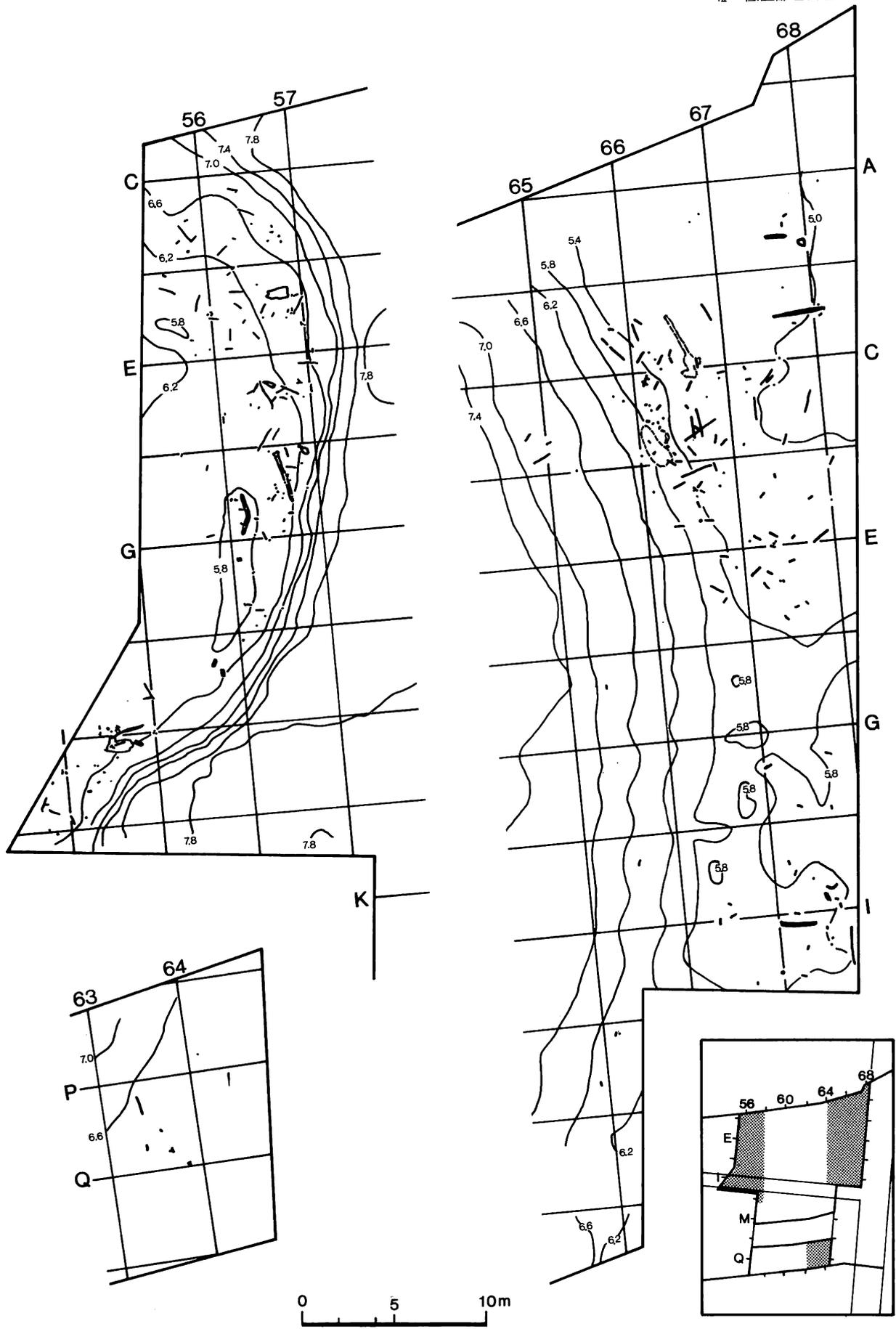
表Ⅶ-6~13に示したごとく、名称・出土位置・層位のほか、木取り・樹種・大きさ等を示してある。また、掲載した図の縮率にバラつきがあるので、表Ⅶ-6・7にはこれも示した。以下、主な表項目の説明を記しておく。

【木取り】：板材やそれを利用した製品では、柾目・板目・追柾に分けている。割材やそれを利用した製品で樹心を通って割っているものは、半割・1/4割・1/6割・1/8割・1/12割・1/16割、樹心はずして割っているものは、偏〇割・心持と分類してある。割り物（舟・容器）は今回はすべて横木取りである。杭や枝材など棒状の材で割りのないものは、丸木と表現している。

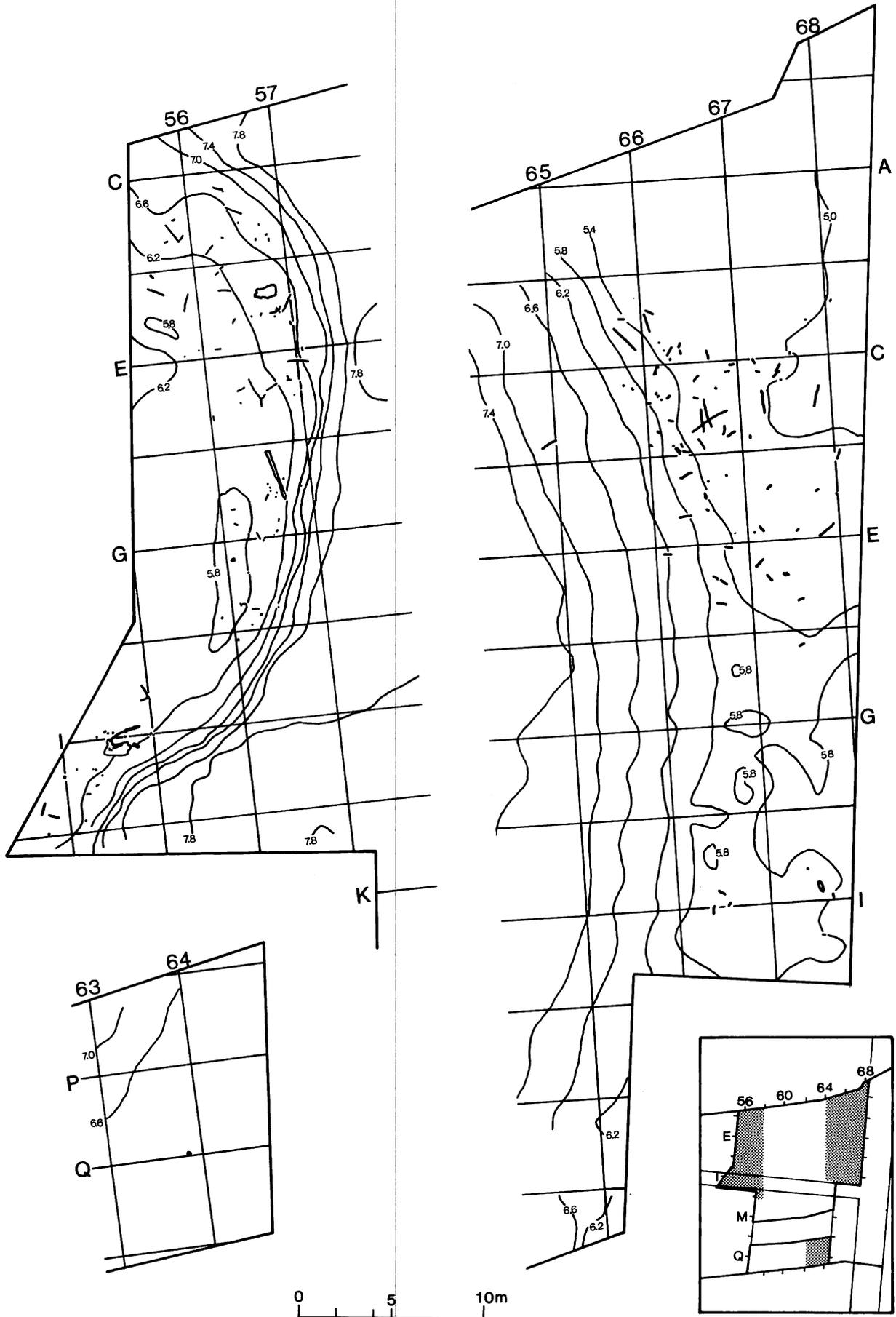
【樹種】：基本的には顕微鏡観察で、属までの同定である。樹種同定については、IV章表土層の遺構分も含めて次項で詳述する。層位や地点を無視して樹種だけでいえば、0 B層以下同定294点中トネリコ属が143点約49%と、圧倒的多数を占める。他では、ヤナギ属25点約8.5%・イヌエンジュ21点約7%・コナラ属約20点7%が目立ち、あとの25属等は各10点以下である。また少数だが、スギ・ヒノキ属？アスナロ属？・ブナ・ケヤキ属と近辺で自生せず、持込みと思われる樹種も見られる。製品と樹種の関係で特徴的なものについては、その製品項目の説明で触れる。

【大きさ】：水漬き状態で、できる限り破片を接合した上での、最大長・最大幅・最大厚・重量である。（ ）付きは、その部分や製品に欠損があることを示す。従って名称の項には、「〇片」と記載されている。重量の項に「乾重量」とあるのは、保存処理後の計測値で、長さほかにも反映する。また重量の項に「計」とあるのは破片総体の重さを示し、その場合、最大長・最大幅・最大厚は、破片中の最大片1片の計測値である。

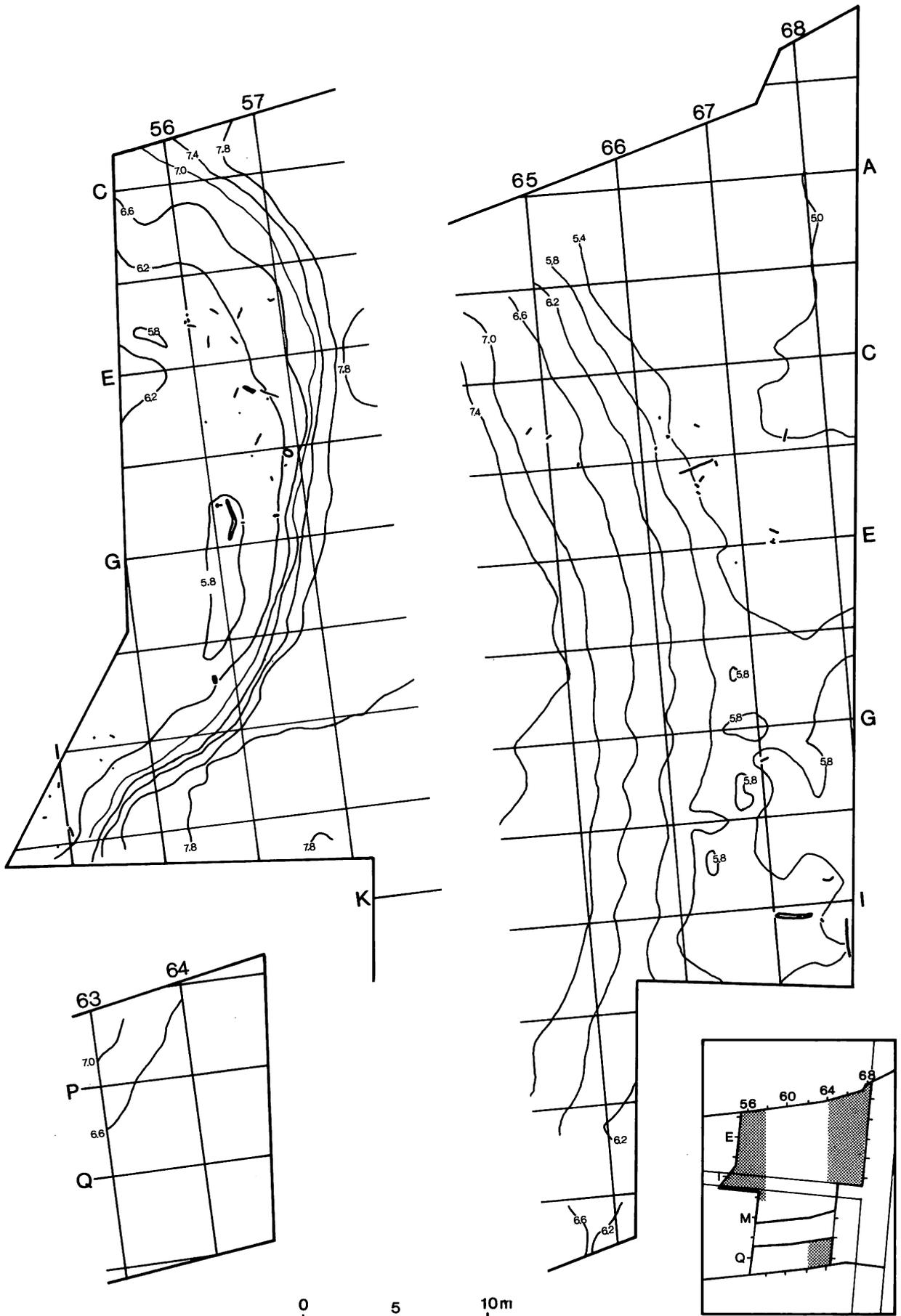
【縮尺】：基本的には舟関係1/6、一般製品や板材1/3、そのやや大型のもの1/6、建材関係1/8、樹皮1/2とした。ただ、図に入りやすくするために縮率を変えたものもある。



図Ⅶ-21 木製品出土位置図（Ⅰ黒層以下全層）



図VII-22 木製品出土位置図 (OB・I B 1層)



図Ⅶ-23 木製品出土位置図 (I B 2層)

4 木製品

次に図示した木製品を中心に、種別・製品別に記述する。

舟部材・舟用具

舟敷（舟底）（1）：舟底全体から切断されて物送り？された、舳側か鱸側の部分で、さらに縦半分になっている。腐朽・摩耗が激しく、特に先の立上り部分の損傷が著しい。板綴じ用の孔が確認できないのは、腐朽欠損のためと思われる。樹種はカツラ属、巨木から横木取りされたもので、舟底は2cm前後まで削り込まれている。これまで出土品としては、舳部分のみが通例であったが、これは中央部付近で切断され、舟底の平坦部まで残存している貴重なものといえる。

舳（2）：舳の立上り部分の破片だが、腐朽・摩耗が著しく、切断されたものかはわからない。樹種はトネリコ属、樹心部付近からの年輪が観察でき、横木取りである。やや小振りの舟と思われる。

車櫂受台部（3）：直径7cmほどのモミ属の丸木材を、樹心を残すように柁目取りしている。舟の舷側板に縛り留めるための袢が末側の端部に付けられている。元側は折損している。車櫂が組まれる軸は枝利用式であるが、摩耗のためか途中で折損している。

早櫂（4）：全長166.2cm、柄部長102.2cm、柄部径2.2mmにコナラ属の1/4割材を削り出した早櫂の完形品である。水掻き部はナデ肩で、先端はU字形、割れがはいっており、一对の補修孔が開けられている。水掻き部だけで木取りをみると追柁である。

漁撈具

回転式離頭銚中柄部（5）：一本式の中柄。申にもみえるが、基部に棹に装着する平坦面が削り出されている。アジサイ属の1/4割材から作られている。

魚叩き棒（6）：ハシドイ属の丸木を、握り部と頭部を削って作った、魚叩き棒と思われるもので、叩き痕よりも全体に摩耗した印象の方が強い。

狩猟具

矢中柄（7・8）：7はツルウメモドキ属の枝を1/4に割って削り出した脆弱そうな中柄で、先端部・基部の整形が粗い。8はアジサイ属の太めの枝を1/4に割って削り出した中柄で、体部の太さのわりに先端部・基部が極端に細く作られている。特に鏃装着部は三角形状に明瞭に作出されている。

矢（木鏃）（9～11）：3点ともアジサイ属の太めの枝を割って削り出されている。9は平坦な先端部と極端に細い基部を持つ。10・11は中柄部と一体化した形式。10は細長い頸部が基部から作出され、紡錘形の鏃部へと続く。11は全体的に扁平で、三角形鏃が作出されている。

切截具

小刀樹皮製鞘（12）：劣化が進んでおり図では別描したが、三枚重なったシラカバ樹皮製のマキリ鞘で、片側のみが残存と思われる。突起部の張出しは小さな丸形で、ここに吊り紐用の孔が一つある。縫い孔は、13ヵ所確認できる。

灯火具

挟み木？（13・14）：13は太い枝の片端を粗く削り、そこから40cm割り裂いたもの。14は股木片端を削り短い割り裂きを入れたもので、両者とも炭化面はないが、灯火用樹皮を挟む材と思われる。

容器類

割物容器（15・16）：15は円形盆状容器の切断品で、部分的に焼けている。側縁が緩く立ち上がる。16は素木の円形浅鉢片。再加工されたものか、器厚が不均一で部分的に焼けている。

漆椀（17等）：17は腐朽の著しい小型の平底椀片で、高台の痕跡がみられる。内側朱漆（未分析）・外黒漆塗りだが、高台内には塗はない。外側には黒地に朱漆（未分析）で草文が描かれている。

食用具

篋 (18) : 加工は粗いが、篋部の肩が張り柄部との区分が明瞭である。モミ属の柁目板を加工。

串状製品 (19~26) : 断面形や端部の加工で名称をつけた。**23**はイチイの1/6割材を粗削りした、長さのある両先串である。これ以外はみな枝材の1/4割材を使った長さ20cm以内の短い串で、**22**と**24**は両先である。**26**はやや湾曲している。

歩行具

下駄 (27) : ハリギリの追柁板を削り出した、歯高の低い厚みのない連歯下駄である。台尻側半分以上を欠損し横緒孔も確認できない。台先の上面観はやや右下がり、台尻に向かって幅は均一である。前壺は円孔で中央部にある。歯の接地面は狭く、氷雪上歩行の滑り止めと考えられる鉄鋏を打った痕跡が3ヵ所みられる。

祭祀・儀礼具

花矢 (28) : 長い先端突起(鋳部)を削り出し、その付け根に最大径があり、基部に向かって次第に細くなる。基部は端を欠損するが、削りで一段と細身に作られる。削花等の痕跡はない。

制裁棒(棍棒) (29) : 打ち部は2ヵ所の瘤状で、その間は摩耗のような削りである。先端部は切断されているようにも見え、さらに瘤が続いていた可能性もある。棍棒ではなく大型の横槌で、打撃部が使い減りしたものかもしれない。

各種用具の部品や素材等

ピン状製品 (30等) : **30**は片端尖頭で、両尖頭のものもある。莫莖や獣皮留めの木針であろう。

軸状製品 (31・32) : **31**はつまみの付いた小型製品。**32**は断面略三角形の大型品で下端を欠損する。

楔状製品 (33) : 先端はU字形。樹表側は割りっ放し、樹心側をなだらかに調整し、さらに平坦面を作るように削りを入れている。

抉付各種材 (34~36等) : **34**は両端が削られた長い紡錘形の板で、側縁に1ヵ所の浅い抉りが入る。**35**は角棒状で両端部のねじれの位置にある削りが、浅い抉りにみえる。**36**は断面かまぼこ形で、曲面側の両端が一段低くなる抉りが入る。その他も片端に浅い抉りが入るものが多い。

有溝各種材 (37等) : **37**は短くカットされた枝の側面に、片側に開口する浅いV字溝が入る小型品。木口面は両面とも削りが入っている。

有孔各種材 (38等) : **38**は二つの角孔が確認できる板。舷側板の利用品か。

角材・その加工製品 (39・47) : 角材は割材や厚板から作られ、その製作過程から連続して製品化加工に入るものもあるのだろう。

割材・その加工製品 (40・41・48~50等) : トネリコ属材を割材にしたものが多い。加工は各稜線を削って丸みをつけたり、面取りすることが主である。

板材・その加工製品等 (42~46・51~54等) : **42・43**は厚板を加工した小型品。**44~46**は細板材の加工品。**53**は箱物の薄板か。**51・52・54**は台板であろうか。他に捧酒箸状やつまみ状の製品、スギの細板材や薄柁目板(箱物・曲物の材料)も出土している。。

枝材 (図未掲載) : 51点出土している。トネリコ属やヤナギ属が多い。一部、焼痕の見られるものもある。とくにブナの焼枝材は、本州材移入、あるいは苗の持込みの可能性を示し興味深い。

丸木材・その加工製品等 (55等) : **55**は対面する二面から切り倒した、長さ約3mの原木の切り出し部分を図化したもの。他に股木を含めて21点出土している。トネリコ属やイヌエンジュが目立つ。

木端 (図未掲載) : 加工途上の切り落とし木片や、製品切断で出る木片。

切片 (図未掲載) : 加工途上や製品切断時の削り落とし小片、剥片。

炭化材 (図未掲載) : 大きさ、木取りとも様々。加工のため意識的に焼いたものだけかは不明。

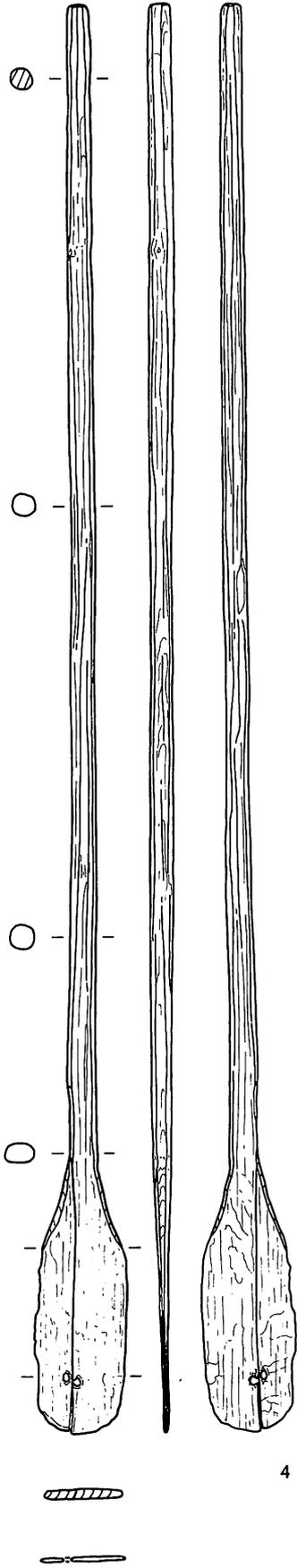


図Ⅶ-24 木製品(1の1)

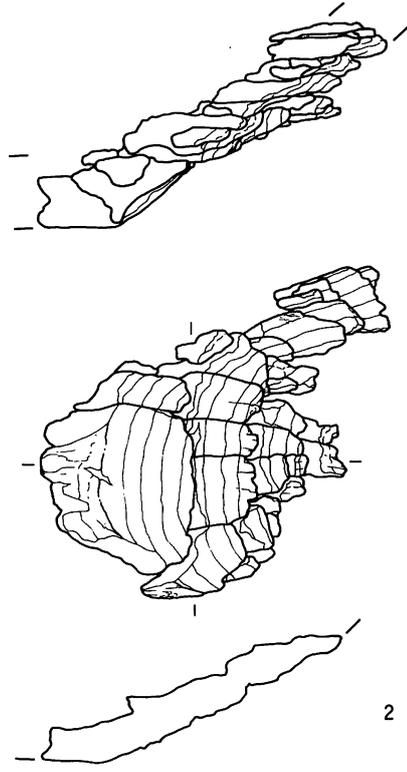


図Ⅶ-25 木製品(1の2)

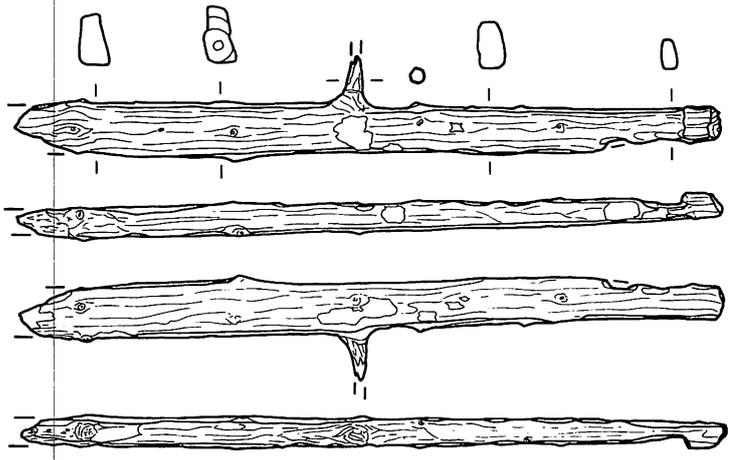
4 木製品



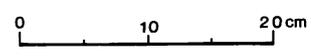
4



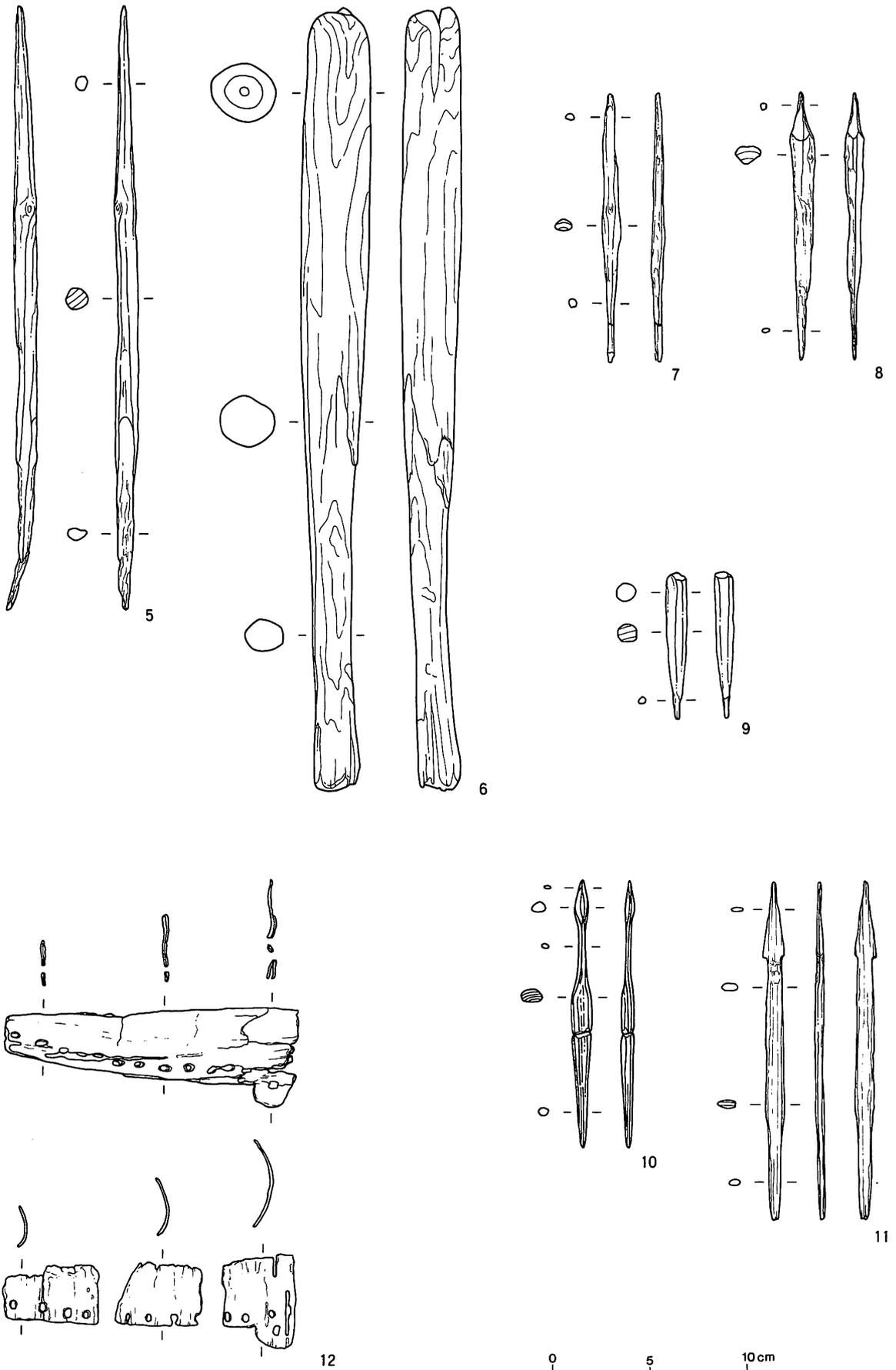
2



3



図Ⅶ-26 木製品(2)



図Ⅶ-27 木製品(3)

4 木製品

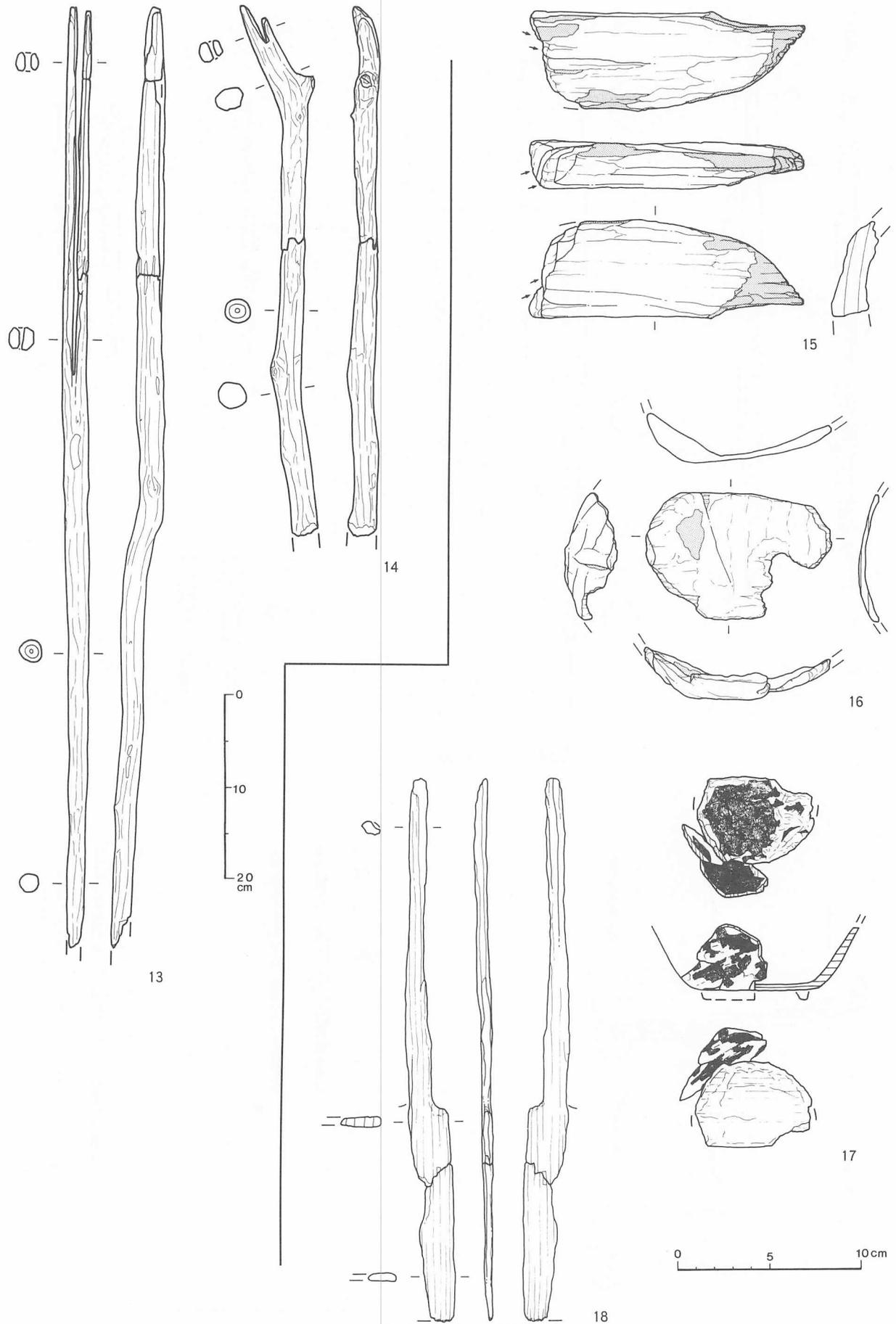
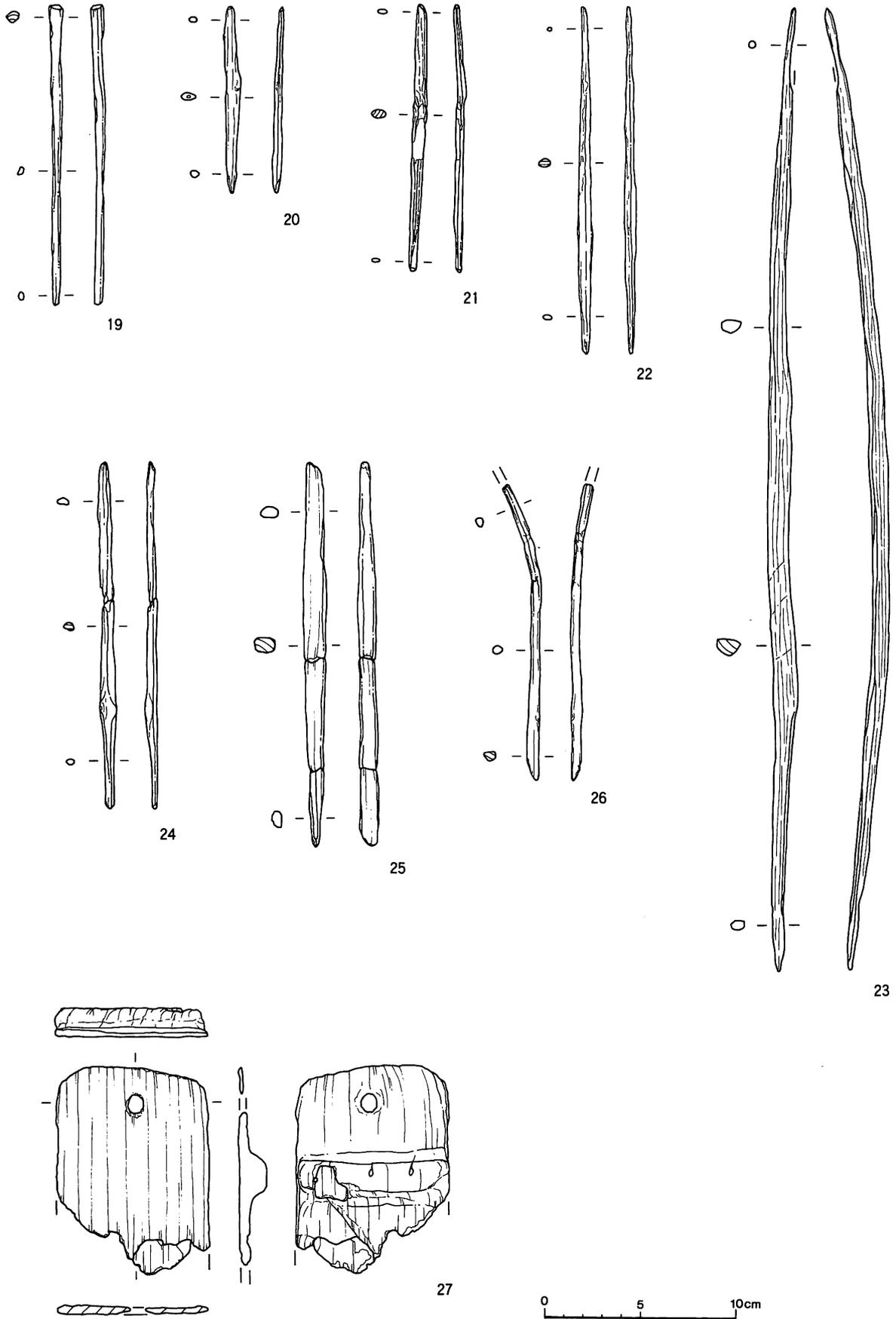
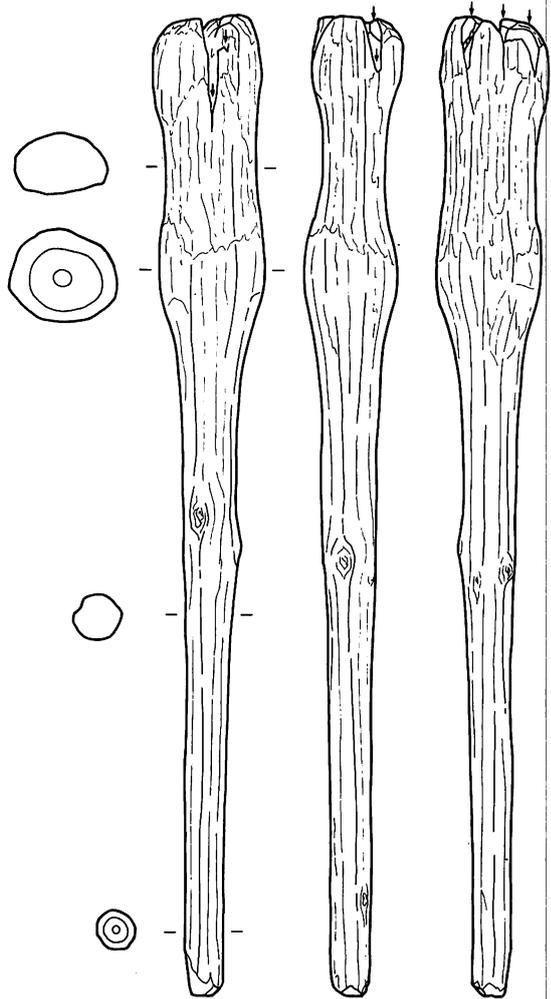


图 VII-28 木製品(4)



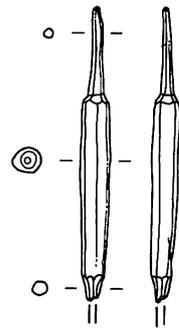
図Ⅶ-29 木製品(5)

4 木製品

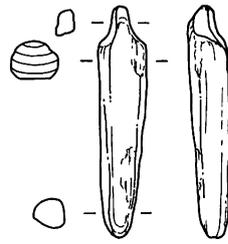


29

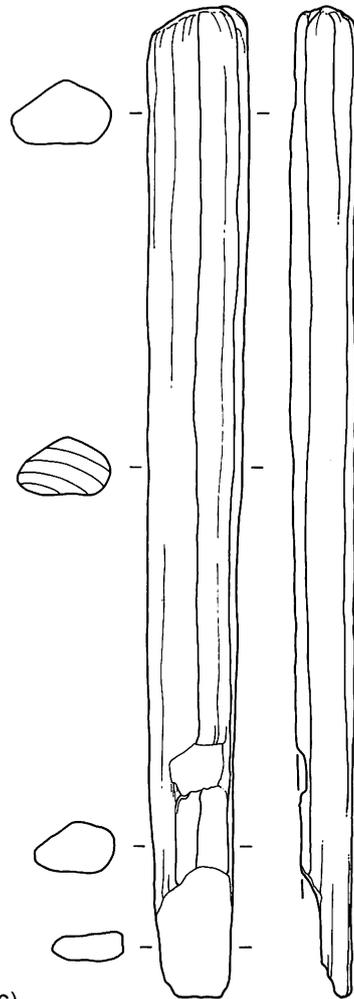
0 10 20cm



28

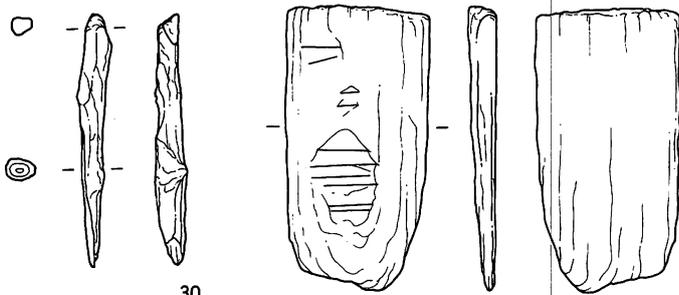


31



32

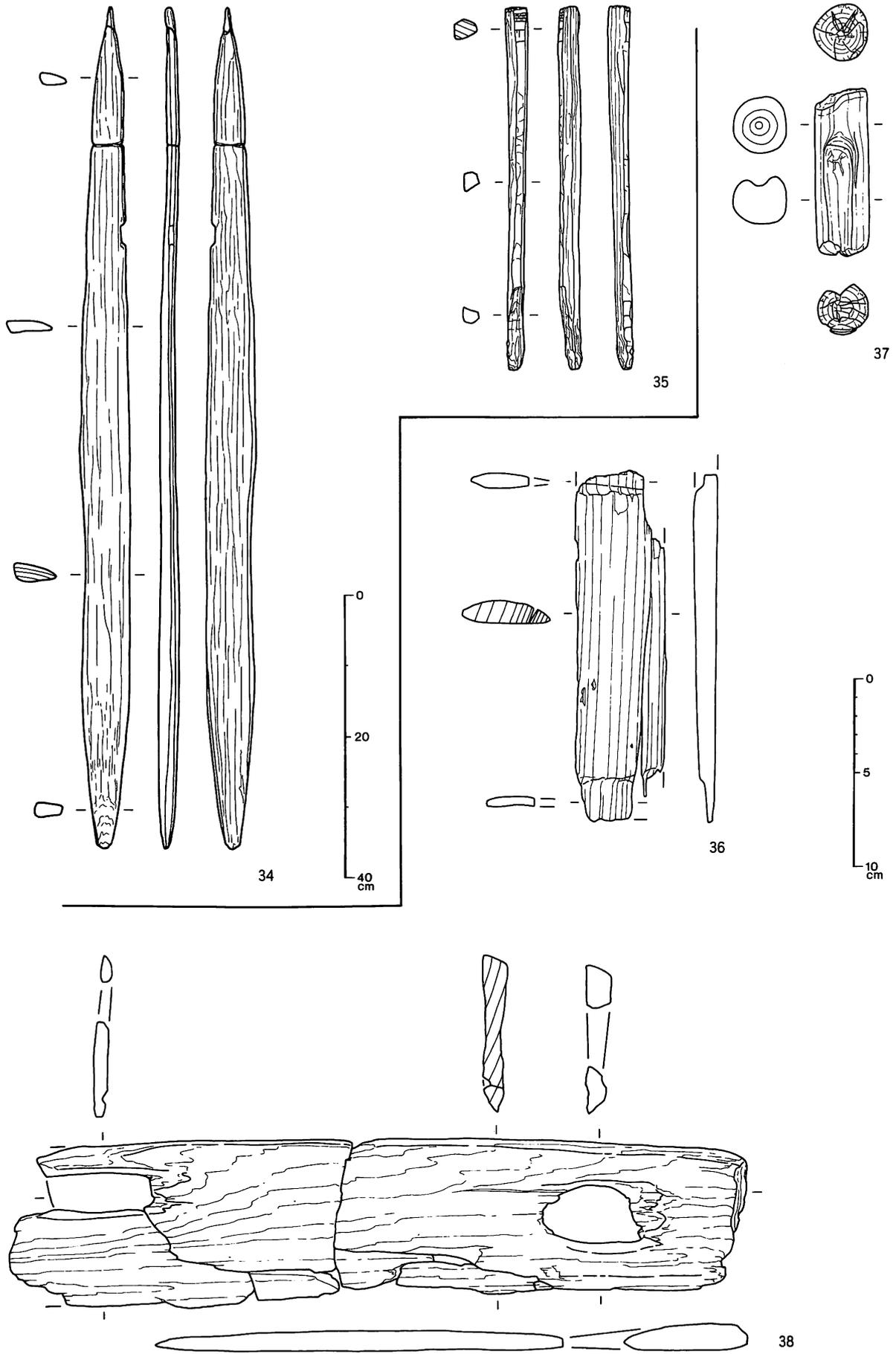
0
5
10
cm



30

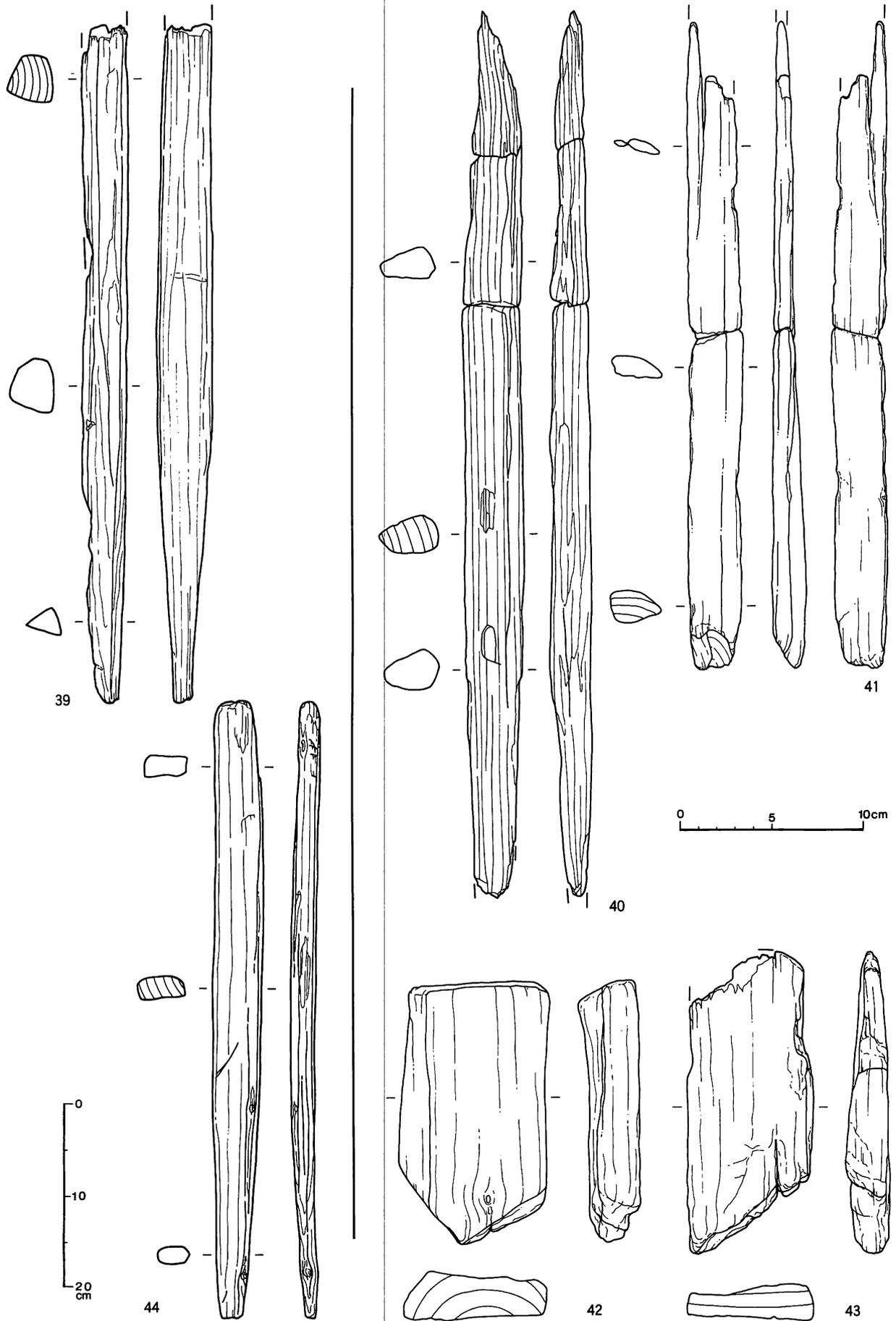
33

图Ⅶ-30 木製品(6)

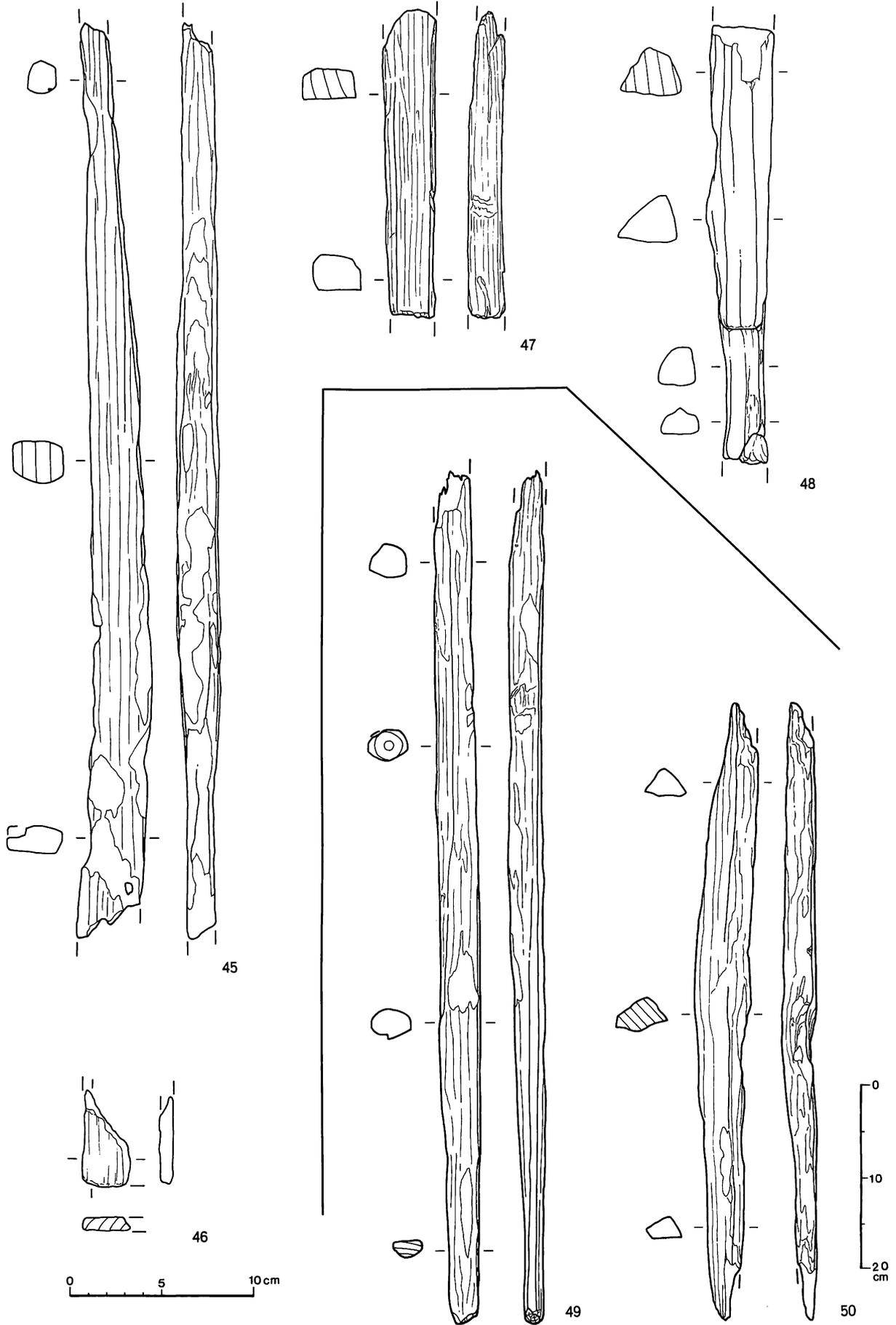


図Ⅶ-31 木製品(7)

4 木製品



图VII-32 木製品(8)



図Ⅶ-33 木製品(9)

4 木製品

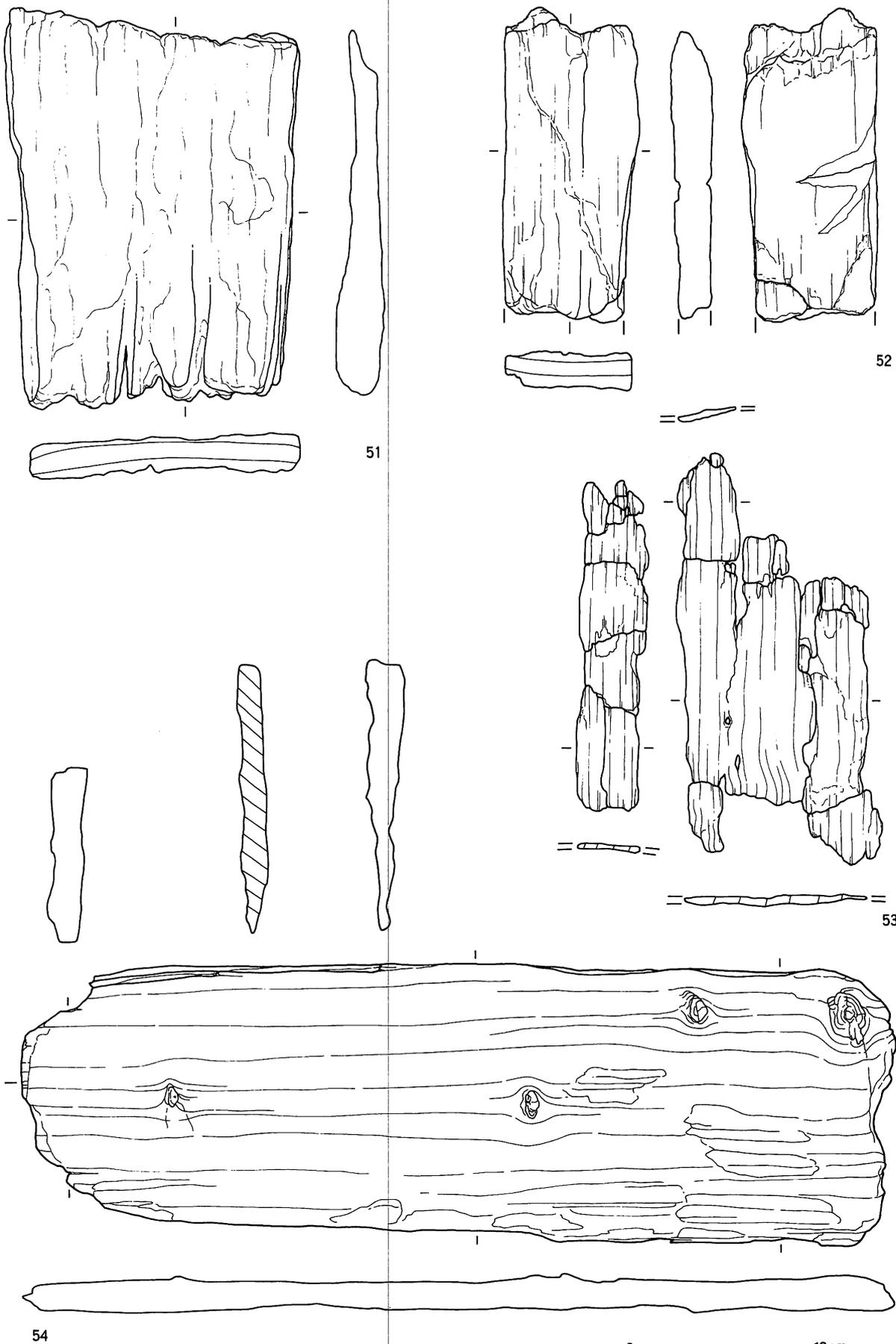
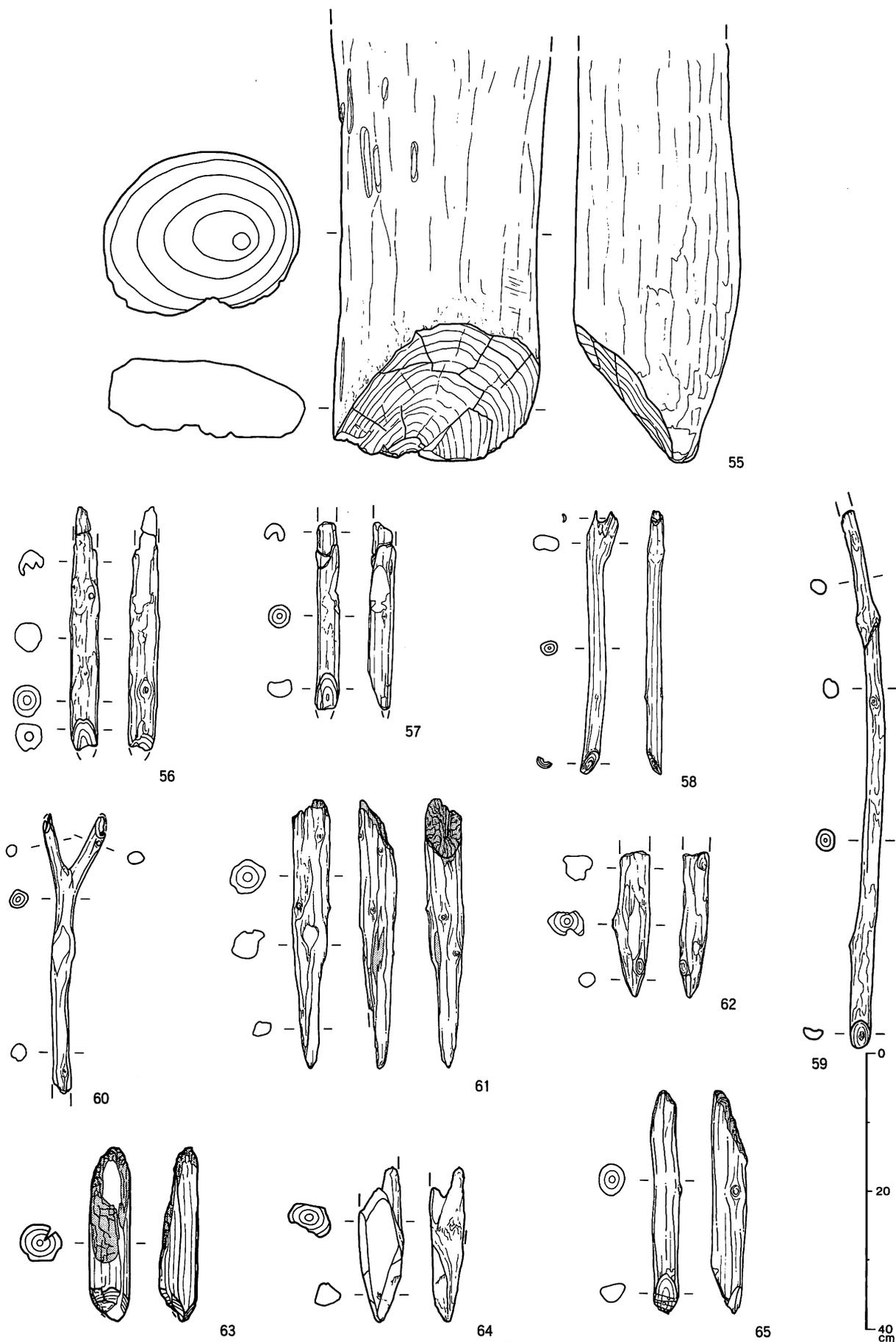


图 VII-34 木製品(10)

0 5 10cm



図Ⅶ-35 木製品(11)

4 木製品

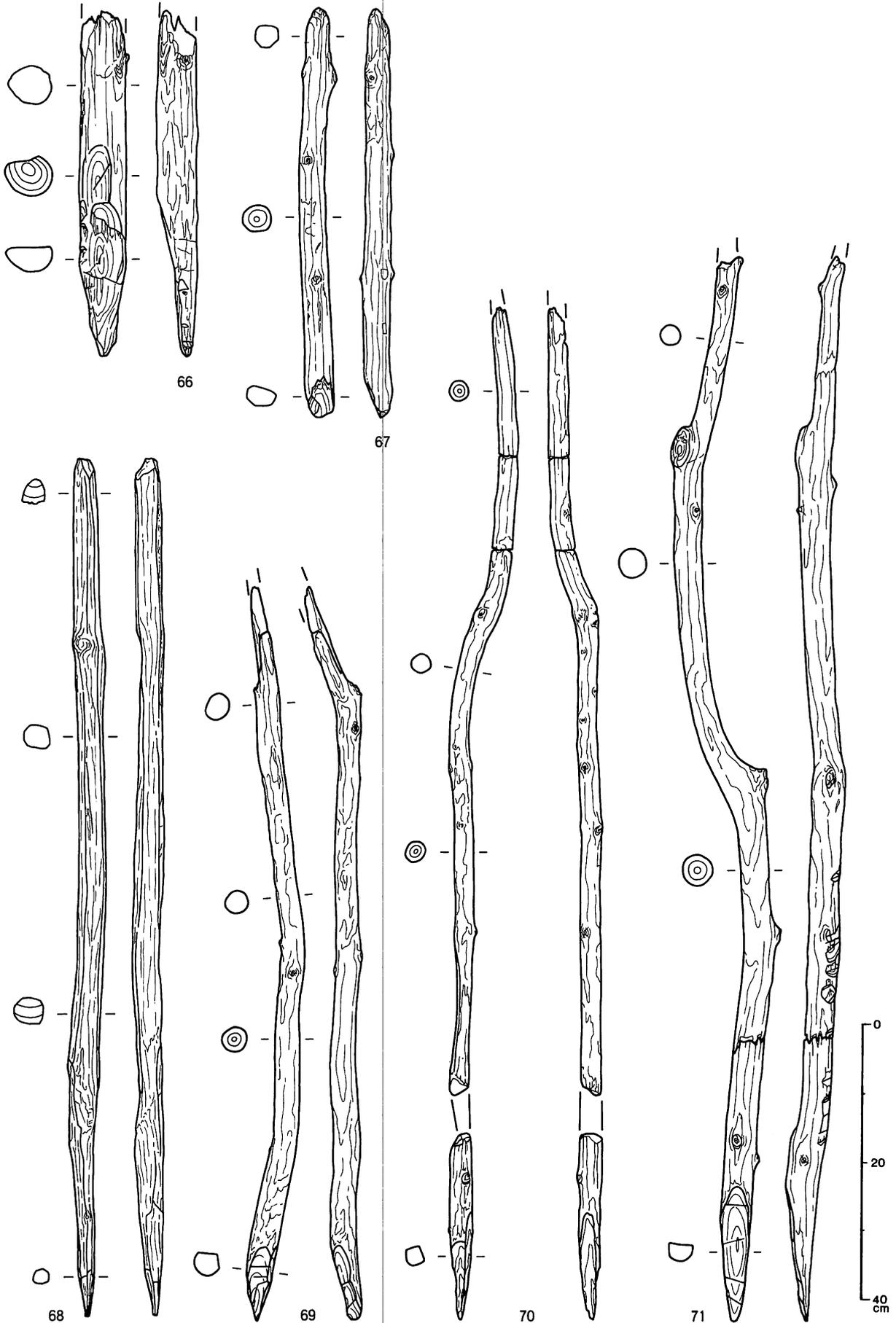
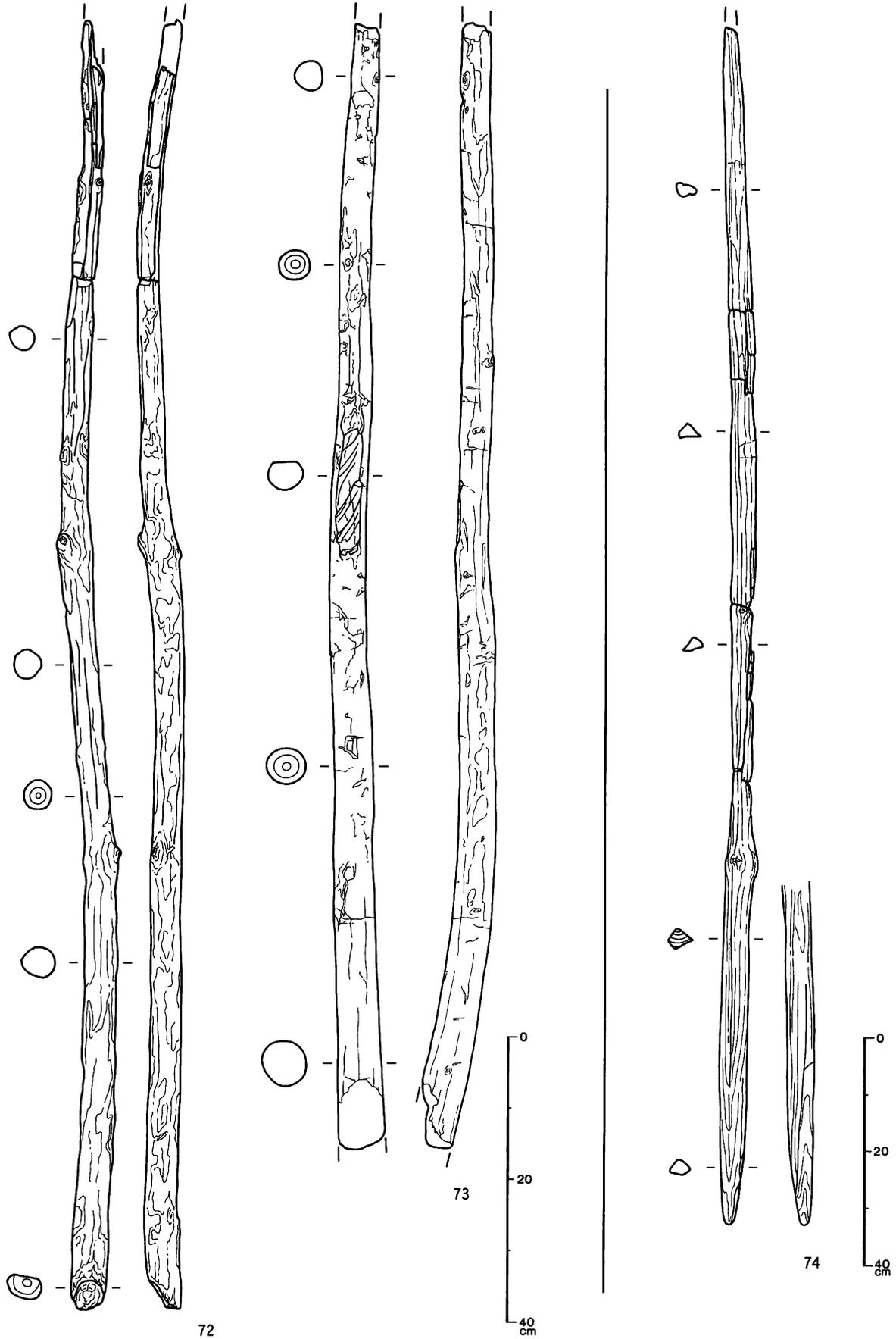


图 VII-36 木製品(12)



図Ⅶ-37 木製品(13)

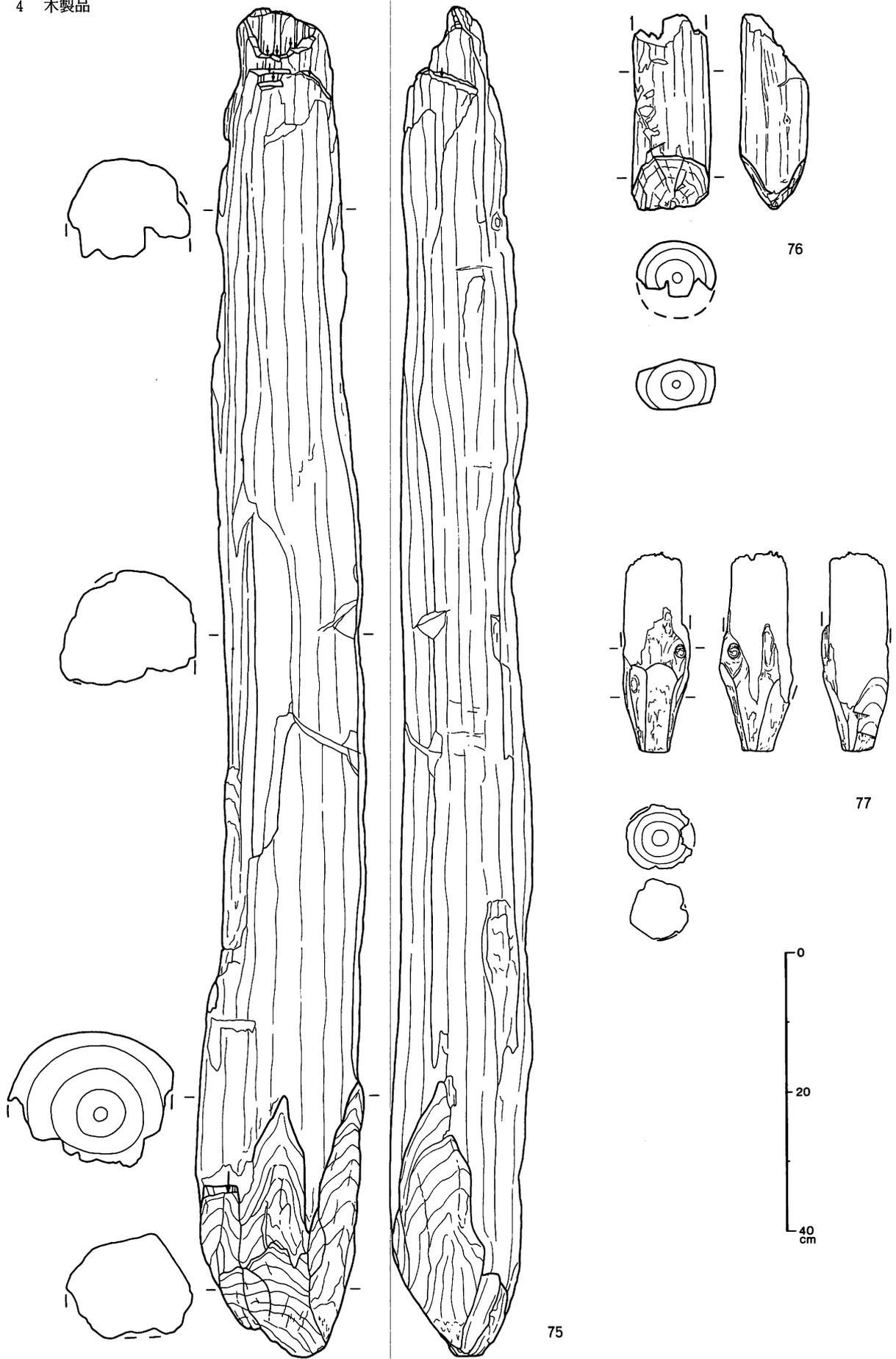
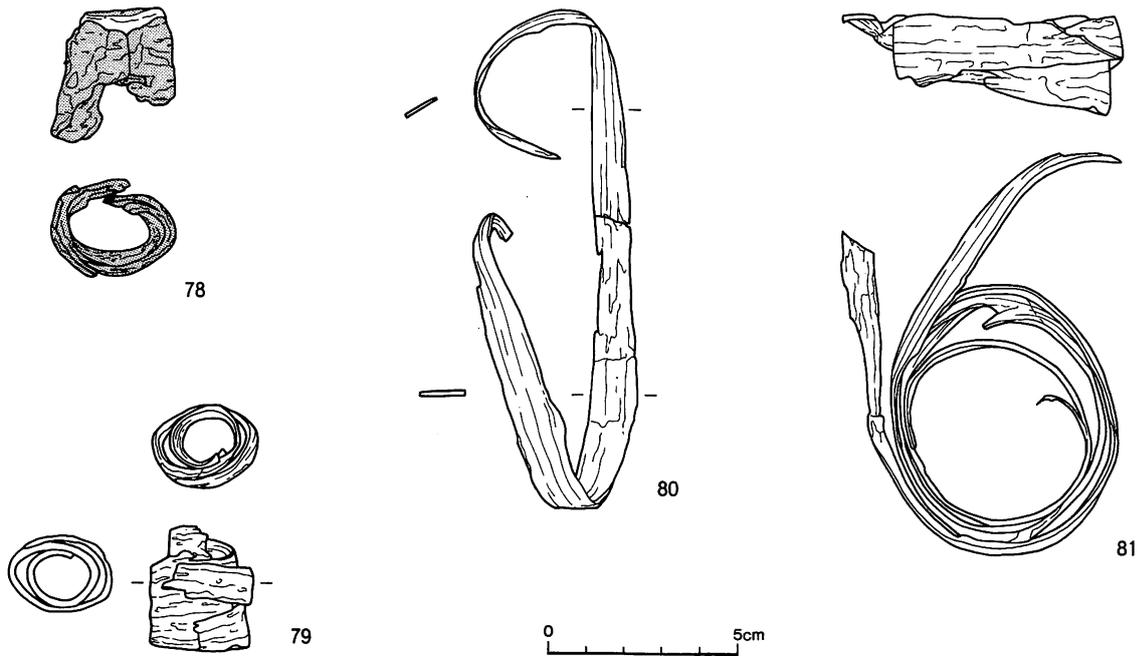


图 VII-38 木製品(14)



図Ⅶ-39 樹皮

杭・建築部材・建材等

丸杭状製品等 (56~59等)：杭と思われるが、下端がほぼ一面で切り落され杭先らしくないもの。**58**は股木部分の両枝元も切り落としている。

刺し杭 (図未掲載)：径3 cm前後で、長さ50 cm程度の細く短い杭を刺し杭とした。

細杭 (図未掲載)：径3 cm前後で、長さ50 cm以上と思われるの細く長い杭を細杭とした。

二股杭 (60等)：股部で他のものを受けることを目的とした杭。**60**は股木部分の両枝途中に切痕が見られるが、杭先を欠損する。

杭 (61~71等)：尖端に二面以上の切痕や削りが見られ、杭先らしいもの。**68**は割材から削り出された杭で、ほかはすべて丸木杭である。**69~71**は股木部や湾曲のある長杭の上端部欠損品である。

建築部材 (72~74)：**72**は木元に切痕のある丸木材で、表面全体に叩き締められたような痕がある。**73**は両端を欠くが太さのある丸木で、中央部に削りで長さ17 cmほどの平坦面を作っている。二点とも桁または梁材であろう。**74**は割材を削った2 m以上の長材で、屋根または壁の材と思われる。三点とも樹種はトネリコ属である。

柱 (75~77)：**75**は元側に幾多の削りを入れて先を作った巨木柱で、上端は切断されている。原材であろうか。**76**は対面する二面を削った柱根、**77**は端は平らな木口面を残すが、大小七面を削り落された先の柱根である。

樹皮加工品

樹皮 (78等)：**78**などの焼けている樹皮は灯火用の可能性がある。小片は切片であろう。

渦巻状樹皮 (79等)：本体から剥がされた樹皮は丸まり渦巻状となる。これも灯火用や結束用の原料となるものであろう。

带状樹皮 (80・81等)：丸まったものもあるが、幅を一定に揃えられた樹皮で、結束に用いられるものと考えられる。

(三浦)

表Ⅶ-6 掲載木製品(1)

製品図号 番号	遺物名称	発掘区	層位	遺物番号	樹種 皮厚	樹種	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	縮尺	備考
1 16	船歌切断品片	西 D 56 d	IB1	269	樺木	カツラ	(129.4)	(43.9)	4.0	総量(4000.0)	1/618	保存処理後実測、劣化著しい
2 17	船片	西 F 56 d	IB2	271	樺木	トネリコ属	(27.6)	(21.0)	(7.5)	総量(460.4)	1/634	保存処理後実測、劣化著しい
3 17	車覆受台部片	西 I 54 b	IB2	349	榎目	モミ属	(56.6)	(7.6)	2.7	(370.0)	1/61	枝利用式軸
4 17	早覆	東 C 66 c	IB1	75	1/4割	コナラ属	166.2	10.6	2.8	1050	1/61	水窪部に補修孔
5 18	回転式離頭柄中柄部	東 B 66 b	IB1	52	1/4割	アジサイ属	30.9	1.2	1.2	20.2	1/31	一本式
6 18	魚叩き棒	東 E 67 c	IB1	2	丸木	ハシドイ属	40.35	3.5	3.1	236.6	1/31	
7 18	矢中柄	東 G 66 c	IB5	34	1/4割	ツルウメモドキ属	13.7	0.85	0.65	(3.0)	1/32	
8 18	矢中柄	東 C 66 b	IB3	133	1/4割	アジサイ属	13.6	1.25	0.95	5.4	1/31	
9 18	矢(鋸)	西 C 56 a	IB1	243	1/4割	アジサイ属	7.45	1.1	0.9	4.0	1/31	
10 18	矢(鋸)	東 I 67 d	IB1	27	1/4割	アジサイ属	13.9	0.7	0.4	3.1	1/31	縁部と中柄部の一体化したもの
11 18	矢(鋸)	東 D 66 a	IB3下	180	板目	アジサイ属	17.4	1.1	0.9	4.0	1/31	縁部と中柄部の一体化したもの
12 18	小刀樹皮製鞘	西 F 56 d	IB1	274	樹皮	カバノキ属(細葉)	15.0	5.1	0.45	(7.5)	1/311	折りたたみ加工
13 19	狭み木?片	東 C 64 c, C 65 b	IB1	176-1	丸木	トネリコ属	(102.0)	2.7	3.1	(400.0)	1/63	狭み部長く残っていない、自然の割れか?
14 19	狭み木?片	東 C 64 c, C 65 b	IB1	176-2	丸木	イヌエンジュ	(57.4)	5.1	3.1	(310.0)	1/62	狭み部 残っていない、自然の割れか?
15 19	盆状容器切断品片	東 C 67 b	IB1	90	横木	○オニグルミ	(14.8)	(5.3)	2.65	(96.3)	1/31	舟底の再利用か?
16 19	葉木淺鉢片	西 E 56 c	IB1	313	横木	○モクレン属	(10.0)	(6.9)	2.8	(31.2)	1/31	再加工のような削り込みあり
17 19	漆碗片	東 B 67 d	IB2	102	横木	ケヤキ属	縁(3.6)	縁 6.2	0.45	(13.6)	1/33	内朱外黒朱紋様
18 19	碗片	東 C 66 d	IB1	82	榎目	モミ属	29.6	(2.2)	0.7	(16.2)	1/32	未製品か?
19 19	細串	東 H 67 b, 167 a	IB5	24	1/4割	ツルウメモドキ属	15.6	0.7	0.75	2.5	1/32	調整なし
20 19	楕円串	西 F 56 c	IB1	283	1/4割	ハギ属	9.7	0.7	0.45	1.5	1/31	短く幅広
21 19	楕円串	東 I 66 c	IB1	16	1/4割	アジサイ属	13.7	1.0	0.6	2.1	1/31	両端摩擦
22 19	両先串	東 D 67 a	IB3	117	1/4割	アジサイ属	18.1	0.8	0.6	2.9	1/31	
23 19	両先長串	東 C 64 c	IB2	174	1/6割	イチイ	51.4	1.4	1.0	(28.4)	1/31	粗い調整
24 19	両先串	東 K 65 a	IB1	345-2	1/4割	ハシドイ属	18.0	0.9	0.6	3.6	1/31	
25 19	角串	東 D 66 d	IB2	100	1/4割	トネリコ属	20.0	1.2	1.0	11.2	1/33	
26 19	三角串	東 K 65 a	IB1	345-1	1/4割	ハシドイ属	(15.4)	0.6	0.55	(3.1)	1/31	粗い調整
27 20	下駄片	東 B 66 b	IB1	47	追証	ハリギリ	(10.9)	8.0	1.5	(45.7)	1/34	連歯下駄、後半部欠損
28 20	花矢	東 J 64 c	IB1	348	1/4割	アジサイ属	(11.5)	1.15	1.45	(6.4)	1/31	紋様なし
29 20	制敵棒	東 D 66 a	IB1	91	丸木	コナラ属	77.1	8.5	7.3	1400	1/61	大型の横縫か?
30 20	ピン状製品	東 J 65 a	IB2	347	丸木	広葉樹	(9.9)	1.25	1.0	(6.5)	1/31	ねじれた枝利用
31 20	つまみ付軸状製品	東 C 66 d	IB1	81	1/6割	サクラ属	9.1	1.9	1.6	16.6	1/31	つまみ挟り出し
32 20	軸状製品	東 E 66 d	OB	11	板目	トネリコ属	39.2	4.0	2.65	(243.6)	1/31	断面三角形
33 20	榎状製品	西 H 56 a	IB1	340	板目	ヒトコ?7777777777?	11.2	5.6	1.1	36.2	1/31	
34 21	挟付盾部材加工製品	東 D 67 c	IB1	125	板目	トネリコ属	118.5	7.1	3.8	1040	1/61	両端尖った板状、側縁に浅い切り
35 20	挟付部材加工製品	東 E 66 c	OB	14	1/6割	コナラ属	52.25	3.15	3.0	320.0	1/61	角棒状、浅い切り
36 21	両端部挟付板材片	西 I 53 d	IB2	385	榎目	ヒトコ?7777777777?	(18.6)	4.7	1.25	(63.2)	1/32	断面カマボコ形、同一面の両端に段差
37 21	有溝丸木材	東 D 66 d	IB1	101	丸木	トネリコ属	8.9	2.85	2.95	52.4	1/31	短く切られた枝、片側に開口するV字溝
38 21	有孔板材片	東 C 66 b, D 66 a	IB1	134	追証	トネリコ属	(38.3)	8.9	1.5	総量(133.4)	1/38	保存処理後実測、二つの角孔
39 21	角材加工製品片	東 E 67 a	OB	1	1/8割	トネリコ属	(75.1)	5.0	5.1	(1260)	1/61	
40 21	部材加工製品片	東 B 66 b	IB1	49	1/4割	トネリコ属	(41.75)	3.25	2.2	(160.0)	1/35	
41 21	部材加工製品片	西 E 56 d	IB1	315	1/4割	トネリコ属	(35.2)	2.9	1.85	(80.0)	1/32	

表Ⅶ-7 掲載木製品(2)

製品図版 番号	遺物名称	発掘区	層位	遺物番号	木取り樹種 皮痕	樹種	種	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	縮尺	破片	備考
42 22	板材加工製品	東 C66a	IB1	58	板目		イヌエングジュ	14.3	8.0	3.2	203.7	1/3 1	1	平面五角形
43 22	板材加工製品片	西 F56c	IB1	284	板目		ハンノキ属	(16.4)	6.85	2.4	(117.6)	1/3 1	1	片端円頭形
44 22	細板材加工製品	西 F56c	IB1	85	板目		トネリコ属	67.2	5.2	2.6	580	1/6 7		
45 22	細板材加工製品片	西 E57a	IB1	314	板目		モクレン属	(50.7)	3.4	2.4	(210.0)	1/3 1		両端欠損
46 22	細板材加工製品	東 J65a	IB1	346	追証		ニレ属	(5.2)	(2.6)	0.75	(5.3)	1/3 1		
47 22	角材	東 D67c	IB1	124	1/4割		トネリコ属	(19.5)	3.0	2.7	(81.7)	1/3 4		
48 22	割材片	南 P63c	IB3	③-2	1/6割		トネリコ属	(23.8)	3.4	3.1	(106.1)	1/3 3		
49 22	割材片	東 D66bc	IB1	137	1/4割		トネリコ属	(93.1)	4.4	3.8	(820)	1/6 1		心持部分あり
50 22	割材片	西 E56d	IB1	312	1/6割		トネリコ属	(66.6)	6.1	3.6	(500)	1/6 1		
51 23	板材片	西 G56a	IB1	291	板目		カツラ	21.2	15.4	2.6	499.6	1/3 1		方形の台板か?
52 23	板材片	西 F56c	IB相	338	板目		トネリコ属	(16.5)	7.0	2.3	(159.1)	1/3 2		
53 23	板材片	西 I54d, H54c	IB1	388	板目		ハリギリ	(21.7)	(10.1)	0.5	27.7	1/3 14		保存処理後実測、薄板
54 23	板材片	西 H55d	IB2	344	板目		モミ属	46.15	14.7	2.2	900	1/3 1		台板か?
55 24	切り出し原材	西 F56cd	IB1	294	丸木	○	トネリコ属	(289)	31.0	23.5	-	1/8 2		対面二面で切断、切断部のみ図示
56 24	丸杭状製品片	東 F67ad	IB1	15	丸木		トネリコ属	(31.2)	4.1	4.8	(305.4)	1/8 3		下端対面二面削り
57 24	丸杭状製品片	東 I67d	IB2	25	丸木		トネリコ属	(26.8)	3.3	3.4	(185.1)	1/8 1		下端切痕
58 24	丸杭状製品片	東 D66d	IB2	99	丸木		アジサイ属	37.6	4.0	2.5	170.0	1/8 2		股木、元先切痕、両枝先切痕
59 24	丸杭状製品片	南 P64a	IB3	③-10	丸木		トネリコ属	(77.8)	3.4	3.4	(450.0)	1/8 2		元先切痕
60 24	二股杭	東 D67a	IB1	118	丸木		ヨウラクツツジ属?	(41.0)	8.7	3.1	(208.3)	1/8 1		股木、下端欠損、両枝先切痕
61 24	杭先	東 G66d	IB3	33	丸木	○	コナラ属	38.6	5.3	5.2	(478.4)	1/8 1		下端直交二面削り、削り部長い、上端焼
62 24	杭先	東 I67c	攪乱	35	丸木		カバノキ属	(20.9)	5.3	3.7	(198.8)	1/8 1		枝払い切痕あり
63 24	杭先	東 C66a	IB1	138	丸木	○	トネリコ属	24.8	5.7	5.3	364.6	1/8 1		下端六面削り、上端焼
64 24	杭先	西 I54b	IB1	355	丸木		ヤナギ属	(22.4)	6.3	4.9	(286.6)	1/8 1		下端三面削り
65 24	杭先	東 C66a	IB3下	178	丸木	○	コナラ属	32.8	3.9	5.0	371.2	1/8 1		下端二面削り、上端焼
66 24	杭先	西 I53d	IB2	351	丸木		ヤナギ属	(49.7)	6.7	5.9	(940)	1/8 1		下端二面削り、うち一面段削り
67 24	杭	東 F65b, G65a	IB1	287	丸木		トネリコ属	58.9	4.8	4.6	660	1/8 1		元先二面削り
68 24	杭	東 C67cd	IB1	115	1/4割		コナラ属	123.4	4.5	4.2	1350	1/8 1		下端尖る割材の杭
69 25	杭	西 I53c	IB1	354	丸木		イヌエングジュ	(104.3)	4.05	4.8	(840)	1/8 2		股木、元先直交三面削り
70 25	杭	東 B65c	IB1	144	丸木		トネリコ属	(145.0)	3.7	3.6	(790)	1/8 4		下端直交二面削り、中間部欠損
71 25	杭	東 D66bc	IB1	136	丸木		イヌエングジュ	(152.85)	7.8	4.8	(1850)	1/8 2		元先直交二面削り、枝払い切痕あり
72 25	建築部材片	東 D66ad	IB2	135	丸木		トネリコ属	(178.0)	5.0	5.5	(2030)	1/8 6		元側切痕、全面に叩き?痕
73 26	建築部材片	西 E56bc	IB3	285	丸木		トネリコ属	(155.0)	6.6	6.3	(2840)	1/8 1		両端欠損、中央部に平垣面削り
74 26	建築部材片	東 C66bc	IB1	78	1/4割		トネリコ属	(208.5)	5.7	4.0	840	1/10 15		保存処理後実測、断面三~五角形
75 26	柱材切断品	東 B67cd, B68a	IB3	112	丸木		トネリコ属	193.5	23.5	19.4	4380	1/8 2		元側削り、末側切痕、切り出し材か?
76 26	柱材片	西 C55c	IB4	326	丸木		トネリコ属	(27.5)	10.8	9.6	(1550)	1/8 1		下端対面二面削り
77 26	柱材片	東 D65d 榎	IB1	394	丸木		トウヒ属	(28.6)	10.3	9.8	(1310)	1/8 1		下端七面削り(大三小四)、先は平ら
78 27	樹皮片	東 D66c	IB1	256	樹皮	○		3.6	3.25	2.5	5.0	1/2 1		ほぼ全面焼け、灯火用?
79 27	渦巻状樹皮	西 G56b	IB2	297	樹皮	○	カバノキ属?(肉質)	3.3	2.75	2.2	4.0	1/2 1		
80 27	細帯状樹皮	西 F56d	IB1	279	樹皮	○		13.1	4.3	0.1	3.6	1/2 3		
81 27	細帯状樹皮	西 F56b	IB1	288	樹皮	○		10.6	7.35	2.6	10.2	1/2 1		径約5cmで三周半巻

表Ⅷ-8 未掲載木製品等(1)

遺物名称	発掘区	層位	遺物番号	木取り	樹種	種	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	破片	備考
朱漆膜片	J60a	0B	390	—	—	—	—	—	—	—	—	—
両ピン状製品	東 E67a	IB1	8	丸木	トネリコ属	トネリコ属	9.4	1.3	1.1	11	1	薄膜状小片
挟付割材加工製品	東 H66c	IB1	3	偏1/8割	トネリコ属	トネリコ属	33.8	3.4	2.7	117	1	両端とも尖頭削り
挟付割材加工製品	東 H66bc	IB1	4	1/8割	トネリコ属	トネリコ属	17.2	2.6	1.7	39	1	片端面取りで挟り付き
挟付細板材片	西 F56d	IB2	308	板目	トネリコ属	トネリコ属	26.8	(4.2)	1.2	(113)	2	片端面取りで挟り付き、逆端焼
挟付丸木加工製品	東 E67a	IB1	10	丸木	トネリコ属	トネリコ属	35.0	3.9	4.0	361	1	面取り削り込み、中央部に溝状削り、片端切痕
有溝割材加工製品	東 G67b	IB5	39	偏半割	コナラ属	コナラ属	12.9	3.7	2.3	35	1	面取り、溝はつまみの削り出しの結果か
有孔角材片	西 G56a	IB1	286	板目	ハンノキ属	ハンノキ属	(9.5)	(5.2)	(2.6)	(93)	3	片端切痕
樽酒筥(筒)状製品	西 H56b	IB2	377	板目	トネリコ属?	トネリコ属?	15.3	1.6	0.4	15	1	片端切痕
つまみ状製品	西 F56a	IB2	309	板目	トネリコ属	トネリコ属	4.2	3.0	2.3	42	1	—
割材加工製品	東 H66b, I66a	IB1	5	1/12割	トネリコ属	トネリコ属	45.7	9.4	4.5	835	1	面取り削り込み
割材加工製品	東 E67bc	IB5	38	1/4割	トネリコ属	トネリコ属	11.0	4.9	2.6	58	1	面取り、切痕あり
割材加工製品	東 C66b	IB2	64	1/4割	イヌエンジュ	イヌエンジュ	13.4	5.2	2.5	75	1	面取り、片端切痕
割材加工製品片	西 F55d	偏(四割)	306	1/4割	トネリコ属	トネリコ属	(26.5)	(6.8)	(2.9)	(357)	3	割表面のみ偏った面取り、両端切痕
割材加工製品片	西 H54c	IB4	384	1/8割	トネリコ属	トネリコ属	(45.3)	4.8	3.8	(602)	26	中央部から片端へ段削り、逆端に緩い挟り
偏割材加工製品片	西 H55d	IB3	343	板目	トネリコ属	トネリコ属	(51.7)	7.9	2.9	614	3	断面凸レンズ状、片端薄削り、逆端に緩い挟り
半割材加工製品片	東 C64c, C65b	IB2	175	半割	トネリコ属	トネリコ属	(36.8)	3.8	2.6	(138)	2	断面等脚台形、片端尖削り
半割材加工製品片	西 C56b	IB2	177	半割	イヌエンジュ	イヌエンジュ	19.0	5.0	2.8	199	1	断面等脚台形、片端尖削り
丸木加工製品片	西 C55b	IB1	235	心持	トネリコ属	トネリコ属	(36.5)	(3.2)	(3.0)	(272)	10	三面面取り、片端やや尖り
加工材片	東 C66ab	IB3下	179	割?	トネリコ属	トネリコ属	—	—	—	(1630)	多	うっわ?、面取り・削り込み・挟り等あり
木端	東 C66b	IB2	69	板目	トネリコ属	トネリコ属	(6.8)	(1.8)	(0.9)	計(30)	7	—
木端	東 A68a	IB4	223	板目	トネリコ属	トネリコ属	(3.2)	(2.2)	(0.9)	計(17)	7	—
木端	西 D56d	IB2	248	板目	クワ属	クワ属	8.8	2.4	1.0	21	1	枕先?
木端	西 D56c	IB1	252	板目	トネリコ属	トネリコ属	3.9	2.1	0.5	12	1	—
木端	西 D56d	IB1	262	板目	ニレ属	ニレ属	6.0	2.9	0.8	19	1	—
木端	西 D56c	IB1	265	板目	ニレ属	ニレ属	8.1	3.7	1.2	24	1	枕先?
木端	西 E56b	IB1	322	板目	コナラ属	コナラ属	(8.9)	2.7	0.9	(31)	2	—
木端	西 D55c	偏(四割)	337	板目	トネリコ属	トネリコ属	(7.3)	(3.5)	(0.7)	計(51)	13	—
木端	西 H54b	IB1	366	板目	トネリコ属	トネリコ属	6.0	6.2	1.2	40	1	—
切片	東 C66b	IB1	62	板目	ハンノキ属	ハンノキ属	(11.8)	(2.5)	(1.0)	(25)	4	—
切片	東 C66b	IB1	65	板目	オニグルミ	オニグルミ	20.9	2.9	0.4	22	1	—
切片	東 C66b	IB2	68	板目	トネリコ属	トネリコ属	(7.9)	2.4	1.0	計(24)	8	—
大型切片	東 B68a	IB1	114	板目	トネリコ属	トネリコ属	14.4	4.5	0.9	38	1	—
切片	東 D67b	IB1	121	板目	イヌエンジュ	イヌエンジュ	12.1	3.3	0.6	計24	4	—
切片	東 D67b	IB1	122	板目	トネリコ属	トネリコ属	5.8	1.6	0.4	11	2	—
切片	東 A66d	IB3下	220	板目	トネリコ属	トネリコ属	(8.3)	(4.4)	(1.0)	(36)	3	—
切片	西 C56c	IB1	225-1	板目	モクレン属	モクレン属	6.9	4.0	0.5	17	1	—
切片	西 C56c	IB1	225-2	板目	イヌエンジュ	イヌエンジュ	(8.9)	(3.4)	(0.6)	(17)	2	—
切片	西 C56c	IB1	228	板目	ヤナギ属	ヤナギ属	(6.8)	(3.2)	(0.6)	(18)	3	—
切片	西 C56c	IB1	229	板目	トネリコ属	トネリコ属	(7.9)	(2.4)	(0.4)	計(33)	4	—
切片	西 D56c	IB1	250	板目	トネリコ属	トネリコ属	8.9	3.7	0.9	24	3	—

表Ⅶ-9 未掲載木製品等(2)

遺物名称	発掘区	層位	遺物番号	木取り	樹種	種	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	破片	備考
切片	西 D56c	IB1	264	板目		トネリコ属	(4.0)	(2.7)	(0.6)	(14)	2	先尖、頭側焼
切片	西 D56c	IB1	268	柱目		トネリコ属	3.0	3.4	0.6	13	1	
切片	西 D56c	IB1	268	柱目		イヌエンジュ	4.5	4.4	0.6	17	1	
切片	西 F56c	IB1	304	柱目		イヌエンジュ	5.3	3.4	0.5	13	1	
切片	西 D56c	IB2	329	柱目		トネリコ属	—	—	—	計(27)	多	
切片	西 D56ab	IB2	331	柱目		トネリコ属	—	—	—	計(30)	多	
切片	西 E56d	欄(1B欄)	339	柱目		オニグルミ	(7.2)	4.3	0.8	(25)	7	
切片	西 F56d	IB4	341	板目		ハリギリ	(9.3)	(6.8)	(1.3)	計(75)	3	
切片	西 I54b	IB1	357	板目		トネリコ属	(21.2)	2.6	0.5	計(29)	5	
切片	西 I54b	IB1	358	柱目		トネリコ属	7.7	1.7	0.2	20	多	
切片	西 I54b	IB1	359	板目		トネリコ属	6.5	4.4	0.7	27	2	
切片	西 I54a	IB1	360	板目		トネリコ属	4.4	1.9	0.4	7	1	
切片	西 I54a	IB1	361	板目		トネリコ属	(4.3)	(1.4)	(0.4)	8	2	
切片	西 H54b	IB1	365	柱目		トネリコ属	(8.1)	(3.8)	(0.6)	計(35)	6	
切片	西 H54c	IB1	367	柱目		トネリコ属	5.0	3.5	0.3	13	1	
大型切片	西 I54a	IB1	370-1	柱目		トネリコ属	—	—	—	計(960)	多	切片の集中
切片	西 I54a	IB1	370-2	柱目		オニグルミ	—	—	—	計(65)	多	
切片	西 I54d	IB1	371	板目		トネリコ属	(4.4)	(3.1)	(0.6)	(15)	2	
切片	西 H54c	IB1	372	板目		トネリコ属	5.6	3.1	0.8	16	1	
切片	西 I55a	IB1	375	板目		トネリコ属	(7.8)	(4.4)	(0.9)	(28)	4	
切片	西 H54c	IB1	387	偏割		トネリコ属	5.7	4.4	1.5	34	1	
角材片	東 E67b	IB5	37	1/4割		コナラ属	(27.7)	4.3	3.2	(192)	4	片端切痕
角材	西 H56d	IB	45	1/4割		モミ属	24.9	2.9	2.1	88	1	
半割材	東 D66d	IB2	97	1/4割		トネリコ属	11.3	2.0	1.2	33	1	片端切痕
半割材片	東 I67ad	IB2	32	半割		トネリコ属	(104.2)	17.5	9.2	(6550)	4	片端切痕
半割材片	東 B66b	IB1	51	半割		ヤナギ属	(23.2)	(2.4)	(1.4)	(54)	3	面取り
半割材片	東 D67b	IB2	119	半割		トネリコ属	(65.5)	6.8	3.4	(806)	11	両端切痕
半割材	西 C55c	IB1	237	半割		ハンソイ属	—	—	—	(534)	12	片端切痕
半割材片	西 D56a	IB2	260	半割		トネリコ属	—	—	—	(308)	多	削り入る
半割材片	西 F56d	IB3	275	半割		トネリコ属	(50.9)	(6.5)	2.2	(580)	3	片端尖削、逆端平削
半割材片	西 I53d	IB1	363	半割		カエデ属	(14.2)	(6.6)	(3.2)	(280)	多	片端切痕、
半割材片	南 P63c	OB	③-1	半割		コナラ属	14.8	(8.1)	5.1	(432)	2	末側切痕、樹表面焼
割材片	東 C66a	IB1	57	1/4割		トネリコ属	(13.6)	(5.2)	(3.6)	(122)	4	片端切痕、逆端焼
割材	東 C67a	IB1	87	1/4割		トネリコ属	33.8	4.8	3.0	266	1	片端面取り、逆端焼
割材	東 D66c	IB1	93	半割		ハンソイ属	15.5	9.8	5.4	475	2	半割後1/3割、片端削、逆端焼
割材	東 B67c	OB	104	1/16割		コナラ属	25.8	4.2	1.4	72	1	
割材片	東 C67c	IB2	129	1/4割		イヌエンジュ	(70.0)	8.4	9.0	(1058)	2	股本部分、元側切痕
割材	西 C56c	IB1	227	1/12割		モクレン属	10.8	4.8	2.7	110	1	
割材片	西 F56d	IB2	282	1/16割		トネリコ属	(36.5)	(6.2)	(3.7)	(490)	多	元側切痕、末側切痕
割材	西 E56d	IB2	301	半割		トネリコ属	104.7	6.8	4.9	1580	3	元側切痕
割材片	西 E56a	IB2	318	1/4割		ニレ属	(67.1)	5.1	3.2	(465)	4	元側削り

表Ⅶ-10 未掲載木製品等(3)

遺物名称	発掘区	層位	遺物番号	木取り	樹皮痕	樹種	種	長さcm	幅 cm	厚さcm	重量g	破片	備考
割材	西 C56a	IB2	327	半割	○	コナラ属		64.4	4.8	1.9	472	1	元側焼
割材	西 H54c	IB1	369	1/4割		イヌエンジュ		21.8	2.8	1.4	84	1	両端切痕
割材片	西 I54d	IB1	379	1/12割		トネリコ属		-	-	-	(133)	7	
割材	南 P63d	IB3	③-3	1/4割		トネリコ属		15.4	1.8	1.2	31	1	
割材片	南 P63b	IB4	③-5	1/4割	○	ハノキ属		35.7	5.4	3.2	312	1	部分的に面取り
細割材片	東 D67b	OB	92	1/8割		クワ属		(65.2)	1.4	1.0	(74)	8	片端削
偏割材片	東 H67c	IB1	7	心持		トネリコ属		(45.8)	(15.2)	4.9	(1160)	5	両端切痕
偏割材	東 H67c	IB4	22	板目		トネリコ属		17.3	4.3	1.5	53	1	片端切痕、逆端削、樹心側面取り
偏割材	東 D66cd	IB1	94	不明	○	ヤナギ属		39.5	11.5	(1.6)	(705)	7	樹表面のみ残存、末側焼
偏割材片	東 B67c	IB1	103	偏1/4割		イヌエンジュ		(18.3)	1.8	1.1	30	2	片端削
偏割材	東 C66c	IB2	131	偏1/4割		トネリコ属		45.2	6.9	4.2	569	1	片端切痕、逆端削
偏割材片	東 C66b	IB2	132	半割		トネリコ属		(28.4)	5.4	3.4	(203)	2	
偏割材片	東 C66c	IB2	224	板目		トネリコ属		(19.9)	(21.0)	1.9	(633)	12	樹表面割
偏割材	西 D56b	IB1	253	偏1/4割		ハリギリ		8.8	3.7	1.6	81	1	
偏割材	西 F56b	IB1	290	板目		トネリコ属		24.9	6.3	1.7	165	1	片端削
偏割材片	西 E56d	IB3	296	板目	○	クワ属		(40.1)	7.7	1.8	(449)	8	樹表加工、両端焼
偏割材片	西 G56b	IB1	299	偏1/8割	○	トネリコ属		(24.9)	(5.2)	(2.0)	(203)	2	片端焼
偏割材片	西 D56c	IB2	334	偏1/4割		トネリコ属		(53.9)	4.4	1.9	(289)	2	元側切痕
偏割材片	西 D56cd	IB2	335	心持		トネリコ属		(58.8)	5.6	4.3	(689)	6	角材状
偏割材	西 H54c	IB1	368	板目		トネリコ属		11.2	7.6	2.0	117	1	片端切痕
偏割材	西 H54c, I54b	IB1	373	板目		トネリコ属		95.8	15.2	4.0	2160	7	
偏割材片	西 H54b	欄(1B欄)	386	板目		トネリコ属		(15.4)	(3.2)	(1.0)	(108)	17	樹表面割
偏割材	南 P65b	IB3	④-4	偏1/4割		トネリコ属		7.8	1.9	0.9	18	1	
偏割材片	南 P63a	IB3	④-8	板目		トネリコ属		-	-	-	(116)	14	
板材片	東 C67a	IB1	130	板目		トネリコ属		(26.8)	(7.4)	(1.8)	(366)	3	
板材片	西 D56c	IB1	251	板目		ニレ属		-	-	-	(133)	多	
板材片	西 D55d	IB1	258	板目		トネリコ属		-	-	-	(318)	多	
板材片	西 F55c	欄(1B欄)	307	板目		トネリコ属		(54.0)	8.8	3.0	(849)	13	1/16割加工、片端段圧痕あり
板材片	西 D56a	IB2	330	板目		トネリコ属		10.4	(9.9)	1.2	(162)	6	樹表部分加工、片端切痕
炭化板材片	西 E56a	IB2	302	板目	○	コナラ属		(44.0)	7.2	2.1	(749)	15	樹表面全面焼
細板材片	東 B66b	IB1	48	板目	○	スギ		5.6	2.6	1.1	24	1	片面焼
細板材片	東 C67a	IB1	84	板目		コナラ属		16.2	3.6	1.0	59	1	
細板材片	西 D56a	IB1	233	板目		トネリコ属		19.1	2.2	1.5	57	3	片端加工
細板材片	西 C55c	IB1	239	板目		ハリギリ		-	-	-	(98)	5	
細板材片	西 D57b, E57a	IB1	324	板目		カツラ		15.6	3.5	0.8	34	1	
細板材片	西 I54b	IB1	356	半割紐目		トネリコ属		20.6	4.6	1.2	33	1	片端切痕
薄紐目板片	西 D55d	IB1	328	紐目		スギ		(19.8)	(3.5)	0.4	(68)	3	
縄状材片	東 I66c	IB3	30	半割	○	トネリコ属		(25.4)	(9.0)	(3.1)	(460)	5	樹心部繰り抜き、片端切痕、その周辺焼
縄状材	東 G66d, G67a	IB2	40	半割?		コナラ属		58.1	10.1	1.1	501	1	樹表面のみ残存の自然木か?
枝材	東 H67c	IB1	6	丸木		トネリコ属		(28.3)	3.4	1.7	(71)	2	両端切痕
枝材	東 E66d	OB	12	丸木		ヤナギ属		50.0	2.9	1.4	58	1	

表Ⅶ-11 未掲載木製品等(4)

遺物名称	発掘区	層位	遺物番号	木取り	樹種	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	破片	備考
枝材	東 E666d	OB	13	丸木	ヤナギ属	48.1	1.9	1.8	82	1	元側切痕、部分的に面取りあり
枝材	東 E666d	IB2	17	丸木	トネリコ属	19.7	2.3	2.2	72	1	片端切痕、部分的に面取りあり
枝材	東 E67a	IB3	18-1	丸木	トネリコ属	16.6	2.5	2.0	62	1	片端切折痕、部分的に面取りあり
枝材	東 E67a	IB3	18-2	丸木	トネリコ属	15.9	2.3	2.1	55	1	片端切痕、逆端削、部分的に面取りあり
枝材	東 E67a	IB3	18-3	丸木	トネリコ属	15.7	2.9	2.0	56	2	片端切痕、逆端削、部分的に面取りあり
枝材	東 H67a	IB3	19	丸木	コナラ属	14.9	1.2	1.0	7	1	部分的に面取りあり
枝材	東 H67c	IB4	23	丸木	トネリコ属	5.8	1.0	0.7	3	1	片端切痕?
枝材	東 E67c	IB4	36	丸木	クワ属	28.0	3.4	2.6	157	1	元側切痕焼
枝材片	東 E66cd	IB	42	丸木	トネリコ属	(16.9)	2.4	2.9	(98)	3	両端切痕?
枝材片	東 H67a	IB	43	丸木	トネリコ属	(15.9)	(3.1)	(2.4)	(48)	3	
枝材	東 H67b	IB	44	丸木	ツル性植物	20.2	1.8	1.2	33	1	
枝材	東 B66b	IB3	46	丸木	ニレ属	65.0	2.4	2.2	301	1	
枝材片	東 B66b	IB1	50	丸木	コナラ属	(8.9)	(2.3)	(1.8)	(38)	2	両端切痕、全面焼
枝材	東 B66c	IB1	53	丸木	トネリコ属	61.8	2.8	2.7	296	1	両端切痕、枝払い切痕あり
枝材片	東 C66a	IB1	55	丸木	ヤナギ属	(57.3)	3.3	2.6	(271)	3	片端切痕、末側削
枝材片	東 C66a	IB1	59	丸木	クワ属	7.5	2.9	(2.8)	(52)	2	両端切痕
枝材片	東 C66a	IB1	61	丸木	ヤナギ属	(30.6)	3.6	1.9	(97)	4	元側切痕削
枝材	東 C66b	IB1	66	丸木	ヤナギ属	15.5	1.4	1.4	38	1	元側切折痕、末側切痕
枝材	東 C66b	IB1	70	丸木	ヤナギ属	(75.0)	3.3	10.8	(151)	7	元側切痕
枝材	東 C66b	IB1	71	丸木	ヤナギ属	57.7	4.0	3.0	509	1	両端切痕、枝払い切痕あり
枝材片	東 C66c	IB1	73	丸木	ヤナギ属	(66.3)	2.3	1.7	(130)	4	両端切痕
枝材片	東 C66c	IB1	76	丸木	トネリコ属	(49.6)	1.4	1.5	(102)	3	元側切痕
枝材片	東 C66d	IB1	80	丸木	ヤナギ属	(50.5)	1.7	1.4	(85)	3	元側切痕
枝材	東 C67a	IB1	86	丸木	ヤナギ属	111.6	3.2	2.2	365	4	元側切痕
枝材	東 D66d	IB2	95	丸木	ヤナギ属	16.5	1.9	1.6	49	1	両端切痕
枝材	東 D66d	IB2	96	心持	ハンノキ属	10.2	1.9	1.1	24	1	二面偏削
枝材片	東 D66d	IB1	98	丸木	ヤナギ属	(32.1)	2.5	2.2	(139)	5	元側対面二面削
枝材	東 B68a	OB	113	丸木	ヤナギ属	32.4	2.8	3.0	155	1	元側切痕
枝材	東 D67b	IB1	120	丸木	ヒトコノキ?	42.9	2.1	1.7	128	1	片端削
枝材片	東 D67b	IB2	123	丸木	トネリコ属	(14.3)	1.8	1.5	(70)	2	両端切痕
枝材	東 D67c	IB1	126	丸木	イヌエンジュ	13.2	2.9	2.1	76	1	片端焼
枝材片	東 C65d	IB1	145	丸木	ブナ	(10.9)	(3.2)	(2.4)	(123)	10	片端焼、部分的に面取りあり
枝材	東 C66d	IB1	146	丸木	ブナ	11.2	4.8	1.4	37	1	元側切痕、全面焼
枝材	東 C66b	IB3	181	丸木	トネリコ属	12.9	2.6	1.9	53	1	両端切痕?
枝材片	東 A67d	IB4	211	丸木	ヤナギ属	(41.5)	2.4	1.8	(117)	4	元側切痕
枝材	西 C56b	IB1	230	心持	ヤナギ属	16.6	2.8	2.0	88	1	片端切痕
枝材片	西 C56b	IB1	234	丸木	ハンノキ属	(71.5)	1.9	1.1	(103)	5	面取り
枝材片	西 C56ad	IB1	242	丸木	トネリコ属	(87.8)	1.8	1.5	(204)	6	片端切痕
枝材	西 D56b	IB1	254	丸木	トネリコ属	31.0	3.0	2.2	166	2	両端切痕
枝材片	西 D56a	IB1	261	丸木	トネリコ属	(72.6)	2.3	1.9	(167)	15	元側切痕、末側面取りあり
枝材片	西 D56c	IB1	267	丸木	ヤナギ属	(13.2)	1.9	1.8	(46)	3	片端切痕

表Ⅷ-12 未掲載木製品等(5)

遺物名称	発掘区	層位	遺物番号	木取り	樹種	種	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	破片	備考
枝材	西 G56b	IB1	298	丸木	トネリコ属		46.0	4.4	3.6	330	1	片端切痕、逆端焼
枝材片	西 E56d	IB1	316	丸木	ハシドイ属		(31.7)	2.8	1.8	(106)	4	片端対面二面削
枝材	西 E56a	IB1	336	丸木	ハシドイ属		8.4	2.3	2.0	35	1	片端切痕
枝材	西 I53c	IB2	350	丸木	広葉樹		14.5	1.4	0.9	18	1	末側切痕?
枝材	西 I54d	IB1	380	丸木	トネリコ属		(32.1)	2.8	1.5	(70)	3	元側削
枝材片	南 O64b	IB3	③-9	丸木	トネリコ属		(64.8)	2.2	2.0	(357)	2	元側切折痕、末側切痕
大枝材	西 E56b	IB1	319	丸木	コナラ属		24.4	7.2	4.4	455	1	末側焼、部分的に面取りあり
丸木材片	東 E67a	IB1	9	丸木	トネリコ属		(19.1)	2.9	2.9	(93)	3	両端切痕?
丸木材片	東 H67b	IB1	20	丸木	トネリコ属		16.4	4.2	4.1	185	1	両端切折痕
丸木材片	東 H67c	IB2	21	丸木	トネリコ属		(64.5)	6.1	4.5	(705)	9	全体曲、両端切痕
丸木材片	東 I67a	IB4	28	丸木	トネリコ属		(13.4)	4.3	4.2	(81)	2	末側切痕
丸木材片	東 I67cd	IB2	31	丸木	イヌエンジュ		(219.2)	6.8	5.9	2950	7	
丸木材片	東 C66b	IB1	72	丸木	トネリコ属		20.1	3.4	2.8	116	1	片端切痕
丸木材片	東 C66c	IB1	77	丸木	ヤナギ属		(45.7)	3.4	2.9	(392)	2	元側切折痕、末側切痕
丸木材片	東 C67ab	IB1	89	丸木	トネリコ属		(146.4)	3.9	3.5	(1030)	4	元側切痕
丸木材片	東 B66d	IB3	142	丸木	トネリコ属		(133.2)	2.9	2.9	(1150)	11	
丸木材	西 D56cd	IB1	247	丸木	イヌエンジュ		101.4	7.0	5.7	1890	4	元側切痕
丸木材	西 D56c	IB1	249	丸木	イヌエンジュ		17.2	4.8	4.7	284	2	両端切痕
丸木材片	西 D55d	IB1	263	丸木	イヌエンジュ		118.2	6.9	7.2	4130	1	元側焼、枝払い削りあり
丸木材片	西 E56c	IB2	310	丸木	トネリコ属		(72.0)	3.9	3.5	926	14	
丸木材	西 E56cd	IB1	311	丸木	ニレ属		53.7	4.2	3.2	449	4	元側切痕、枝払い切痕あり
丸木材	西 E56acd	IB1	317	丸木	トネリコ属		171.0	6.5	5.8	3820	15	
丸木材	西 E56d E57a	IB1	323	丸木	ナナカマド属		112.8	3.2	3.1	842	3	元側切痕
丸木材	西 F56ad	IB1	381	丸木	トネリコ属		81.0	20.0	4.2	4735	多	
丸木材	東 I67b	IB3	29	丸木	トネリコ属		37.9	5.4	3.5	285	1	杭?、元側削、末側切痕、部分的に面取りあり
股木材	東 C66a	IB1	54	丸木	イヌエンジュ		24.7	8.4	2.7	174	1	元側切痕、股枝の両端焼
股木材	東 C66d	IB1	83	丸木	クワ属		36.5	13.0	6.6	1550	1	元側切痕、股枝の片端焼
股木材	西 D56a	IB1	232	丸木	トネリコ属		23.8	6.2	3.9	308	1	元側切痕
割杭状製品	西 D56b	IB2	333	1/8割	コナラ属		61.5	5.5	5.1	828	1	片端削り
丸杭状製品	西 C56c	IB4	325	丸木	トネリコ属		-	-	-	(178)	23	
刺し杭	東 D68a	IB1	128	丸木	トネリコ属		58.3	2.1	2.0	218	3	下端尖、直交二面削
刺し杭	東 B66a	IB1	139	丸木	トネリコ属		60.5	3.2	3.1	298	2	下端尖、上端切折
刺し杭	東 B65d	IB1	143	丸木	トネリコ属		34.8	3.2	3.1	167	1	下端尖、五面削、全体面取り、上端より鋭く削
刺し杭	西 F55d	竪(仰)	342	丸木	トネリコ属		(43.7)	2.7	2.3	(993)	8	下端尖、三面削
刺し杭	西 I54d	IB2	382	心持	ヤナギ属		(20.9)	2.2	1.3	(49)	1	
細杭	東 C66c	IB1	74	丸木	カバノキ属		(134.5)	3.7	3.1	(1090)	14	末先尖、二面削、削部長22.5cm
細杭	東 D67d	IB1	127	丸木	ヤナギ属		(26.4)	2.2	2.2	(120)	1	下端尖、二面削
細杭	東 B66ab	IB1	140	丸木	ハシドイ属		108.9	4.9	3.0	765	1	元先尖、直交三面削、枝払い切痕あり
細杭	西 C55b	IB1	238	丸木	トネリコ属		108.9	2.9	3.0	613	2	元先尖、直交二面削
細杭	西 D56d	IB2	246	丸木	トネリコ属		(24.6)	3.4	2.9	(176)	1	元先尖、二面削
二股杭	西 I53c	IB1	353	丸木	イヌエンジュ		122.2	6.8	4.5	1790	1	元先、対面二面削

表Ⅶ-13 未掲載木製品等(6)

遺物名称	発掘区	層位	遺物番号	木取り	樹皮	樹種	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	破片	備考
杭先	東 F65a	IB5	41	丸木		ハシドイ属	(17.9)	5.1	3.0	(122)	1	下端尖、五~六面削
杭	西 F56b	IB1	289	丸木	○	イヌエンジュ	(30.4)	4.9	4.8	(475)	1	下端直交三面削、頭部焼
杭	西 D56b	IB2	332	丸木		ハンノキ属	49.8	3.4	3.2	457	1	未先、一面削
杭先	南 O61c	IB	③-7	丸木		サクラ属	(12.4)	(5.2)	4.2	(165)	11	下端尖、直交二面削
炭化材	東 C66d	IB1	79	偏割	○	カエデ属	37.8	4.8	2.1	331	6	
炭化材	東 B66他	IB3	141	半割	○	トネリコ属	220.0	19.0	14.0	36800	多	樹表側と先焼
炭化材	東 A67c	IB3	217	板目	○	トネリコ属	44.7	14.2	3.4	1760	1	偏割、樹心側焼
炭化材	東 A67c	IB3	218	板目	○	トネリコ属	-	-	-	889	15	偏割、全面焼
炭化材	東 A67cd	IB3	219	丸木	○	トネリコ属	-	-	-	804	多	
炭化材	西 E56b	IB2	320	板目	○	コナラ属	-	-	-	20	18	
炭化材	西 I53d	IB2	364	板目	○	クワ属	31.5	9.0	2.2	354	3	樹心側と縁部焼
炭化材	西 H54c	IB2	378	半割	○	トネリコ属	5.9	1.8	1.3	34	14	
炭化材	西 I54d	IB2	383	半割	○	ヤナギ属	5.5	1.8	1.3	18	2	
炭化材	東 C67c	IB3	389	偏割	○	トネリコ属	-	-	-	122	多	
炭化材	南 P64d	IB1	③-6	半割	○		-	-	-	-	1	一部分取上げ
渦巻状樹皮	東 C66a	IB1	56	樹皮	○		(2.9)	(2.7)	-	(29)	5	
渦巻状樹皮	東 C66a	IB1	60	樹皮	○		(4.2)	(2.7)	-	(57)	多	
渦巻状樹皮	東 C66b	IB1	67	樹皮	○		(2.8)	(2.4)	-	(19)	2	
渦巻状樹皮	東 C67a	IB1	88	樹皮	○		(1.9)	(2.3)	-	(20)	2	
樹皮	西 C56c	IB1	226	樹皮	○		-	-	-	(28)	1	
帯状樹皮	西 F56c	IB2	236	樹皮	○		-	4.0	-	(43)	多	
帯状樹皮	西 F56c	IB2	236	樹皮	○		-	4.0	-	(43)	多	
帯状樹皮	西 F56b	IB2	244	樹皮	○		-	4.2	-	(47)	4	
樹皮	西 F56b	IB2	257	樹皮	○		-	-	-	(675)	多	
樹皮	西 F56b	IB2	259	樹皮	○		-	-	-	(414)	多	
樹皮	西 F56d	IB2	270	樹皮	○		-	-	-	(27)	多	
樹皮片	西 F56d	IB1	272	樹皮	○		-	-	-	(6)	5	
渦巻状樹皮	西 F56d	IB1	273	樹皮	○		-	-	-	(62)	2	
樹皮片	西 F56c	IB1	276	樹皮	○		(4.5)	2.2	-	(26)	2	
樹皮片	西 F56c	IB1	277	樹皮	○		-	-	-	(23)	多	
樹皮片	西 F56d	IB1	278	樹皮	○		-	-	-	(16)	多	
細帯状樹皮	西 F56d	IB1	280	樹皮	○		8.8	1.1	0.1	16	1	
帯状樹皮	西 F56bc	IB1	281	樹皮	○		(33.0)	(5.0)	0.5	(93)	2	片端切断痕あり
帯状樹皮	西 F56d	IB3	293	樹皮	○		-	4.3	-	(301)	多	
樹皮片	西 G56b	IB1	295	樹皮	○		-	-	-	(5)	1	
渦巻状樹皮	西 G56b	IB1	300	樹皮	○		3.0	0.9	-	18	1	
樹皮片	西 G56b	IB1	303	樹皮	○		-	-	-	(10)	1	
樹皮片	西 I53c	IB1	352	樹皮	○		-	-	-	(19)	1	
樹皮片	西 I54a	IB1	362	樹皮	○		-	-	-	(9)	1	
樹皮片	西 I54d	IB1	376	樹皮	○		-	-	-	(93)	多	

(3) 木製品の樹種同定

〈1〉はじめに

遺跡から出土する木製品の樹種を明らかにすることは、当時の木材利用・個別の用具の樹種選択の実態をとらえることになり、遺跡を営んだ人々の生活を知る手立てとなる。さらには、遺跡周辺の植生や、人々の交易関係・移動を解明する上で重要な手がかりとなるのである。

北海道の擦文・アイヌ文化期の遺跡では、当センターが千歳市美々8遺跡の低湿部の調査で報告した約5,000点と、オサツ2遺跡の約250点の同定記録が、当該期・当該地域の先駆的資料である。今報告と以後に続く当遺跡の報告資料が、これらと比較検討され、必要不可欠の資料となることを期待したい。

なお、自然木の同定については、次報告以降で追加資料としてゆきたい。 (三浦)

〈2〉試料および識別の方法

1) 試料

樹種同定時の出土材は水漬で保管されていた。試料は、破断面などのあまり目立たない部分を選び、加工された部分は避けること、また、正常な組織構造の観察ができるように、腐れなどによる劣化の進んだ部分、節など組織の乱れのある部分、髓に近い部分はできるだけ避けることに留意し、木口面、板目面、柁目面の3断面を採取した。

①生物顕微鏡用試料

出土材から直接両刃カミソリを用いて各断面の、一年輪以上が含まれる5mm×5mm、厚さ10~20ミクロン程の切片を採取した。その後、3断面を1セットとしてプレパラートを作製し、観察を行った。

②走査電子顕微鏡用試料

まず、出土材から片刃カミソリで小木片(1cm角程)を採取し、アルコール・シリーズで脱水し、さらに室内に24時間以上放置し、乾燥させた。次に、ルーペ及び実体顕微鏡(Nikon-SMZ-10)において確認しながら、両刃カミソリでわずかに切り込みを入れて割裂し、各断面を露出させた。それらを一年輪以上が含まれる5mm角程のブロックになるように整形し、一つの試料台に1断面ずつを導電性接着剤(ドータイト)で固定した。その後、イオンスパッタリング装置(JEOL-JFC-1000)で金(Au)のコーティング(1.2kv、8mA、10分)を施し、観察を行った。

2) 識別方法

出土材の生木部分については生物顕微鏡観察、炭化部分については走査電子顕微鏡観察により識別を行った。また、生物顕微鏡では明確にできなかった点についても、走査電子顕微鏡で観察を行った。

①針葉樹材の樹種識別上の主な観察項目

生物顕微鏡・走査電子顕微鏡：年輪構造(早材部から晩材部への移行の状態、晩材の幅)、樹脂道(垂直・水平樹脂道の有無、エピセリウム細胞の壁厚)、仮道管(有縁壁孔の配列、らせん肥厚の有無、分野壁孔の型と数)、樹脂細胞(有無、分布)、放射組織(放射仮道管の有無、放射柔細胞の末端壁の状態、細胞幅と細胞高)

走査電子顕微鏡：仮道管のいぼ状層、有縁壁孔の壁孔壁、らせん肥厚の形状など。

②広葉樹材の樹種識別上の主な観察項目

生物顕微鏡・走査電子顕微鏡：道管(木口面における配列、らせん肥厚の有無、せん孔の形状、道管相互壁孔の形状と配列、チロースの形状)、仮道管(有無)、軸方向柔細胞(分布と配列)、放射組織の形態(同性・異性、細胞幅と細胞高、分布)

走査電子顕微鏡：道管のらせん肥厚の有無と形状、せん孔の形状、ベスチャード壁孔など。

〈3〉 識別結果

平成8・9年度の①・③区出土の木製品のうち、木質部をもつ398点の遺物について樹種の識別を行い、20科28属を同定した。樹種構成は針葉樹4科5属、広葉樹16科23属であり、そのうち7属については種までの同定を行った。それらの同定の根拠となった組織構造的な特徴を、針葉樹、広葉樹、同定できなかったものの順で以下に記す。なお、広葉樹の放射組織の同性と異性の区別については、平伏細胞のみからなるものを同性、それ以外のものを異性とした。しかし、オニグルミのように大部分が平伏細胞からなり、方形細胞が時々混じるような場合には、同性に区別した。また、可能性は高いが断定するには至らなかったものには、属名の後に?を記した。

1 イチイ *Taxus cuspidata* Sieb. et Zucc. (イチイ属 *Taxus*) (いちい科 TAXACEAE)

仮道管と放射柔細胞からなり、分野壁孔はヒノキ型である。仮道管の内壁には、はっきりとしたらせん肥厚が存在する。

顕微鏡写真 No. 1

2 モミ属 *Abies* (まつ科 PINACEAE)

仮道管と放射柔細胞からなり、分野壁孔は典型的なスギ型である。放射柔細胞の壁は厚く数珠状末端壁を有する。

トドマツと推定される。

顕微鏡写真 No. 2

3 トウヒ属 *Picea* (まつ科 PINACEAE)

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管、水平・垂直樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞からなる。分野壁孔はトウヒ型である。らせん肥厚は存在しない。木口面で早晚材の移行が比較的ゆるやかであることからトウヒ属としたが、分野壁孔の形状が典型的なトウヒ型ではないものも認められ、カラマツ属の可能性も否定できない。

エゾマツ やアカエゾマツが推定される。

顕微鏡写真 No. 3

4 スギ *Cryptomeria japonica* D. Don

(スギ属 *Cryptomeria*) (すぎ科 TAXODIACEAE)

仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなり、樹脂道、放射仮道管は存在しない。仮道管にらせん肥厚は存在しない。樹脂細胞は早・晩材部の移行部から晩材部にかけて散在する。年輪界は明瞭で、早材部から晩材部への移行はやや急である。晩材部の幅は比較的広い。放射組織は単列のみで一般に10細胞高以下である。分野壁孔はスギ型である。仮道管の内壁の表面にはイボ状突起の存在が走査電子顕微鏡により確認できる。

顕微鏡写真 No. 4

5 ヒノキ属? アスナロ属? *Chamaecyparis? Thujopsis?* (ひのき科 CUPRESSACEAE)

仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなり、樹脂道、放射仮道管は存在しない。仮道管にらせん肥厚は存在しない。樹脂細胞は晩材部の接線状に散在する。早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅が狭い。分野壁孔はヒノキ型がほとんどであるが、中にはスギ型との中間的なものもしばしば認められ、1分野に2~5個存在する。分野壁孔が、典型的なヒノキ型のみでないことから、アスナロ属の可能性も否定できない。

顕微鏡写真 No. 5

6 ヤナギ属 *Salix* (やなぎ科 SALICACEAE)

4 木製品

木口面：散孔材である。道管は時折2～3個の複合管孔を形成する。

板目・柾目面：放射組織は単列で異性である。道管要素は単せん孔をもつ。らせん肥厚は存在しない。また、道管相互壁孔は交互壁孔である。

エゾノカワヤナギ、オノエヤナギ、バッコヤナギ、エゾノバッコヤナギなどが推定される。

顕微鏡写真 No. 6

7 オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr.

(オニグルミ属 *Juglans*) (くるみ科 JUGLANDACEAE)

木口面：散孔材である。大型の道管が単独もしくは2～3個複合して存在する。道管内には顕著にチロースが認められることが多い。柔細胞の接線方向への配列は本属の特徴である。

板目・柾目面：放射組織は1～3細胞幅で3～20細胞高であり同性であるが、方形細胞を含む場合がある。道管要素は単せん孔をもつ。らせん肥厚は存在しない。

顕微鏡写真 No. 7

8 カバノキ属 *Betula* (かばのき科 BETULACEAE)

木口面：散孔材であり、一般に道管は2～4個が放射方向に複合する。

板目・柾目面：放射組織は1～4細胞幅で40細胞高以上にもなり、同性である。道管要素は階段せん孔をもつ。らせん肥厚は存在しない。

シラカンバやウダイカンバ等が推定される。

顕微鏡写真 No. 8

9 ハンノキ属 *Alnus* (かばのき科 BETULACEAE)

木口面：散孔材である。多くの道管は2～4個が放射方向に複合する。

板目・柾目面：放射組織は単列で同性である。集合放射組織を形成する。道管要素は階段せん孔をもつ。らせん肥厚は存在しない。

ハンノキ、ケヤマハンノキ等が推定される。

顕微鏡写真 No. 9

10 コナラ属 *Quercus* (ぶな科 FAGACEAE)

木口面：環孔材である。孔圏部の大道管にはチロースが認められ、付近には周囲仮道管が存在する。孔圏外の道管は、やや放射状に配列することがある。

板目・柾目面：放射組織は単列と広放射組織からなり、同性である。道管要素は単せん孔をもつ。

ミズナラ、コナラ、カシワ等が推定される。

顕微鏡写真 No. 10

11 ブナ属 *Fagus* (ぶな科 FAGACEAE)

木口面：散孔材である。道管はほぼ平均に分布し、年輪の前半部の道管の方が大きく、外側にいくにつれて大きさと数が減少する。

板目・柾目面：放射組織は単列のもの、2～数列のもの、広放射組織の3種類があり、ほとんど同性である。道管要素は、一般に年輪の前半部で単せん孔、外側では、階段せん孔と網状せん孔をもつ。らせん肥厚は存在しない。

ブナ(北海道南部が北限)、イヌブナ(北海道外)が推定される。

顕微鏡写真 No. 11

12 ニレ属 *Ulmus* (にれ科 ULMACEAE)

木口面：環孔材である。孔圏部の道管は2～3列になり、孔圏外では多数の小道管が接合して集団

管孔を形成し、接線方向にかなり規則的に配列する。

板目・柾目面：放射組織は1～6細胞幅、3～70細胞高で、同性である。道管要素は単せん孔をもち、内壁にはらせん肥厚が存在する。

ハルニレまたはオヒョウが推定される。

顕微鏡写真 No. 12

13 ケヤキ属 *Zelkova* (にれ科 ULMACEAE)

木口面：環孔材である。孔圏部の大道管が一行に並ぶ。孔圏外では急に道管の大きさを減じている。小道管は多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集団管孔を形成している。

板目・柾目面：放射組織は6～7細胞幅のものが多く、上下の縁辺のみが方形細胞の異性である。方形細胞には、時々結晶が認められる。道管要素は単せん孔をもつ。小道管の側壁にはらせん肥厚が存在する。

ケヤキ(北海道外)が推定される。

顕微鏡写真 No. 13

14 クワ属 *Morus* (くわ科 MORUS)

木口面：環孔材である。孔圏部では単独あるいは2～3個の道管が複合する。孔圏外では小道管が複合して団塊状をなす。道管内にはチロースが認められる。

板目・柾目面：放射組織は1～6細胞幅、5～60細胞高で、異性である。道管要素は単せん孔をもつ。小道管のらせん肥厚は、走向が不規則な場合がある。

ヤマグワが推定される。

顕微鏡写真 No. 14

15 カツラ *Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.

(カツラ属 *Cercidiphyllum*) (かつら科 CERCIDIPHYLLACEAE)

木口面：散孔材である。ほとんどの道管は単独で数がきわめて多く、年輪内全体を通じて平等に分布する。

板目・柾目面：放射組織は1～2細胞幅で、直立細胞の間に、方形細胞と平伏細胞が入り込む典型的な異性である。道管要素は階段せん孔をもち、Barの数も20本以上と非常に多い。らせん肥厚は存在しない。

顕微鏡写真 No. 15

16 モクレン属 *Magnolia* (もくれん科 MAGNOLIACEAE)

木口面：散孔材である。単独または2～数個の放射方向に接続した道管が平等に分布する。

板目・柾目面：放射組織は1～2細胞幅で5～35細胞高と高い。上下縁辺の1～2列のみが直立細胞ないし方形細胞で、そのほかは平伏細胞の異性である。道管要素は単せん孔と階段せん孔をもつ。らせん肥厚が存在する。道管には階段壁孔と対列壁孔が認められる。

ホオノキ、キタコブシ、コブシが推定される。

顕微鏡写真 No. 16

17 アジサイ属 *Hydrangea* (ゆきのした科 SAXIFRAGACEAE)

木口面：散孔材である。道管は単独または2～3個複合して年輪内に平等に分布する。軸方向柔細胞が放射方向へ連続して認められるのが特徴である。

板目・柾目面：放射組織は1～2細胞幅、3～5細胞高で、板目面では上下方向で軸方向柔細胞と接している。異性である。道管要素は階段せん孔をもつ。らせん肥厚は認められない。

4 木製品

用途適性から類推してノリウツギと考えられるが同属の他樹種の可能性もある。

顕微鏡写真 No. 17

18 サクラ属 *Prunus* (ばら科 ROSACEAE)

木口面：散孔材である。道管は単独または2～3個が複合して年輪内に平等に分布する。

板目・柾目面：放射組織は1～4細胞幅で、20細胞高以上になる場合が多い。異性であるが、板目面では判別しにくい。道管要素は単せん孔をもつ。らせん肥厚が存在する。

エゾヤマザクラ、ミヤマザクラ、シウリザクラ、ウワミズザクラ等が推定される。

顕微鏡写真 No. 18

19 ナナカマド属 *Sorbus* (ばら科 ROSACEAE)

木口面：散孔材である。道管は径が小さく単独または2～3個が複合する。

板目・柾目面：放射組織は2～3細胞幅、3～30細胞高で同性である。道管要素は単せん孔をもち、稀に多孔せん孔が認められる。内壁にはらせん肥厚が存在するが、腐朽により形状が明瞭ではないため、本属の2～3本が束になるSらせんとZらせんの特徴的な肥厚であるかは確認できない。しかし、網状(多孔)せん孔が認められることから、ナナカマド属であると考えられる。

顕微鏡写真 No. 19

20 イヌエンジュ *Maackia amurensis* Rupr. et Maxim.

(イヌエンジュ属 *Maackia*) (まめ科 LEGUMINOSAE)

木口面：環孔材である。孔圏部から孔圏外への道管の径の移行はゆるやかである。年輪界付近には小道管の集団管孔の不規則な配列がみられる。

板目・柾目面：放射組織は1～6細胞幅、6～50細胞高で、同性である。小道管が層階状配列をなし、顕著ならせん肥厚が認められる。ベスチャード壁孔が走査電子顕微鏡により認められる。

顕微鏡写真 No. 20

21 ハギ属 *Lespedeza* (まめ科 LEGUMINOSAE)

木口面：道管は環孔状に配列することが多い。孔圏部から孔圏外への道管の径の移行はゆるやかである。年輪界付近では小道管の集団管孔が不規則に配列する。

板目・柾目面：放射組織は1～4細胞幅で4～60細胞高と高く、顕著な異性である。小道管が層階状配列をなし、らせん肥厚が認められる。

エゾヤマハギ等などが推定される。

顕微鏡写真 No. 21

22 ツルウメモドキ属 *Celastrus* (にしきぎ科 CELASTRACEAE)

木口面：きわめて径の大きい道管が不規則に分布する。

板目・柾目面：放射組織は1～6細胞幅で、多列部が20～60細胞高、時々100細胞高以上に達する。異性である。道管要素は単せん孔をもち、らせん肥厚が存在する。大道管の付近には周囲仮道管が存在する。

ツル性植物の同定には資料が乏しいが、ツルウメモドキ属であると考えられる。

顕微鏡写真 No. 22・23・24

23 カエデ属 *Acer* (かえで科 ACERACEAE)

木口面：散孔材である。道管は、単独または数個が複合して均等に分布するが数は少ない。

板目・柾目面：放射組織は1～8細胞幅で5～30細胞高で、同性である。道管要素は単せん孔をもち、らせん肥厚が存在する。

イタヤカエデ、ヤマモミジ、ハウチワカエデ等が推定される。

顕微鏡写真 No. 25

24 ハリギリ *Kalopanax pictus* (Thunb.) Nakai

(ハリギリ属 *Kalopanax*) (うこぎ科 ARALIACEAE)

木口面：環孔材である。孔圏外では小道管が多数接合して複合管孔を形成し、斜線状や波状に配列する。

板目・柾目面：放射組織は1～6細胞幅で上下の縁辺の1列のみに方形細胞が並ぶ異性である。道管要素は単せん孔をもち、らせん肥厚は存在しない。

顕微鏡写真 No. 26

25 コシアブラ *Acanthopanax sciadophylloides* Fr. et Sav

(ウコギ属 *Acanthopanax*) (うこぎ科 ARALIACEAE)

木口面：環孔材であるが、孔圏道管はあまり明瞭でなく、孔圏外では散孔状に配列し、半環孔状を呈する。

板目・柾目面：放射組織は1～4細胞幅で異性である。道管要素は単せん孔をもつ。道管壁にらせん肥厚は存在しない。

顕微鏡写真 No. 27

26 ヨウラクツツジ属? *Menziesia?* (つつじ科 ERICACEAE)

木口面：散孔材である。道管は径が小さく、単独または2～3個が複合し、年輪内に平等に分布する。

板目・柾目面：放射組織は大部分が1細胞幅で稀に2細胞幅になり、2～60細胞高である。直立細胞と平伏細胞からなる異性である。道管要素は階段せん孔をもつ。らせん肥厚の有無は、腐朽がひどく確認できない。

つつじ科のヨウラクツツジ属に類似するが、断定はできない。

顕微鏡写真 No. 28

27 トネリコ属 *Fraxinus* (もくせい科 OLEACEAE)

木口面：環孔材である。道管は孔圏部で大きく、孔圏外では急激に小さくなり、単独のものと2～3個が放射方向に複合するものがある。道管の周りには周囲柔組織が存在する。

板目・柾目面：放射組織は1～4細胞幅、10細胞高ほどで比較的均一であり、同性である。道管要素は単せん孔をもち、らせん肥厚は存在しない。

ヤチダモ、アオダモ等が推定される。

顕微鏡写真 No. 29

28 ハシドイ属 *Syringa* (もくせい科 OLEACEAE)

木口面：散孔材である。道管は、単独または数個が複合して均等に分布する。

板目・柾目面：放射組織は1～2細胞幅で、異性であるが、大部分は平伏細胞である。道管要素は単せん孔をもち、2本の対をなす特徴的ならせん肥厚が存在する。

木口面において道管が年輪に沿って一列に並ぶこともあり、道管の配列は個体間で違いが見られた。ハシドイと推定される。

顕微鏡写真 No. 30

29 広葉樹

木口面：環孔材である。孔圏部の道管は2～3個が複合し、孔圏外では急激に小さくなるが、正常

4 木製品

な配列は観察できない。

板目・柾目面：放射組織は1～4細胞幅、5～60細胞高、稀に100細胞高以上に達する。異性である。道管要素は単せん孔をもつ。らせん肥厚の有無は確認できない。

髓付近の試料しかとれず、腐朽もひどく、正常な組織構造の観察ができないため、樹種の特定はできなかった。

顕微鏡写真 No. 31

30 広葉樹

木口面：道管は散孔状に配列しており、わりに大きな道管が、単独または2～3個が複合して存在する。軸方向柔細胞が接線状、周囲状に配列する。

板目・柾目面：放射組織は1～4細胞幅、5～40細胞高で異性である。道管要素は単せん孔をもつ。らせん肥厚は存在する。

髓付近の試料しかとれず、正常な細胞構造の観察ができないため、樹種の特定はできなかった。

顕微鏡写真 No. 32

(岡本育子)

参考文献

- 岡本省吾・北村四郎(1981)『原色日本樹木図鑑』, 保育社
- 大谷 諄・石田茂雄(1978)『走査型電子顕微鏡による本邦産双子葉木本植物のせん孔板の観察』, 北海道大学農学部演習林研究報告, 35-1, P 65-98
- 大谷 諄・石田茂雄(1978)『走査型電子顕微鏡による本邦産双子葉木本植物の道管要素のらせん肥厚の観察』, 北海道大学 同上, 35-2, P 433-464
- 島地 謙・伊藤隆夫(1982)『図説木材組織』, 地球社
- 島地 謙・伊藤隆夫(1988)『日本の遺跡出土木製品総覧』, 雄山閣
- 宮本忠輔(1996)『つる性木本植物の二次木部の解剖学的性質』, 北海道大学卒業論文
- (財)北海道埋蔵文化財センター(1990)『美沢川流域の遺跡群 X IV』北埋調報69
- (財)北海道埋蔵文化財センター(1991)『美沢川流域の遺跡群 X V』北埋調報77
- (財)北海道埋蔵文化財センター(1992)『美沢川流域の遺跡群 X VI』北埋調報83
- (財)北海道埋蔵文化財センター(1996)『美沢川流域の遺跡群 X VIII』北埋調報102
- (財)北海道埋蔵文化財センター(1997)『美沢川流域の遺跡群 X X』北埋調報114
- (財)北海道埋蔵文化財センター(1996)『千歳市オサツ2遺跡(2)』北埋調報103

VIII 台地部包含層の遺物

1 概要

(1) I 黒層について

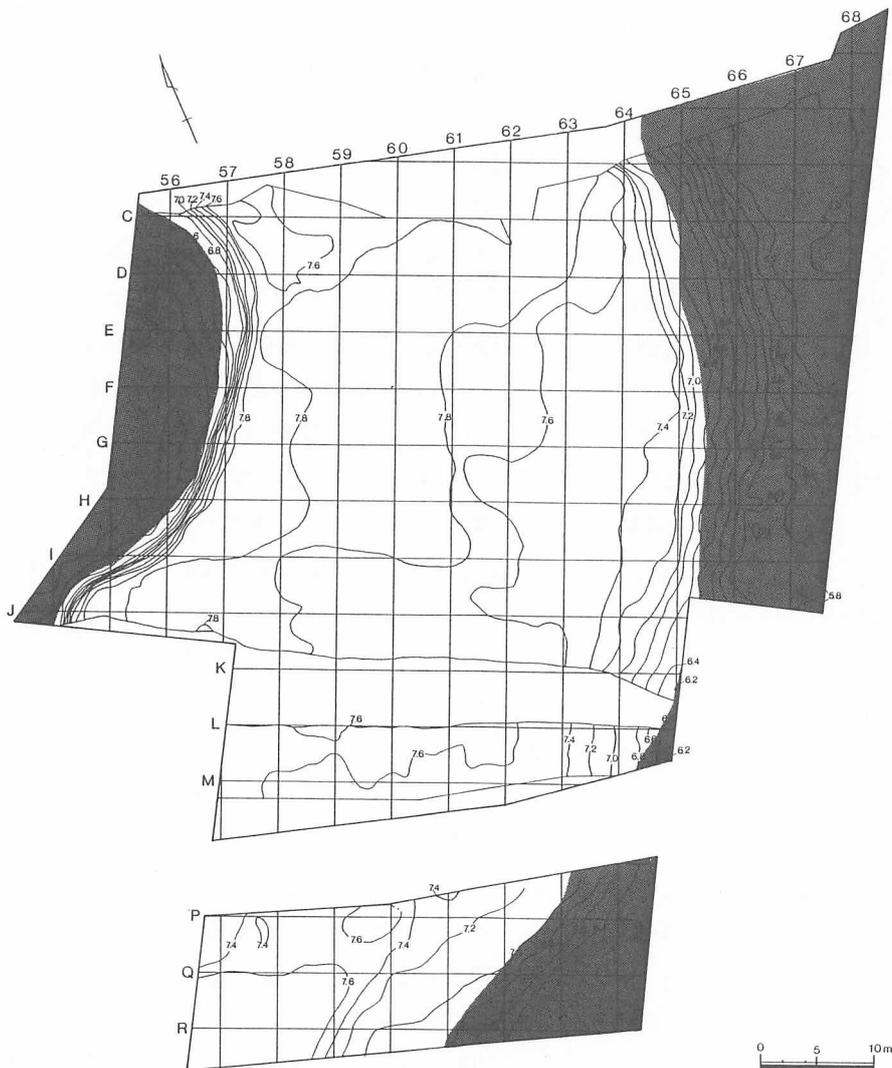
後北 B 式を主体とした VI 群は台地の中央部 (D ~ H・60~64) に特に多く、G 60 と G 63 に集中する。これは I 黒層下中部の焼土に起因する。北大 I 式が中央部南東 (H ~ I・60) に集中し、東側低湿部に向かって多く分布する。I 黒層上部の焼土に起因する。

VI b 類を主体とした VII 群は台地の中央部北西 (A ~ E・57~63) に特に多い。これは I 黒層土坑墓があることに起因する。VI c 類と VI d 類の分布は 2 個 (VIII-4-44・46) の復原個体を示している。

石器は石鏃、石鏃未製品が、後北 B 式を主体とした VI 群の分布域に重なり、片岩の剥片も同じ分布をしているので、後北 B 式期に片岩製石鏃の製作を行っていた可能性が高い。

(2) II 黒層について

III a 類を主体とした III 群は台地の南東 (G ~ J・60~65) に濃く分布する。これは II 黒層下部の焼土、土壌 (P-32~34) があることに起因する。



・コンターは、最終面 (E n-L 上面) での測量

図 VIII-1 台地部範囲図

2 I 黒層の遺物

IV c 類を主体としたIV群は台地の南西 (G ~ J・57~59) に狭く分布し、IV b 類・IV c 類の分布はほぼ重なる。IV a 類はこれらと異なり、I ラインに沿って台地を横断するように分布している。IV a 類期の住居群と分布が重ならない。これらはII 黒層上中部の焼土があることに起因する。

V b 類を主体としたV群は台地の北半 (A ~ I・56~64) に薄く広く分布する。V b 類・V c 類は北半の南西部に多く出土する。

石器は石鏃、スクレイパー類、石核、石斧が北半にやや多く分布している。石槍・ナイフ、石錐は住居群の周辺に偏っている。(鈴木)

2 I 黒層の遺物

(1) 土器 (図Ⅷ-2~14、表Ⅷ-1~3、図版Ⅷ-6~10)

VI群土器が1162点、うちVI b 類土器が491点、VI c 類土器が133点出土している。VII群土器が273点、うちVII b 類土器が3点、VII c 類土器が120点、VII d 類土器が75点、VII e 類土器が28点出土している。

I B 層からはVII群とVI群が出土しており、VII群の出土は極めて少ない。VI群は焼土付近からの出土が多く、低湿度に近くなってVI群の後半の出土例が増加する。

VI群 (図Ⅷ-2~14、表Ⅷ-1~3、図版Ⅷ-6・8・9)

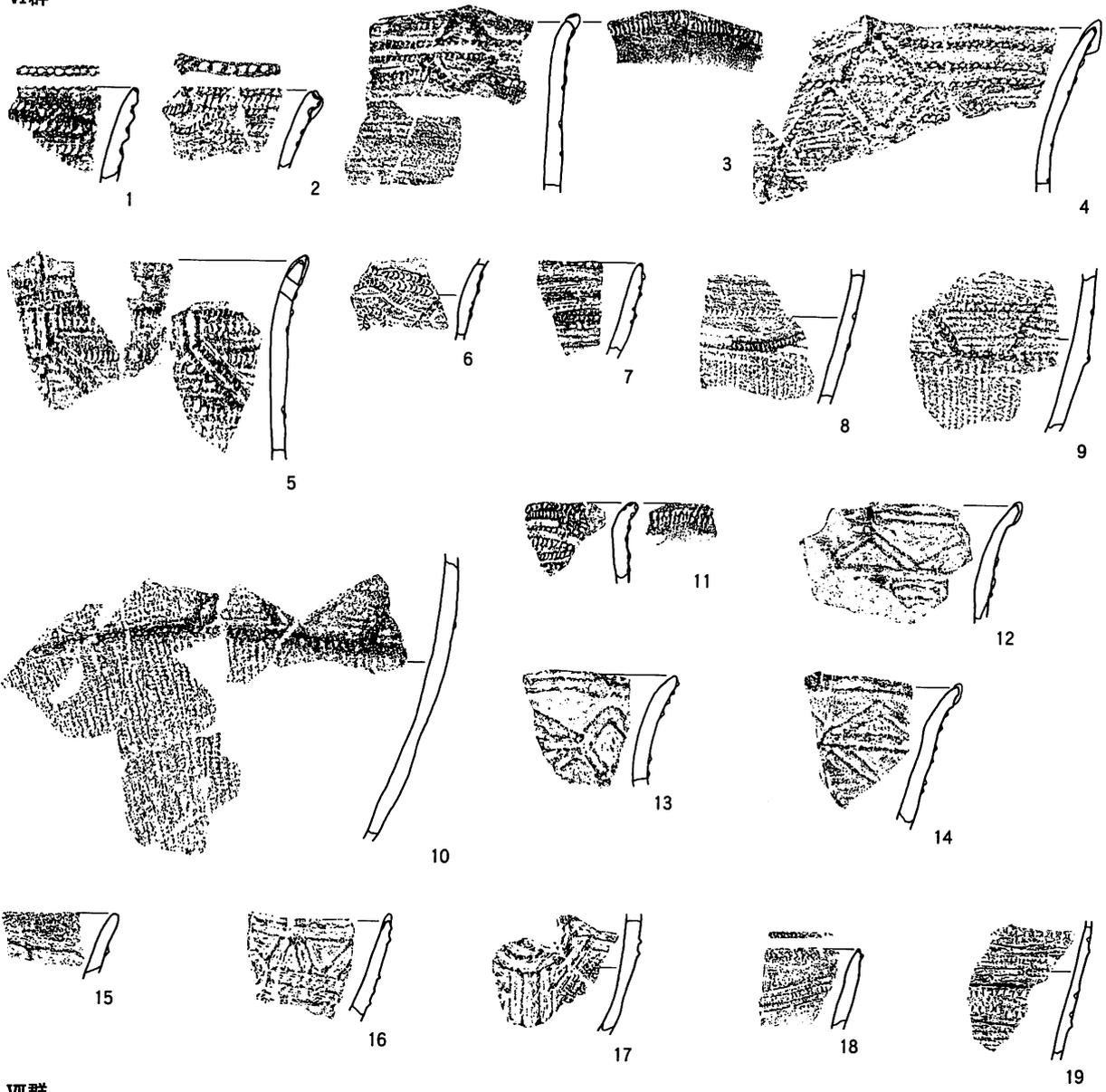
後北 A 式 1 は深鉢の口縁部、外面は横位隆起線文→隆起線間に刺突、内面はヨコナデ。**32** は双頂の突起を4対もち、4対の突起の下位にV字隆起線文をもつ。口縁部の横位隆起線はナデにより断面が三角形を呈する。**33** の断面形と異なる。隆起線文間に刺突。後北 A 式の新しいもの。**33** は突起下に二重の菱形隆起線文を配置し、その下端から縦位の隆起線文を垂下させる。

後北 B 式 2~7 は深鉢の口縁部である。**2** の外面は横位隆起線文・刺突→弧状の隆起線文・刺突→隆起線間に刺突・頸部文様帯内に刺突、内面はヨコナデ。**3** の外面は全体に摩滅している。RL横走→ナデ→横位隆起線文・刺突→波頂部に菱形の隆起線文・刺突→弧状隆起線文・刺突→頸部文様帯内に刺突、内面はヨコナデ、口縁端内側に刻み目。**4** の外面はRL横走→ナデ→横位隆起線文・刺突→波頂部に菱形の隆起線文・刺突→鋸歯状隆起線文・刺突→頸部文様帯内に刺突、内面はヨコナデ。**5** の外面はRL横走→ナデ→横位隆起線文・刺突→菱形?で2本単位の隆起線文・刺突→頸部文様帯内に刺突→菱形内に縦位の押引文、内面はヨコナデ、補修孔あり。**6** の外面はRL横走→ナデ→横位隆起線文・刺突→弧状の隆起線文・刺突→頸部文様帯内に刺突→弧状の内に円形隆起線文、内面はヨコナデ。**7** の外面はRL横走→ナデ→横位隆起線文・痕跡的に残る刺突→隆起線間に刺突、内面はヨコナデ。**8~10** は深鉢の頸部下半~胴部上半である。**8** の外面は、胴部上半にRL縦走、頸部下半にRL横走→ナデ→弧状の隆起線文・刺突→頸部文様帯内に刺突、内面はヨコナデ。**9** と**10** は同一個体、胴部上半にRL縦走、頸部下半にRL横走→ナデ→鋸歯状隆起線文・刺突→頸部文様帯内に刺突、内面はヨコナデ、炭化物が付着する。**11** は壺の口縁部、外面は横位隆起線文→頸部文様帯内に刺突、内面はヨコナデ、口縁端内側に上下2段の刻み目。

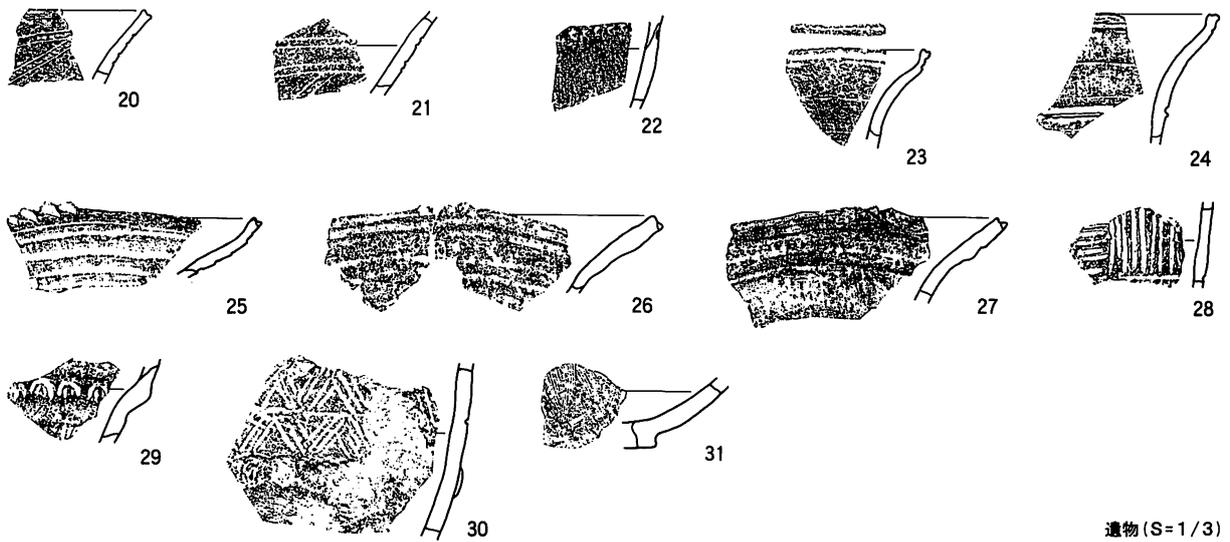
34 は一重の小さな円形隆起線文とV字隆起線文をもつ。**35** は耳付き壺、体部上半に二重の円形隆起線文を6対つけていると思われる。体部下半の文様は体部上半の残存部と反対側にあつたので180度回転して掲載した。**36** は隆起線文で菱形・逆台形を形づくる。**37** は隆起線文がつく底部。

後北 C₁ 式 12~17 は深鉢の口縁部と頸部下半~胴部上半である。**12** と**13** と**14** は同一個体、外面は全体に摩滅している。対向する2対の口縁部突起下に2本単位の縦長菱形隆起線文→横位2本単位隆起線→この上下に3個の鋸歯状隆起線文、内面は?→ヨコナデ。**15** の外面はRL横走→ナデ→横位隆起線文→縦位隆起線文、内面はヨコナデ?。**16** と**17** は同一個体。外面はRL斜行→ナデ→横位隆起線文→鋸歯状隆起線文→円形隆起線文→縦位隆起線文、内面はヨコナデ。

Ⅵ群



Ⅶ群



遺物(S=1/3)

図Ⅷ-2 I 黒層の土器(1)

VI b 類 38~40は深鉢底部で、**39・40**は上げ底が発達しておらず、**38**に比べて新しい時期の可能性がある。

後北 C₂・D 式 18は深鉢の口縁部、口縁端に横位隆起線文・刺突→RL 帯状横走、内面はヨコナデ。**19**は深鉢の胴部、隆起線文→刺突・RL 帯状横走、内面はナデ。

北大 I 式 41は胴部上半は直線的で頸部に若干のくびがあり、口縁部断面形が方形で、口縁端面は水平。口縁部に浅めの円形刺突文をもつが微隆起線文はない。北大 I 式の古い時期である。

VI 群 (図Ⅷ-2・4、表Ⅷ-1・2、図版Ⅷ-7・10)

VI a 類 20と**21**は十勝茂寄式甕の口縁部と頸部で、同一個体。胎土はよい。**20**は口縁端面は両面側からの強いナデのためにへこんでいる。外面は端面処理→ヨコナデ→半截竹管状工具による2本単位の沈線、内面はヨコミガキ、炭化物が付着する。**21**は半截竹管状工具による2本単位の沈線。**22**は十勝最寄式甕の胴部上半である。胎土はよい。頸部と胴部の境の外面には半截竹管状工具による刺突→タテミガキ、内面は摩滅のため不明。

VI b 類 23と**24**は球胴甕の口縁部で、**X-1**の球胴甕胴~底部(図Ⅴ-9-9)と同一個体の可能性がある。口縁端面がへこむくらいを強くナデられる。外面はタテハケ→ヨコナデ→沈線→ヨコナデ、内面はヨコハケ→ヨコナデ→ヨコミガキ。**25**は甕の口縁部、口縁端面がへこむくらいを強くナデられる。外面はヨコナデ→段状沈線→口縁端に4列の刻目、内面はヨコハケ→ヨコナデ。**26**と**27**は甕の口縁部で、同一個体。接合痕がよく残る。口縁端面がへこむくらいを強くナデられる。外面はタテハケ→ヨコナデ→凹線→口縁端に4列の刻目、内面はヨコハケ、炭化物が付着する。**42**は頸部と胴部の境に段状沈線による段を持つ。すべて耕作土から出土したが**P-2**と同じグリットから出土しており、**P-2**の上半部は耕作により削平されていることより**P-2**の壙口に置かれた可能性が高い。**43**は内面ヨコハケ→ナナメハケ、外面ヨコナデ→タテハケ。外底面は砂圧痕→ナデ。底部側面が張り出す。

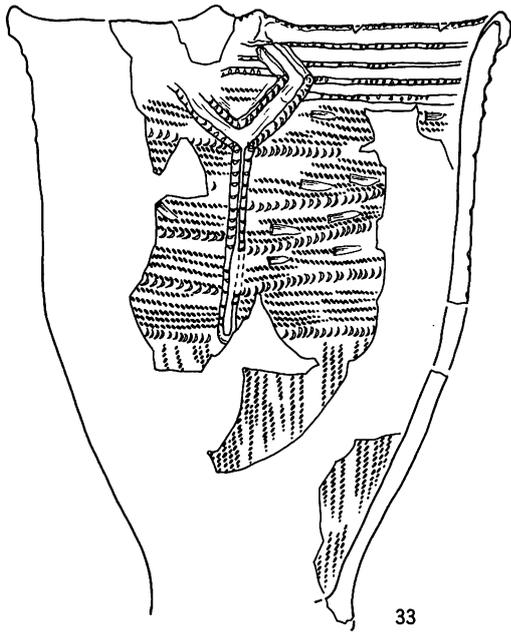
VI c 類 31は鉢の底部、外面はタテハケ、内面はヨコハケ。**44**は口縁部が受け口気味に立ち上がる。胴部から口縁部に続けて外反する器形で、頸部は不明瞭、横位沈線文の下地によって頸部の範囲が区分できる。

VI d 類 28は甕の頸部、外面は下地沈線はない。縦位沈線→横位沈線、内面は内黒、ヨコミガキ、炭化物が付着する。**29**と**30**は甕口縁部~頸部片で**H-2**(図Ⅴ-4-1)と同一個体。**29**の外面はヨコナデ→馬蹄形圧痕文。内面は内黒、ヨコミガキ。**30**の外面は貼付帯→馬蹄形圧痕文→横位沈線→下段鋸歯状文→上段鋸歯状文。内面は内黒、タテミガキ。ともに炭化物が付着する。**45**は高坏の脚部。内面はミガキ、外面はタテハケ→ヨコナデ→二段の刺突、外底面はケズリ→ナデで上げ底になっていない。**46**は頸部は直線的で、口縁部は少し受け口状になる。下地に横位綾杉文を施し、それと反対方向の横位綾杉を所々施す。貼付帯に馬蹄形圧痕文をもつ。

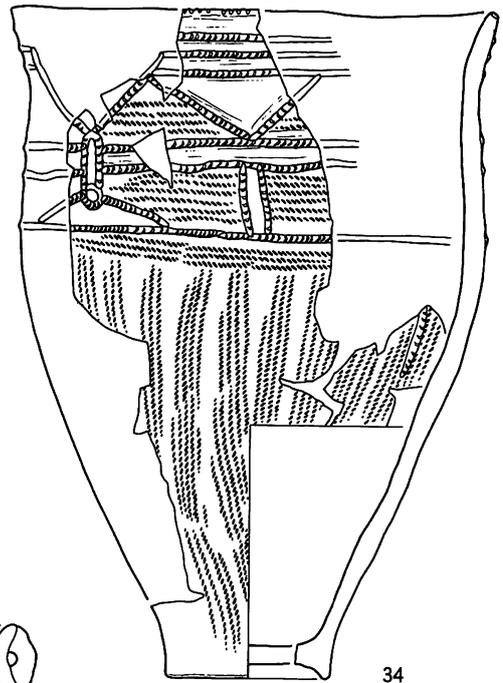
(2) 復原個体の接合関係について(図Ⅷ-5・6)

後北 A 式の深鉢(Ⅷ-3-32)は、**F-17**があるグリットに接合関係を持ち後北 A 式深鉢(Ⅷ-3-33)の接合関係とほぼ重複する。

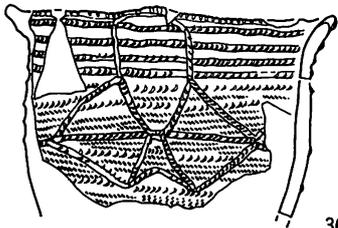
後北 B 式の深鉢(Ⅷ-3-34)は、後北 B 式の壺(Ⅷ-3-35)や**F-29**の後北 B 式深鉢(V-25-10)の深鉢の接合関係と重複する。(鈴木)



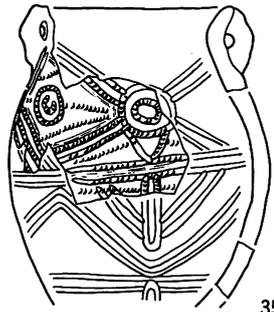
33



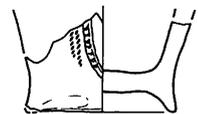
34



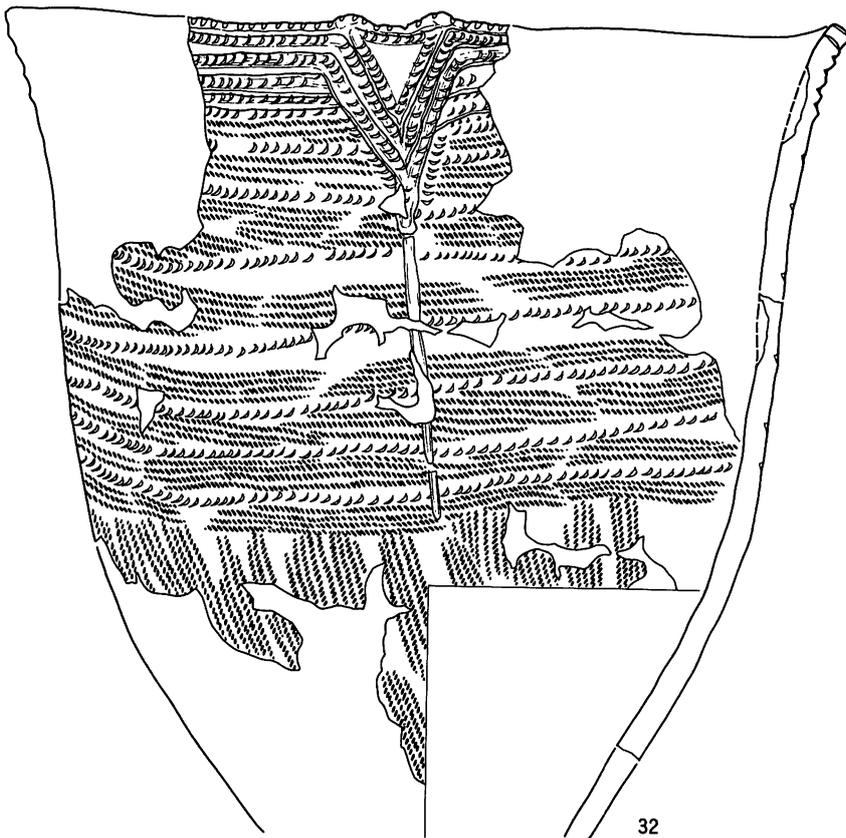
36



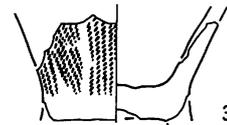
35



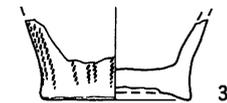
37



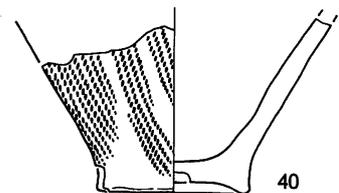
32



38



39

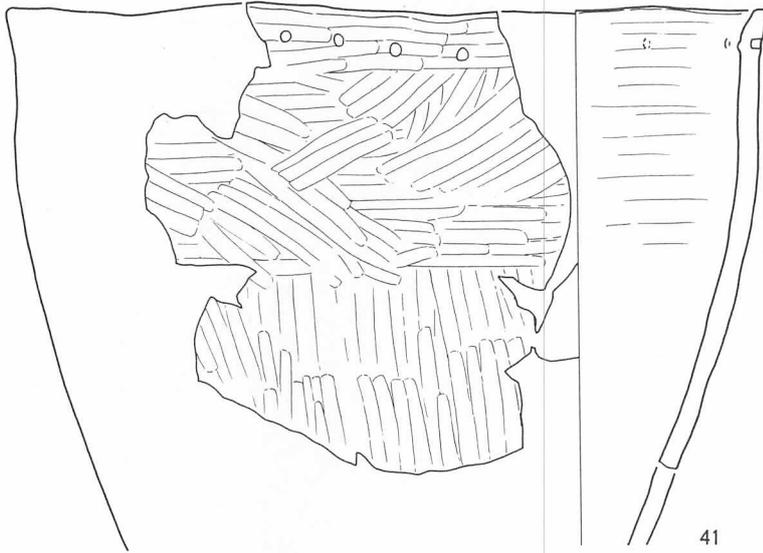


40

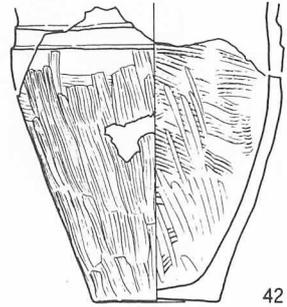
遺物(S=1/3)

図Ⅶ-3 I 黒層の土器(2)

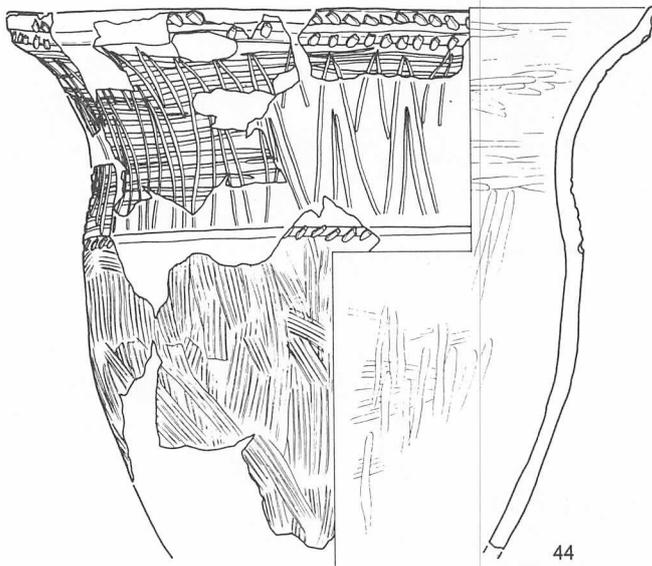
2 I 黒層の遺物



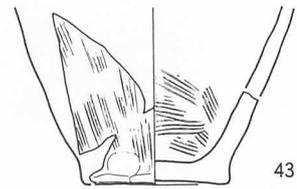
41



42



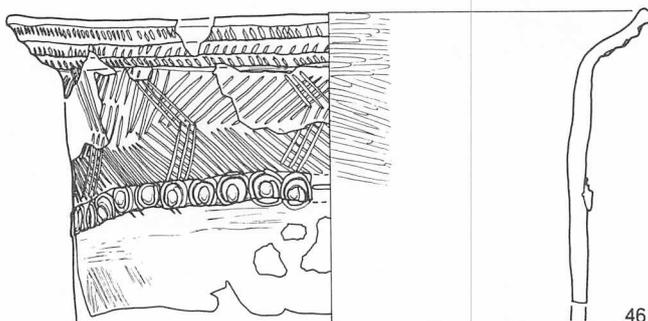
44



43



45



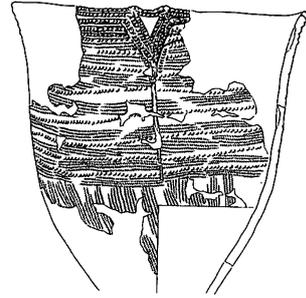
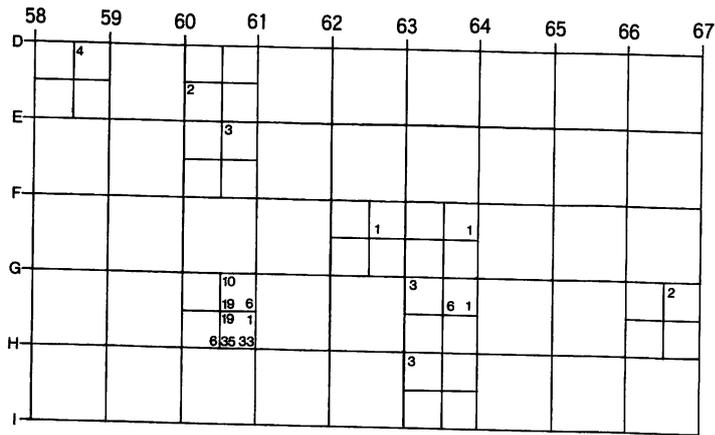
46

図VIII-4 I 黒層の土器(3)

遺物(S=1/3)

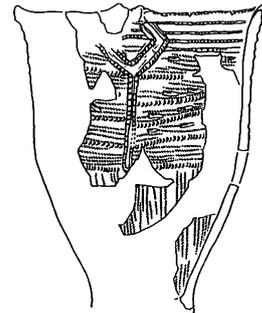
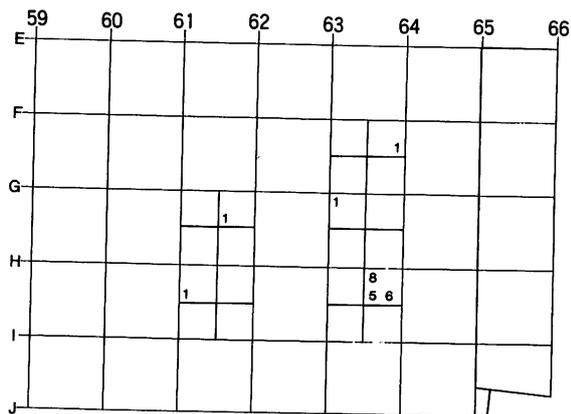
Ⅷ 台地部包含層の遺物

Ⅷ-3-32



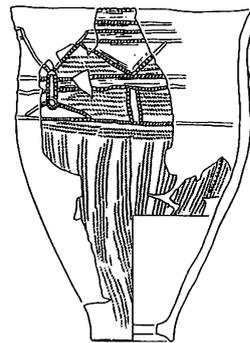
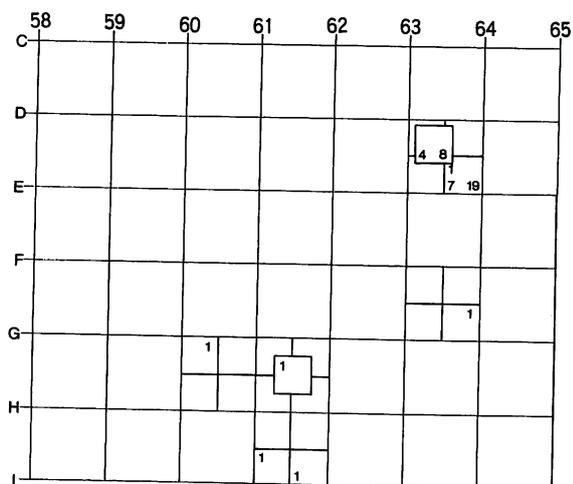
	口縁部	頸部	胴部	不明	合計
復元	5	63	42	0	110
復元残	43	49	6	1	99
合計	48	112	48	1	209

Ⅷ-3-33



	口縁部	頸部	胴部	底部	合計
復元	7	5	7	0	19
復元残	2	2	2	0	6
合計	9	7	9	0	25

Ⅷ-3-34



	口縁部	頸部	胴部	底部	合計
復元	1	5	21	3	30
復元残	2	7	6	0	15
合計	3	12	27	3	45

部位不明細片数：3

Ⅷ-3-32

口縁部	不明
頸部	胴部

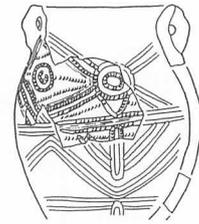
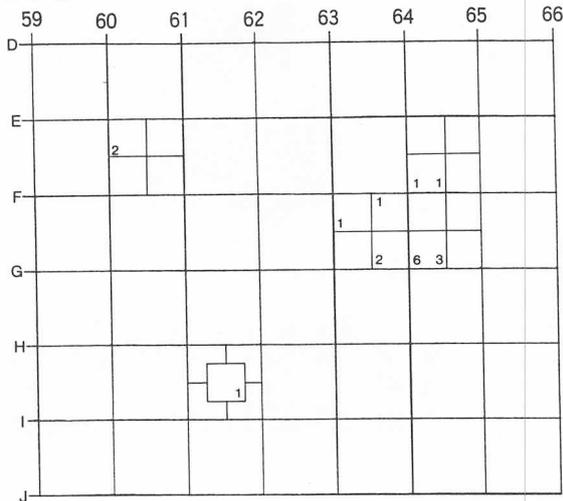
Ⅷ-3-33 Ⅷ-3-34

口縁部	底部
頸部	胴部

図Ⅷ-5 I 黒層の土器接合図(1)

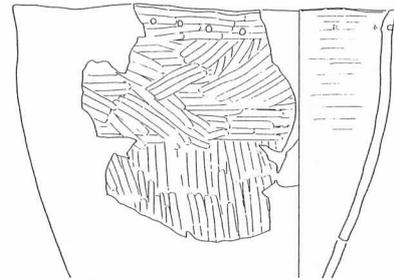
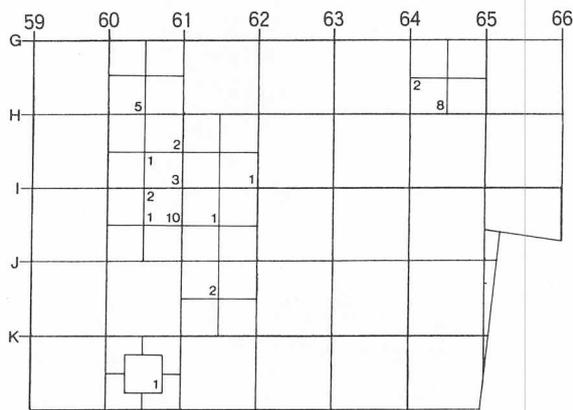
2 I 黒層の遺物

VIII-3-35



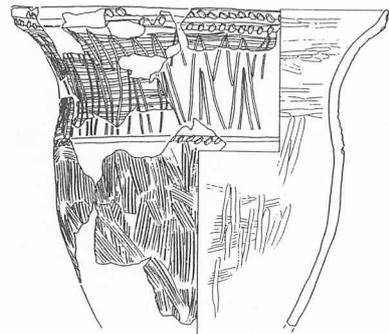
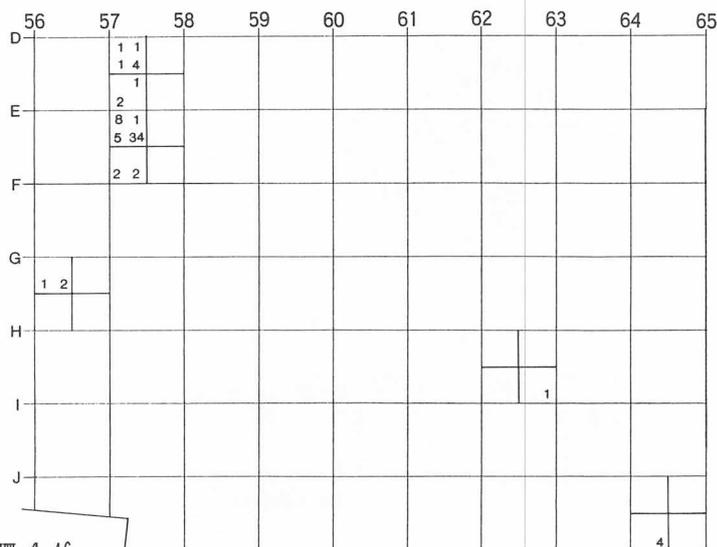
	口縁部	頸部	胴部	底部	合計
復元	1	6	4	0	11
復元残	0	6	1	0	7
合計	1	12	5	0	18

VIII-4-41



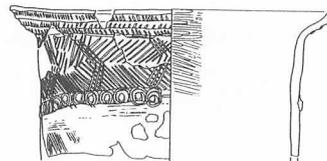
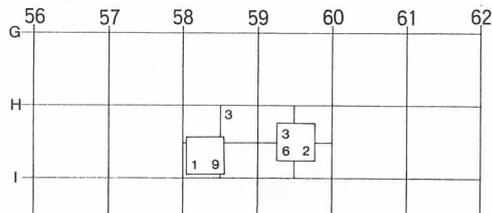
	口縁部	頸部	胴部	底部	合計
復元	5	1	20	0	26
復元残	0	0	13	0	13
合計	5	1	33	0	39

VIII-4-44



	口縁部	頸部	胴部	底部	合計
復元	6	7	15	0	28
復元残	3	4	32	3	42
合計	9	11	47	3	70

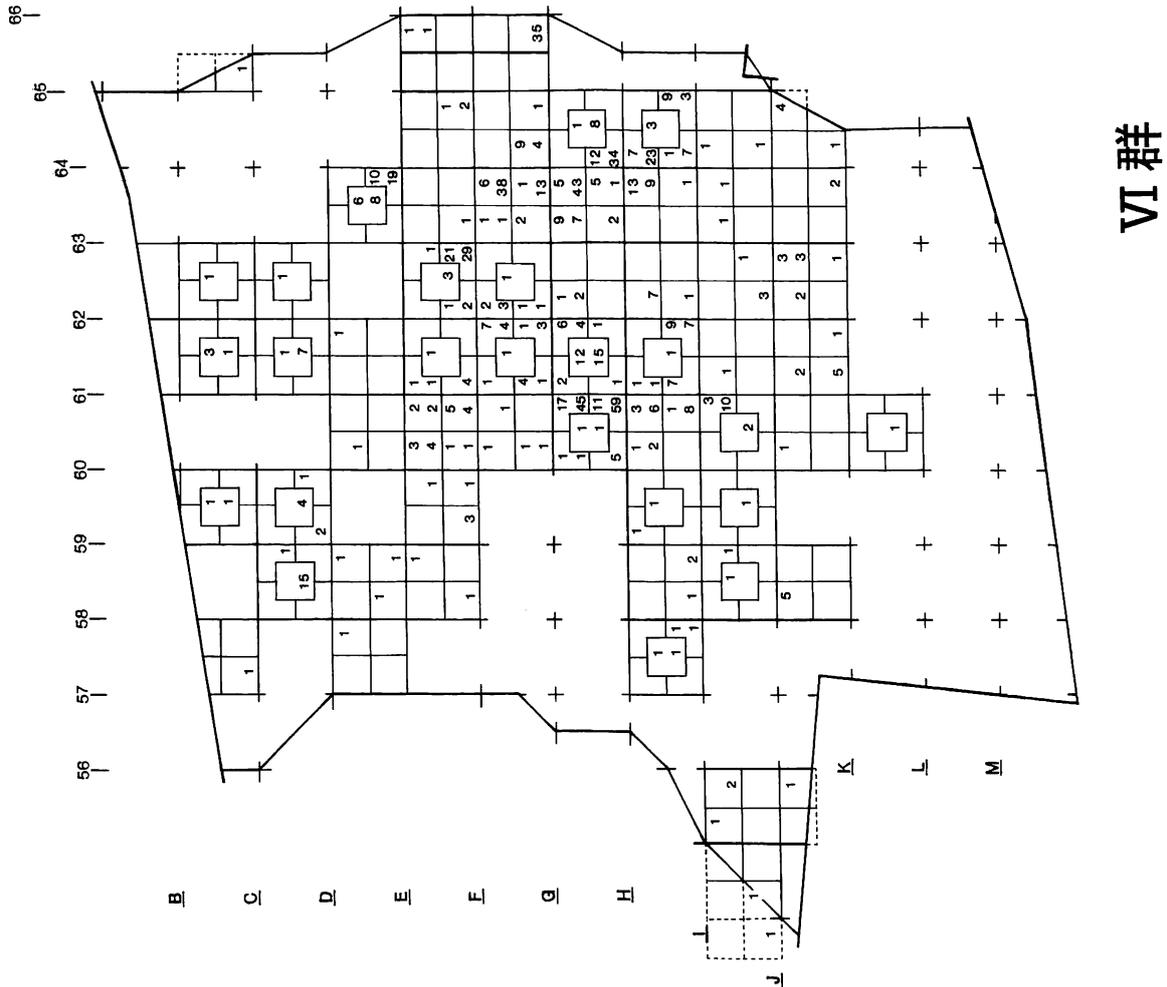
VIII-4-46



	口縁部	頸部	胴部	底部	合計
復元	6	7	6	0	19
復元残	0	0	5	0	5
合計	6	7	11	0	24

口縁部	底部
頸部	胴部

図VIII-6 I 黒層の土器接合図(2)

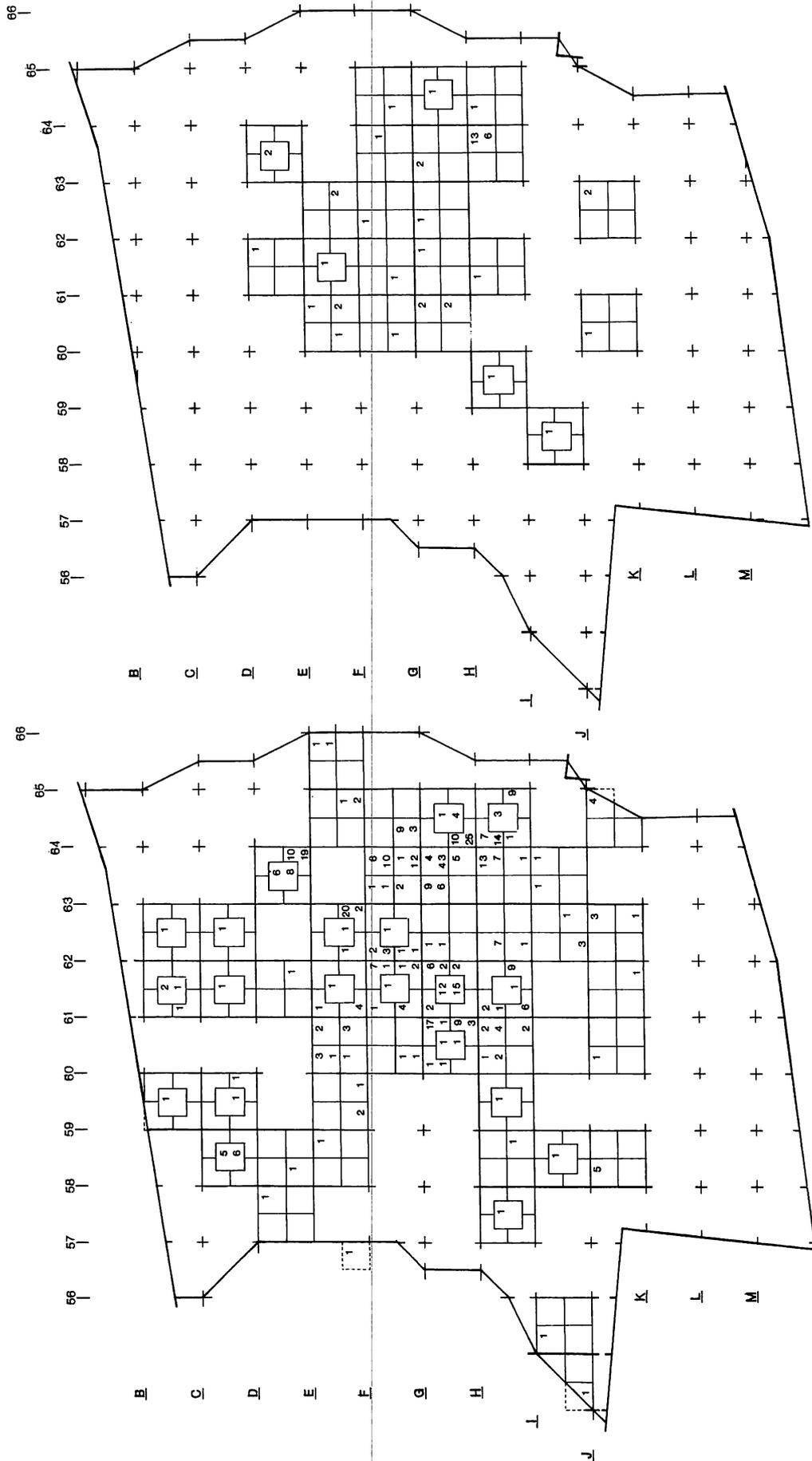


図Ⅷ-7 土器分布図(1)

表Ⅷ-1 I 黒層掲載土器一覽

図番号	発掘区	層位	分類
Ⅷ-2-1	E62c	IB	Ⅶb 後北A式
2	H64a	IB	Ⅶb 後北B式
3	G60a	IB	Ⅶb 後北B式
4	F63c	IB	Ⅶb 後北B式
5	F61a	IB	Ⅶb 後北B式
6	G61c	IB	Ⅶb 後北B式
7	E62c	IB	Ⅶb 後北B式
8	H61b	IB	Ⅶb 後北B式
9	G61d	IB	Ⅶb 後北B式
10	G61a	IB	Ⅶb 後北B式
11	G60d	IB	Ⅶb 後北B式
12	J64b	IB	Ⅶb 後北C ₁ 式
13	J64a	IB	Ⅶb 後北C ₁ 式
14	J64a	IB	Ⅶb 後北C ₁ 式
15	F60d	IB	Ⅶb 後北C ₁ 式
16	F63a	IB	Ⅶb 後北C ₁ 式
17	F53c	IB	Ⅶb 後北C ₁ 式
18	H57c	IB	Ⅶc 後北C ₂ ・D式
19	H59a	攪乱	Ⅶc 後北C ₂ ・D式
20	E64a	IB	Ⅶa 十勝茂寄式
21	E64b	IB	Ⅶa 十勝茂寄式
22	F62a	IB	Ⅶa 十勝茂寄式
23	G58a	IB	Ⅶb

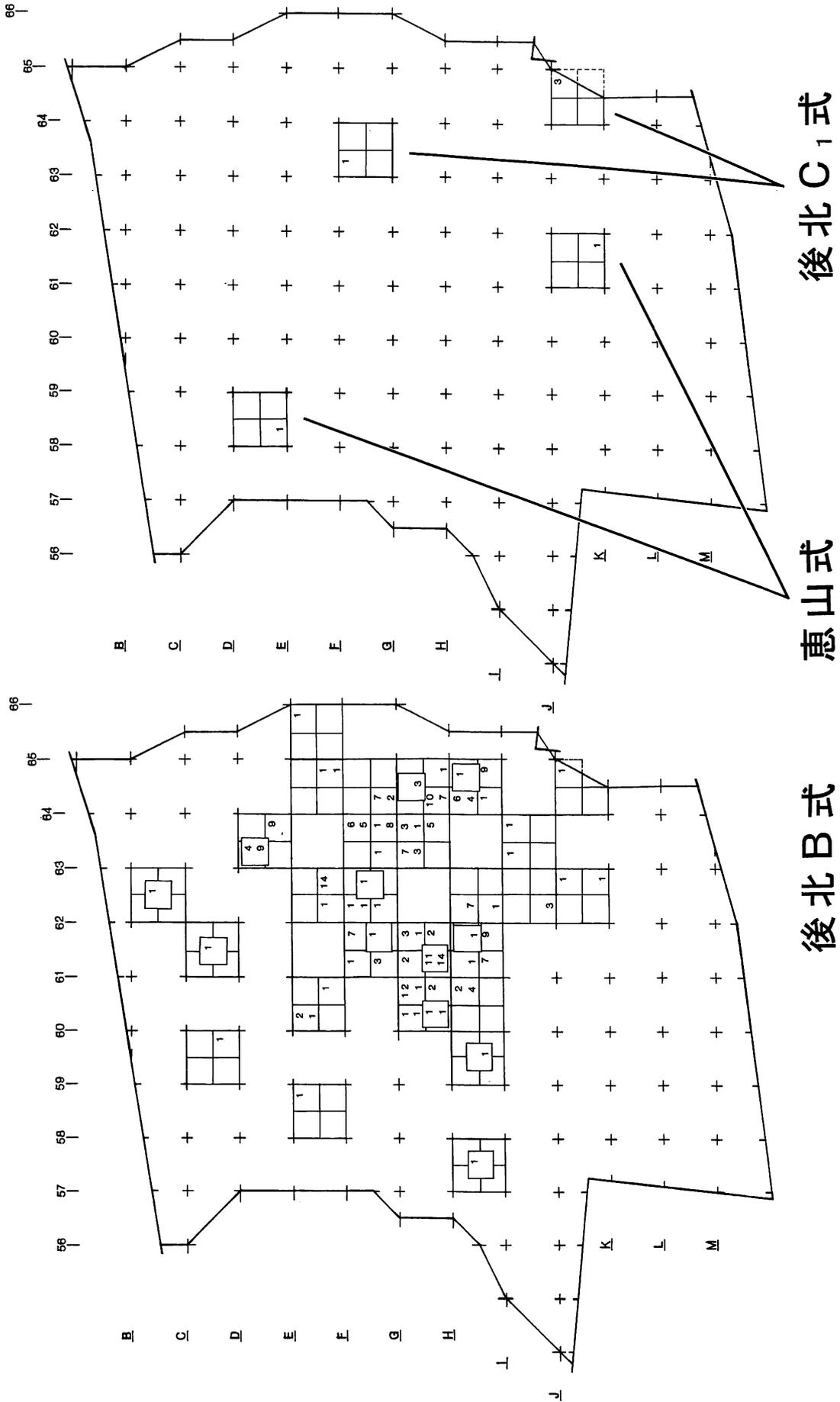
図番号	発掘区	層位	分類
Ⅷ-2-24	G59a	IB	Ⅶb
25	E59	IB	Ⅶc
26	F56a	IB	Ⅶc
27	D60b	IB	Ⅶc
28	B58b	IB	Ⅶd
29	E57d	IB	Ⅶd
30	F59d	IB	Ⅶd
31	F59c	IB	Ⅶ
Ⅷ-3-32	G60c他	IB	Ⅶb 後北A式
33	H63d他	IB	Ⅶb 後北A式
34	D63c他	IB	Ⅶb 後北B式
35	G64b他	IB	Ⅶb 後北B式
36	G60d他	IB	Ⅶb 後北B式
37	E64c	IB	Ⅶb 後北B式
38	H60c他	IB	Ⅶb 後北式
39	G64b他	IB	Ⅶb 後北式
40	C58他	IB	Ⅶb 後北式
Ⅷ-4-41	G64b他	IB	Ⅶc 北大I式
42	A60	IB	Ⅶb
43	F59b	IB	Ⅶb
44	F57a他	IB-2	Ⅶc
45	H65a	IB	Ⅶc
46	H65a	IB	Ⅶc



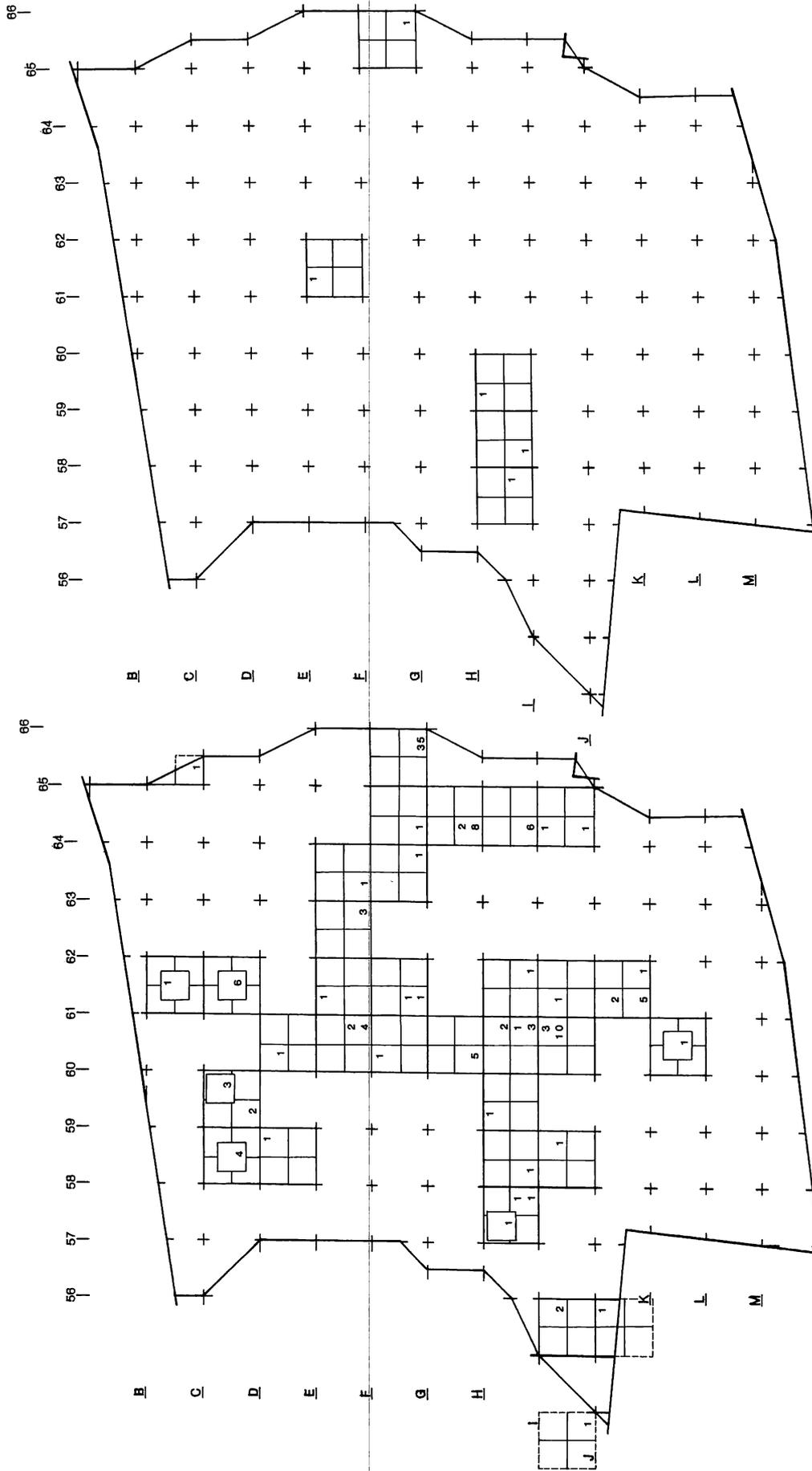
後北 A 式

VI b 類

図Ⅷ—8 土器分布図(2)



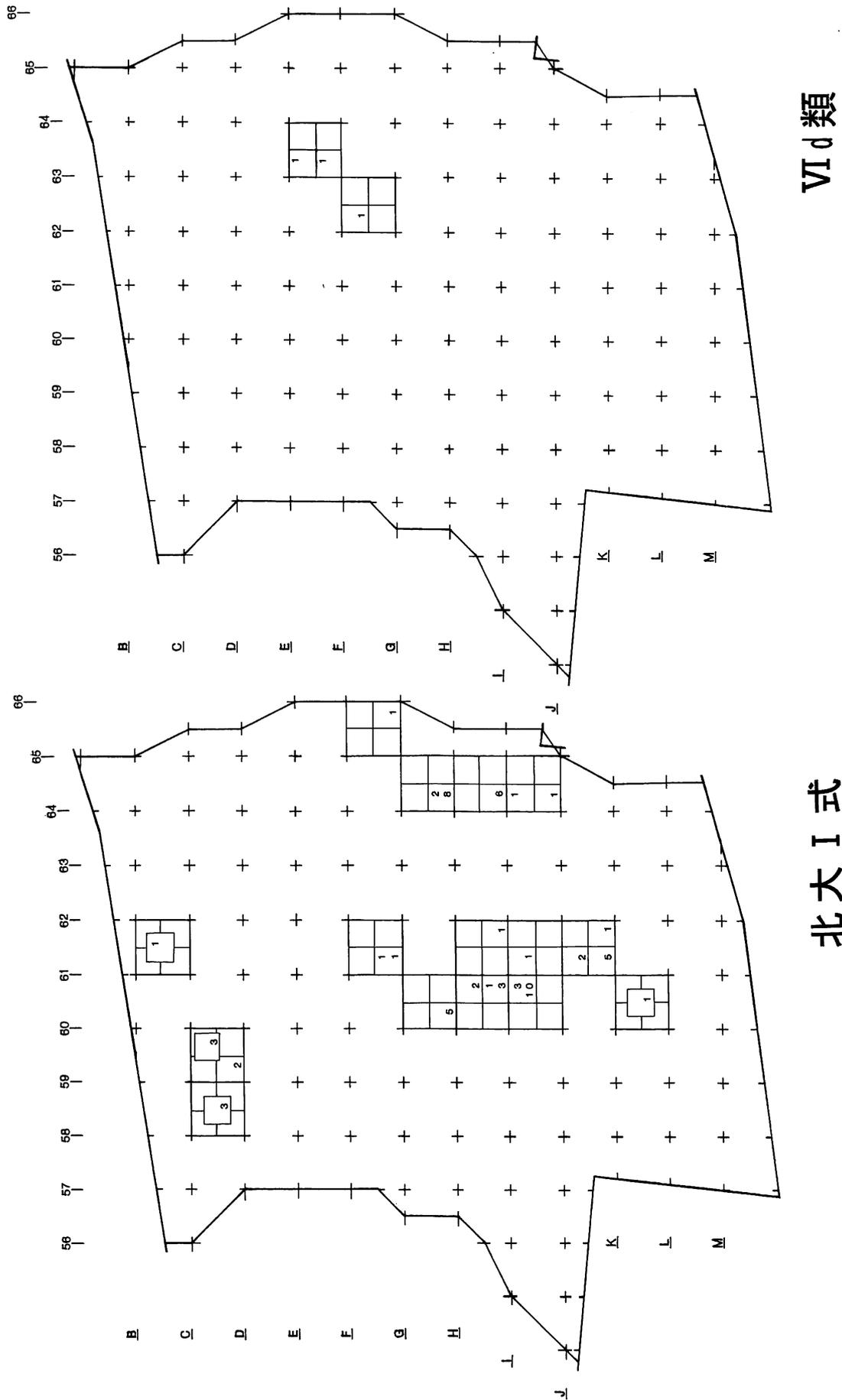
図Ⅷ-9 土器分布図(3)



後北C₂・D式

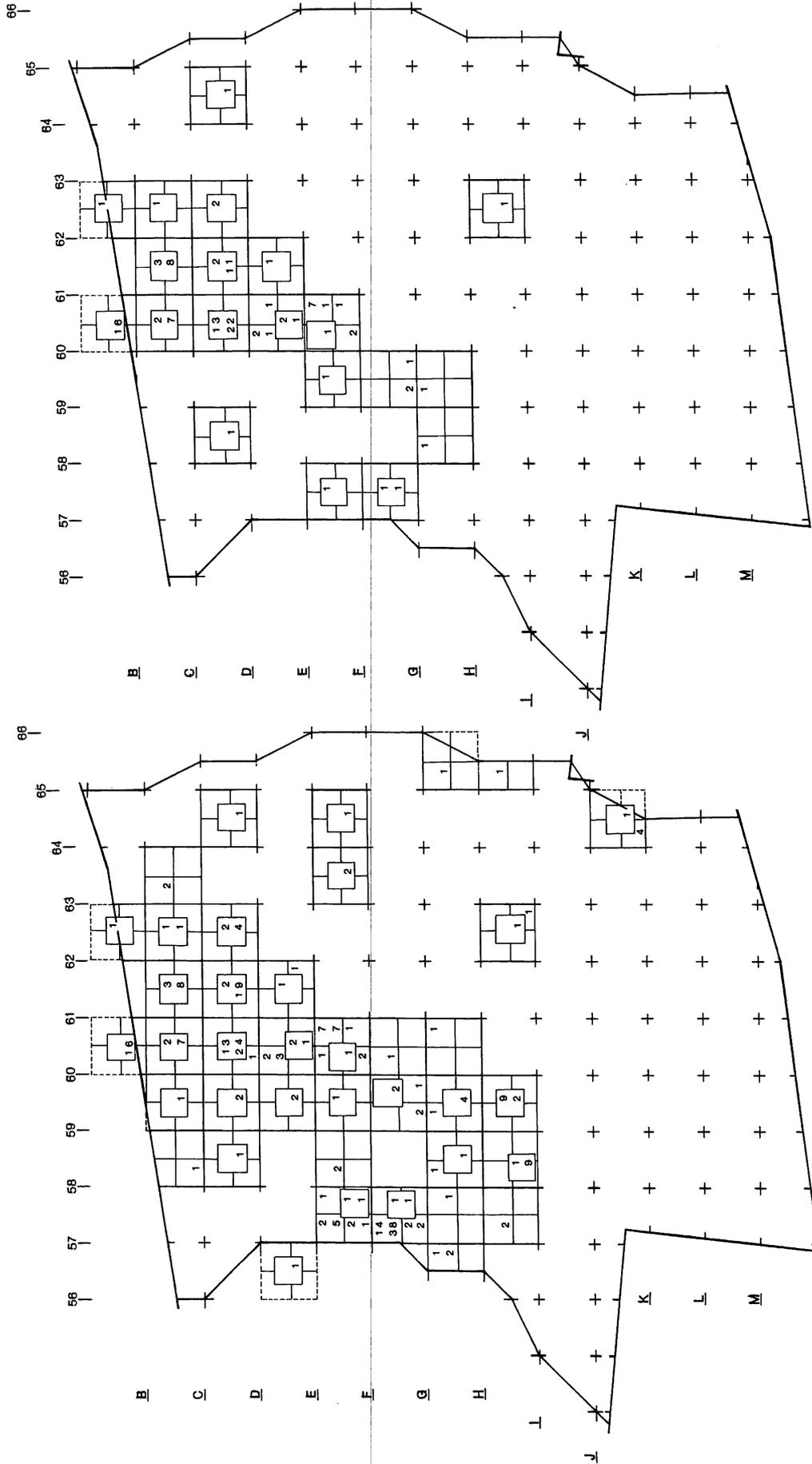
VI C類

図VIII-10 土器分布図(4)



図Ⅳ-11 土器分布図(5)

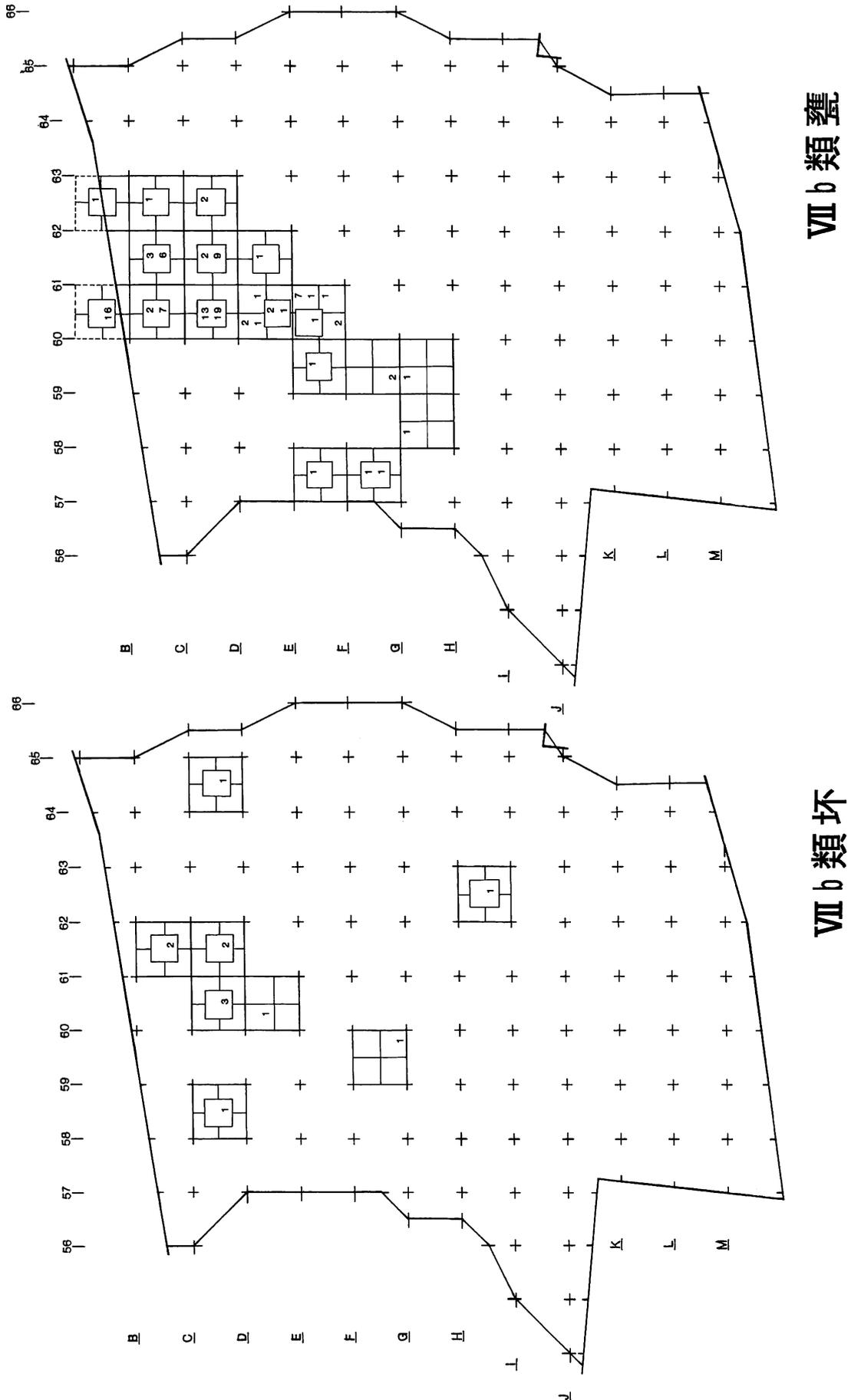
2 I 黒層の遺物



VII b 類

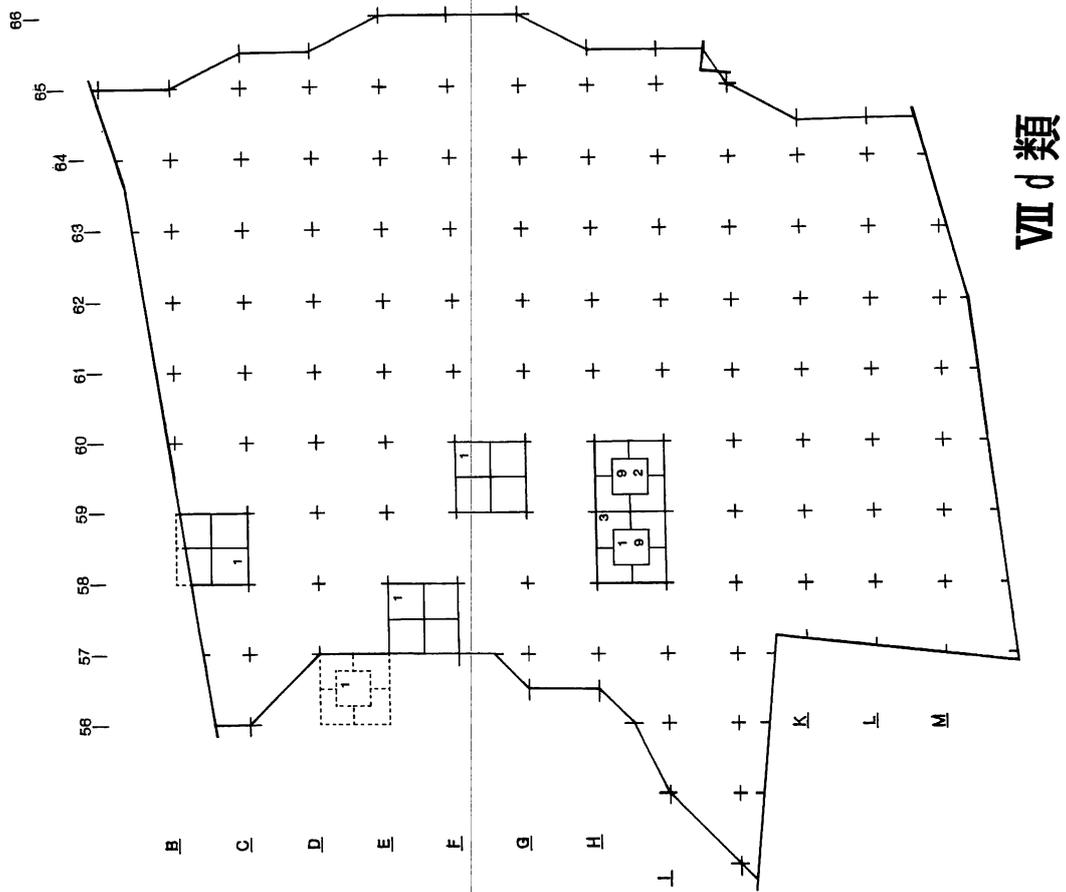
VII 群

図VIII-12 土器分布図(6)

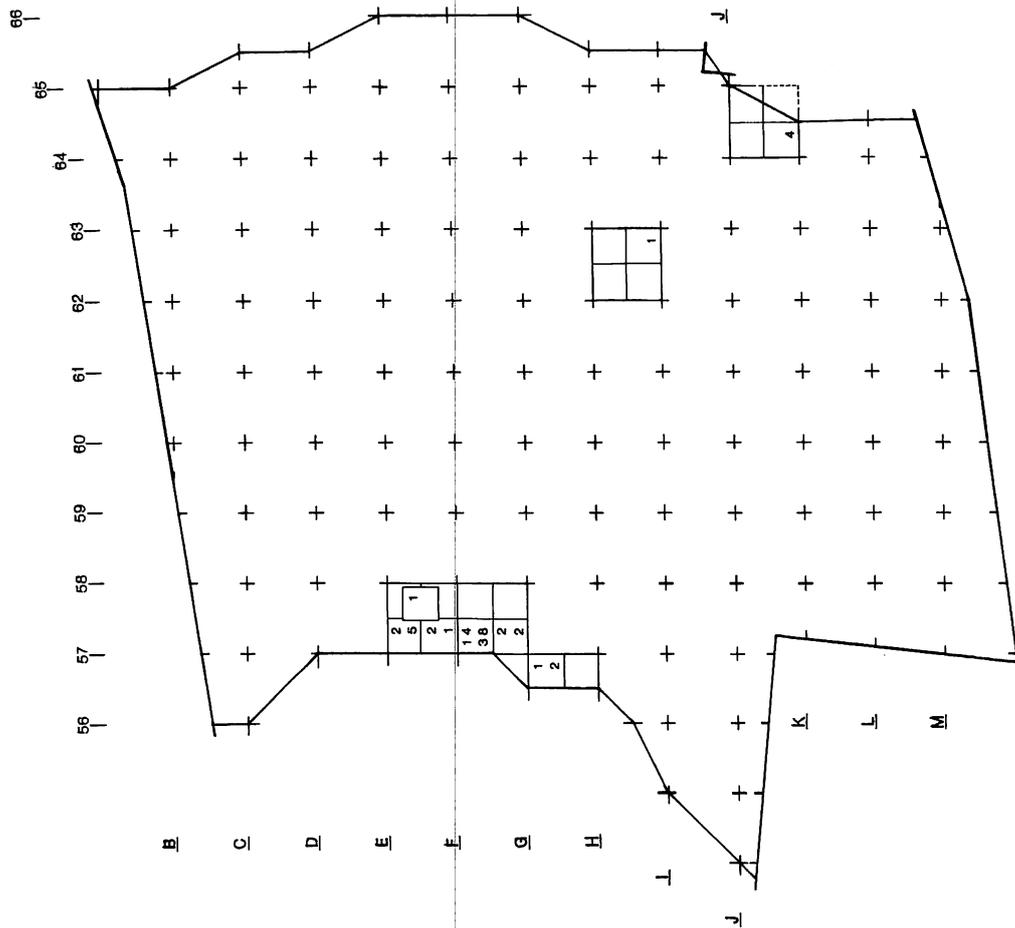


图Ⅷ-13 土器分布图(7)

2 I 黒層の遺物



VII d 類



VII c 類

図VIII-14 土器分布図(8)

表Ⅷ-2 土器観察表(1)

Ⅷ-3-32

口唇部	口縁部	頸部	胴部	備考
突起貼付	粘土紐巻上げ			・Hue7.5YR7/6 (橙色) ・炭化物付着
	ヨコナデ		RL縦走帯縄文	
		RL横走帯縄文		
	弱いヨコナデ			
	一番上の横位隆起線			
	一番上のV字状隆起線			
	二番目の横位隆起線			
	二番目のV字状隆起線			
	三番目の横位隆起線			
	三番目のV字状隆起線			
	四・五番目の横位隆起線			
	V字状隆起線に刺突			
	横位隆起線間に刺突			
		RL横走縄文間に刺突		
刻み		V字状隆起線下位に押引き		
内面	粘土紐巻上げ			・後北A式 ・2/5残存
	?			
	ヨコケズリ ヨコナデ			

Ⅷ-3-33

口唇部	口縁部	頸部	胴部	底部側面	備考
突起貼付	粘土紐巻上げ				・Hue7.5YR6/6 (明黄褐色)
	?			RL縦走帯縄文	
		RL横走帯縄文			
	弱いヨコナデ				
	突起に縦位隆起線				
	横位隆起線・刺突(上の3本)				
	菱形上半部隆起線				
		菱形下半部隆起線・刺突			
	横位隆起線・刺突(一番下)				
		菱形隆起線下位に縦位隆起線・刺突			
		刺突			
刻み		押引き			
内面	粘土紐巻上げ				・後北A式 ・1/3残存
	?				
	ヨコケズリ ヨコナデ				

Ⅷ-3-34

口唇部	口縁部	頸部	胴部	底部側面	備考
?	粘土紐巻上げ				・Hue107.5YR7/8 (黄橙色) ・炭化物付着
	ヨコナデ			RL縦走帯縄文	
		RL横走帯縄文			
	横位隆起線・刺突(2本)				
	V字隆起線・刺突				
		円形隆起線・刺突			
		V字隆起線下位に縦位隆起線・刺突			
		横位隆起線・刺突(4本)			
		V字隆起線・刺突			
		V字隆起線下位に縦位隆起線・刺突			
刻み		円形隆起線から伸びる隆起線			
内面	粘土紐巻上げ				・後北B式 ・上半1/2残存
	ヨコナデ				

Ⅷ-3-35

口唇部	口縁部	頸部	胴部	備考
耳貼付	粘土紐巻上げ			・Hue10YR8/4 (浅黄橙色)
	?			
	横位隆起線・刺突			
		円形隆起線・刺突		
		横位隆起線・刺突(2)		
	円形隆起線から伸びる隆起線			
		円形隆起線下位のV字隆起線		
		V字隆起線下位の縦位隆起線		
		刺突		
		円形隆起線・刺突		
内面	粘土紐巻上げ			・後北B式 ・1/6残存
	ヨコナデ			

表Ⅷ-3 土器観察表(2)

Ⅷ-3-36

	口唇部	口縁部	頸部	胴部	備考
外	粘土紐巻上げ				・ Hue7.5YR6/6 (明黄褐色) ・ 炭化物付着
	突起貼付		?		
	RL横走帯縄文			RL縦走帯縄文	
	ヨコナデ				
面	突起下位に短い横位隆起線・刺突				
	横位隆起線・刺突(4本)		U字隆起線・刺突(2本)		
	U字隆起線間にV字隆起線・刺突				
	U字隆起線・V字隆起線間に横位隆起線・刺突				
	U字隆起線下位に八字隆起線・刺突				
内面	粘土紐巻上げ				・ 後北B式 ・ 上半1/2残存
	ヨコナデ				

Ⅷ-4-41

	口唇部	口縁部	頸部	胴部	備考
外	粘土紐巻上げ				・ Hue7.5YR4/4 (褐色) ・ 石英、長石、チャート、軽石が多い ・ 炭化物付着
	?				
	タテハケ				
	タテナデ				
面	ヨコナデ		ナナメナデ		
	ヨコナデ		円形刺突		
内面	粘土紐巻上げ				・ 北大I式 ・ 1/4残存
	?				
	タテハケ				
	ヨコナデ				

Ⅷ-4-44

	口唇部	口縁部	頸部	胴部	備考
外	粘土紐巻上げ				・ Heu10YR8/4 (浅黄褐色)
	?				
	ヨコハケ				
	タテハケ				
面	ヨコナデ		ナナメハケ		
	凹線		横位沈線		
			大きな縮歯文		
			下側縮歯文		
	刺突		刺突		
内面	粘土紐巻上げ				・ VII c ・ 全体に摩滅 ・ 1/3残存
	?				
	ヨコハケ				
面	ヨコナデ				
	ヨコミガキ		タテミガキ		

Ⅷ-4-42

	頸部	胴部	底部側面	備考
外	粘土紐巻上げ			・ 10YR4/4 (褐色)
	?			
	タテハケ			
	ヨコハケ			
面	タテハケ			
	段状沈線			
内面	ヨコナデ			
	粘土紐巻上げ			
	?			
内面	ヨコハケ			・ VII b ・ 頸部以下残存
	一部ミガキ			

Ⅷ-4-46

	口唇部	口縁部	頸部	胴部	備考
外	粘土紐巻上げ				・ Hue10YR5/3 (にぶい黄褐色) ・ 炭化物付着
	?				
	タテハケ				
	ヨコナデ				
面	左向き鏡形(下部→上部)				
	右向き鏡形(上部→下部)				
	刺突		ヨコナデ		
	貼付帯位置取りの為の沈線				
	貼付帯				
内面	馬蹄形圧痕文				
	粘土紐巻上げ				
	ヨコナデ				
内面	ヨコミガキ				・ VII d ・ 上半部1/3残存
	ヨコミガキ				

(3) 石器等 (図VIII-15~18、表VIII-4、図版VIII-10)

石鏃・石鏃未製品 石鏃41点、石鏃未製品8点が出土している。形態の確認できたものは三角形のもの3点、凹基11点、平基5点、有茎鏃4点である。そのうち、凹基2点、平基3点、有茎鏃1点の6点を図示した。分布はF 63区から6点、F 61区から5点、G 63、H 61、J 63区から4点が出土した。特徴が見られたのは、片岩の石鏃で、後北A・B式土器のVI群B類土器の分布域とほぼ一致している。形態は三角形の凹基、平基のものである。石質は3~5は片岩。その他は黒曜石である。1は凹基のうち最大長のもの。I B出土の三角形の石鏃(凹基と平基を含む)は長さは1.3cm~2.7cm、幅は1.2cm~1.6cmに収まる。

石槍・ナイフ 6点出土している。図示していない。分布図のみ掲載した。

石錐 4点が出土している。このうち2点を図示した。石質はともに黒曜石。7~8はともに刺突部を作り出したもの。

つまみ付きナイフ 出土している1点を図示した。石質は黒曜石。9は表面が片面加工、裏面が周縁加工されているもの。先端を欠く。

スクレイパー 3点が出土している。石質は黒曜石。図示していない。分布図のみ掲載した。

楔形石器 1点が出土している。石質は黒曜石である。図示していない。分布図のみ掲載した。

石核 6点が出土している。6点が黒曜石で、2点が縞頁岩である。図示していない。分布図のみ掲載した。

石斧・石斧片・石斧未製品 石斧4点、石斧片1点、石斧未製品1点が出土している。図示していない。分布図のみ掲載した。遺構と包含層の間ではE 59 c I B出土とH-9出土の片岩の石斧が接合した。包含層間ではH 58 d I B出土とH 57 c II B上出土の泥岩の石斧が接合した。

たたき石 1点が出土している。石質は閃緑岩。図示していない。分布図のみ掲載した。

すり石 1点が出土している。石質は砂岩。図示していない。分布図のみ掲載した。

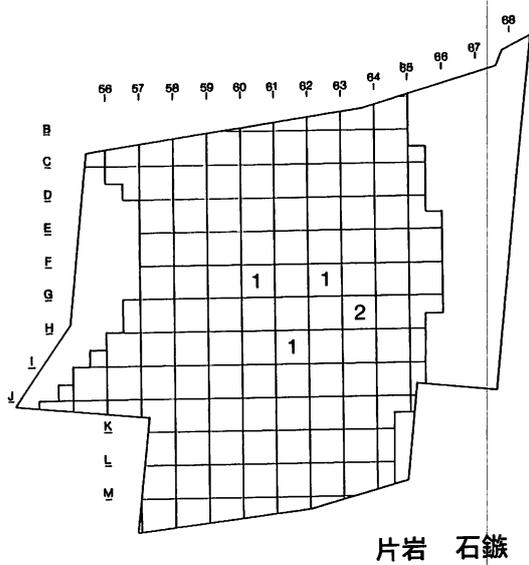
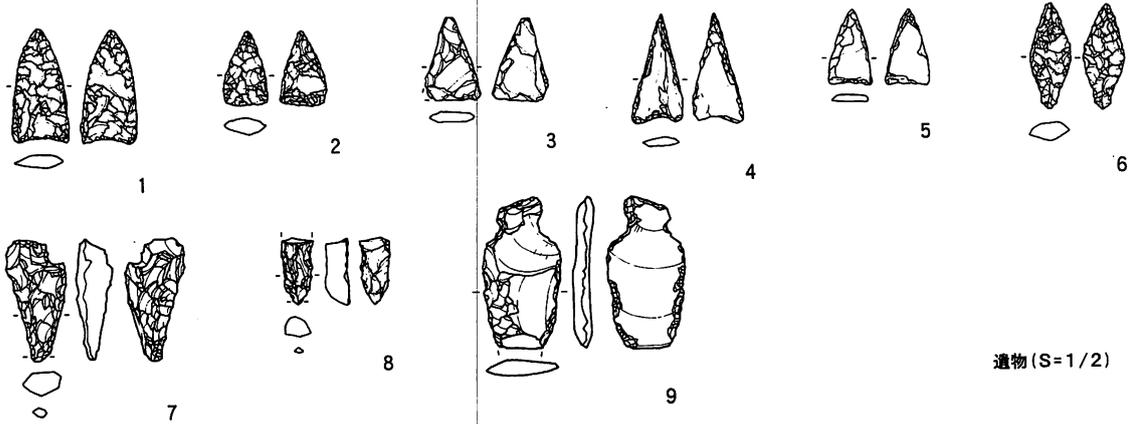
台石・石皿 台石が1点出土している。石質は泥岩。図示していない。分布図のみ掲載した。

砥石 1点が出土している。J 63 aから出土した3点が接合し、1個体になったものである。図示していない。分布図のみ掲載した。(倉橋)

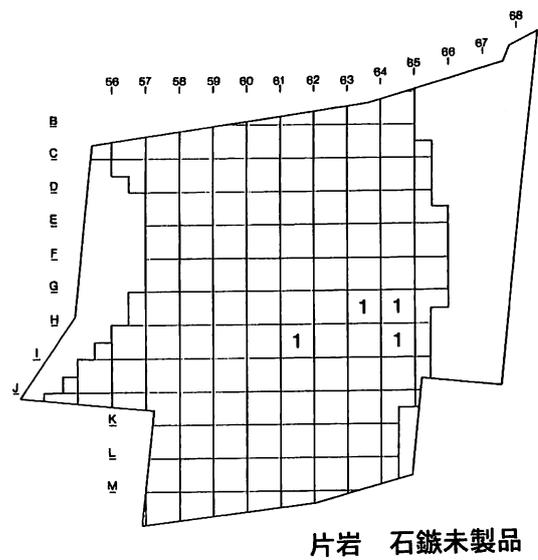
表VIII-4 I 黒層掲載石器一覧

掲載番号	調査区	遺物番号	分類	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	材質	備考
VIII-15-1	G 61 c	3	石鏃	I B	27.9	13.6	3.8	1.4	黒曜石	
VIII-15-2	F 63 d	11	石鏃	I B	18.4	10.4	3.9	0.8	黒曜石	
VIII-15-3	G 63 a	42	石鏃	I B	20.4	14.5	2.3	0.8	片岩	
VIII-15-4	H 61 d	8	石鏃	I B	25.5	12.4	2.0	0.7	片岩	
VIII-15-5	F 60 d	16	石鏃	I B	18.2	10.2	1.5	0.5	片岩	
VIII-15-6	F 59 d	10	石鏃	I B	26.9	9.6	4.2	1.1	黒曜石	
VIII-15-7	E 61 a	14	石錐	I B	32.0	14.2	8.6	3.3	黒曜石	
VIII-15-8	E 59 d	25	石錐	I B	16.8	7.6	5.3	0.9	黒曜石	
VIII-15-9	E 59 c	20	つまみ付きナイフ	I B	(40.0)	20.8	4.0	3.1	黒曜石	赤井川(肉眼)

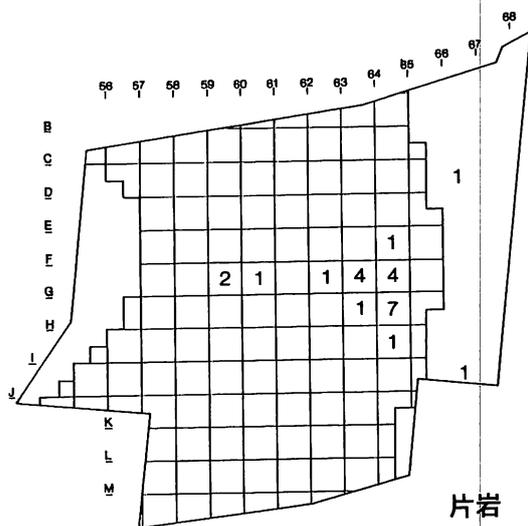
2 I 黒層の遺物



片岩 石鏃

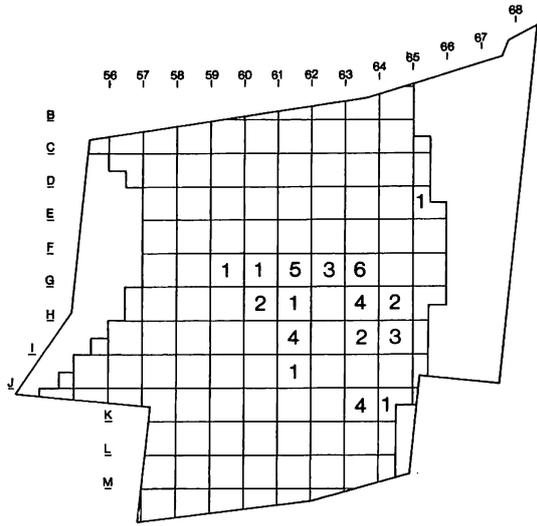


片岩 石鏃未製品

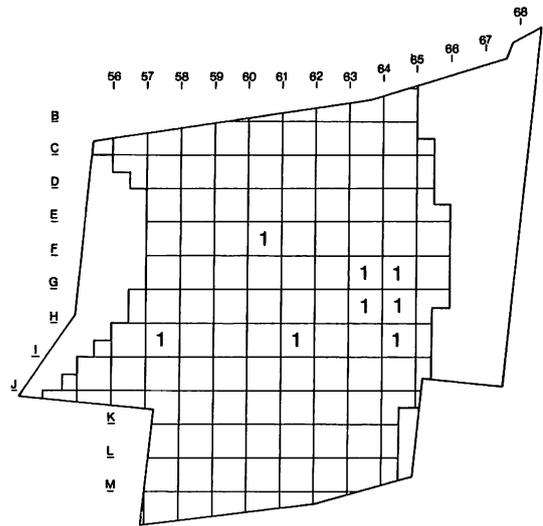


片岩 フレイク

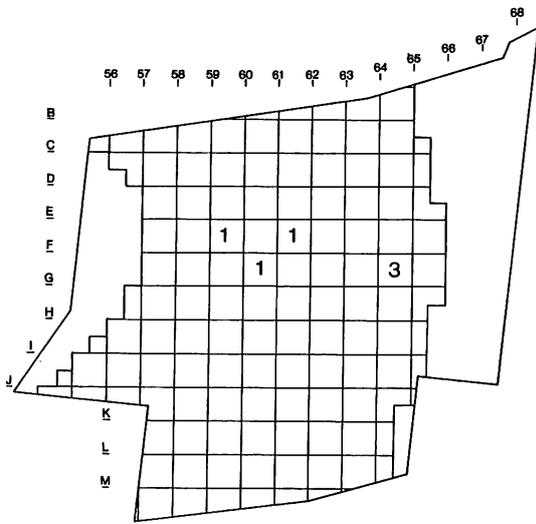
図VIII-15 I 黒層の石器、分布図(1)



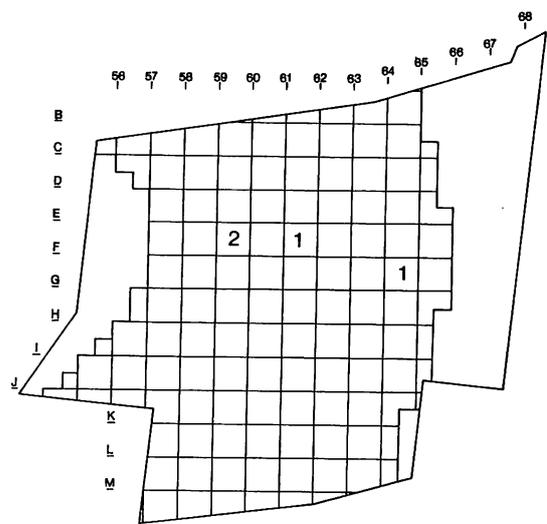
石鏃



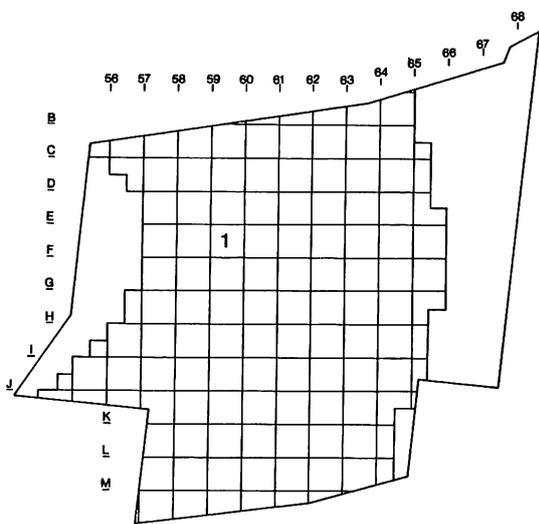
石鏃未製品



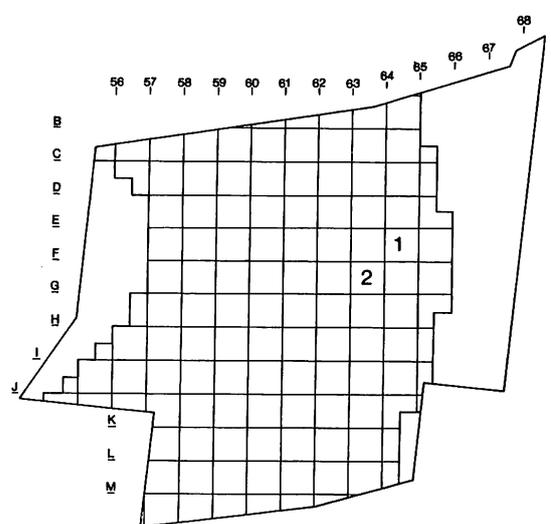
石槍・ナイフ



石錐



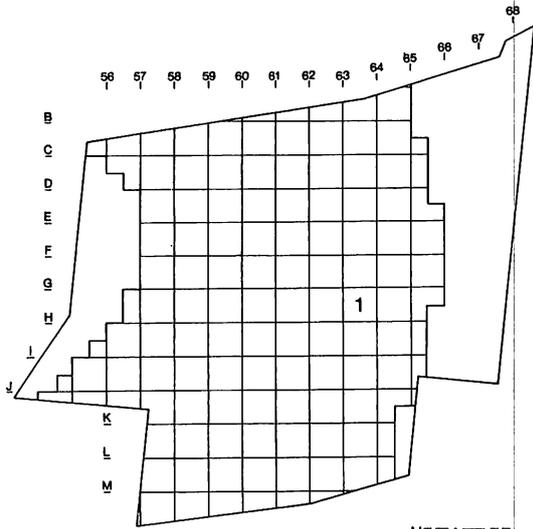
つまみ付きナイフ



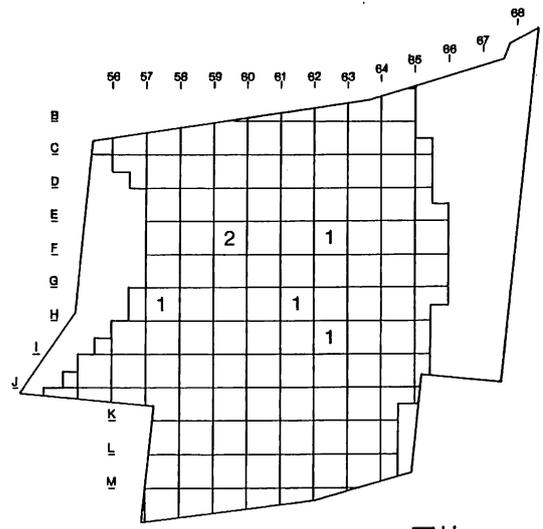
スクレイパー

図Ⅷ-16 石器分布図(2)

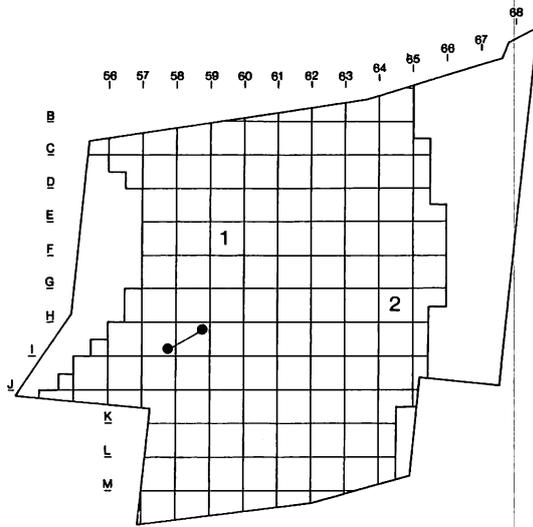
2 I 黒層の遺物



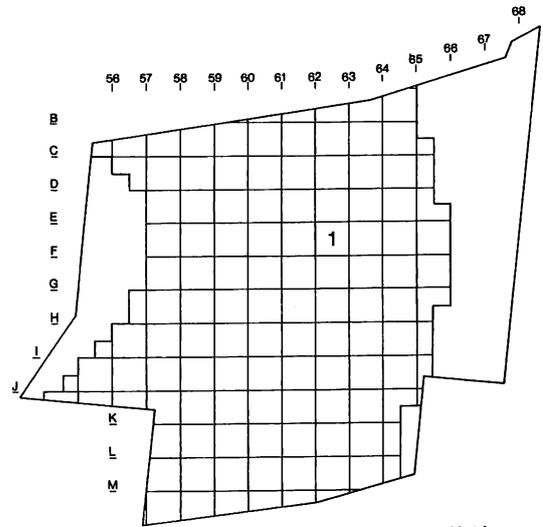
楔形石器



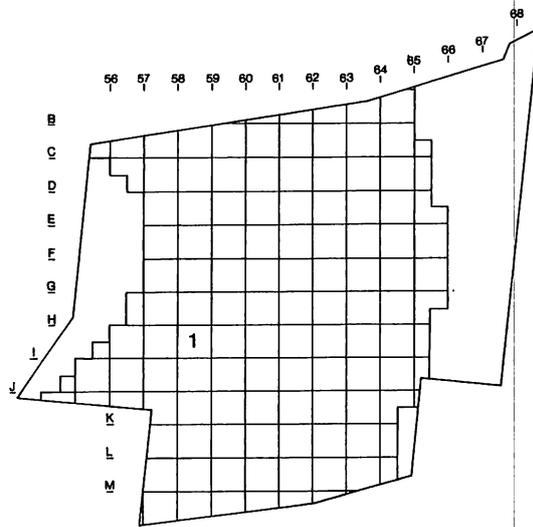
石核



石斧

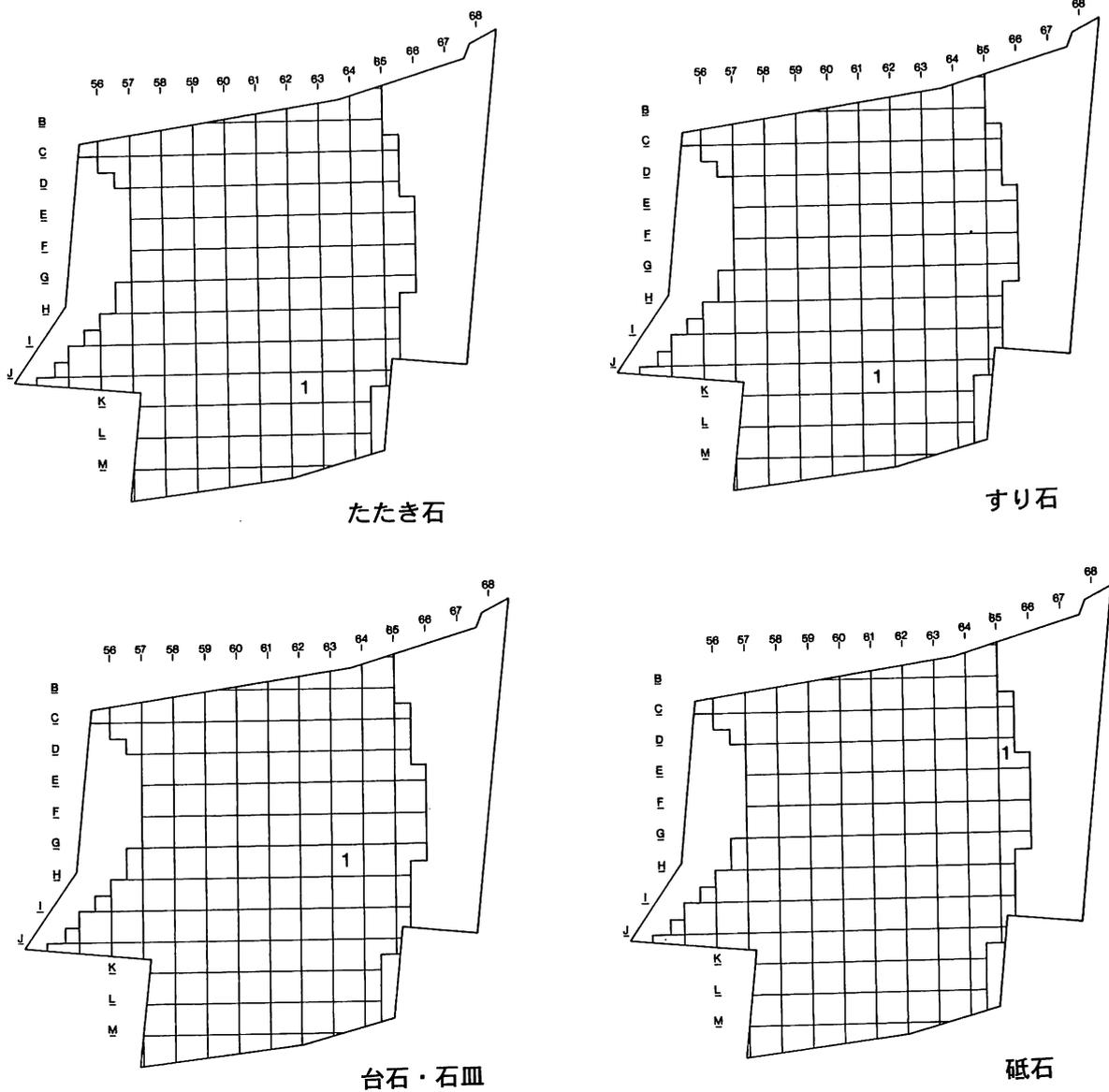


石斧片



石斧未製品

図Ⅷ-17 石器分布図(3)



図VIII-18 石器分布図(4)

表VIII-5 I黒層等の金属製品等一覧

図No.	図版No.	名称	遺構・グリッド	層	大きさ	cm・g	備考
Ⅷ19 1	Ⅷ-11	一文字湯内耳鉄鍋	西側攪乱	IB2相当?	推定口径 32.2 推定高 18.5	全重量 (1120.0)	攪乱一括32片
Ⅷ19 2	Ⅷ-11	鉄鍋	C65 d	IB1	口径 23.5 高さ (11.5)	重量 (406.4)	
Ⅷ19 3	Ⅷ-11	小太刀	西側攪乱	IB2相当?	長さ (40.2) 刃幅 3.0 剣厚 0.8	重量 (410.8)	重量は鐔込み
Ⅷ19 4	Ⅷ-11	鐔	西側攪乱	IB2相当?	長径 6.75 短径 6.4 厚さ 0.45		3に付属
Ⅷ19 5	Ⅷ-11	足金物	西側攪乱	IB2相当?	高さ 5.05 足短径 1.7	重量 24.3	3の鞘金具、先側
Ⅷ19 6	Ⅷ-11	足金物	西側攪乱	IB2相当?	高さ 5.45 足短径 2.1	重量 28.1	、口側
Ⅷ19 7	Ⅷ-11	刀装具片	西側攪乱	IB2相当?	長さ 7.9 幅 1.1	重量 3.7	3の鞘か柄の金具
Ⅷ19 8	Ⅷ-11	素材	B65 b	IB2	長さ 23.0 刃幅 1.0 剣厚 0.9	重量 84.3	
Ⅷ19 9	Ⅷ-11	釘	F61 b	IB1相当?	長さ 10.4 幅 0.4 厚 0.3	重量 7.7	
Ⅷ19 10	Ⅷ-11	棒状鉄製品	F60 a	IB1相当?	長さ (3.6) 幅 0.6 厚 0.4	重量 (1.1)	
Ⅷ19 11	Ⅷ-11	棒状鉄製品	G63 c	IB1相当?	長さ (5.0) 幅 0.5 厚 0.5	重量 (2.8)	
Ⅷ19 12	Ⅷ-11	細板状鉄製品	H58	IB1相当?	長さ 5.5 幅 0.35 厚 0.3	重量 7.0	
—	—	鉄滓	I63 a	IB上	長さ 4.5 幅 3.3 厚 3.0	重量 21.4	1点単独出土

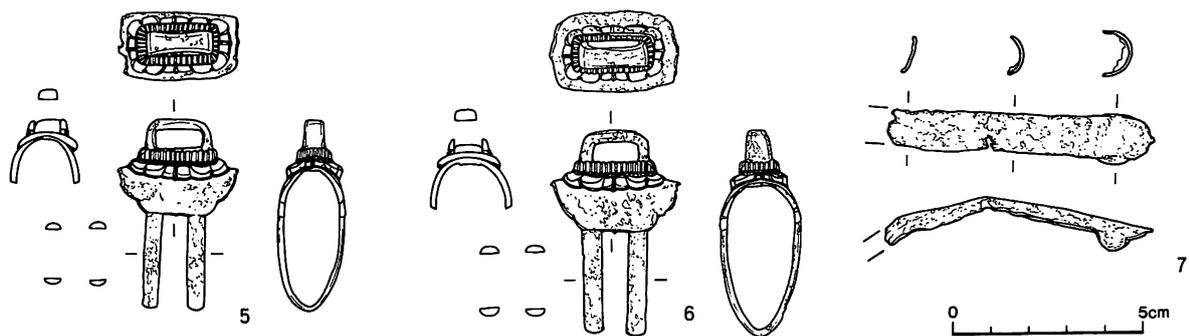
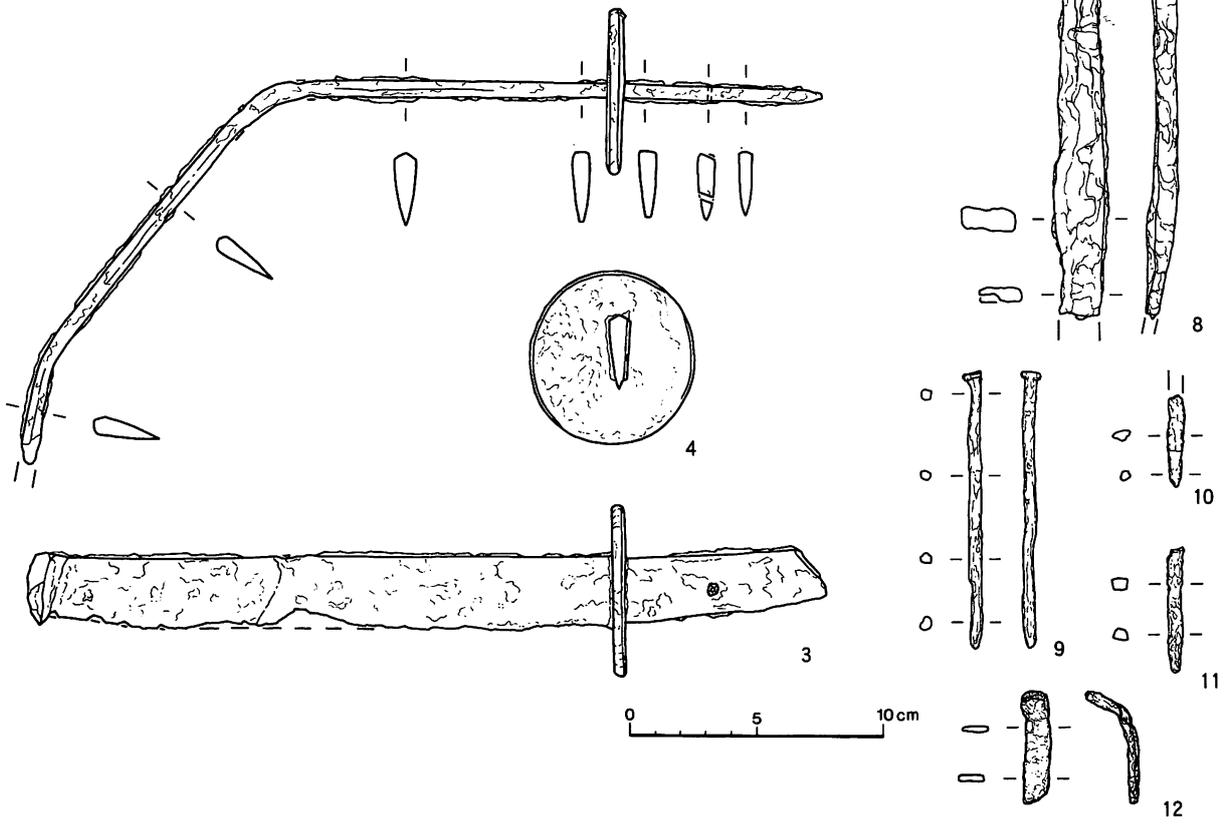
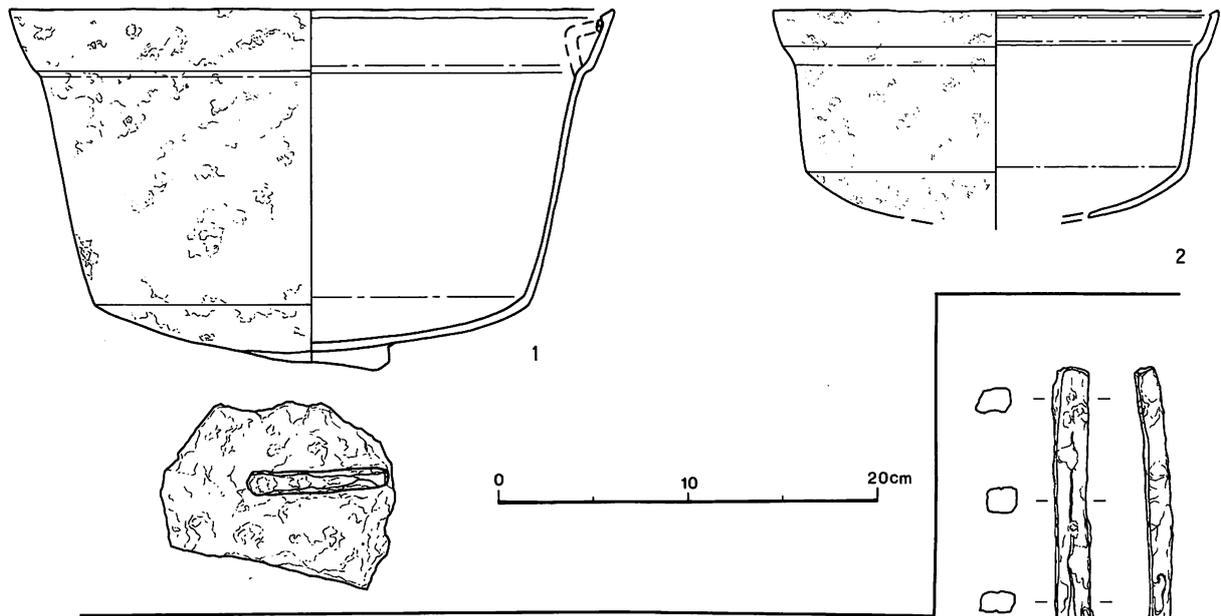
(4) 金属製品 (図Ⅷ-19、表Ⅷ-5、図版Ⅷ-11)

表Ⅷ-5にあるように、I 黒層から出土したものと、畑の耕作土攪乱中から発見され本来の位置が不明のものがある。2・8は、東側低湿部の上端部から出土しているが、便宜上台地部で取り扱った。9~12と鉄滓は台地の中央やや南寄りからの出土で、その周辺のアイヌ文化期・擦文文化期の遺構と関連するものであろう。1の鍋は、Iラインより北、58ラインより西の耕作土中から出土した32点の破片を一括として扱った。3~7の太刀一式は、刀装具が装着されたまま出土したもので、耕作土中からではあるが、東側のX-1~3や擦文文化期の墓壙との関係が強い遺物と考えられる。この畑が西側低湿部を埋めて作られていることは、土が付近から運ばれてきた可能性が高い。図I-10と表I-1に示した周辺の遺跡のうち、北海道式古墳と考えられている3(ユカンボシC1遺跡)あたりからこの土とともに運ばれてきた遺物である可能性を示唆しておきたい。

1・2は鉄鍋である。1は32点の破片を図上復元した、一文字湯口の内耳鉄鍋。接合はごく一部でしかできないが、口縁部から内耳部、胴部、底部、湯口とすべてそろっており、口径約32cm、高さ約19cmと推定できた。2は口縁部から胴部の約二分の一が残存している小型の鍋。出土時点では二分の一の形を保っていたが、さびのため半分から折れ接合部は崩落してしまった。底部中央を欠損しているため、湯口の形態や脚の有無は不明である。耳部も不明であるが、口縁部から頸部の形状から見て、内耳か無耳であったと考えられる。

3は直刀。折れ曲がっているのは、攪乱のためと思われる。切先部と本来の茎部を欠損する。棟は山形で、刀身は厚みがあり、ふっくらしている。茎は刀身を利用し、目釘孔が一つ穿孔されている。茎尻は折れた後の処理をしている。棟区があるように見受けられるのは、4の鐔を茎尻側から叩き込んだためと考えられる。4の鐔は、厚みが均一な銅の板で、平面形はやや下ぶくれの円形、縁部は滑らかに処理されている。縁にあるつぶれは、攪乱のためと思われる。この刀本来の鐔ではなく、のちにあてがわれたものであることは、刀身を通す孔が中心からずれていることや、その孔の縁に形の少し歪んだ切り込み跡が見てとれることでわかる。5・6の鞘の足金物と7の鞘の覆輪の一部は、3の刀に通ったままで出土した。内側には一部、鞘の木質も残っている。銅あるいは銅の合金製で、全体が緑錆で覆われ、一部の地金は侵食されている。足金物は5が切先側、6が鐔側で、図示した向きであることは、足の長さからも判断できる。吊り部の台座は長方形で、幅1mmの縦隆線が巡るもので、その裾には刻み入りの細金線が二重に回っている。さらにその下には、八弁の花弁をあらわした装飾が付き、その裾にも刻み入りの細金線が花弁形に沿って一周している。花形であろう鞘の背にかぶる部分は、これらの吊り部と装飾を乗せており、6には鞘の背にあたる裏側に、隆起帯がある。7の先端部も同じような形の装飾に加工されている。このような鞘に足金物等が付く拵えは、平安時代から鎌倉時代のものであるが、前述のごとく組み直されたことは間違いなく、直接この時代を示すものではない。しかし、北海道に持ちこまれたのが擦文文化期であったことは、認められよう。

8は加工前の鉄素材であろう。両面の中央に浅い筋が入る平棒状の製品で、片端付近の側辺の一部にふくらみがある。さびによるふくれではなく、叩き広げられたものかとも考えられる。I B 2層で擦文文化期の遺物の可能性がある。9は丸釘である。頭部の平面形は三角形状で、平たく作られている。出土層やさびの状態から、新しいものではないと判断した。10・11は細棒状の鉄製品片で、釘か素材としてもたらされたものと思われる。断面形は10がやや丸気味、11は四角形状である。12は細板状の鉄片で、曲がっている。やはり、素材と考えられる。10・11・12は表Ⅷ-5最後尾に掲載した鉄滓は鍛冶遺構と関係のある遺物であろうか。(三浦)



図Ⅷ-19 I 黒層等の金属製品

3 II 黒層の遺物

(1) 土器 (図Ⅷ-20~33、表Ⅷ-6・7、図版Ⅷ-12~30)

Ⅲ群土器 (図Ⅷ-20~23、表Ⅷ-6・7、図版Ⅷ-12~20)

Ⅲ群は4,987点出土した。Ⅲ群 a 類土器が3,265点、Ⅲ群 b 3 類土器が62点出土した。Ⅲ群 a 類は萩ケ岡 1、2 式が主体である。点数としては縄文土器破片のなかで最も多い。P-18から東釧路Ⅳ式土器が出土している(図Ⅵ-35-6)ことを除いて、包含層中で最も古い土器群である。明確に天神山式と位置づけできるものはなかった。萩ケ岡 2 式について新しい要素の強いものも円筒上層式併行として、Ⅲ群 a 類とした。遺構の遺物について隆帯上に連続押圧した丸軸絡条体から、円筒上層式としたものがある。しかし破片から推測できる文様構成から萩ケ岡 1、2 式併行の可能性は高い。Ⅲ群 b 3 類について、典型的な北筒式に比定できるものはない。分布図の項目について、隆帯上の連続押圧について原体別に示した。隆帯の両側縁を留めるように刺突を施す。刺突は逆‘く’の字形を呈するように施す。この様な刺突方法について分布図と表には『刺突 A』の略称で表すものとする。隆帯上に‘く’の字形に短沈線を連続するものと関連する刺突とみなして別に扱った。また、棒、あるいはヘラによる刺突について、隆帯の粘土紐をまたぐような原体による押圧痕をキザミ、隆帯幅より狭い施文具による押圧痕を刺突として区別した。分布の傾向として、Ⅲ群 a 類は G 61・I ~ J 62 ~ 64 グリッドに集中が見られる。施文原体別の集中についても同様であった。

Ⅲ群 a 類土器：波状口縁部 (図Ⅷ-21)

図Ⅷ-21は波状口縁の波頂部である。いずれも萩ケ岡 I、II 式の範疇に比定できる。

1 は単軸絡条体によって連続した押圧を施す。圧痕から判断すると縄を軸にした絡条体である。内面は丹念に研磨を施す。器壁はよくしまる。胎土には長石小粒をよく含む。2 は突起様の波頂部を持つ。隆帯上および口縁端部には単軸絡条体による圧痕を連続的に施す。1 と同様に絡条体の軸は縄である。隆帯間および突起の肥厚部分には、横方向の Lr 縄線を複数条施す。3 は棒状にのびる波頂部を持つ。隆帯上および突起の肥厚部分には縄文による押圧を連続して施す。内面は磨きによる調整を施す。4 は突起様の波頂部を持つ。隆帯上には縄文による圧痕を連続して施す。口縁端部は斜方向の短沈線を施す。器壁は薄く焼成は良好である。5 は台形状の波長部分に横方向を基調とする隆帯を貼付ける。隆帯上は深い刻み込みを連続して施す。内面は磨きによって調整する。6 は台形状の波長部分に横方向の沈線を施す。波頂部については肥厚した中央部は剥落する。内面は磨きによって調整する。7 は沈線によって加飾する。口縁端部には直径 2 mm の刺突を不規則に施す。沈線と刺突は同一の施文具である。8 ~ 14 は‘く’の字をモチーフとした刻みを隆帯上に施す。隆帯の間は横方向を基調とする沈線を充填するように施す。9 は隆帯上をなぞる様に沈線を施す。粘土紐の両側縁を器壁に留めるような刺突である。10 は 9 と同様な粘土ひもを留めるような刺突である。地文部分に刺突し、隆帯上にそのまま原体を押しつける。11 は隆帯間に沈線を充填した後、短沈線を施す。12・13 は爪による刺突を連続して施す。12 は隆帯上に‘く’の字形に爪から指頭部分までの圧痕を連続して施す。口縁端部には爪型文を連続して施す。14 は口縁端部に‘く’の字形に短沈線を連続して施す。隆帯上には器壁部分に隆帯縁を留めて付ける様に刺突を連続して施す。

15 は横方向に並んだ刺突を波頂部外面について一面に施す。16 は口縁端部および隆帯上を半截竹管を用いた短沈線によって加飾する。隆帯間には半截竹管による直線を隆帯沿いに充填する。17 はなで調整の器面に対して、無文の隆帯を貼付ける。隆帯間に文様は充填しない。18 はなで調整の器面に対して、隆帯を貼付ける。半截竹管により、隆帯上を浅くなぞるようにして沈線を施す。器壁はかたくしまる。19 は粘土ひもの貼り付けによって肥厚した波頂部分を持つ。隆帯文様を縁取るよう

に半截竹管による刺突を連続して施す。器壁に刺突し、隆帯上で押し引くように抜き取る。

20・21・22は突起様の波頂部分を持つ。**20**は結束第1種羽状縄文を地文に持つ。隆帯部分は、く椀の字状に外反する。補修孔を持つ。裏面についてなで調整の痕跡がある。**21**は口縁端部についても縄文を施す。突起の腹部には短い粘土ひもを貼付けた突起部分を持つ。**22**についても突起の下部は肥厚する。

：単軸絡条体による圧痕を持つもの（図Ⅷ-20-2、22-1～5、23-6～11）

20-2は突起状の波頂部を持つ。突起部分から縦方向に短い粘土紐を貼り付ける。突起部分は縄線で加飾する。口縁端部は絡条体による連続刺突を施す。内面はよく磨く。結束第1種羽状縄文を地文として持つ。**22-4**、**23-6・8**は絡条体の軸が縄であることを観察できる。他個体は丸軸絡条体である。**6**は絡条体の端部を押圧したものである。**9**は爪による連続押圧を伴う。**10**は沈線による加飾を伴う。**22-4・5**は他個体に比べ、器壁が厚く粗い胎土である。器内面について、**5**は磨き調整をよく施す。**23-11**は横走する隆帯に絡条体による連続刺突を施す。内面は縦方向によく磨く。

：縄文による圧痕を持つもの（図Ⅷ-22-6～8・10・11、23-12）

11の器面には爪による押圧が併存する。**7・10・11**は2本の粘土紐を一組にして隆帯を施文する。

：刻みによる圧痕を持つもの（図Ⅷ-22-12～18・26・28・29、23-13～16）

刻みもしくは短沈線を連続して施すタイプである。**22-14・15・18・28・29**、**23-15**は粘土紐貼り付けを器面に留めるような意識をした、刺突を施すタイプである。**22-15**はⅢ群a類土器の隆帯部分の破片である。隆帯の両側縁を留めるように刺突を施す。刺突は逆‘く’の字状を呈するように施す。この様な刺突方法について分布図と表においては『刺突A』の略称で表すものとする。**23-3**は器面について、器壁の剝落が甚だしい。隆帯による装飾を器面に施す。加飾は胴部の上半分全面に及ぶ。隆帯には、両側縁を留めるような刺突を連続して施す。口縁部分は肥厚し、短沈線による鋸歯状文様を連続して施文する。内面はよく磨く。胎土には長石粒をよく含む。結束第1種羽状縄文を地文として持つ。**22-16・17・18**は器表面について、口縁部の肥厚帯に縄文を施文する。**22-28・29**は他個体に比べて、器壁がやや厚く残存する径から大型の器と推定できる。地文について、**22-29**は結節を持つ縄文を持つ。口縁部には押し引くような刺突を横方向に連続する。**23-16**は棒状工具の先端部を連続刺突し、その上をなぞるように短沈線を浅く施す。

：爪型による圧痕を持つもの（図Ⅷ-20-1、22-19・20、23-17～21）

20-1は台形の波状口縁を持つ。波頂部中央にボタン状の貼り付けを持つ。器面を縄線によって加飾する。口縁端部には爪による刺突を連続して施す。器壁は比較的厚手であり、混和剤は目立たない。結束第1種羽状縄文を地文として持つ。**22-17**は3本の沈線が粘土ひもの側縁を留めるように引いてある。**18**は爪をつけた後にそのまま指頭部分を押しつける施文の連続である。**22-19・20**は爪の先端のみを押圧する。**22-20**は内面は横方向によく磨く。隆帯は断面三角形になるように指頭を押しつける。その際に連続して爪を押圧する。口縁端部には指頭圧痕を連続する。**23-21**は波頂部のつけ根部分の破片である。頂部から垂下するように隆起させた突起部分である。隆帯上には連続して爪を押圧する。

：半截竹管による沈線を描くもの（図Ⅷ-23-2）

2は4単位の波状口縁を持つ土器である。波頂部から半截竹管による2条の沈線を垂下する。波頂部にはわざと打ち欠いた痕跡がある。この個体はH-4近辺からかたまって出土し、C64グリッドから、そしてH-4覆土中、P-32覆土中からも出土する。H-4・P-32はともに中期前半、Ⅲ群a類土器期の遺構である。

：半截竹管による連続する押し引きを持つもの（図Ⅷ-22-21~23、23-22~25）

口縁部破片、22-21~23は粘土紐を2本一組として貼り付ける。22-21は口縁端部に径2mmの刺突をアトランダムに施す。23-22は器面を半截竹管の押し引きによって加飾する。隆帯は粘土紐を沈線で留めるように貼る。分布図で（斜）としたものは斜方向の押し引きを並列したものである。

：棒状工具の先端で刺突を連続して施すもの（図Ⅷ-22-24・25、23-1・26）

23-1は突起様の波頂部を持ち、波頂部中央はボタン状のはりつけにより肥厚させる。器形はよく外反する。口縁部には粘土紐の貼り付けによって肥厚させる。隆帯上には連続した刻みを施す。地文には結束第1種羽状縄文を持つ。内面は丹念に磨く。23-26は絡条体の軸により、粘土紐を器面を留めるように刺突したものである。隆帯上には絡条体圧痕がある。

：口縁部の肥厚帯に、縄文を施すもの、またそれに類するもの（図Ⅷ-22-27・30）

27は撚り糸による回転施文を口縁端部に施す。隆帯によって波状文様を口縁部に施す。30は粗い撫で付けによって内面調整を施す。

：橋状把手（図Ⅷ-23-3~5）

いずれも沈線により加飾する。3・5は半截竹管を沈線の原体にする。波状口縁の中央に貼付する。

：綾織り地文を持つ胴部破片（図Ⅷ-23-27~29）

綾織り文地文は全体の破片をおしなべて見ても目立つ量ではない。29はRLとLLを撚り合わせた原体を地文を持つ。より戻しが見受けられる。21-7と同一の個体である。

：底部（図Ⅷ-23-30・31、20-4・5）

23-30は胴部地文に結束第1種羽状縄文を持つ底部破片である。31は編布の圧痕を持つ底部である。所謂、網代圧痕である。20-4の内面には、輪積みによる成型痕がよく残る。結束第1種羽状縄文を地文として持つ。5は大型の器形を推定できる底部である。胎土中には繊維、粒径0.2~0.7cmの長石粒が目立つ。

Ⅲ群 b 3類（図Ⅷ-22-9・24~26・31~33）

9は口唇部を丹念に面をとり、縄を連続して押圧する。24・25は口縁端部に連続刺突を施す。小型の半截竹管によるC字型の刺突を押し引き気味に刺突する。26の口縁部肥厚帯は折り返した形状である。31は口唇部直下に横走沈線を持つ。口縁形態について、やや屈曲気味に外反する。口縁端部は撫で付けるように面をとる。内面は指頭による調整痕が残る。32は口縁端部に縄文を施文する。縄の端部が回転した痕が残る。内面は撫で付けによって丁寧に調整する。器壁はかたく、よくしまる。32は地文が結束第1種の羽状縄文である。口縁端部には指頭による形成痕が残る。内面は撫で付けによって調整する。

（大泰司）

Ⅳ群土器（図Ⅷ-18・22~24、表Ⅷ-6・7、図版Ⅷ-13・21~28）

後期の土器Ⅳ群は1,454点出土した。余市式土器破片は他のⅣ群破片と明らかに異なるので、分布図は別に図示した。Ⅳ群 a類は余市式が554点、Ⅳ群 b類は137点、Ⅳ群 c類は堂林式が553点出土した。後期の最終末期を除いて全般にわたって出土した。Ⅳ群 a類はほとんどが余市式である。例外として遺構遺物であるが、P-23から入江式に比定できる土器片が3点出土している（図Ⅵ-35-19）。Ⅳ群 b類は手稲式が目立つ。分布の傾向として余市式はI 56、58、61、64、F 25グリッドに散点的な集中を見る。ほかのⅣ群はC~E 59~61グリッド、G~I 57~59グリッドに集中する。また低湿地の分布状況をみるとⅣ群 b類が比較的好く分布する。

Ⅳ群 a類（図Ⅷ-20-7、24-1~11）

図Ⅷ-24について、1~11はⅣ群 a類の口縁部および胴部破片である。20-7は底部破片である。

いずれも余市式である。1・8は口縁端部の隆帯直下に円形刺突を持つ。5・6・10は器面に対して垂直に刺突し、刺突具を器面に押しつけながら斜め下方向に抜き取る。1は口縁部の内面に縄文施文を施す。1・3・4・7・9を除き、RLとLR、2種類の原体を用いて施文する。3・7は無節の原体を用いる。口唇部の残る破片についていずれも縄文を施文する。胎土について、いずれも、粒径1mmあるいはそれ以上の大きさの混和剤をよく含み、特徴的である。11はIV群a類土器口縁端部、口縁部肥厚帯、地文いずれも同一のRL縄による施文を施す。20-7は余市式土器の底部破片である。RLとLR、2種類の原体を用いて羽状に施文する。

IV群b類 (図VIII-24-12・13・15、25-1)

24-12はウサクマイC式土器である。横走沈線を施し、頸部には帯状の無文帯が走る。口縁端部には口縁部の磨り消し文様と同じ原体による縄文を施す。13は手稲式土器である。手稲式特有の文様を持つ破片である。横走する平行沈線を括弧様の沈線で縦に区切る文様である。15は屈曲する頸部と、よく脹らむ胴部を持つ。胴部上半には横走する磨り消し文様帯を持つ。そしてN字状をあしらった沈線文が横方向に連続して並ぶ。25-1はウサクマイC式土器である。よく外反する口縁部を持ち、幅3mmの沈線によって器面を飾る。器壁はしまりがあるが、小石粒をよく含む。

IV群c類 (図VIII-24-14~16、25-2~22、26-1~20)

いずれも堂林式土器である。24-14はの胴部破片である。胴の屈曲部に無文帯をもつ。磨り消し縄文である。復元土器24-16、25-19~22、26-20はIV群c類土器、堂林式である。いずれも器内面について丹念に磨き調整する。21は沈線によって器面上半部を加飾する。21は短沈線による弧線文を巡らせる。21は底部から外へ開く器形である。他は口縁部分で微妙に内彎する。突起の裏面について22は円形の刺突を波頂部の突起それぞれについて中心に施す。

25-2~16・18はIV群c類の口縁部破片である。13・14を除いて口縁部に器内面から外方向への刺突を持つ。個体として考えた時、13・14は細片のため、刺突の有無を明言できない。2についてはIV群c類土器の刺突を持つ個体について、波頂部直下には刺突があるという普遍性が見受けられるため、刺突文様を持たない個体である可能性が高い。口唇部形態について2・3・7・9・11は切り出し小刀状である。4・5・6・13は切り出し小刀状だが、口縁端部について微妙に屈曲部分を持つ。8は端部が丸く、微妙に肥厚する。10は器形自体やや内彎するが口唇部について、外側へと微妙に屈曲する。施文する沈線について12が細沈線であるほか、9・10・11は沈線による加飾を持たない。13は口縁部破片である。口唇断面形態は切り出し小刀状であるが、場所によっては内側へ屈曲する。口唇部は横方向によく磨く。沈線により、菱形を基調とする文様で器面を飾る。内面には磨き調整を施す。口縁部分には、中央に径3mmの刺突を持つ突起がある。

25-14はIV群c類土器の口縁部である。口縁端部を丁寧に撫で付けて面をとる。15は胴部破片である。深鉢の屈曲部分である。器面には、細沈線による連続した弧線文が想定できる。16は焼成良好の胴部破片である。平行沈線の区画内を斜行する平行短沈線により充填する。17はやや口縁形態がやや内彎する深鉢破片である。口唇部を丹念に磨いて面をとる。18は羽状に縄文を施した後、研磨を施してある。内面は煤がよく付着する。

26-1・2・3・6・7はIV群c類の口縁部破片である。26-1は磨り消し縄文により器面を飾る小形の浅鉢である。口縁断面形態は先端が細く尖る。沈線により器の全面にわたって加飾する。3・4はミニチュアの浅鉢形土器である。5~19は注口土器の破片である。5と6、7と8、9と10、12と13は同一個体である。2は口縁部破片である。平行沈線によって器面を飾る。内面は成形痕が残るものの、撫で調整をまんべんなく施す。6は注口土器の口縁部である。ボタン状の貼り付けを持ち、

その上から、円形の刺突を施す。7と8は同一個体の口縁部および底部である。口唇断面は切り出し小刀状である。焼成は悪く、胎土は粗い。9と10は磨り消し縄文文様を持つ胴部破片である。器壁は薄く、焼成は良好である。内面は磨きにより丹念に調整する。11は薄い器壁を持つ球形の胴部破片である。内面は撫で付けにより、丹念に調整する。節の細かいRL、LR縄を交互に施し、器面を羽状に飾る。IVcの中でも古手である。12と13は焼成良好な破片である。球形の胴部であり、注口土器の破片と想定できる。内面はなで調整を基調とし、指による成形痕がよく残る。14は浅い沈線で器面を加飾する。内面は撫で付けによって丁寧に調整を施す胎土には粒径2～5mmの小石をよく含む。掲載表に示したとおり、H-6からの破片と接合した。後期の切り合った住居跡は堂林式期に凹みとして生活に用いられたようである。F-379がそれを示す。15はボタン状の貼り付けを持つ。貼り付けの上から円形の刺突を施す。幅広い原体による沈線文により器面を飾る。指による成形痕がよく残る。16は細沈線によって器面を飾る。小型器形であり、屈曲部に貼り瘤文を持つことから注口土器の可能性が高い。内面は撫で付けによって丁寧に調整する。17・18は注口土器の注口部破片である。いずれも器外面は丹念に磨き調整を施すが、内面については指による成形痕がよく残る。注口のつけ根は粘土貼り付けにより加飾する。19は底部破片である。横走沈線が器面を飾る。器壁は薄く、焼成は良好である。(大泰司)

V群土器 (図Ⅷ-27-1～20、表Ⅷ-7、図版Ⅷ-28・29)

V群a類

5は壺の肩部片。外面は磨かれ無文で、内面は横方向のナデである。胎土に海綿骨針を含む。6は浅鉢で細かいLR縄文が施され、底部は上げ底と思われる。これら亀ヶ岡系土器はb類の可能性もある。7は壺の体部片と思われ、LR縄文を施した後に弧状の沈線を加えている。内面の調整はヨコナデである。8は爪形文が施されたもので、口縁部の断面は角張り、口唇には刻み目が施されている。突起の部分には刺突が加えられている。9・10はLR縄文を施した後、口縁部に半截竹管状工具による刺突文(9)や押し文(10)の施されたものである。9は口縁部の断面が尖る。10の口唇には刻み目が加えられている。18は立ち上がりの部分に刺突文が施されたもので、底面にもLR縄文が施されている。内面調整はいずれもナデである。これらは大洞B-C式に併行するものかと思われる。

V群b類

1・11～13は縄文を地として横走る沈線文が施された深鉢である。1・11は口縁部の断面が角張り、口唇にも縄文が施されている。1は口縁部がわずかに内彎する器形である。内面の調整はナデで、一部に炭化物が付着している。13は沈線の間刺突が加えられている。14・15は縄文の施された小片である。深鉢の底部の形態には立ち上がりの部分に丸みのある平底(2)と上げ底(3・19)がある。2は底面にもLR縄文が施されている。内外面とも一部に火を受けた痕跡がある。3は器面が磨滅している。これらの内面調整はナデである。

V群c類

16は大型の浅鉢で、上面観は多角形になる可能性がある。口縁部の断面は角張り、小突起の部分はやや肥厚する。口唇には縄文が施されている。内面に炭化物が付着する。20は深鉢の底部で、丸底気味の平底と思われる。底面にもLR縄文が施されている。これらはママチ2類に相当すると思われる。

4は直線的に立ち上がる器形の深鉢で、I B層・II B層から出土した。口縁部の断面は切り出し形で、やや尖り気味になる部分もある。RL縄文を施した後に5本の平行沈線がひかれたもので、口唇直下は縄の圧痕、口唇には縄文が施されている。内面は横方向に粗くなでられている。ママチ3類に相当すると思われる。(中田)

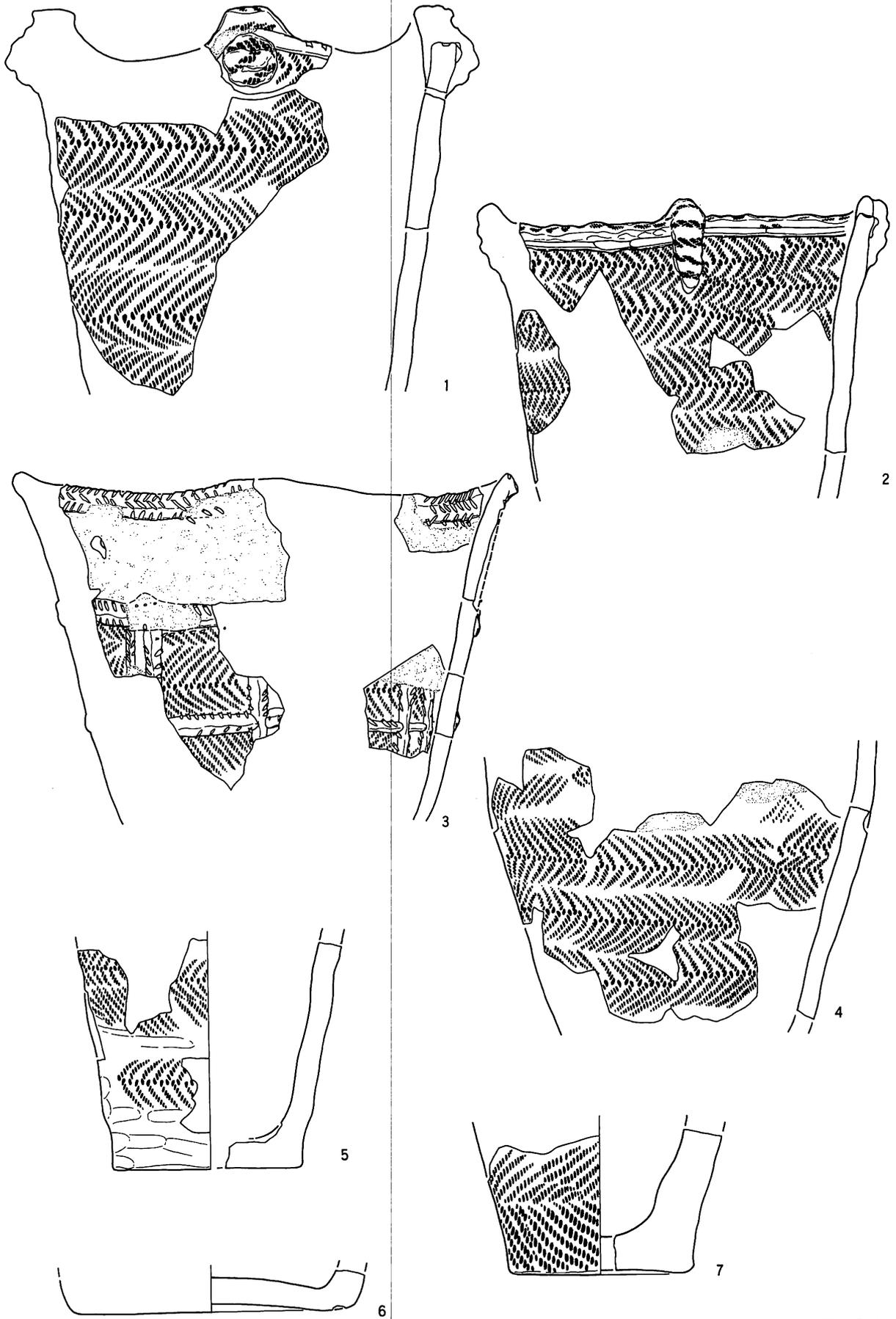
(2) 包含層出土の土製品 (図VIII-28、表VIII-7、図版VIII-30)

再生土製品(28-1~19)は87点出土した。意図的に打ち欠いた可能性がある土器破片のうち、定型的であり、確実に製品といえるものだけを抽出した。ほとんどがⅢ群a類の土器から作ったものである。唯一17のみが中期後葉、Ⅲ群b3類土器の再生である。これら縄文時代中期の再生土製品は、特に凹タイプは中期後葉の遺物である可能性がある。再生土製品の出土傾向について量的に多いのはE64グリッドである。円形、三角形、凹タイプの三種は分布の傾向が合致する。Ⅲ群b3類土器の分布傾向を踏まえると、再生土製品の分布に傾向が似る。再生土製品が中期前半の土器を材料として中期後半に作られたという解釈もできる。

形態から5種類に分類できる。三角形型。円形。貫通孔をもつもののうちほぼ中心部分に孔があるもの。器表面部分中央について器壁の半ばまで穿孔し、製品の径が4cm程の、凹みを持つタイプ。楕円形型で長軸の端部に刺突を持つものである。出土量について、そのうちわけは、三角形型28点、円形45点(そのうち直径2cm以下のもの4点)、凹みを持つタイプもの10点、中心部分に貫通孔があるもの5点、楕円形型で端部に刺突を持つもの1点である。そのうち19点を図化した。1~6は円形である。うち1・2は直径2cm以下の個体である。7~13は三角形である。8・9は側縁を擦ることによって形態を整える。他は打ち欠きのみである。14・15は個体の中心に貫通孔をもつものである。側縁について、擦ることによって形態を整える。16は端部に貫通孔を持つものである。欠損はあるが楕円形型であったと推測出来る。17~19は器壁の半ばまで穿孔するものである。細かい打ち欠きにより成形する。出土した再生土製品のうちでは比較的大型な個体群である。低湿地出土の土製品を2点挙げておく。4と7がそれである。明らかに、土器片の縁辺について連続した意図的な打ち欠きがある。また、いずれも貫通孔があいている。

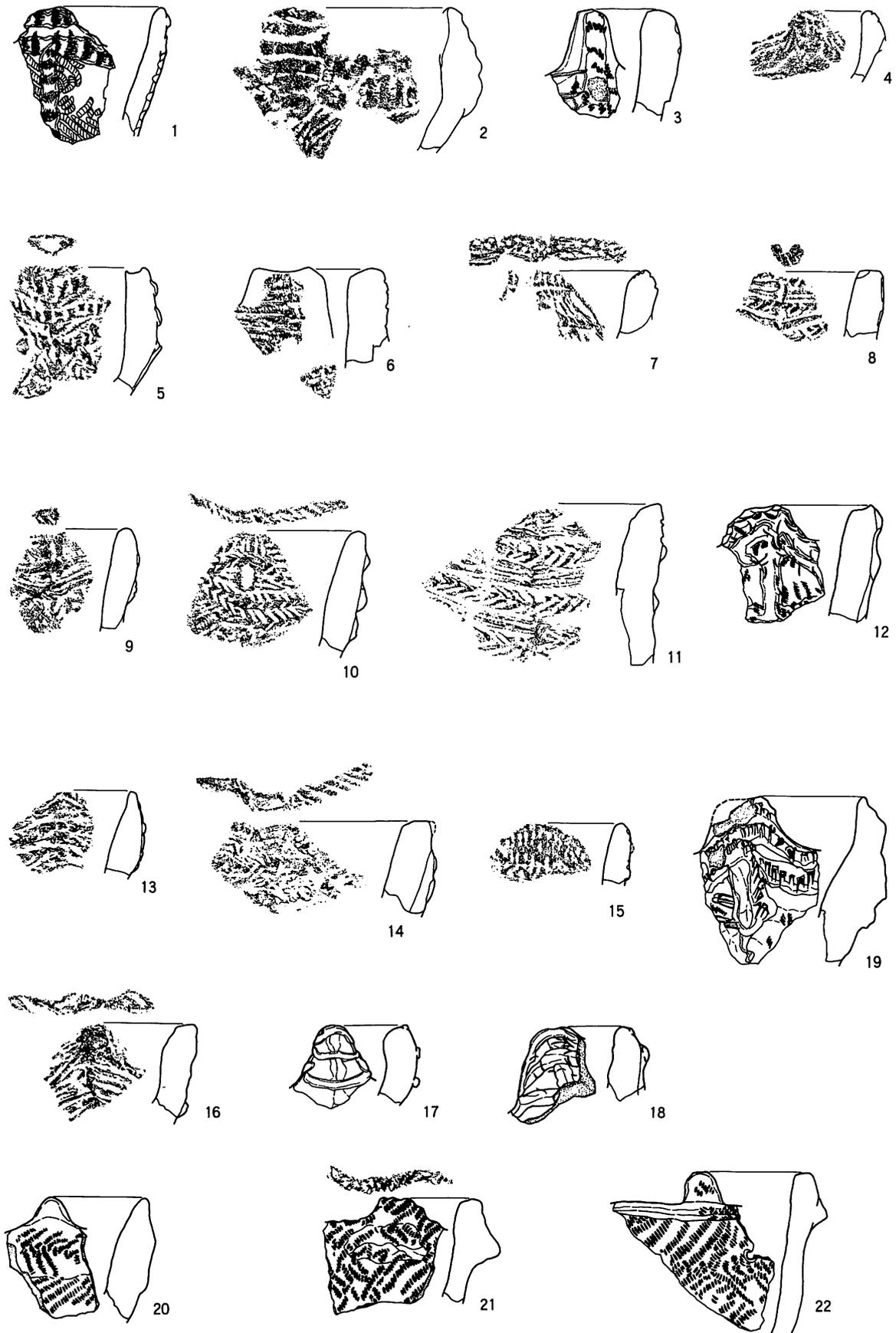
20・21は縄文時代の土製品および焼成粘土塊である。20は平たい直方体をした土製品である。全面を直径2mmの円形刺突が覆う。刺突は長軸を基準とし正面、裏面に3列、側面に1列、それぞれ並ぶ。長軸方向に貫通孔を持つ。堂林式土器の廃棄を伴うP-23の脇から出土した。類例と検出レベルを考慮してⅣ群c類、堂林式に伴う土製品と推定する。21は焼成粘土塊である。直径9mmである。円錐形を基調とする形状を持ち、端部は焼成後、折損する。時期は不明だが出土したレベルから縄文時代後期後半の可能性はある。

(大泰司)



図Ⅷ-20 II 黒層の土器(1)

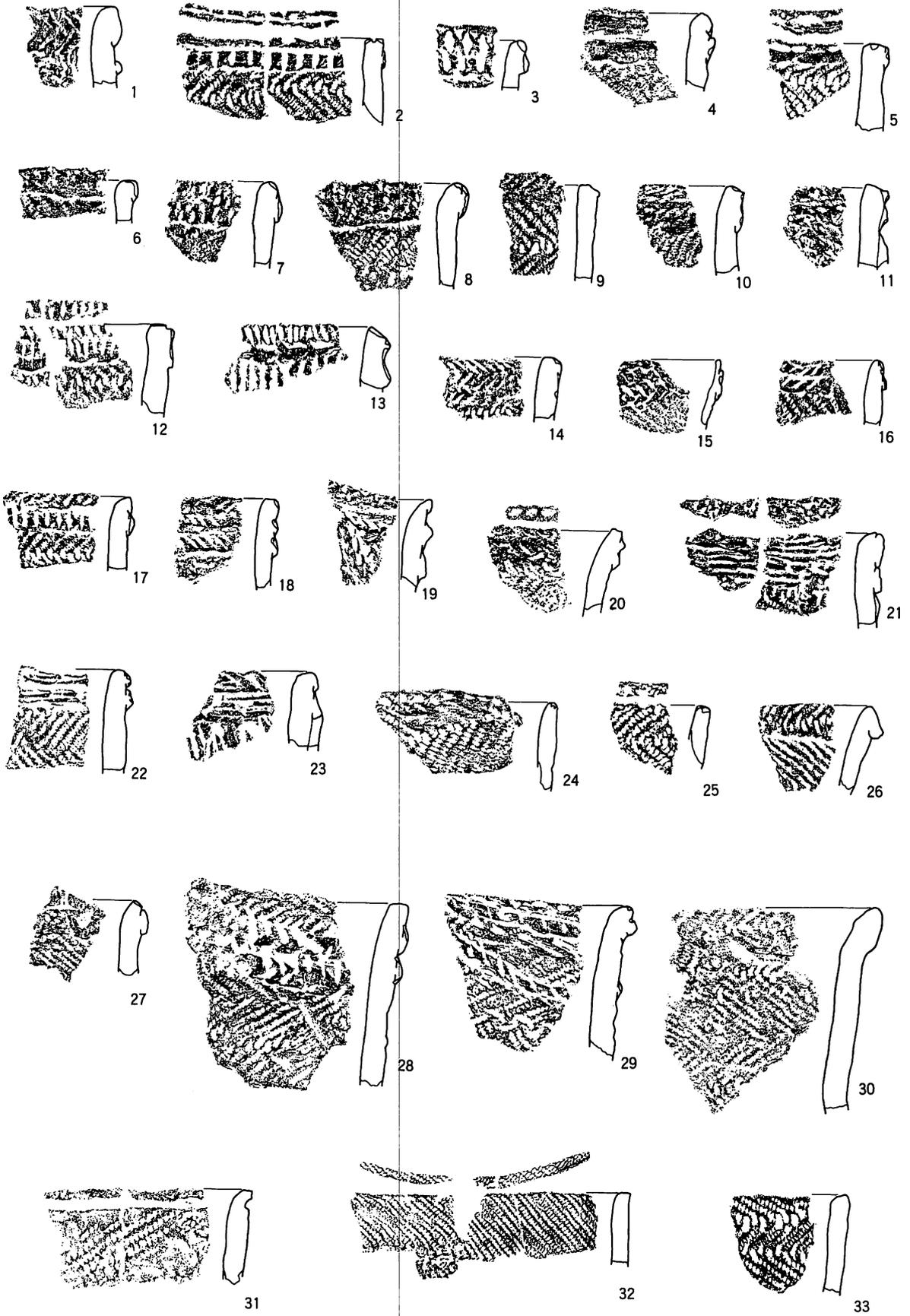
遺物(S=1/3)



図Ⅷ-21 Ⅱ黒層の土器(2)

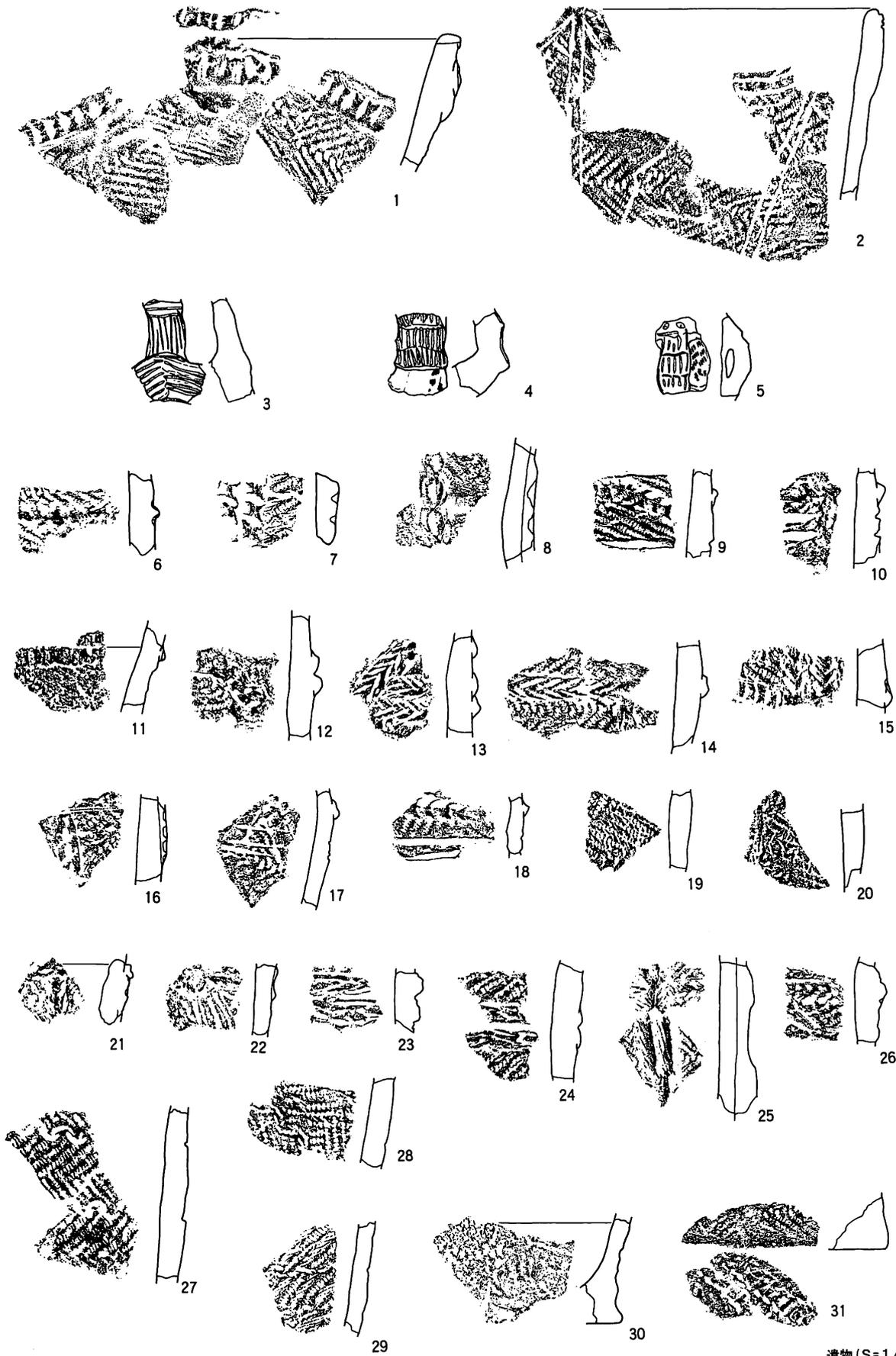
遺物(S=1/3)

3 II 黒層の遺物



図Ⅷ-22 II 黒層の土器(3)

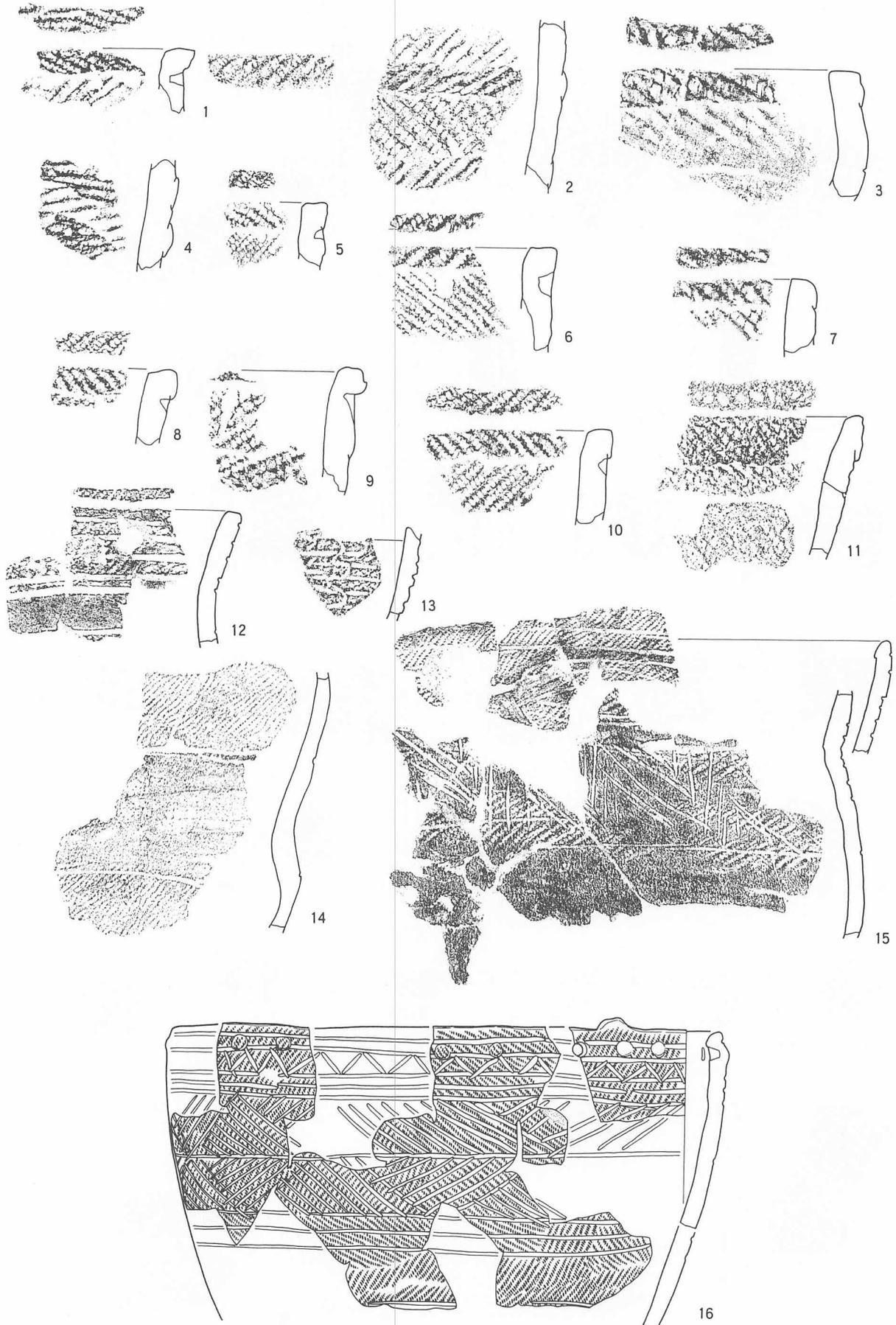
遺物(S=1/3)



図Ⅷ-23 Ⅱ黒層の土器(4)

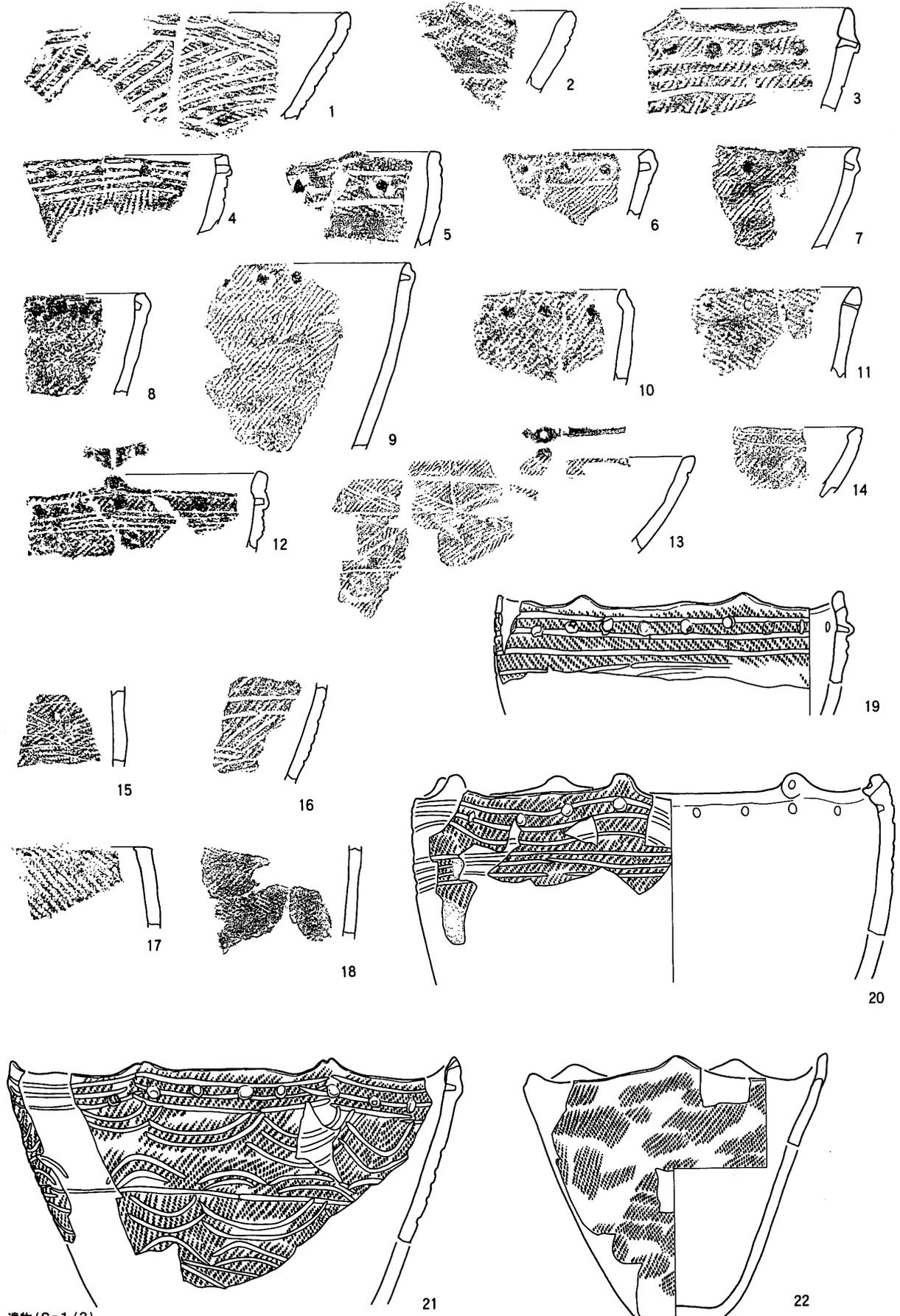
遺物(S=1/3)

3 II 黒層の遺物



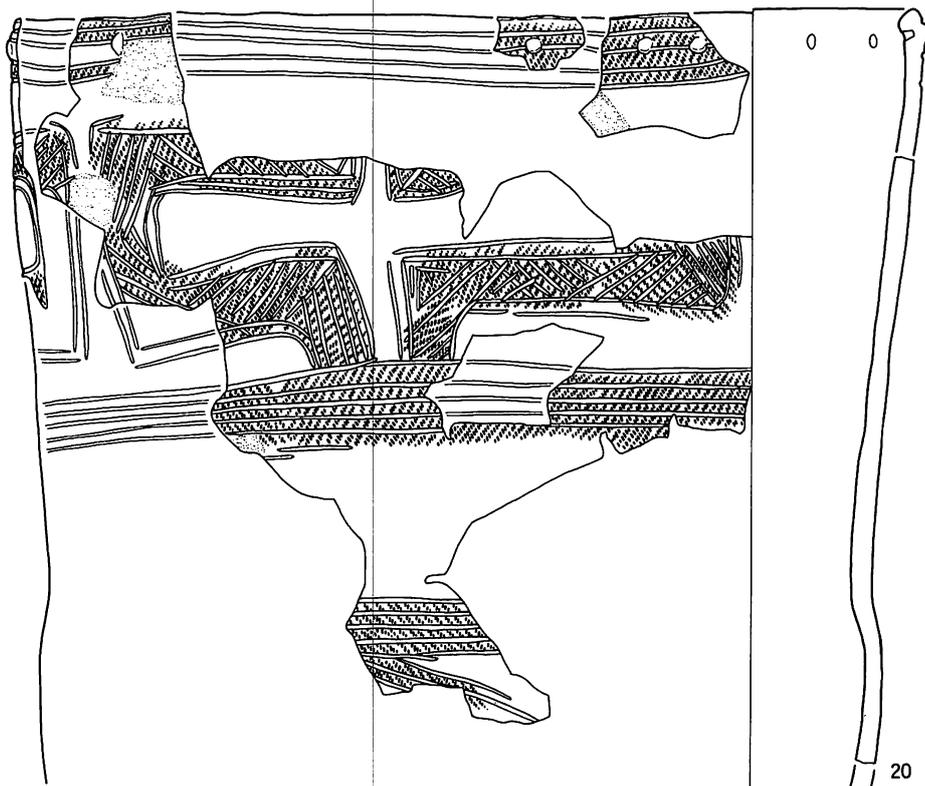
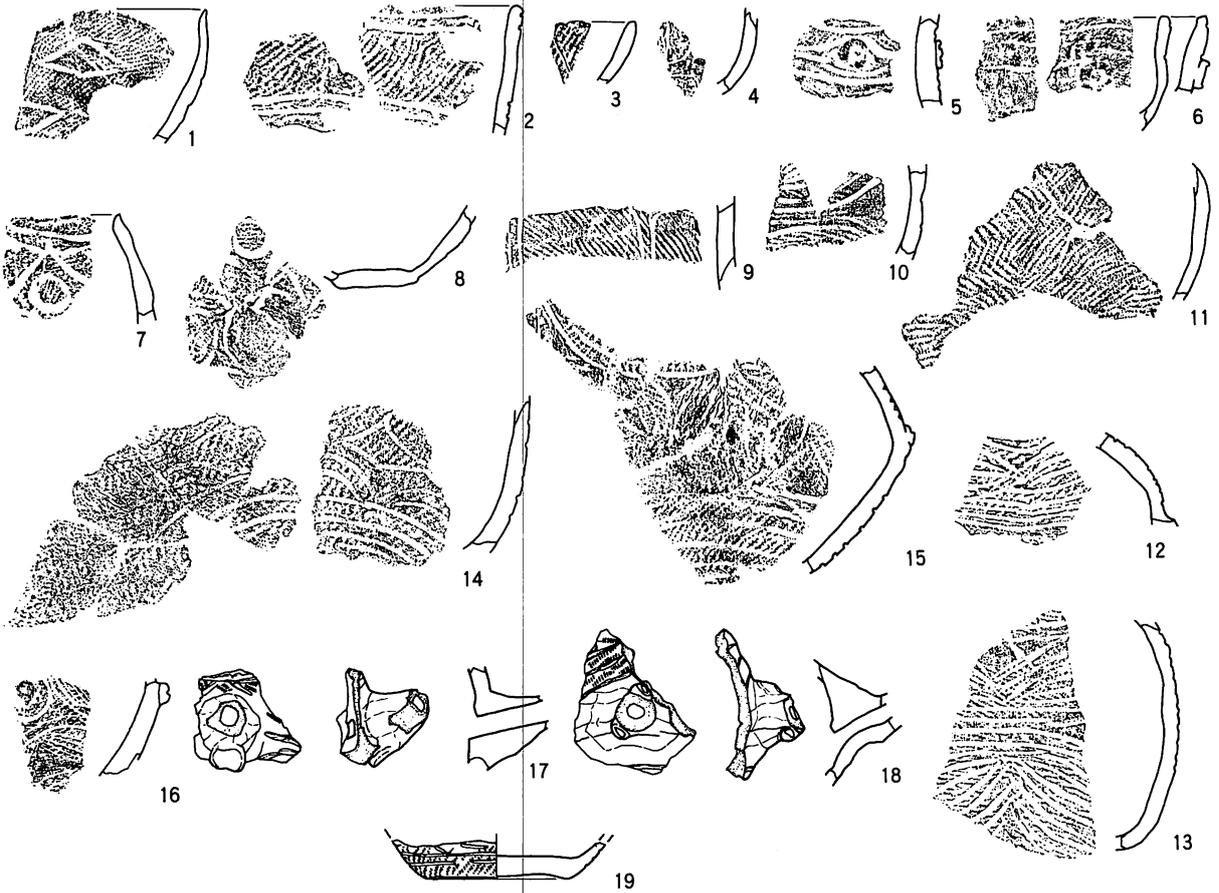
図Ⅷ-24 II 黒層の土器(5)

遺物(S=1/3)



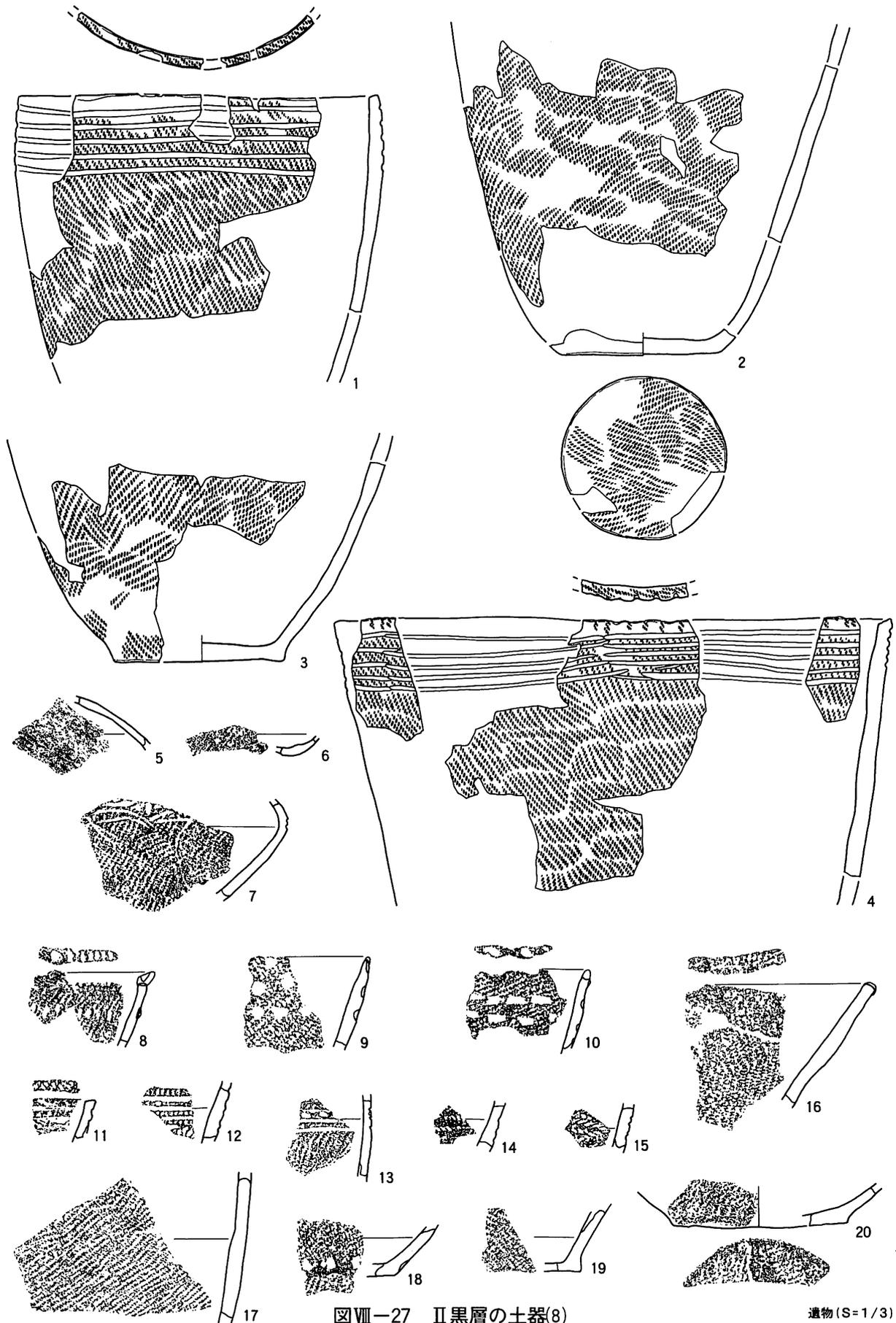
遺物 (S=1/3)

図Ⅷ-25 Ⅱ黒層の土器(6)



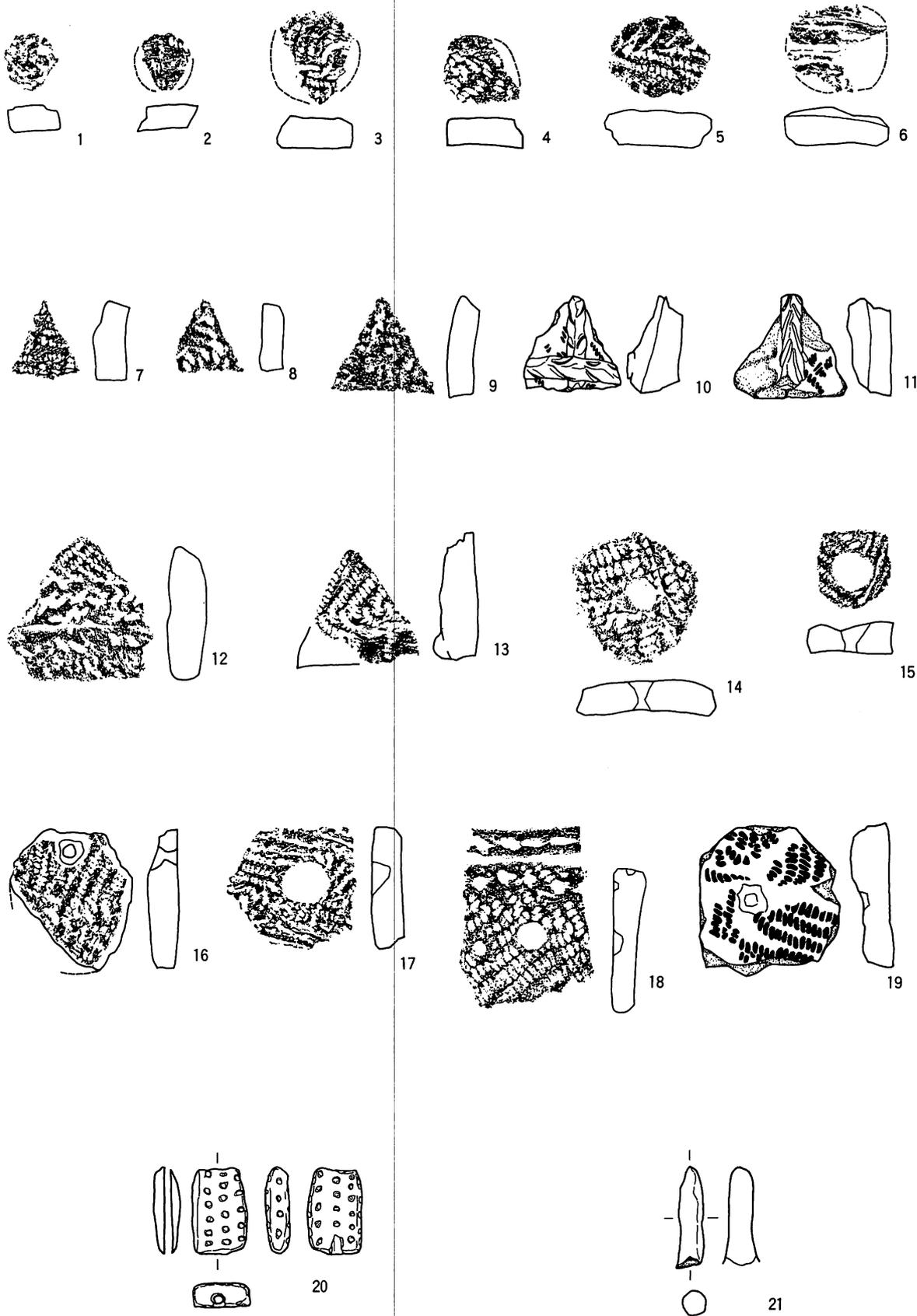
図VIII-26 II 黒層の土器(7)

遺物(S=1/3)



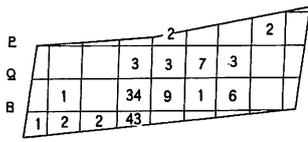
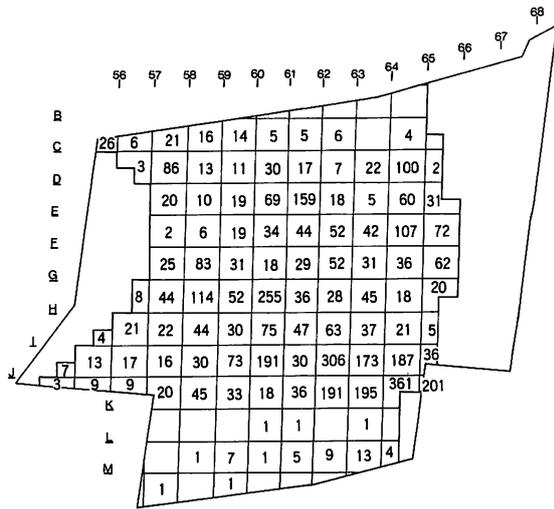
図Ⅷ-27 II黒層の土器(8)

遺物(S=1/3)

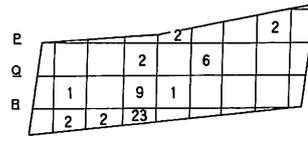
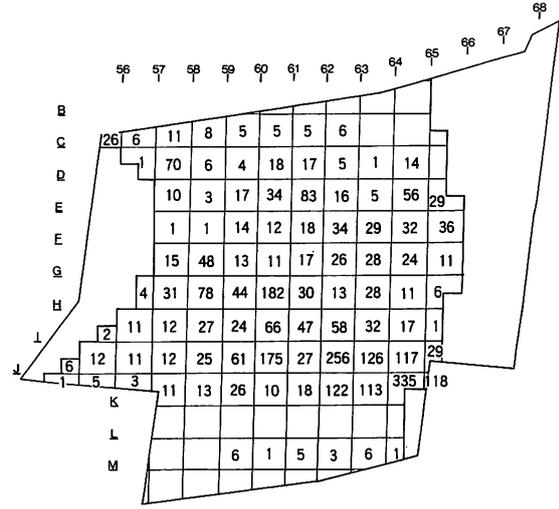


図VIII-28 II 黒層の土製品

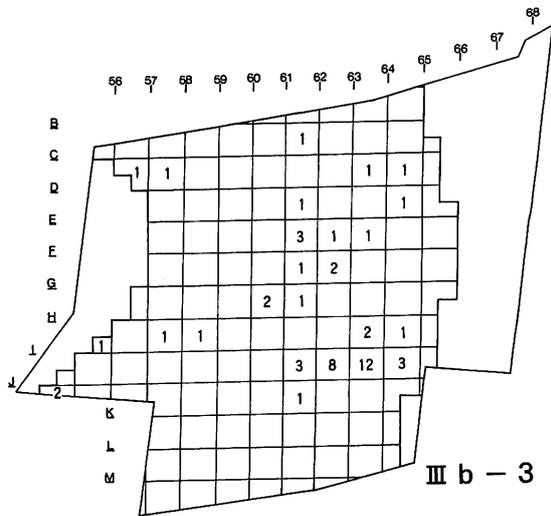
遺物(S=1/3)



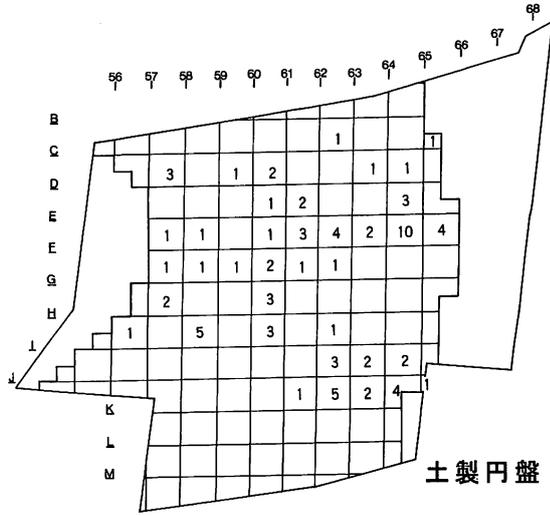
III



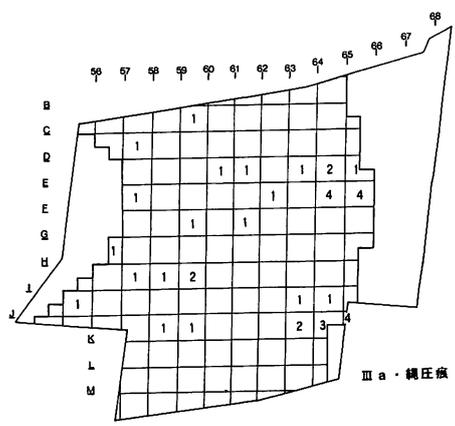
III a



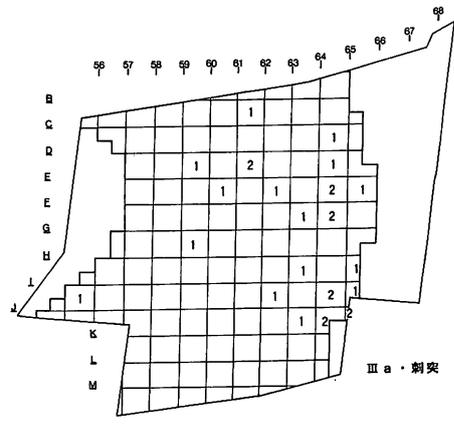
III b - 3



土製円盤



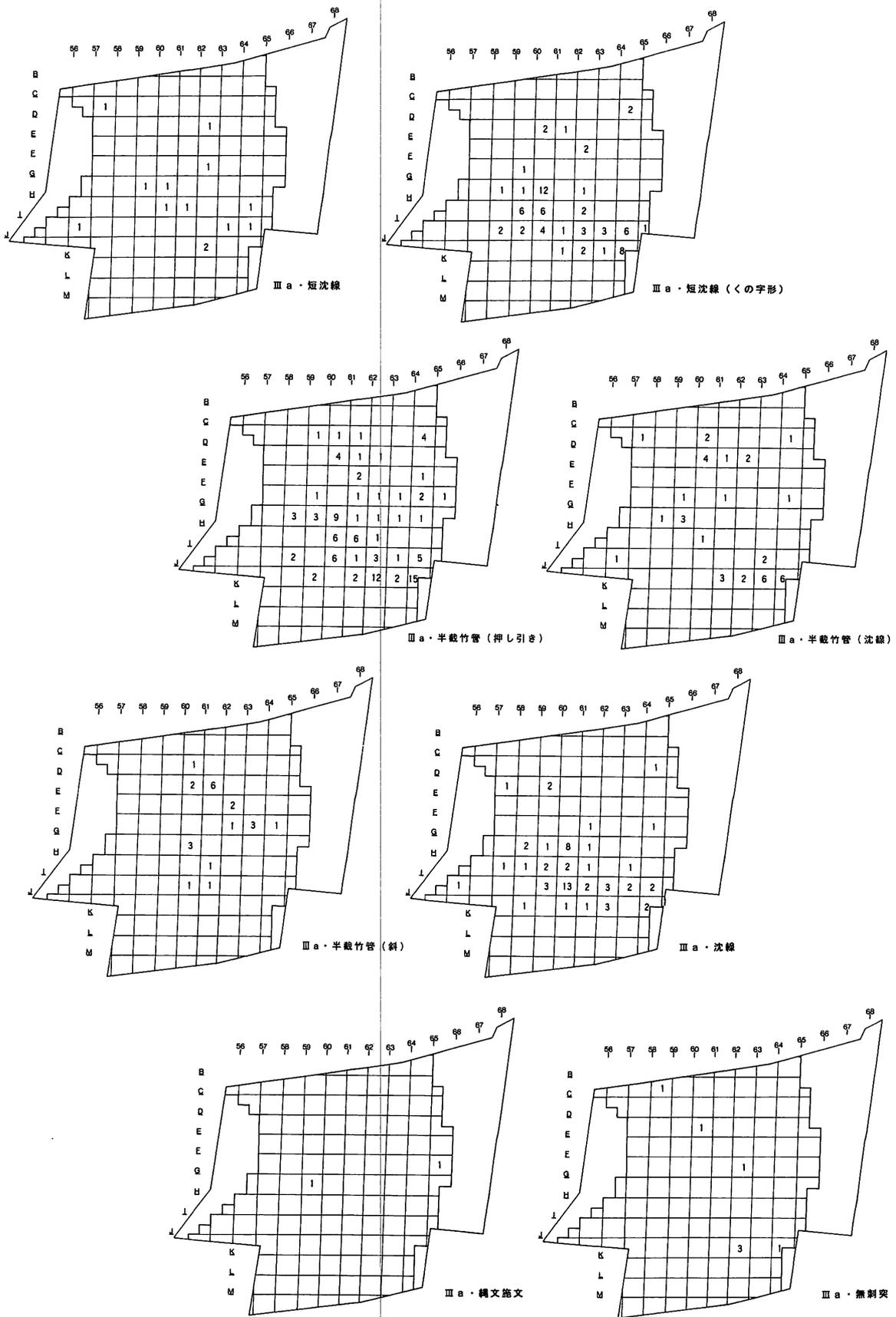
III a - 縄文様



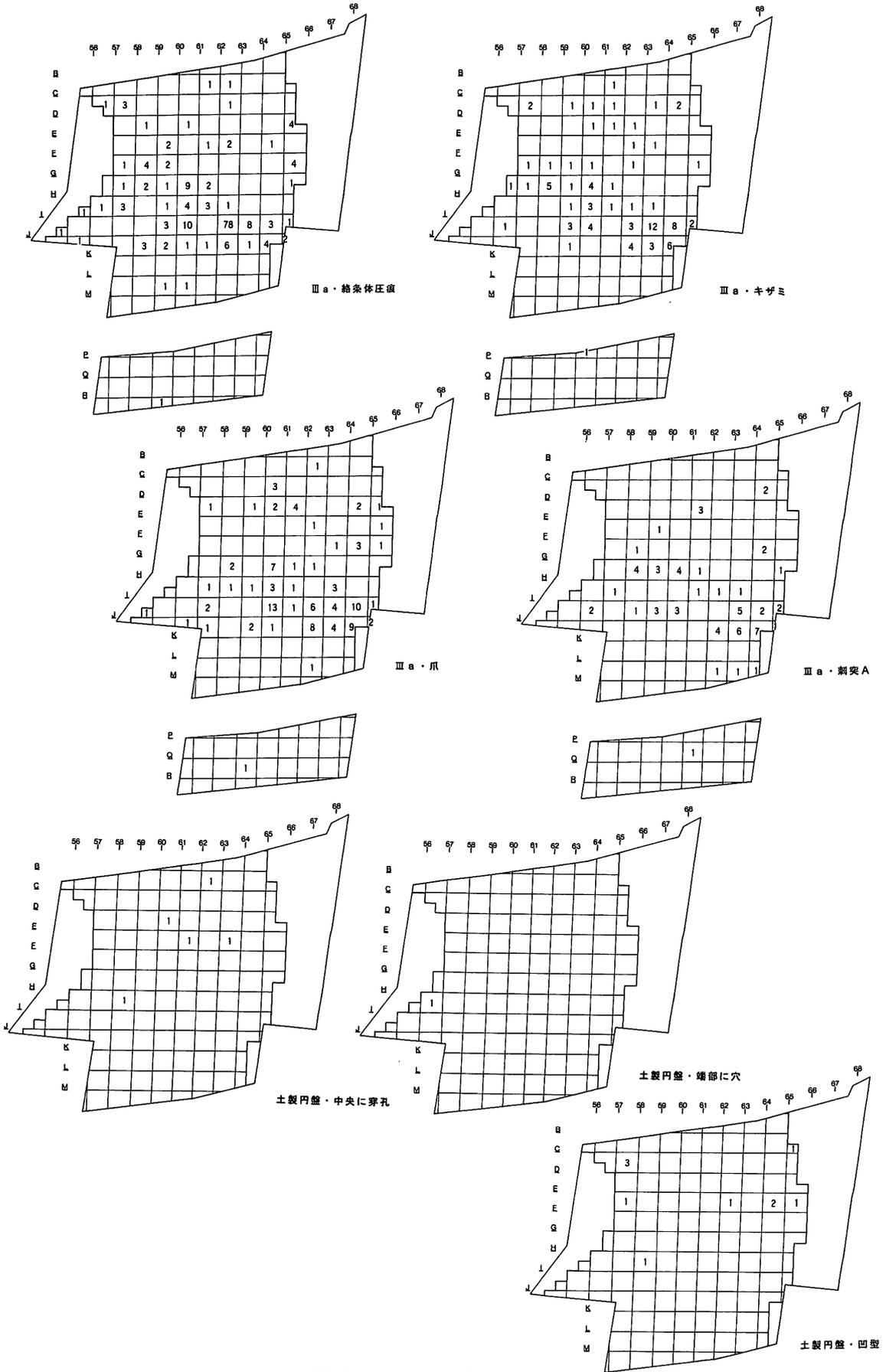
III a - 刺突

図Ⅷ-29 土器分布図(9)

3 II 黒層の遺物

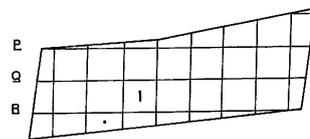
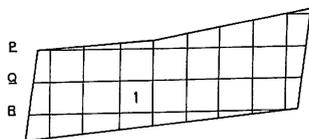
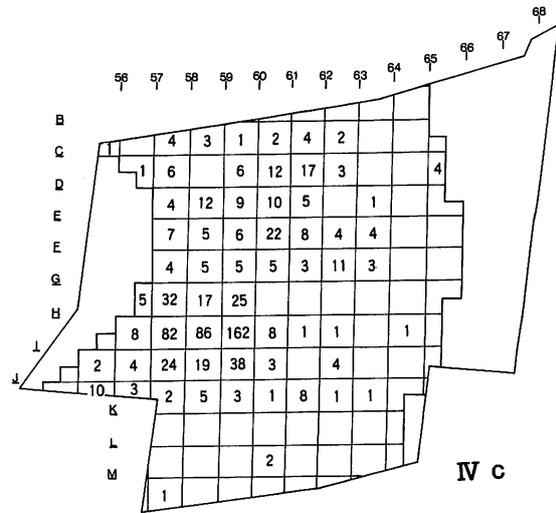
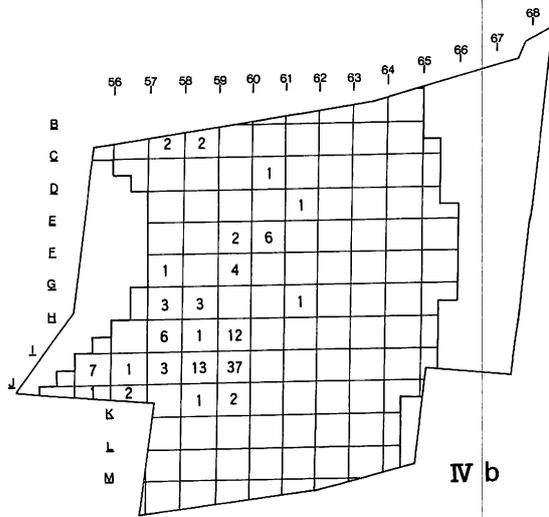
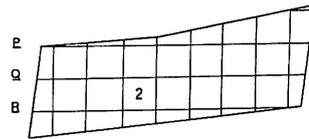
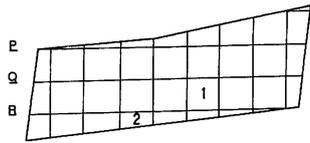
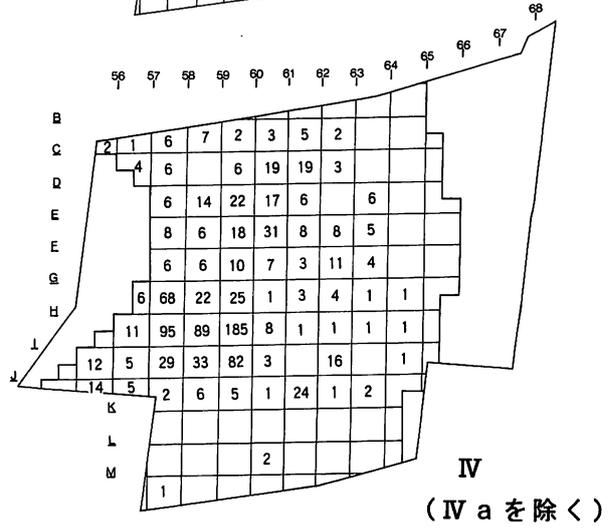
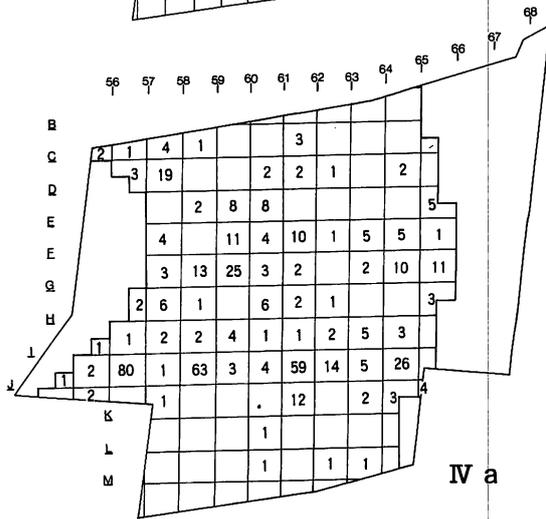
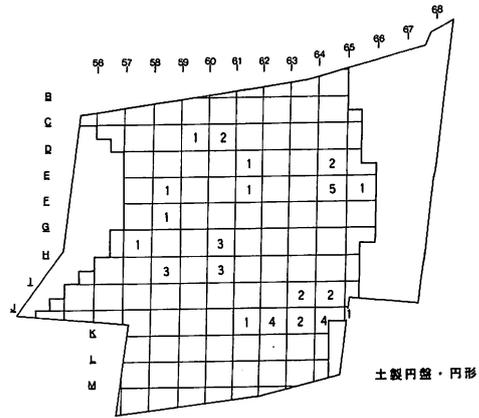
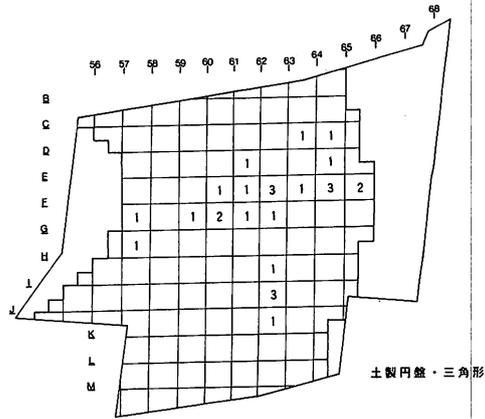


図Ⅷ-30 土器分布図(10)

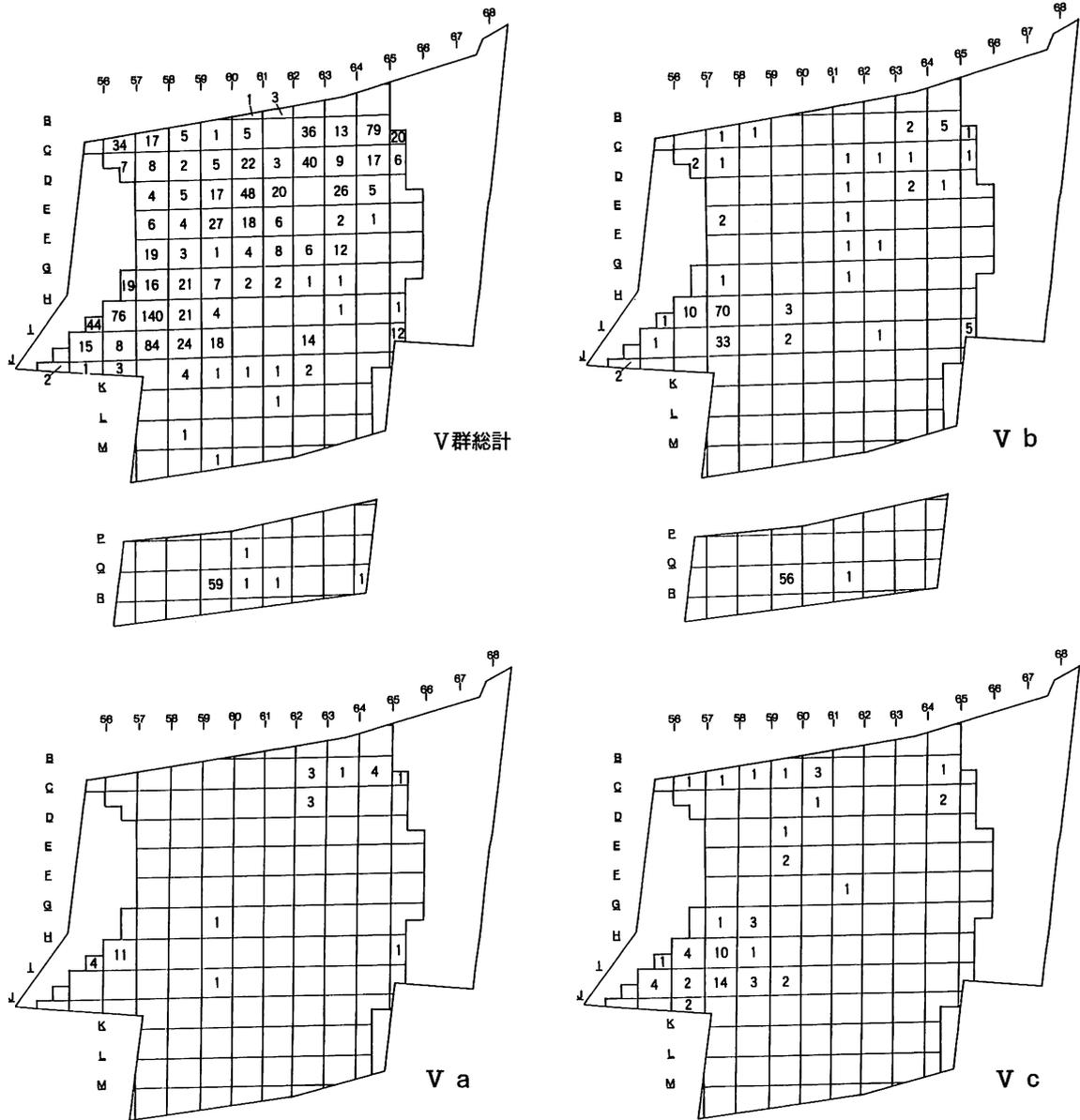


図Ⅶ-31 土器分布図(11)

3 II 黒層の遺物



図VIII-32 土器分布図(12)



図Ⅷ-33 土器分布図(13)

表Ⅷ-6 II 黒層掲載土器一覽(1)

図番号	発掘区	層位	分類
Ⅷ-20-1	E63b他	II B	Ⅲ群 萩ヶ岡1、2式併行 縄文圧痕と縄線文
2	B54b他	II B	Ⅲ群 萩ヶ岡2式併行 絡条体圧痕と縄線文
3	D60d他	II B	Ⅲa 萩ヶ岡1、2式併行 口縁部に2本一組の粘土紐 刺突A
4	I62d他	II B	Ⅲa 胴部破片
5	C57b他	II B	Ⅲa 胴部下半部分
6	P63b他	II B	Ⅲa 底部破片
7	G62d他	II B	Ⅳa 底部破片

図番号	発掘区	層位	分類と備考
Ⅷ-21-1	H57d	II B	Ⅲa 絡条体
2	H59d	II B	Ⅲa 絡条体
3	D63	耕作土	Ⅲa 縄文
4	E65a	II B	Ⅲa 縄文
5	I60b	II B	Ⅲa 刻み
6	J62b	II B	Ⅲa 沈線
7	I64c	II B	Ⅲa 沈線
8	J63a	II B	Ⅲa 刺突A
9	J64d	II B	Ⅲa 刺突A
10	J62	攪乱	Ⅲa 刺突A
11	H60d	II B	Ⅲa 短沈線、くの字に施す
12	J62d	II B	Ⅲa 爪
13	J64a	II B	Ⅲa 短沈線、くの字に刻み
14	J61b	II B	Ⅲa 短沈線、くの字に施す
15	E60d	II B	Ⅲa 刺突
16	J63a	II B	Ⅲa 半截竹管、押引き
17	J62b	I B	Ⅲa 無文
18	C57c	II B	Ⅲa 半截竹管、沈線
19	J63a	II B	Ⅲa 半截竹管、沈線
20	G59a	II B	Ⅲa 口縁部肥厚帯縄文施文
21	F61c	II B	Ⅲa 口縁部肥厚帯縄文施文
22	E64a	II B	Ⅲa 口縁部肥厚帯縄文施文

図番号	発掘区	層位	分類と備考
Ⅷ-22-1	F59c	II B	Ⅲa 絡条体
2	J65a	II B	Ⅲa 絡条体
3	F57d	II B	Ⅲa 絡条体
4	J59d	II B	Ⅲa 絡条体
5	J62a	II B	Ⅲa 絡条体
6	H58b	II B	Ⅲa 爪
7	F65d	II B	Ⅲa 爪
8	D57d	II B	Ⅲa 爪
9	D59c	II B	Ⅲb-3 口縁部端部縄文施文
10	D61a	II B	Ⅲa 爪
11	D61c	II B	Ⅲa 爪
12	C60c	II B	Ⅲa 刻み
13	E63c	II B	Ⅲa 刻み
14	J63a	II B	Ⅲa 刻み
15	P60a	II B上	Ⅲa 刻み
16	F62b	II B	Ⅲa 刻み
17	I60	II B	Ⅲa 刻み
18	G59c	II B	Ⅲa 刻み
19	F64d	I B	Ⅲa 刺突A
20	P61c	II B	Ⅲa 刺突A
21	F59a	II B	Ⅲa 半截竹管、押引き
22	J62d	II B	Ⅲa 半截竹管、押引き
23	J64a	II B	Ⅲa 半截竹管、押引き
24	D61c	II B	Ⅲb-3 刺突
25	B61c	攪乱	Ⅲb-3 刺突
26	G63b	II B	Ⅲb-3 口縁部縄文施文

27	G59a	II B	Ⅲa 縄文施文
28	I59他	攪乱	Ⅲa 刻み
29	F65a他	II B	Ⅲa 刻み
30	G57b他	II B	Ⅲa 縄文施文
31	I62d	I B	Ⅲb-3
32	I63a他	II B	Ⅲb-3
33	H57	攪乱	Ⅲb-3

図番号	発掘区	層位	分類と備考
Ⅷ-23-1	C57b他	II B	Ⅲa 刻み
2	D60c他	II B	Ⅲa 半截竹管による沈線
3	G59a	II B	Ⅲa 沈線
4	H61a	II B	Ⅲa 沈線
5	J64a	II B	Ⅲa 沈線
6	G60b	II B	Ⅲa 絡条体
7	F58b	II B	Ⅲa 絡条体
8	I63a	II B	Ⅲa 絡条体
9	I62d	II B	Ⅲa 絡条体
10	I60a	II B	Ⅲa 絡条体
11	R59d	II B	Ⅲa 絡条体
12	J65a	II B	Ⅲa 縄文
13	G57a	II B	Ⅲa 刻み
14	J62b	I B	Ⅲa 刻み
15	J64b	II B	Ⅲa 刻み
16	F64c	I B	Ⅲa 刺突A
17	J59a	II B	Ⅲa 爪
18	J63a	II B	Ⅲa 爪
19	I62b	II B	Ⅲa 爪
20	J65b	II B	Ⅲa 爪
21	Q59b	II B	Ⅲa 爪
22	H60d	II B	Ⅲa 半截竹管、押引き
23	H60d	I B	Ⅲa 半截竹管、押引き
24	G58d	II B	Ⅲa 半截竹管、押引き
	I61c	II B	Ⅲa 半截竹管、押引き
25	D60a	II B	Ⅲa 半截竹管、押引き
26	E64c	II B	Ⅲa 絡条体
27	D62c	II B	Ⅲa RL編とLL編を纏った原形
28	F58b	I B	Ⅲa 綾織り文
29	H56b	II B	Ⅲa 綾織り文
30	R58	攪乱	Ⅲa 底部
31	G60a	II B	Ⅲa 底部

図番号	発掘区	層位	分類と備考
Ⅷ-24-1	H64b	II B	Ⅳa 余市式
2	D65b	I B	Ⅳa 余市式
3	J61b	攪乱	Ⅳa 余市式
	J61b	II B	Ⅳa 余市式
4	D65b	I B	Ⅳa 余市式
5	I64d	II B	Ⅳa 余市式
6	I63b	II B	Ⅳa 余市式
7	F58d	I B	Ⅳa 余市式
8	H56	風倒木	Ⅳa 余市式
9	F59a	II B	Ⅳa 余市式
10	I64a	II B	Ⅳa 余市式
11	F65d	II B	Ⅳa 余市式
12	H57c	II B	Ⅳb ヲカマイコ式
13	Q59a	II B	Ⅳb 手稲式
14	G58d他	II B	Ⅳc 堂林式
15	D61b他	II B	Ⅳb ヲカマイコ式
16	H58c他	II B	Ⅳc 堂林式 直線構成の 文様帯

表Ⅷ-7 Ⅱ黒層掲載土器一覽(2)・土製品一覽

図番号	発掘区	層位	分類と備考
Ⅷ-25-1	H57a	ⅡB	Ⅳb ヌカマコ
2	B61b	ⅡB	Ⅳc 堂林式
3	C57a	ⅡB	Ⅳc 堂林式
	C60c	ⅡB	Ⅳc 堂林式
4	I57b	ⅡB	Ⅳc 堂林式
	I57	攪乱	Ⅳc 堂林式
5	E60d		Ⅳc 堂林式
	E60d	ⅡB	Ⅳc 堂林式
6	C60c	ⅡB	Ⅳc 堂林式
	C61	耕作土	Ⅳc 堂林式
7	D60c	ⅡB	Ⅳc 堂林式
8	H56d	ⅡB	Ⅳc 堂林式
9	D59b	ⅡB	Ⅳc 堂林式
	C61	耕作土	Ⅳc 堂林式
10	C61b	ⅡB	Ⅳc 堂林式
	C61	耕作土	Ⅳc 堂林式
11	E61a	ⅡB	Ⅳc 堂林式
	E63c	ⅡB	Ⅳc 堂林式
12	D59c	ⅡB	Ⅳc 堂林式
	E59c	ⅡB	Ⅳc 堂林式
	E59d	ⅡB	Ⅳc 堂林式
13	F58c	ⅡB	Ⅳc 堂林式
	H57a	ⅡB	Ⅳc 堂林式
	I62b	ⅡB	Ⅳc 堂林式
14	F60d	ⅡB	Ⅳc 堂林式
15	H57a	ⅡB	Ⅳc 堂林式
16	H59b	ⅡB	Ⅳc 堂林式
17	I57a	ⅡB	Ⅳc 堂林式
18	H57a	ⅡB	Ⅳc 堂林式
19	E60d他	ⅡB	Ⅳc 堂林式
20	G58d他	ⅡB	Ⅳc 堂林式
21	H57c他	ⅡB	Ⅳc 堂林式 曲線構成の 文様帯
22	H58b他	ⅡB	Ⅳc 堂林式 刺突や沈線 を施さない

図番号	発掘区	層位	分類と備考
Ⅷ-26-1	J55	ⅡB	Ⅳc 堂林式 注口土器
2	I58d	ⅡB	Ⅳc 堂林式 注口土器
	I60	ⅡB	
3	I62b	ⅡB	Ⅳc 堂林式 注口土器
4	F63a	ⅡB	Ⅳc 堂林式 ミチ7浅鉢形
5	E57c	ⅡB	Ⅳc 堂林式 ミチ7浅鉢形
6	G59c	ⅡB	Ⅳc 堂林式 注口土器
7	D59b	ⅡB	Ⅳc 堂林式 注口土器
8	D61d	ⅡB	Ⅳc 堂林式 注口土器
9	I58a	ⅡB	Ⅳc 堂林式 注口土器
10	H56d	ⅡB	Ⅳc 堂林式 注口土器
11	H59b	ⅡB	Ⅳc 堂林式 注口土器
	H59	攪乱	
	I62b	ⅡB	
12	G59c	ⅡB	Ⅳc 堂林式 注口土器
13	G57b	ⅡB	Ⅳc 堂林式 注口土器
14	H-6	床直	Ⅳc 堂林式 注口土器
	H-6	覆土	
	H-6	覆土上面	
	H-6	覆土上面	
	D58a	ⅡB	
	D58b	ⅡB	
15	H57a	ⅡB	Ⅳc 堂林式 注口土器
	H57a	ⅡB	
	H57a	ⅡB	
	H57d	ⅡB	

16	H57a	ⅡB	Ⅳc 堂林式 注口土器
17	G57c	ⅡB	Ⅳc 堂林式 注口土器
18	H56	耕作土	Ⅳc 堂林式 注口土器
19	I56b	ⅡB	Ⅳc 堂林式 注口土器 底部破片
20	H59c他	ⅡB	Ⅳc 堂林式 直線構成の 文様

図番号	発掘区	層位	分類
Ⅷ-27-1	I57a他	ⅡB	Vb
2	H56d他	ⅡB	Vb 159dから同一個体
3	Q59b他	ⅡB	Vb
4	H57d他	ⅠB・ⅡB	Vc
5	B65b	ⅡB	VaまたはVb
6	G59c	ⅡB	VaまたはVb
7	H56d	ⅡB	Va
8	B64d	ⅡB	Va
9	B64d	ⅡB	Va
10	H56a	ⅡB	Va
11	I57a	ⅡB	Vb 157dから同一個体
12	H59c	ⅡB	Vb
13	G61a	ⅡB	Vb
14	F62c	ⅡB	Vb
15	D61a	ⅡB	Vb
16	I55b	ⅡB	Vb
17	Q59c	ⅡB	V
18	B65b	ⅡB	Va
19	Q59c	ⅡB	Vb
20	J54d	ⅡB	Vb

図番号	発掘区	層位	分類と備考
Ⅷ-28-1	E56c	ⅠB-4	再生土製品 円形 Ⅲa破片
2	G60c	ⅡB	再生土製品 円形 Ⅲa破片
3	D64c	ⅡB	再生土製品 円形 Ⅲa破片
4	J65a	ⅡB	再生土製品 円形 Ⅲa破片
5	J64d	ⅡB	再生土製品 円形 Ⅲa破片
6	C60c	ⅡB	再生土製品 円形 Ⅲa破片
7	E63b	ⅡB	再生土製品 三角形 Ⅲa破片
8	E62c	ⅡB	再生土製品 三角形 Ⅲa破片
9	F59c	ⅡB	再生土製品 三角形 Ⅲa破片
10	E61a	ⅡB	再生土製品 三角形 Ⅲa破片
11	F62d	ⅡB	再生土製品 三角形 Ⅲa破片
12	H54c	ⅠB-3	再生土製品 三角形 Ⅲa破片
13	C63d	ⅡB	再生土製品 三角形 Ⅲa破片
14	H58a	ⅡB	再生土製品 貫通孔 Ⅲa破片
15	E63c	ⅡB	再生土製品 貫通孔 Ⅲa破片
16	D60b	ⅡB	再生土製品 貫通孔 Ⅲa破片
17	C57a	ⅡB	再生土製品 凹型 Ⅲa破片
18	C59a	ⅡB	再生土製品 凹型 Ⅲb-3破片
19	C57a	ⅡB	再生土製品 凹型 Ⅲa破片
20	J55a	ⅡB	Ⅳc期土製品
21	C61b	ⅡB	焼成粘土塊

(3) 石器等

石鏃・石鏃未製品 (図Ⅷ-34-1~7、図Ⅷ-36、表Ⅷ-8、図版Ⅷ-31)

石鏃53点、石鏃未製品2点が出土している。石質は1点の片岩を除き、すべて黒曜石である。1点の片岩は本来I B層出土のものが混入したものと考える。薄身で、五角形のもものが1点、三角形で、凹基のもの6点。平基のもの1点、木の葉形のもの1点。菱形のもの2点、有茎鏃21点である。このうち五角形のもの1点、木の葉形のもの1点、菱形のもの1点、有茎鏃5点、計7点を図示した。石質はすべて黒曜石である。1は五角形のもの。2は木の葉形のもの。3~7は有茎鏃。4は基部が一部欠損。7は赤井川産の黒曜石に見られる小さな流紋岩等の不純物が見られる。

石槍・ナイフ (図Ⅷ-34-8~14、図Ⅷ-36、表Ⅷ-8、図版Ⅷ-31)

18点が出土している。このうち6点を図示した。石質はすべて黒曜石である。8は、石質はいわゆる花十勝。茶色と黒色が混じり合う。表面は全面に調整が施されているが、裏面は一部主剝離面を残す。9は流紋岩等の白色の不純物が見られる。周縁には潰れが見られる。10は下部が一部欠損。周縁部がわずかに潰れている。11は流紋岩等の白色の不純物が多く見られる。赤井川産の黒曜石と考える。周縁部に潰れは見られず、基部の作り出しもしっかりしている。12は周縁部に潰れは見られず、基部の作り出しもしっかりしている。13は周縁部に潰れが見られる。裏面には古い剝離面が残る。横長の剝片から作られている。14は周縁部に潰れが見られ、裏面に古い剝離面が残る。横長の剝片から作られる。基部に原石面が残る。

石錐 (図Ⅷ-34-15~18、図Ⅷ-36、表Ⅷ-8、図版Ⅷ-31)

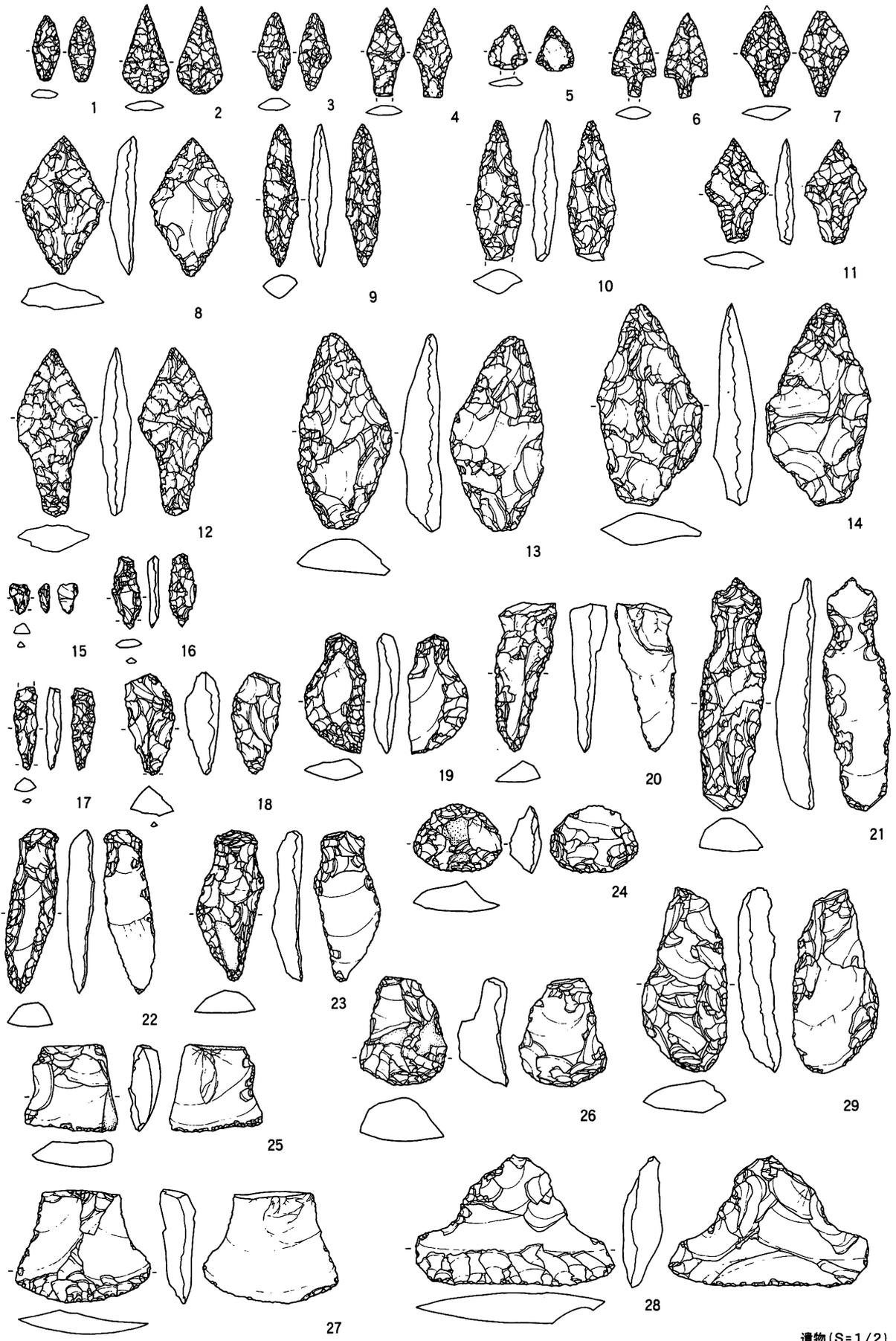
5点が出土している。石質は黒曜石3点、頁岩1点、メノウ質頁岩1点である。このうち4点を図示した。石質は15がメノウ質頁岩。その他は黒曜石。15は、錐の部分の摩滅は見られない。16は錐の部分の摩滅は著しい。回転錐であろう。裏面には古い剝離面が見られる。横長の剝片から作られている。17は上部を一部欠く。錐部分に摩滅が見られ、回転錐と考える。18は流紋岩等の白い不純物が見られる。肉眼観察では赤井川産のものにみえる。錐部分に摩滅がなく、錐部分に上方向の剝離が数本見られることから突き錐と考える。

つまみ付きナイフ (図Ⅷ-34-19~23、図Ⅷ-36、表Ⅷ-8、図版Ⅷ-32)

5点が出土している。すべて図示した。石質は19が珪質頁岩、21が頁岩。その他がメノウ質頁岩である。19は表面が周縁加工、裏面は右面のみ周縁加工されているもの。20は表面を周縁加工したもの。裏面には刃こぼれ状の剝離がいくつか見られた。21は表面が全面加工のもの。裏面は左面に一部剝離が取られている。裏面には古い剝離面が残る。縦長の剝片から作られている。22は表面は全面周縁加工されたもの。裏面はつまみ部分の作り出しのみが行われている。裏面には古い剝離面が残る。縦長の剝片から作られている。23は表面は全面加工、裏面はつまみ部分の作り出しのみが行われている。裏面には主剝離面が残る。縦長の剝片から作られている。

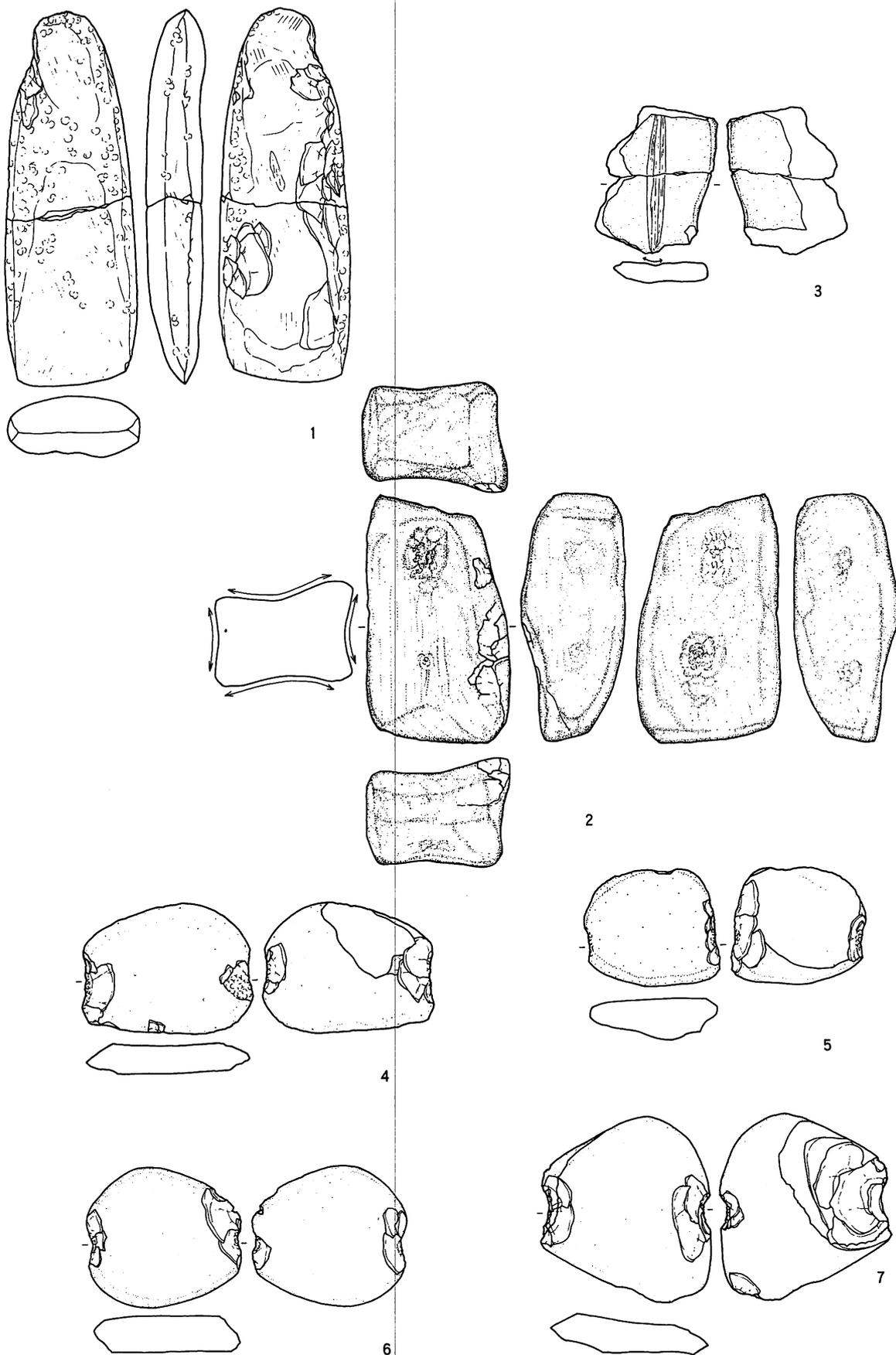
スクレイパー (図Ⅷ-34-24~29、図Ⅷ-36、表Ⅷ-8、図版Ⅷ-32)

26点が出土している。石質は黒曜石が21点、メノウ質頁岩1点、頁岩3点、縞頁岩1点である。6点を図示した。石質は、27がメノウ質頁岩、28が頁岩、29が縞頁岩で、その他が黒曜石である。24は円形のもの。表面に原石面を残す。下部から左面にかけて刃部を形成している。25は上部、右面に原石面が残る。下部に刃部が形成されている。裏面右側挟られている部分に刃こぼれ状の剝離が見られる。26は表面に風化した古い剝離面が残る。原石面と同じドットで示した。表面に鉄分が斑状に付着する。流紋岩等の白い不純物がわずかに混じる。裏面には主剝離面が残る。下部に刃部が形成されている。27は下部に刃部が形成されている。裏面には主剝離面が残る。28は下部に刃部が形成されてい



図Ⅷ-34 Ⅱ黒層の石器(1)

遺物(S=1/2)



図Ⅷ-35 II 黒層の石器(2)

遺物(S=1/3)

る。29は下部側縁部に細かな刃部調整もしくは刃こぼれ状の剝離が見られる。裏面には主剝離面が残る。

石核 (図VIII-37)

18点出土した。石質は黒曜石16点、頁岩1点、縞頁岩1点、メノウ質頁岩1点である。図示していない。分布図のみ掲載した。

石斧 (図VIII-35-1、図VIII-37、表VIII-8、図版VIII-33)

21点が出土している。うち1点を図示した。1は石質は泥岩。

たたき石 (図VIII-35-2、図VIII-37、表VIII-8、図版VIII-33)

5点が出土している。このうち1点を図示した。2はいわゆる四面砥石をたたき石に転用したものである。石質は砂岩である。凹石に転用している。

すり石 (図VIII-37)

5点が出土している。図示していない。分布図のみ掲載した。

台石・石皿 (図VIII-38)

2点出土している。図示していない。分布図のみ掲載した。

砥石 (図VIII-35-3、図VIII-38、表VIII-8、図版VIII-33)

12点が出土している。1点図示した。3は石質は砂岩である。F 61 c 出土の2点が接合して1点となったものである。

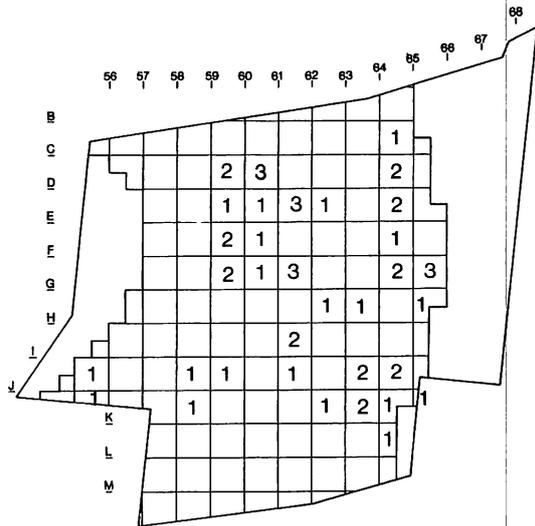
石錘 (図VIII-35-3、図VIII-38、表VIII-8、図版VIII-33)

5点が出土している。このうち4点を図示した。石錘は台地部 F 65区と低地部 F 67区から出土した。石質は4~6が安山岩、7が泥岩。7はF 65 a 出土のもの2点が接合して1点になったものである。打ちき部分は、紐などをかけるときの利便を図ったようで、潰れが見られる。(倉橋)

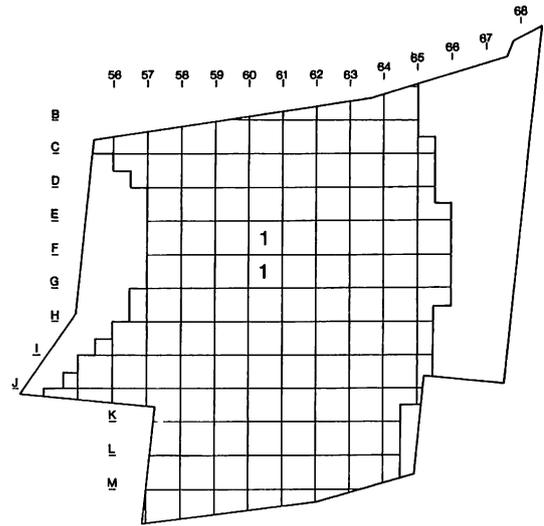
表VIII-8 II黒層掲載石器一覧

掲載番号	調査区	遺物番号	分類	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	材質	備考
VIII-34-1	I 59 b	4	石鏃	II B	21.7	8.2	2.8	0.6	黒曜石	
VIII-34-2	I 55 c	7	石鏃	II B	30.5	14.9	0.3	1.1	黒曜石	
VIII-34-3	F 59 b	52	石鏃	II B	26.4	11.0	4.2	1.1	黒曜石	
VIII-34-4	C 64 c	5	石鏃	II B	29.9	12.1	3.6	1.2	黒曜石	
VIII-34-5	C 60 c	11	石鏃	II B	14.4	13.3	2.2	0.5	黒曜石	
VIII-34-6	C 59 b	6	石鏃	II B	28.7	14.6	3.7	1.3	黒曜石	
VIII-34-7	F 65 a	160	石鏃	II B	(30.3)	17.1	4.6	1.6	黒曜石	
VIII-34-8	D 61 b	13	石槍・ナイフ	II B	47.6	28.2	8.5	9.2	黒曜石	
VIII-34-9	D 59 d	15	石槍・ナイフ	II B	50.1	11.3	6.1	3.6	黒曜石	
VIII-34-10	E 59 a	57	石槍・ナイフ	II B	48.4	16.1	7.6	5.2	黒曜石	
VIII-34-11	F 65 a	197	石槍・ナイフ	II B	36.3	21.4	6.2	3.3	黒曜石	
VIII-34-12	I 63 a	19	石槍・ナイフ	II B	59.1	25.5	9.6	9.1	黒曜石	
VIII-34-13	D 61 c	5	石槍・ナイフ	II B	69.5	32.2	11.4	24.0	黒曜石	
VIII-34-14	H 64 a	12	石槍・ナイフ	II B	71.3	35.4	11.2	26.0	黒曜石	
VIII-34-15	D 57 b	5	石鏃	II B	9.8	6.5	3.8	0.3	メノウ質頁岩	
VIII-34-16	D 59 c	33	石鏃	II B掘り揚げ土	25.1	9.1	3.4	0.7	黒曜石	
VIII-34-17	E 59 c	53	石鏃	II B	28.8	7.2	4.3	0.9	黒曜石	
VIII-34-18	F 59 b	26	石鏃	II B	35.0	15.8	10.4	5.2	黒曜石	
VIII-34-19	J 57 d	1	つまみ付きナイフ	II B	43.1	21.1	6.9	7.2	頁岩	
VIII-34-20	B 57 b	3	つまみ付きナイフ	II B	52.8	20.2	12.0	8.9	メノウ質頁岩	
VIII-34-21	J 64 a	10	つまみ付きナイフ	II B	82.4	22.5	10.1	23.4	頁岩	
VIII-34-22	C 61 b	4	つまみ付きナイフ	II B	58.6	15.8	8.5	9.7	頁岩	
VIII-34-23	B 61	3	つまみ付きナイフ	耕作土	52.4	20.8	8.5	9.8	珪質頁岩	
VIII-34-24	D 60 d	8	スクレイパー	II B	31.3	23.7	10.1	6.0	黒曜石	
VIII-34-25	D 58 d	10	スクレイパー	II B掘り揚げ土	29.7	32.3	9.0	10.6	黒曜石	
VIII-34-26	E 61 d	23	スクレイパー	II B	37.9	31.7	13.9	14.2	黒曜石	
VIII-34-27	C 64 b	4	スクレイパー	II B	47.6	39.7	9.4	15.4	頁岩	
VIII-34-28	C 60 c	17	スクレイパー	II B	70.5	45.8	13.5	29.6	頁岩	
VIII-34-29	E 62 c	17	スクレイパー	II B	65.6	29.7	11.0	23.1	縞頁岩	
VIII-35-1	H 57 c	13	石斧	II B上	95.9	33.8	8.8	51.5	泥岩	H58d I Bと接合
VIII-35-2	E 59 d	63	たたき石	II B	122.3	71.9	53.6	624.1	砂岩	
VIII-35-3	F 61 c	30	砥石	II B	74.2	54.9	12.4	65.9	砂岩	F61c・40と接合
VIII-35-4	F 65 a	203	石鏃	II B	66.4	85.3	17.6	121.8	安山岩	
VIII-35-5	F 65 a	204	石鏃	II B	59.3	66.2	20.3	111.2	安山岩	
VIII-35-6	F 65 a	205	石鏃	II B	72.7	79.1	19.6	170.8	安山岩	
VIII-35-7	F 65 a	206	石鏃	II B	88.6	86.5	17.4	186.7	泥岩	F65a・207と接合

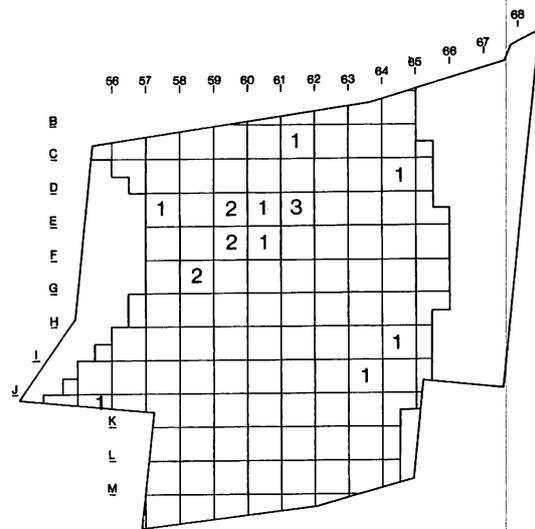
3 II 黒層の遺物



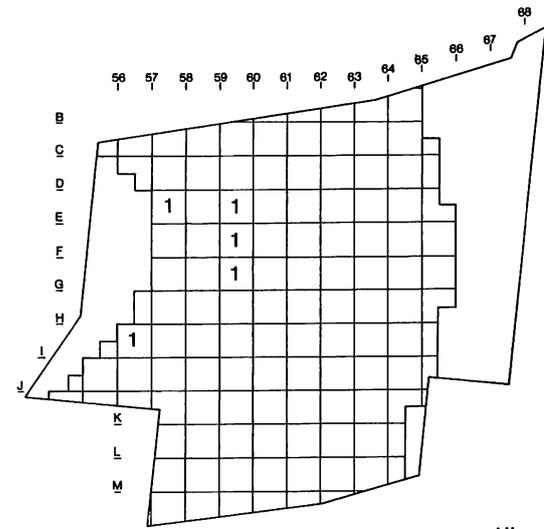
石鏃



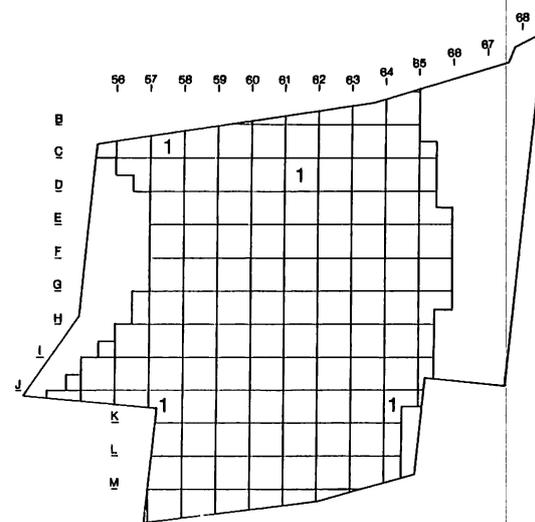
石鏃未製品



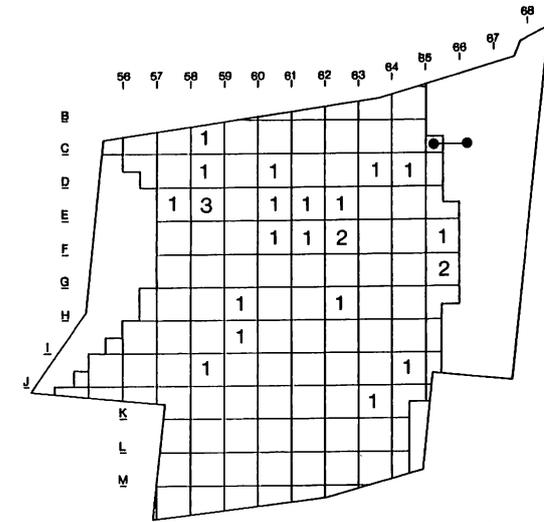
石槍・ナイフ



石鏓

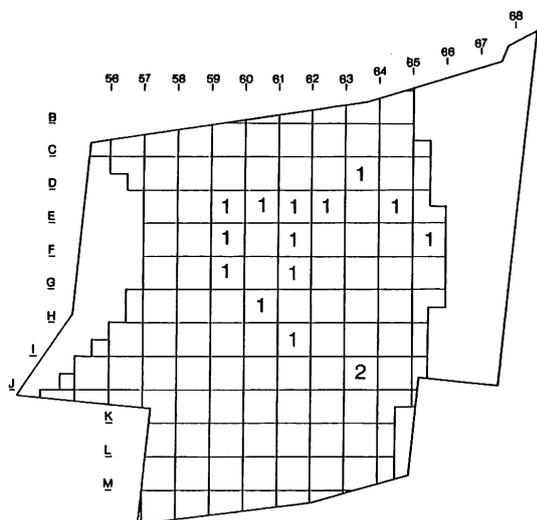


つまみ付きナイフ

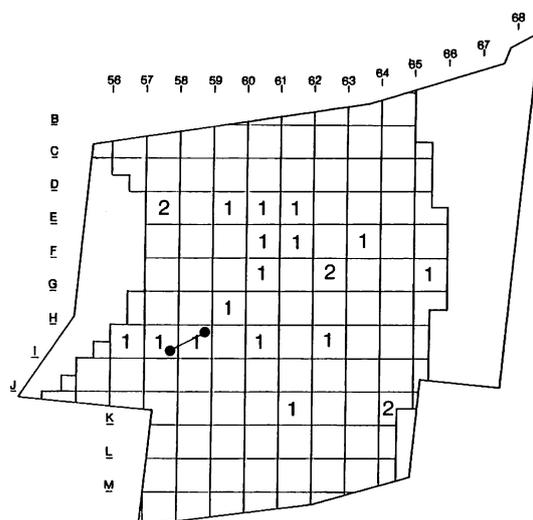


スクレイパー

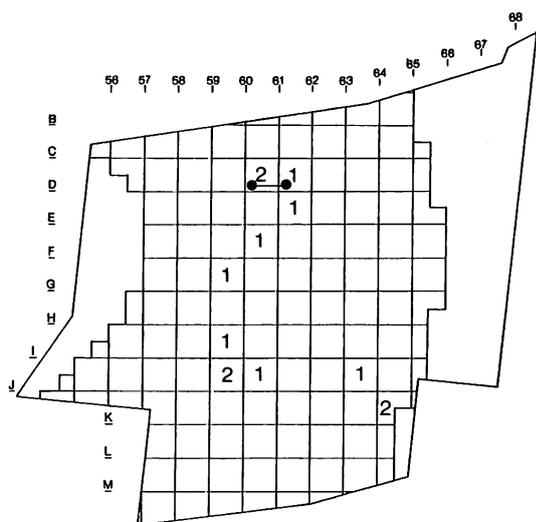
図VIII-36 石器分布図(4)



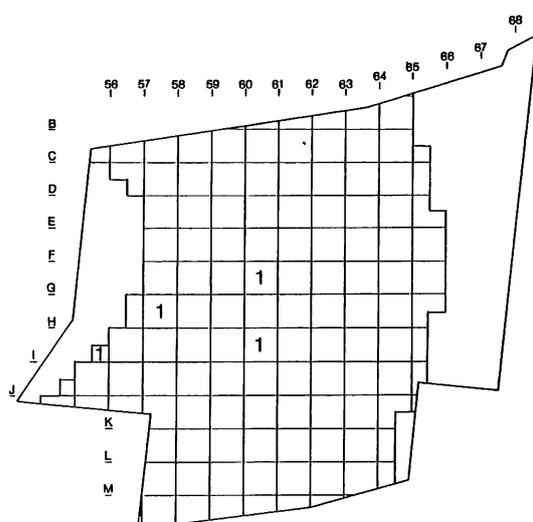
石核



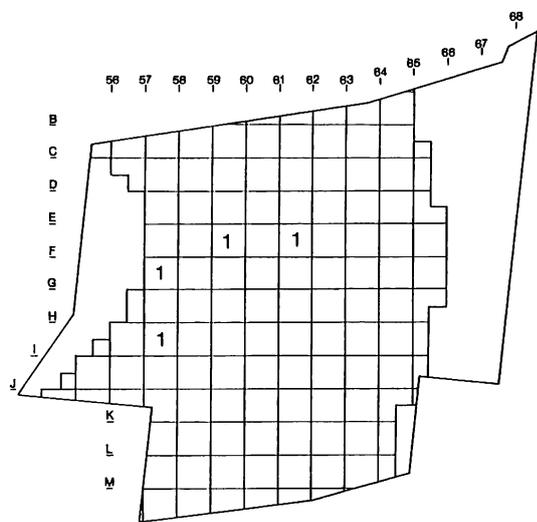
石斧



石斧片

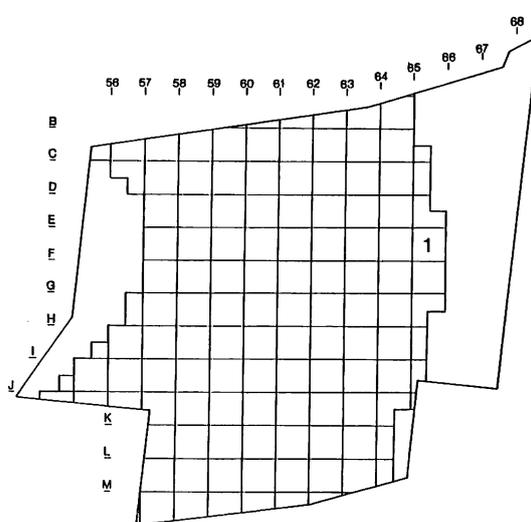


石斧未製品



Q59-1

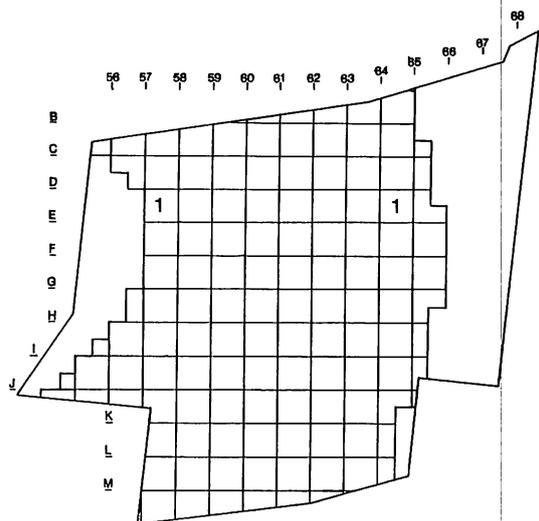
たたき石



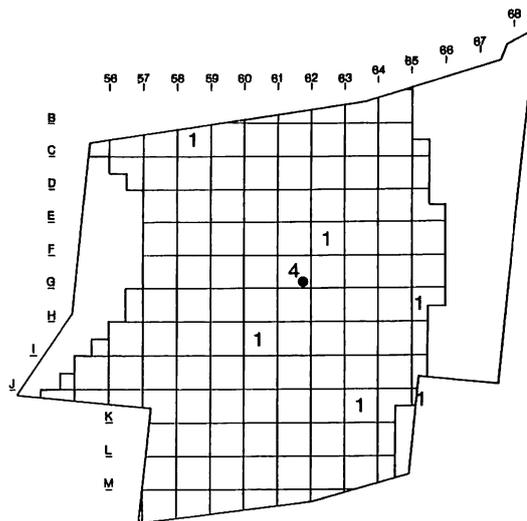
すり石

図Ⅷ-37 石器分布図(5)

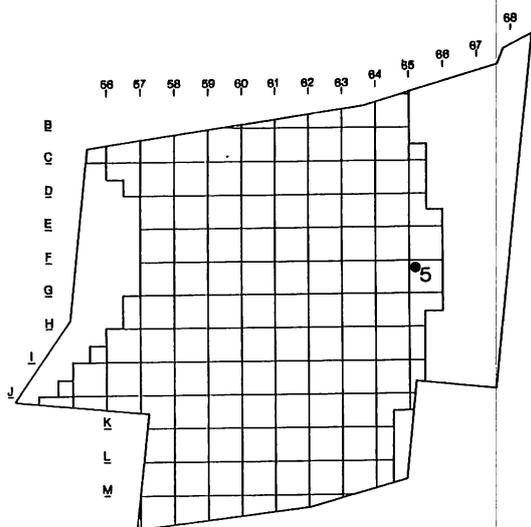
3 II 黒層の遺物



台石・石皿



砥石



石錘

図VIII-38 石器分布図(6)

IX 自然科学的分析

1. 化石林形成ころの古植生について

北海道開拓記念館 山田 悟郎

1. 試料と試料の処理方法

1) 試料

花粉分析に使用した試料はユカンボシ C 15 遺跡の発掘調査で、低湿部に面した F-23 区付近を深掘りした際に、恵庭 a 軽石堆積物 (En-a) やその下部の外来礫混じりの火山噴出物再堆積層下位で検出された、化石林を埋積した泥炭および有機成分に富んだ凝灰質粘土である。層序は、下位から灰色粘土 (13cm)、上部が有機成分に富んだ、火山噴出物が挟在した灰褐色凝灰質粘土 (20cm)、泥炭 (6cm)、有機成分に富んだ、火山噴出物が挟在した灰褐色凝灰質粘土 (10cm)、泥炭 (4cm)、外来礫混じりの火山噴出物再堆積物 (75cm)、En-a (70cm)、En-a ローム質粘土で、その上位は縄文時代の遺物包含層である腐植土が堆積する。花粉分析用試料は泥炭と下位の凝灰質粘土までから 7 点採取した。化石林は火山噴出物の再堆積層下部から下位の凝灰質粘土との間で検出され、倒木の近くには根株があることから、これらの樹木は流木ではなく現地性のものと考えられる。

2) 試料の処理

採取した試料のなかで泥炭については 5 g を、凝灰質粘土については 20 g を 50cc 遠沈管にとり、下記の順に化学・物理処理を行いプレパラートを作成した。

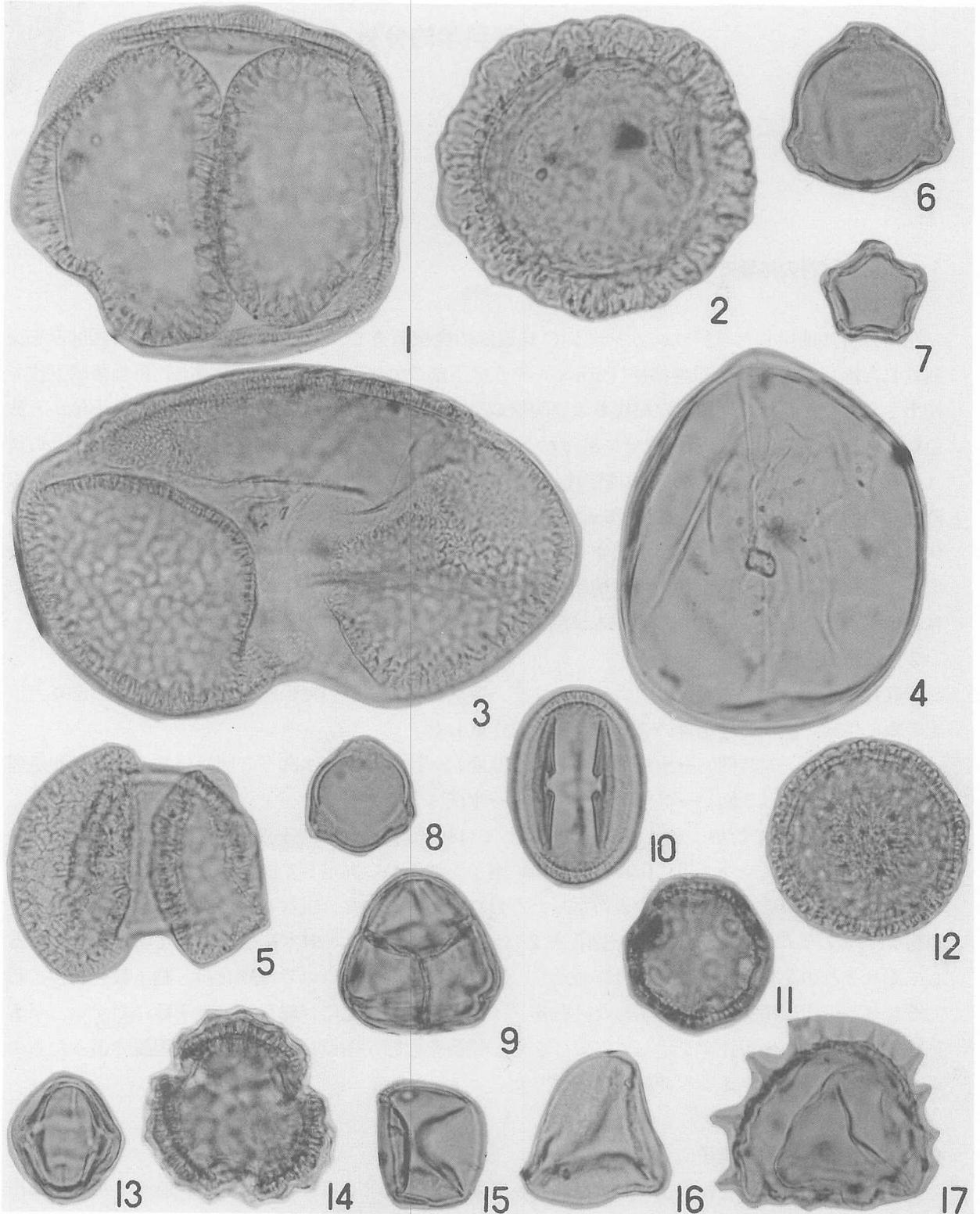
アルカリ処理 (24時間) → 水洗 (遠心分離で 5 回) → 比重分離 → 水洗 (3 回) → フッ化水素酸処理 (24時間) → 水洗 (3 回) → アセトリシス処理 → 水洗 (3 回)

検鏡は通常 400 倍で行い、属・科の同定に際しては 1000 倍で行った。同定・計数は、樹木花粉を 200 個以上数えるまでにレンズ下に出現した花粉・胞子を無作為に同定して計数した。各試料から検出された花粉・胞子の数は図 IX-2 の表に示したとおりである。また、主な花粉・胞子の出現率の消長を花粉ダイヤグラムにして表示した (図 IX-2)。表示にあたって、樹木花粉は樹木花粉総数を基数としてそれぞれの花粉の出現率を百分率で示し、草本花粉・胞子については総花粉・胞子数を基数としてそれぞれの出現率を百分率で示した。花粉ダイヤグラムの末尾には総花粉・胞子数に対する、草本花粉・胞子総数の出現比率を示してある。なお、特徴や形態が類似していて区分が困難であったものについては— (ハイフオン) で結んで表示した。

2. 検出された花粉・胞子

7 点の試料から樹木花粉 11 属 1 科、草本花粉 3 属 16 科、胞子 2 属 2 科、形態分類胞子 2 種類が検出された。樹木花粉で主となるのは針葉樹の *Picea* (トウヒ属: エゾマツ・アカエゾマツ)、*Larix* (カラマツ属: グイマツ) で、*Abies* (モミ属: トドマツ)、*Pinus* (マツ属: ハイマツ)、*Tsuga* (ツガ属: ツガ・コメツガ) などの針葉樹や、*Alnus* (ハンノキ属: ミヤマハンノキ・ハンノキほか)、*Betula* (カバノキ属: ダケカンバ・ウダイカンバほか) などの落葉広葉樹と *Ericaceae* (ツツジ科: コケモモほか)、*Myrica* (ヤマモモ属: ヤチヤナギ) などの灌木を伴った構成を示す。なお、*Tsuga* は北海道に自生したものではなく、季節風等によって本州から運ばれたものと考えられる。

1. 化石林形成ころの古植生について



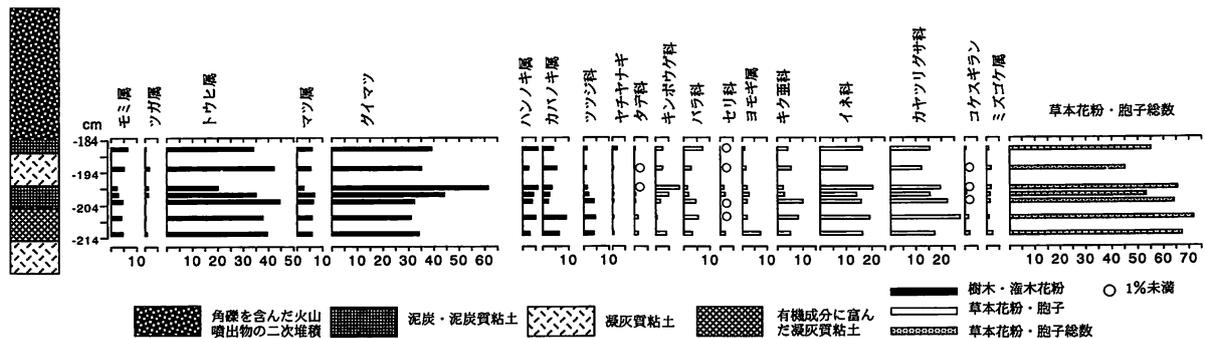
1. モミ属 2. ツガ属 3. トウヒ属 4. カラマツ属 5. マツ属 6. カバノキ属
 7. ハンノキ属 8. ヤマモモ属 9. ツツジ属 10. タデ科 11. ナデシコ科
 12. ハナシノブ科 13. バラ科 14. キク亜科 15. イネ科 16. カヤツリグサ科
 17. コケスギラン
 (最下層のプレパラートで撮影、×1200)

図IX-1 検出された花粉・胞子の顕微鏡写真

化石林を埋積した堆積物中から検出された花粉・孢子

		泥炭	凝灰質粘土	泥炭	2	3	凝灰質粘土	2
<i>Abies</i>	モミ属	14	14	6	8	12	11	12
<i>Tsuga</i>	ツガ属	2	6	4	4	2	2	3
<i>Picea</i>	トウヒ属	71	111	45	86	104	96	94
<i>Pinus</i>	マツ属	13	16	7	18	16	16	15
<i>Larix</i>	カラマツ属	81	93	137	108	76	79	81
<i>Salix</i>	ヤナギ属	0	0	0	0	0	1	1
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	13	7	14	11	9	14	8
<i>Betula</i>	カバノキ属	9	15	9	8	6	24	16
<i>Ulmus</i>	ニレ属	0	0	1	0	0	0	0
Ericaceae	ツツジ科	4	4	4	6	11	13	11
<i>Myrica</i>	ヤマモモ属	5	3	2	2	2	2	2
Polygonaceae	タデ科	3	3	2	6	6	15	12
Chenopodiaceae	アカザ科	0	0	0	0	0	0	1
Caryophyllaceae	ナデシコ科	0	3	1	0	2	1	1
Ranunculaceae	キンポウゲ科	15	16	58	29	13	8	32
Cruciferae	アブラナ科	0	1	2	1	1	1	1
Saxifragaceae	ユキノシタ科	1	1	2	2	0	2	1
Rosaceae	バラ科	35	14	11	11	31	48	26
Geraniaceae	フウロソウ科	3	0	1	0	0	0	0
Umbelliferae	セリ科	2	3	12	11	3	2	14
Gentianaceae	リンドウ科	0	1	3	3	0	1	4
Polemoniaceae	ハナシノブ科	0	1	2	3	2	2	3
Campanulaceae	キキョウ科	1	2	0	0	0	0	0
<i>Menyanthes</i>	ミツガシワ属	0	0	0	0	1	0	0
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	6	8	13	16	14	18	52
Carduoideae	キク亜科	21	28	18	17	64	71	38
Gramineae	イネ科	76	52	130	74	102	163	114
Cyperaceae	カヤツリグサ科	71	59	124	81	142	234	122
Liliaceae	ユリ科	0	2	0	1	1	0	1
<i>Lysichiton</i>	ミスバショウ属	0	0	0	0	0	0	1
Equisetaceae	トクサ科	1	1	2	1	1	1	1
Lycopodiaceae	ヒカゲノカズラ科	2	2	3	2	2	6	2
<i>Sellaginella</i>	コケスギラン属	3	2	3	6	4	14	16
Monolate type spore	単溝型孢子	2	1	2	0	0	5	3
Trilite type spore	三溝型孢子	1	2	1	1	1	1	1
<i>Sphagnum</i>	ミスゴケ属	6	11	15	9	12	13	19
合計(個)		461	482	634	525	640	864	708

化石林を埋積した堆積物の花粉ダイアグラム



図IX-2 検出された花粉・孢子

1. 化石林形成ころの古植生について

草本花粉・孢子では Gramineae (イネ科)、Cyperaceae (カヤツリグサ科) が主となり、Polygonaceae (タデ科)、Ranunculaceae (キンポウゲ科)、Rosaceae (バラ科)、Umbelliferae (セリ科)、*Artemisia* (ヨモギ属)、Carduoideae (キク亜科) を伴った構成である。また、数は少ないが *Sellaginella* もほぼ連続して出現する。

上位から2枚目の泥炭で一時的に *Larix* が急増する以外には花粉構成に大きな変化はみられず、優勢種の交代もみられず、*Larix* と *Picea* が主となった亜寒帯性針葉樹の森林が存在していたものと考えられる。*Myrica* や Ericaceae の出現率は低く、林床下に分布したと考えられる湿原はそれほど発達したものではなかったと考えられる。同様に、やはり高層湿原に分布する *Sphagnum* の出現率が低いことも、湿原の発達状態がそれほどでもないことを示唆している。注目したいのは、極地や高山地帯に多く分布する *Sellaginella* (コケスギラン) が、数は少ないもののほぼ連続して検出された。亜寒帯性針葉樹の *Larix* や *Picea* が寡占し、*Sellaginella* が検出されたことから、化石林が検出された泥炭や凝灰質粘土が堆積した頃には極地に近い気候環境であったと推定される。

3. 化石林形成ころの古植生について

ユカンボシ C 15 遺跡近くには、干拓でほとんどその姿が残されていないがかつてはオサツ沼が存在していた。遺跡がのる台地はオサツ沼に注ぐユカンボシ川に臨んだ河岸段丘である。松下ほか(1972)によると、千歳市から恵庭市にかけて地域と馬追丘陵の間には、表層から-30~-40mの深度まで支笏火山噴出物が堆積しており、遺跡が分布する河岸段丘の形成は支笏火山噴出物堆積後のことで、上位にのる火山噴出物の再堆積層や En-a 軽石層が整合であることから、化石林の形成はカルデラを形成した支笏火山噴火後から En-a 軽石噴出前となる。カルデラを形成した支笏火山噴火は、苫小牧市美々の化石林の炭化物の ^{14}C 年代測定値をもとに32,200年前頃とされてきたが(石狩低地帯研究会、1965)、最近になって支笏降下軽石 1 (Spfa 1) で埋積された炭化物から42,000 \pm 1,800 y. B. P. (I-17521) という年代値が報告され(柳田、1994)、支笏火山噴出物の噴出年代の検討が迫られている。En-a の噴出年代の下限は、松沢・小坂(1972)によって En-a 軽石層下位のローム質粘土から採取した炭化物の年代である21,100 \pm 700 y. B. P. (Gak-3263) であり、上限は、柏原(1970)によった支笏火山噴出物の二次堆積層の年代である15,000 \pm 400 y. B. P. (Gak-2370) である。したがって、その噴出年代は21,100年前から15,000年前の間に求められる。したがって、化石林は42,000年前から15,000年前の間に形成されたこととなる。ところで、花粉分析の結果では亜寒帯性針葉樹の *Picea* と *Larix* が主となり、*Abies*、*Pinus* や広葉樹の *Alnus*、*Betula* をわずかに交えた亜寒帯性針葉樹林が存在したことが確認されている。また、低湿地に分布する *Myrica* や Ericaceae もわずかに出現するほか、高層湿原を形成する *Sphagnum* もわずかではあるが出現することから亜寒帯性針葉樹林の林床には高層湿原が分布していたと考えることができる。しかし、その規模は広いものではなく、亜寒帯林の周辺には Gramineae、Cyperaceae、Polygonaceae、Ranunculaceae、Rosaceae などからなる草原が広がるとともに、極地や高山帯に分布する *Sellaginella* (コケスギラン) も分布した。現地調査の結果では、化石林を構成した樹木の大部分は、特徴的な端子が付着した枝と毬果から、現在の北海道には自生しないグイマツ (*Larix gmelinii* GORDON) であることが判明している。グイマツは最終氷期の初めには陸橋となった宗谷海峡を經由して北海道に再進出し、完新世はじめまで湿原等に分布し8,000年前頃には北海道から姿を消した亜寒帯性針葉樹である。泥炭等に含まれている植物遺体の詳細な調査はまだで、*Picea* の花粉も多く検出されていることから細かな遺体を調べると毬果の鱗片や葉片などが発見される可能性がある。最終氷期の石狩低地帯で *Larix* や

Picea が主となった花粉構成を示すのは、40,000年前から12,000年前にかけての時期で、特に25,000年前から12,000年前にかけての時期で顕著である（五十嵐・熊野、1981）。今回のように多量にグイマツの遺体が検出されたものとしては、樹幹や毬果・小枝・葉が多量に出土した北広島市音江別川流域での22,700±1000（Gak-2216）や（矢野・藤田、1970）、樹幹・枝・葉などが多量に出土した音江別川流域の他地点での15,000±400 y. B. P.（Gak-2370）などがある（柏原、1970）。このように、*Larix* の遺体が確認されたり *Larix* や *Picea* が主となった花粉構成を示すのは23,000年前から15,000年前頃で、ユカンボシ C 15遺跡の縄文期の遺物包含層下部を構成する台地の形成期頃に分布したグイマツが主となった化石林の年代もこの範囲の中に収まるものと考えられる。当時は、現在よりも年平均気温で6℃ほど低かったと予想されている（矢野、1987）。

ところで、千歳市柏台1遺跡では En-a 軽石層下位のローム質粘土中から、木質部表面が褐鉄鉱で置換され内部が侵食された木の根株と根の間から旧石器が発見され話題を呼んでいる。柏台1遺跡では泥炭等の低湿地堆積物はみられないが、火山噴出物の堆積状況からはユカンボシ C 15遺跡で発見された化石林とそれほど年代がかけ離れた時期のものではないと考えられる。化石林の年代測定と旧石器から推定される年代を併せ考えることによって、当時の森林相とそこに生活した人々の関係が明らかになるものと考えられる。

引用・参考文献

- 五十嵐八枝子・熊野純男（1981）「北海道における最終氷期の植生変遷」『第四紀研究』第20巻第3号，p. 129-142
- 石狩低地帯研究会（1965）「石狩平野における支笏降下軽石堆積物の¹⁴C年代」『地球科学』81
- 柏原信（1970）「野幌丘陵南部における低位段丘堆積物の¹⁴C年代」『地球科学』24巻4号，p. 149-150
- 松下勝秀・藤田郁男・小山内熙（1972）「札幌・苫小牧低地帯およびその周辺山地の形成過程」『日本の海岸平野』地質学論集第7号，p. 13-26，日本地質学会
- 松沢逸巳・小坂利幸（1972）「恵庭b降下軽石堆積物直上の炭化細片の¹⁴C年代」『地球科学』26巻2号，p. 84-85
- 柳田誠（1994）「支笏降下軽石1（Spfa-1）の年代資料」『第四紀研究』Vol. 33 No. 3，p. 205-207
- 矢野牧夫（1987）「石狩低地帯の最終氷期におけるグイマツの出現期」『北海道開拓記念館研究年報』第15号，p. 1-10
- 矢野牧夫・藤田郁男（1970）「石狩平野における含グイマツ泥炭層の¹⁴C年代」『地球科学』第24巻3号，p. 111-112

2. ユカンボシ C 15遺跡の珪藻・花粉化石と植物珪酸体より見た環境変遷(1)

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

ユカンボシ C 15遺跡は、石狩低地東縁の湿地帯に位置し、オサツ沼とユカンボシ川などの中小河川が形成した低湿地と微高地上に立地している。これまでの調査により、擦文文化期以降の木製品を中心とする遺物が豊富に出土しており、当時の人々の生活や交易を知る上で重要な資料が得られている。

今回、遺跡を取りまく環境の変遷や農耕に関する情報を得るために、低地部の堆積物を対象として自然科学分析調査を実施することとなった。このうち、堆積環境の変遷については珪藻分析を、古植生の変遷については花粉分析と植物珪酸体分析、住居内の灰の種類を明らかにするために灰像分析を行うことにした。今回、低湿地部の埋積過程および周辺植生に関して若干の資料が得られたので、その報告を行う。

1. 層序と試料

本遺跡の基本層序は、周辺の低湿性遺跡と類似した堆積物が認められているため、これまでの調査所見が踏襲されている。すなわち、0 B 層・I B 1～3 層が植物繊維に富んだ泥炭層、I B 4～5 層・II B 層が砂層と粘土層の互層とされ、また I B 3 層中に10世紀に降灰したとされる白頭山―苦小牧火山灰 (B-Tm) が部分的に認められるとされている。これまでの発掘調査により、I B 5 層・II B 層が縄文時代、I B 4 層が続縄文時代、I B 3 層が擦文文化期、I B 1～2 層および0 B 層がアイヌ文化期の遺物包含層とされている。

今回の調査では、1 地区の G-56北、低湿地・東 Loc. 1、X-3 周溝の3 地点が対象とされた。G-56北と低湿地東 Loc. 1 が低湿地部にあたり、X-3 周溝が微高地部に構築された遺構の埋積物である。以下、各地点ごとに層序と分析試料を述べる (表Ⅸ-1)。

G-56北では、礫・砂層の上位に I B 5 層～I B 1 層が認められている。本地点では、珪藻分析用試料24点 (試料番号25～48)、花粉分析用試料24点 (試料番号34～57) が採取された。この中から、層相などを考慮して、珪藻分析が12点、花粉分析・植物珪酸体分析が9点を選択された (表Ⅸ-1)。

低湿地・東 Loc. 1 では、砂層の上位に En-a 層、II B 層、I B 層、0 B (あるいは I B 上) 層が見られる。本地点では、珪藻分析試料26点 (試料番号69～94)、花粉分析用試料26点 (試料番号109～134) が採取された。分析は、珪藻分析が17点、花粉分析・植物珪酸体分析が17点実施した (表Ⅸ-1)。

X-3 周溝では、周溝埋積物から3 点の土壌試料 (試料番号2(4)上・中・下) が採取された。この内の試料番号2(4)上について花粉・植物珪酸体分析を実施した。

2. 分析方法

(1) 珪藻分析

試料を湿重で約7 g 秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の視野を走査し珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する。同定は、K. Krammer and Lange-Bertalot (1986・1988・

表IX-1 微化石分析試料

採取地点	試料名	花粉・植物珪酸体分析		珪藻分析		
		花粉分析 試料番号	分析試料	珪藻分析 試料番号	分析試料	
G-56北	I B-1	1/4	34	●	25	
	I B-1	2/4	35		26	●
	I B-1	3/4	36	●	27	
	I B-1	4/4	37		28	●
	I B-2	1/3	38		29	
	I B-2	2/3	39	●	30	●
	I B-2	3/3	40		31	
	I B-3上	1/1	41	●	36	●
	I B-3下	1/4	42		32	
	I B-3下	2/4	43	●	33	●
	I B-3下	3/4	44		34	
	I B-3下	4/4	45	●	35	●
	I B-4	1/5	46		37	
	I B-4	2/5	47	●	38	●
	I B-4	3/5	48		39	
	I B-4	4/5	49	●	40	●
	I B-4	5/5	50		41	
	I B-5	1/1	51	●	42	●
	砂&泥層	1/1	52		43	
	砂層	1/4	53		44	●
砂層	2/4	54		45		
砂層	3/4	55		46	●	
砂層	4/4	56		47		
礫層	1/1	57		48	●	
低湿地 ・ 東Loc. 1	OB or IB上	サンプル01	109		69	
	OB or IB上	サンプル02	110	●	70	●
	OB~IB1 or IB上	サンプル03	111		71	
	IB1	サンプル04	112	●	72	●
	IB1~IB2	サンプル05	113		73	
	IB2	サンプル06	114	●	74	●
	IB2~IB2下	サンプル07	115		75	
	IB2下~IB3上	サンプル08	116	●	76	●
	IB3中 (B-Tm含む)	サンプル09	117	●	77	●
	IB3中	サンプル10	118	●	78	●
	IB3下上	サンプル11	119	●	79	●
	IB3下~IB4	サンプル12	120		80	
	IB4~IB4白粘土	サンプル13	121	●	81	●
	IB4白粘土~IB5上	サンプル14	122	●	82	●
	IB5中	サンプル15	123	●	83	●
	IB5下	サンプル16	124		84	
	Ta-C1とC2の間層	サンプル17	125	●	85	●
	II B黒上	サンプル18	126		86	
	II B黒中	サンプル19	127	●	87	●
	II B黒下~II B白粘土上	サンプル20	128	●	88	●
	II B白粘土下~II B黒上	サンプル21	129		89	
	II B黒下~II B褐色上	サンプル22	130	●	90	●
	II B褐色中	サンプル23	131	●	91	●
	II B褐色下~II B灰褐色上	サンプル24	132		92	●
	II B灰褐色中	サンプル25	133	●	93	
	II B灰褐色下	サンプル26	134	●	94	●
X-3周溝 サンプル	2(4)上		106	●		
	2(4)中		107			
	2(4)下		108			

1991a, b)、K. Krammer (1992)、Reichardt, E. (1995)、Lange-Bertalot, H. and D. Metzeltin (1996)、Lange-Bertalot, H., K. Kulbs, T. Lauser, M. Noerpel-Schempp and M. Willmann (1996)、Metzeltin, D. and A. Witkowski (1996) などを用いる。

同定結果は、海水生種、海水～汽水生種、淡水生種順に並べ、その中の各種類はアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度 (pH) ・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数が100個体以上の試料について、産出率2.0%以上の主要な種類について、産出グラフを作成する。堆積環境の解析にあたっては、安藤 (1990)、Asai, K. and Watanabe, T. (1995)、伊藤・堀内 (1991) の環境指標種を参考とする。

(2) 花粉分析

花粉・孢子化石は、湿重約 5～10 g の試料について水酸化カリウム処理、篩別 (250 μ m)、重液分離 (臭化亜鉛、比重2.3)、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理 (無水酢酸：濃硫酸 = 9 : 1) の順に物理・化学的な処理を施して分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら、出現する全ての種類について同定・計数を行う。

結果は同定・計数結果の一覧表および主要花粉化石群集の層位的分布図として表示する。出現率は、木本花粉が木本花粉総数よりヤナギ属を除いた数を、草本花粉・シダ類孢子が総数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基数とした百分率で算出する。また、図表中で複数の種類をハイフン (-) で結んだものは種類間の区別が困難なものを示す。

(3) 植物珪酸体分析

湿重 5 g 前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理 (70 W, 250 KHz, 1 分間)、沈定法、重液分離法 (ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5) の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入しプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部 (葉身と葉鞘) の葉部短細胞に由来した植物珪酸体 (以下、短細胞珪酸体と呼ぶ) および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体 (以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ) を、近藤・佐瀬 (1986) の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出される種類とその検出個数の一覧表で示す。また、検出された種類の出現率を百分率で算出し、植物珪酸体群集の層位的分布図を作成する。各種の出現率は、短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体ともそれぞれの総数を基数とした百分率で算出する。

3. 化石の産状

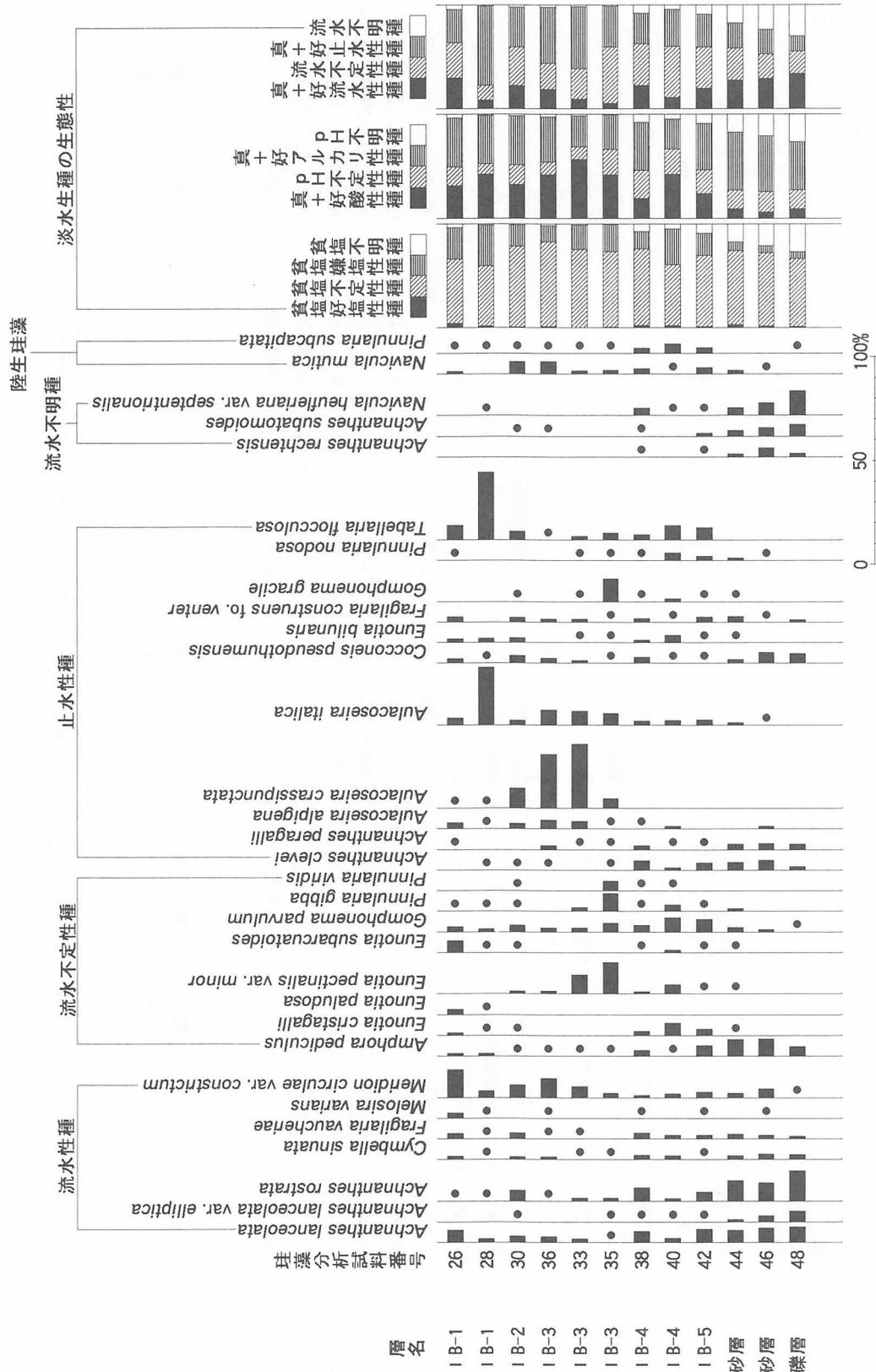
(1) 珪藻化石

結果を表 IX-2 ~ 7、図 IX-3・IX-4 に示す。

<1 地区 G-56北>

全ての試料から淡水生種が豊富に産出する。完形殻の出現率は、80%前後と高い。珪藻化石群集は、ほぼ層相変化と対応して変化する。

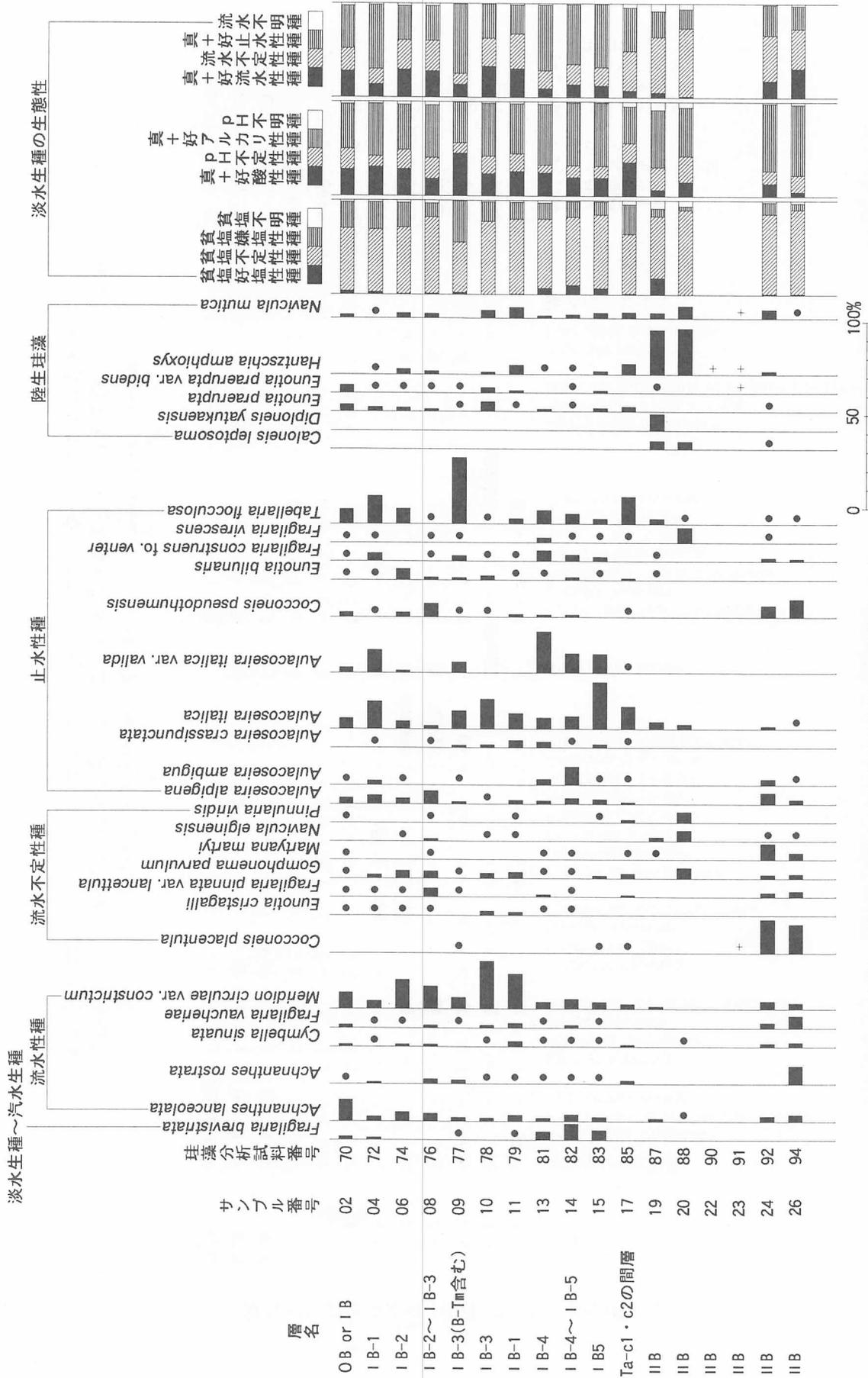
試料番号48~44は、淡水生種の生態性 (塩分・pH・流水に対する適応能) の特徴は、多少の塩分 (類) であれば耐えられる貧塩-不定性種、pH 7.0以上のアルカリ性水域を最適とする真・好アルカリ性種、川などの流水域に普通な真・好流水性種が優占あるいは多産する。主な産出種は、好流水



G-56北の主要珪藻化石群集の層位的分布
 各種産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。
 いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は1%未満の種類を示す。

図IX-3 G56区北の主要珪藻化石群集の層位的分布

2. ユカンボシ C 15 遺跡の珪藻・花粉化石と植物珪酸体より見た環境変遷(1)



低湿地・東Loc. 1の主要珪藻化石群集の層位的分布

海水-汽水-淡水性種産出率・各種産出率・完形産出率は全体基数・完形殻産出率は淡水性種の比率は淡水性種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は1%未満、+は100個体未満の種類を示す。

図IX-4 低湿地・東 Loc. 1 の主要珪藻化石群集の層位的分布

性の *Achnanthes lanceolata*、*A. rostrata*、流水不定性の *Amphora pediculus* が10%前後と多産し、好止水性の *Achnanthes clevei*、*A. peragalli*、*Cocconeis pseudothumensis*、流水に対する適応性が不明である *Achnanthes rechtensis*、*A. subatomoides*、*Navicula heufleriana* var. *septentrionalis*などを伴う。この内、*Achnanthes lanceolata*は、河川中～下流部や河川沿いの河成段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現する中～下流性河川指標種群（安藤、1990）の一種である。

試料番号42～38は真・好流水性種が減少し、真・好止水性種、真・好酸性種が増加する。流水不定性の *Eunotia cristagalli*、*Gomphonema parvulum*、好止水性の *Aulacoseira italica*、*Pinnularia nodosa*、*Tabellaria flocculosa*が多産する。この内、*Pinnularia nodosa*は、沼よりも浅く水深が1 m前後で、一面に水生植物が繁茂するような沼沢やさらに水深の浅い湿地に生育する沼沢湿地付着生種群（安藤、1990）の一種である。

試料番号35では真・好流水性種がさらに減少して、流水不定性種や真・好止水性種、真・好酸性種が増加する。主な産出種は、流水不定性の *Eunotia pectinalis* var. *minor*、*Pinnularia gibba*、好止水性の *Gomphonema gracile*である。これらの種は、沼沢湿地付着生種群（安藤、1990）でもある。

試料番号36・33になると、真・好酸性種、真・好止水性種が増加し優占する。好止水性で浮遊性の *Aulacoseira crassipunctata*が30%前後と優占し、この他に好流水性の *Meridion circulae* var. *constrictum*、流水不定性の *Eunotia pectinalis* var. *minor*、好止水性で浮遊性の *Aulacoseira alpigena*、*A. italica*などを伴う。優占種の *Aulacoseira crassipunctata*は、電気伝導度の低い貧栄養の泥炭池で認められるとされている（Krammer, K. and Lange-Bertalot, H., 1991a）とされる。

試料番号30は真・好止水性種が減少し、真・好流水性種が増加する。*Aulacoseira crassipunctata*が約10%に減少し、好流水性の *Achnanthes rostrata*、*Meridion circulae* var. *constrictum*などが産出する。

試料番号28になると、淡水浮遊性の *Aulacoseira italica*、*Tabellaria flocculosa*が30%前後検出され、ふたたび真・好止水性種が優占する。

試料番号26は、好流水性の *Meridion circulae* var. *constrictum*が約14%と多産し、この他に好流水性の *Achnanthes lanceolata*、流水不定性の *Eunotia subarcuatooides*、好止水性の *Tabellaria flocculosa*などを伴う。

〈1 地区低湿地・東 Loc. 1〉

試料番号90・91では珪藻化石がほとんど産出しない。これ以外の試料では、淡水生種が豊富に産出する。完形殻の出現率は、試料番号87・88が30%～40%と低く、それ以外が70%前後と高い。珪藻化石群集は、層相変化に対応して変化する。

試料番号94・92では、貧塩—不定性種、真・好アルカリ性種が優占し、流水に対しては真・好流水性種～真・好止水性種がほぼ同率で産出する。流水不定性の *Cocconeis placentula*が多産し、好流水性の *Fragilaria vaucheriae*、*Meridion circula* var. *constrictum*、流水不定性の *Martyana martyi*、好止水性の *Aulacoseira alpigena*、*Cocconeis pseudothumensis*などを伴う。

試料番号88・87は、一般水域に生育する水生珪藻の他に陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好气的環境に生育する陸生珪藻が約50%産出する。その主なものは、陸生珪藻の中でも耐乾性の強いA群（伊藤・堀内、1991）の *Hantzschia amphioxys*が25%と優占し、同じくA群の *Navicula mutica*、水域にも認められる陸生珪藻のB群（伊藤・堀内、1991）の *Caloneis leptosoma*を伴う。水生珪藻は、流水不定性の *Navicula elginensis*などが産出する。

試料番号85は、淡水浮遊性の *Aulacoseira italica*、好止水性の *Tabellaria flocculosa*が15%前後と多産し、真・好酸性種、真・好止水性種が増加する。

2. ユカンボシ C 15 遺跡の珪藻・花粉化石と植物珪酸体より見た環境変遷(1)

試料番号83～81は、貧塩—不定性種、真・好アルカリ性種、真・好止水性種が優占することを特徴とする。産出種の特徴は、淡水浮遊性の *Aulacoseira italica*、*A. italica* var. *valida* が10～20%と多産し、淡水域～汽水域まで塩分に対しての適応性の高い広域塩性種の *Fragilaria brevistriata*、淡水浮遊性の *Aulacoseira ambigua*、*Fragilaria construens* fo. *venter*、*Tabellaria flocculosa* を伴う。

試料番号79・78では、真・好流水性種が増加する。真流水性の *Meridion circulae* var. *constrictum* が多産し、淡水浮遊性の *Aulacoseira italica*、好流水性の *Achnanthes lanceolata*、*Fragilaria vaucheriae*、流水不定性の *Gomphonema parvulum*などを伴う。

試料番号77になると真・好酸性種、真・好止水性種が増加する。淡水浮遊性の *Tabellaria flocculosa* が優占し、同じ生態性の *Aulacoseira italica*、*A. italica* var. *valida*、真流水性の *Meridion circulae* var. *constrictum* を伴う。

試料番号76・74では再び真・好流水性種が増加する。真流水性の *Meridion circulae* var. *constrictum* が10～15%と多産し、好流水性の *Achnanthes lanceolata*、流水不定性の *Gomphonema parvulum*、好止水性の *Aulacoseira alpigena*、*Cocconeis pseudothumensis*などを伴う。

試料番号72では真・好流水性種が減少し、淡水浮遊性の *Aulacoseira italica*、*A. italica* var. *valida*、*Tabellaria flocculosa* が15%前後検出され、真・好止水性種が増加・多産する。

試料番号70は、真・好流水性種が増加する。特徴は、好流水性の *Achnanthes lanceolata*、真流水性の *Meridion circulae* var. *constrictum*、淡水浮遊性の *Aulacoseira italica*、*Tabellaria flocculosa* が10%前後と多産する。

(2) 花粉化石

結果を、表Ⅸ—8と図Ⅸ—5・6に示す。

〈1 地区 G—56北〉

花粉化石は9試料とも良好に検出される。木本花粉の出現傾向は、試料番号51～47、試料番号45～39、試料番号36・34で異なる。試料番号51～47では、クルミ属・コナラ属コナラ亜属が多産し、モミ属・トウヒ属・マツ属・クマシデ属—アサダ属・カバノキ属・ハンノキ属・ニレ属—ケヤキ属・カエデ属・ウコギ科・トネリコ属などを伴う。試料番号45～39ではクルミ属が減少し、ハンノキ属が増加・多産する。試料番号36・34になると引き続きコナラ亜属が多産するが、ハンノキ属が減少する。また、ヤナギ属が最も高率に検出されるようになる。

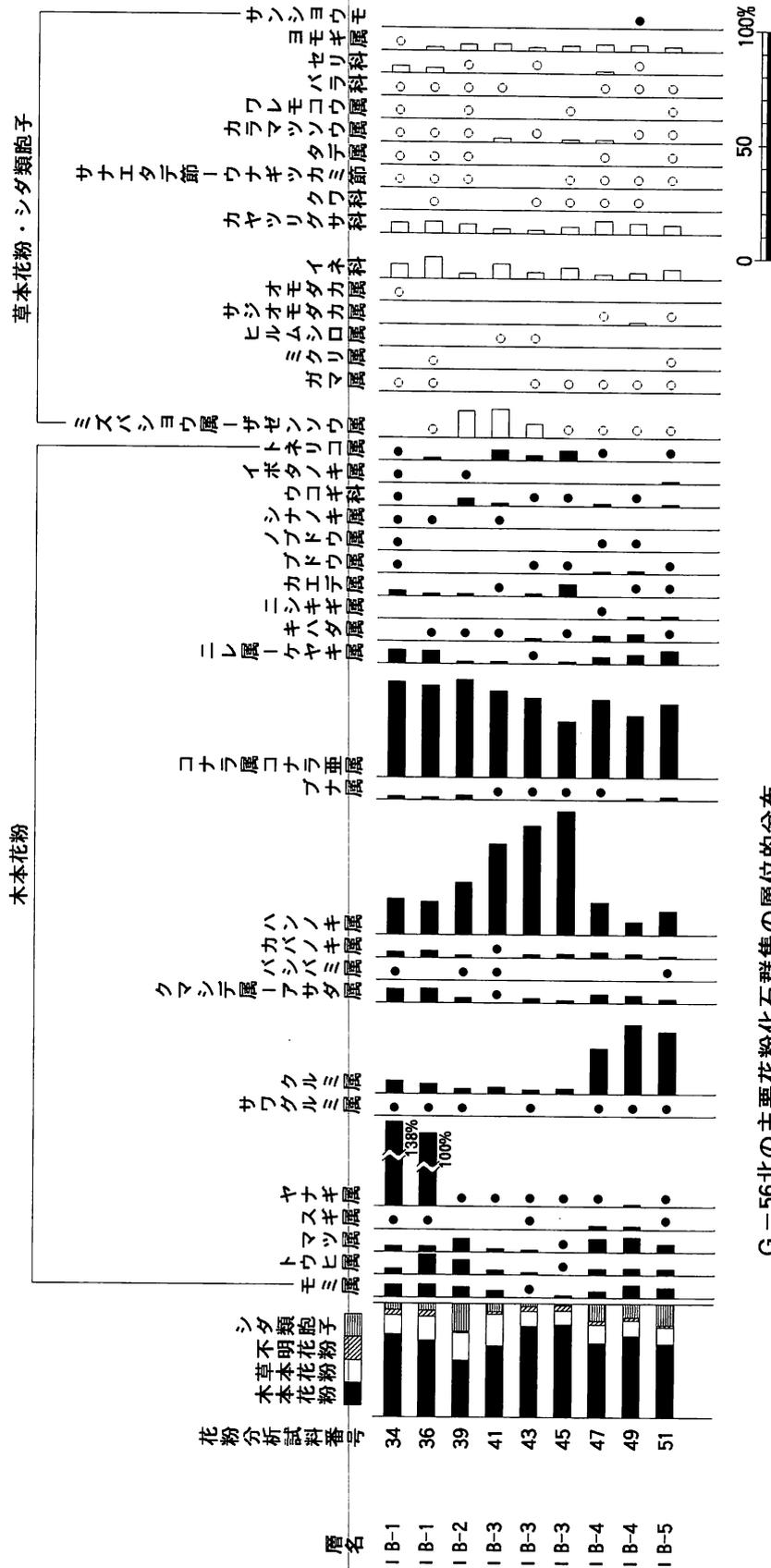
草本花粉では、イネ科・カヤツリグサ科・カラマツソウ属・ヨモギ属などが連続して検出され、この他にミズバショウ属—ザゼンソウ属・ガマ属・サジオモダカ属・ワレモコウ属・セリ科などが検出される。これらの種類の中でミズバショウ属—ザゼンソウ属が試料番号41～36で多産する。

〈1 地区低湿地・東 Loc. 1〉

試料番号134～130の4試料では、花粉化石がほとんど検出されない。また、試料番号128・127では、花粉の保存状態が極端に悪い。したがって、これら6試料では、花粉化石を統計的に扱うことを差し控える。それ以外の11試料では、比較的良好に検出される。

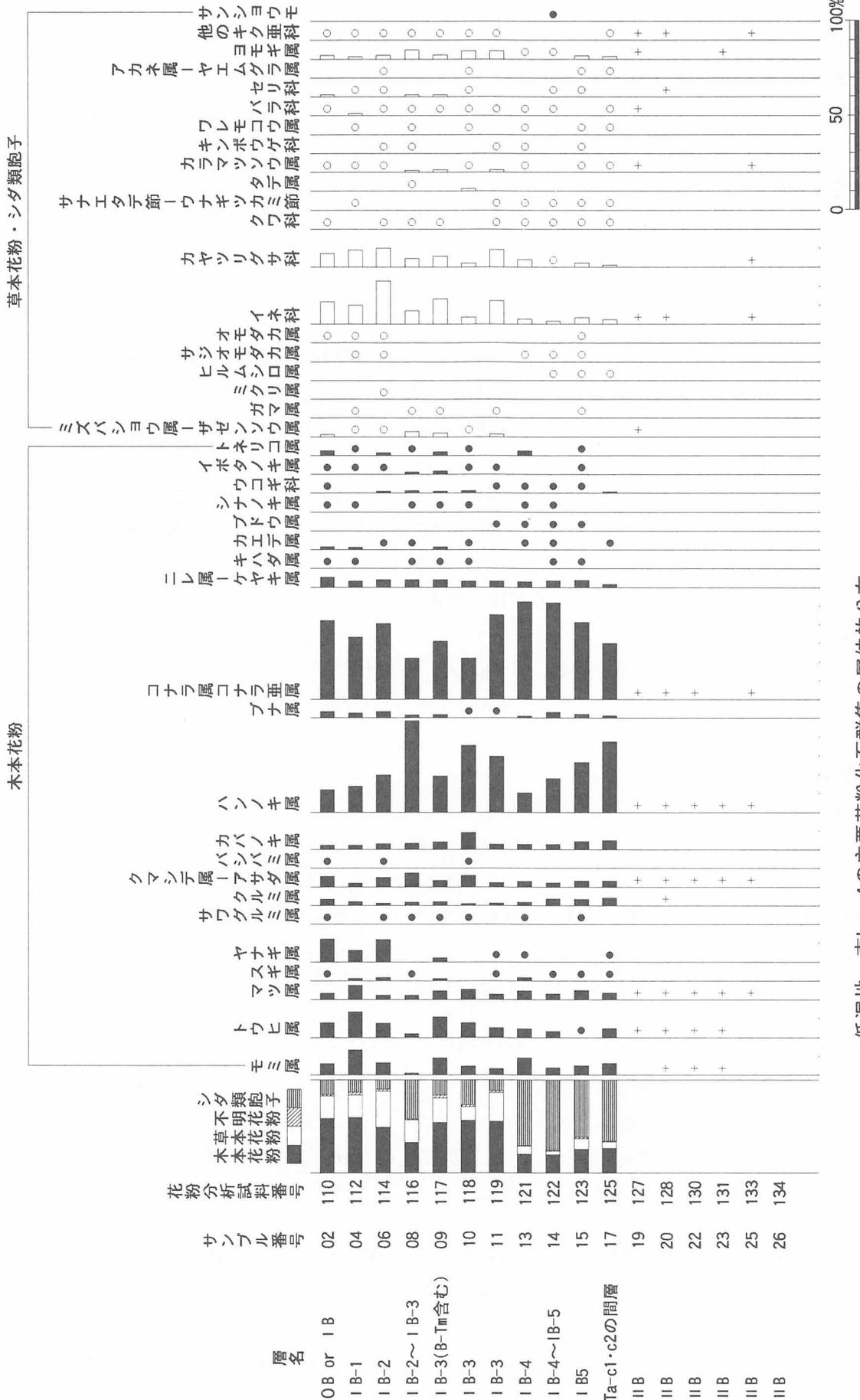
木本花粉では、コナラ亜属・ハンノキ属が多産し、モミ属・トウヒ属・マツ属・ヤナギ属・クルミ属・クマシデ属—アサダ属・カバノキ属・ニレ属—ケヤキ属・カエデ属・ウコギ科・トネリコ属などを伴う。これらの種類の中でヤナギ属が試料番号114～110で比較的多く検出され、ハンノキ属が上位に向かい増減を繰り返しながら減少傾向を示す。

草本花粉では、イネ科・カヤツリグサ科・ヨモギ属が比較的多く検出され、ミズバショウ属—ザゼンソウ属・ガマ属・ヒルムシロ属・オモダカ属・サナエタデ節—ウナギツカミ節・カラマツソウ属・



G-56北の主要花粉化石群集の層位的分布
 出現率は、木本花粉は木本花粉総数からヤナギ属を除く数を、草本花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉除く数をそれぞれ基数として百分率で算出した。なお、●は1%未満を示す。

図IX-5 G 56区北の主要花粉化石群集の層位的分布



図IX-6 低湿地部・東 Loc. 1 の主要花粉化石群集の層位的分布

低湿地・東Loc.1の主要花粉化石群集の層位的分布
出現率は、木本花粉は木本花粉総数からヤナギ属を除く数を、草本花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除く数をそれぞれ基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は花粉化石の保存状態が悪い試料で検出される種類を示す。

2. ユカンボシ C 15 遺跡の珪藻・花粉化石と植物珪酸体より見た環境変遷(1)

ワレモコウ属・セリ科などを伴う。

〈X-3 周溝〉

木本花粉のマツ属・ハンノキ属、草本花粉のサナエタデ節-ウナギツカミ節・ヨモギ属・他のキク亜科・タンポポ科、シダ類孢子が検出される程度であり、検出個体数も少ない。

(3) 植物珪酸体

結果を、表Ⅸ-9 と図Ⅸ-7~9 に示す。全体的に植物珪酸体の保存状態は良好である。

〈1 地区 G-56北〉

試料番号51~43では、タケ亜科・ヨシ属・イチゴツナギ亜科がわずかに認められる程度であり、検出個数が少ない。

植物珪酸体群集は、試料番号41と試料番号39~34で異なる。試料番号41では、タケ亜科とヨシ属の産出が目立つが、中でもタケ亜科が多産する。試料番号39~34になるとタケ亜科が減少し、ヨシ属が優占する。この他、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科が上位に向かい増加する傾向を示す。

〈1 地区低湿地・東 Loc. 1〉

試料番号134・133・131では、タケ亜科・ヨシ属・イチゴツナギ亜科がわずかに認められる程度であり、検出個数が少ない。植物珪酸体群集は、試料番号130・128と試料番号127~110で異なる。試料番号130・128では、タケ亜科が優占し、ヨシ属・ススキ属・イチゴツナギ亜科が随伴する。試料番号127~110になるとヨシ属が増加し、優占する組成となる。

〈X-3 周溝〉

タケ亜科が優占し、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科が随伴する。

4. 考察

(1) 低地の環境変遷

〈1 地区 G-56北〉

I B 5 層よりも下位の層準では、中~下流性河川指標種群を含む流水性種が多産する。したがって、当時は氾濫の影響により砂・礫が堆積する不安定な環境であったと推定される。

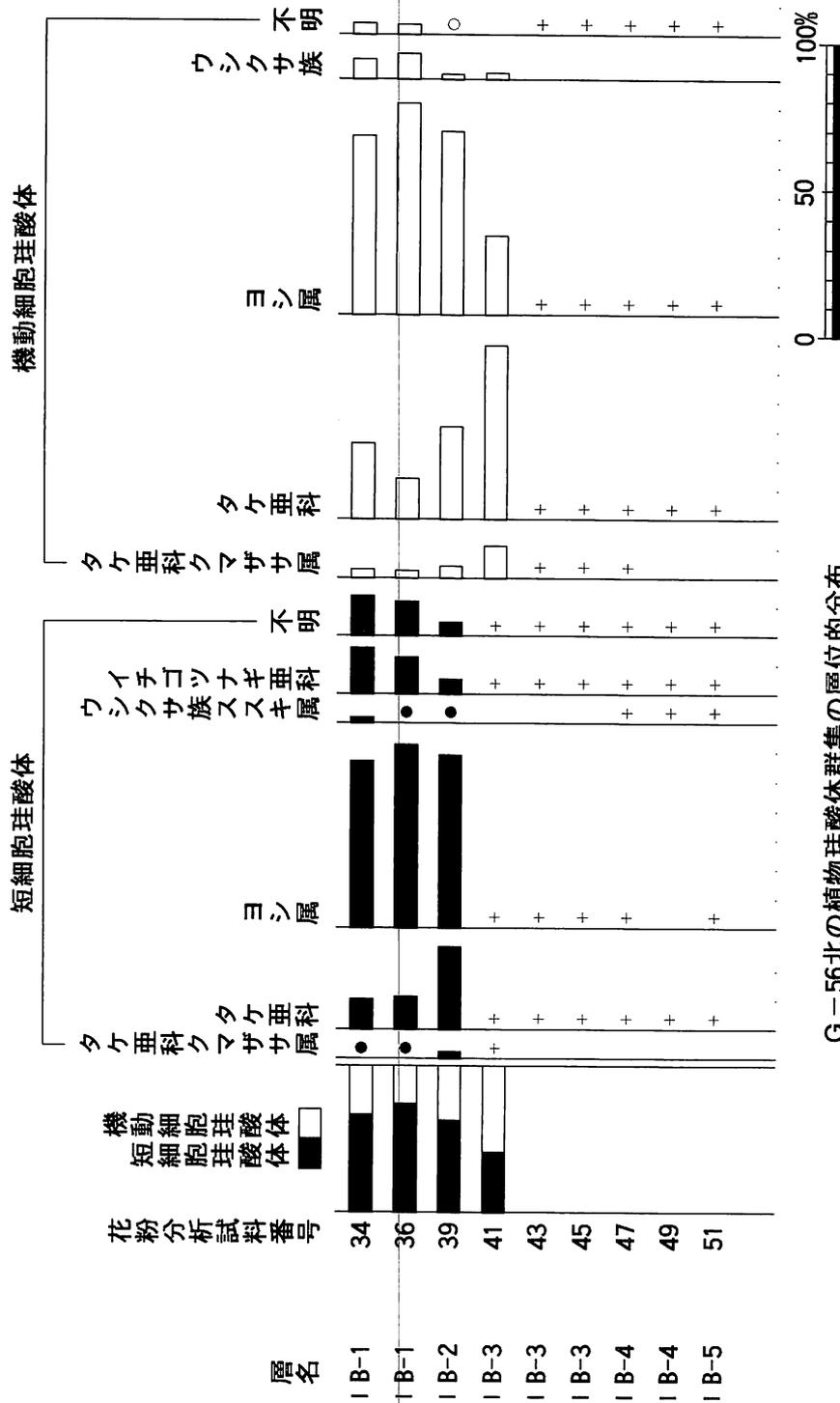
砂を含む泥炭層である I B 5 層・I B 4 層は下位の層準と比較して流水性種が減少するものの、引き続き流水性種の種数および割合とも高く、さらに流水不定性種や止水性種など複数の種類が混在している。したがって、縄文時代~統縄文時代頃、調査地点は、泥炭の堆積が進行する比較的安定した場所となったものの、河川等の氾濫の影響を受けていたことが推定される。なお、本層準で多産する木本花粉のクルミ属は河道周辺の植生を反映しており、そのような場所に生育していた母植物に由来する化石が流下・堆積したものとみられる。

I B 3 層における珪藻化石群集は上部と下部で異なり、下部で沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種・止水性種および真・好酸性種が多産し、上部で電気伝導度の低い貧栄養の泥炭池で特徴的に産出するとされる *Aulacoseira crassipunctata* が優占する。したがって、I B 3 層堆積期になると弱酸性を呈した沼沢地~湿地のような安定した水域となり、貧栄養な止水域へ変化したと推定される。I B 2 層~I B 1 層では、浮遊性の珪藻化石が多産するが、層準によって流水性種が多産した。これより、調査地点は、基本的には沼沢~湿地の様相を呈していたが、河川の氾濫など流水の影響を受けることがあったと推定される。

このように擦文文化期~アイヌ文化期の頃の調査地点は、泥炭の堆積が進行する安定な場所となっていたが、しばしば河川の氾濫の影響を受けることがあったと考えられる。このような沼沢地~湿地

表IX-9 植物珪酸体分析結果

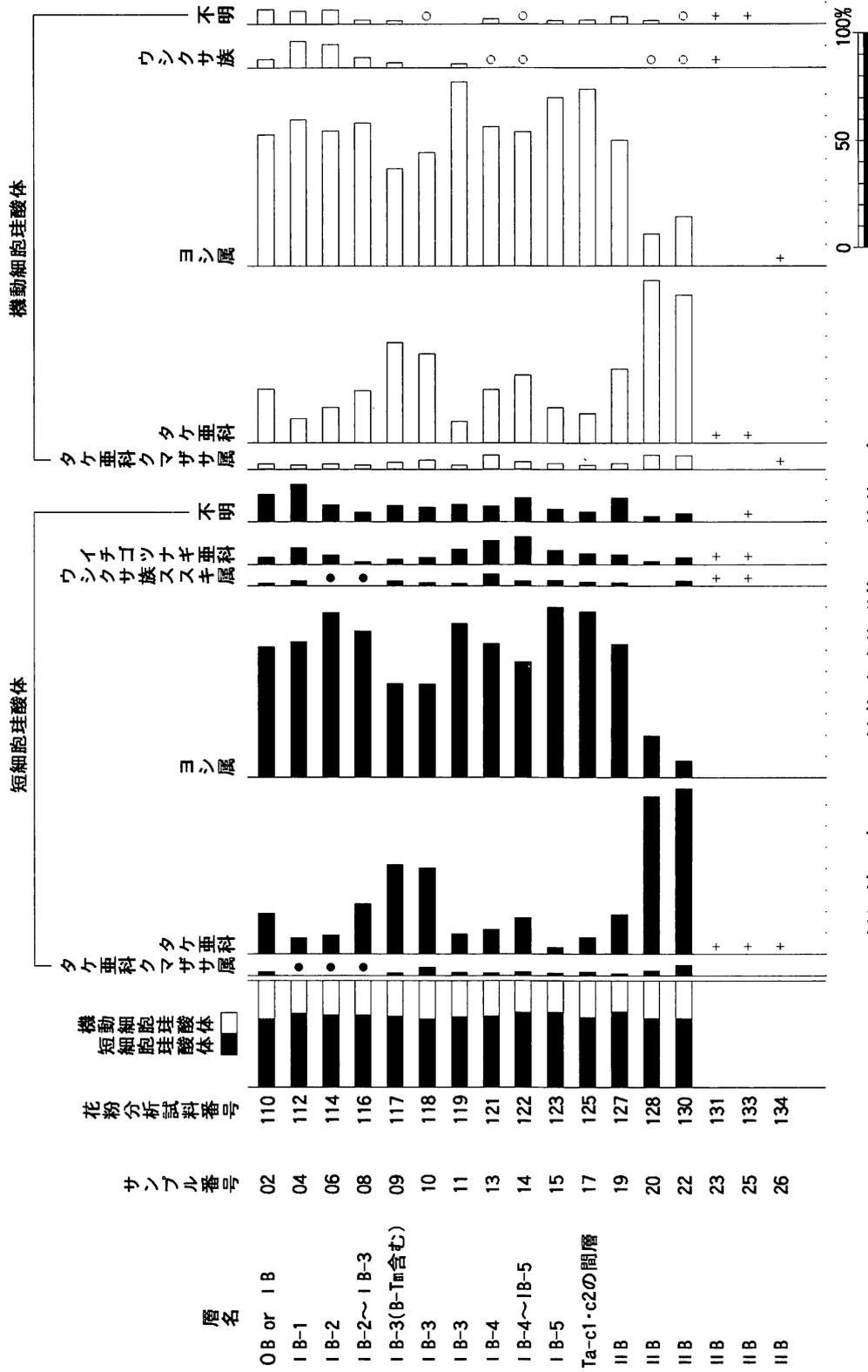
種 類	G-56北										低湿地・東Loc.1										X-3 周溝						
	34	36	39	41	43	45	47	49	51	110	112	114	116	117	118	119	121	122	123	125		127	128	130	131	133	134
イネ科薬部短細胞珪酸体																											
タケ亜科クマザサ属	2	2	5	6	-	-	-	-	-	4	2	1	2	3	8	3	3	5	3	4	3	5	10	-	-	10	
タケ亜科	22	38	61	41	13	8	4	3	4	45	20	23	53	103	83	20	28	46	9	17	51	162	159	2	1	2	187
ヨシ属	119	211	127	10	14	6	4	-	5	143	164	197	154	109	90	153	152	146	214	164	172	43	16	-	-	27	
ウシクサ族ススキ属	4	3	1	-	-	-	2	2	1	3	6	2	2	6	3	3	13	6	7	4	4	-	5	1	1	-	1
イチゴツナギ亜科	33	43	11	6	3	2	3	3	3	8	20	11	3	6	7	15	27	35	18	11	13	3	7	4	9	-	7
不明キビ型	16	19	3	1	3	-	1	2	3	10	20	10	4	10	4	6	11	13	10	5	24	-	4	-	1	-	7
不明ヒゲシバ型	8	14	6	5	2	-	-	-	-	17	11	9	5	6	5	7	4	14	5	3	6	4	-	-	1	-	15
不明ダンチク型	5	7	1	2	2	1	-	1	1	3	14	1	1	3	5	4	3	3	1	2	1	2	4	-	-	1	
イネ科薬身機動細胞珪酸体																											
タケ亜科クマザサ属	3	3	5	11	3	2	2	-	-	3	2	3	2	4	5	2	8	4	3	2	3	8	7	-	-	1	6
タケ亜科	27	16	40	60	12	3	7	6	7	33	13	20	26	58	48	11	30	36	19	15	39	91	78	1	2	-	84
ヨシ属	63	83	79	27	4	3	2	2	8	80	78	76	71	56	61	92	78	71	89	90	66	18	26	-	-	1	13
ウシクサ族	7	10	2	2	-	-	-	-	-	5	14	13	5	3	-	2	1	1	-	-	-	1	1	1	-	-	2
不明	4	4	1	1	1	1	1	1	1	5	9	7	8	2	2	1	-	3	1	2	2	4	2	1	1	-	2
合 計	209	337	215	71	37	17	14	11	17	233	257	254	224	246	205	211	241	268	267	210	274	219	205	7	13	2	255
イネ科薬部短細胞珪酸体	104	116	127	101	20	9	12	9	20	130	114	120	106	123	115	107	120	113	113	109	112	120	113	3	3	2	107
イネ科薬身機動細胞珪酸体	313	453	342	172	57	26	26	20	37	363	371	374	330	369	320	318	361	381	380	319	386	339	318	10	16	4	362
総 計																											



G-56北の植物珪酸体群集の層位的分布

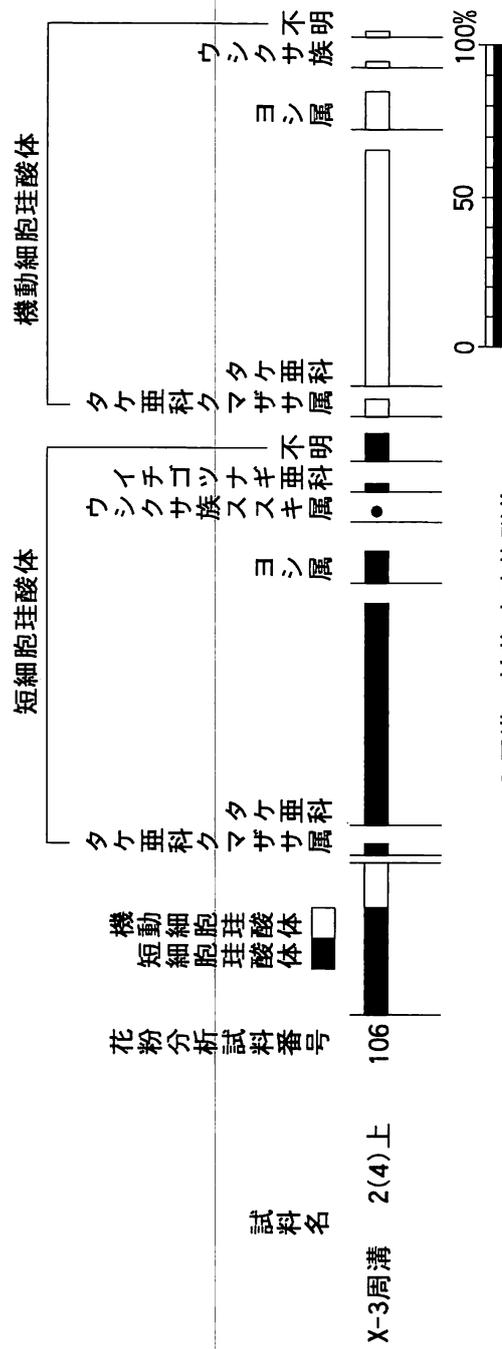
出現率は、イネ科葉身短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類、+はイネ科葉身短細胞珪酸体で200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体で100個未満の種類を示す。

図IX-7 G56区北の植物珪酸体群集の層位的分布



低湿度・東Loc.1の植物珪酸体群集の層位的分布
 出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉部機動細胞珪酸体の総数を基数として
 百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類、+はイネ科葉部短細胞珪酸体で200個
 未満、イネ科葉部機動細胞珪酸体で100個未満の試料で検出された種類を示す。

図IX-8 低湿度部・東 Loc. 1 の植物珪酸体群集の層位的分布



X-3周溝の植物珪酸体群集

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●は1%未満の種類を示す。

図IX-9 X-3周溝の植物珪酸体群集

には、ミズバショウ属—ザゼンソウ属、ガマ属、ヒルムシロ属、ヨシ属やタケ・ササ類などのイネ科、カヤツリグサ科、カラマツソウ属、セリ科、ヨモギ属などの草本類が生育していたとみられる。

〈低湿地・東 Loc. 1〉

II B 層下部（サンプル26~24）では、中～下流性河川指標種群を含む流水性種、流水不定性種、止水性種などがほぼ同じ割合で混在する。このような群集組成は、氾濫堆積物や人為的攪乱が及んでいる水田などの堆積物で認められる場合が多い。今回の場合、前者に由来するものと判断される。すなわち、当時の調査地点は河川の氾濫の影響を受ける場所であったとみられる。II B 層中部（サンプル23・22）は、珪藻化石・花粉化石ともほとんど検出されなかった。植物珪酸体でタケ亜科が検出されることから、少なくとも周辺にはタケ・ササ類などが生育していた可能性がある。II B 層上部（サンプル20・19）になると、耐乾性の強い陸生珪藻の A 群の一種である *Hantzschia amphioxys* が特徴的に検出され、さらに沼沢湿地付着生種群（安藤、1990）を含む流水不定性種が産出する。また、植物珪酸体ではタケ亜科が優占する群集からヨシ属が優占する群集へ変化する。したがって、調査地点は、しばしば乾燥することがある湿地のような場所であったが、周辺では次第にヨシ属が繁茂するようになったと思われる。このように II B 層が堆積した縄文時代頃、低湿地部は氾濫の影響が弱まり、ヨシ属などが生育する沼沢地のような安定した環境へ変化したのであろう。

Ta - c₁ と c₂ の間層（試料番号85）は、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種や酸性種と止水性種が多産する。したがって、周辺は弱酸性を呈した沼沢地のような環境であったと考えられる。このような場所には、ヒルムシロ属、ヨシ属などのイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などの草本類が生育していたと考えられる。

I B 層は、中～下流性河川指標種群（安藤、1990）を含む流水性種が多産する群集と淡水浮遊性種が多産する群集が交互に認められる特徴がある。また、水素イオン濃度は全般的に真・好アルカリ性種が優占するが、真・好酸性種の割合も高い。浮遊性種の割合が高い層位は、I B 5～I B 4（試料番号83~81）、I B 3 層中部～上部（試料番号77）、I B 1 層（試料番号72）である。これに対して、I B 3 層下～中部（試料番号79・78）、I B 2 層（試料番号76・74）、0 B or I B 層（試料番号70）では、止水性種の割合が低くなり、流水性種の出現率が高くなる。したがって、弱分解質～分解質の泥炭層である I B 層が堆積する頃になると低湿地部は、基本的には弱アルカリ性～弱酸性を呈した池沼のような安定した場所であったが、河川の氾濫や流れ込みの影響を受けることがあったと考えられる。また、このような低湿地にはミズバショウ属—ザゼンソウ属、ガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ヨシ属などのイネ科、カヤツリグサ科、カラマツソウ属、セリ科、ヨモギ属などが生育していたと考えられる。

〈X-3 周溝〉

埋積物中からは、花粉化石がほとんど検出されない。一方、植物珪酸体ではヨシ属が低率であり、タケ亜科珪酸体が優占する組成が得られた。調査地点が微高地に位置することを考慮すると、ヨシ属珪酸体の供給量が少なく、相対的にタケ亜科珪酸体が増加したのではないだろうか。このような状況を考慮すると、微高地には比較的乾いた状態であり、少なくともタケ・ササ類が生育していたと考えられる。このような環境であったために花粉化石が分解・消失した可能性がある。

(2) 森林植生

G-56北および低湿地・東 Loc. 1 における花粉化石群集は、コナラ亜属が多産することが特徴である。随伴する種類もヤナギ属・クルミ属・カバノキ属・ハンノキ属・ニレ属—ケヤキ属・カエデ属・ウコギ科・イボタノキ属・トネリコ属といった落葉広葉樹の種類が多い。したがって、低地周辺

の台地上や低地内の微高地には、コナラ亜属を中心とした落葉広葉樹からなる林分が存在したことが推定される。これら要素のうち、ヤナギ属・クルミ属・カバノキ属・ハンノキ属・カエデ属・トネリコ属などは河畔林の構成要素でもあり、当時もそのような場所に分布していた可能性がある。花粉化石群集の層位分布において、これらの種類のうち、ハンノキ属、ヤナギ属などは層位的に急激な変化を示している。I B 5 層より下位と I B 3 層ではハンノキ属が多産する。I B 2 層上部ではヤナギ属が多産する傾向にあり、特に G-56 北で顕著である。このような産状は局所的な植生を強く反映した結果とみられ、これら 2 種類が調査地点近辺に分布していたことが推定される。したがって、縄文時代頃および擦文文化期の調査地点近辺にはハンノキ類が、アイヌ文化期にはヤナギ類がそれぞれ生育していた可能性がある。なお、G-56 北 I B 5 層～I B 4 層で多産しているクルミ属は集水域の植生を反映しており、そこから花粉化石が流下・堆積したと考えられる。

花粉化石群集で無視できないほど出現しているモミ属・トウヒ属・マツ属などの針葉樹は、台地上や後背丘陵地の森林構成種であったとみられる。

5. まとめ

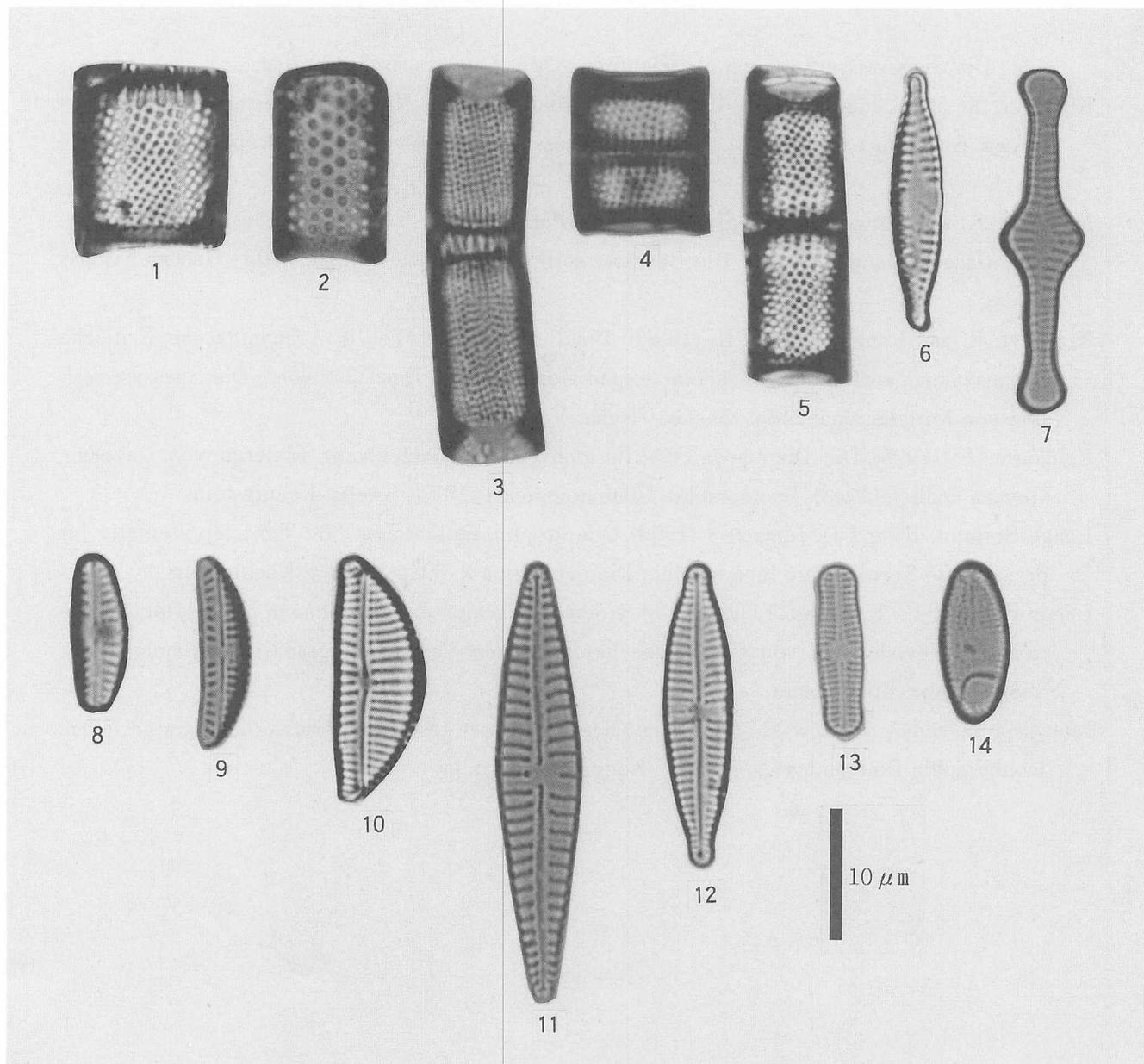
今回、G-56 北、低湿地部・東 Loc. 1、X-3 周溝における珪藻化石・花粉化石・植物珪酸体の産状から遺跡周辺の環境について若干の検討を行った。その結果、コナラ亜属など落葉広葉樹を中心にモミ属・トウヒ属・マツ属などの針葉樹を交えるような植生が存在しており、時期により低地にハンノキ類・ヤナギ類・クルミ属などが生育していた可能性があることが推定された。また、湿地にはミズバショウ属・ザゼンソウ属・ガマ属・イネ科・カヤツリグサ科・セリ科・ヨモギ属などの草本類が生育していたことが推定され、これらの草本類が泥炭の形成に関与していると思われる。

一方、調査区内部で微高地を挟んで認められる低湿地部は、氾濫の影響を受ける不安定な時期、沼沢地～湿地のような時期、池沼のような安定した時期と変遷しており、常に安定している場所ではなかったことが明らかにされた。さらに調査区両端に認められる低湿地部は、例えば縄文時代頃、G-56 北は氾濫の影響を受ける不安定な環境であったのに対して低湿地部・東 Loc. 1 は池沼のように安定した環境であったなど、同時期でもその環境が異なっていたことが想定される。このように調査地域の環境は、時系列的にも空間的にも変化に富んでいることから、調査地点周辺の環境変遷は、現在調査中の他地点の調査結果を踏まえた上で、詳細な検討を加えていきたいと考えている。

〈引用文献〉

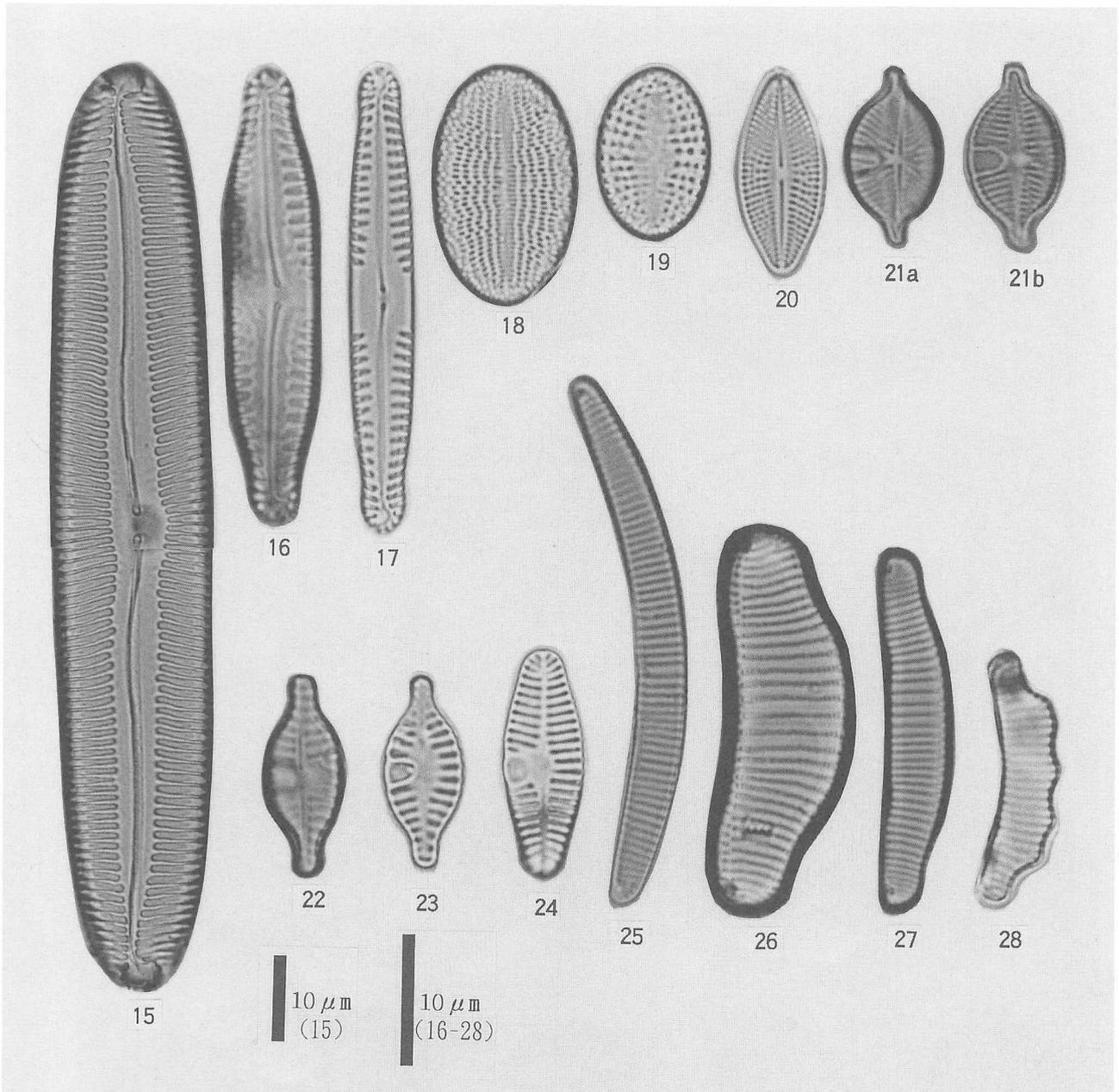
- Asai, K. and Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, p. 35-47.
- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. *東北地理*, 42, p. 73-88.
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. *珪藻学会誌*, 6, p. 23-45.
- 近藤鍊三・佐瀬 隆 (1986) 植物珪酸体分析, その特性と応用. *第四紀研究*, 25, p. 31-64.
- Krammer, K. (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. *BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA*, BAND 26, p.1-353, BERLIN・STUTTGART.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986) *Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1*

- von : Die Süsswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von : Die Süsswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2/3 von : Die Süsswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnantheaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von : Die Süsswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
- Reichardt, E. (1995) Die Diatomeen (Bacillariophyceae) in Ehrenbergs Material von Cayenne, Guyana Gallica (1943). *Iconographia Diatomologica* 1, 107p., Koeltz.-Koenigstein.
- Lange-Bertalot, H. and D. Metzeltin (1996) Oligotrophie-Indikatoren. 800 Taxa repräsentativ für drei diverse Seen-Typen. *Iconographia Diatomologica* 2, 390p., Koeltz.-Koenigstein.
- Lange-Bertalot, H., K. Kulbs, T. Lauser, M. Noerpel-Schempp & M. Willmann (1996) Dokumentation und Revision der von G. Krasske beschriebenen Taxa. *Iconographia Diatomologica* 3, 358p., Koeltz.-Koenigstein.
- Metzeltin, D. and A. Witkowski (1996) Diatomeen der Baren-Insel. Süsswasser- und marine Arten. *Iconographia Diatomologica* 4, 287p., Koeltz.-Koenigstein.



1. *Aulacoseira italica* var. *valida* (Grun.) Simonsen (試料番号74)
2. *Aulacoseira crassipunctata* Krammer (試料番号30)
3. *Aulacoseira italica* (Ehr.) Simonsen (試料番号35)
4. *Aulacoseira alpigena* (Grun.) Krammer (試料番号26)
5. *Aulacoseira ambigua* (Grun.) Simonsen (試料番号42)
6. *Fragilaria vaucheriae* (Kuetz.) Petersen (試料番号46)
7. *Tabellaria flocculosa* (Roth) Kuetzing (試料番号26)
8. *Cymbella sinuata* Gregory (試料番号40)
9. *Amphora pediculus* (Kuetz.) Grunow (試料番号36)
10. *Cymbella silesiaca* Bleisch (試料番号40)
11. *Gomphonema gracile* Ehrenberg (試料番号35)
12. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (試料番号40)
13. *Navicula heufleriana* var. *septentrionalis* Hustedt (試料番号42)
14. *Navicula mutica* Kuetzing (試料番号30)

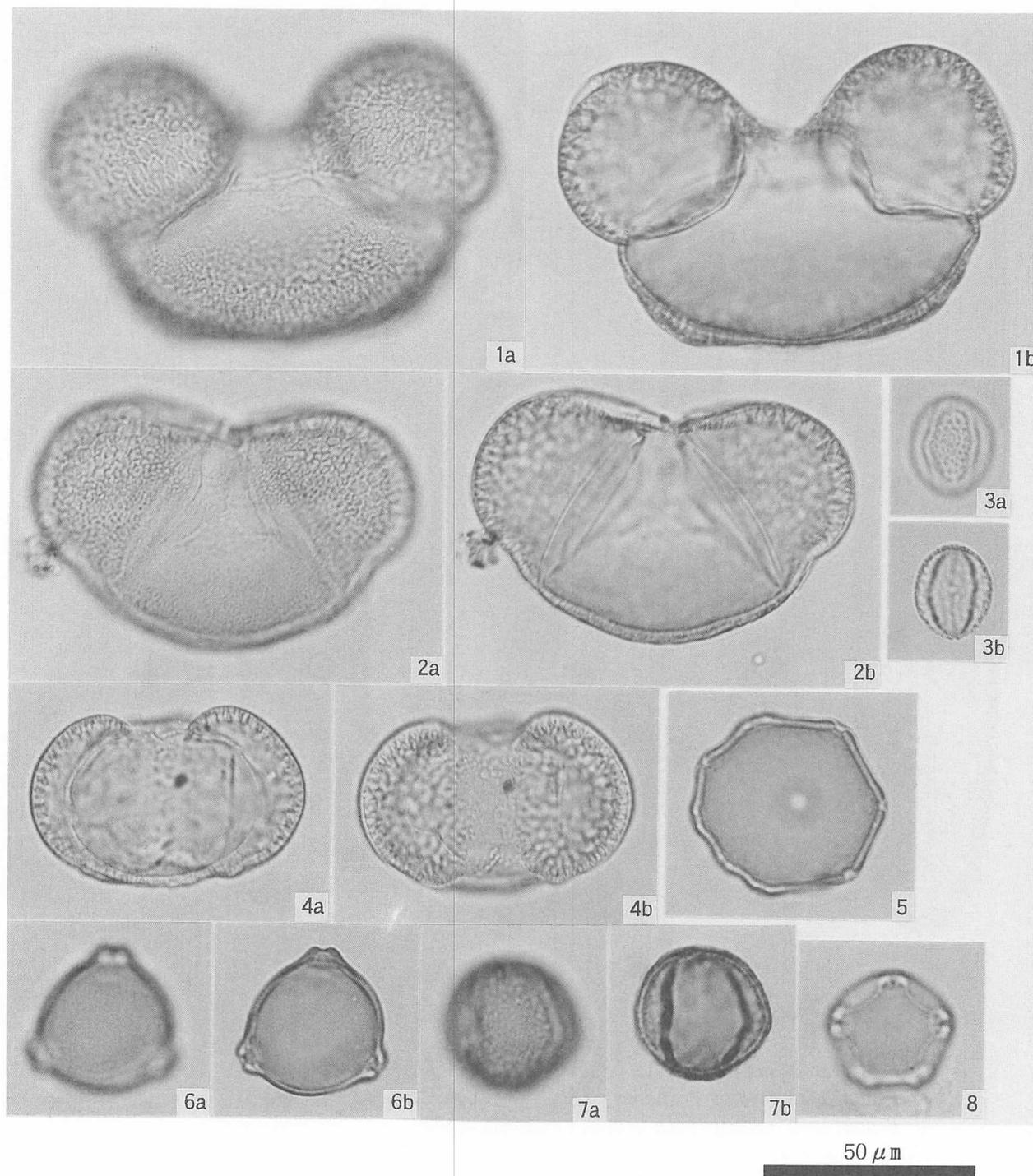
図IX-10 珪藻化石 顕微鏡写真(1)



15. *Pinnularia viridis* (Nitz.) Ehrenberg (試料番号35)
16. *Pinnularia nodosa* Ehrenberg (試料番号40)
17. *Pinnularia subcapitata* Gregory (試料番号40)
18. *Cocconeis placentula* (Ehr.) Cleve (試料番号46)
19. *Cocconeis pseudothumensis* A. Mayer (試料番号76)
20. *Achnanthes clevei* Grunow (試料番号44)
21. *Achnanthes peragalli* Brun et Heribaud (試料番号36)
22. *Achnanthes rostrata* Oestrup (試料番号30)
23. *Achnanthes rostrata* Oestrup (試料番号46)
24. *Achnanthes lanceolata* (Breb.) Grunow (試料番号46)
25. *Eunotia bilunaris* (Ehr.) Mills (試料番号30)
26. *Eunotia praerupta* Ehrenberg (試料番号30)
27. *Eunotia pectinalis* var. *minor* (Kuetz.) Rabenhorst (試料番号33)
28. *Eunotia cristagalli* Cleve (試料番号40)

図IX-11 珪藻化石 顕微鏡写真(2)

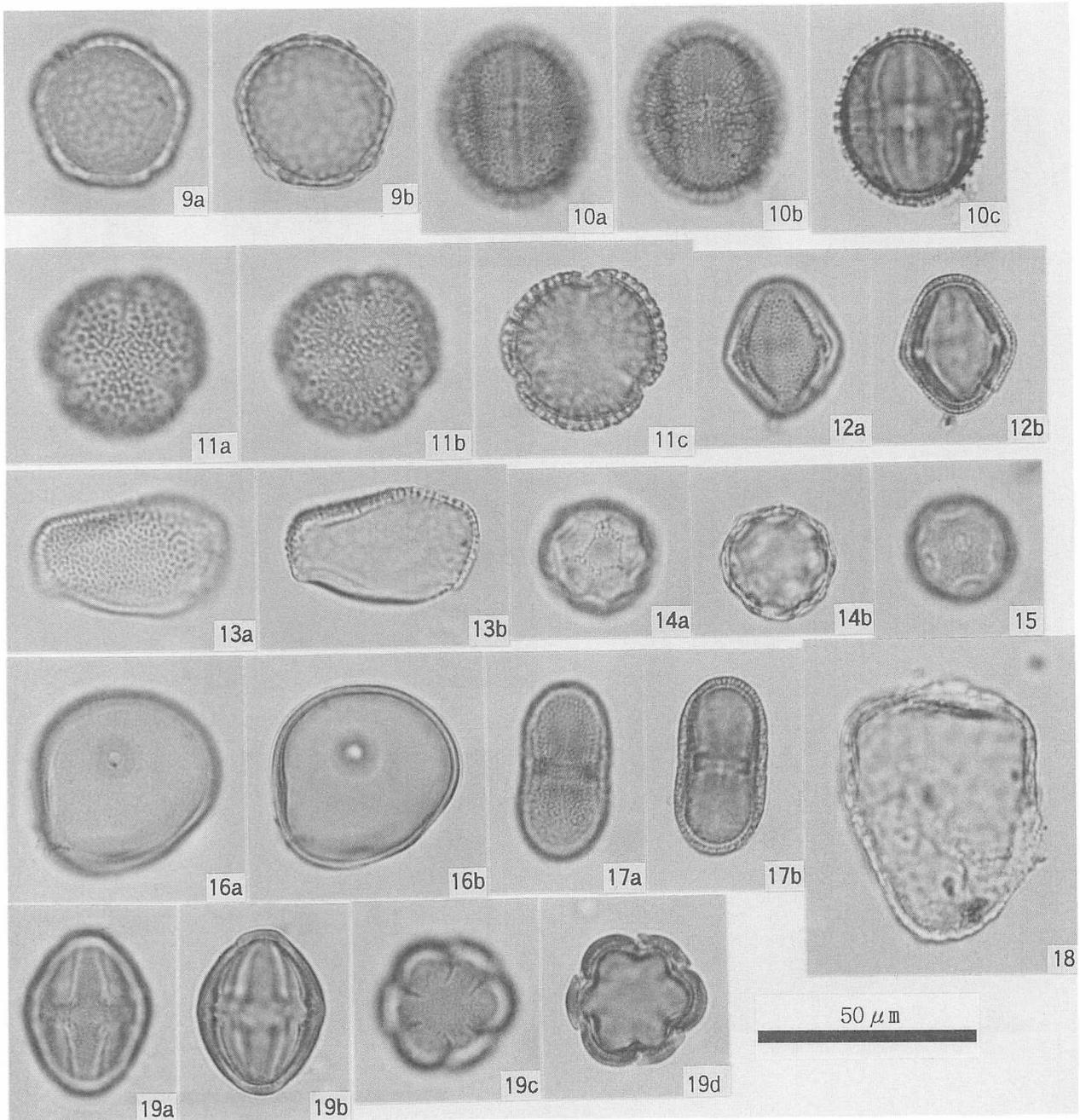
2. ユカンボシ C 15 遺跡の珪藻・花粉化石と植物珪酸体より見た環境変遷(1)



- 1. モミ属(試料番号112)
- 3. ヤナギ属(試料番号34)
- 5. クルミ属(試料番号112)
- 7. コナラ属コナラ亜属(試料番号41)

- 2. トウヒ属(試料番号112)
- 4. マツ属単維管束亜属(試料番号112)
- 6. カバノキ属(試料番号41)
- 8. ハンノキ属(試料番号41)

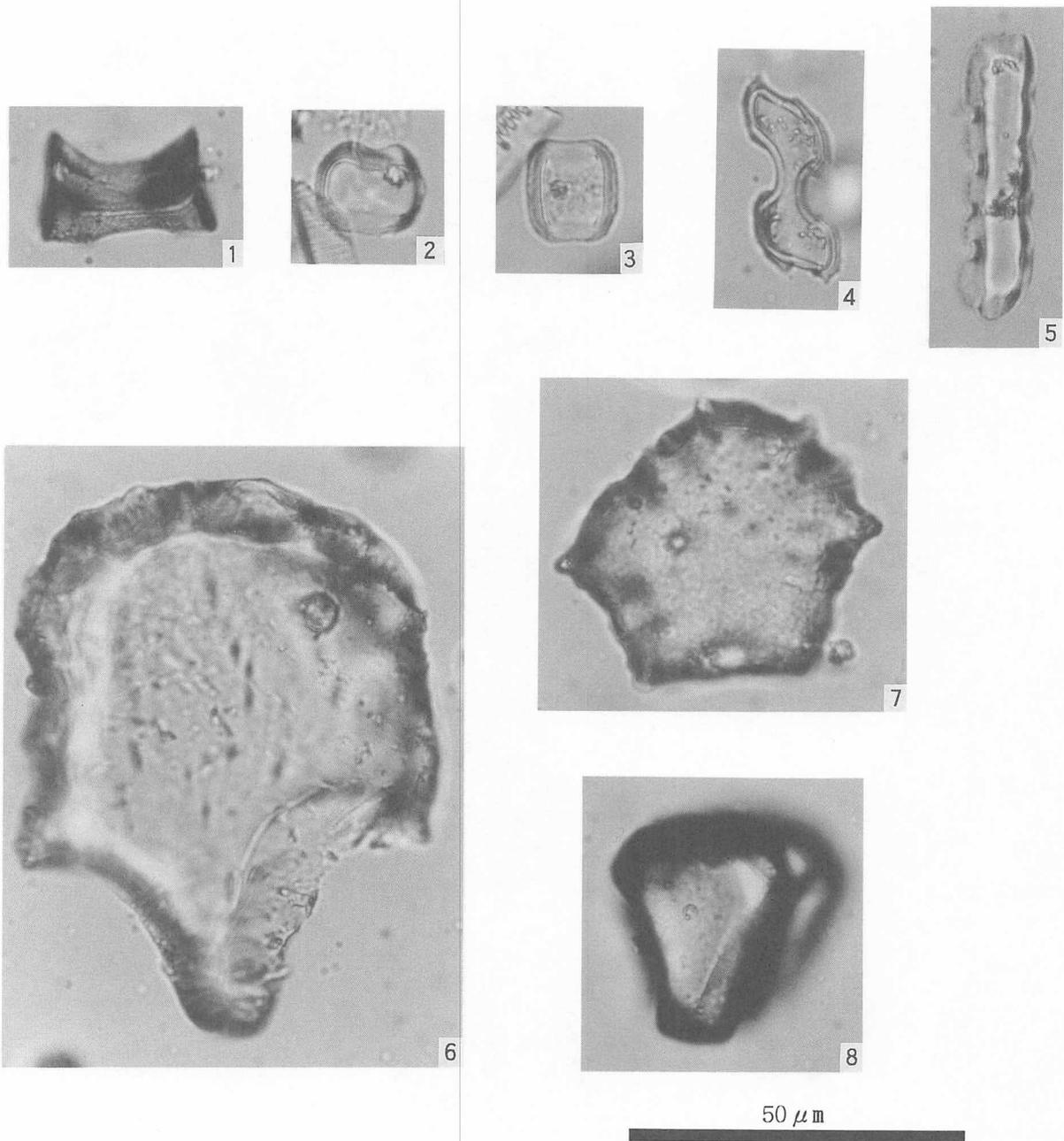
図IX-12 花粉化石 顕微鏡写真(1)



- | | |
|----------------------------|----------------------|
| 9. ニレ属-ケヤキ属(試料番号34) | 10. キハダ属(試料番号41) |
| 11. イボタノキ属(試料番号41) | 12. ウコギ科(試料番号41) |
| 13. ミズバショウ属-ザゼンソウ属(試料番号41) | 14. サジオモダカ属(試料番号112) |
| 15. カラマツソウ属(試料番号41) | 16. イネ科(試料番号41) |
| 17. セリ科(試料番号41) | 18. カヤツリグサ科(試料番号41) |
| 19. ワレモコウ属(試料番号41) | |

図IX-13 花粉化石 顕微鏡写真(2)

2. ユカンボシ C 15遺跡の珪藻・花粉化石と植物珪酸体より見た環境変遷(1)



- | | |
|---------------------------|--------------------------|
| 1. クマザサ属短細胞珪酸体(試料番号106) | 2. ヨシ属短細胞珪酸体(試料番号39) |
| 3. ヨシ属短細胞珪酸体(試料番号117) | 4. ススキ属短細胞珪酸体(試料番号117) |
| 5. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(試料番号39) | 6. ヨシ属機動細胞珪酸体(試料番号117) |
| 7. クマザサ属機動細胞珪酸体(試料番号39) | 8. ウシクサ族機動細胞珪酸体(試料番号106) |

図IX-14 植物珪酸体 顕微鏡写真

X 成果と問題点

1. 「ユカンボシ」の呼称について

遺跡名称にも使われている「ユカンボシ」の地名解釈で、現在広く引用されているのは長見義三の説である。これはアイヌ語の「yuk-ampa-usi」と解き、「シカ・がたくさんいる・所」と説明するものである。長見はさらに、「…往昔、この川辺の大湿原にシカが春から夏に濃い群れをなしていたのだろう。…」と付け足している（1976年『ちとせ地名散歩』）。また、『増補千歳市史』では「yuk-kam-pu-us-i」[シカ・肉・庫・多い・所]と解してある（1983年）。

しかしながら、松浦武四郎のものをはじめとするいくつかの地図、地名辞典をみても「シカ・がたくさんいる・所」という説明はもっとも新しく表出された長見のものにしかなく、さらに北海道の全体にわたるアイヌ語地名においても同音、同形、同意の地名は見いだしがたく、納得しがたい。

ここでは「ユカンボシ」に相当する地名表記のみられる記録、地図、地名辞典類のいくつかを、年代の新しいものから順にならべ異（古）称を示すなかで、本来的な語はどのようなものと推定できるかについて記しておきたい。

なお現在ユカンボシと呼ばれる地名はユカンボシ川のみである。この川は、恵庭公園の西端付近に源泉があり、ほぼ6kmほど東に流れ、河川改修の結果今では市道「南24号」が「長都川」と交差するところで合流している。自然状態では、例えば100年ほど昔は、オサツ沼の西の広がりの中に直接流れ込んでいた。つまり、河口部は沼の一部であった。あるいは水位がいくぶん低下すると、ユカンボシC15遺跡の中央部を北へ抜け、大きく東に曲がりオサツ川に合流していたものとみなされる。

「ユカンボシ」地名の初出は、1920年（大正9年）の「大日本帝国陸地測量部」発行の5万分の1地形図『漁』（いざり）である（図I-3上）。これでは「ユカンボシ川」の名称となっており、中流域には「ユカンボシ」の地名も描き込んである。以後5万分の1地形図では、1936年（昭和11年）も、現在も川の名称は「ユカンボシ」である。1936年（昭和11年）の地形図（図I-3下）にも川と鉄道が交差するあたりに「ユカンボシ」の地名があるが、ここらは現在では「戸磯」（といそ）に変わっている。

さて5万分の1地形図で古いものはどのようになっているかということ、1910年（明治43年）「陸地測量部」発行の『漁』（いざり）には、「イカンボシ川」があり上流部には「イカンボシ」の地名もみられる（図I-2下）。さらに古いのは1896年（明治29年）「陸地測量部」製版の「北海道假製五万分之一図」『長都』（おさつ）である。これは「假製」という制約もあって、湖岸線や河川に比べて山地形の表示は概略的なものである。行政の区画として、右下に「千歳（チトセ）村」、左端に「漁（イザリ）村」、中央部に「長都（オサツ）村」が表示してある。この図の地名表記はアイヌ語を片仮名・漢字で写したもののばかりである。「長都（オサツ）村」のなかに、川に沿うように「エカンプウシ」の表示がある（図I-2上）。

この「假製五万分之一図」と兄弟のような関係にある1894年（明治27）年3月、北海道庁『胆振国千歳郡千歳原野区画図』（25000分の1）（恵庭市郷土資料館蔵）ではユカンボシ川と「オサツ川」との合流地点は明瞭ではないが、この図には中流部分に川に沿って「エカンプウシ」の表記がある。

それでは永田方正『北海道蝦夷語地名解』（初版明治24年；1891年）の復刻版（1984年）ではどのようになっているのか。残念ながら、ここで話題にしている「胆振国千歳郡」の地名では「オサツ」はあるが「ユカンボシ」に相当するものは見あたらない。巻末の折り込み地図でも「オサツ」はあるが「ユカンボシ」に相当するものはない。そのような小さな地名であったということであろう。ある

1. 「ユカンボシ」の呼称について

いは交通路が河川から陸上に変わりつつあり、その重要性が低下していたのかもしれない。

つぎには松浦武四郎の諸記録に目を通して置く。

『丁巳第十五巻由宇発利日誌』では「ヲサツ、此処に鮭番屋一棟有。其処よりチトセ並にイサリフトえ歩行道有るよし也。当時ユウハリ蝦夷八軒、……。扱此処より少し上がりて右の方小川有。字イカンフレと云よし也。……。」とある。この「イカンフレ」には「イカンヘツ」の注釈がある。

『戊午日誌第三十三巻東西新道誌』では「イカンブシ」について「小川にして皆礁砂也。急流。其名義、久敷振にて対面して喜びしと云義。イカンフの訛りなるよし。…」と説明してある。これは1858年（安政5年）夏に現在の国道36号にはぼ近い道筋を西から東へ歩いた時のものであり、道路と川とが交わるあたりでの伝聞なのである。このなかで「新道」という表現をしているのは、その前年に幅2間で開削、改修なされたことの反映である。この『戊午新道日誌』の地図部分では「イカンボシ」とある。なお、『午十番手控』には「ヘカンブシ」と書いてあるという。

松浦武四郎と前後する時期の記録である『入北記』（玉蟲左太夫、安政4年の見聞録。1992年稲葉一郎解説）では、松浦武四郎が「新道」と記した道筋を、武四郎とは逆方向に進んで、千歳から島松へむかうなかで（9月9日）「……イカンブシト云フ処ニ至リ、小憩所アリ……」とみえる。この帰路（12日）は「……（島松から2里半で）イカンフシニテ小憩ス。……」とある。

1822年頃（文政5年）の間宮林蔵の地図と伝えられている『蝦夷全図』は内陸の河川湖沼など詳細なものである。尺があまりにも大きすぎて地名が読みとれないが、地名に関しては、部分拡大図とでもいえるものが小林和夫作成で示してある。この小林の付録地名図には「ヲサツ」の西隣に「井カンブシ」が描いてある。そして、この地図では「井カンブシ」川は直接沼に注いでいる。

1821年頃（文政4年）の伊能忠敬『蝦夷国測量図』は、詳細な図であるが、内陸は河川湖沼の記入がなく、地名が少ない。さいわい勇払、石狩間の山道の書き込みがあり、千歳、恵庭あたりは詳しいのだが、ここで話題にしている部分の地名は読み取れない。

以上のような呼称を古いものから並べると次のようになる。「井カンブシ」「イカンブシ」「イカンフ」「ヘカンブシ」「イカンボシ」「イカンフレ」「イカンヘツ」「エカンブウシ」「イカンボシ」「ユカンボシ」。これを見ると、話す方、聞く方、書く人、読む人ともに「○カン○○」は共通している。そしてこれらの語が川の名称であることは、一貫している。地名の意味（語義）は松浦武四郎の「イカンブシ」「久敷振にて対面して喜びしと云義。」しか伝わっていない。

呼称の変遷をたどると「ユカンボシ」は和語変称の結果であって、もっとも新しいものである。したがって、「鹿」に関連するものとはみなしがたい。地名の意味がすっかり失われ、川の名称にもかかわらず川のどのような特色でもって（地形、特産物）呼んだのかが明らかでない。つまり地名の発祥地とでもいうべきものが不明瞭なのである。「○カン○○」の語形から思いつくのは「ペカンベウシ」である。しかし、「ユカンボシ」と呼ばれている地名のもとというには、「ペカンベ（ヒシ）の成育しうる地形条件」の吟味、P音の脱落の説明、伝承語義との連絡などに別途説明が必要である。

（西田 茂）

引用、参考文献

- 松浦武四郎著、高倉新一郎校訂、秋葉実解説 1982年 『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』 下
松浦武四郎著、高倉新一郎校訂、秋葉実解説 1985年 『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』 中
高倉新一郎編著 1987年 『北海道古地図集成』
佐々木利和編 1988年 『アイヌ語地名資料集成』

2. II 黒層遺物とその遺構について

萩ケ岡 1、2 式期の遺構：図 X-1-②に縄文時代中期前半Ⅲ群 a 類期の住居と土壌を示した。本文中で示したとおり、H-4、P-1、P-19、P-32について、それぞれの時期を決定する遺物中に共通する土器がある。従ってこれらを遺構のセットとして捉える事ができる。共通する土器とは、図 1 に拓影で示した土器 a₁ (図 VI-35-1) と土器 a₂ (図 VI-35-10)、土器 b (図 VIII-23-2) のうち 2 ないしは 1 種類である。a₁ と a₂ はいずれも径 2mm ほどの半截竹管による連続した押し引きを隆帯に施し、胎土と焼成についてよく似る。別個体だが、同一時期の土器と判断した。また a₁ と a₂、b は包含層からも出土している。その出土位置について遺構配置図に示した。a₁ と a₂ を 'a'、土器 b を 'b' として表した。すると 4 つの遺構に囲まれた台地上平坦部に分布が集中することがわかる。焼土の集中 A [F-32、40、47、48、50] (VI 章-4 参照) や図 VIII-37 に示した包含層出土石核の分布もほぼ合致する。当時、住居の南側に焼土が広がり、3 基の土壌を利用したことが伺える。台地平坦面には小型の円形土壌 P-6、7、13 が分布する。本調査区内では定形的な遺構である。先の 4 遺構と时期的に同一かどうか遺物上からは判断できない。さらに、東側の一段低位な段丘面の II 黒層焼土群付近に土器 a の出土がある。関連して、太矢印で示した位置から北海道式石冠 (縄文時代円筒土器文化特有の遺物) が出土している事を付記する。以上、同一時期の空間利用モデルとして提示する。

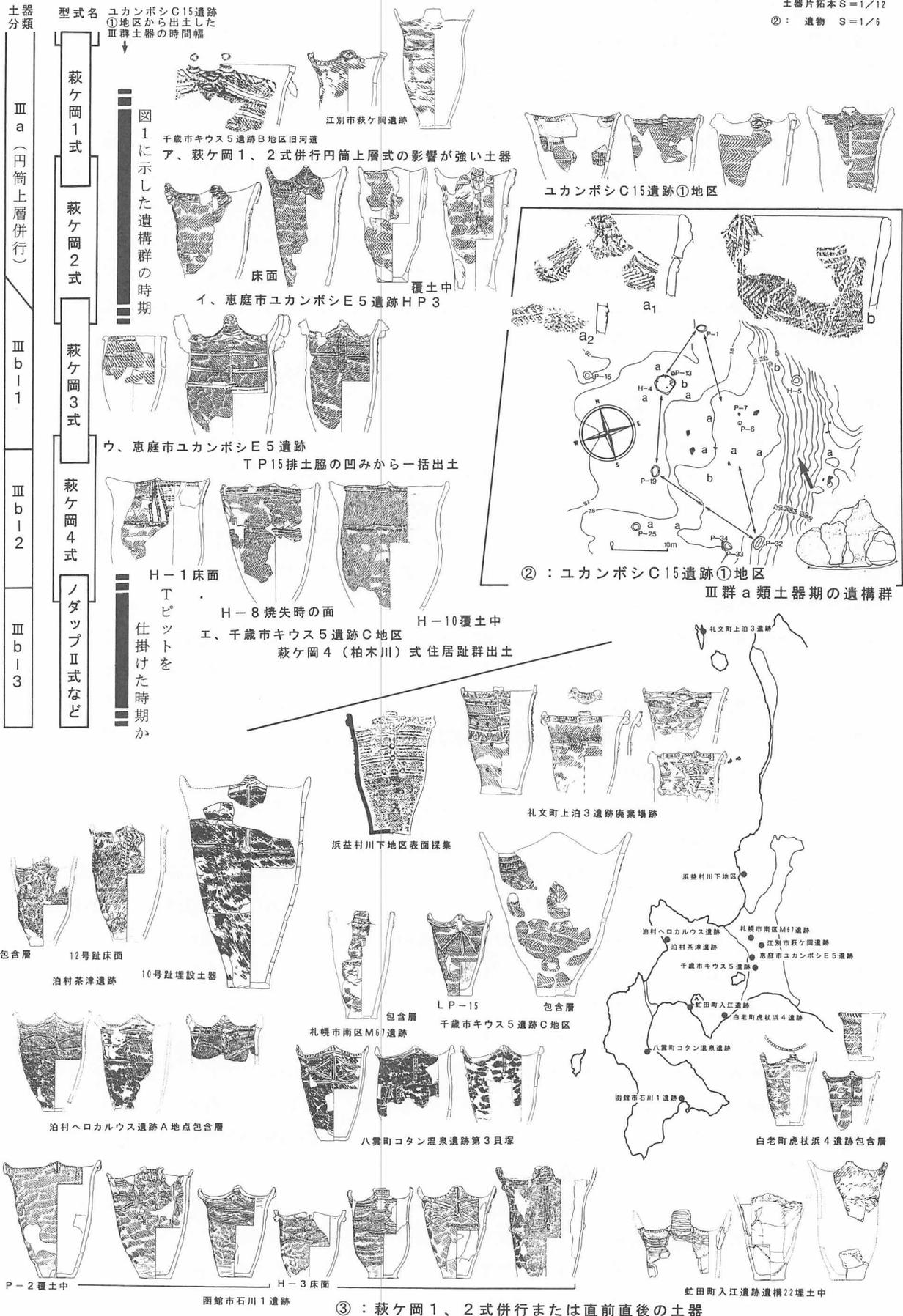
萩ケ岡式土器：今回、萩ケ岡 1、2 式が出土した縄文土器の主体である。この土器群を特定の期間を表す遺物群として認識する。編年上後続する萩ケ岡 3 式 (天神山式) の土器片はなかった。そこで、対比のために萩ケ岡 1、2 式、萩ケ岡 3 式、萩ケ岡 4 式について、当遺跡から比較的近くに位置するユカンボシ E 7 遺跡、キウス 5 遺跡 C 地区の遺構に伴う土器をそれぞれにあてはめた (①)。一般に、萩ケ岡 3 式を構成する器種をみると、波状口縁の頂部を棒状に造り出し、地文は斜行縄文の器が目立つ。胴部のふくらみが強くなり、口縁部には明瞭な肥厚帯を造り付ける。半截竹管施文について、竹管の端部で粘土紐の側縁辺を器に押しつけ、そのまま粘土紐上を直線的に引くという操作を連続した『刺突 A (VIII 章-3 参照)』に類する刺突と、隆帯とは無関係に、竹管により器表面を直に押し引いて加飾する、という 2 種類の装飾方法が普遍的となる。萩ケ岡 4 式 (柏木川式) については、頸部に屈曲部分を持ち、突起様の波頂部はあるものの平口縁といってよい深鉢が目立つ。3 式段階においても、ウに示した様な平口縁深鉢はあるが、器形としてより確立する。ところで今回出土のⅢ群 a 類土器について、円筒上層式 b、c 式の影響が強い撚糸圧痕文を隆帯上に連続して施す個体や、上層式そのものについて確定できる物 (①-A) はない。③は、北海道の天塩山地、日高山脈より西の地域において、萩ケ岡 1、2 式に併行する土器とその直前直後の土器を並べたものである。道南を中心とした沿岸部には、円筒上層 b 式から系譜がある弧線文モチーフを、細い隆帯や沈線で器面に施す土器が分布する。三角形の波状口縁を持ち、胴部がゆるく膨らむ。口縁部文様帯に大木 8 式起源の渦巻き文様をあしらう椀林式に類した個体もある。それに対して石狩低地帯を分布の中心とする土器群は、胴部上半に直線構成の文様を施す。隆帯上連続刺突について施文具は多様である。今回出土の 1、2 式について、隆帯上 'く' の字形連続施文の方法に、棒状工具と半截竹管、2 種類の施文方法があり、相関的である。3 式期の半截竹管施文の緒源が伺える。1、2 式は器面調整を終えてから隆帯もしくは沈線加飾をする。調整として器内面をよく磨き、縄文施文によって器面を整える。隆帯の剥落したものについて裏面をみると、縄文地文の凸型が転写されているものがある。器面調整を先に施すため、粘土紐貼付けの直前には器表面が乾いていたことがわかる。この時期の遺物について焼成時の隆帯剥落は多い。隆帯上に施された連続刺突や短沈線の役割として、粘土紐の剥落防止もあると思われる。『刺突 A』には、それがよく表れていると考える。

(大泰司統)

2. II 黒層遺物とその遺構について

① : ユカンボシC15遺跡①地区周辺縄文時代中期中葉の土器変遷

①③ : 復元土器 S=1/16
土器片拓本 S=1/12
② : 遺物 S=1/6



図X-1 II 黒層遺物とその遺構 関連図

3. I 黒層の土器について

(1) アヨロ 3 類 a と併行する土器群 (図 X-2)

F-41 からアヨロ 3 類 a と併行する深鉢が出土した。この焼土の付近にある F-37 からは後北 A 式深鉢が 1 個体出土し、周囲の包含層からも後北 A 深鉢が 1 個体出土した。現在までのところアヨロ 3 類 a と後北 A 式の並行関係は、江別太遺跡 (1979 年)、旧豊平河畔遺跡 (1981 年) の調査によって確定されており、今回の調査例は 3 例目となるものである。

本遺跡の例はその関係のどのあたりに位置付けられるのだろうか。先の 2 例のアヨロ 3 類 a には形態上から新旧は見い出せない。江別太遺跡のアヨロ 3 類 a はⅢ 3 層出土で、伴出したのは貼付帯が突起下のみにある江別太 2 式 (高橋分類の I 群 2 類 a) であり、後北 A 式祖型である。旧豊平河畔遺跡のアヨロ 3 類 a は 1 号住居出土で、伴出したのは貼付帯が横環しており江別太 3 式 (高橋分類の I 群 1 類でⅢ 1 層相当) であり、後北 A 式である。

F-37 の深鉢は、貼付帯が 4 本横環し、突起下に 4 個の V 字貼付文を付け、突起間に小さな V 字貼付文をつけている。器面に対して角度が深い三日月形の刺突が浅く付けられ、横位の押し引文がある。このような特徴は、江別太遺跡の後北 A 式 (I 群 1 類) には見られず、後出的な要素である。

一方、F-41 出土の深鉢は器形・文様構成は先の 2 例と同じであるが、区画文様は異なる。2 段の波状帯縄文の波裾と波頂と交わる部分に、斜行縄文で菱形をつけ、その帯縄文を刺突で区画している。器面に対して鈍角に刺突しているため短い押し引き文のようにも見える。

以上より、先の 2 例と F-41 のアヨロ 3 類 a と F-37 の後北 A 式の関係は下記ようになる。

江別太遺跡Ⅲ 1 層→旧豊平河畔遺跡、1 号住居→ユカンボシ C 15 遺跡、F-41・37

波状帯縄文を沈線で区画しない類例として次の 2 例がある。これらはいずれも後北式系の器形である倒鐘形を呈し、F-41 の例とは異なる。北広里 3 遺跡包含層とフゴッペ洞窟層位不明の例である。

北広里 3 遺跡包含層の例は、3 段のやや直線的な波状文の波裾と波頂とが交わる部分に、縦位沈線文をつけ、その帯縄文を刺突で区画している。ほかに包含層からはアヨロ 3 類 a 深鉢片が出土している。1 号住居からは貼付帯が突起下にあり、横位沈線・斜沈線・鋸歯状沈線を多用する江別太 1 式 (高橋分類の I 群 2 類 b) の深鉢が出土している。

アヨロ 3 類 a の影響が、北海道中央部においては江別太 1 式～後北 A 式にかけてあり、文様構成の影響、器形・文様構成の影響にまで及んでいることがわかる。

(2) 後北 A 式深鉢の変遷 (図 X-3)

江別太遺跡の I 群 1 類は旧豊平河畔遺跡の後北 A 式に近接し、旧豊平河畔遺跡→F-37 という関係が判明した。これに拠って遺跡とその周辺の資料を用い、後北 A 式の編年を試みる。

江別太遺跡の江別太 1・2 式深鉢は下記のように変化する。

突起下口唇部：縦位棒状貼付文→縦位棒状・V 字状貼付文

頸部文様：鋸歯状・斜沈線文+区画文 (押し引き状刺突・沈線) →斜沈線文+区画文 (刺突)
旧豊平河畔遺跡の後北 A 式は下記のようなのである。

突起下口唇部：縦位棒状貼付文 頸部文様：鋸歯状・斜沈線文+区画文 (刺突)

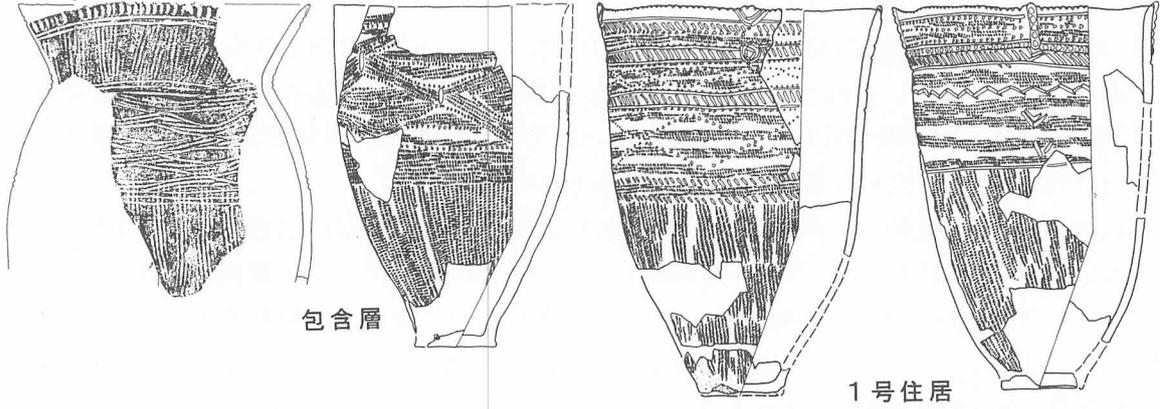
これらの特徴は、突起下口唇部直下に縦位棒状・V 字状貼付文があること、頸部文様が带状縄文とは別に区画文 (押し引き状刺突・刺突) を伴う鋸歯状・斜沈線文があることである。江別太 1 式→江別太 2 式→旧豊平河畔遺跡の後北 A 式への変化は非常に漸移的である。

江別太遺跡の後北 A 式深鉢は、突起下貼付帯の施される位置が 2 種類あり、下記のようなのである。

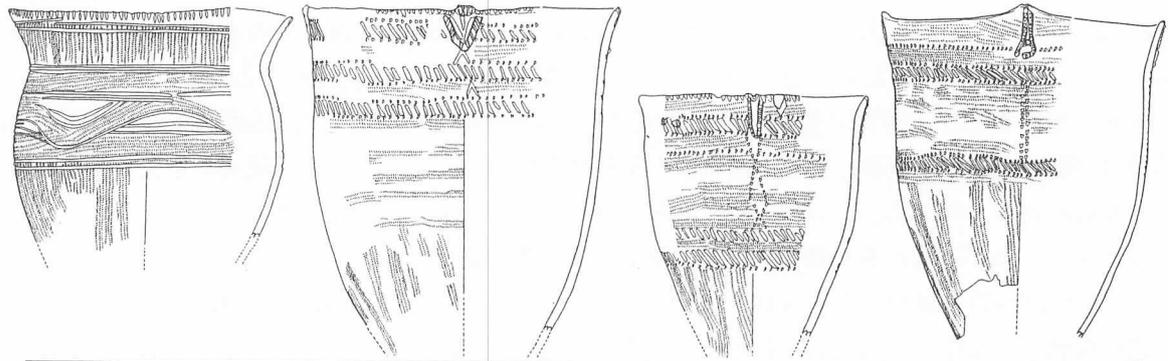
突起下口唇部：狭角 V 字状貼付文 突起下横位貼付帯下：V 字状貼付文+縦位棒状貼付文

北広里遺跡

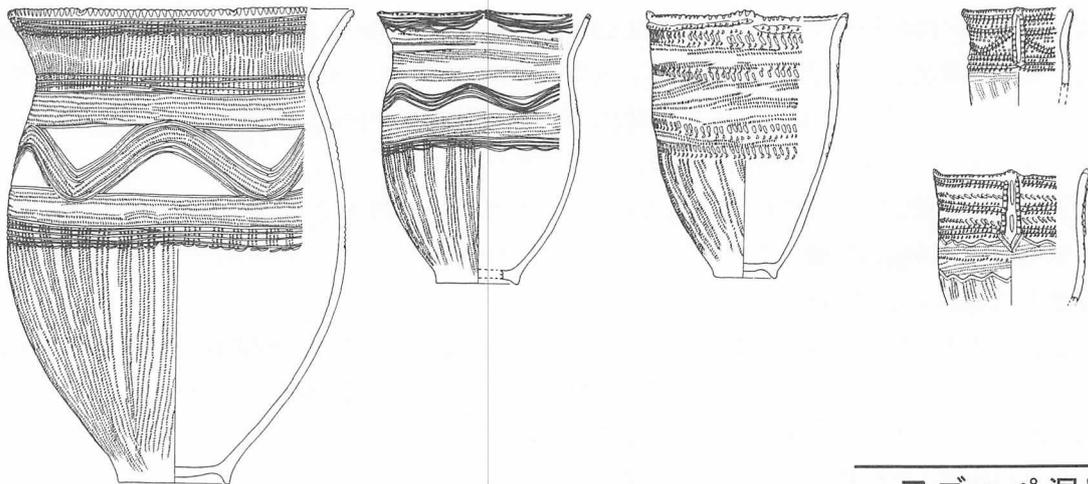
(S = 1 / 6)



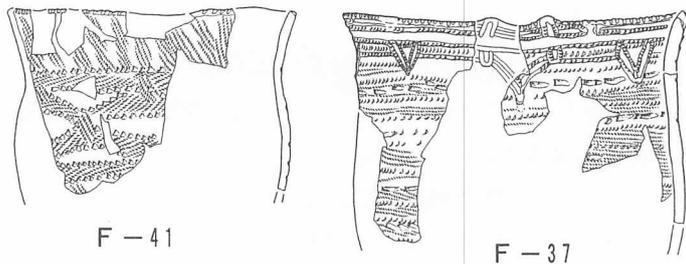
江別太遺跡Ⅲ 3層



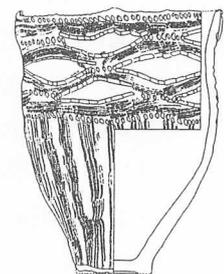
旧豊平河畔遺跡 1号住居



ユカンボシC15遺跡



フゴッペ洞窟



図X-2 アヨロ3類aと併行する土器

頸部文様：帯縄文、間隔のあかない帯縄文+区画文（押し引き状刺突）

F-37の後北A式深鉢は、突起下横位貼付帯下にV字状貼付文、その脇に短い縦位棒状貼付文、頸部文様は間隔のあかない帯縄文+区画文（刺突）、その間に横位押し引き文がある。

これらの特徴は、江別太遺跡の後北A式深鉢は突起下口唇直下に貼付帯があるものが先駆的要素を持ち、突起下横位貼付帯下にV字状貼付文+縦位棒状貼付文があること、頸部文様が間隔のあかない帯縄文+区画文（押し引き状刺突・刺突）は後出的要素を持つ。江別太遺跡の後出的要素を持つものに較べるとF-37の後北A式深鉢はより後出的である。

ユカンボシC15遺跡包含層、オサツ2遺跡土坑墓（GP-5）の後北A式深鉢は下記の様である。

突起下横位貼付帯下：V字状貼付文+縦位棒状貼付文、菱形状貼付文+縦位棒状貼付文

頸部文様：間隔の空かない帯縄文とその上に横位押し引き文+区画文（刺突）

これらの特徴は、横環する貼付帯の本数が増えて突起下の貼付帯文様がより下部に付くように見えること、V字の角度が開きV字状には見えなくなること、菱形貼付文が出現すること、帯縄文とその上に横位押し引き文があることである。

オサツ2遺跡土坑墓（GP-2・6）の後北A式深鉢は下記のようなようである。

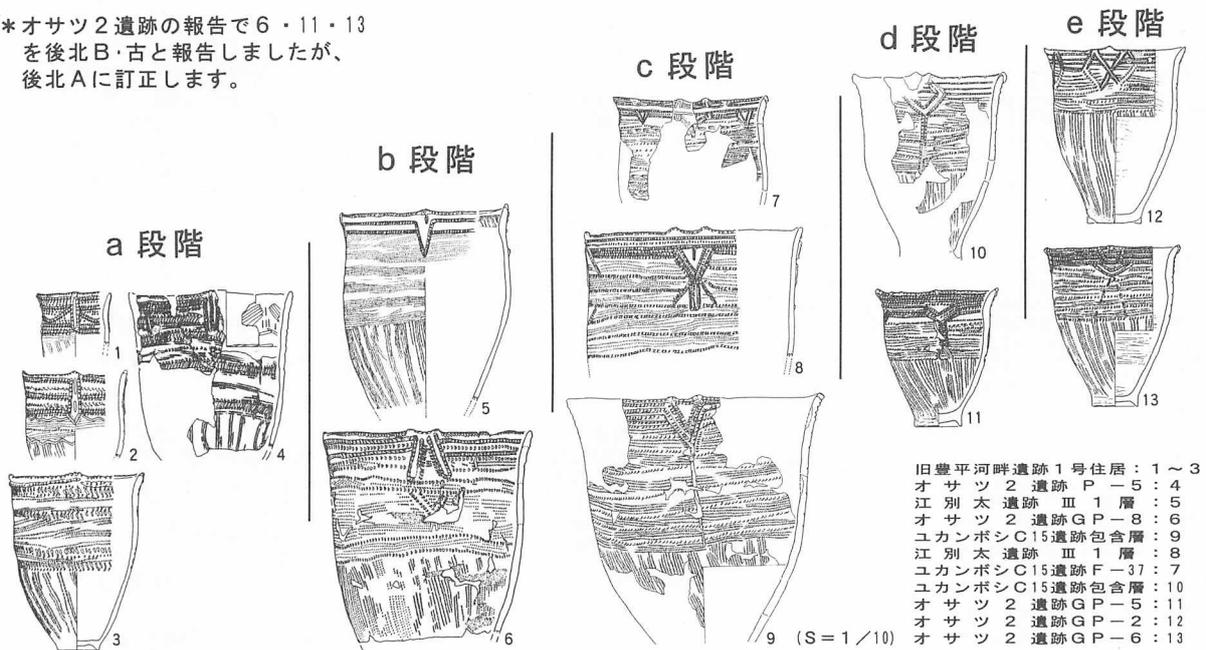
突起下横位貼付帯下：V字状、菱形状貼付文 頸部文様：帯縄文と刺突列を交互に施す。

これら特徴は刺突が区画文としてではなく、文様帯に変化して存在することである。

以上の特徴をまとめると次のような土器群が成立し、a→b→c→d→eと変遷する。

- a：突起下口唇部直下に縦位棒状・V字状貼付文、頸部文様に带状縄文とは別に区画文（押し引き状刺突・刺突）を伴う鋸歯状・斜沈線文。
- b：突起下口唇直下に貼付帯、頸部文様に間隔の空く帯縄文+区画文（押し引き状刺突・刺突）
- c：突起下横位貼付帯下にV字状貼付文+縦位棒状貼付文、頸部文様に間隔の空かない帯縄文+区画文（押し引き状刺突・刺突）。
- d：横環貼付帯の本数が増え、菱形貼付文が出現すること、帯縄文とその上に横位押し引き文
- e：刺突が帯縄文の区画文としてではなく、独立した文様帯として存在する。

*オサツ2遺跡の報告で6・11・13を後北B・古と報告しましたが、後北Aに訂正します。



図X-3 後北A式の変遷

3. I 黒層の土器について

(3) 後北 C₂・D 式の分類案 (図 X-4・5、表 X-1・2)

下記の 2 点の問題から変遷を考慮する必要がある。

- 1 : 後北 C₂・D 式深鉢 (図 V-25-13) と北大 I 式深鉢が F-1 から出土している。この後北 C₂・D 式深鉢は終末期のどの時期にあるのか。
- 2 : 後北 C₂・D 式無文深鉢 (図 VII-3-15) と深鉢? (図 VII-2-14) が出土しており、とくに無文土器の編年上の位置付けが不祥である。

後北 C₂・D 式の編年は大沼 (1982年) の 4 段階案があり、「初め」・「一般的」・「後葉」・「末」を設定し、さらに上野 (1987年) は札幌市 K 135 遺跡の出土状況と文様構成から「一般的」を古と新に細分した。大島 (1990年) は小樽市蘭島餅屋沢遺跡の土器を文様構成から I 類・II 類・III 類・IV 類・V 類に細分し、I 類→II 類・III 類→IV 類→V 類の変遷を提示している。大沼案との関係は述べられていないが、I 類は「初め」、II 類は「一般的」、III 類は「後葉」、IV 類・V 類は「末」に対応していると思われる。

細分の主な方法は、「一般的 (古)」・「一般的 (新)」が層位的事実にもづく以外は、遺跡内における同一文様構成を持つ土器群の抽出を細分単位としたものである。

私案は、同一文様構成を持つ土器群の抽出を基本とし、文様構成を系統別に分類して、K 135 遺跡の層位的事実を考慮したものである。無文化や終末に至る経緯を考察するには対象資料を道央地域のものとし、均質な条件を設定するのがよいとおもわれる。対象時期は「一般的 (古)」～「末」とする。文様構成を系統別に分類する上では上野 (1987年) や林 (1988年) が参考になった。分類要素の抽出は表 X-1・2 に示したとおりである。私案は大・中型深鉢に適用できる。小型深鉢、注口付き深鉢、注口、皿、ミニチュア土器は文様帯の圧縮・単位の欠落があるため当てはめるのは最適でない。

区画文様は文様割付けの基線である。区画文 I は波頂から下る縦位帯状縄文で、平縁になるとほとんど消滅する。区画文 II-1 は横環する「上帯」・「中帯」・「下帯」3 本で、区画文 II-2 は「上帯」・「下帯」2 本の帯状縄文である。それらにより器面は縦横に区画される。区画文 II-1 の場合は帯間が上下 2 区画あり、上側を「帯間 1-1」、下側を「帯間 2」と呼ぶ。区画文 II-2 は一つで「帯

表 X-1 後北 C₂・D 式深鉢の分類(1)

I a	円形文を縦位帯と中帯の交点に、その両側に紡錘形文を配置。
I b	円形文を縦位帯と中帯の交点に、その両側に上下に開く横位弧形を配置。
I c	円形文を縦位帯上の帯間 1-1 に配置。
I d	円形文を縦位帯上の帯間 1-2 に、他の文様を上下 2 段に配置
II a	紡錘形文を縦位帯と中帯の交点に、その両側に上下に開く横位弧形を配置。
II b	紡錘形文を縦位帯上の帯間 1-1 や 2 に配置。その両側に上下に開く横位弧形を配置。
III a	逆・括弧文を縦位帯と中帯の交点に配置。
III b	逆・括弧文を縦位帯上の帯間 1-1 に配置。
III c	逆・括弧文を縦位帯上の帯間 1-2 に配置。
IV	菱形・六角形文を縦位帯上の帯間 1-2 の上下 2 段に配置。
V a	連弧文を波頂下の帯間 1-2 の上下 2 段に配置。
V b	連弧文を波頂下の帯間 1-2 に配置。
VI a	U 字形文を縦位帯上の帯間 1-1 に配置。
VI b	U 字形文を縦位帯上の帯間 1-2 の上下 2 段に配置。
VI c	U 字形文を縦位帯上の帯間 1-2 に配置。
VII a	V 字形文を縦位帯上の帯間 1-2 に配置。
VII b	V 字形文を波頂下の帯間 1-2 に配置。
VIII a	山形文を波頂下の帯間 1-2 に配置。
VIII b	山形文を波頂下の帯間 1-2 に、口縁部に円形刺突文に配置。
VIII c	山形文を波頂下の帯間 1-2 に、口縁部に円形刺突文、頸部が括れて口縁端面が水平に。
IX a	縦位帯上に縦位帯状縄文を付し、横位帯状縄文が多数配置される。
IX b	横位帯状縄文の数が少ない。縦位帯状縄文と横位帯状縄文が交差する。
IX c-1	横位帯状縄文の数が少なく縦位帯状縄文が横位帯状縄文を分断する。口縁端面が水平に。
IX c-2	横位帯状縄文の数が少なく縦位帯状縄文が横位帯状縄文を分断する。口縁部に円形刺突文、頸部が括れて口縁端面が水平に。
X a	横位帯状縄文が多数配置される。
X b-1	横位帯状縄文の数が少ない。
X b-2	横位帯状縄文の数が少なく、口縁端面が水平に。
X b-3	横位帯状縄文の数が少なく、頸部が括れて口縁端面が水平に。

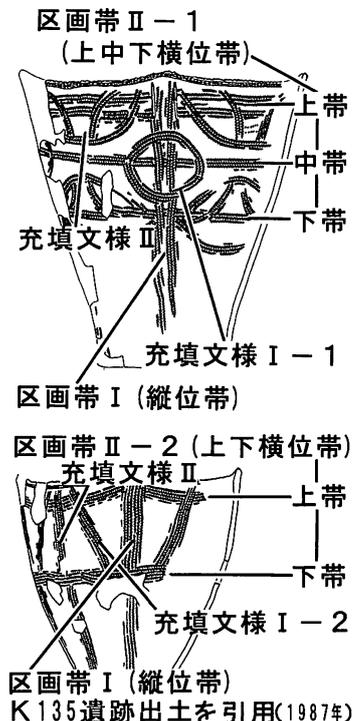


図 X-4 文様帯の説明

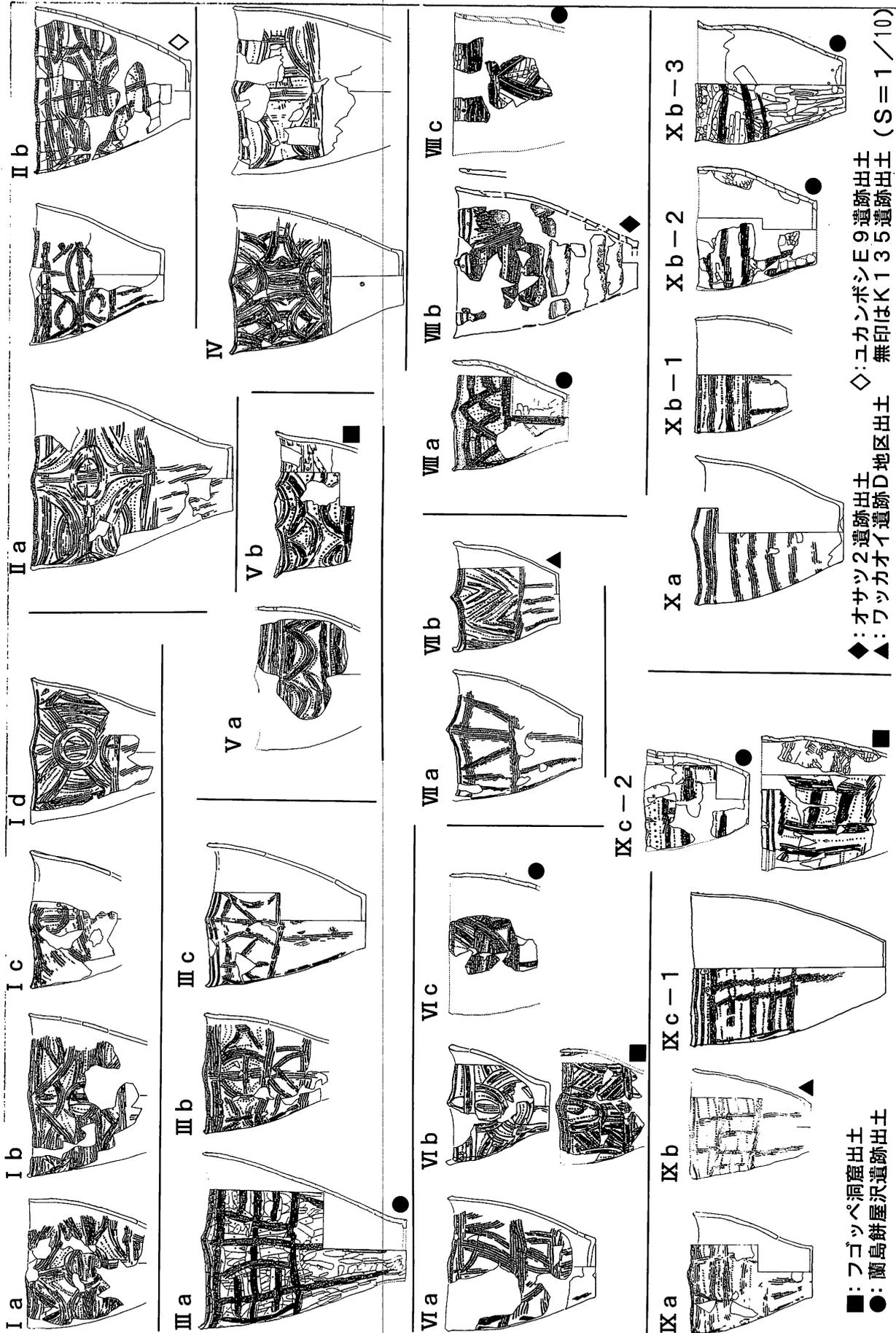


図 X-5 後北 C₂・D 式深鉢の分類

(4) 後北 C₂・D 式深鉢の変遷 (図 X-6)

後北 C₂・D 式深鉢の文様構成の変化は、文様帯の縮減に第一の原因があり、平縁化に第二の原因がある。それは、区画文Ⅱ-1が区画文Ⅱ-2に変化して帯間が減少し、器面の分割が単純化することであり、区画文Ⅰが波頂から下るため平縁になると様割付けの基線となりえなくなることである。

1) このような区画文の変化を受けて充填文Ⅰの施文位置も変化する。

- I : 縦位帯と中帯の交点→縦位帯上の帯間1-1→縦位帯上の帯間1-2の上下2段に
- II : 縦位帯と中帯の交点→縦位帯上の帯間1-1や2
- III : 縦位帯と中帯の交点→縦位帯上の帯間1-1→縦位帯上の帯間1-2
- V : 波頂下の帯間1-2の上下2段→波頂下の帯間1-2
- VI : 縦位帯上の帯間1-1→縦位帯上の帯間1-2の上下2段に→縦位帯上の帯間1-2
- VII : 縦位帯上の帯間1-2→波頂下の帯間1-2
- VIII : 縦位帯上の帯間1-2→波頂下の帯間1-2→帯間1-2

充填文Ⅰ自体の変化(発生)もおこる。

- II : Iが扁平になったもの。 III : IIの両端が欠失し90度転回したもの。
- IV : I~IIIの充填文Ⅱ(長短弧形)が充填文Ⅰに転じたもの。
- V : IVの両端が重複しなくなったもの。 VI : Iの上部が欠失したものであろう。
- VII : VIが直線化したもの。 VIII : VIIが180度転回したもの。

区画文の変化が停止すると充填文Ⅰ自体にも変化はなくなり充填文Ⅱに変化が目立つ。例えば、VIIIの充填文ⅡはU・V字形文や山形文や横位帯縄文→縦位帯縄文→短斜位帯縄文と変化する。

2) 充填文Ⅰ系として定義(充填文Ⅰの欠落?)できないIX・Xは横位帯縄文の本数に変化がある。

- IX : 突起下に縦位帯縄文、横位帯縄文が多数→縦位帯縄文と横位帯縄文が交差、横位帯縄文の数が減少(3~5本)→縦位帯状縄文が横位帯状縄文を分断、横位帯縄文の数が減少
- X : 横位帯状縄文が多数→横位帯状縄文の数が減少(3~5本)

3) 平縁化はd段階に目立ちはじめ、同時に口縁部の形態変化が目立ち、口縁部文様に円形刺突文が加わる。付加される順序は、「円形刺突文→+口縁端面が水平→+頸部が括れる」である。

	a段階	b段階	c段階	d段階	e段階	f段階
	縦位帯・中帯の交点	縦位帯上の帯間1-1	縦位帯上の帯間1-2に上下2段	縦位帯上の帯間1-2	波頂下の帯間1-2	帯間1-2 端面水平・頸部括れ
I a						二重線の左側はK135遺跡のⅦ1群に、右側はⅦ2群にほぼ対応する。
I b						
I c						
I d						
II a						
II b						
III a						
III b						
III c						
IV						
V a						
V b						
VI a						
VI b						
VI c						
VII a						
VII b						
VIII a					円形刺突	
VIII b						円形刺突
VIII c						
				横位帯縄文・多	横位帯縄文・減少	
					端面水平	端面水平・頸部括れ
IX a						
IX b						
IX c-1						
IX c-2						円形刺突
X a						
X b-1						
X b-2						
X b-3						円形刺突

図 X-6 後北 C₂・D 式深鉢の変遷

3. I 黒層の土器について

(5) ユカンボシ C 15 遺跡の後北 C₂・D 式土器

F-1 の深鉢 (図 V-25-13) は、口縁端面が水平で、頸部が括れることから、X b-3 であり終末期にあたる。F-1 周囲の深鉢 (図 VII-2-14) は器高が低く、注口付き深鉢の可能性もあるので確実ではないが、口縁部の形態、頸部が括れないことから X b であろう。無文の深鉢 (図 VII-3-15) は、平縁に小突起が付き、口縁端面を持ち、水平気味で、頸部が括れないことから、e 段階後半～f 段階前半に位置付けられる。

(6) 北大 I 式と VI 群 c 類無文土器について (図 X-7)

北大 I 式の細分は大沼 (1982・89・97年) の二分案があり、内容は同じ段階を指していると思われる。「(古)」は口唇が角形、体部に帯状縄文や右下がり斜行縄文が施され隆起線や刺突により縁取られる。北海道大学構内ポプラ並木東地区遺跡を標識遺跡とする。「(新)」は口唇が丸みを持ち、口縁部が外反する。底部は厚くなり外へ張り出す。体部に斜行縄文。江別市吉井の沢遺跡を標識遺跡とする。

吉井の沢遺跡の中で「(新)」の定義よりも古相を示す土器があり、「(新)」「(古)」の中間に当たるものがある。口唇が角張って端面を持ち短い口縁部が外折し口縁径を増すが口縁径が著しく肩部径を凌駕することはない。これをもって「(新)」を b 段階と c 段階に二分し、「(古)」を a 段階とよぶ。

本遺跡の土器 (図 V-25-12、26-18、図 VII-3-16、図 VIII-4-41) は頸部が括れが弱いのでポプラ並木東地区遺跡の土器よりも一時期古い形態を示す。現時点では a 段階の初めと位置付けられる。

フゴッペ洞窟で d から f 段階前半に当たる無文の深鉢とフゴッペ式が上層から出土している。フゴッペ式は太めの貼付帯を口縁部に縦横に付けること、口縁部の断面が角形であることから、a 段階に近い要素を持っている。前後関係の精査は必要であるが北大 I 式の祖型の一候補と考えられる。

無文土器の例は、K 135 遺跡で中型鉢が c 段階、中型深鉢が d 段階前半と e 段階にある。蘭島餅屋沢遺跡では小型深鉢が d 段階から、大中型深鉢が d から f 段階にある。フゴッペ洞窟で d から f 段階前半にある。本遺跡では図 VII-3-15 が e 段階後半～f 段階前半の例がある。

無文化は c 段階の後北 C₂・D 式の鉢に始まり、続いて d 段階に大中型深鉢に起こり本格化する。それは北大 I 式において注口・片口に及ぶ。後北 C₂・D 式後葉に始まる有文土器と無文土器の 2 系は、北大 II・III 式にも引き継がれる。

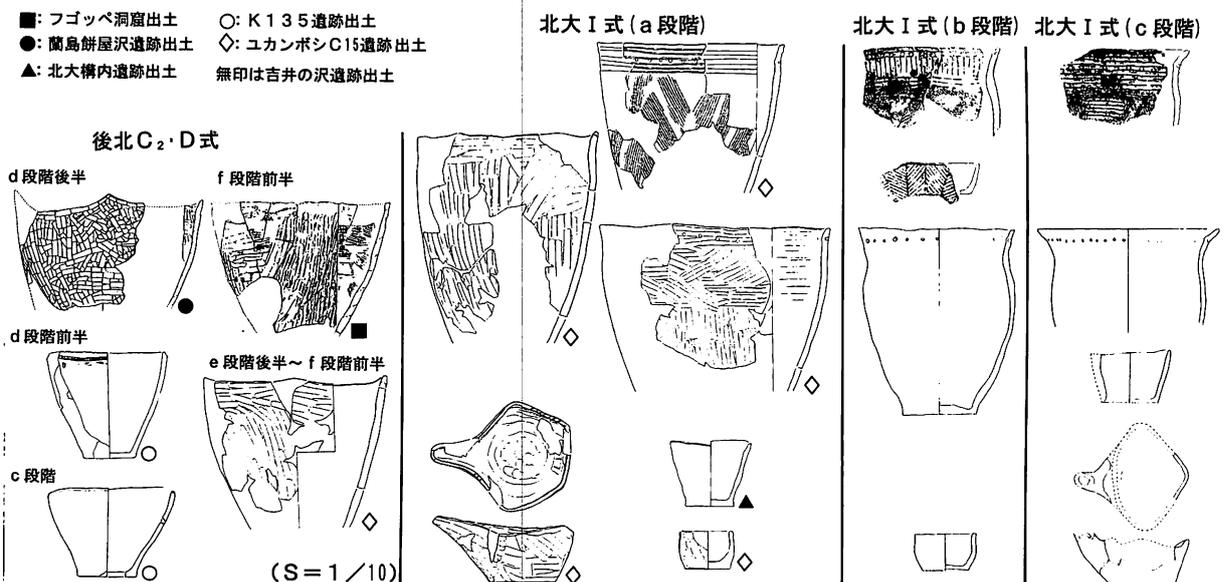


図 X-7 VI 群 c 類無文土器の変遷

(7) 土坑墓等出土の土器 (図 X-8)

1. 坏の変化について

ユカンボシ C 15 遺跡の坏は全て非ロクロ成形技法で、平底気味の丸底と平底がある。平底気味の丸底には、内底面が放射状ミガキで内外面に段があり、体部は内弯するものと、段が痕跡的となって凹み、体部が内弯するものがある。平底には体部中位の内外面に段があるものと、体部中位に沈線があるものがある。このような特徴の類似は下記の遺跡においても見られる。

末広遺跡 I H-11 の坏は全て非ロクロ成形技法で、内外面に段を巡らし、やや丸底気味である。末広遺跡 I H-80 の坏は非ロクロ成形技法で、内外面に段を巡らし、平底気味の丸底で体部は内弯する。末広遺跡 I H-31・52 の坏は全て非ロクロ成形技法で、形態は平底に近い。底部と体部の屈曲部分が凹み、体部は内弯する。末広遺跡 I H-62 の坏は全て非ロクロ成形技法で、形態は平底。以上の特徴は、丸底から平底への変化に伴い、内外面に段(丸底気味)→内外面に段(平底気味の丸底)→屈曲部分が凹む(平底に近い)→平底へと変化している。

2. 甕の変化について

ユカンボシ C 15 遺跡の甕は、頸部の段状沈線が肩部と口縁部に数本ずつあるもの、それが多条化したものがある。段状沈線が肩部と口縁部に数本ずつあるものには、口縁部が発達するものと発達しないものがある。このような特徴の類似は下記の遺跡においても見られる。

末広遺跡 I H-11・80 の甕は、少ない段状沈線が肩部と口縁部に分かれてあり、口縁部が発達するものと発達しないものがある。末広遺跡 I H-52・47・62 の甕は多条化したものと無文のものがある。以上の特徴は、少ない段状沈線が肩部と口縁部に→肩部と口縁部に多条化した段状沈線→頸部全面を覆う沈線へと変化している。

3. 球胴甕の変化について

ユカンボシ C 15 遺跡の球胴甕は、頸部の沈線が多条化し、最大径が胴部上半にあり、器高の割に最大径が小さく球胴的でない。このような特徴の類似は下記の遺跡においても見られるのだろうか。

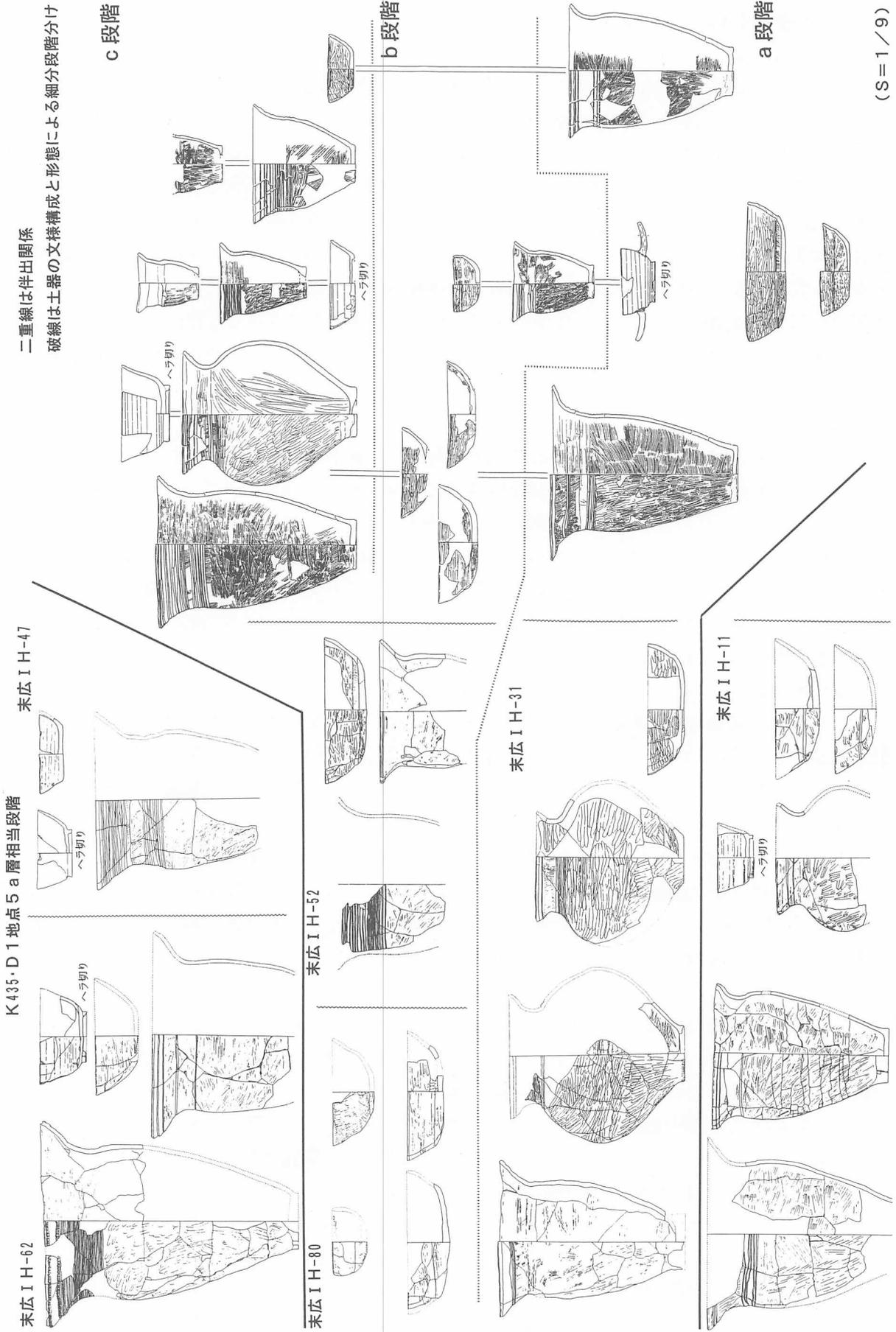
末広遺跡 I H-11 の球胴甕は頸部に段状沈線がまばらにつく。I H-80 の球胴甕は段状沈線肩部と口縁部に数本ずつあり、最大径が胴部中央にあり、器高の割に最大径が大きい。外面のミガキ方向が上半がヨコ、下半がタテとはっきり分かれる。段状沈線の多い個体のほうが最大径が上部にある。

以上の特徴は、甕の変化から類推すると、ユカンボシ C 15 遺跡と末広遺跡の例で時間差を表している。頸部に段状沈線がまばら→段状沈線肩部と口縁部に数本ずつ、最大径が胴部中央→段状沈線が多条化し、最大径が胴部上半へと変化している。

4. 須恵器について

ユカンボシ C 15 遺跡の須恵器は生産地が未確定であるため、詳細な年代の決定は難しい。産地を東北地方に求めた場合、ヘラ切り高台付き須恵器坏・底部ナデ調整須恵器坏は、8 世紀後半から 9 世紀前葉の間に位置付けられ、秋田城出土の編年試案(小松正夫、日野 久、西谷 隆、伊藤武士：1997 年)によれば、形態と技法から 8 世紀第 4 四半期～9 世紀第 1 四半期にしばらく込まれ、伊藤武士、利部 修、日野 久氏のご教示によれば、8 世紀第 4 四半期の可能性が高い。

双耳須恵器坏は 8 世紀後半から 9 世紀後葉の年代が与えられている。秋田県内では 9 世紀代に焼造されている。耳の付く位置は、末館窯跡・I 号窯(1963 年)が体部中位、富ヶ沢 B 窯跡・SJ 101(1992 年)が体部中位、富ヶ沢 B 窯跡・SJ 102(1992 年)が体部上位と竹原窯跡・SJ 01(1991 年)口唇部で、いずれも耳が坏部の体部中位～口唇部についている。村田晃一氏に実見していただき、耳の位置が焼造時期(下位：古→上位：新)を示すこと。そのことから本遺跡の双耳坏、8 世紀後半の可能



(S=1/9)

図X-8 土坑墓等出土土器の時期

性が高いというご教示を受けた。同氏報文（1996年）によると秋田県よりも古い例がある。宮城県黒川郡大衡村、彦右エ門橋窯跡・SK 1（8世紀後葉～9世紀初頭）の例で耳は坏部の体部中位に付いている。いずれも本意遺跡例より後出的な形態であり、8世紀後葉よりも以前と考えられることから、本遺跡例の年代は妥当で、生産地は古い例のある宮城県あたりに求められるのかもしれない。

5. 段階の設定と暦年代

- c段階：平底坏、沈線が多条化した甕、沈線が多条化し、最大径が胴部上半にある球胴甕
- b段階：屈曲部分が凹む（平底に近い）内弯坏、少ない段状沈線が肩部と口縁部にある甕
- a段階：内外面に段（平底気味の丸底）の内弯坏、少ない段状沈線が肩部と口縁部にある甕

c段階は末広遺跡 I H-47・62と同じ坏・甕・ヘラ切り高台付き須恵器坏を持つ。これら共通点は時間的に近接していることを示しているが、新しい要素だけを拾いあげると外面がミガキで頸部全面を覆う沈線の甕、糸切り須恵器坏がある末広遺跡 I H-62・47はc段階より新しい。a段階は末広遺跡 I H-80と同じ組成（坏・甕）を持つ。b段階は末広遺跡 I H-31・52とほぼ同じ坏を持つ。

以上より、a段階→b段階→c段階という順序が成立する。a段階は、内外面に段（平底気味の丸底）の内弯坏がある I H-80と併行する。c段階は、頸部全面を覆う沈線の伴う甕がある末広遺跡 I H-62・47よりも若干古い。豊田宏良（1997年）は須恵器との共伴関係より、末広遺跡 I H-62・47を9世紀前葉、末広遺跡 I H-11を8世紀中葉と推定している。したがって、a～c段階は8世紀後葉～8世紀末の暦年代が与えられる可能性が高い。（鈴木 信）

4. 擦文文化期の墓

(1) 土坑墓について（図 X-9、表 X-3）

1. 土坑墓の構造など

土坑墓内に骨・歯は遺存していなかった。また、袋状土坑や小柱穴などの付属施設も持っていない。壁は直線的で外傾しながら立ち上がるものが多い。平面形は隅丸長角形（P-3・9・12・27）、小判形（P-2・17・29）、短い小判形（P-14・30・31）、長い小判形（P-8・28、X-1・G4）、幅の広い長方形（X-1・G2）、幅の狭い長方形（X-1・G1・3）がある。

隅丸長方形・小判形は後北期から続く伝統的な平面形である。長い小判形・長方形は本遺跡例をさかのぼる時期の類例がないのでこの頃に始まる平面形であろう。長い小判形の継続する例として9世紀前半の千歳市末広遺跡（1981年）I P-57があり、より長くなった伸展葬墓が擦文文化期中後期

表 X-3 土坑墓等の分類要素一覧

遺構名	長軸方向(°)	長径(cm)	平面形態	副葬品(墓坑内・棺内)	副葬品(墓口脇)
X-1・G4	-22	116	長い小判型		
P-3	+12	(125)	隅丸長方形	礫 (3個)	
X-2	+20	(230)		小刀	
X-1・G1	+25	108	長方形	頁岩礫	
P-8	+25	142	長い小判型		
P-17	+32	98	小判型		
P-14	+33	101	短い小判型		
P-29	+41	98	小判型	坏・ミニチュア甕	須恵器双耳坏・敲石
P-28	+41	141	長い小判型		小型甕・ミニチュア甕
P-27	+45	148	隅丸長方形	大型坏・刀子・鉄素材	
X-1・G2	+46	109	長方形		
X-1・G3	+51		長方形		
P-9	+53	145	隅丸長方形	手斧・鎌	
P-30	+53	61	短い小判型	坏	小型甕
P-31	+54	56	短い小判型		須恵器坏・ミニチュア甕
P-12	+63	(120)	隅丸長方形	坏・刀子・斧・鎌	
P-2	+67	(132)	小判型		

※長軸方向は真北から西に振れるものは正数、東に振れるものは負数で示す。

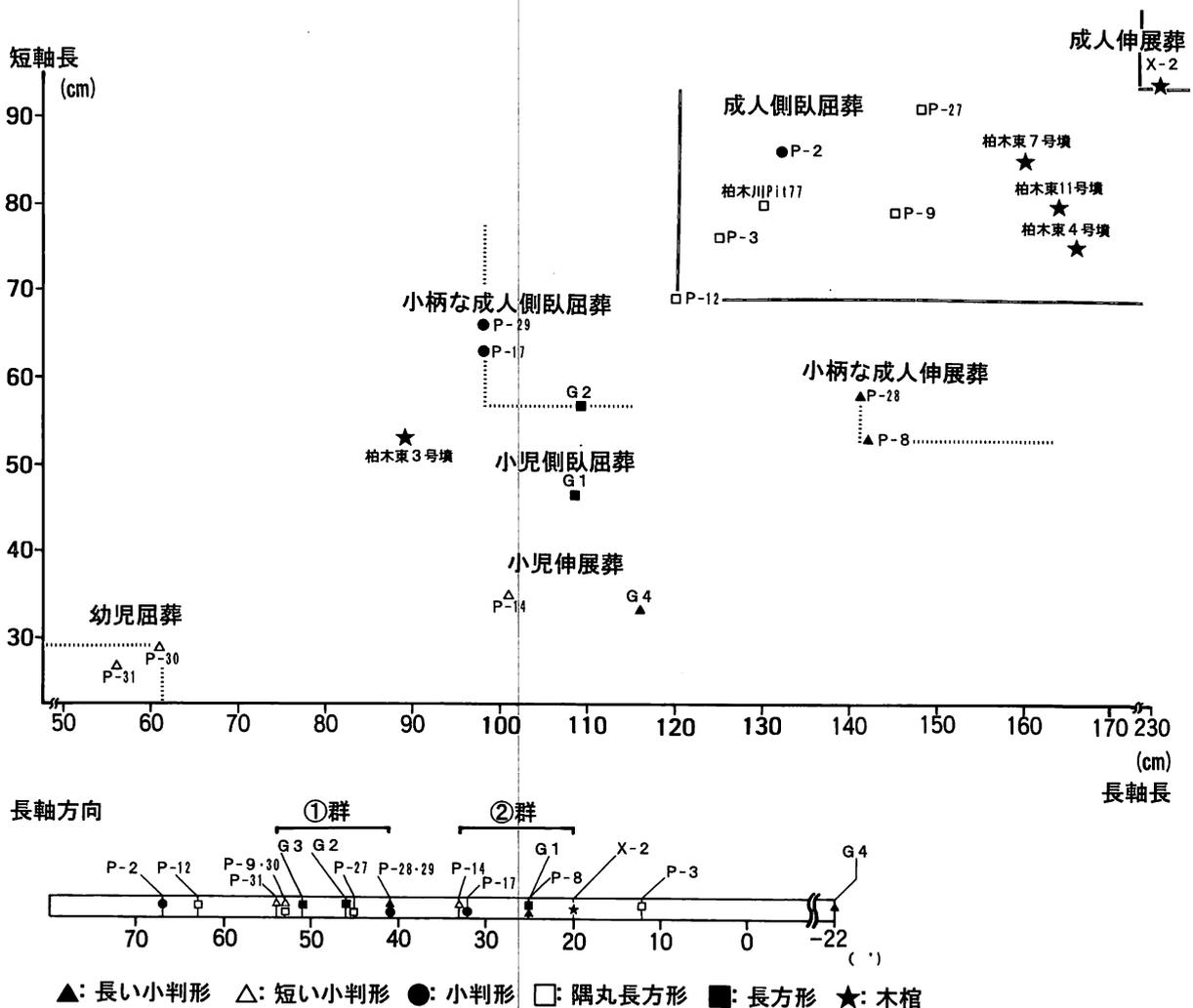
4. 擦文文化期の墓

をへて近世アイヌ文化期に連続している。長方形はX-1のみにある。他の土坑墓と系譜が異なる可能性があり、同時期の木棺墓(X-2)からの影響が考えられる。より長くなった伸展葬墓が10世紀中葉の森町御幸町遺跡(1984年) Pit 1にあり、引き続いて近世アイヌ文化期に見られる。

土坑墓は壁がほぼ垂直に立ち上がり、付属施設・掘り方が認められなかった。土坑墓は遺体そのものを埋葬する空間であり、再葬がないと仮定すると上端長軸長は遺体の大きさを表していると考えてよいだろう。土坑墓の規模を長軸長でみると56~148cmまでの範囲に収まる。そして56~60cm(I群)、98cm(II群)、101~132cm(III群)、141~148cm(IV群)の4群に分かれる。小樽市蘭島遺跡D地点(1991年)・千歳市ウサクマイA遺跡(1975年)の遺体が残っている土坑墓の長軸長・短軸長から類推すると、I群は幼児、II群小児、III・IV群は成人を埋葬したと推定できる。

埋葬姿勢・年齢については、長軸長に短軸長が関係していると考えられる。骨が遺存していないので伏臥か仰臥かは不明である。P-30・31は幼児の屈葬、G1は小児の側臥屈葬、P-17・29とG2は小柄な成人の側臥屈葬、P-2・3・9・12・27は成人の側臥屈葬が考えられる。P-8・14・28、G4は短軸が短いので膝を横に倒すことは難しい、P-8・28は長軸長が割合長く小柄な成人の伸展葬、P-14、G4は長軸長が短かく小児の伸展葬が推定可能である。

長軸方向の変異は+67度から-22度までであるが、+54度から+20度に集中する。そして+54度~+42度の群(①群)と+33度~+20度の群(②群)に分かれる。



図X-9 土坑墓等の軸長・長軸方向

①群は側臥屈葬（4/8例）が多く、土器を副葬する。②群は伸展葬（2/4）があり、土器を副葬しない。そしてこの群にはX-2も含まれている。G3・G2（①群）とG1（②群）は切り合いがあり、G3・G2→G1という新旧関係があることから、①群（側臥屈葬が多い群）と②群（伸展葬がある群）とも考えられないこともないが、双方の群に2種類の埋葬姿勢が混在していることを考慮すれば併存しつつ、最後に②群の一部が造墓されたと考えるのが妥当である。

7世紀代の小樽市蘭島遺跡D地点・千歳市ウサクマイA遺跡においては側臥屈葬が主流の埋葬姿勢である。本遺跡は側臥屈葬が多いけれども屈葬がないわけではない。森町御幸町遺跡（1984年）Pit1は、長軸217cm・短軸120cmの長方形で伸展葬であろうことから、10世紀中葉以前の一時的な流行と推測できる。②群の中にX-2があり木棺伸展葬の影響が考えられる。そうだとすると、強度の屈葬ではなく仰臥で立て膝のような伸展葬様の屈葬が想定できる。

2. 副葬品

墓口脇にある使用後に底部穿孔された土器の副葬、墓口脇・墓坑内への土器の配置は後北期から続く伝統的な習慣である。本遺跡では墓口脇に副葬する例は幼児・小柄な成人と推定される土坑墓例に集中する。後述するX-1・G2の例より、小柄な成人が女性と仮定された場合、幼児・女性の土坑墓は伝統的な習慣を保持していると言える。

土器のなかで特筆すべきは、双耳須恵器坏である。（赤焼き）の双耳坏は後藤遺跡15号墳周溝から1例出土していて、赤褐色土器であること、耳が体部上半についていることから9世紀後葉である。よって、本遺跡例が道内最古となる。村田報文（1996年前出）によると、双耳須恵器坏は城柵（多賀城、伊治城、秋田城、弘田柵、志波城など）・官衙とその周辺に多く出土しているので、直接搬入されたとすれば8世紀後葉の城柵・官衙との関係を示唆している。

P-3に礫を副葬する例がある。これは伝統的な習慣で、埋葬姿勢とも相応する。

金属器の副葬は工具と農具であり武具は見られない。側臥屈葬の成人と推定される中で比較的大きな規模を持つ土坑墓に集中する。比較的大きな規模を男性と仮定した場合、工具と農具を保持する役割があったといえる。ただし、小樽市蘭島遺跡D地点（1991年）81-10D土壌のように幼児墓に刀子・錫製環が副葬される例がある。刀子については万能器具的な使用方法が考えられ、十分に供給された場合、年齢によって扱われ方が異なるということはないかもしれない。

(2) 周溝のある墓について（表X-4）

「周溝のある墓」に似た遺構として青森、岩手県など東北北部では、「円形周溝」・「環状溝」・「環状遺構」などの名称がつけられている。これらは本来マウンドを持った遺構であるとの見解が主流である。本遺跡のX-1～3は墳丘を持っていないので、同じ用語を使用できない。そこで仮りに「周溝のある墓」と呼んでいる。X-1～3の類例は現在までのところなく、後藤遺跡、柏木東遺跡、町村農場1遺跡などは何れも墳丘が存在したという。

1. 構造について

周溝は長軸長4～5mで馬蹄形を呈する。周溝の途切れる部分は南側にある。周溝の調査が行われた後藤遺跡と比較すると、規模としては中級であり、一般的な長軸長と周溝の形態である。

主体部はX-1が土坑墓で、G2・3は構築時に併存し、G1・4は追葬されていた。主体部が多数あることは土坑墓が群を形成することに等しいもので、一主体部一墳丘（一周溝とも言い替えられる。）が原則の北海道式古墳には見られないことである。X-2（木棺直葬）には墳丘はないものの、この原則を順守している。

北海道式古墳の祖型がある東北北部においてもほとんどみられない。青森県上北郡下田町、阿光坊

4. 捺文文化期の墓

9号墳の1例があり、一見そう見えるが、周溝と主体部のひとつが切り合っており、新たに主体部を構築した際に以前の周溝を利用したと考えた方がよい。よって、元々あった周溝内に新たに主体部を納めるといふ意図ではないのでX-1とは異なる。

X-2の木棺直葬墓は後藤遺跡15号墳主体部と同じ構造をしている。藤沢 敦(1997年)が「四辺埋め込み式」と分類している主体部構造である。これは、壁付近の墳底面に溝状の掘り込みを入れて、そこに短い板を埋め込み並列させるもので、そのため墓坑底に不連続の溝が残る。X-2にも長さ10~30cmの不連続の溝が巡る。

天野哲也(1985年)は北海道式古墳の主体部の規格が3種類あることを指摘して埋葬姿勢・年齢にも言及している。その中で最も小さい墓坑を年少者と推定し、つぎのを横臥屈葬かと推定している。

例えば、柏木東遺跡3号墓は私分類でいうと小児の側臥屈葬になり、天野氏の推測に合致する。4・7・11号墓も、私分類でいうと成人側臥屈葬となり、天野氏の推測に合致する。北海道式古墳においては側臥屈葬・伸展葬の2種類の埋葬姿勢があり、柏木東遺跡では側臥屈葬(4/15例)が少なからずある。北海道式古墳の側臥屈葬の墓坑は土坑墓のそれと比べると大きい。遺体のみを埋める空間ではなく副葬品を入れる空間としての意味が加わる。X-1が側臥屈葬・伸展葬で古い埋葬姿勢が残り、それが土坑墓と近似する。X-2は伸展葬であり新しい埋葬姿勢で、北海道式古墳と近縁性を持つ。

2. 副葬品について

副葬品は、X-1がG1内に礫、周溝・区画域に底部穿孔のない供献土器がある。土坑墓にはない球胴甕の供献がある。礫の副葬はX-1・G1に見られ、柏木東遺跡でも例があり古相を示している。X-2は墓坑内に小刀、周溝には何も無い。X-1・X-2ともに副葬品は少なく、内容は土坑墓と比べて変わるところがなく、種・量は土坑墓が豊かである。新しい埋葬方法の採用と副葬品の多寡が相関していない。敢えて推測するなら、伝統的な有力者ではない者が新しい送葬儀礼を導入した可能性がある。唯一性別が推定可能な遺物がX-1区画域内から出土した。土製紡錘車である。G1・4が小児と推定されることから、G2・3のいずれかが女性となるか。

表X-4 北海道式古墳との比較

	ムカボシC15遺跡		柏木東遺跡		後藤遺跡		町村農場1遺跡
墳墓の数	3		14		21以上		2
墳丘の有無			あり		あり		あり
周溝の形態	馬蹄形		円・楕円形?		円・楕円・馬蹄形		円形など
主体部の形態	土坑墓} 木棺		木棺?		木棺?		不明
主体部の大きさ	小	大	小	大	小	大	大
埋葬姿勢	側屈 など	伸展	側屈(大人) 側屈(小児)	伸展(大人)	側屈(大人) 側屈(小児)?	伸展(大人)	伸展(大人)
主体部副葬品	明らか	明らか	ほぼ明らか	ほぼ明らか	一部明らか	一部明らか	明らか
武器			あり	あり		あり	あり
工具		あり	あり	あり		あり	あり
農具			あり	あり		あり	
装飾品				あり		あり	
その他	あり						あり
土器			あり	あり			あり
周溝の供献品	明らか	明らか	不明	不明	一部明らか	一部明らか	一部明らか
武器						あり	
工具	あり					あり	
農具						あり	
装飾品							
土器	あり					あり	あり
年代	8C後葉~9C初頭		8C後葉~9C前葉		8C後葉~9C後葉		8C末~9C初頭?

武器：太刀、鎌
 工具：刀子、斧
 紡錘車
 砥石
 農具：鎌、鋤

※ 伸展は伸展葬、側屈は側臥屈葬のことである。明らか・不明とは報告の内容のことである。

X-1は墓坑の平面形・周溝という造墓にかかわる外面的な要素は採用したが、埋葬姿勢や主体部を複数持つ伝統的な要素を保持している。X-1が送葬に関わる要素の伝統性の保持するいっぽうでX-2は新来の葬法を採用していることは、葬法が漸次的に変容をしていることを示す。

周溝のある墓と土坑墓群は併存しながらも、土坑墓は伝統的様相が濃厚で、X-2は対照的に新来の要素が明らかである。X-1はその中間的な様相を示している。

3. 北海道式古墳との時間的關係

本遺跡における造墓の暦年代は、土坑墓群の土器、X-1の土器、G1~3の切り合い関係、土坑墓群の長軸方向、G1~3とX-2の長軸方向から、8世紀後葉から9世紀初頭である。

北海道式古墳については資料に偏りはあるが、現段階での暦年代を述べて、本遺跡との比較とする。

後藤遺跡(1981年)は21基が確認されている。長軸方向は2・4・5・14・20号墳が略東→西(開口部)、11・16・17・18・19号墳が略西北西→東南東(開口部)、1・3・6・10・12・13・15・21号墳が略南東→北西(開口部)。少なくとも3群あることから比較的長く造営されたようだ。

坏は私細分のa段階が1点(15号墳)、c段階が2点(3・10号墳)。甕は私細分のa段階が2点(3・5号墳)、c段階が2点(3号墳)。須恵器は秋田城の出土例を参考にすると、9世紀前半となる丸底気味の坏が1点(17号墳)、9世紀後葉となる高台付きの糸切り坏が2点(5・15号墳)と糸切り坏が1点(12号墳)、9世紀後葉となる赤褐色土器双耳坏1点(15号墳)がある。

土器の年代は周溝出土であるが、8世紀後葉~9世紀後葉の幅があり、長軸方向が複数の群をなすことと一致する。恐らく後藤遺跡は8世紀後葉から9世紀後葉にかけて造営されたと考えられる。

柏木東遺跡は河野広道(1934年)・天野(1992年前出)から推定すると、9(1-A)・2・3・7号墳が西北西→東南東(頭位)、4号墳が北→南(頭位)、1号墳が北東→西南(頭位)であり、2群以上が想定される。

土器は後藤寿一・曾根原武保(1934年)、石附喜三男(1972年)、山本哲也(1988年)、天野(1992年前出)に報告されている。坏は私細分のa段階以前1点(9号墳)、甕は私細分のc段階が2点(1・14号墳)。須恵器は秋田城の出土例を参考にすると、8世紀第4四半期~9世紀第1四半期となる高台付き坏が2点(1・11号墳)、同じ時期くらいの器高の低い坏が1点(11号墳)がある。

土器の年代は8世紀中葉~9世紀前葉の幅があり、長軸方向が複数の群をなす可能性を表している。恐らく柏木東遺跡は8世紀中葉から9世紀前葉にかけて造営されたと考えられる。

町村農場1遺跡は2基あるが長軸方向などの詳細は不明である。山本(1988年前出)がX-G号墳周溝の須恵器を再報告している。それによると、8世紀第4四半期~9世紀第1四半期となる高台付き坏である。古墳もこのころに造営されたのだろう。

以上より、後藤遺跡は8世紀中葉から9世紀後葉、柏木東遺跡は8世紀中葉から9世紀前葉、町村農場1遺跡は8世紀末以降、ユカンボシC15遺跡は8世紀後葉から9世紀初頭に造営されたと考えられ、後藤遺跡の造墓期間が他より長期にわたるが、4遺跡は一時期併行していた。

4. 墓群立地と被葬者の村

墓は長都沼に向かって半島状に孤立した微高地に立地する。遺跡内に同時期の竪穴住居跡は存在しない。土坑墓群と周溝のある墓の被葬者は他に求めなければならない。本遺跡から約600m離れた所にユカンボシC3遺跡がある。この遺跡の土器を実見したところ、P-27と同じ形態、胎土を持つ坏やX-1の須恵器坏と同じものを数点確認した。墓群の継続した時期とも一致する。以上のことから被葬者の集落をユカンボシC3遺跡に求めてもよいと思われる。(鈴木 信)

4. 擦文文化期の墓

3-1)・(2)の参考文献

- 江別市教育委員会 『江別太遺跡』(1979年)
江別市教育委員会 『旧豊平河畔遺跡』『元江別遺跡群』(1981年)
高橋正勝 「北海道中央部の統縄文時代」『北海道の研究 1』(1984年)
野村 崇・大島秀俊 「北海道余市町フゴッベ洞窟出土の土器(1)」『北海道開拓記念館調査報告 31』(1992年)
深川市教育委員会 『北広里 3 遺跡』(1994年)
財北海道埋蔵文化財センター 『オサツ 2 遺跡(1)・オサツ14遺跡』(1995年)

3-3)・(4)・(5)・(6)の参考文献

- フゴッベ洞窟調査団 『フゴッベ洞窟』(1970年)
ワッカオイ調査団 『Wakkaoi III』(1977年)
財北海道埋蔵文化財センター 『吉井の沢遺跡』(1981年)
大沼忠春 「後北式土器」『縄文土器大成 3』講談社(1982年)
田才雅彦 「北大式土器」『北奥古代文化 14』(1983年)
札幌市教育委員会 『K 135遺跡』(1987年)
北海道大学 『北大構内の遺跡 5』(1987年)
北海道大学 『北大構内の遺跡 6』(1988年)
大沼忠春 「統縄文式土器様式」『縄文土器大観 4』小学館(1989年)
小樽市教育委員会 『蘭島餅屋沢遺跡』(1990年)
千歳市教育委員会 『祝梅山田川遺跡における考古学的調査』(1991年)
野村 崇・大島秀俊 「北海道余市町フゴッベ洞窟出土の土器(1)」『北海道開拓記念館調査報告 31』(1992年)
恵庭市教育委員会 『ユカンボシ E 9・E 3 遺跡』(1993年)
上野秀一 「北海道統縄文文化の諸問題」『北日本統縄文文化の実像』(1994年)
財北海道埋蔵文化財センター 『オサツ 2 遺跡(1)・オサツ14遺跡』(1995年)
大沼忠春 「8・9世紀の土器—口縁部に沈線のある甕形土器」『蝦夷・律令国家・日本海』 日本考古学協会1997年度秋田大会実行委員会編 (1997年)

3-7)、4の参考文献

- 後藤寿一 「古墳墓の発掘について」『蝦夷往来 8』(1932年)
河野広道 「北海道古墳様墳墓について」『考古学雑誌24-2』(1934年)
後藤寿一・曾根原武保 「胆振國千歳郡恵庭村の遺跡について」『考古学雑誌24-2』(1934年)
後藤守一 「北海道における古墳出土遺物の研究 (一)」『考古学雑誌24-2』(1934年)
雄物川町教育委員会 『平鹿郡雄物川町末館窠址発掘調査報告書』(1963年)
北海道文化財保護協会 『柏木川』(1971年)
ウサクマイ遺跡研究会 『烏柵舞』(1975年)
天野哲也 「擦文文化成立における古墳の意義」『考古学研究24-1』(1979年)
江別市教育委員会 『後藤遺跡』『元江別遺跡群』(1981年)
千歳市教育委員会 『末広遺跡における考古学的調査 上・下』(1981・82年)
天野哲也 「擦文社会における金属器の普及量と所有形態」『考古学研究30-1』(1983年)
森町教育委員会 『御幸町』(1984年)
天野哲也 「北海道式古墳再考」『古代文化37-10』(1985年)
山本哲也 「北海道出土の須恵器資料紹介」『うつわ 2』(1988年)
玉川英喜 「岩手県内の円形周溝と方形周溝」『岩手県立埋蔵文化財センター研究紀要 X』(1990年)
盛岡市教育委員会 『志波城跡』(1990年)
秋田県教育委員会 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書 XII』(1991年)
小樽市教育委員会 『蘭島遺跡 D 地点』(1991年)
天野哲也 「曾根原武保ノート(前)」『北海道考古学 28』(1992年)
秋田県教育委員会 『秋田ふるさと村(仮称)建設事業にかかわる埋蔵文化財発掘調査報告書』(1992年)
札幌市教育委員会 『K 435遺跡』(1993年)
天野哲也 「3 北海道」『古墳時代の研究 13』(1993年)
田才雅彦 「統縄文時代後北期から擦文時代初頭の土壙墓」『21世紀への考古学』雄山閣 (1993年)
伊藤博幸・酒井清治 『須恵器集成図録』 雄山閣 (1995年)
宮城県教育委員会 『下草古城跡ほか』(1996年)
村田晃一 「宮城県内の窯情報」『窯研通信 7』(1996年)
神 康夫 「青森県内の円形周溝地名表」『研究紀要 1』青森県埋蔵文化財調査センター (1996年)
藤沢 敦 「東北北部の末期古墳の主体部構造」『1997年度東北史学大会 研究発表要旨・資料』(1997年)
小松正夫、日野 久、西谷 隆、伊藤武士 「秋田城跡出土土器と周辺窯の須恵器編年(試案)」『蝦夷・律令国家・日本海』 日本考古学協会1997年度秋田大会実行委員会編 (1997年)
豊田宏良 「北海道における須恵器の様相」『蝦夷・律令国家・日本海』 日本考古学協会1997年度秋田大会実行委員会編 (1997年)
伊藤武士 「出羽における10・11世紀の土器様相」『北陸古代土器研究 7』(1997年)

5. 包含層出土の石器について

96年度ユカンボシ C 15遺跡①地区、③地区から出土した石器は約4,000点、97年度①地区、③地区から出土した石器は3,794点である。そのうち石鏃未製品、石斧片、石斧未製品、R フレイク、U フレイク、フレイク、有意な礫・礫片、礫・礫片を除いた、器種になる石器の数は、96年、97年を合わせて328点出土した。それを I B、II B 層の台地、低地に分けたものが、表 X-5 である。

I B 層台地部から出土した器種として分類された石器は71点である。石器の接合は、それぞれの器種の事実記載部分、分布図で示したが、器種に上らないものでは、G 62 d I B 出土と G 64 a I B 出土の縞頁岩のフレイクが接合した。台地部では I B 層全体で出土した器種すべてがある。I B 層台地部では、石鏃が器種全体の57.7% (41/71) となり半数を超える。そのほかの器種は10%を超えるものはない。遺構からは焼土 F-1、78から北大式期に伴うスクレイパーが出土している。すべて下端部に刃部をもち、図 V-26-20、21のように原石面を残すものもあり、後北期のものより厚みをもつ。

I B 層低地部から出土し、器種として分類された石器は、21点である。石錐、スクレイパー、石核、石斧、石斧片、たたき石・凹石、砥石が出土しており、I B 層全体、I B 層台地部とは大きく異なる。器種となる石器の出土量も台地部の1/3強 (台地71点、低地21点) である。そのなかで、スクレイパーが11点と半数を占める。

I B 層台地部と低地部でこのように大きく出土した石器の数が異なるのは、1：台地上ではアイヌ文化期から続縄文期までの遺構が検出され、低地部では北大式期の焼土のみが検出されたこと、2：土器などの出土が台地では続縄文期から擦文期まで見られるが、低地では続縄文 (後北式～北大式期) のものが特に多いことが上げられる。

II B 層台地部から出土し、器種として分類された石器は166点である。石鏃が53点 (31.7%) と一番多く、他に10%を超えるものは、スクレイパー26点 (15.6%)、石斧21点 (12.6%) である。II B 層低地部から出土し、器種として分類された石器は41点である。スクレイパー10点 (24.4%) が一番多く、他に10%を超えたものは、石斧8点 (19.5%)、石鏃7点 (17.0%) である。台地と低地の器種となる石器の出土量は約4：1となっている。

器種として数量的、形態的に比較ができたものは石鏃で、II B 層では縄文時代後期から晩期に見られる有茎鏃が多く、I B 層では無形の三角形の平基、凹基の石鏃が多い。I B、II B 層全体では長さはほぼ0.5cm～4cm、重さは3g以下である。特に I B 層出土の石鏃は長さ0.5～3.5cm、重さが1.6g以下である。

I B 層出土の片岩製の石鏃は、当遺跡より南南東に約790m程離れたオサツ 2 遺跡の GP-2、3、4、6 出土の一括資料に見られるように、VI群 B 類 (後北 A、B 式) の時期のものであると考える。

低地部から出土した土器は、II B 下位の縄文早期から前期までは少なく、II B 中位～上位の縄文中期から晩期までは比較的検出され、I B 5、4 の後北式期から北大式期までが出土しているが、石器も概ねその時期のものと思われるものが検出されている。

5. 包含層出土の石器について

表 X-5 石器器種別集計表

	総数	I B	I B台地	I B低地	II B	II B台地	II B低地	耕作土・攪乱・ 上部攪乱・表採
石鏃	107	41	41	0	60	53	7	6
石鏃未製品	12	8	8	0	2	2	0	2
石槍・ナイフ	27	6	6	0	19	18	1	2
石錐	11	5	4	1	6	5	1	0
つまみ付きナイフ	8	1	1	0	6	5	1	1
スクレイパー	54	14	3	11	36	26	10	4
石核	33	10	6	4	18	16	2	5
楔形石器	1	1	1	0	0	0	0	0
石斧	37	4	3	1	29	21	8	4
石斧片	20	2	1	1	16	14	2	2
石斧未製品	6	1	1	0	5	4	1	0
たたき石・凹石	14	4	1	3	8	5	3	2
すり石	2	1	1	0	1	1	0	0
北海道式石冠	1	0	0	0	1	0	1	0
台石・石皿	5	1	1	0	3	2	1	1
砥石	18	4	3	1	10	9	1	4
石錘	10	0	0	0	10	5	5	0
合計	366	103	81	22	230	186	44	33

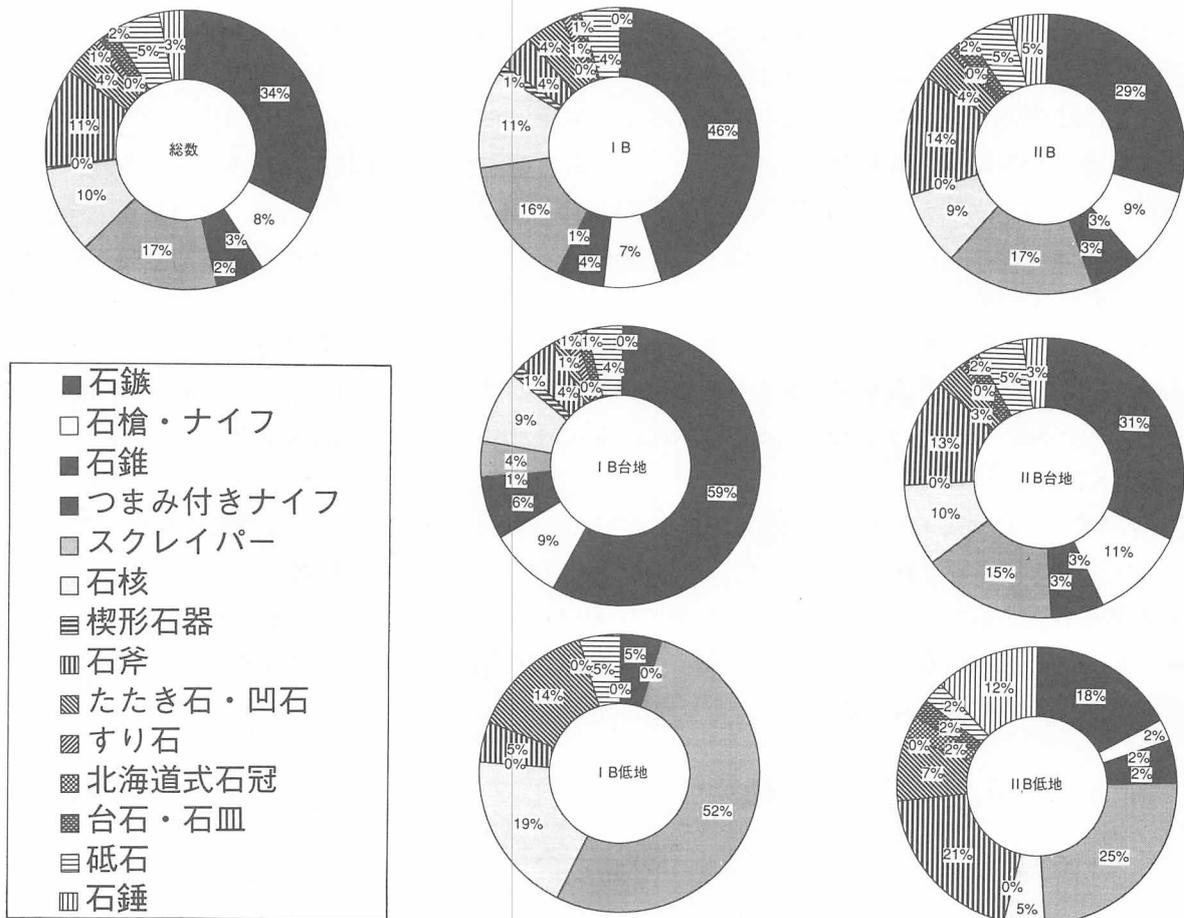
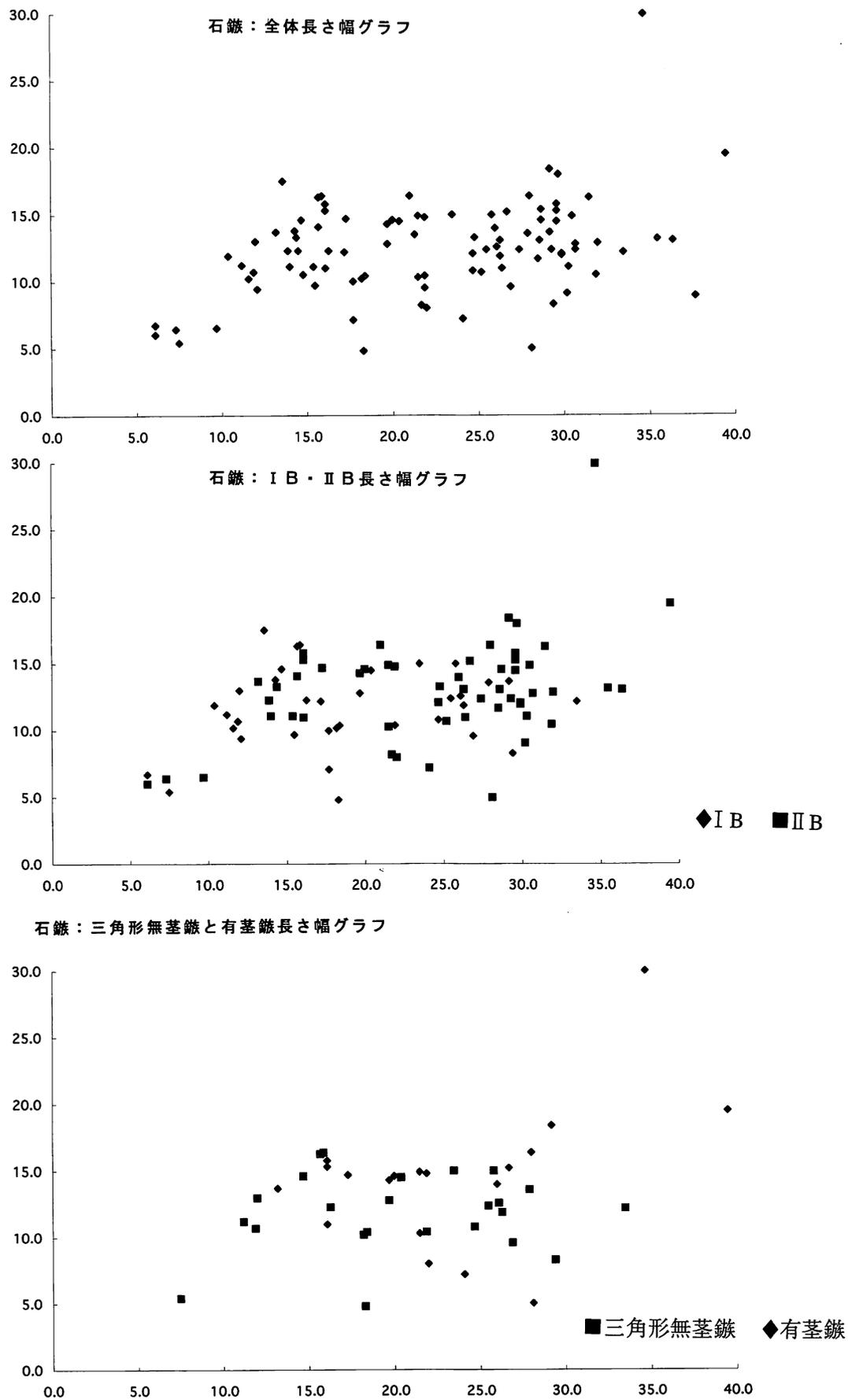
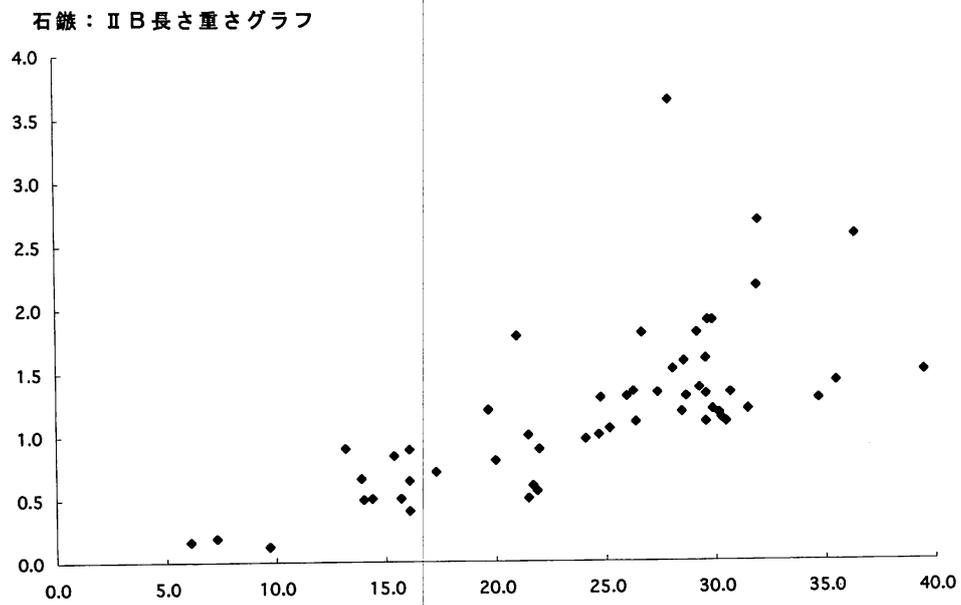
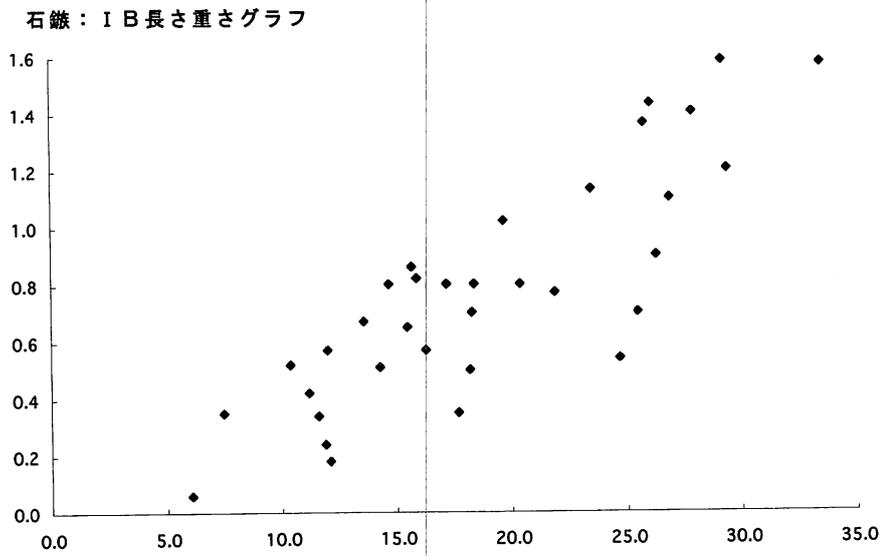
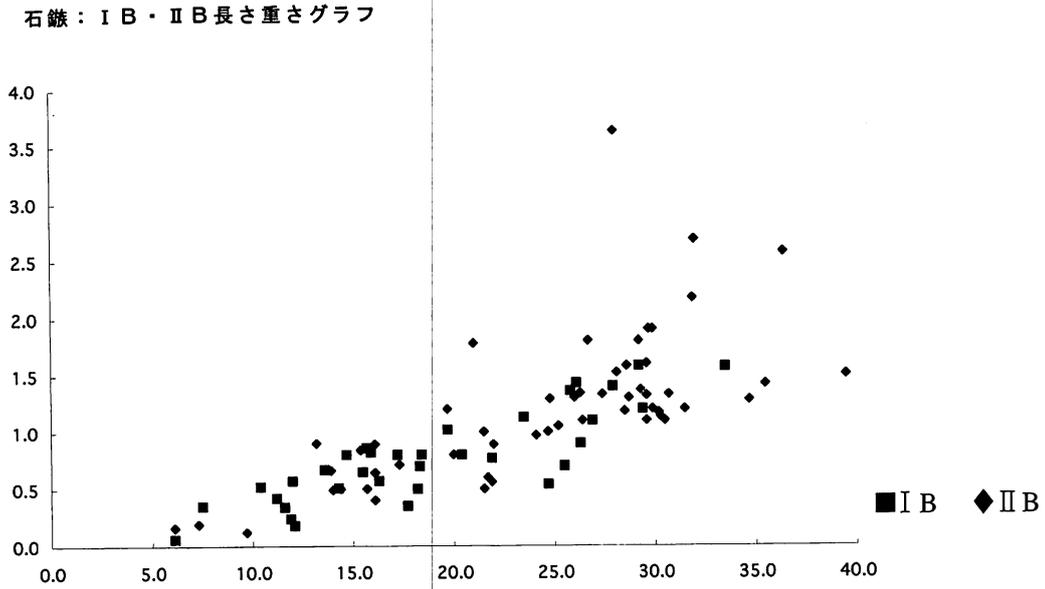


図 X-10 石器器種別割合



図X-11 石鏃長さ幅グラフ

5. 包含層出土の石器について



図X-12 石鏃長さ重さグラフ

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちとせし ゆかんぼしい15いせき 1
書名	千歳市 ユカンボシC15遺跡(1)
副書名	北海道横断自動車道(千歳-夕張)埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	北埋調報
シリーズ番号	128集
編著者名	西田 茂・三浦正人・鈴木 信・中田裕香・倉橋直孝・吉田裕吏洋・大泰司統
編集機関	財団法人 北海道埋蔵文化財センター
所在地	〒064 北海道札幌市中央区南26条西11丁目 Tel 011 (561) 3131
発行年月日	西暦1998年3月31日
ふりがな	ゆかんぼし しい15
所収遺跡名	ユカンボシC15
ふりがな	ほっかいどう ちとせし おさつ
所在地	北海道 千歳市 長都
市町村コード	01224
遺跡番号	A-03-263
北緯・東経	42度52分41秒・141度38分49秒
調査期間	19960626~19961030 ・ 19970506~19971031
調査面積	3,025㎡(うち当報告分 605㎡)・8,855㎡(うち当報告分 3,180㎡)
調査原因	道路(北海道横断自動車道)建設に伴う事前調査
種別	集落跡・墓・低湿地
主な時代	縄文時代中期・後期、続縄文時代、擦文文化期、アイヌ文化期
主な遺構	縄文時代中期:住居跡1・土壇11・焼土25・Tピット22 縄文時代後期:住居跡8・土壇9・焼土11 続縄文時代:土壇3・焼土31・集石2 擦文文化期:住居跡2・周溝のある墓3・土坑墓12・焼土14・ 灰集中1・溝1・道跡1 アイヌ文化期:住居跡1・焼土10・送り場1・灰集中2・鍛冶遺構1・道跡1 1739年以降:杭列3・室状遺構3
主な遺物	縄文時代・続縄文時代:土器・石器等・土製品・石製品・木製品 擦文文化期:土器・須恵器・石器等・土製品・金属製品・木製品 アイヌ文化期:石器等・フイゴ羽口・金属製品・木製品 その他全般に動植物遺存体(骨・昆虫・種子・自然木など)
特記事項	★台地上の一画にはⅠ黒からⅡ黒層にわたって、送り場・住居跡・土壇・焼土・集石・Tピットなどが幾重にも重なる、遺構の集中区があった。 ★8世紀後葉から9世紀初頭に位置付けられる、擦文文化期の周溝のある墓を3基確認した。この北側には同時期の土壇墓の墓域も存在した。 ★擦文文化期とアイヌ文化期を主とした木製品約400点を低湿部から検出した。

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第128集

千歳市
ユカンボシ C 15遺跡(1)

—北海道横断自動車道（千歳—夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成10年3月31日 発行

編集 財団法人北海道埋蔵文化財センター

064 札幌市中央区南26条西11丁目

Tel (011) 561-3131

Fax (011) 561-0458

印刷 富士プリント株式会社

064 札幌市中央区南16条西9丁目

Tel (011) 531-4711

Fax (011) 530-2549

